# センロノハテニ

日比谷碌樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
センロノハテニ

【Ｎコード】
Ｎ６５０６Ｊ

【作者名】
日比谷碌樹

【あらすじ】
夏休みのある日、帰省のために普通列車に乗った苦学生の未明。それはありふれた電車のはずだった。トンネルを越えて、見知らぬ外国にも似た異界に到着するまでは……。名家の次期当主である生真面目な貴公子に拾われたものの、彼女を待っていたのはあり得ないような波乱の日々の連続だった。やがて未明は、自分がこの世界に召喚された理由を知っていくことになるのだが――異界神話を縦糸に紡がれる、恋と冒険の幻想絵巻。逆ハー風味です（ムーンライトノベルズにてＲ１８閑話集「センロノハテニ―ＭＯＯＮＬＩＧＨ

T Ver.「一」公開中）

# 第一話　帰郷

車体が不意に大きく揺れ、うとうととまどろんでいたあたしは目を開けた。強い西日が目映いばかりに差し込んでくる。思いきり伸びをし、時計を見やる。四時。あと三十分で乗り換えの駅だ。

四人掛けのボックスシート。気づくと前の席の人はいなくなっていた。隣の女の人も。東京駅からいったい何本の電車を乗り換えてきたことか。それもあと一本の辛抱だ。

あたし、久世未明（くぜみはる）は、都内の大学に通う十八歳の苦学生。実家は東京から新幹線で二時間ほどの海沿いの町。学校が夏期休暇に入ってからというもの、毎日のようにバイトに明け暮れ、ようやく三日間のお休みをもらって帰郷する最中である。といっても貧乏学生のあたしには、新幹線の切符を買うほどの余裕なんてない。その代わり体力ならある、ということで、お決まりの「青春十八きっぷ」を金券ショップで購入し、鈍行を乗り継いで帰ることにしたのだ。

携帯の着信音が鳴った。電話じゃなくメールだ。内容を確認するとお母さんからで、「いまどこ？」と件名のみ素っ気なく書かれている。機械音痴のお母さんらしい。「もうじき着くよ」と返信を書き込みながらあたしは微笑んだ。

車窓の向こうには田園風景が広がっていた。東京にいる時には無性に懐かしかった光景。うちも似たようなものだからだ。……もうじき、帰れる。今日はきっとご馳走。お母さんの手作りのちらし寿司にローストチキン。クリスマスじゃなくても、我が家のイベントの料理は決まってる。それに中学生の妹の榛名（はるな）、キジトラの茶々（ちゃちゃ）。あたしが大学に入学した次の日に事故で死んじゃったお父さんのお墓参りにも行かなきゃ。それから地元のたくさんの友達。三日間の

休暇でやりたいことはいっぱいある。
とにかくあと三十分。トンネルに入ったらしく、車内が急に暗くなる。眠らないようにしていよう、そう思ったのに、あたしの瞼はなぜだか急激に重くなった。

ガタン、ガタン、キッ、キィ――
聞き慣れない、耳障りな衝撃音がした。ひどくレトロな、まるでSLみたいな音。あたしは飛び起きた。
「……え？」
目が点になった。まだ夢を見ているのかと思った。……なに、これ？　どゆこと？
近代的な、ホワイトとシルバーでまとめられていたはずの機械的な内装が、がらりと一変していた。ワックスを塗られているのか、渋い色に輝く板張りの床、黒褐色の壁、暗緑色のびろうど張りの椅子、同じく板張りの天井。分厚いカーテン。なんていうか、まるで、そう、映画でしか見たことない欧米の古い客車みたいな雰囲気。
……って、なんであたしがそんなとこに？　やばい、まさか乗り換えを忘れてこんな事態に？
あたしは相当なパニックに陥っていた。よく考えたら、いくら寝過ごしたからっていきなり電車が様変わりする理由になんかならないんだけど、この時は思考回路がショートしてしまっていたのかもれない。とにかく、あたしは立ち上がり、手荷物をまとめると通路に出た。同時に車体が完全に止まった。どうやら駅に到着したらしい。あたしは慌てて乗降扉に取り付き、ホームへ降り立った。
あたしは文字どおり呆然としてその場に立ち尽くした。

そこはまるで見知らぬ外国の駅だった。コンクリート、ではなく、石造りのホームに、赤茶色のレンガでできた駅舎。どん、と背中を押され、あたしはよろけた。電車――ではなく汽車なのかもしれない。なにしろ先頭車両の方から黒煙らしきものがうっすらたなびいているのだから――から続々と降りてくる人々が、列をなして改札を抜けていく。改札といっても自動ではなく、黒い帽子に黒いマントを着込んだ駅長らしきひげの男の人が一人一人の切符を入念にチェックしているのが窺える。……なんなの、これ？　どっかのテーマパーク？

ふらふらと座り込んでしまったあたしの腕を、誰かが強引に引っ張り上げた。痛い。顔をしかめるも離してはくれず、あたしはそのままひげの男の人の前に突き出された。二人は思いっきり胡散臭そうな眼差しであたしを上から下まで眺めている。彼らは耳打ちし合い、そのうちあたしに右手を突き出してきた。

「はぇ？」

あたしは寝惚けたような返事をした。だって、いきなりそんなジェスチャーをされても、わけがわからない。ひげの男の人は苛々となにかを怒鳴っている。――やばい。まったく理解不能。ていうか、なんで日本語じゃないの？　……ここ、いったいどこなの？

埒が明かないと踏んだのか、若い方の、駅員らしい男の人が、唐突にあたしの穿いているショートパンツのポケットに手を突っ込んだ。あたしは仰天した。

「な、な、なにすんのちょっと！　離してよっ」

わめくあたしには目もくれず、彼はポケットの中から一枚の紙切れを引っ張り出した。あ、そうか、わかった。要するに乗車券のチェックをしようとしていたんだ。ほっと胸を撫で下ろすあたし。

しかし、事態はここからさらに思わぬ方向へと進んだ。

「青春十八きっぷ」を見た駅員の顔色が変わった。彼はひげの男の人の眼前にそれを突き出した。奪うようにして凝視し、あたしに向かってなにごとか問いかけてくる。……なに？　なんて言ってるの

？　その切符、確かに正規の窓口じゃなく、金券ショップでばら売りで買ったんだけど。ごめんなさい、だってお金なかったんだもん。

彼は重々しい顔つきで首を左右に振った。あたしの足元からすうっと血の気が引いていく。よくわからないけれど、どうやらとてつもない失態を犯してしまったらしい。あたしは二人に両脇からがっちりと腕をつかまれ、そのまま駅舎の中へと連れ込まれた。脈絡もなく、家族の顔が脳裏を過ぎった。

# 第二話　救いの手

まるで取り調べ室みたいな小部屋の、質素な木製の椅子にあたしは座らされた。真隣には、さっきの若い駅員がぴったり張り付き、逃がすまじとあたしを監視している。あたしはこれ以上ないくらいに身を固めた。気を抜くと涙がこぼれそうだった。

あと、たった三十分かそこらで、乗り換えの駅に着くはずだった。そしたらそこからは二十分くらいで地元の駅に行ける。もう家に着いていたっておかしくなかったかもしれないのに。それなのに、いったいどうしてこんなことになっちゃったんだろう。

……ここはいったい、どこなんだろう。考えずにはいられない。日本……じゃないのか、それとも、「リトル○○」みたいな、どこかの外国人街なのか。まとまらない頭で、あたしは必死に可能性を潰していった。頼みの綱の携帯は圏外――ですらなく、ブラックアウトを起こしていた。下宿を出る際、たっぷり時間をかけて充電したはずなのに。

とにかく……どこであるにせよ、そこにあたしがいまいるという、その理由は……記憶障害？　拉致？　或いは、或いは――。

その状態で数十分が過ぎた。唐突に、荒々しい足音が聞こえた。きっとさっきの駅長さん（推定）に違いない。扉が開き、果たして彼が現れた。そしてその後ろから、またもや見知らぬ誰かが続いて入ってきた。すかさず駅長さんがあたしを怒鳴りつけた。うつむいていたあたしは思わずびくり、と肩を震わせた。

すると、駅長さんの隣に立つその人が、なにごとかつぶやいて彼を制してくれた。あたしは恐る恐る顔を上げた。

若い男の人だった。年齢はおそらく二十二、三くらい。ものすご

く背が高い。一八〇センチは優にありそうだ。外国の映画にでも出てきそうな、彫りの深いきれいな顔。肩までの灰色の髪。青灰色っぽい、ぞろっとしたマントを羽織り、肩にはシルクのような生地のケープ。あたしはその時初めて、ここがひどく寒いことに気づいた。……数十分前は夏だったはずだ。あたしは真夏の東京から帰郷する途中だった。目眩を感じ、ぐらり、と身体が揺れた。

その男の人が短くなにかを叫んだ。同時にあたしは倒れ込みそうになるところを彼の手で支えられた。正直、放っておいて欲しかった。だってもしもこれが悪夢(ゆめ)なら、床にでも転がり落ちた拍子に頭を打てば、目が覚めるかもしれないからだ。

彼はため息をついた。あたしの様子に、事情を訊き出すのは無理だと踏んだためかもしれない。あたしの左肩に手を置いたまま、駅長さんになにごとか告げる。露骨に渋った顔をしているところを見ると、無理なお願いでもしたのだろうか。あたしは二人の遣り取りをただぼんやりと眺めた。

数分後、駅長さんは両手を軽く広げるジェスチャーをした。折れた、というニュアンスがこもっているらしい。それを見るなり青灰色のマントの男の人が、あたしに右手を差し出した。……立て、ということだろうか。どこに連れて行かれるのかわからないけれど、ともかく現状を把握して、一刻も早く家に帰らなくちゃ。あたしは自らを必死で奮い立たせ、誰とも知らぬ彼の手を取った。

晩餐の一時間ほど前のこと、ウェス・ハーシュ家の伝令室に設えられた電話が鳴った。五大陸でも技術革新の進んだ交易都市ロマド、その中枢となるこのヴィネックの町を治めるウェス・ハーシュ一族。市街ではまだめずらしい電話が引かれているのも、この家ならではの特例的措置である。

「ロア(もしもし)・イデス」

応対したのはメイド頭のパドマだ。電話はカルマ駅の責任者であるノーゼス駅舎長からだった。なにかと懇意の仲ではあるが、今日の彼の口調はいつもとは違い、ひどく緊迫していた。

「ああ、パドマ殿か。こちらノーゼスだが、当主のオルグ・ヴィネック卿はそこにおられるか」

パドマは怪訝に眉を寄せた。「七日間会議に出席するため、先月オサイオン市にお発ちになったばかりじゃありませんか。ご存知でしょう」

「あ、ああ……そうでしたかな。それでは、次期当主、オルグ・ジード様は」

「おられますけれど。ちょうど今、秋期休暇で大学府（エコルガルト）からお戻りになっていらっしゃいますからね。でも、いったいなんのご用件ですの？　じきに晩餐ですのよ、込み入ったご用事なら明日以降に――」

ノーゼスは額を押さえた。パドマは有能極まりない女性だが、この融通の利かなさには毎度ながら手を焼かせられる。まったく、これだから女ってのは……。彼は咳払いをしつつも辛抱強く続けた。

「とにかく早くジード様をお呼びしてくれ。理由はご本人に直接申し上げたい」

パドマは黙り込んだ。彼女はぶつくさ言いながらも、ノーゼスに従ってくれたようだ。五分ほどの間があり、やがて低く美麗な声が電話口に響いた。

「ジードだが。ノーゼスか？　どうしたんだ、いったい。緊急事態でも起きたのか」

「ああ、これはジード様！　単刀直入に申し上げますが、実は先ほど、下りの便が着いたんでございますがね、ええ、例の定期便です、三ヶ月ごとの。その乗客の中にですね、どうにも珍妙な小娘が混ざり込んでおりまして」

青年は眉を寄せた。「珍妙な小娘？」

「はい、それがもう珍妙としか申し上げようが。この季節だというのにまるで下着のような服装だわ、そもそもそれが見たこともない

服だわ、あげく言葉も通じやしません。どこから来たのか訊ねてもまるで会話にもならんのです。文字どおり、お話にならないってやつでして」

ノーゼスは一気にまくし立てた。ジードは受話器を耳から離し、息をついた。

「単刀直入に願いたい。ただの難民の娘じゃないのか。それでどうして私のところに連絡が来るんだ」

「ああ、いえ、はい。……それがですね、ジード様。その小娘、中央政府発行の恒久手形を持っていたんですよ」

ジードの顔色が変わった。「……なに？　『天上の切符（イグノード）』をか？　しかし、あれは……」

「見間違いなんかじゃございませんよ。そりゃ私も、本物を拝見したことは一度しかありゃしませんがね。五大陸でも所有者が限られていることも承知です。ですがね、本当なんです。贋物（ニセモノ）とも思えません、ええ、断言します」

ノーゼスは興奮を隠そうともせずに言い切った。ジードは考え込み、その形の良いあごを撫でた。

「……わかった。これから行く。その娘をそこに勾留しておいてくれ」

彼はそう答えるなり電話を切った。そしてメイド頭のパドマを呼んだ。

ジードは邸前に用意させた二頭立ての馬車に乗り込むと、カルマ駅に向けて出発した。駅は中心市街地から二ノール（五キロ）ほど離れた聖山、カルマ（オルド・カルマ）山の麓にある。街は黄昏に染まっていた。枯葉が風に舞い散り、馬車の前を通り過ぎていく。じきに冬が訪れる気配がした。

――「天上の切符（イグノード）」を持っている娘だと？　そんなばかな……。あれは父上ですらまだ持ち得ていないというのに。難民のような小娘が、なぜそんなものを――

大方、ノーゼスの勘違いだろう。そうは思ったものの、放置するわけにもいかなかった。それにもし故意に作られた偽造品であるとすれば、なおさらその娘を逃がすことはできない。紙幣を含め、旅券類の偽造は連邦法の下で固く禁じられているからだ。

十分ほどで目的地に到着し、馬車を車停めに寄せると、彼は駅舎に向かった。待ちかねた様子のノーゼスが駆け寄ってきた。ジードは軽く頭を下げた。

「ジード様！　ご足労いただき、申し訳ございません」

「いや。それで、例の恒久手形は？　本当に本物なのか」

「間違いございませんよ。――これです。その小娘の衣服に無造作に突っ込まれておりまして、多少歪んでしまっていますがね」

ノーゼスは黒い手袋をした手で恭しく問題の切符を差し出した。受け取ったジードは、一瞬、息を呑んだ。

「……これは……本物だ」

彼とて、世界に数枚しか発行歴のないこの伝説の手形については、本物を見た回数など限られている。しかし、理屈ではなかった。浅葱色の紙の中央に、巨木、それに絡みつく双頭の蛇の図柄。そして神の祝詞が隠し文字として彫り込まれている。「天上の切符（イグノード）」。――間違いなく、本物だ。ジードは顔を上げた。

「その娘は」

「こちらでございます」

ノーゼスは彼を駅舎の奥の待機部屋に案内した。偽造旅券などを使って町に入ろうとする連中を留め置くためにおもに使われる部屋だ。駅長に続いて入室した彼は、椅子に座る小柄な娘を見て思わず瞠目した。

年の頃は十五、六といったところか。茶色がかった艶のある長い

黒髪に、子ども相手に売られている玩具人形のような小さな面（おもて）。髪よりもさらに見慣れぬ漆黒の双眸。形良く整ってはいるものの、確かに独特な顔立ちだ。

それになにより、ノーゼスの言うとおり、彼女はジードが見たこともない服装をしていた。肩も腕も顕わに出した白い上着に、薄い水色の、これもあり得ないほど丈の短い穿き物（ズボン）。足元を見れば、かろうじて靴は履いているのだが、なんの意味があるのか、或いは呪術的なものか、色のついた爪がむき出しになっている。――正直、目のやり場に困る。それが第一印象だった。

「こら、娘、だんまりを決め込もうったってそうはいかんぞ。やんごとなきお方の前で、その態度はなんだ」

ノーゼスは無骨に声を荒げた。娘は怯えているらしく、その細い肩がびくりと震えるのがわかった。ジードは右手を上げ、彼を制していた。どう言葉をかけたものか思案していると、娘の身体がふらりと揺れ、椅子から崩折れそうになった。ジードは反射的に彼女の腕を支えた。……心臓が鳴った。

彼女の身体は、見た目以上に華奢で、信じられないほどやわらかかった。薄い革手袋越しではあったが、その未知なる感触ははっきりと彼の手に伝わってきた。

「……いまここで詳細を訊き出すのは無理だろう。相当疲弊しているようだ。ノーゼス、この娘の身柄は、いったん我がウェス・ハーシュ家で預からせてもらう。いいな」

「えっ……いや、しかしですね……お父上もご不在だというのに、ジード様お一人の権限では……」

ノーゼスは渋った。駅舎長としてカルマ駅を管轄しているのは彼である。いくらヴィネックの町を実質束ねているウェス・ハーシュ家と言えど、家長の留守中に勝手にそんな真似をして良いものだろうか。しかしジードは断固として言い切った。

「私は次期当主だ。父上の留守にはその全権限を代わりに与（あずか）っている。……問題などありはしない、いいな」

ノーゼスはあきらめたように両手を広げた。なにがあっても知りませんよ、という意味を込めて。

# 第三話　ウェス・ハーシュ家

最初の難関は、メイド頭のパドマだ。次期当主が連れ帰った娘を見て、ジードの予想どおり、彼女は大仰なまでのリアクションを示した。

「まあ、まあ、まあ、ジード様！　いったいこれは、どういうことですの。重要な用件があるとおっしゃってカルマ駅までお出でになったと思ったら、まぁこんな……用件とはなんでしたの。大学府にお通いになっていらっしゃるあなた様が、まさか殿方特有の理由でお出かけになったとは思いませんですけれど、それではいったいこの娘は……」

ジードは顔をしかめた。「そう一度にまくし立てないでくれ、パドマ。頭に響く」

「言いたくもなりますわ、ええ、オルグ・ジード様。旦那様のお留守中に、万一にもおかしな過ちを起こされたらと思うと……あなた様がお生まれの時からご面倒を看申し上げている私だから言えるんです。ジード様、坊ちゃま、お教えくださいませ。……この娘はいったい、なんですの」

感極まったのか、パドマはデコラティブなエプロンの端を持ち上げて懸命に眦（まなじり）を拭いている。ジードは忍耐強く説明を始めた。

「パドマ。頼むから聞いてくれ。この娘は、今日カルマ駅に到着した下りの定期便に乗っていたそうなんだが、その……記憶を失っていてね。言葉もわからない。難民というわけでもなさそうなんだ。この状態で放り出すのはいかにも忍びないだろう、だから私が一時的に預かることにしたんだ」

パドマはあんぐりと口を開けた。そして、彼が庇うようにして肩を抱いている小柄な娘を、頭の天辺からつま先まで、まじまじと見た。

「……記憶を失ってる、ですって？　本当に？　まあ……可哀相に、まだほんの十五かそこらの子どもじゃありませんか。それにこの恰好！　どこの大陸の放浪民（ツィゼット）か知りませんけど、こんな服でよくもまぁ無事にここまで来れたもんですよ」

彼女はそっと娘に触れた。パドマの剣幕に最初は怯えていたらしい娘は、しかし、母親のような温かさを持つ彼女に警戒心を緩めたのか、されるままになっている。パドマは娘を抱き寄せると頭を撫でた。

「なんて細っこいんざんしょ、きっとろくに食べものも食べられない生活をしてきたんでしょうねぇ……よござんす。そういうことなら、私が責任を持って面倒を看させていただきます。部屋も服も用意しますからね、心配しなくても大丈夫ですよ、あなた」

娘の頬に赤みが差した。ジードはほっと胸を撫で下ろした。

「そうと決まれば、まず……ええ、ともかく、名前がわからないことにはね。ねぇあなた、名前はなんて言うのかしら？　名前、名前よ。わかる？　あなたの名前」

パドマは必死に思案していたが、やがて自分の顔を指して繰り返し言った。

「私は、パドマ。パドマ・ルジナ・イルト。パドマと呼んでちょうだい」

それから娘の顔を指差し、「あなたは？」と訊ねた。意味が通じたのか、彼女は口を開いた。

「……未明（ミハル）」

ジードの心臓がまたも跳ねた。初めてまともに聞く彼女の声。彼女の名前。

それは、想像していた以上に、細く可愛らしい声だったからだ。

あたしは山の駅から馬車に乗せられ、麓の街へと連れて来られた。

石畳の街路に、同じく石造りの古い家々。ガス灯に、煉瓦でできたお店らしき建物。あたしはふたたび考え始めた——ここはいったいどこなんだろう。ヨーロッパのどこかの町？　……いや、そんなばかな。

だってあたしはあくまで国内を走る電車に乗っていたのだ。なぜそれが、いきなり海を越えて外国に？　あり得ない。きっとここは……そう、テーマパークなんだ。言葉が通じないのは、キャストの人たちがなりきっているから。

無理がありすぎる説明なのは自分でもわかっていた。でもそう考えるしかなかった。

あたしはこの時、正気を保つのに必死だった。

ちらりと隣を見やると、さっき駅まであたしを迎えに来た若い男の人が、じっとこっちを見つめている。目を逸らし、あたしはふたたびうつむいた。悪い人じゃなさそうだけど、信用できるのかどうかなんていまの段階じゃまだわからない。それにこれからいったいどこへ連れて行かれるんだろう。

じわじわと涙が込み上げてきた。……泣いたってどうしようもない。子どもじゃあるまいし。そう叱咤してももはや止まらなかった。家で待ってくれているはずのお母さん。榛名。ネコの茶々。

帰りたい。こんなところ、いたくない。

「……っく……ひ、……っく……っ」

嗚咽していた。こんな風に泣くのは、お父さんが死んだ時以来だ。そうだ、お父さんのお墓参りにだって行くつもりだったのに。帰りたい。誰か、誰でもいい、助けて。元の電車に戻してよ、お願い。

不意に、隣に座る男の人が、あたしの肩を抱き寄せた。驚きのあまり息が止まった。青灰色のマントに身体が密着する。彼はなにか、小さく囁いた。意味はわからなかったけれど、ひどくやさしい声だった。人肌の温もりとその穏やかな声に、あたしの緊張は一気にほぐれた。あたしは、彼の肩に頭を預け、馬車の中で号泣した。

パドマに未明を託したあと、ジードは自室へと向かった。ヴィネックの一等地に建つウェス・ハーシュ家の邸宅の中でももっとも日当たりの良い、広い部屋のひとつを彼は現当主である父親から与えられている。

重厚な装飾の施された両開きのドアを開け、中へ入る。すぐに、大きなクッションに寝そべっていた彼の愛犬が尻尾を振ってご機嫌伺いにやってきた。白い長毛の純血種だ。

「ああ、ラギ、ただいま。いい子にしてたか」

ジードは相好を崩して犬を撫でた。そのやわらかな毛並みの感触に、ふと、馬車の中で未明を抱き寄せ、彼女の髪を撫でた時のことを思い出した。

――細く、艶やかで、やわらかい。ラギよりももっと緻密で、もっと……いい香りがする。

頬が仄かに熱くなっていた。未明は子どものように泣きじゃくっていたから、気づかれはしなかっただろう。

彼はケープを取り、マントを脱ぐと衝立に掛けた。天蓋のついた恐ろしく広大な寝台に腰を下ろす。

あの娘は、いったい、何者だろう。なぜ、「天上の切符（イグノード）」を持っているのだろう。

オサイオン市の要塞島にある中央政府が発行する恒久手形は、元老院とも呼ばれる審議院で認定を受けた人間しか手にすることはできない。その存在を知っている者は各国でも限られている。ここ、ロマド市においては、ウェス・ハーシュ家の一族、市議会の数人のメンバー、それに駅舎長のノーゼスと彼の助手。それくらいだ。

名もなき難民が持っているはずなどないものだ。あの娘はただの娘ではない。パドマが言うような、他大陸からの放浪民（ツィゼット）とも思えな

い。……では、いったい？

ノックの音がし、思考が遮られた。メイドの声がした。

「ジード様。晩餐のお時間でございます。お早く、参られますよう」

ジードは立ち上がった。カルマ駅への往復で、時間がおしていた。

この邸のメイドたちには、几帳面なパドマの教育が染み込んでいる。

彼は思わず苦笑した。

# 第四話　晩餐にて

しばらくの間、あたしの身柄はここに――このやたらと豪勢なお屋敷に預けられることに落ち着いたらしい。もちろん、日本に帰る手段が見つかるまでは、ってことだけれど。そういうわけで、パドマさんというらしいこの親切そうなおばさんに導かれるまま、あたしは邸内を歩いていた。途中、すれ違う人たちが皆、好奇の眼差しを浴びせてくるのがわかり、そのたび生きた心地がしなかった。

やがて彼女は廊下の突き当たりの一室の前で止まると鍵を取り出した。ドアを開け、中に入るようあたしを促す。あたしはおとなしく従った。

六畳ほどの質素な部屋だった。とは言っても、あたしがいま東京で借りている学生向けアパートだって似たようなものだ。ベッド、少し大きめの箪笥、チェスト、ライティングテーブルとチェアに姿見。多分ここではどうということもないインテリアなんだろうけど、あたしの目にはすごくレトロでお洒落な家具に映る。ただ、窓がないのが痛いといえば痛い。それでもあたしはパドマさんを振り返り、にっこり笑ってみせた。通じないのを承知でお礼を言った。

「ありがとう、パドマさん。すごく素敵な部屋。嬉しい」

彼女はあたしよりも嬉しそうに微笑んでいる。お母さんを思い出し、かすかに胸が痛んだ。

それからパドマさんはどこかへ引っ込み、しばらくすると一揃いの衣服を持ってきてくれた。着替えろ、という意味みたいだ。どうやって着るのか不安を感じつつも、とりあえず袖を通してみることにし、服を脱いだ。下着姿になったあたしを見て、パドマさんは目を瞠った。あたしの身につけている下着――それはなんの変哲もない、安物の上下ペアのブラとショーツだった――が、よっぽどめずらしかったのかもしれない。彼女はなにかを言いかけ、躊躇し、結

局口を噤んでしまった。気にはなったけど、どうせ言葉のわからないいまは訊くことすらできないのだ。

与えられた衣服の中にコルセットがなかったので、あたしは安堵した。面倒だし、身体が歪みそうだし、第一つけ方がわからない。ともかく着替え終わり、鏡の前に立ってみる。

ヴィクトリアンメイド調の、パフスリーブの臙脂のロングドレス。レースのついた白いエプロン。黒タイツにエナメルのバレエシューズ。おお。ぴったりだ。……いや、若干、胸元がきついような気がする。もしやと思い、あたしはパドマさんを振り返った。彼女はなんだか困惑しているように見えた。

あたしの背がちっちゃいのと、童顔なせいで、きっと中学生くらいに思われてたのかもしれない。

ウェス・ハーシュ家の晩餐は、通常、黄昏を過ぎた夜七刻（夜六時）より始まる。メイド頭であるパドマは忙しく立ち働き、百畳ほどもありそうな広々とした大広間で給仕に励んでいた。

長大なテーブルには、五名の人間が座っている。家長席には次期当主のジード。そのはす向かいに、彼の四つ下の異母弟、アドリオ。その向かいには家長、オルグ・ヴィネックの母であるアウラ。そして最後に、まだ六歳になったばかりの双生児、ユ・テラとユ・ゼル。最年少の二人を除き、彼らは特に会話を交わすこともなく、黙々と食事を続けている。金のゴブレットに注がれた酒を含みながらジードはパドマに小声で訊ねた。

「……ミハルはどうしてる？　食事は？」

パドマは彼の皿にメインの肉料理をサーブしつつ、短く答えた。

「部屋におります。晩餐が終わり次第、私が食事を届けようと思っておりますが」

この邸で預かる以上、未明にはメイドの仕事を覚えさせるつもり

でいた。だが、急ぐ必要はない。なにしろ彼女は言葉もままならないのだ。最低限の生活習慣に慣れたところで、教育を始めればいい。そう思っていた。

そこでパドマはつい、付け足していた。ずっと思っていたことだった。

「……あの子、思ったより子どもじゃないみたいですわ。お仕着せを取り替えてやるべきかしら」

「なに？」

ジードは思わず訊き返していた。パドマは慌てたように口を閉じ、その場を去ろうとした。が、ジードは咄嗟に彼女を呼び止めた。

「パドマ。ちょっと」

「はい。……なんでしょう、オルグ・ジード様」

ジードはわざとらしい咳払いをしてから、声を潜めた。

「……ミハルの食事は私が届ける。様子を見がてら」

パドマは呆気に取られた。状況も立場も忘れて大声を出しそうになったが、慌てて自身をいなし、あくまで小声で反駁した。

「ばかなことを。……あの子はメイドとして受け入れた、身元も知れぬ娘ですよ。ご自分のお立場をお考えください。こんな夜に、部屋を訪ねるなんて……」

お館様でもあるまいし、というせりふを危うく口にするところだった。それに気づいているのかいないのか、ジードはあくまで平静に続ける。

「彼女を連れてきたのは私だ。全責任は私にある。食事の用意ができたら私を呼べ。これは命令だ」

パドマはため息をついた。そこに、アウラの高圧的な声が飛んだ。

「さっきからなにをこそこそと話して合っているのです？　密談なら時と場所を選んでおやりなさい。パドマ、お前はもうお下がり」

パドマは肩を震わせた。長年仕えてきた相手ではあるが、この年老いた高慢な女主人とは、いまだに心を通わすことができずにいる。彼女はそそくさと給仕用台車を押し、部屋の隅へ控えた。双子の弟

妹が甲高い声で不思議そうに言い合っている。
「今日、上の兄様、いつもよりご機嫌じゃない？」
「テラもそう思う？　ゼルも。兄様、いつももっとクールだもんね」
「でしょ？　なにかあったのかなぁ。知りたいね」
「うん、知りたいね」
無邪気にさんざめく二人。不意に、がたん、と大きな音がした。
アウラが眉を顰めて叱責する。
「アドリオ！　まだ食事は終わっていませんよ。無作法はお止しなさい。テーブルにつきなさい、アドリオ」
ジードの異母弟にあたる十八歳の少年は、祖母をちらりと見やっただけで、その言葉にはまるで従おうともせずに部屋を出て行った。
アウラの大仰なため息が大広間に響き渡る。
晩餐は、この三十分後に終了した。

# 第五話　次期当主の事情

ジードは、自らの宣言どおり、パドマから未明の分の食事の載った盆を受け取ると、一階の彼女の部屋へと向かった。空き室となっていた使用人部屋のひとつで、長い廊下のいちばん西側にある。幸い、途中でメイドの誰かとすれ違うことは一度もなかった。

部屋の前で息を整え、ノックをする。すぐに応答があった。ドアが開き、あの娘が――未明が顔を出した。

「あ……」

彼女はうろたえているようだった。メイド頭のパドマが来たのだと思っていたのかもしれない。しかし、訪問者であるジードの方は、そんな彼女の戸惑いなど意にも介さなかった。いや、介せなかった、という方が正しい。

とても可愛い。――率直に、そう思ったからだった。

未明は、パドマから与えられたらしい臙脂のメイド服を着ていた。髪はまだ整えておらず、長く垂らされたままだ。ジードの目は、未明の頭のてっぺんから爪先までを不躾なまでに眺め回した。その露骨な視線に、未明は後退った。青年ははっと我に返った。

「ミハル、お前の食事を持ってきた。中に入ってもかまわないか」

問いかけたところでわかるはずもない。ジードはふと微笑を浮かべ、右手に載せた銀の盆を突き出してみせた。

未明は肯き、彼を部屋へ招じ入れる仕草をした。――ジードの胸が高鳴った。ドアを静かに閉じる。

いま、この部屋には、自分と彼女の二人だけだ。

未明は、彼女の母語らしい言葉で、なにごとかを語りかけている。内容は不明だが、その響きの可愛らしさに彼は聞き惚れていた。小鳥が囀っているみたいだ。そんなことさえ思った。

彼女は椅子を引き、彼に座るようジェスチャーをした。ジードは首を横に振った。

「食事を摂るのはお前だ。座って食べなさい」

そう言うと、盆の蓋を取った。肉と温野菜の載ったプレートに、皮の固いこの地方独特のパン、エッカ。テーブルの上の水差しを取り、空のゴブレットに水を注ぐ。そしてふたたび彼女を促す。

未明はおずおずと腰掛けた。そして遠慮がちになにかを訊ねてきた。おそらく、ジード自身の食事が終わっているのかどうかを気にしているのだろう。彼は笑って言った。

「私はとっくに済んでる。お前はきっと、飲まず喰わずだったのだろう？　いいから食べなさい」

ジードはベッドの端に腰を下ろした。未明はナイフとフォークを取り上げ、赤身の肉を口に運んでいる。

「それは今朝獲れたばかりの赤獅子（クロッサ）のテールだ。脂肪が少なく、美容と健康にいいそうだぞ。多少くせはあるが、慣れれば美味だ」

未明は肉を飲み込み、わずかに笑ってみせた。ジードの心臓がざわめき出す。

彼女の笑顔を初めて見た。その想いで胸がいっぱいになった。

それから未明はずっと笑顔になった。食事が口に合ったのか、それともたんに気を遣っているだけなのかはわからないが、ジードにとっては大差のないことだ。彼は未明の一挙手一投足に釘付けになっていた。

彼女は、早朝の鳥が囀り続けるような感じで、ずっとなにかを話しかけている。おいしいとか、これはなんの肉かとか、そんな内容なのかもしれない。できれば逐一答えてやりたい。しかし、それができないいまは、とにかく彼女のそばにいて、その身を護ってやりたい。そう思っていた。

未明はパンを取ったが、じきに途方に暮れたような顔になった。その理由は、言葉が通じなくてもすぐにぴんと来た。

「そのパンはエッカと言うんだ。ロマドには昔から伝わる製法で作られる伝統的なパンだが……貸してごらん」

彼は未明の手元に手を伸ばした。パンを受け取ろうとした瞬間、誤って彼女の指先に触れた。

全身に稲妻が走ったような気がした。たったそれだけのことで、である。

ジードは喘ぐように未明を見た。パンを取ろうとして唐突に手を引っ込めたジードの意図が読めず、未明はただ戸惑っているようだ。自分がなにか悪かったのか、という風に彼を覗き込んでいる。ジードは口元を押さえた。

「ミハル……」

未明はきょとんとして彼を見つめた。名前を呼ばれたことくらいはわかる。しかし、そのあとが続かない。彼女は怪訝そうに眉を寄せた。口を開き、なにごとか問いかけてくる。腕が勝手に動き、気づくと未明の左手を握っていた。彼女が身体を硬くするのが気配でわかった。ジードはベッドから立ち上がった。

その時、ノックの音がした。

ノックの音が聞こえ、あたしはベッドから飛び降りるとドアを開けた。きっとパドマさんが食事を持ってきてくれたのだろう。そういう期待は見事に——じゃなく、半分だけ裏切られた。

そこに立っていたのは、あたしを駅まで迎えに来てくれた青灰色マントの男の人だった。もっともいまはマントは着ていず、一応室内着らしい、いくつものボタンのついたベージュの上下のスーツみたいな姿だけれど。彼の手には銀色のお盆があった。彼はそれをあたしに示しながらなにかを口走った。あたしはとりあえず肯き、彼

を招じ入れた。

「あ……あの、さっき、すみませんでした。あたし、取り乱しちゃって……マントも汚しちゃいましたよね。ごめんなさい、結構高価(たか)そうだったのに」

通じていないことは承知の上で、それでもあたしは謝った。彼はお盆をテーブルに置くと、さかんに食事を勧めてくれた。お肉とか野菜とかパンとか、なんだかすごく美味しそうなものがお皿の上に載っているのが見えた。正直、お腹はぺこぺこだった。十二時ちょっと過ぎに売店で買ったサンドイッチを食べたきりだったのだから。

「あの……でも、あなたは食事済んだんですか？　あたしだけ食べるのって、ちょっと……」

そう言ってみたけれど、どうやら彼の食事はすでに終わっているらしい。あたしは椅子に腰掛けると、彼に勧められるまま食べ始めた。でも――これって……なんの肉？

レアに焼かれたその赤味肉は、率直に言って、めちゃくちゃ獣臭かった。不味いわけではないけど、食べたことがない味だ。牛でも豚でも鳥でもない。この辺り独特の生き物の肉……なんだろうか。

あたしは気を取り直し、パンに手を伸ばした。きつね色に焦げ目のついた、すごく美味しそうなパン。ところがこれも一筋縄ではいかない。とにかく固いのだ、フランスパンなんて目じゃない！　どうやっても手で千切れない。あたしは困り果ててしまった。

すると、窮状を見かねたのか、ベッドに腰掛けていた彼がパンに手を伸ばしてきた。情けないけれど、一口大に千切ってくれようとしているらしい。かなり恥ずかしかったけど、おとなしく彼にお願いしようと思い、パンを差し出した。ところが、その途端、彼は弾かれたように立ち上がってしまった。……え？　なんで？

あたしの図々しさにひいたのだろうか。彼はその緑がかったきれいな青色の瞳を見開き、じっとあたしを凝視している。あたしが、なにか、まずいことをしでかしてしまったのかもしれない。どうしよう、謝った方がいい？　でも謝るにしても言葉が……そう思って

いると、不意に左手を強くつかまれた。あたしは身を竦めた。
怒っているんだ。やばい、よくわかんないけど、怒らせてしまった。作法が悪かったのかもしれない。
「ミハル」
名前を呼ばれた。はい、あの……ごめんなさい。パンは自分で千切ります。十八にもなって甘ったれたこと言ってすみません、だから怒んないで！
その時、ノックの音がした。

入ってきたのはパドマだった。彼女は未明のために用意した何種類かの衣類を胸元に抱えていたが、次期当主の不穏な振る舞いに目を丸くし、素っ頓狂な声を上げて二人に駆け寄った。
「まあぁぁ！　ジード様、坊ちゃま！　なんてことをなさってるんです、その手をお離しになって！　ミハルが怯えているじゃありませんか、まあ、まあ、なんてことかしら、まったく、なんてことかしら！」
衣類が足元に落ちるのもかまわず、彼女はジードにむしゃぶりついた。我に返ったジードは慌てて未明の手を離し、弁明を始めた。
「ま、待て、落ち着け、パドマ。誤解しないでくれ、私はただ……」
仲裁に入ろうとしているのか、未明の必死な声が聞こえた。パドマは彼女の身体を突き飛ばすようにしてジードの前に立つと、彼を睨みつけた。
「だから私は反対だったんでございますよ、お館様が……旦那様がお留守の間に、もし間違いでもあったら……私はあなた様の亡きお母様、イレイラ様に顔向けができません！　よりによって大学府（エコルガルト）からご帰省になっている間に、こんな……こんな、破廉恥な」
ジードは声を荒げた。
「違うと言ってるだろう、パドマ。人の話を聞かないか。それに少

しは気を配ってくれ、一介のメイドの部屋でこんな騒ぎを起こしたら、あとでどんな噂が流れるかわからないぞ。ミハルのためにも、頼むから落ち着いてくれ」

ミハルのために、という単語が効いたのか、不意にパドマは口を噤んだ。しかしその表情は不信に満ちている。

「――ジード様。ご承知でいらっしゃることとは思いますが……」

「ああ、わかってる。わかってるとも」

彼は鬱陶しげに首を振った。パドマの言いたいことはよくわかっている。

大学府（エコルガルト）を首席で卒業し、このウェス・ハーシュ家を継ぎ、ゆくゆくは審議院で認められる人間になるためには、あと一年は男性としての貞節を守らねばならない。十九歳で大学府（エコルガルト）に入学する時の、それは契約だった。この世界を統べる神、全能の世界樹、イグノディアスとの。

# 第六話　エコルガルトの掟

ロマド市の南端に位置するキニッサの町に、五大陸中の名家の子息のみが集まる最高学府、エコルガルトは建てられている。世に名高い名門大学であるにもかかわらず、なぜこんな辺鄙極まりない場所に存在しているのか。それには二つの理由があった。

ひとつには、伝説によれば、ここにかつて世界樹（ラ・ミュゴン）が生えていたとされるためだ。そしてもうひとつは、ずばり辺鄙な場所だから。それに尽きる。

学府長でありロマド市長でもあるワンジオ翁（おう）は、毎年、十九歳の新入生を迎える親展式の席で必ずこう言うのだ。

いわく、これからの四年間は、諸君の人生は女人禁制のタブーを背負うことになる、と。

ひとことで言って、姦（や）りたい盛りのこの年代の青少年を集めて説くには酷な禁忌である。しかし、ここに来た以上はしっかりとご禁制に励んでもらいたい――なぜならば、世界樹の人格神であるイグノディアスは女性神で、四年間の貞節を自分のために捧げることを強く望むからだ、というのがその理由だった。

古い慣習とはいえ、従わないわけにはいかなかった。三ヶ月に一度設けられる定期面談の座で、全学年二百名の学生は、一人一人学府長と対面を果たすのだが、その生徒が貞節を遵守しているか、或いはすでに違背（いはい）したあとであるか、この老獪なワンジオ翁はすべて見抜いてしまうのだから。

「まったく、遣り切れないったらないよな。当然、入学審査も童貞かどうか、だろ。灰色の青春だぜ、親の見得のせいで」

ジードの学友、ホルツェンはそう言って嘆いた。彼はオサイオン市の富豪の息子で、名誉欲の薄いサバサバとした性格の持ち主である。そのため、将来審議院で認められ、「天上の切符」を与えられ

るような？ＩＰになるための第一歩といった話には、まったくモチベーションをくすぐられないのだった。

ジードは曖昧に笑った。この日ホルツェンは、秋季休暇を利用して、友人の家に泊まりに来ていた。成り上がりであるためブランドへのこだわりが人一倍強い両親とは折り合いが悪く、一ヶ月にも渡る休暇を延々と実家で過ごす気にはとてもなれなかった。

ところが、いざ来てみると、ジードの様子がどこかおかしい。彼は始終上の空のように見え、ホルツェンの言葉にも熱のない返事を返すばかりだ。さすがに怪訝に思ったホルツェンが変異の理由を問いただそうとした時、ノックの音が響いた。

「ジード様。お茶、お持ち、しました」

たどたどしい口上が聞こえ、ドアが開いた。現れたメイドを見、ジードの頬が紅潮する。

入ってきたのは未明だ。長い髪をアップにまとめ、リボンのついた白いヘアバンドを留めている。彼女は含羞みながらも給仕に集中し、なんとか粗相なく小卓の上にポットとティーカップを並べ終えた。お茶を注ぐとすぐに部屋を出て行こうとする彼女の腕を、ジードは咄嗟につかんだ。

「あ、の……」

未明は戸惑いを隠さずに彼を見上げた。入り口付近には監督役のパドマの気配はない。ジードは素早く告げた。

「ミハル。今夜、晩餐が終わり次第お前の部屋へ行くから、用意をしておきなさい。いいね」

理解できたかどうかは不明だ。未明は肯いたが、きちんとわかっているのかどうか。ジードはとりあえず彼女を解放した。未明は顔を伏せたまま退出した。

一部始終を見ていたホルツェンが口笛を吹く。

「おいおい、おいおい！　なんだよいまのは。お前まさか、あのメイドにお手つきしちまったんじゃ……」

下司な言い方にジードは眉をしかめた。

「勘違いするな。彼女はこの間来たばかりのメイドだが、事情があって言葉が不自由なんだ。だから私が時々勉強を教えてやっている。それだけだ」

ホルツェンはにやにやと意味深な笑みを浮かべている。

「ま、真実は、女神イグノディアスとワンジオ翁がよくご存知だからな。お前、下手したら休暇明けに即退学ってこともあり得そうだな」

ジードは学友を睨みつけた。「ばかを言うな。なぜこの私が」

「なぜって、お前、いまのメイドに惚れちまってるじゃないか。見てれば一目瞭然だよ。そんな相手の部屋を夜訪ねるなんて、お前って意外に蛮勇の持ち主だったんだなぁ」

「……！」

ジードの顔がさっと赤らんだ。ホルツェンは真顔になり、さらに続けた。

「俺はいいと思うぜ。好きな女ができるのなんて普通のことだろ。俺たちは若いんだ、なんで現実を差し置いて偶像の女に貞節を誓わなきゃならないんだ？　なぁジード。本気で好きなら、タブーでもなんでもとっとと犯して、その女と添い遂げろ。なにしろ俺たちの修道期間はまだあと一年もあるんだ、その間彼女が誰のことも好きにならないなんて保証はどこにもないんだからな」

ホルツェンの言葉には妙な重みがあった。ジードは反論する気概を失くし、先ほど未明が淹れてくれたお茶をただじっと見つめていた。

# 第七話　アドリオの憂鬱

あたしはドアを閉じるなりほっと息を吐き出した。この家の長男、オルグ・ジード様は、やさしい人だけれどなんだかひどく緊張してしまう。あたしに対する空気がどこか張り詰めているというか……ここに連れてきてしまった責任を感じているせいだろうか。

あたしがこの邸に来て、十日が経っていた。その間にあたしはパドマさんから、メイドの心得を色々と教わった。と言っても言葉が不自由なため、もっぱら彼女のあとについてその仕事ぶりを見学するところから始まったんだけれど。お端下（はした）仕事から食事やお茶の給仕、当主の一家に関する雑事やなんかは、すべてメイドの管轄のようで、中々のハードワークでもあった。東京でしていたバイト三昧の生活がふと思い出された。

……いつか、帰れるのだろうか。元の世界に。

一人になるとすぐに心細くなって泣けてきてしまう。あたしは両頬を軽く叩いた。帰れる。きっと、帰れる。

「よしっと」

気合を入れ直すと、今度はアドリオ様の部屋に向かう。彼はジード様の四つ下の弟で、つまり、あたしと同じ十八歳。それだけでも親近感を感じるには十分だったけれど、彼は驚いたことに、あたしが通っていた大学の同級生によく似ているのである。初めて見た時は本当にびっくりしたものだ。

黒い髪も黒い瞳も、すらりと背の高いところも、なにより遠くを見つめるようなその眼差しがすごく彼のことを思い起こさせる。講義中にぼんやりと外を眺めていては、教授に当てられていた姿を思い出し、あたしはふと笑っていた。そう言えば、その容姿は、お兄

さんのジード様にはあまり似ていない。まぁ、どうでもいいことだ。
厨房に赴き、お茶の準備をする。カップとポットを温め、ウォーマーをかぶせる。やかんのお湯を陶器製の水差しに注ぐ。アドリオ様が好きなのは、バラに似た香気を放つユニスという青い花を乾燥させたお茶で、持っていくのはいつもこれと決まっている。
支度をしていると、ここ数日の間に仲良くなった、メイド仲間のピアが寄ってきた。パドマさんによると、彼女の年齢は十六歳。丸顔で、見ているとなんとなく妹の榛名を彷彿とさせる。
「お疲れ、ミハル。ね、それ、アドリオ様の分？」
あたしは懸命にヒアリングをしながら肯いた。ピアは意味深な表情を浮かべて迫ってくる。
「ねぇ、ミハルってさ、ジード様とアドリオ様のどっちがいいと思う？　あたしは断然ジード様なんだけど」
完敗。名前しか聞き取れない。あたしは曖昧にへらへらと笑った。でも、ピアは最初から人の話は聞いてないらしく、どこか浮かれた口調でおしゃべりを続けている。
「でもさぁ、ジード様って、大学府に入るくらいだからあと一年はエッチできないじゃん？　それ考えると、迫るなら弟のアドリオ様かなぁって。既成事実作ろうと思ったらさ、やっぱり――」
「ずいぶんと念の入った計画の立てようね、ピア」
ピアは飛び上がった。恐る恐る背後を振り向き、必死で愛想笑いを浮かべている。
「あ、こ、これは、女官長様。あっと、あたし、お庭のお掃除に行かなくちゃ。それじゃね、ミハル」
そう言うなり彼女は厨房を飛び出していった。彼女の後ろ姿を見送りながら、深いため息を吐き出すパドマさん。
「まったく……どうしていまどきの娘っていうのはああなのかしら。親御さんからお預かりしている手前、無碍（むげ）に追い出すわけにもいかないし。本当に困ってしまうわ」
パドマさんはそう独りごちた。あたしは言った。

「あの、アドリオ様に、お茶、お持ちします」
お決まりのフレーズくらいならどうにか覚えられた。彼女はちらりとあたしを見た。そして思いついたようにこう付け加えた。
「……ミハル。いまこんなことをあなたに言っても半分も理解できないでしょうけど……ジード様にはあまり、近づかないようにしてちょうだいね。あの方には特殊な使命が課せられているの、少なくともあと一年の間は、なにがあっても間違いを起こさないようにしなければ。……そのうちあなたにもわかるようになると思うけど」
なにを言っているのかほとんどわからなかった。でも、多分、ジード様には近づかないように、とかそんな内容なんだと思い、あたしはとりあえず肯いておいた。近づくも近づかないも、あたしはいずれここを出て行く身なのだから。それも、なるべく早いうちに。

夕方の、涼しくも心地好い風が、アドリオの頬をやさしく撫でて通り過ぎていった。彼は窓辺に腰掛け、うたた寝をしていたのだった。はっと気づいて起き上がると、人の気配を感じた。
振り向くと、小卓の上にティーセットを並べているメイドの姿が目に入った。彼は不興を顕わにした。
「勝手に入るな。出て行け」
小柄なメイドの肩がびくりと揺れた。それは十日ほど前に邸に住み込むようになった、新参のメイドだった。可愛らしいがどことなく異国的な顔立ちをしていて、不思議と印象に残る。アドリオは立ち上がった。
メイドの娘はなにか、聞き慣れない外国語を口にしている。彼女の母語なのだろう。歌うような響き。
ゆっくりとそのそばへ寄るアドリオ。
「そうだな。……いいことを考えたぞ。俺もあと一年したら、兄上と同じくあの地獄の修道生活に入らなけりゃならないんだ。いまの

うちに資格を喪失してしまえば行かなくて済む」
「……？」
彼女は怪訝そうにアドリオを見ている。言葉が不自由なのだと誰かが言っていた。アドリオは口元に不敵な笑みを浮かべた。
「いまここで、お前を抱いてしまえば、俺は大学府行きの資格を永遠に失う。……願ってもないことだな」
娘がなにかを口走るのが聞こえた。誰かの名前のようだった。誰だろうと関係ない。彼は娘の細い手首を握った。
「……！」
彼女は息を呑んだ。アドリオの不遜な思惑にようやく気づいたようだった。
「あ、あの、アドリオ様。しつれい、します」
出て行きたいという意思表示らしい。彼は意地の悪い微笑を湛えながら首を横に振った。片言の話し方が妙にそそる。そんなことすら考えた。舌なめずりをして獲物に迫る猛獣のごとく、彼は娘の両腕を押さえて自由を奪い、その華奢な身体を床の上に組み敷いた。
彼女の顔に恐怖と焦りの色が浮かぶ。
「心配しなくても、それだけの代償はやるつもりだぜ。……お互い、楽しめばいい。そうだろ」
娘は懸命に身をよじった。大きな黒い瞳に、うっすらと涙が浮かんでいる。彼はわずかに動揺した。その黒い眼差しは、いまは行方も知れぬ彼の実の母親を思い起こさせたからだ。
自分を押さえつけている腕の力が緩んだのを彼女は敏感に察し、めちゃくちゃに暴れてその拘束からどうにか脱出すると、跳ね起きて扉へと走った。彼女はそのまま部屋を飛び出した。

# 第八話　告白 - イド・ライア・テス -

あたしは必死で廊下を駆け、一階の自室に飛び込んだ。鍵を掛けてベッドに潜り込む。しばらくの間は身体の震えが治まらなかった。

――なにを言っているのかは全然わからなかった。でも、考えていることはわかった。

恐怖と、怒りと、情けない思い。あんな風に力ずくで来られたらひとたまりもない。

「ちくしょう」

そんな言葉が口をついて出た。無性に悔しかった。大学の同級生に少しくらい似ているからって無条件に気を赦すあたしもあたしだ。

――久世（くぜ）さんって、苦学生なんだって？　俺と同じだな。

第二外国語のドイツ語の授業であたしは初めて彼と言葉を交わした。瀬川淳（せがわじゅん）。長野から上京してきているという彼は気さくで、話しやすくて、すぐに打ち解けた。付き合うというほどじゃなかったけれど、もしかしたら好きになるかもしれない。そんな予感を感じることが時々あった。

郷里は海の近くだという話をすると、彼はすごく羨ましがった。長野は山に囲まれていて、潮の匂いを感じることはないからだと。でもその代わりスキーとかできるじゃん、それもいいよね、そう言うと、彼は反対に、なら夏休みにお前の実家に招待してよ。俺、夏男だからウィンタースポーツよりサーフィンの方がやりたい。なんて返してきたものだ。田舎者同士、奇妙な連帯感が生じていたのかもしれない。

とにかく、瀬川君とアドリオ様はまったくの別人なんだ。当たり前だけど、認識が甘かった。

七刻を過ぎ、大広間では晩餐が始まっていた。あたしはまだ、メイドとしての晩餐デビューはさせてもらえない。そして使用人の夕食時刻はそれより遅く、八刻半（夜九時）。それまでは勉強でもしていよう。あたしは、帰郷するつもりで持ってきていた小型のボストンバッグから取り出したノートを広げた。入試並みに真剣に聴き取りをしているおかげで、いくらか語彙が増えてきていた。

語の響きそのものはラテン語系っぽいけれど、文法的には英語に近く、それほど複雑じゃない。少なくともフランス語や、あたしの母語である日本語ほどの煩雑さはなさそうだった。

ＹＥＳは「ユアン」。ＮＯは「デム」。一人称は「イド」。二人称は「テス」。三人称のうち、女性格は「シ」。男性格は「デュ」。複数形になると性差は消えて「デュス」に変化する。基本文型は主語＋述語＋目的語。いわゆるＳＶＣ。疑問形になると述語と主語が逆転する。この十日で、それくらいのことはなんとかつかめていた。

ノックが鳴った。集中するあまり、あたしは気づかずにいた。二回目のノック。はっと顔を上げる。パドマさんかピアが呼びに来てくれたのかもしれない。

ドアを開けると、そこにいたのはジード様だった。あたしはぽかんとして彼を見た。

「食事はまだなんだろう？　入れてくれ」

彼の手には、この前みたいに銀のドーム型のお盆が載っている。

……そう言えば、昼間、お茶を淹れに行った時、なにか言われたような……。まったく聴き取れなかったんで逆に適当に肯いちゃったんだ。まずかったなぁ。

パドマさんは、あたしたちメイドがこの家のご子息に近づくことをよく思っていない。まあ身分差とか、色々面倒の種だからだろう。ピアをたしなめる彼女の渋い表情を思い出し、あたしは慌てて首を横に振っていた。

「あの、えと……レーゾント。デム、ダルハ、テス……」

ひどい片言だったけれど、意味は通じたらしい。ジード様の表情

が曇った。

「……パドマになにか言われたのか？　気にしなくていい。勉強を見てやるだけだ」

勉強（コニオン）、という単語だけ聴き取れた。言葉を教えてもらえるのはそりゃありがたいけれど、パドマさんを裏切るようなことは正直気が進まない。が、彼は、そんなあたしの様子にはおかまいなしで部屋に入り込み、後ろ手にドアを閉めた。あたしは仕方なく彼に従った。

ジードは、いまやほとんど焦がれるような想いで、目の前の少女を見つめていた。彼女はどこか後ろめたそうな顔をして、もじもじと食事を口に運んでいる。

今日のメニューは、潰した芋と燻製の肉を薄く切ったエッカに挟んだ、ロマド風サンドイッチと、温野菜のサラダ。そして、卵液を甘く味付けして蒸し焼きにしたゾブリッカ。カラメルの代わりに、薬草を煮詰めて作ったスパイシーなソースがかかっている。プリンのような味わいの、ロマド独特のデザートだ。

初めて口にするゾブリッカに、未明は目を輝かせた。

「ロジー」

美味しい、という意味の形容詞だ。ジードは微笑した。

「お前がどこから来た娘なのかはわからないが、やはり女性は皆甘味に弱いものなんだな。太るのを気にしてデザートを避ける若い娘も多いと聞くが、お前はむしろ細すぎるくらいだ。気に入ったならどんどん食べるといい」

未明は屈託ない笑顔を見せた。ジードの胸が甘く疼く。

――本気で好きなら、タブーでもなんでもとっとと犯して、その女と添い遂げろ。

友人の言葉が耳に蘇る。ジードは頭を振った。……そんなことをするわけにはいかない。自分だけの問題ではないのだ。ウェス・ハーシュ家の名誉がかかっている。長い歴史を持つこの家で、大学府を卒業できなかった長子などはこれまで存在しない。

だが、それならなぜ、未明に会いに来てしまうのだろう。惹かれているという自覚はあった。自分も男だ。経験がないとはいえ、いや、ないだけに、二人きりの空間がどれほど危険なシチュエーションであるかは厭というほどわかっている。

それなのに、止められない。会いたい。食事を届ける、勉強を教える。そんな口実にすがりつく。理由さえあれば、未明も自分を拒まないだろう。現にさっきも、彼女は「勉強」という言葉に反応を示した。

食事が終わり、彼女はテーブルの上を手早く片付けると、ライティングデスクに広げたままのノートを示してみせた。上目遣いに、甘えるような眼差しでジードを見る。

「コニオン……トア（お願いします）」

心臓が射抜かれる。頬が、いや全身が熱くなる。

ジードは椅子を引いて腰掛けると、懸命に平静を保ちながら「講義」を始めた。未明は真剣な表情で彼の言葉に耳を傾けている。

「語彙は日常生活の中で増やしていくしかないが、それでも、基本的な言い回しは覚えておいた方がいいだろうな。そうだな……今日は禁止構文を教えよう。〇〇するな、という意味の文章だ」

彼はノートに簡単な絵を描いて説明した。人物の上に大きな×印。NOを意味するデムの文字。

「ダット・デア・イル。この、デア・イルの部分が変わっていくんだ。相手にして欲しくない行動を填め込んでいけばいい。たとえば……」

ジードはじっと未明を見つめた。

「……一人で出かけるな（ダット・エイロア・ワレリ・セム）。私のそばから離れるな（ダット・キーシス・ノン・イデス）……」

口調が熱を帯び始めた。彼は知らぬうちに未明の手をつかんでい

た。彼女は戸惑い、怯えたように自分を見ている。ジードは続けた。
「ほかの男を見るな。ほかの男と口を利くな」
もう限界だった。ジードは未明の小柄な身体を素早く引き寄せ、抱きしめていた。驚きのあまり身動きもできない彼女の耳元で、彼は切なく告げた。
「……お前が好きだ」
腕の中で未明がもがき始めた。生まれたての仔猫にも似た、弱弱しい力だ。ジードの中で、彼女へのいとしさがいや増していく。
「愛してる、と言ったんだ。――こういう風に」
彼は未明の頬に手を添えると、抗う間も与えず唇を奪った。意識のどこかで花火が弾けたような、恍惚と官能の嵐が一気に押し寄せる。息が荒くなる。やわらかな唇を貪り、舌をこじ入れる。接吻という行為自体初めてではあったが、不思議とそんな気がしなかった。カルマ駅で初めて彼女を見た時から、こうなることをどこかで想像していたのかもしれない。
情熱的な口づけは五分ほど続き、未明の身体から力が抜けていくのがわかった。逆にジード自身は、全身の血管と神経が緊張に張り詰めていくのを感じていた。中心部分が熱を持ってずきずきと疼いている。性的に興奮している証拠だった。
この、熱く滾るおのれの分身を、未明の体内に挿入する。赦されない行為だ、少なくともいまの彼には。欲望に負けて彼女を抱いてしまえば、あまりに大きな代償を払うことになるだろう。
……だが、それでも、彼女が欲しい。彼女への気持ちは、この恋情は一時期の惑いなどではない。
ああ、もう理屈などどうでもいい、私はお前が欲しい、お前とひとつになりたいんだ、いますぐに。ジードはすべての葛藤を振り払った。
「ミハル、愛してる、お前が好きだ」
彼は未明に頬ずりをし、その身体を軽々と抱き上げるとベッドに横たえた。そしてその上に馬乗りになる。赤く潤んだ瞳で呻くよう

に囁く。
「愛してる。……お前が欲しい（イド・ロルック・テス）」
組み敷かれた未明がなにかをわめいている。鳥の囀り（さえずり）。パニックのあまり母語しか出て来ないのだろう。その様子は、ジードの中に眠る男としての庇護欲と、嗜虐心をおおいにそそった。彼はふたたび口づけをした。
「んっ……ふ……っ」
未明は必死で顔を背けようとしている。しかし力ではとうてい敵いはしない。存分に味わい尽くし、なお名残惜しげに唇を離す。燃え立つ欲情が、次なる行為を主（あるじ）に指示する。ジードは手のひらを未明の胸元に這わせた。

……やわらかい。

これまでに触れた、どんなものよりもやわらかかった。それでいて、不思議なことに熟れ切らない果実にも似た張りのある硬さが伝わってくる。――これが女というものなのか、とジードの胸を甘い感慨が満たしていく。彼はその感触のとりこになった。服の上からではあったが、夢中で撫で回し、時に力を込めて揉み、捏ね上げる。飽きることがなかった。
しかし、そこが最終目的というわけではない。彼はようやくその次の段階へと移った。びろうどのスカートをめくり上げ、太ももの辺りまでを覆っている白い下穿きに手をかけた。……これを脱がしてさえしまえば、未明の深奥へ続く入り口が姿を現すはずだった。ウェス・ハーシュ家の歴史も名誉も、大学府も、「天上の切符」さえ、すべてが取るに足らないことに思えた。
私がいま、心の底から欲しいのはミハルだけだ。
彼は自らの欲望のままに動き、下穿きをずり下ろした。だがその下にはもう一枚の衣類が残っていた。見たことも聞いたこともないような奇妙な形をした、ひどく小さな下着だ。春に咲く花々のよう

な扇情的な色。手の込んだレースの刺繍。それはまるで、彼という男の手で脱がされるのを待っているかのようにすら感じられた。ジードの手がゆっくりと布地の端にかけられた。

苦しげな小鳥の声が、途切れ途切れに聞こえてきた。

ジードは顔を上げた。それは未明の泣き声だった。彼女は泣いていた。肩を震わせ、顔を腕で覆うようにしながら、すすり泣いている。

彼は言葉を失くした。……自分はいま、いったい、なにをしようとしたのか。

未明がこの行為を望んだのか？　いや。彼女は、自分に対し、感謝の念こそ抱いているかもしれないが、恋慕の情などその片鱗も匂わせたことはない。――自分に抱かれることなど、望んでいるはずがないのだ。

胸が切り裂かれそうな痛みに襲われた。未明を傷つけたこと。そして、はっきりとした拒絶を受けたという事実。

「……すまない（ソディオム）」

ジードはつぶやいた。スカートを元どおりにし、ベッドから降りる。彼女の顔などとても見られなかった。

やがてドアが開き、閉まる音がした。小鳥の声はそれから小一時間ほど止むことはなかった。

# 第九話　夜の出会い　1

その出来事のあと、しばらくしてあたしはベッドから起き上がり、水差しの水でハンカチを濡らすと顔を拭いた。それからおもむろに荷物を片付け始めた。と言っても、何枚かの下着を箪笥から取り出し、ボストンバッグに仕舞った程度だけれど。

ライティングデスクの上には、語学学習用に使っていたノートと筆記具が出しっぱなしになっている。でも、もういい。もう使うことは永遠にない。

あたしは、さっき乱された服をきちんと整えた。時刻はそろそろ九刻、つまり夜の十時になる。真夏の日本と違い、どういうわけかここいらは初冬を迎えているとの話だから、外はきっと寒いだろう。このメイド服はわりと生地が厚めだから、そこそこ防寒性能を備えてはいそうだ。

部屋を見回してから、エプロンを外し、ていねいに畳んでベッドの上に置いた。せめてパドマさんくらいには、お世話になったお礼を言っておきたかった。でもろくに言葉が通じない以上、それも叶わない話だ。あたしは心の中で、彼女に別れを告げた。

――ここを出て行くのだ。いますぐ。

ジードは自室に引き上げ、寝台の上に倒れ込んだ。傷つけた小鳥の哀れな鳴き声が耳にこだまする。

……自己嫌悪で死ねるものなら、間違いなく自分はたったいま絶命している。

なんという失態を犯してしまったことか。これから先、どういう

顔をして未明に会えばいいのだろう。
いや、そもそも、もう彼女は自分を信用してはくれないだろう。会ってまだ十日かそこらだというのに、彼女の窮地をたまたま救ったことを恩に着せ、二人きりになった途端に襲ってくる不埒な輩。その程度にまで自分の立場が失墜していたとしても不思議はない。
彼は両手で頭を掻き毟った。様子のおかしい主人を心配してか、忠実な愛犬がそばへ寄り添ってくる。しかしいまのジードには、ラギの艶やかな被毛すら直視することができない。

――未明の髪。未明の肌。未明の……身体。甘い香り。やさしい声。少し戸惑ったような表情。

頭の中は彼女の映像でいっぱいになった。
好きだ。やはり、未明が好きだ。先ほどは確かに性急過ぎたかもしれないが、彼女が欲しいという気持ちに嘘はない。
彼は上半身を起こし、なんといって謝るべきか思案を始めた。それとも、言葉だけではだめだろうか。なにか、贈りものをした方がいいのだろうか。――ため息をつき、自嘲気味に笑った。
ウェス・ハーシュの家に生まれた男子は、皆、大学府へ進むことが決まっているため、幼い頃から女子との交わりを一切禁じられて育つ。入学を赦される十九歳になるまで貞節を守らなければならないからだ。
つまり、同じ年頃の一般の男性とは違い、女の扱いや付き合い方がまるでわからないのである。それはホルツェンをはじめ、学内で知り合う友人たちもむろん同様だ。
「……いや、待てよ。そうとも限らないな」
そこでジードはふと気づいた。このウェス・ハーシュ家に、身近なところに例外が存在することに。
それは彼の実父にして現当主であるオルグ・ヴィネック・シオン・ウェス・ハーシュだ。彼は二十三歳で大学府を卒業するが早いか、

幼なじみの神官長の娘、イレイラと結婚したのだが、どういうわけか在学中から派手な浮名で有名な男だったらしい。ワンジオ翁の目を誤魔化すことはできない。とすると彼は童貞のまま女を手玉に取ったということになる。そんなことが、果たして可能かどうかは別にして。

ジードは頭を振った。……父上のことはいまはいい。どちらにしろ、七日間会議で不在なのだ。

それよりも、いますぐ謝りに行こう。彼女は部屋に入れてはくれないだろう。それでもいい。もう一度、きちんと謝りたい。部屋の外からでもいいから誠実な謝意を伝えたい。

彼は立ち上がり、扉を開けると廊下へ出た。タイミングよく——いや悪く、駆けてきた小妖精とぶつかった。年の離れた弟妹のかたわれ、ユ・ゼルだ。彼は見事にすっ転び、緋色の絨毯の上に倒れ込んだ。

「痛ぁい！　兄様ひどいよ、痛いよう」

ジードは苦笑しながら弟を助け起こした。

「廊下を走ったりするからだ。パドマに見つかったら三日間はおやつ抜きにされるぞ。ほら、さっさと起きろ」

ユ・ゼルはその可愛らしい頬をまん丸に膨らませた。

「へんだ。兄様の意地悪！　……ねぇ、テラのこと見なかった？　かくれんぼしてるんだけど、全然見つからないんだ」

「お前が鬼なのか？　ならほかの人間に訊くのはルール違反だろう。自力で探し出すことだな」

ユ・ゼルの顔がたちまち曇る。

「だってさっきからずっと探してるのに見つからないんだもん。でも、その代わりにミハルは見つかったんだよ。ミハルは誰とかくれんぼしてたのかな、内緒だって言ってたけど。でも、お外にまで出るなんて反則だよね」

「……なんだって？」

ジードの顔色が変わった。

そもそもあたしは電車に乗ってこの町に来たんだ。なら、きっと、この町発の電車――汽車なのかもしれないけど、とにかくそれに乗りさえすれば、どこかの地点で元いた場所に戻れる。

なんの確証もないけれど、あたしはそう考えた。ていうか、ここが仮に――そう、仮に、もしも、日本でもなく外国ですらない――言わば「異世界」のようなところなのだとすれば、脱出口が必ずあるはずだ。来れた以上は出ることもできるはず。

あたしはボストンバッグを携え、夜の街を駅まで歩いていた。道のりは多分、五キロ程度。雪こそ降ってはいないものの気温は相当冷え込んでる。きっと三度とか、そんなくらい。寒い。コートなしはきつい。温暖湿潤な日本が恋しい。

「……くしょんっ」

くしゃみが出た。本格的に風邪を引く前にとっとと電車に乗らなきゃ。そう、急がなきゃ――なにしろ、お邸を出るところを、あの家の一番下の息子だっていう小さな男の子に見られているからだ。あたしを見たことは内緒よ。ジェスチャーを取り混ぜてそう口止めはしたけれど、なにしろ子どもである。誰かに訊かれれば話してしまうだろう。

可愛らしい子だった。灰色のおかっぱで、澄んだ瞳がジード様にどことなく似て……って、あの人のことはもう思い出したくもないのに！　あたしは頭をぶんぶんと振った。信用できるなんて思ってた自分がほんとにばかだった。

結局、慰安婦代わりに置いておきたかっただけなんだ。そう思った瞬間、無性に泣けてきた。信じた自分の愚かさとか、ああいうことをしたいからやさしくしてくれてたんだとか、考えれば考えるほど涙は止まらなかった。あたしに圧（の）しかかってる間中なにかを言ってたけど、動転するばかりで聴き取ることもできなかった。

弟の方に襲われかけた時よりももっとショックだ。ショックで、悲しかった。どうしてこんなに悲しいのか、自分でもわからないけれど。

駅舎の灯りが見えた。あたしは思わず走り出した。……ところが、である。

「なにこれ……封鎖されてるのぉ!?」

ホームへ続く階段の入り口には三重のロープがかかっていた。あたしは途方に暮れた。

これって、どういうことだろう。ホームレス対策で夜間侵入禁止にしてあるとか、そういう意味なんだろうか。

つまり……いまの時間、電車はないってこと？　まじで？

ボストンバッグを手に呆然と立ち尽くすあたし。次の瞬間、さらなるトラブルが降りかかってきた。

「お前……あの時の娘じゃないか！　なんでこんなところにいるんだ、ウェス・ハーシュ邸から逃げてきたのか!?」

聞き覚えのあるダミ声。……げっ。頭上を見ると、駅舎の窓から、あの日あたしをつかまえたひげの駅長さんが険しい顔つきであたしを見下ろしている。

あたしはダッシュでその場から逃げ出した。とは言っても土地勘はゼロ。どこへ逃げたらいいのかまったくわからない。でもとにかく、ここにいたらまずい。どこか、どこでもいいから隠れなきゃ。

点々と設置された街灯が、いつしか繁華街らしき妖しげな界隈へとあたしを導いた。身を隠せればどこだっていい、そう思い、あたしは夢中でそのうちの一軒の建物の裏口から中へ潜り込んだ。

# 第十話　夜の出会い　2

ヴィネック街区の一画には、市議会認定の酒場通りが古くから存在している。通称「春の街（ウェイ・モルド）」。わかりやすい名称ではある。

その中でも老舗の一軒がこの「銀鼠（ぎんねずみ）」だ。コルテニッド（オーケストリオンに似た自動演奏器）の気だるい調べが流れ、強い葉巻と香の煙が立ち込める中、女将（マダム）として店を取り仕切るロナジアは、化粧室から戻るなり古い馴染み客を見つけ、顔をほころばせた。

「ファロダ！　ファロダじゃないのさ、久しぶりねぇ」

駆け寄った相手は、長い灰色の髪をひとつにまとめ、緑がかった碧眼を持つ、秀麗かつ精悍な顔立ちの男だ。年の頃は三十代半ばというところか。ただしすでに相当酒が回っているらしく、崩折れるように長椅子にもたれかかっている状態だが。

彼は女の声に顔を上げた。赤く濁った瞳がわずかに笑む。

「おお、こりゃ、ローニャじゃねぇか。相変わらずいい女だな。どうだ、亭主とは仲良くやってるか」

ロナジアは男の腰に手を巻きつけ、嬉しそうにしな垂れかかった。

「止してよ、あんなの、もう半年も前に別れちゃったわよ。言ったでしょ？　あたしにはやっぱりあんただけよ」

言い終わるが否か肉感的な唇を押しつける。男の方は適当に応じつつも彼女の髪を撫でた。

「神の下に永遠を誓ったはずだろうが。……まったく、しょうがねぇなぁ」

女は噴き出した。

「あんたの口から神だなんて、その方が驚きだわよ。今日戻ったの？　他所の大陸に行ってたんでしょ」

「ああ、船でな。ローニャ、もう一杯頼むわ、なるたけ強いやつをくれ」

酔いは充分に見えたが、彼女は逆らわずにカウンターへ引っ込んだ。群青の液体が入った酒瓶を取り出し、ゴブレットに注ぐ。キニッサ地方に伝わる六十度の古酒だ。運ぼうとした時、フロアの方で騒ぎが起こった。男たちの怒鳴り声、揶揄する声、それに、まだ少女のようなか細い娘の声。ロナジアは顔をしかめた。

「見ろ、こりゃ間違いなく処女（きむすめ）だぜ。しかも上玉だ！　なんだってこんなとこに紛れ込んでんだ、ええ？」

下卑た声がした。ロナジアの大きらいな類の酔っ払いだ。案の定、野卑を絵に描いたような荒くれ男が、フロアの端っこで暴れている。彼の腕の中に捕われている娘を見てロナジアは瞠目した。……ありゃあ、まだ十五かそこらの小娘じゃないのさ。しかも、あの服装、どこぞの有力貴族のお邸の半下女（はしため）かなんかかかしら。

思い出した。あのハイネックの臙脂のドレスは、確かヴィネック一の名家の女官服だ。出自の確かな、そこそこ血筋のいい家の娘しか雇い入れないはず。あの男じゃないけど、なんでまたうちみたいな店に……彼女は思わず身を乗り出し、啖呵を切った。

「ちょいと！　うちの店でそういう騒ぎは止めてもらいたいね。女を買いたいならその手の店に行きなよ、さあ、その子を離して、とっとと出ておいき」

ロナジアはそう怒鳴るなり男の手から娘をもぎ取ろうとした。が、仲間らしき別の男がその腕を制し、逆に彼女を突き飛ばした。よろけてカウンターにもたれかかるロナジア。そこここから嘲笑が上がる。

「なにするんだい、このごろつき！」

「年増は引っ込んでろ。……ああ、まぁ確かに楽しむには場所を変えた方が良さそうだぜ。さぁ行こうか、お嬢ちゃん」

娘は青ざめた顔でなにかを叫んでいる。聞き慣れない、不思議な響きの言葉だ。

その時、長椅子に倒れ込んでいたファロダがむっくりと起き上がった。真顔になっていた。騒ぎの中心にいる見慣れぬ娘をじっと見

つめていたかと思うと、大股でフロアを横切り、彼女の元へ向かう。取り巻いている連中には目もくれず、唐突に話しかけた。

「――おい、お前、何者だ？　どこから来たんだ？　その言葉は……」

彼の問いかけは途中で遮られた。男たちの仲間の一人が殴りかかってきたからだ。娘は目を瞑った。

が、次の瞬間、倒れたのは殴ろうとした男の方だった。ファロダは軽々とその男の拳を受け止め、腹に蹴りを喰らわしたのである。娘を捕らえていた男は怒りを顕わにした。

「この野郎、なにしやがる！」

ファロダの耳には入っていないようだ。彼は相変わらず娘に執心を示し、話しかけている。また別の仲間らしき男が背後から襲いかかってきたが、ファロダはスマートに肘を後ろへ突き出した。――男は鳩尾を押さえて崩れ落ちた。

一筋縄ではいかない相手とわかったのか、四、五人の相手がまとめて飛びかってきた。ファロダはさも煩(うるさ)そうに眉をしかめ、のらりくらりと攻撃をかわしながらも一人ずつ的確に仕留めていく。ロナジアの悲鳴――というより怒声が上がる。

「ちょいとちょいと、あんたたち！　喧嘩なら外でやってちょうだい、店がめちゃめちゃになっちゃうじゃないの」

その声は呆気なく喧騒にかき消された。椅子やテーブルが倒れ、酒瓶やグラスが割れる。ついに堪忍袋の緒が切れた彼女は店を飛び出した。

その間もファロダとならず者たちの大立ち回りは続いた。そのさなか、不意に娘の鋭い悲鳴が上がった。混乱の隙をついて店から連れ去られようとしているのだ。ファロダは彼女を捕らえている男に飛びかかると、その頬を強(したた)かに殴りつけた。男は喜劇俳優さながらに一回転し、そのままのびてしまった。その時である。

「鎮まれ、鎮まらんか！　全員お縄にしてくれるぞ、このろくでなしどもが」

ドアが荒々しく開き、濃緑のマントに身を包んだ数人の男たちがどかどかと踏み込んできた。町の治安を取り仕切る警吏官の連中だ。手にはそれぞれ警棒を握っている。彼らの出現にファロダの顔色が変わった。彼は短く舌打ちした。

「ローニャのやつだな。やべぇ、こんなとこでつかまったのが知れたら、またなにを言われちまうか。……おい、来い！　逃げるぞ」

ファロダは自由になった娘の手首をつかむと裏口へ向かった。娘は抵抗もできず、されるがままに彼に続いて店の外へと走り出た。

# 第十一話　夜の出会い　3

わけもわからず、腕をつかまれたままあたしは走った。細い裏道をいくつも通り抜け、やがてまったく人通りのない街路まで来ると、彼はようやく立ち止まった。

いきなり全力疾走したせいで、あたしの息はかなり上がってしまっていた。体育の授業は一般教養で、週二回しかない。バドミントンじゃなく、陸上か水泳にでもしとけばよかった。

そんなことを考えていると、不意に声をかけられた。

「大丈夫か？　悪かったな、つき合わせちまって。あの連中につかまるとあとが厄介なんでな」

意外なほど人なつっこい喋り方だ。なにを言ってるのかは例によってわからなかった。それでもあたしはつい微笑してしまった。

「……リユテス（ありがとう）、レーゾント（すみません）」

片言でお礼を言う。どういう人なのか、まったく知らない。でも助けてくれたのは事実だ。

それに――悪い人には見えない。この世界で簡単に他人を信用するのはどうかと思う。でも、直感が告げている。この人はきっと、信用できる。

あたしはあらためてまじまじと彼を見た。若いというほどではないけれど老けてもいない。多分、三十代半ばくらい。灰色の長い髪に、緑の混じった青い瞳。無精ひげが若干。よく見るとすごく整った、きれいな顔立ちだ。

「なあ――お前、いったい、どこから来たんだ？　さっきおかしな言葉を喋ってただろう。ありゃどこの国の言葉なんだ」

言葉（リトス）がどうとか訊かれているらしい。ここでは日本語なんて言ってもわかるはずもない。もっとも、そう説明できればの話だけど。

あたしはたどたどしく答えた。

「言葉、外国。別の。……あたし、来た。そこから」

彼は瞠目した。ある程度は伝わったようだ。
「……外国なのはわかってる。俺は商売柄、五大陸を旅して回るからな。だが――お前がさっき使っていた言葉は、そのどこの地方でも聞くことはなかった。問題は……その国がどこにあるか、ってことなんだ」
「どこ……場所？　……き、汽車……カルマ駅……」
念仏でも唱えてるみたいな、意味不明の回答になってしまった。
でも、この男の人は、真剣な眼差しであたしを見つめ、一言も聞き漏らすまじって感じで耳を傾けている。
「カルマに乗り入れる汽車に乗ってヴィネックに来たってことか？　下りの定期便は、確かにこの前着いてはいるはずだが……あれはオサイオンからのお決まりの便だ。お前みたいな、文字どおりの異邦人が紛れ込む隙なんてあるはずがないんだがな」
彼はあたしの髪を手に取った。指の間からさらさらと頼りなげにこぼれ落ちていく。ふと、その顔が微笑んだ。
「……似てるな。この髪といい黒い目といい……なぁ。お前、名前はなんていうんだ」
名前（マナ）。この質問ははっきり聴き取れた。
「ミハル。ミハル・クゼ」
「ミハルか。やっぱり……響きもどことなく近いな」
あたしは逆に訊ねた。あたしもこの人の名前を知りたい。
「あなたは……」
彼は口を開きかけ、急に目を瞠った。
「お前、よく見るとその恰好……もしかして……」
「？」
彼は慌てているようだ。でもその理由がまったくわからない。
「ちょっと待ってくれ。……なんでお前がその服を着てるんだ？　そもそも、お前、どうして『銀鼠』なんかにいたんだ。『春の街』には近づくことさえ禁じられてるはずだろう、あの邸じゃ」
あたしは両肩をつかまれ、揺すぶられた。え？　なに？　どうし

たの？

その時、唐突に、思いがけない人が現れた。

一階西端の使用人部屋は果たしてもぬけの殻だった。心臓が早鐘を打ち始める。ジードは自らを叱咤し、パドマを呼びつけた。

即座に現れたメイド頭は、次期当主のただならぬ様子に眉を顰めた。

「どういたしましたの、ジード様。ミハルがなにか……」

ジードは唾を飲み込んでから口を開いた。口中はからからで、そうでもしなければうまく喋れそうになかったためだ。

「……そのミハルが部屋にいないんだ。荷物も消えている。……出て行ったのかもしれない」

パドマの表情が険しくなった。彼女は未明の使っていた部屋に踏み入った。彼の言うとおり、室内には未明の持ち物はなにひとつ残されていなかった。ライティングデスクの上に広げられた一揃いの筆記具だけはなぜかそのままだったが。

「まあ……あの子、どうして……なぜ黙って出て行ったりしたのかしら。私にさえなにも言わずに……」

彼女は痛ましげに顔を曇らせたが、ふと思い出したことがあったようだ。

「もしかして、記憶が戻ったんじゃありませんの？　あの子、カルマ向けの定期便に乗っていたんでしたよね。どこから来たのか、それを思い出して、帰る気になったのでは」

ジードは力なく首を横に振った。記憶喪失というのはその場しのぎの出まかせだ。未明は記憶を失っているわけではない。どこから来たのかは不明だが、おそらく帰る術（すべ）を彼女自身が知らないのだ。はっきりとそう聞いてはいない。が、それはもはや確信に変わっていた。

彼女が出て行った理由は、間違いなく、自分の行いのせいだ。だ

がそのことはさすがにパドマには言えなかった。
「どちらにしても上りの汽車はまだ三ヶ月も先だ。その間は駅舎自体、閉鎖されている。……ノーゼスに連絡を取って、彼女が来なかったかどうか確認しなくては」
その時、執事のレンドルスが近づいて来、ジードに声をかけた。
「オルグ・ジード様。ノーゼス駅舎長より、お電話が来ておりますが」
生真面目な性格の彼は、次期当主の名には必ず始祖名である「オルグ」を忘れない。ジードは弾かれたように伝令室へと駆け出した。
一階中央に位置する小部屋に飛び込むなり、彼は受話器をもぎ取った。
「私だ、ジードだ。ノーゼスか？　ミハルは……ミハルがそっちへ行かなかったか」
「ジード様！　ええ、来ましたとも、そうなんです。ついさっきのことです、あの小娘、女官服姿で鞄を抱えて、このカルマ駅のすぐ足元までやってきたんですよ」
駅舎長の口調はあの日のように逼迫していた。
「便がない限りはここが閉鎖されていることを知らなかったようで……私が声をかけると、いやに怯えた顔をしましてね、逃げ出してしまったんです。もちろんすぐに追いかけたんですが……あい申し訳ありません、なにしろこの夜闇（よやみ）なもんですから」
「見失ったのか」
「申し訳も……。妙にすばしっこくて、まるでネコかなんかみたいに。どうも繁華街の方へ逃げ込んだようなんですが」
ジードの顔から血の気が引いた。
「――繁華街、だと？　市議会公認の『春の街』か？　……そこへミハルが逃げ込んだと……そう言うのか」
恐ろしいほど低く冷たい声になっていた。次期当主の変貌ぶりにノーゼスは震え上がった。
「ももも、申し訳ありません、ジード様。八方手を尽くして探しま

すんで、とにかくですね……」

よくよく考えれば彼が謝る筋合いなどはない。だが受話器の向こうからひしひしと発せられる怒りのオーラに気圧され、ノーゼスは見えもしない相手に向かってぺこぺこと頭を下げていた。

電話はこの直後に、叩きつけるがごときいきおいで切られた。

# 第十二話　夜の出会い　4

「ファロダ！　……こんなとこにいたのね、まったく、営業妨害もいいとこだわよ」

あたしたちは同時に振り返った。そこに立っていたのは、さっきのお店で見かけたオーナーらしきお姐（ねえ）さんだ。年齢不詳系の美人で、オレンジ色のふわふわした髪と紫色の派手なシャドウ、同じく紫色の露出度の高いドレスがかなり印象的。見てるとなんだか目がチカチカしてきそうだ。

彼女はあたしに真っ直ぐ近づいてきた。

「……やっぱり、そうよね。この臙脂のドレスって、あのウェス・ハーシュ家の女官服でしょ。ねぇ、あんたどうして『春の街』なんかにいたわけ？　あそこん家って規律とか超煩（ウザ）いって聞いたけど」

そう言いながらも、あたしの全身をじろじろと眺め回している。そのうち彼女は妙に感心したような口調で付け足した。

「それほど餓鬼ってわけでもなさそうよね……年齢はいくつなの？　外国語喋ってたけどさ、どこの出身よ。よっぽど辺鄙なとこなの？　大陸共通語（イーザリア）が喋れないなんて。ひょっとして、離島からの放浪民（ツィゼット）とか？」

「そう質問責めにするな、ローニャ。こいつはどうもごく最近ヴィネックに来たばかりらしいんだ。言葉はまだ片言程度しか理解できない。どういう経緯でウェス・ハーシュ家に引き取られたのかは謎だがな」

ファロダ。それがこの男の人の名前なのか。あたしは二人の遣り取りにじっと聴き入っていた。

「ふうん……ま、いいわ。あたしには関係ない世界の話だし。それより、この子、あの邸に送ってかないと。大方、なんかのお遣いの途中で道に迷ったんじゃない。……ね、あんた、ウェス・ハーシュ

家まで送り届けてあげるから、心配しなくてもいいわよ」
彼女はそう言いながらあたしの手をつかんだ。ウェス・ハーシュと聞いてあたしは硬直した。そこから逃げてきたっていうのに、戻るなんて冗談じゃない。それに明日になれば駅も開くかもしれないのだ。あたしはやみくもに首を振り、抵抗した。
「だめ、帰る、厭。邸、出た。帰る、だめ」
「ええ？」
お姐さんは驚いたようにあたしを見つめた。それから怪訝そうにファロダさんを見上げる。
「ちょっと、どういうことなのよ。邸に帰るのが厭って……この子、もしかして家出人ってやつなの？」
ファロダさんは両手を広げてみせた。
「さぁなぁ。ま、帰るのが厭って言ってる以上、無理に連れてっても仕方ねぇだろ。そういうわけだ、ローニャ、すまんが今夜一晩はこいつをお前さんの塒（ねぐら）に泊めてやってくれないか。このまんま放っぽり出したら、夜が明ける頃にゃあ間違いなく孕（はら）み腹だぜ。そうなったら寝覚めも悪いだろ」
なにを言われたのか、彼女はなぜか顔をしかめた。あたしの今夜の身の振り方を相談してくれているような話ぶりに聞こえ、あたしはなんとなくすがるような眼差しでお姐さんを見つめていた。
彼女はしばらく黙り込んだあとで口を開いた。
「仕方ないわね。言っとくけど、ベッドはあたしが使うわよ。あんたは床、それでもいいのね」
ファロダさんは満面の笑みを浮かべ、あたしの頭を軽く撫でた。

飲み屋が林立している通りから十分ほど裏道を歩くと、石造りのアパートのような家々が姿を見せる。お姐さん――どうやらローニャさんというらしい――は、その中の一軒にあたしとファロダさんを連れて行き、ドアを開けた。鍵はかかっていないみたいだった。

「ほら、入って。寒いんだから早くね」
あたしは押し込まれるようにして室内に足を踏み入れた。中は真っ暗だ。
数日暮らしてわかったことだけど、汽車とか電話とかの一部の例外を除き、この世界では生活インフラはほとんど整っていない。当然、水道もガスも電気もない。なのでローニャさんは、部屋に入るなり、月明かりを頼りにマッチを擦ってランプに火を入れた。
八畳くらいの広さの室内が浮かび上がる。唐草模様に似た意匠の描かれた絨毯の上に、ソファ、テーブル、椅子が二客。それにキッチンや食料庫。簡素な造りの暖炉。キョロキョロとものめずらしげに部屋中を見回しているあたしの腕を彼女は引っ張った。
「こっちよ。おいで」
連れて行かれた先はどうやら寝室らしい。木のベッドに箪笥、ドレッサー、衣装箱が所狭しと置かれている。ローニャさんは枕を持ち上げ、軽く振るってからあたしを促すように見た。
「ほら、ここで寝なさい。その服は脱いだほうが良さそうね、しわになるし、第一そんな恰好で寝たら肩が凝っちまう」
彼女は噛んで含めるように言った。
「脱ぐの。服。わかる？　脱いで寝るのよ」
ジェスチャーのおかげで意図は通じた。あたしは肯いた。でも、これってローニャさんの使うはずのベッドなんじゃ？　そう思っていると彼女はさらにこう言った。
「あたしは向こうで寝るから、あんたは遠慮なくここを使いなさい。もう十刻半（午前一時）よ、子どもは寝る時間なんだからね」
彼女はなんとなく意味深な表情を浮かべている。えーと、つまり……頬がうっすら赤く染まるのがわかった。言っていることの半分も理解できなかった。けど要するに、きっとファロダさんとこのローニャさんは恋人同士なんだろう。それならなおさらベッドを占領するのは申し訳ない気がしたけど、彼女は躊躇（ためら）うあたしにはかまうことなく、さっさと部屋を出て行ってしまった。

あたしはおとなしく服を脱ぎ、ベッドに潜り込んだ。ボアのような独特の感触の分厚い毛布がとても暖かい。

……はずだったのに。

「くしゅん」

くしゃみが出た。頭が痛い。……寒い。

見る見るうちに、悪寒が全身に広がった。

ノーゼスとの電話を切るとすぐにジードは邸を出、「春の街」に向かった。この界隈には、公認とはいえ売春宿も何軒か存在している。のみならず、認められてもいない、いわゆるもぐりの店も中にはあるとのもっぱらの噂だ。そんなところにもしもミハルが迷い込みでもしたらと思っただけで、気がおかしくなりそうだった。

――名誉あるウェス・ハーシュ家の次期当主ともあろうお方が、そんな穢れた場所へ自ら赴かれるなんて。お止めなさいませ、駅舎長や警吏官に任せておけばよろしいじゃありませんか。

パドマの必死の牽制を彼は振り切った。じっとなどしてはいられない。家章のついたマントにケープという外出着姿で、片っ端から酒場のドアを叩き、ミハルらしき外国人の若い娘が来なかったかを訊ねて回る。空振りが十軒ほど続いた。それでも彼はあきらめなかった。

しかし、あらかたの店を調べ尽くしても、ミハルの行方に関する手がかりは得られなかった。ジードはいったん引き返し、駅舎近くに存在する警吏庁舎へと赴いた。通常の夜とは異なり、庁舎内はいやにざわついていた。理由はすぐにわかった。

「ごろつきどもが酒場で暴れてましてね。のびてるのも含めてしょっ引いて来たとこなんです。こんな派手なのは久方ぶりですがね」

警吏長のギズレは苦笑雑(ま)じりにそう答えた。拘置監舎では五、六名のならず者が縄につながれているらしい。ジードは手短に訊ねた。

「それよりも、外国人の若い娘を見なかったか？　十五、六歳くら

いの、華奢で可憐な娘だ。髪は黒に近いこげ茶で、瞳は黒。おそらく当家の女官服を着ているんじゃないかと思うんだが」

ギズレは首をひねった。

「若い娘？　ううん……おりませんでしたよ。ウェス・ハーシュ家の新しいメイドかなにかで？」

「ああ。事情があって預かっているんだが、誤解から邸を出て行ってしまってね。言葉が不自由なんで、おかしな場所に迷い込みでもしたら厄介だ。申し訳ないが、手を貸してもらえないか」

警吏長の顔が曇る。いかにウェス・ハーシュ家の次期当主の頼みとはいえ、たかがメイドの捜索などに人手を割くというのは、どうにもいただけない。しかし断るわけにもいかず、彼は露骨に渋りながらも了承した。

ジードは、ギズレから借り受けた三名の警吏官に、ミハルの似顔絵や特徴を書き込んだ紙を渡すと、庁舎を出た。

一方その頃、ロナジア宅では、メインルームのソファに腰掛けた女主人が、数ヶ月ぶりに再会した彼女の恋人（自称）の首にしなやかな腕を巻きつけ、キスをせがんでいるところだった。

「おい、あのなぁ、すぐ隣にはミハルが寝てるんだぞ。妙な物音がしたら起きちまうだろうが」

ファロダは呆れ気味に彼女を窘めた。しかしロナジアはあきらめない。

「いいじゃないの、物音を立てないようにすればいいのよ。……こんなに寒い夜には、人肌であったため合うのがいちばんよ。そうでしょ」

彼女はファロダの頬や耳朶（じだ）に唇を押し付け、しきりに身体をこすり付けている。

「会いたかった。……抱いてよ、お願い」

ロナジアは蠱惑（こわく）的に囁いた。こうなるとファロダも男である。退

けるわけにもいかず、なんとなくそのグラマラスな肢体に腕を回し、ソファの上に押し倒す。女の頬が歓喜に染まる。唇を合わせ、舌を絡め合わせる。

「ああ、ファロダ……好きよ、あたしの可愛い人」

彼女は切なげに眉を寄せて男を見つめた。ファロダのごつごつとした右手が、女の穿いている紫色のドレスの裾をたくし上げる。息遣いが荒くなる。

その時、ドアが乱暴に叩かれた。閂を下ろしてあるので外から侵入はできない。が、相手によっては扉ごと破られる可能性もある。それほど頑丈な造りではないのだ。ロナジアは露骨に舌打ちをした。――せっかく盛り上がってきたところだっていうのに！

彼女は不承不承起き上がり、ガウンを羽織って玄関へ向かった。覗き窓から窺うと、制服姿の若そうな警吏官が立っているのが見える。ロナジアはドアを開けずに応対した。

「なんなのよ、こんな夜中に！　迷惑だったらないわ。大した用事じゃなかったら水ぶっかけるわよ」

警吏官は咳払いをし、おもむろに口を開いた。

「訊ねたいことがある。当夜、この辺りに、外国人の若い娘が来なかったか？　或いはその姿をどこかで目にしなかったか」

ロナジアはぽかんと口を開けた。外国人の……若い娘？　それってまるで――。

「ウェス・ハーシュ家のメイド嬢とのことだ。次期当主、オルグ・ジード卿の言によると、こげ茶の髪に黒い瞳、小柄で痩身、外国語を話す可憐な娘らしい。心当たりはないかね」

彼女は思わず背後を振り返った。間違いない。ミハルのことだ。けれども、ミハルは邸に戻るのを頑なに拒否していた。なにがあったのかは知らないが、心的苦痛を抱えていることは疑いがない。ロナジアは唾を飲み込み、そ知らぬふりを装って答えた。

「……知らないわねぇ。この界隈じゃ見た覚えがないわ。どっか、もっと遠くまで行っちゃったんじゃない。それにしてもご苦労なこ

とね、お兄さん、たかが一人のメイドを捜すためにわざわざ駆り出されたってわけ、こんな夜中に」

警吏官は微苦笑した。

「なんにしろウェス・ハーシュ家が絡んでいるからな。ヴィネックの町は実質、あの一族の持ちもののようなものだ。まあいい、知らぬのならこれ以上用はない。邪魔したな」

そう言い残すと彼は踵を返した。ロナジアは全身で息を吐き出した。ソファへ戻ろうとして振り向いた途端、彼女は短い悲鳴を上げた。すぐ後ろにファロダが立っていたのだ。

「ああ驚いた、なによ、黙ってそんなとこにいるなんて」

ファロダはにこりともせず訊いた。

「いまのは警吏官か？　ミハルを捜しにきたっていうのか、こんなところまで」

「ええ、そうみたいよ。大した話よねぇ、名家っていうのはいちいちやることがオーバーだわ。この辺じゃあ失踪する人間なんてそれこそいくらでもいるっていうのにさ」

ロナジアは皮肉めいた笑みを浮かべた。ファロダはなにが引っかかるのか黙り込み、ぶつぶつと独りごとを繰り返している。

「あの世間体を重んじる説教魔のパドマが、メイド一人のことでここまでするとは考えにくいな。レンドルスにしても同様だ。……とすると仕切っているのはやはりあいつか。それにしても……」

彼はちらりと奥の間を見やった。

「あの娘、いったい何者なんだ？」

謎めいた出自もさることながら、ウェス・ハーシュ家の次期当主、オルグ・ジードにここまでさせるとは。ファロダは思案げにあごを撫でた。すっかり気が殺がれてしまったらしいロナジアの方は、ふと気になったのか寝室へ足を運んだ。じきに彼女は血相を変えて飛んできた。

「どうしよう、ねぇファロダ、あの子病気みたい。ひどい熱よ」

ファロダは眉を顰めた。

「なんだと？」

# 第十三話　ゴッドファザー、ご帰還

あたしはベッドの中でゆっくりと寝返りをうった。真夏だというのにひどく寒い。お母さんの呆れたような声が聞こえる。……ほら、そんな恰好で寝たりするからよ。もう大学生なんだから、自己管理くらいきちんとしなさい。

風邪をひいてしまったんだ。せっかく三日間のお休みをもらって帰省したっていうのに。あーあ、がっかり。これじゃ友達と海にも行けやしない。

また元気になったら行けばいいじゃないの。そんな言葉にあたしは頬を膨らませた。だって、治る頃には休みも夏も終わってるよ。休暇なんてあっという間だ。帰ったら授業とバイト三昧の日々が待っている。東京の夏はまだしばらくは怨嗟（えんさ）のように暑いだろう。

未明、おかゆ作ったから、起きて食べなさい。起きれるんでしょう。

はあい。あたしはのそのそと上体を起こした。

ぼやけた視界が少しずつ鮮明になっていく。

目の前に、まさにほんの数センチってところに、ジード様の顔があった。

唇が、触れそうになった。あたしははっきりと目を見開き、寸前で悲鳴を上げた。

「い……厭ぁぁぁっ」

我に返ったのか、彼は弾かれたように飛び退った。真っ赤になってうろたえている。ていうか、ここどこ？　なんでこの人がいるの？

顔が青ざめていく。いまのは夢だったんだ。お母さんの声がまだ耳に残っているっていうのに……こっちが現実だったんだ。

あたしは周囲を見回した。ここは元いた使用人部屋じゃない。そ

れより全然豪華で、しかもなんか見覚えが……もしかしてここって――。

「私の部屋だ」

イニ・ペルセス（マイルーム）。そうだ、この部屋は、お茶を用意しになんどか訪れた、ジード様の自室だ。

ってことは、あたし、またこのお邸に戻ってきちゃったの？　いったい、どうして……。

「気分はどうだ？　熱は多少は下がったようだが。すぐに食事を用意させよう。スープなら食べられるだろう」

「あ……え……」

そうだ。あの親切な二人、ファロダさんとローニャさんは？　どうしてあたしがここのメイドだってわかったんだろう。ここに連れてきたのも彼らなんだろうか。

考えをめぐらせていると、ノックの音が聞こえ、続いて誰かが入ってきた。

「――よう、坊主（シグノ）。お姫様の具合はどうだ」

目が点になった。低くて渋くて、ほんのちょっとだけ甘ったるい、それはあまりに聞き覚えのある声だった。

灰色の長髪。緑がかった碧眼。引き締まったあご。立て襟のきちんとした室内着をまとい、不精ひげも剃ってはいるけれど、間違いない。あたしは唖然とし、日本語でつぶやいた。

「ファ……ファロダさん？　なんでここに……その恰好、どうして……」

さらにジード様の言葉が追い討ちをかけた。

「ファロダ？　それが遊興用の仮名（かりな）ですか、父上。羽目を外されるのもほどほどにしてくださいとあれほど申し上げているのに……大体、なぜ船なんかでこそこそと帰郷なさったんです。会議が終了すれば特別便で直帰できるというのに」

あたしは完全に言葉を失くした。「ユハウ」。意味は――お父さん。誰が？　ファロダさんが？　……ジード様の？　だって、いく

らなんでも年齢が……若すぎなんじゃ？

「そうがなりたてるなって、坊主。特別便で直帰だ？　それがぞっとしねぇからわざわざ会期を切り上げて抜け出して来たんじゃねぇか。まぁ、おかげで、色々とおもしろい思いもできたしな」

ファロダさんは言うなりあたしを抱き寄せた。ジード様の額に青筋が浮かぶ。

「父上！　戯れもいい加減になさってください。ミハルは病人なんです。その手をお離しなさい」

早口のために内容はわからなかった。でも、ひどく険のある口調だ。

「お前に指図される覚えはねぇな。ミハルはパドマが預かってるメイドなんだろう？　お前のものってわけじゃなし。俺はこいつが気に入ったんだ。なにしろ新鮮だからな」

ファロダさんはなぜか挑発的に返事をした。あたしの肩を抱く腕に力がこもる。

「お前と違って俺はこいつに教えてやれることがたくさんある。……なぁ、ミハル。いっそ俺付きの専属メイドにならないか。言葉なんてわからなくていい。ただそばにいてくれりゃいいんだ――あいつみたいに」

ほとんど聴き取れなかった。どういうつもりなのか、ファロダさんは、あたしの顔に自分の顔を素早く近づけてきた。あたしは固まった。混乱のあまり身動きができない。

寸でのところで、あたしはものすごい力で引っ張られ、ジード様に抱きすくめられていた。彼は恐ろしい剣幕で怒鳴った。

「ミハルに触れるな！　これ以上は、たとえ実の父親でも赦さない」

ファロダさんは不遜な笑みを浮かべている。あたしはもう、なにがなんだか、どうしようもない状態だ。ファロダさんが本気であたしに迫るはずがない。彼にはローニャさんっていうれっきとした恋人がいるんだから。

じゃあ、いまの行為はなんなんだろう。なんのためにあんなこと

を？

「……はぁん。なるほどなぁ……こりゃあ、厄介なことだな」

彼は寝台から離れ、部屋を出て行った。ジード様は痛いくらいの力を込めてあたしを抱きしめている。……苦しい。あたしは思わずもがいた。若干、緩くはなったものの、それからしばらくの間は離してはもらえなかった。

オルグ・ジードの実父にしてウェス・ハーシュ家の現当主、オルグ・ヴィネック・シオン・ウェス・ハーシュ卿は、息子の部屋を出、自室に向かう廊下の道すがら、こう独りごちていた。

――初恋か。だが、あと一年の修道期間があることを決して忘れるなよ、坊主。

# 第十四話　求婚

いつまで経ってもジード様の腕が解かれる気配はなかった。あたしは身をよじり、片言を搾り出した。

「苦しい。離して、ください」

それでも彼は離れようとしない。なにか考え込んでいるのかもしれない。そのうち、静かに囁くのが聞こえてきた。

「離したくない。……お前が好きなんだ、ミハル」

短いセンテンスだ。でも動詞にあたる「ライア」の意味がわからない。

ただ、ひどくやさしい響きだった。

心臓が鳴った。なにを言われたのかもわからないのに。

ていうか、あたしはこの人にされたことがショックのあまり、お邸を出たんじゃなかったっけ。

使い捨てのメイド。そういう扱いをされたんだと思った。……でも、本当にそうなんだろうか。

――それになぜ、あたしはそのことがそこまでショックだったんだろう。

「この間は……すまなかった」

これはわかった。謝ってくれているんだ。不思議なほど素直にあたしはその言葉を受け入れていた。

「ただ、いきおいに流されてのことじゃない。遊びのつもりもない。……私は、心からお前を愛してる。そのことを知っておいて欲しい」

彼はあたしから離れ、寝台の脇に片膝をついた。そして真っ直ぐにあたしを見つめた。

「私はイグノディアス神と契約を交わしている。だからあと一年は貞節を守らなければならない。その間はお前に触れることはできないが……」

そこで言葉をいったん切ると息を吸い込み、さらに続けた。瞳と頬が熱を帯びていた。

「一年後にもあらためて言うつもりだが、いま告げておく。――結婚してくれ。私と」

……知らない単語だ。「マリッサ・イデス・トア」。なにかをして欲しいという構文。でもマリッサってどういう意味だっけか。

戸惑いが顔に出たらしい。ジード様は少し淋しげに微笑んだ。それからあたしの右手を取ると、まるで騎士かなにかみたいに――いや、事実、騎士なのかもしれないけど――手の甲に接吻をした。

あたしは真っ赤になった。十八年生きてきたけど、こんなことをされたのは生まれて初めてだ。

そこへノックが鳴った。

「ジード様。ミハルの食事を届けにまいりました」

少し舌足らずな喋り方。ピアだ。そう言えば、あたし、彼女にもなにも告げずに出て行っちゃったんだった。

扉が開き、脚のついた平たいお盆を持ったピアが入ってきた。寝台の上のあたしを見て、素早くウインクを飛ばしてきた。よかった。どうやら怒ってはいないみたいだ。

ジード様は立ち上がり、ピアの手からお盆を受け取ると退出を促した。ピアは興味深々にあたしを眺め、ふたたび意味ありげにウインクをしたあと澄まして出て行った。ごめん。ちゃんと彼女にも謝りにいかなきゃ。

大体、あたしどうしてこの部屋にいるんだろう。いまさらだけど、元のメイド部屋に戻るべきなんじゃないだろうか。パドマさんだって……そうだ、パドマさんにまだ会ってないんだ。あんなに親切にしてもらっておきながら、あたしって相当な忘恩の輩（やから）だ。

急いでベッドから降りようとしたあたしをジード様が制した。

「出て行く必要はない。ここにいなさい」

ここにいろ。そう言われても、戸惑うばかりだ。一介の使用人が、次期当主であるご子息の部屋で、あまつさえそのベッドまで奪って

いるのって、やっぱりヘンなんじゃ……。

「パドマなら気にしなくていい。ちゃんと話はしてある。それより、食事をしなければな」

彼は、ピアから受け取ったお盆を、あたしの前に置いた。短い脚がついているので、簡易テーブルみたいな感じだ。

「エズラ粥だ。くせは強いが精がつくし消化もいい。薬だと思って食べなさい」

深めの壺みたいなお皿の蓋を取る。中には山吹色のスープと、なにかお米みたいなものが沈んでいるのが見えた。リゾットとか、スープ粥みたいなものらしい。ただ、とんでもない薬草臭がした。

ジード様はスプーンをつかむと、一口分のお粥をすくい上げた。そしてそれをあたしの口元に運んだ。

――って、いや、自分で食べれますけど！　あたしは真っ赤になり、慌てて彼の手からスプーンを奪い取ろうともがいた。でも彼はそれを赦さない。幼子（おさなご）に聞かせるみたいな口調でこう言った。

「いいから、ほら、口を開けて。冷めてしまうぞ」

あたしは抵抗をあきらめた。もうこうなったら自棄（やけ）だ。どうせここは日本じゃない。誰にも知られるわけじゃない、と開き直ることにした。

おずおずと口を開ける。ぷん、と強い青臭さが漂う。それに薬の匂い。

……強烈な味だ。

多分、病人食なんだろう。或いは薬膳とか。東京でなら意外とうけるかもしれない。なんとか飲み込み、無理に笑ってみせた。

「ロ……ロジー」

ジード様は苦笑した。嘘だというのがばれたらしい。

「私も子どもの頃はよく食べさせられたが、厭で仕方なかった。だが効き目はあるんだ。それに、これを全部食べたら、デザートはお前の好きなゾブリッカだ」

二十分ほどかけてあたしはどうにか完食した。ゴブレットの水で

後味を流す。ジード様は、もうひとつのお皿の蓋を取った。あたしは目を輝かせた。

「ゾ、ゾ……ブリッカ。好き(フィオ)。甘い(ソモナ)」

彼の顔がほころんだ。デザート用のスプーンに持ち替え、食べさせてくれる。さっきの薬膳粥のあとだけにめちゃくちゃおいしく感じられた。

あらかた食べ終える頃、ジード様はじっとあたしの口元を見た。ソースでもついているのかもしれない。指で拭おうとするのを遮られ、囁かれた。その声はほんの少しかすれていた。

「……そのままでいろ。取ってやるから」

なぜか身動きできなかった。彼は、甘いソースにまみれたあたしの唇に、そっと舌を這わせた。

ものすごくやわらかくてやさしい、小さな生き物みたいな舌。唇や、その周辺を、時間をかけて念入りに舐め回していく。触れられた瞬間、電流が走り、それから……力が……抜けてしまう。

いつの間にか、唇の中に、口の中に舌が入り込んできていた。あたしは貪られるままに任せた。

頭の芯が霞む。

指先がしびれる。

どうしよう……ものすごく気持ちいい。

苦しげな吐息が聞こえてきた。キスはどんどん激しくなっていく。

でも、抵抗できない。

やめないで欲しい。

そんな顔を、あたしはしていたのかもしれない。どれほど時間が経ったのかわからないけれど、とにかくジード様は唇を離し、ひどく切なそうにあたしを見つめている。

「修道期間の意味がようやくわかった気がする。愛する女(ひと)と添い遂げられないつらさが、まさかこれほどとは……」

そう言うなり抱きしめられた。胸の鼓動がはっきりと伝わってきた。

多分、あたしのドキドキも、同じぐらいはっきり伝わったに違いない。

# 第十五話　父と子

ウェス・ハーシュ邸三階東端の奥まった一室が、代々の当主の部屋だ。オサイオン市での中央会議（サミット）に出席していたはずの現当主が、なんの前触れもなく真夜中に帰還した日の夜遅く、その息子、オルグ・ジードは父親の部屋を訪ねていた。

父は鷹揚に椅子に腰掛け、葉巻を燻（くゆ）らせている。稀代のヘヴィスモーカーである彼のおかげで、自分が代を継ぐ頃には壁が変色し切っているだろう。ジードはため息をついた。

刹那主義の享楽家。オルグ・ヴィネックを一言で言い表すならそういうことになる。しかし、にもかかわらず、彼はきわめて優秀な政治手腕を同時に持ち合わせてもいた。その非凡さは昔から変わらず、大学府には首席で入学し、当然のごとく首席での卒業を果たしている。またその一方で、女遊びが激しかったという矛盾した噂が流れているのも事実だ。実年齢は四十六歳だが、見た目はせいぜい三十代半ばの鰥夫（やもめ）風色男。遊興用の通り名を使い分け、邸を空けるたびに愛人の数が増える、生粋のドンファン。

実の親ながらどうにも捕らえどころのない食わせ者。正直、手を焼いている――という気持ちが否めないジードだった。

「お聞かせいただけますか。なぜ、ミハルと一緒に戻られたんです」

ジードは長椅子に腰を下ろし、手のひらを組み合わせてそう切り出した。

ファロダ――いや、ヴィネックは、気だるげに煙を吐き出し、息子をちらと見やった。

「偶然ってやつさ。『銀鼠』にあの娘が潜り込んでて、妙な連中に絡まれてた。女官服を着たいかにも擦れてない娘だ、無理もない。で、助けを呼んでたんだが、これがちょっと引っかかる奇妙な言葉（ここ）だったんでな。出自を訊ねたくてそこから連れ出したのさ。邸には

戻りたくないって言うんで、一晩知り合いの家に預けるつもりだったんだが、具合が悪くなっちまってな」

深夜十一刻半（午前三時）を回った頃、ウェス・ハーシュ邸の正門に一台の辻馬車が停まった。訪問者は誰あろう当主のオルグ・ヴィネック卿と、行方不明のメイドだ。連絡を受けたジードはすぐさま駆けつけ、パドマやレンドルスの進言も聞かず、彼女を自分の部屋へと運び入れた。未明は高熱に意識を失くしていた。医師を呼び、一晩寝ずに介護したおかげで、日が昇り切る頃にはずいぶん容態も落ち着き、彼はほっと胸を撫で下ろした。

静かに眠り続ける未明を見つめるうち、抑え切れない恋情がふたたび蘇るのをジードは自覚した。

いったいどこから来た娘なのか。なぜ恒久手形を持っていたのか。……いずれは元いた世界へ帰ってしまうのか。未明に関してはわからないことだらけだ。

だが、それでも、気持ちは一向に萎えることはなかった。彼女に初めて会ってからというもの、心の奥底では、強力な種火が絶やされることなくいまも燃え続けている。

「坊主（シグノ）。今度は俺が訊く番だ。あの娘は何者だ？　パドマは記憶喪失の放浪民（ツィゼット）とか言ってたが。お前がわざわざ引き取ったってことは、なにかがあるんだろう」

ヴィネックの目が鋭く光る。ジードは彼の眼差しを正面から受けた。

「坊主はやめてください。……ミハルは、十日ほど前、カルマ着の下りの定期便に乗ってこのヴィネックに来たんです。『天上の切符（イグノード）』を持って」

「……なんだと？」

当主の顔色が変わった。

「確かです。この目で確認しましたから。――彼女は、私がこれまで見たこともないような風変わりな恰好をしていました。そして聞いたこともない言葉を喋る。詳細を訊き出すには時間が必要です。

彼女は勉強熱心だ。じきに大陸共通語（イーザリア）も覚えるだろうし、そうなればどこから来たのかも話してくれるでしょう」

ヴィネックは黙り込み、あごを撫でた。その仕草は彼の息子によく似ていた。

「――坊主。お前、わかってるんだろうな。修道期間はまだ一年残ってるんだぞ。ミハルがそばにいても、自分を抑えられる自信がお前にあるのか」

「ええ。あります」

ジードは即答した。

一年だ。一年耐え抜けば、晴れて彼女を妻として迎えられる。年四回の休暇期間以外は大学府に戻らねばならないが、せめてこの邸にいる間は片時も自分のそばから離さないつもりだ。いずれ言葉を解するようになれば、もっときちんと気持ちを伝えることもできる。

ヴィネックは苦笑した。……恋に狂ってる男の顔だな。まるでかつての自分のように。

――父子の業とはかくも恐ろしいものか。皮肉な思いがその胸のうちを過ぎった。

# 第十六話　フラレた？

目が覚めた時に気づいたことだけど、あたしは、それまで着ていたメイド服じゃなく、なんだかすごく高級そうな寝巻きを着せられていた。金糸の刺繍の施された前開きのぞろっとしたデザインで、極上の絹タフタっぽい手触り。……正直言ってこういう服、着慣れない。

寝台の隅っこに正座して待っていると、ようやくジード様が部屋に戻ってきた。彼は顔をほころばせて近寄ってきた。

「起きていてくれたのか、ミハル。嬉しいが……具合はどうだ？もうすっかりいいのか」

ごく自然に抱きしめられ、あたしは慌てた。必死で語彙を掻き集めた。

「あの、あたし、ここ、出る。部屋、以前の。戻る」

彼は即座に身体を離し、険しい表情であたしを見た。

「……なにを言い出すんだ。戻る必要などはない。お前の部屋はここだ」

いや、だって、この部屋ってジード様の個室でしょ。ていうか、いくらキングサイズのベッドって言ったって、さすがに同じ布団ってのはちょっと、まずいんじゃ。

同衾（どうきん）。あたしの頭の中を、そんな古風な言葉が通り過ぎる。

「だめ。寝台、一緒、だめ。よくない、です。別々の部屋、正しい、です」

なんとか伝わったらしい。けど、彼はものすごく複雑そうな顔になった。

「……その拒否の理由はなんだ？　パドマか？　イグノディアス神との契約のことは、まだ理解できているとは思えないし……分別ある娘としての羞恥心なのか？　……それとも……」

ジード様は真剣な瞳であたしを見つめ、両肩をつかんだ。

「――私のことは受け入れられない、と言いたいのか、ミハル。だから同じ寝台で寝るのは厭だと、そういうことなのか」
長いセンテンスはまだ無理だ。あたしはとりあえず曖昧に肯いた。とにかく、この同じ部屋で暮らすのはまずいと、それだけわかってもらえれば。
彼はなぜか、ひどくショックを受けたような、愕然とした表情になった。あたしの肩からその両手がゆっくりと離れる。……あたし、そんなにおかしなこと言った？
ひょっとしてさっき、リアクションを間違えたんだろうか。

「ミハル！　元気になったんだ、よかったぁ」
厨房へ赴くなり、あたしはピアに抱きつかれた。妹の榛名（はるな）を思い出し、ちょっと瞼の裏が熱くなった。
「ピア、ごめんなさい。出てった、黙って」
ようやく言えた。ピアは笑って首を横に振った。
「いいよ、もう。そりゃ心配したけど。……ねぇ、それより、どういうこと？　ジード様のお部屋に担ぎ込まれるなんてさ。それに、ジード様、超テンパってミハルのこと捜し回ってたんだよ。『春の街』にまで自分で出かけるんだもん、びっくりだよ。女官長やレンドルスさん、次期当主がそんなことまでする必要ないって止めたんだけど、それも全然無視っちゃって」
その時、タイミングよくパドマさんが入ってきた。あたしはあらためて頭を下げた。
「すみません。迷惑、かけた。ごめんなさい」
彼女はしばらくの間、あたしを軽く睨んでいたけど、すぐに微笑を浮かべてくれた。それからあたしの両手を取った。
「ミハル、お願いだから、黙って出て行ったりはしないでちょうだい。あなたにもきっと色々事情があるんでしょう。でも、みんなとても心配していたのよ。もしもここを出て行きたいのなら、せめて

私にはちゃんと説明してからにしてちょうだいね」
そう言うとパドマさんはあたしを抱き寄せた。ごめんなさい。あたしは胸の中でもう一度、謝った。
お母さんや榛名も、同じようにあたしのことを心配しているかもしれない、と思いながら。

# 第十七話　オルグ・ジードの煩悶

秋季休暇が終わり、季節は本格的な冬季へと移り変わった。大学府（エコルガルト）の広大な敷地に、各大陸へ帰省していた学生たちが、三々五々集まってくる。――最終学年の始まりだ。

期の初日には、お決まりの定期面談が控えている。すなわち、イグノディアスとの契約を遵守したか、背いたか。講堂へ向かう途中、ジードは偶然同級のホルツェン、それにレミットと出くわした。

「よぉ、ジード。お前もいよいよ今日が年貢の納め時ってやつか」

いつものように軽口を叩くホルツェンだったが、級友の表情はあきらかに冴えない。彼は怪訝そうにジードの顔を覗き込んだ。

「おい、どうした？　なんだその不景気な面（ツラ）は。例のメイドはどうなったんだよ」

「……別にどうもしやしないさ」

異様にテンションが低い。さては振られたか、とホルツェンは口元を押さえた。しかし、傍（はた）で二人のやり取りを聞いていたレミットは、好奇心丸出しで突っ込んでくる。

「なんだよ、例のメイドって。もしかしてジード、秋季休暇の間に筆下ろししちまったのか？　ウェス・ハーシュ家の次期当主様が？」

否定する気力もないらしい。ジードは深いため息をつくと、一人講堂へと歩き出した。レミットは目を丸くしてその後ろ姿を見送っている。

「一体全体どうしちゃったんだよ、ジードは。ぼくらの学年じゃ一、二を争う優等生だっていうのに。あんな意気消沈した姿、入学してから初めて見たよ」

ホルツェンは頭を掻いた。レミット・ウォーザロワ・キッファンは五大陸中の北端に位置する農業都市コーロンナの地主の息子で、いたって気はいいのだが、おおらか過ぎてデリカシーに欠けるところがある。空気読めよ、といった感じか。

「……意外にも難攻不落の相手だったか。あのウェス・ハーシュ家の跡取り息子に迫られて落ちねぇんじゃな」

それとも、迫り方を間違えたのか。あり得る話だ。なかば楽しみながらぶつぶつと独りごちるホルツェンだった。

定期面談は、講堂最上階の学府長室で行われる。ジードは艶のあるフォモック材［注 - オークに似た家具向けの木材］でできた重厚な扉を力なく叩いた。

「お入り」

すぐに応答があった。奇妙に甲高く、性別すらも判別しがたいワンジオ翁の声だ。

「失礼します」

入室し、一礼してから椅子に掛ける。窓から差し込む朝日が眩しく、傷心のジードにはやや沁みた。

侏儒（しゅじゅ）を思わせるほど小柄なワンジオ翁は、その空洞のような真っ黒の眼（まなこ）に慈悲の色を湛えて、名門中の名門、ウェス・ハーシュ家の次期当主を見つめた。……なにがあったのやら、ずいぶんと落ち込んでいる。彼らしくもないことだ。

「しっかりと禁を守ったようだね。しかし……いっそ破ってしまえばよかったとも思っている。違うかね」

ジードの頬が赤らんだ。

「――いえ。惑（まど）ってはいません。私は、少なくとも在学中は、女神イグノディアスにのみ忠誠を捧げる覚悟でおりますから」

彼はそれでも言い切った。名門の長子として、どういう理由があろうと大学府を退学になるわけにはいかない。あの遊び人の父でさえ守り通した禁忌だ。

「さて……しかし、それにしても……ひどく変わった気配がするのだがね、オルグ・ジード。君の周囲に、なにか変化でもあったのかね？　この休暇のうちに」

ワンジオ翁はそう言ってじっとこの優秀な学生を見つめた。彼の表情が微妙に変わる。知らぬ間に口を開いていた。

「……とても不思議な娘なんです。どこから来たのか……言葉も通じない。見たこともない服を着て、聞いたこともない……小鳥の囀りのような声で……戸惑ったような黒い瞳で、私を……」

激情に我を失くし、彼女の身体に触れた時のことを思い出す。初めての感触。やわらかな唇。甘い香り。艶やかな髪。

……もう一度、触れたい。

「――忘れられないんです」

ジードは顔を覆った。

同じベッドで眠ることを拒否された時、足元がぐらつくほどの衝撃を覚えた。上ずったように問いただした。自分の気持ちが受け入れられないためなのか、と。

彼女は肯いた。

どこか申し訳なさそうに肯いたのだ。

呆然とする自分を置き去りに、彼女は出て行った。そして元の使用人部屋に戻り、女官服を着、メイドとして働いている。おそらくはいまも。

秋季休暇はそれから一週間ほどで明けた。ジードは未明とはろくに話もしないまま邸を出た。これ以上拒絶されるのが怖かったのだ。

だが、これから三ヶ月の間は帰省は一切禁じられている。次の休暇は春だ。春が来るまでは未明には会えない。

なにがあろうと会うことはできない。

こんなに会いたいのに。

ワンジオ翁はなにも言わなかった。ただ黙って、ジードの気が落ち着くのを待った。

窓の外では、いつしか初雪が舞い始めていた。

## ◆閑話 - 告解室の秘密・前篇 - （前書き）

大学府の「掟」をめぐる、おバカな騒動を描いた小編です。
ちょっとイ●臭いかもしれま（ｒｙ

## ◆閑話‐告解室の秘密・前篇‐

ロマド市はキニッサ地方の最南部に建つ、由緒ある最高教育学府。それがここ、大学府（エコルガルト）である。

創立以来数百年の歴史を持ち、入学審査は厳正をきわめ、卒業生は皆、出身地での要職に就くことが慣例的に定まっている。連邦においてはエリートの巣窟であり、その名声は学生個人のみならず、上流社会での親の立場までを左右する。だから、そこそこの地位や財力を持つ家庭であれば、どうにかしておのれの子どもを――実際の出来不出来には関わらず――潜り込ませたいと願っており、また、実現させるために奮闘努力を欠かさない。

しかし、この最高学府には、十九歳から二十三歳という健やかなる年頃の青少年たちを預かり、その青春の大半の時期を過ごさせるにはあまりにきびしい掟が存在した。

破れば即、退学。そう、それは文字どおり、鉄の戒律だったのである。

「告解室？　ああ――あれだろ、礼拝堂の地下にあるっていう懺悔部屋。それがどうかしたのか」

大きく伸びをしたあと、ホルツェンは気だるげに答えた。ここは慰安室（レクリエーションルーム）。昼食後の空き時間を持て余した生徒たちが、いつものように数名ずつのグループを形作りながら、それぞれのテーブルに陣取っている。

反応の薄い友人を前に、レミットは声をひそめて続けた。

「……幽霊が出るらしいんだ。それも女の。知ってた？　ホルツェ

ン」
　穏やかならぬ単語にも、ホルツェンの表情は変わらない。彼は呆れたように鼻を鳴らしてみせた。
「古い噂話だろ。そんなもん本気にしてんのか、お前。餓鬼だよなぁやっぱ」
　レミットの頬が、というより首から全域が真っ赤に染まる。
「ち、違うよっ！　別にぼくは怖がってるわけじゃなくて、ただ、知ってるかどうか訊いただけで――」
「怖がってるとまでは言ってねぇけどな。……はぁん、そうか……お前確か来月、教義学の集中追試を受けるんだったっけな。あれには五日間の個人礼拝がつきものだから、それでびびってんのか。なにしろ礼拝堂を避けては通れないもんな」
　図星を言い当てられたレミットの瞳がみるみる潤み出す。わかりやす過ぎるその反応に、ホルツェンは噴き出し、その隣に座っていたもう一人の友人、ジードは眉を曇らせた。
「ホルツェン、そのくらいにしておけ。教義学は疎かにできる単位じゃない。こんな時にレミットの気を逆撫ですることはないだろう」
　神学は、ここ大学府においては、武学と並んでもっとも重視される学科のひとつである。中でも聖典論学、歴史神学、神的倫理学、それに教義学は、卒府するにあたって単位取得が絶対条件となる。なにがあっても落とすわけにはいかないのだ。ジードの助け舟に、レミットは弱弱しく本音を漏らした。
「……そうだよ。落としたらどうなると思う？　その瞬間に大学府追放なんだよ。うちの親、帰るたびにぼくに言うんだ。ぼくはキッファン家の出世頭だって……元々農夫の家系だから、ぼくが大学府にたまたま潜り込めたこと、めっちゃくちゃ喜んでてさ。これで卒府できないなんてことになったら……本気で首、くくりかねないよ」
　涙声でつぶやく級友の姿に、さすがのホルツェンも口を噤む。が、ふたたび開こうとしたその機先を、一瞬早くジードが制した。
「大丈夫だ。要は、告解室の噂が嘘だと証明できればいいんだろう。

レミット、お前はなにも不安がることはない。気にせず試験勉強に励むんだ、いいな」

レミットの顔が輝いた。が、対照的にホルツェンの表情は訝しげだ。

「おい、ジード。お前まさか……」

「その噂なら私も以前から気になっていた。女人禁制のはずのこの大学府構内に女性というのは、たとえ幽霊だとしても好ましくない話だ。現にこうやって、学生の気を乱す存在になっているわけだからな。――いい機会だ」

「いい機会って……調査しようってのか？　告解室に乗り込んでか」

ジードは無言で肯いた。友情はもちろん、学府長の信頼も篤い首席としての責任感。将来の国政を預かるリーダー候補としての自負。そういった感情が彼を動かしていることに、親友を自認するホルツェンはすぐに気づいた。彼は仕方なさそうに肩をすくめ、こうつぶやいた。

「……止めといた方がいいと思うけどなぁ」

そのせりふをかき消すかのように、予鈴が鳴った。

第四教義棟の一室に、変わらぬ厳格な声が響き渡る。

「いいか、諸君。聖典釈義というのは、諸君らが考えるほど単純なものではない。本来なら、そもそも四年かそこらで修められるような底の浅い学問ではないんだ。その辺をどうも諸君らは勘違いしているとしか思えんな。たとえば――」

狙い済ましたチョークの一閃が、空中に白い弧を描く。

「聞いているのか、グラッド・ロワナ・ギルシュ・アシュレン！　いい加減に目を覚ましたまえ！」

教室のちょうど真ん中に座る巨体の学生、グラッドは、前頭葉の辺りに思わぬ一撃を喰らい、あたふたと飛び上がった。やや遅れて

目の前の人影に気づき、慌てて直立不動する。
「はっ、あ、あの……ら、ライフェット教授、えっと……ですから……」
「ずいぶんよく眠っていたようだが、私の講義はそんなに耳ざわりが良かったかね、うん？」
山吹色のフードの奥に隠された琥珀の瞳が、妖しく光った。グラッドの全身が総毛立つ。
「――追試だ。君の答案は見るに耐えない。わかっているだろうが、来月の試験をひとつでも落としたら、その瞬間大学府での君の席はなくなるぞ。心して挑むんだな」
氷のように低く冷たい声が、教室中に響き渡った。グラッドはへなへなとその場に座り込んだ。じきに周囲の学生たちから、同情とも揶揄ともつかないお喋りが漏れ聞こえてきた。
「……ばかだな、グラッドのやつ。よりにもよってあの『鉄の軍曹』の講義で居眠りするなんてなぁ」
「あれが大学府唯一の女教師だっていうのは、絶対、ワンジオ翁の陰謀だな。仮初めにも生徒と間違いを起こさないようにってさ。……念の入れ過ぎだろ」
彼らは感じ入ったように肯き合った。
――ジャーミナ・メルク・ライフェット。神学担当の教諭である彼女は、巫女の家系に生まれ、本人もその資格を持っており、その素質と知力を買われて大学府の教授の職に就いた、異色の存在として知られている。常に全身をローブに包んでいるため、素顔を見た者は学府長を除いて誰もいない。年齢も不詳。威圧感あふれるその講義スタイルから、ついた渾名は「鉄の軍曹」。同僚たちでさえ、彼女にはうっかり軽口も叩けない、孤高の女教授である。
そんな彼女の講義で「粗相」をしてしまったグラッドの心中はいかばかりか――授業が終るなり、彼はものも言わずに寮の自室へと引っ込んだ。相方の学生はまだ戻る気配はない。教科書とノートを引っ張り出し、意気込み荒く自習を始めたものの、やがて、だんだ

んと気が散り始めた。その瞼の裏に、先日の秋季休暇の折、帰省した際に見た、地元の愛らしい娘たちの姿が浮かんでは消える。誇らしく盛り上がった胸元、くびれた腰、彼を誘うように蠢くつややかな唇。……グラッドは教科書を放り出した。悩ましい妄想に脳が支配され、どうにも集中できないのだ。

彼は椅子を蹴立てて立ち上がると、トイレへ駆け込んだ。ようやく「満足」して外へ出た途端、部屋に戻っていたらしい相方と鉢合わせし、あからさまにうろたえる。

「お前なぁ……長過ぎだよ。いつも言ってるけど、臭いが濃いんだよっ！　同室の俺の身にもなってみろよな、まったく」

ルームメイトである友人、ハリドランは、声を荒げてグラッドを睨みつけた。グラッドは決まり悪げに目を背ける。

「仕方ないだろ、体質なんだから。俺だって、好きでこんなこと……ただ、いまだけは、気が散って勉強にならないからさ……」

その言葉を聞いた瞬間、ハリドランは意味深な笑みを浮かべた。そんな必要もないのに声を落とし、友人の耳を軽く引っ張る。

「――いいこと教えてやるよ。お前も聞いたことあるだろ？　例の、告解室の幽霊の噂」

脈絡のない話に、グラッドは眉を寄せた。

「女の幽霊が出るってやつだろ。それがどうしたんだよ」

「ただの幽霊じゃないらしいぜ。……一晩、あそこで懺悔すると、夜明け前にすげぇ美女の幽霊が現れて、相手してくれるんだってさ。もちろん幽霊相手だから、規則を破ったことにはならない。どうだ？　そそられる話だろ」

グラッドは瞠目した。そこまでの詳細など聞いたのは初耳だ。

「ま、噂だけどな。俺だって実際には試したことはないし……」

「ハリドラン！　そ、それ、本当なのか!?　ほんとに美女の幽霊が出るんだろうな」

興奮のあまり、グラッドは友人の胸座をつかみ、その身体ごと壁に押しつけていた。目を白黒させつつ、ハリドランは必死で首を上

下させた。
「ほ、ほんとだって！　少なくとも噂では――」
「一晩でいいんだなっ！？」
彼は絶叫した。この際、幽霊でもいい。妄想でない相手と姦れるかもしれない――それもとびきりの美女と。あまりに甘美なイメージに突き動かされ、グラッドはそのまま部屋を飛び出した。

夢見心地で礼拝堂へと向かったグラッドだったが、その足取りはすぐに弱まってしまった。
「なんで……なんで、こんな時に……」
彼は恨めしげに唇を噛んだ。「鉄の軍曹」ことライフェット教授が礼拝堂入り口の扉を開けてその中へと入っていくところを、目撃してしまったのである。神学科担当の彼女がここに赴くことそれ自体は不自然でもなんでもないが、しかし、こうなってはさすがのグラッドも二の足を踏まざるを得ない。なにしろ目的地である告解室は、礼拝堂の地下。教授に会わずに忍び込むのはまず、不可能だろう。
グラッドは深いため息を漏らすと、すごすごと踵を返した。そうして彼の姿が見えなくなった頃、第二学生寮からやってきた別の学生が、入れ替わるように礼拝堂の前に立った。
すらりと均整の取れた長身。風になびく灰色の髪。血統の証明とも言える、美しい緑碧の双眸。
宣言どおり噂の解明に自ら乗り出した、オルグ・ジードだった。

## ◆閑話 - 告解室の秘密・後篇 -

一晩、告解室で懺悔すると、夜明け前に女の幽霊が現れる。
「だから、なんにもないってことを証明するのなんて逆に簡単だ。告解室に独りで籠りゃあいいんだ。寝ずに懺悔し続けて朝を迎えちまえば、噂が嘘っぱちだったってわかるだろ」
ホルツェンは、なぜか浮かない顔つきでジードに策を預けた。
「でもな、無理だと思ったらとっとと眠っちまえ。どうせ噂なんだ、真相なんて知らない方が……あ、いや、くだらないオチに決まってるからな」
「それはそうだろうが、なら余計に眠るわけにはいかないだろう。心配はありがたいが、そう案じなくても大丈夫だ。……じゃあ、行ってくる」
寮の部屋を出るジードの後ろ姿を、ホルツェンはどこか渋い表情で見つめている。昼間と同じく、彼はぼそりと独りごちた。
「……仕方ねぇな。あんまり気が進まねぇけど、ほかならぬジードのためだ」
ぼりぼりと頭を掻いてから、あくまでジードには気づかれないよう、ホルツェンはそのあとを追った。

礼拝堂の重々しい観音扉を両手で開き、入り口から続く薄暗い石段を下っていく。地上よりも空気が冷え冷えとしていて、訪れる者を厭でも厳粛な心持にさせる。が、ジードの歩みに迷いはない。真っ直ぐに前を見据え、速くも遅くもない歩調で黙々と歩き、やがて現れた焦げ茶色の小部屋の前で彼は止まった。外壁の中央には世界

樹のエンボス。その両脇の一部には色つきガラスが填め込まれ、また一部には格子彫りが施されてはいるものの、決して豪奢な造りではない。そう――大きさとしては、人が二人も入ればいっぱいになってしまいそうな、ごく小さな空間である。

――ここが告解室。イグノディアスへの忠心を、そして自身が抱える罪を告白するための場所だ。

ノブに手をかけ、室内に入る。ふわり、と独特な香の残り香が鼻をついた。ジードは思わず眉根を寄せた。……この香りはいったい……以前、なんどかここを訪れた時には気づかなかったが……？

訝しく思いつつも、彼は椅子に腰を下ろした。前には簡素なテーブルが置かれている。もっともこれは、告解をする者が背を丸め肘をつくための補助具のようなものだ。ジードは定められたそのポーズを取った。そうするうち、意識せずとも、人はなにかしら内省的な気分になってくるものである。ジードも例外ではなかった。

――同じ寝台で眠るのを拒むのは、私のことを受け入れられないからなのか。

整った眉が苦しげに歪んだ。秋季休暇を終えて大学府に戻る前、屋敷で起きたあの出来事をふと思い起こしたせいだ。

未明。あの日、どこからともなく現れた、不思議な娘。出自も知れないあの少女に、彼は、生涯初めてといっていいほどの強い思慕を覚えた。

心からの愛を告げ、受け入れてくれるよう迫った。だが――彼女は、どこか申し訳なさそうに、ジードを退けた。

あまりの衝撃に言葉を失くし、立ち直ることもできないまま、屋敷をあとにしたのだった。

それなのに、だというのに、いまだに忘れられない。恋しい。会いたい。胸の内で荒れ狂う恋慕の炎。（ほむら）折に触れ蘇る、愛らしい微笑。

小鳥の囀り（さえずり）にも似た、歌うような声。ジードは固めた拳を額につけた。……もし、こうして祈ることで、イグノディアスが自分の望みを叶えてくれるとしたら。そんな奇蹟が起こるのなら、一晩寝ずに祈り続けることなどあまりに容易い代償だ。

未明に……彼女に触れたい。心が手に入らないのなら、せめて、身体だけでも――そんな不埒なことまで思い巡らせている自分を、こうなっては認めざるを得なかった。

時間は刻々と過ぎてゆく。ジードは一心不乱に祈った。未明が欲しい。彼女が自分に振り向いてくれるのなら、なんだってする。夜は深まり、いつしか日付も変わっていた。だが彼は睡魔すら感じず、ただひたすらに両目を瞑り、未明への愛を胸の中で囁き続けた。

香の匂いが、一段と濃くなったようだった。まるで異国を思わせるような、濃密で官能的な――やがて夜明けも近づく頃、かすかに衣擦れの音がした。ジードはふと顔を上げた。

白い人影が、目の前に揺らめいていた。

彼は弾かれたように立ち上がった。まさか、本当に出るとは……。唾を呑み込み、瞬きを数度繰り返す。だが人影は消える気配がない。とすると、これが、噂の幽霊の正体か。しかし――確かに人の形はしているものの、その顔まではわからない。そうだ、男か女かもこれでは不明だ。ジードは意を決し、キッと前方を睨みつけた。

今度こそ、彼は驚愕せずにはいられなかった。

「ミ……ミハル……？」

渇き切った声が咽喉元から漏れた。目を凝らしたその先に揺らいでいるのは、白い靄に包まれた小柄な少女の姿――焦げ茶混じりの長い黒髪、小さな顔、少しだけ含羞んだような表情、そして、夜空を映し込んだあの輝く瞳。薄紅色の瑞々しい唇が、かすかに震えた。

……ジード……オルグ・ジードなの？　どうして……あなたがこんなところに……。

「幽霊」はひどく困惑した様子だった。生霊の類にしては妙に現実味のある口調でもあった。

だがジードの思考はそこで停止した。

「ミハル……っ！」

彼はテーブルを蹴倒し、未明（らしき像）へと飛びかかった。奇蹟が起きたに違いない。自分の抱く恋心を哀れと思し召したイグノディアスが、情け深くも想い人を、未明をここに呼び出してくれたのだ。そう、これは幻でもなんでもない。なぜなら――「幽霊」にはまごうことなき肉体があった。両腕の中にしっかりと抱きしめることができたのだから。

「ミハル、ミハル！　愛してる、私の……私の小鳥！　もう離さない、離すものか！」

狂ったようにその細腰を掻き抱き、顔中にキスの雨を降らす。この時、意識の奥底に、若干の違和感が生まれた。急に身長が伸びたのだろうか？　それに……なんというか、感触が違う。細いながらもほどよく丸みを帯びた未明の身体にしては、どこか肉づきが悪いというのか――ジードの耳に、焦ったような悲鳴が飛び込んだ。

「ちょ、ちょっと、オルグ・ジード！　離せ、離しなさいっ！」

それは明らかに未明の声色ではなかった。しかし女の声には違いない。それもはっきりと聞き覚えのある――。突き飛ばされるまま、ジードは数歩後退し、よろけた。体勢を立て直そうとした彼の目が、これ以上ないほど大きく見開かれた。

「あ……あなたは……」

相手が軽く舌打ちをするのが聞こえた。見きわめたその正体を、

名前を叫ぼうとしたまさにその瞬間、それまでとは比べものにもならないほど強烈な香が――というより煙が小部屋を襲った。咄嗟に口元を押さえたものの、すでに遅かった。ジードは呆気なく眠りに落ちた。と同時に、山吹色のローブをまとった人物が、あたふたと扉を押し開け、外に飛び出してきた。見事なハニーブロンドが揺れ、彫像のように整った美しい横顔をふわりとかすめる。やがて辺りは完全な静寂に包まれた。

「幽霊」の足音も遠ざかる頃、物陰に身を潜めていた大柄な青年が、ゆっくりと頭をもたげてため息をついた。

「……やれやれ。だから止めとけって言ったんだ」

それはジードの親友、ホルツェンだった。彼の手の中には、鈍色の輝きを放つ小さな香炉が握られている。どうせこんな顛末だろうと予想して部屋から持ち出した「秘密兵器」――秋季休暇でロマドの歓楽街を訪れた際、妙に派手ななりをした女占い師から面白半分に購入した催眠香である。まさかこんな使い方をすることになるとは思いもしなかったが。

「ライフェット女史が使ったのは、催眠香じゃあなく、催淫香ってやつなんだろうけどな。まったく……ワンジオ翁もほんと、人が悪いぜ」

あの茶目っ気旺盛な学府長のことだ。「鉄の軍曹」が学生相手に夜な夜なにをしているか、感づいていないわけはあるまい。知っていて、わざと見過ごしているに違いない。まさか、そういった「仕事」を任せるために、彼女を教職に就けたとまでは思わないが……。

「にしても……なんだってフードで隠したりするんだろうな。あれだけの美貌の持ち主が」

首をひねりつつ、床に崩れ落ちたままの親友の腕を持ち上げ、肩にひょいと担ぐ。彼は思わず苦笑した。

「あの『鉄の軍曹』もドン引きするとはな。お前の恋心ってやつはまったく凄ぇよ。ジード」

教授棟の一隅に設えられた神学資料室。デスクに構え、学生たちのレポートを添削していたジャーミナは、唐突なノックの音にふと顔を上げた。

「入りたまえ」

現れたのは、最終学年に属する大柄な青年、ホルツェン・オルレアド・シモン・ライゾックだった。勉学への専心ぶりはいまひとつではあるものの、頭脳は明晰で機転も働く。ジャーミナをして好印象を抱かせる、数少ない学生の一人である。

「失礼します」

入室と同時に彼は頭を下げた。ジャーミナはペンを走らせながら、事務的に訊ねた。

「なにか質問でも？　ああ、君は追試の心配はないぞ。ギリギリだったが、いつもどおり見事なものだ」

その口調には若干の皮肉が混ざっていた。要領よく手を抜いているのはわかっている。「鉄の軍曹」の牽制を、ホルツェンは苦笑いとともに受け流した。

「恐縮です、教授。――実はお教え願いたいことがあるんですが、よろしいでしょうか」

「言ってみたまえ」

「なぜいつも顔を隠しておられるんです？　素顔を見られると、『課外活動』に差し障るとか？」

「――」

ジャーミナの手が止まった。ホルツェンはなに喰わぬ顔で続ける。

「ついでに言うなら、男子学生というのは皆、美人に――それも年上の美女に弱いものです。フードを取られてはどうです？　その方が講義も進めやすいのでは」

ジャーミナはゆっくりと立ち上がった。衣擦れの音をさせながら

ホルツェンに近づき、そのあごをぐいとつかむ。息詰るような沈黙のあと、不意に、彼女は笑みを漏らした。

「……なるほどね。あなただったの、昨日の助っ人は」

がらりと声色が変わった。ジャーミナはさばさばとフードを脱いだ。日の光の下に晒されたその素顔は、昨夜より数段も華やかな美しさをまとっている。髪とよく似た色合いの琥珀の瞳が、親しげにホルツェンを見つめた。

「この香り……強い催眠効果をもたらすバドゥーアの粉末ね。あなた、もしかして、ロマドの……ロナジアの店に？」

「さぁ。店主の名前までは知りませんが……それより教授。なぜあんなことを？　まさかとは思いますが、大学府側の……ワンジオ翁の指図だということは……」

ジャーミナはぷっと噴き出した。そのさまをまじまじと眺め、ホルツェンは胸中で独りごちる。――思ったより若い。三十にもいってないんじゃないか？　間違いなく大学府最年少の教授なんだろうな。

「身の上相談のつもりだったのよ、最初は」

彼女はどこか決まり悪そうに「告白」を始めた。教授の職に就いたばかりの頃、告解室に姿を見せるのは、肉欲の悩みを抱えた学生がほとんどで――躊躇はあったものの、彼女は大いなる義務感から、生徒たちに尽くそうと決めた。ロマドで雑貨屋を営む古い付き合いの女友達から、一晩で記憶と効果の消える催淫剤を譲ってもらった。だがどこからか噂は広まり、歪んだ形で喧伝されていったのである。ホルツェンはそこで口を挟んだ。

「しかし……なら、なんで普段、そのキャラを隠してるんです？　学生（おれ）たちがあなたを陰でなんて呼んでるかご存知ですか？　鉄の――」

「鉄の軍曹、でしょ？　もちろん知ってるわよ。名誉だとも思ってるわ。うちは代々巫女の家系だけど、父は男子が欲しかったらしくて、私が男だったらって子どもの頃散々言われたもの。女は姉が三

人もいるしね。だから勉強して認められて、こうして大学府に教師として招かれたことを誰よりも喜んでくれたし」

「……」

「それに、素顔を見せたらあなたたち、講義には集中できないでしょう？　これだけの美人が目の前にいたら、ね」

ジャーミナは悪戯っぽく笑ってみせた。ホルツェンもつい、つられて微笑する。

「なるほど。……確かにそうかもしれませんね。俺らくらいの年代の男なんて、バカばっかりですから。たとえ大学府（ここ）に通っていようとね」

そう言うと、ホルツェンは一礼し、辞去しようとして思い止まった。

「ああ、教授。もうひとつ教えていただきたいんですが……」

ジャーミナはきょとんとして睫を瞬かせた。

「尽くす、っていうのは、つまり――手で？　口で？　……それとも……」

言い終える前に、軽やかな笑い声が湧き起こり、部屋中を満たした。目に涙を浮かべながら、ジャーミナはホルツェンの耳元に唇を寄せ、そっと囁いた。

「今度、告解室にいらっしゃい。その時に教えてあげる」

「……サービスしていただけるのなら」

二人は顔を見合わせ、どちらからともなくウインクを交わした。ホルツェンが部屋を出て行ったあと、ジャーミナはデスクに戻ったものの、その視線はどこか落ち着かなく空を彷徨っている。思わぬ隙を突かれたせいで、昨夜のあの体験をまざまざと思い出してしまったのだ。

オルグ・ジード――第四学年の首席生徒にして、ウェス・ハーシュ家次期当主。その彼が、まさか告解室を……自分のもとを訪れるとは。ほかの学生たちと同じように、慰めを欲しての行為とは彼に

限っては思えないが……。

ロナジアが調香してくれた催淫剤は、吸い込んだ者に、ある種の幻覚を見せる働きをする。すなわち、胸の底に秘めた想い人の姿を幻視させるのである。そういう相手がいないのなら、自分の素顔が映るだけだ。むろんそんな場合に備えて、記憶を消す作用のある香を追加しているのだが。ジャーミナはぽつりとつぶやいた。

「ミハル、か……あのオルグ・ジードがあそこまで乱れるなんて。いったいどんな子なのかしら」

もしもホルツェンが機転を利かせて外から香を吹きつけてくれなかったら、どうなっていただろう。埒もない想像に、彼女は苦笑した。そしてなにごともなかったかのように口元を引き結び、フードをかぶり直すと添削を再開した。

# 第十八話　もう一人の異邦人

昨夜からの寒気（かんき）が、大陸全体に雪雲を呼び込んだらしい。ウェス・ハーシュ邸の大広間では、二匹の小妖精たち――双子のユ・テラとユ・ゼルが歓声を上げて跳ね回っていた。

「雪だ、雪だよ、テラ」

「ほんとだ、雪だね、ゼル」

二人は廊下へと駆け出した。興奮している子どもは前方など見ないもので、火熨斗（アイロン）を当てるなどしてクリーニングを施した衣類を抱えたメイドと出会い頭にぶつかってしまった。

「きゃっ」

「わっ」

派手に転がったユ・ゼルの頭上にシーツやシャツの類がなだれ落ちた。ユ・ゼルは慌ててもがいた。

「だ、大丈夫？　ユ・ゼル様」

たどたどしい口調。数週間前に邸にやって来た未明だ。ユ・ゼルは唇を尖らせた。

「もう、危ないじゃないか！　窒息しちゃうところだぞ」

「ご、ごめんなさい」

彼女は慌ててユ・ゼルを抱き起こした。ユ・テラがおっとりと弟を非難する。

「ミハルじゃなくて、ぶつかったゼルが悪いんじゃない」

「うるさいやい」

ユ・ゼルは姉に向かって舌を突き出した。それからふと未明を見上げた。

「そうだ、ミハル！　一緒にお庭に来てよ。雪が降ってるんだ、きっと積もるから、雪中てしよう」

「ゆきあて（ハンシアル）？」

耳慣れない言葉なのか、彼女は首を傾げている。ユ・ゼルは大きく肯いた。

「知らないの？　なら教えてあげる、ほら行こ」

未明の手を取り、いまにも駆け出そうとするユ・ゼル。彼女は慌てて言った。

「ま、待って。届ける、先に。これ」

洗濯室から持ち出した着物やシーツをそれぞれの部屋に戻さなければならない。ユ・ゼルは不服そうだったが、姉の方がいくらか分別があるのか、ユ・テラは弟の機先を制した。

「いいわ、じゃあお庭で待ってるね。行こ、ゼル」

彼女はユ・ゼルの手を引いて中庭へ走っていった。未明はほっと息をつき、まずは当主の部屋へと向かった。扉の前に立ち、ノックをする。口上を述べる。

「旦那様、衣類、お持ちしました」

室内に入ると、ウェス・ハーシュ家の主人（あるじ）、オルグ・ヴィネックは、濃紺のガウン姿で細かい意匠の凝らされた肘掛け椅子に深々と座し、なにか書物を紐解いていた。未明に気づき、にやりと笑みを浮かべる。

「ミハルか。ずいぶん板についてきたじゃないか、その恰好も」

未明は微笑した。彼の言うとおり、ベッドメイクをする姿も中々さまになってきている。ヴィネックは立ち上がった。

「冷え込むはずだ、雪が降ってきたな。うちの妖精（フィボニー）どもにはもってこいの遊び場だ」

「雪……」

未明のつぶやきを当主は耳聡く聞きとがめた。

「雪だ。お前は見たことがないのか」

彼女は首を横に振った。

「知ってる。でも、ほとんど知らない。あたし、いた、降らない場所」

彼は瞠目した。ゆっくりと未明に近づく。その頬にそっと手を触

れる。
「お前が住んでいたのは暖かい国なのか。……驚いたな、そういえばあいつもいつだったか、そんなことを言ってた」
「？　……あいつ？」
ヴィネックは彼女をじっと見つめた。彼の中にいまも宿る、ある女性の面影がその小さな顔に重なっていく。
「四季の移り変わりが見事な国で、暖かいところは本当に南国みたいだと。あいつ自身は、冬になると大雪の降る山間地の生まれだったのに、寒いのが苦手で、冬の間はずっと家の中にこもってた」
未明は彼の言葉に耳を傾けた。誰のことを言っているのかはわからないが、なぜか自分に関係ある人物の話だという気がした。
「お前たちは同じ国から来たのか？　なら教えてくれ。……どこに行けばあいつに会えるんだ」
思わず訊ねていた。困惑したような黒い瞳とぶつかる。ヴィネックは苦笑した。
「――すまん。仕事の途中だったな、もう退出していいぞ」
未明は軽く肯くと部屋を出て行った。ヴィネックは息をついた。忘れていられた。もう十九年も昔の話だ。そう思っていたのに……あの娘が現れたせいで、煩悶の日々がまたも始まったというのか。

あたしは次なる部屋、次男のアドリオ様の部屋に向かった。正直気が重い。彼にされたことはいまでもはっきり覚えているからだ。
とは言っても、これも仕事、仕事。バイト先のカフェにだって、毎日、いろんな人がやって来た。いい人もいれば、厄介な人もいる。それと同じだと思えばいい。
部屋の前に立って深呼吸。ノックをし、口上を述べ、中へ入る。
彼は窓辺に佇んでいた。雪の舞う戸外を、どこか遠くを見るような眼差しで見つめている。
どきりとした。……やっぱり、似てる。瀬川君に。

黒い髪に黒い瞳。少し浅黒いような、艶やかな肌。長い睫毛。

「なにを見てる」

不意に声をかけられた。あたしはよほど不躾（ぶしつけ）に彼を眺め回していたみたいだ。慌てて謝った。

「ご、ごめんなさい」

でも、意外にも彼は怒ってはいないみたいだった。彼は静かにつぶやいた。

「――厭な季節だな」

あたしはベッドメイクの手を止め、彼を見た。アドリオ様の顔には微苦笑が浮かんでいた。

「雪はきらいだ。お前は好きか」

唐突な質問だ。あたしは曖昧に肯いた。あたしの住んでいた海沿いの町では、一年中、ほとんど雪は降らない。だから、白銀の世界には憧れもあった。

「雪、降らない。あたし、いたところ。とても暖かい。雪、きれい」

「……」

なぜか彼は驚いたようだった。さっきのファロダさん――旦那様みたいに。彼は書棚に寄り、一冊の大きな本を抜き出すと、あたしを手招きした。戸惑いながらも彼のそばへと近寄る。

それはどうやら地理の教本のようだった。目の前に広げられた世界地図らしき図版を見て、あたしはいまさらながら激しいショックを受けた。

大小さまざまな五つの大陸が十字の形に並んでいる。どう見ても、あたしが子どもの頃から慣れ親しんだ、国土地理院の世界地図じゃない。

ここはやっぱり異世界なんだ。だって、どれだけ歴史を遡ろうと、世界がこんな形をしていた時代なんてあたしの知る限り聞いたこともない。

ぐらりと身体がよろけた。慌てたようなアドリオ様の手が寸でのところであたしを支えてくれた。

「おい、大丈夫か」
どうにか肯いた。これ以上直視したくない。でも、知らなければ。元の世界に帰るためにも。
「ここ……どこ」
渇いた声を絞り出す。彼の指が、十字架の脚にあたる部分に位置する比較的大きな大陸を示した。
「ロドア大陸だ。五大陸の中でも二番目にでかい。ここはロマド市のヴィネック街区。北端の、この辺りだな」
あたしはいつの間にか彼にしがみついていた。あんなことがあったっていうのに、でも、この時は誰かすがりつける相手が欲しかったのかもしれない。
「お前がいたっていうのはどの辺になるんだ。バルネディア大陸、それとも東端のレピュラス大陸か？　いや、雪が降らないって言ってたな。じゃあ或いは……周辺に数え切れないほど存在してるっていう離島なのか」
あたしは首を横に振った。そんな島の名前は知らない。五大陸なんてあたしは知らない。
あたしがいたのは、小さな、ほんとに小さな、ささやかな島国だ。
「日本……」
知らぬ間につぶやいていた。彼にわかるはずもないのにだ。
ところが、返ってきたのは思いがけない反応だった。
「ニホン、だって……？」
彼は震えるような声で訊き返してきた。あたしは肯いた。
次の瞬間、アドリオ様はあたしを抱きしめた。でも、この前みたいな意味合いじゃない。彼はあたしよりもパニックを起こしているみたいだった。
「お前は、じゃあ……母上と同じ国の人間なのか？」
耳元で告げられたのは、あたしにとっても、あまりに衝撃的な言葉だった。

あたしたちは二人、寄り添うように長椅子に腰掛けた。お互い、支えが欲しいと思っていたんだろう。

アドリオ様は、あたしの肩を抱き寄せながら、独白でもするみたいな感じで喋り始めた。

「十九年前のことだ。今日みたいに雪の降る、冬季の始まりのある日だった。父上は会議で邸を空けていた。行き先は確か、中央政府のある要塞島だった。直行の汽車はあるが、限られた人間しか乗ることができない。そこで父上は俺の母と……母上と知り合ったそうだ。名前はミサキ。年齢はその当時、十八かそこらだった」

ミサキ。響きからして確かに日本名のようだ。あたしは黙って続きを待った。

「父上にはその時すでに正妻がいた。兄上の母だ。それでも母上と恋に落ち、彼女をロマドに連れて帰った。ヴィネックの外れに家を与え、やがて俺が生まれた。だが、たった一年経つか経たないかの頃、母上は失踪してしまったんだ。まだ赤ん坊の俺と、父上を残して」

彼の声が心なし、震えた。

「――すべて父上から聞いた話だ。なぜ母上が失踪したのかはいまでもわからない。それに、なぜ彼女が、限られた関係者以外は入ることもできないはずの要塞島にいたのかも。父上によれば、要人専用の汽車が島に着いた時、彼女はどこから紛れ込んだのか、車内に乗っていたらしい。すぐに当局の連中に引き渡されて取り調べを受けたが、記憶喪失で言葉もわからないってことで、好奇心を起こした父上が目通りしたんだそうだ。……一目惚れだと、あとになってそう言っていた」

彼の話はこう続いた。ミサキさんが失踪してから、ファロダさんは幼いアドリオ様をウェス・ハーシュ邸に連れていき、正式にジード様の弟として迎え入れた。ジード様のお母さんはすごくできた人だったらしく、夫を責めることもなくアドリオ様を我が子として育

ててくれたそうだ。

「でも俺にはわかったんだ。兄上の母は、俺のことを心底では憎んでいた。ふとした時にそれが伝わってきた。……当然の話だ。俺はいまだってそれでも彼女には感謝してる」

あたしは黙った。ゆっくりと、噛んで含めるように話してくれたおかげで、どうにか全容をつかむことができた。

彼は言った。

「もし、俺を置いて消えた母上にもう一度会えるなら、理由を聞きたいんだ。どうしていなくなってしまったのか。それに――いったい母上はどこから来て、どこへ行ってしまったのか。それが知りたい」

そしてあたしをじっと見つめる。

「お前も、母上と同じように突然現れた。もしも同じ国からやってきたのなら、母上に関する謎が解けるかもしれない。そうすれば、お前自身も、元いた場所へ帰れるかもしれないしな」

あたしは肯いた。どういう運命のめぐり合わせなのかはわからないけれど、とにかく、突破口がひとつ見つかったのだ。

いまはまだ、ほんの小さな針でつついたような穴に過ぎない。でも、この世界に対する理解を深めていくことで、その穴を少しずつ大きくしていくことはできるかもしれない。せめてあたし一人が通り抜けられるくらいの大きさになるまで。

# 第十九話　本命は

アドリオの部屋の扉に張り付いている小妖精のかたわれを見つけたピアは、その背後からこっそりと近づき、いきなり声をかけた。
「ユ・ゼル様。なにしてらっしゃるんです、そんなところで」
子どもは飛び上がった。そして恨めしげにピアを見上げた。
「……なんだよ、ピア、びっくりするじゃないか。いま、いいところだったのにぃ」
ピアは怪訝そうに目を細めた。
「いいところですって？　なんのことです、坊ちゃま」
「だからミハルと下の兄様がさ。お部屋の中で抱き合って、なんかこそこそ話してるんだ」
ユ・ゼルは憤然と――しかし一応小声で――言い返した。その言葉を聞くなり、好奇心旺盛な十六歳の乙女、ピア・シューリエル・エフェナーは、彼を跳ね飛ばすようにして扉に取り付いた。数センチの隙間から室内を覗き込む。その薄茶色の瞳が見る見る大きくなる。
「まあ……まあ！　やだ、ミハルってば、アドリオ様狙いだったんだ！　じゃあジード様ってふられちゃったってわけ？　まじでぇ？」
お勤め中であることも忘れ、黄色い声を上げるピア。不服そうなユ・ゼルが彼女の足元にかじりつく。
「ピア、退いてよ、ぼくにも見せてってば」
二人はしばしもみ合うようにして扉の前に佇んでいた。部屋の中では、ウェス・ハーシュ家の次男坊と、ピアの仲良しのメイドである未明が、意味深な雰囲気を漂わせながら肩を寄せ合っている。
それにしてもあの二人、いったいいつの間にこんなに親密な仲になったのかしら？　ピアは首を傾げた。どちらかというと未明はアドリオの話題を避けていたような気がするのだが。
「もう、なにしてるの、ゼル！　早くミハルを呼んできてって言っ

たでしょ」
　甲高い声が響き渡った。ピアは声もなく振り返った。ユ・ゼルの双子の姉、ユ・テラが、可愛らしい顔を脹らませ、腰に両手を当てて彼らを睨んでいる。
「お外でいくら待ってても全然戻ってこないし。寒いじゃない、風邪引いちゃうわ」
　お冠の姉に向かって、ユ・ゼルは唇に人差し指を当ててみせた。
「しいっ。静かにしてよ、テラ。気づかれちゃうだろ」
「え？　なんのこと」
　ユ・ゼルは室内を指し示した。ユ・テラは弟に倣い、訝しげに眉を寄せながらも中を覗き込む。
「あれぇ……下の兄様と、ミハル……なんだぁ、そういうことだったんだ、知らなかった。私」
「ミハルは上の兄様のお気に入りだろ。でも、これじゃあだめだよね」
「そうよねぇ……あたしもこうなったらジード様お一人に絞り込もっかな」
　三人はそれぞれ勝手にさんざめいた。その時だった。
「なにをしてるんです、そんなところで、無作法な！」
　メイド頭の雷が鳴り響いた。びくんと身を縮め、恐る恐る振り向くピア。鬼の形相のパドマが仁王立ちしている。怒声が届いたのか、じきに部屋の扉が開き、未明が現れた。彼女は慌てて頭を下げた。
「ごめんなさい、すぐ、戻る、です」
「あなたに怒ったんじゃないのよ。……ピア！　それにお二人もですよ。他人（ひと）のお部屋を覗き見するなんて恥知らずな！　坊ちゃま、それに嬢ちゃま。午後はお勉強の時間のはずでしょう。もう先生もお見えになるっていうのに。ほら、早くご自分のお部屋にお行きなさい」
　二匹の小妖精は顔を見合わせた。が、抗っても無駄だとわかっているのか、のそのそと自室へ引き上げていった。その間もパドマの

説教は続いている。彼女は目を吊り上げてピアを睨みつけ、ウェス・ハーシュ家のメイドとしての心得をいまさらながら諄々（じゅんじゅん）と諭した。

当のピアの方は、神妙に聞き入るふりをしながらも、その心中ではまったく別のことを考えていた。

いったい、未明の本命は、兄なのかそれとも弟の方なのか。

彼女をめぐる恋の鞘当てはこれからどう展開していくのか。

……未明にしてみれば、ほぼ、身に覚えのない話だったのだが。

## ◆閑話 - 秘密の授業 - （前書き）

差し込む位置、間違えたかもしれません（汗）
４２話のあとぐらいに入れ直したいんですが、直し方がわからず……。
時系列としてはここで問題ないんですが。

## ◆閑話 - 秘密の授業 -

五刻半（午後三時）が近づくと、そわそわと落ち着かない気分になる。

アドリオは長椅子の上に仰向けに転がり、それから気だるげに体勢を変えると、扉を睨むようにして頬杖をついた。じきに約束の時間が来て、彼女が姿を見せるはずだ。この部屋に――彼の自室に。

といっても、他意があっての訪問ではない。彼女はあくまで、勉学のためにやって来るのだから。

コンコン、と遠慮がちなノックの音が響いた。と同時に飛び起き、入り口へと駆け寄り、ドアを開ける。

そこには、彼が想いを寄せる少女、未明が立っていた。

「これ、紫の色のユニス茶です。とてもめずらしくて、きれいです」

未明は含羞んだように微笑みながら、台車（ワゴン）に載せたティーセットを取り上げ、小卓の上に丁寧に並べていく。たどたどしいながらも懸命に給仕するその姿に、どうかすると胸が強く締めつけられる。

「アドリオ様、好きですから」

なにげないはずのせりふが、彼の耳を甘く刺激した。……好き？

俺、を？　俺のことを？

「ミハル、いま……」

身を乗り出そうとして、あっさりと真意を告げられる。

「ユニス茶、好き。そうでしょう」

「……ああ……まあ」

無垢な瞳が、不思議そうに自分を見つめている。なにかおかしな

ことを言ってしまったのか、と彼女の白い頬がたちまち可憐な色に染まっていく。

……可愛い。

胸が疼いた。あらためて、彼女に惚れていることを自覚させられる一瞬だ。

二ヶ月ほど前、彼の異母兄であるオルグ・ジードによって、カルマ駅からこのウェス・ハーシュ邸に連れて来られた未明という少女は、いくつもの謎に満ちた不思議な娘だった。

どこからやってきたのか。なぜ言葉を話せないのか。周辺離島出身の放浪民（ツィゼット）かとも思えたが、そのわりに育ちの良さそうな風体をしているところも、不可思議といえば不可思議な点だ。

ジードが言うには、記憶を失っているらしい。……だが、実のところ、そうではなかった。

「ユニス茶は、母上が好きだった。ほんの餓鬼だったけど、この香りはちゃんと憶えてるからな」

カップを手につぶやくと、未明の黒い瞳がきらりと光ったように見えた。

「ユニス茶……ラベンダー……実験室……」

ぶつぶつと、なにごとかを思案げに口にしている。アドリオは眉を寄せた。未明は慌てたように顔を上げた。

「あ、の、なんでもないです。えと……ユニス茶の香り、とても素敵。あたしも、これ、とても好き」

ぎこちない微笑。――二人きりの部屋。うるさい教育係の女官長も、邪魔者の異母兄もいない、二人だけの午後。

アドリオは咳をし、未明から目を逸らした。……ばかなことを考えるな。いまのところ、好いてるのは俺の方だけで、彼女は俺のことなんてきっとなんとも思ってやしない。そりゃ、感謝ぐらいはしてるかもしれないが……性急なことをして、初めて口を利いた時み

たいに、また、きらわれたいのか？
「アドリオ様、今日は……計算の仕方。いいですか」
おずおずと声をかけられ、はっと我に返った。彼は、内心の動揺を悟られないよう、ふたたび咳払いをした。

基本は十進法だが、故事に基づいての十二進法、それに時の数え方など、変則的な十三進法が採られる場合もある。アドリオの言葉を、未明は真剣な表情でノートにしたためた。
――この国で暮らすにしても、元の国に戻る手がかりを探すにしても、一般的な知識ぐらいは身につけておいた方がいい。お前が元いた国についての情報をつかむことは、俺の利益にもつながる。だから遠慮する必要はない。
アドリオの提案に未明は肯いた。内緒の授業はそれから数週間、お茶の時間を利用して続いている。
互いの利益のため。その言葉に嘘はない。……が、いまとなっては、自分の側の利益がいったいなにを示しているのか、正直なところ曖昧になりつつあるアドリオだった。
幼い頃に行方知れずとなってしまった実母を捜す。その気持ちが萎えてしまっているわけではない。
しかし、彼はおのれの心がその目的とは別に強く欲しているものがあることに、それほど間を置かず気づいてしまった。

未明さえこうしてそばにいてくれるなら、俺はほかになにも要らない。

そう思うようになるのに時間はかからなかった。
「アドリオ様、合ってますか」
真剣な顔つきでノートを差し出され、ふと微笑する。怪訝そうな

未明に、彼は言った。
「お前がニホンという国を見つけたら……俺も一緒に行こうかな」
「……えっ？」
よほど予期せぬ言葉だったのか、彼女は目を見開いたまま固まっている。アドリオは慌て、取り繕うように付け足した。
「学校だよ。楽しかったって言ってただろ。……ちょっと、興味湧いたから」
「ああ……はい。楽しいです。すごく」
未明は相好を崩した。アドリオの心臓が、焦りのためにうるさくざわめき出す。

――性急どころか、いきなりプロポーズって、それはあり得ないだろう、俺。

未明が使いに行った先の大学府で何者かに攫われる、わずか二日前の午後のできごとだった。

## ◆閑話 - 秘密の授業 - （後書き）

ｗｅｂ拍手お礼用小話としてｕｐしていたお話を、こちらに移してみました。
いかにも想像力を刺激するタイトルですが、内実は……（笑）
未明がつぶやいている「ラベンダー、実験室」云々は、「時をかける少女」から拝借（笑）
ユニス茶の香りで日本に戻れないかな？　みたいな。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます（＾・＾）

# 第二十話　エコルガルトへの旅　1

お勤めを始めて二ヶ月が過ぎる頃、あたしは、女官長室に呼び出され、こう切り出された。

「ミハル。実はね、あなたに折り入って頼みたいことがあるの」

いつになく神妙な顔つきのパドマさん。あたしはやや緊張しながらも肯いた。

「はい」

「お遣いをしてもらいたいの。大学府の学府長様のところまで」

エコルガルト、と聞いて、あたしは眉を寄せた。そこは確か、このお家の次期当主、オルグ・ジード様が通っている全寮制の大学だ。この世界では一、二を争うほどの名門学府だって聞いている。

パドマさんはあたしを見つめ、一息入れてから続けた。

「本来ならまだあなたにお願いするには早すぎるとも思うけれど、アレクサはいま、実家に帰っているところだし、ピアじゃあねぇ…。…あなたよりも頼りないくらいだわ。あの子とあなたを二人、ここに残すよりは、スーシェにいてもらった方がいいと思うの。レンドルスさんも私もお邸を空けるわけにはいかないしね」

先輩メイドのアレクサさんは、郷里のお父さんの体調が芳しくないらしく、十日ほど前から暇乞(いとまご)いをしている。スーシェさん、というのは、パドマさんを除くと最年長になるベテランのメイドで、いま二十五歳。もの静かでおっとりふんわりした、お姉さんというよりお母さんみたいな人だ。

「明日、車停めに馬車を用意するから、それに乗っていけば十五時間ほどで着くわ。お願いできるかしら」

「はい。わかりました(イド・レヒト)」

あたしは肯いた。猛勉強のおかげで、日常会話くらいならどうにユアン

か支障なくこなせるようになってもいた。
パドマさんは安心したように微笑んだ。あたしは軽く一礼してから退出した。

未明が辞去した後、女官長は一転して浮かない顔になった。
未明はああ見えて聡明な娘だ。いまだにその出自は不明だが、おそらくは相当きちんとした教育を受けているに違いない。物腰や立ち居振る舞い、それに言葉を覚える早さからも教養の高さが窺える。初めの予想とは違って、離島の放浪民では少なくともないのだろう。
だが、それにしても、大学府の学府長じきじきに目通りをしたいとの電話が来るとはいったいどういうことなのか。
どこから彼女の話が漏れたのだろう。オルグ・ジードが、次期当主が、なにか彼に告げたのだろうか。
ワンジオ翁は、悪戯っぽくこうも付け加えた。――本人には、特になにも報せるな、と。
表向きは、ただのお遣い代理、ということにし、それらしい書簡を用意した。巻物を筒に入れ、明日、彼女に持たせるつもりだ。
パドマは忙しなく立ち上がった。未明の旅支度も整えてやらねばならない。大学府のあるキニッサの町までは片道で軽く十五時間。日帰りでは無理だ。
……なにごともなければいいけど。
根拠のない不安を感じ、つぶやかずにはいられない女官長だった。

ウェス・ハーシュ一家の晩餐が終わり、使用人自身の夕食も済んだ九刻（夜十時）過ぎ。あたしは自室に戻ると、パドマさんから借り受けた旅行鞄に着替えを詰め始めた。と言っても旅程はたったの一泊。それほど持っていくものなんてない。
そう言えば、ローニャさんのお店で騒動に巻き込まれた時に失く

してしまったあたしの帰省用のミニボストンってどこにいってしまったんだろう。携帯も手帳も財布も、全部あの中だ。それにあのバッグ自体、結構お気に入りだったんだけどなぁ。

なんてことを考えていると、ノックが鳴った。

「はい」

ドアを開けると、アドリオ様が立っていた。あたしは躊躇した。パドマさんの手前もあるし、ていうか、こんな時間帯に男の人を自分の部屋に入れるのってどうなんだろう、とも思うし。

でも、アドリオ様は迷いなく室内に入ると後ろ手にドアを閉めてしまった。ジード様もそうだったけど、まあ、あたしってメイドだもんね。多分、デフォルトで遠慮する必要ないって風に刷り込まれてるのかもしれない。

中世から近代ヨーロッパに近い世界観。家父長制で、それも封建主義っぽい古めかしい雰囲気。大学府にも入学を赦されるのは男子だけらしいし。ピアなんかはあっけらかんとしてるけど、女子が生きていくには案外大変な環境なのかもしれない。

アドリオ様は、あたしの足元に置かれた旅行用の小型のスーツケースに目を落とした。

「大学府へ行くんだって？　一人で大丈夫か」

「え？　あ、はい。お遣いだから、馬車でずっと行く。平気です」

彼はじっとあたしを見つめている。

「――俺も一緒に行ってやろうか」

えっ？　……あたしはまじまじと彼を見た。そんなことを言われるとは思いもしなかった。

「いえ、大丈夫。御者のロモッカさん、一緒。だから心配、要らない」

慌てて首を振る。うーん、そこまで頼りなく見えるかなぁ、あたしって。

「それに、アドリオ様、色々教えてくれた。ここのこと。役に立ちます。だから一人で行けます」

そうなのだ。彼は、ここ一ヶ月くらいの間、閑を見てはあたしに、この世界の言語や一般常識について講義してくれているのである。あたしとまともに会話ができるようになれば、それは彼の実のお母さんに関する謎を解く足がかりになるかもしれない。そう思ってのことなんだろう。

「ミハル」

「はい」

アドリオ様はあたしに近づき、ふいに屈んだかと思うと――彼もジード様と同じでやたら背が高いのだ――左頬に軽くキスをしてきた。……あたしは固まった。

「早く戻って来い。……おやすみ」

そう言うなり、彼はあたしを見もせずに部屋を出て行った。って、ちょっと待ってよ。

いまのは、なに？

就寝前の挨拶？

「……だよね……きっと」

これ以上、考えるのはやめておこう。なんだか不毛な思考回路の泥沼に嵌まりそうな気がする。

明日は早いのだ。出立は朝一刻（午前六時）。あたしはメイド服を脱ぎ、混乱する頭を抱えてベッドに飛び込んだ。

語学、哲学、数理、天文、歴史、地理、詩文。多岐に渡る大学府のカリキュラムの中でも、全期を通じて特に重要視されるのが、武学と呼ばれる体術修練である。

学ぶのは、先史時代に起こったとされる古武道、ソフォモンド。その習得は貴族階級の男子の嗜（たしな）みであり、さらに習得の度合い如何（いかん）では家格にもかかわるとすら言われている。

フェンシングに似た剣技で、基本は一対一の個人戦で行われ、勝敗はどちらかが剣を奪われるか、地に手をつくことで決せられる。

動体視力、筋力、反射神経及び判断能力。どれが欠けても相手を制することはできない。

「緊張するよな、明日、一限からだろ。しくじったらあとあと響きそうだしさ」

レミットは大仰に言い、慰安室（レクリエーションルーム）一角のテーブルに突っ伏した。

「なんたって最終学年だしさ。ああ、厭だな、胃が痛くなってきたよぼく」

「お前は生まれる時、お袋さんの胎（はら）ん中に運動神経を置き忘れてきちゃってるからなぁ。確かにその気持ちはわかるぜ」

ホルツェンの揶揄（やゆ）に、レミットは情けない顔をした。

「……反論できないのが悔しいよ。そこへいくといいよな、ホルツェンなんか筋肉ばかだから。ソフォモンドの授業の時だけは輝いてるもんな」

「誰が筋肉しか取り得ないって？　俺は狡猾さで相手に勝つタイプなんだよ。お前もアタマ使えよな、弱いなら」

ホルツェンは級友を軽く小突いた。そんな和やかな空気の中、一人、黒雲を背負っている人物がいた。

――ウェス・ハーシュ家次期当主、オルグ・ジードである。

ホルツェンとレミットは顔を見合わせた。ややあって声をかけたのはホルツェンの方だった。

「おい、ジード。お前、いったいいつまで落ち込んでるつもりだ？　明日は団体戦だってあるんだぞ。そんな士気（テンション）で試合に挑む気かよ」

返事はない。ホルツェンはため息をついた。

「……そりゃ、確かに可愛い子だったけどさ。別に絶世の美女ってわけでもなし、卒業さえしちまえば、お前なら選り取りみどりだろ。そういやほら、ノルド家の長女ってやつはどうなってるんだ？　お前の従妹（いとこ）の」

「……どうもしやしない。彼女はただの従妹だ。それ以上の関係はない」

地を這うような声で彼は呻いた。レミットが身を乗り出す。

「ノルド家って、キニッサの名刹（めいさつ）の？　この大学府とも一方（ひとかた）ならぬつながりだって言われてる」

「ああ。で、現当主の孫娘ってのが美人で有名でさ。ノルド家は代々、ジードの家と縁組してきたんだよな。そういう相手がいるんだ、一度や二度の失恋くらいでくさくさするなって」

――生涯、好きになる相手など一人でいい。

そうジードは胸の中でつぶやいた。未明の面影は、相変わらず脳裏に、瞼の裏に焼きついたままだ。

あのこげ茶の髪、潤んだ黒い瞳、折れそうに華奢なのにやわらかく抱き心地のいい肢体、戸惑うように自分を見る眼差し。含羞（はにか）んで目をそらす仕草。小鳥の囀りを思わせる片言の話し方。

好きだ。

好きで、どうしようもない。

愛していると、結婚して欲しいと伝えても、意味を解せない彼女には通じなかった。それでも待つつもりでいた。

……だが、拒否されてしまっては終わりだ。

「末期症状だな」

呆れたように言い放つホルツェン。その時だ。

「言いがかりだ、そっちが先にぶつかったんじゃないか！　そこを退けよ！」

慰安室の入り口付近で小競り合いが起こった。室内にいた全員の視線がいっせいに注がれる。

「言いがかりだと？　エルミッダ寮の分際で生意気な。お望みなら明日の試合の前にここで決着をつけてやるぞ」

「そっちこそゴディハラ寮（高飛車）のくせに、勘違いもたいがいにしろよ、そこを退けったら！」

言い争っているのは、ジードらと同じ第二学生寮の四年生と、第一学生寮の四年生数名だ。レミットが眉を顰めてつぶやいた。

「第一寮のカシアン・レグノ・ウェス・ゴートじゃないか。それにそのお取り巻きの連中も。また喧嘩ふっかけに来たのかよ、あいつ

ら」

「閑なんだよな。かまってちゃんなんだろ、結局」

ホルツェンは冷たく言い捨てた。

大学府は全寮制で、四学年二百名の学生は第一学生寮から第三学生寮までに振り分けられて収容される。ソフォモンドの授業が寮対抗戦で行われることが多いためか、それぞれの寮の間には、昔から謂れなき対抗意識が根付いているのである。

この慰安室自体は寮の別なく使用できるのだが、こういったいざこざが日常から絶えない。もっとも、あまりに目に余る場合は、退学勧告が発動されることもあるらしい。あくまで噂だが。レミットはぼやいた。

「カシアンなんかさっさと退学になっちまえばいいんだよ。そうすりゃどんなにすっきりするか」

「同感だが、あいつはウェス・ゴート家の長男だからな。めったなことじゃ追い出されやしないさ」

ホルツェンは両手を広げてみせた。

中央政府のある要塞島を管轄するオサイオン市の名門貴族、ウェス・ゴート家。カシアンはその一族の次期頭領で、同じく五大陸中でも名家と名高いウェス・ハーシュ家の跡取り、ジードのことを普段からなにかとライバル視する傾向があった。

「紙一重のとこでいつもジードには勝てないから、相当苛ついてるんだぜきっと」

レミットはばかにしたように哂った。その言葉どおり、筆記でも実技でも、つねに一歩抜きん出ているのはジードの方だ。なにしろ彼は入学してこの方、首席を他人に譲ったことがない。まさに伝説の学生なのである。

喧騒が一段と大きくなった。第二寮の学生が突き飛ばされ、床に倒れ臥したのだ。ホルツェンは思わず立ち上がり、怒鳴っていた。

「おい、お前ら！　それ以上の行為は私刑だぞ。退学になる覚悟があるんだろうな」

室内は静まり返った。突き飛ばした方、第一寮の数人の学生たちは、憤った眼差しをホルツェンに向けた。その彼らを片腕で制する長身の学生――カシアンが、世にも冷ややかな雰囲気をまといながら、三人のテーブルへと近づいてきた。

ウェーブのかかったプラチナブロンド、緑灰色の切れ長の瞳、細く尖った印象的な鼻梁、薄く引き締まった唇。美青年ではあるが、同時に見るからに酷薄そうな面立ちともいえた。

彼はゆっくりと口を開いた。

「ホルツェン・オルレアド・シモン・ライゾック……エルミッダ寮には相応しい、下賤な人種だな。この私が退学になるなど、よくも言えたものだ」

ホルツェンは挑発を真っ向から受け止め、不敵な笑みを浮かべてみせた。

「この寒さで脳みそも凍結しちまってんのか？　大学府には例外は存在しない。規律を乱すやつは、誰であろうがワンジオ翁の裁きの下、永久追放だ。あと一年なんだぜ。そういうやんちゃは止めておいた方がいいんじゃないのか、カシアン」

カシアンはしばらくホルツェンと対峙した後、なにも言わずに黙り込んでいる彼の宿敵に視線を移した。

「――いいだろう。この決着は明日の団体戦でつけてやる。オルグ・ジード、大将戦は貴様と私の一騎打ちだ。逃げるなよ」

「誰が逃げるもんか、ジード、なんとか言ってやれよ！」

真っ赤な顔のレミットが傍から怒鳴った。ジードは大儀そうにカシアンを眺め、つぶやいた。

「私怨の絡んだ試合などごめんだ。私はあくまで授業の一環として参加するだけだ」

カシアンの頬にあからさまな蔑笑が浮かんだ。

「ふん。腰抜けが。……楽しみだな、明日は、全校生徒が注目する中、貴様が初めて私にひれ伏すのだ」

そう言い棄てると、彼は取り巻きを引き連れて慰安室を出て行っ

た。その後ろ姿に思いきり舌を出すレミット。
「言ってろ！　明日になったら吠え面かくのはそっちの方だぜ、なあジード」
しかし、当の本人にはまったくやる気がないらしい。ジードはふらりと立ち上がった。
「おい、ちょっと、ジード！　どこ行くんだよ」
「部屋に戻る。……独りになりたいんだ」
レミットはぽかんと口を開けた。
「……ホルツェン、あれ、大丈夫かな？　明日」
ホルツェンは腕を組み、椅子ごと身体を後ろへ反らした。
「さあな。神のみぞ――女神イグノディアスのみぞ知る、ってとこじゃねぇか」

# 第二十一話　エコルガルトへの旅　2

「そろそろお疲れの頃でしょう、フロンジーネ（お嬢さん）」
小窓の外から、御者のロモッカさんの声がした。のんびりとした牧歌的な口調だ。
「いえ、まだ、平気。でもロモッカさん、大丈夫ですか」
あたしは訊ねた。乗ってるだけのあたしと違い、彼は、当たり前だけれどこの二頭立て馬車をずうっと操らなければならないのだ。しかも十五時間もの間。
早朝にお邸を発ってからすでに六時間が過ぎていた。窓の外に広がる光景が、だんだんと田舎めいた、長閑なものに変わっていく。ロマドは交易都市とは聞いているけれど、中心部であるヴィネック街区ほど、すべての地域が賑やかなわけではないらしい。
それにしても、つくづく不可解というか、不思議な世界だ。五大陸をつないでいるのは、大陸間鉄道と呼ばれる汽車なのだという。それだけの技術があるにもかかわらず、内陸部の交通インフラは絶対的に遅れていて、短距離区間を結ぶ古びた馬車鉄道が点々と敷かれるのみ。キニッサの南端まで行こうと思ったら、普通は駅馬車を乗り継いで行くしかないらしく、それだと丸三日はかかるとのことだ。
「あたしはもう、これが仕事ですからね。でも、なんだってまたフロンジーネが大学府に赴くことになったんですかね？　あすこってのは女人禁制で有名なんですよ。女神イグノディアスが女陰臭をきらうってことでね」
日本の霊山信仰みたいなものだろうか。あたしは言った。
「ほかに行ける人、いないから。多分、代理、みたいなもの」
「はぁ、レンドルス様のね。ま、しかし、なんにしても大変なこと

で……」

ロモッカさんは感心したように首を振った。あたしはそれより、この寒さに閉口していた。

車内には暖房なんてもちろんついていない。パドマさんが外出用に上等な毛皮のコートを貸してくれたけれど、それでも寒い。外はすでに白銀に染まっている。沖縄を除けば日本一あったかい県で育ったあたしである。雪にはそもそも慣れていないのだ。

「フロンジーネ、まだこの先長いですからね。少し休んでいかれては？　着いたらお起こししますんで」

親切なロモッカさんの言葉に甘えることにした。さっき、昼食に持たされたお弁当――黒獅子（ベヌール）の乳から作ったというチーズを挟んだエッカのサンドイッチで、中々の美味だ――を食べたせいで、眠気が襲ってきてもいた。あたしはゆっくりと目を閉じた。

未明のノートを添削していたアドリオは、微笑を浮かべて顔を上げた。

「よし。合格だ」

ノートを返す。未明の顔が見る見るほころんだ。

お茶の時間を利用しての勉強会も、これで十日になる。アドリオから言い出したことだった。

「知識が増えれば増えるほど、手がかりにもつながりやすくなるかもしれないからな」

遠慮する彼女をそう言って説き伏せた。口うるさいメイド頭には見つからないように、内緒の授業だ。

……内緒の、二人きりの授業。

アドリオの胸がふとざわめいた。そして苦笑した。

ばかばかしい、なに考えてるんだ。確かに大学府へ行くのなんて真っ平ごめんだが。

彼は、異国育ちのこの「女生徒」をまじまじと眺めた。覚えはい

い。驚くほど習得が早い。読み書きの、「読み」の方も「書き」の方も、日に日に上達している。

この世界では、よほど位の高い女性でなければ、通常は高等教育を受ける機会はない。教わる科目にしても、良家の子女としての嗜み的な内容のものが多い。哲学や数理などの実践的学問は男性学とまで言われているほどだ。

だが、どうやら未明のいた国では、ちょっと事情が違うようだ。

「お前は学校へ通っていたのか」

訊ねると、当たり前の顔で肯いた。男女は幼い頃から同じ学舎で学び、むろん女子であっても最終学府まで進むことができる。彼女もまたその教育を受けている最中だったらしい。

「外国の言葉、勉強する学校。たくさん、生徒いた。男性も女性も。……とても、楽しかった」

淋しげな表情になった。学友を思い出しでもしたのか。彼女はつぶやいた。

「……アドリオ様、似てる。あたしの友達」

「友達？」

こくんと肯く。

「黒い髪、黒い瞳。背が高い。それに……時々、遠く、見る。とても似てる」

「……」

アドリオは黙って未明を見つめた。懐かしそうに目を細めている。なぜか、苛立った。咳払いをし、話題を変えた。

「大陸共通語はこの辺にしておこう。次は、そうだな、貨幣単位についてだ」

もっとも彼自身、現金を携えて買い物をした経験などはないのだが。

未明は生徒の顔に戻り、新しいページを繰ると講義に聴き入った。

フロンジーネ、と呼ぶロモッカさんの声が聞こえた。どうも夢を見ていたらしい。目を開け、小窓から外を覗き込む。でも真っ暗過ぎてなにも見えない。

「じきに着きますよ。いま、車停めに馬車を寄せますから」

すると、ここが大学府なのか。構内に駐車場みたいな場所があるのかな。そう思っているうちに馬車は停まった。

あたしはドアの鍵を外し、外へ降り立った。

第一声。

「……寒……っ」

思わず日本語でそう搾り出した。魂の悲鳴。まじで、死ぬほど寒い。雪は止んでるけど、これは間違いなく、零下十度は行ってる。

コートの襟をしっかりと合わせ、パドマさんから預かった書簡の入った筒を手に、あたしは歩き出した。前方に灯りの点いた建物が数棟見える。例の学府長さんて人はきっと、あのどこかの棟にいるに違いない。

でも……いまっていったい何時くらいになるんだろう。八刻半（夜九時）てとこだろうか。

こんな時間に訪問して大丈夫なのか。ていうか、明日にするべき？

降り積もった雪の上をさくさくと踏みしめながらあたしは思案した。ここまで来てしまったことだし、用事を済ましてしまえば明日は速攻で帰れるのだし。そう決めて、とりあえず、いちばん手近な棟を訪ねてみることにした。

# 第二十二話　エコルガルトへの旅　3

重要な戦の前には必ず精神統一をする。

それは、彼、カシアン・レグノ・ウェス・ゴートが、祖父から叩き込まれた戒律だった。

精神が乱れている者は勝てない。それがこの世の理というものだ。名君として君臨したいまは亡き祖父は、カシアンを膝に抱いては繰り返しそう説いていた。

そんなわけで、いまでもカシアンには、大事に挑む前夜に寮を抜け出し、独りになって瞑想するというくせがあった。それでなくても相部屋というのは彼の性に合わないのだ。

九刻（夜十時）近くの空気は身を切るように冷え込んでいる。だがその方がいい。昂ぶる神経を宥め、落ち着けるにはこのくらいの方が――そう思っていたカシアンの緑灰色の目がふと見開かれた。

初めは、獣かと思った。

雪の上を徘徊するジョーキー（※穴熊に似た体格で、防寒性の高い被毛が毛皮として珍重される）の子ども。ばかな、こんな季節に？　そう考え、まじまじと目を凝らすと、白い月明かりに浮かび上がったのは、ジョーキーよりもさらに意外な「生きもの」だった。

「お……女……？」

彼はつぶやいた。大学府の構内にはいるはずのないものだ。

しかし、間違いなかった。年齢は十五、六といったところか。灰色の毛皮の帽子にコートを着込んだ小柄な若い娘が、真っ直ぐにこちらへ歩いてくる。

カシアンはうろたえた。彼もまた、生まれた時から女子との交わりを一切禁じられて育ったくちである。メイドを除き、女性とまともに話した経験すらない。

娘の方も彼の存在に気づいたようだ。足取りが速くなった。やが

て彼女はカシアンの目の前まで来ると、軽く膝を引き、会釈をした。身なりや仕草からは、高家（こうけ）に仕える女官であることを窺わせる。

「あの……すみません。ここ、大学府……合ってますか」

どこかつたない話し方だった。言われてみれば、なんとなく異国風の顔立ちをしている。大きな黒い瞳、帽子から覗くこげ茶色の髪。紅を差した布人形のような頬。か細い声。

可憐だ。

彼は娘に魅入っていた。彼女は怪訝そうにカシアンを見つめた。一向に返事が返ってこないのだ。

「あの……」

そこでようやく彼は我に返った。いつもの彼らしい冷ややかな眼差しで娘を見据える。

「――大学府は女人禁制だ。どこの家の遣いかは知らんが、こんなところでなにをしている。さっさと敷地から出て行け」

冷たく突き放され、彼女は途方に暮れたような顔になった。その表情はカシアンの心臓を鷲づかみにした。

「すみません。あたし……」

彼は、自分でも気づかないうちに、娘の手を取っていた。そして若干上ずった声でこう告げた。

「……ここの学生の家の者か？　だが、女が遣いに来ることなど通常は考えられないがな。お前、勤め先はどこだ」

「ウェス・ハーシュ家。学府長様に、手紙、届けに来ました」

彼女は懸命に言葉を選びながらそう答えた。その名を聞いてカシアンの顔色が変わる。

「ウェス・ハーシュ家だと？　お前……オルグ・ジードの家に仕えるメイドか」

娘は含羞んだように肯いた。理屈のつかない苛立ちが、カシアンの胸の内で燃え上がった。

「そうか。……なら、来い」

カシアンは娘の腕を荒々しく引っ張った。学府長室のある講堂で

はなく、彼の部屋のある第一学生寮に彼女を連れて行き、裏口に回る。

「ここでしばらく待っていろ。いいな」

娘はおとなしく肯いた。カシアンはそのまま自室へ戻ると、同室の学生、ラウロ・エウリック・グリザニカをつかまえ、高飛車に言い放った。

「悪いが一晩、部屋を空けてくれないか。明日の試合の前に精神統一をしておきたい。独りでな」

突然の退去命令にラウロは驚き、反駁した。

「そんな。出て行けって、じゃあぼく、今晩どこで寝れば」

「同級の友人の部屋でも訪ねればいいだろう。たった一晩だ、さっさとしろ」

哀れなラウロは黙り、あきらめたのか枕を抱えて部屋を出て行った。寮内でも実力者として君臨するカシアンの気まぐれはいつものことでもあった。

彼の姿が見えなくなるや、カシアンは階段を駆け下り、裏口へ向かった。

いた。先ほどの娘はちゃんと同じ場所で彼を待っていた。カシアンの頬がわずかに紅潮した。

「こっちだ。来い」

彼は娘の腕をつかむと階段を昇った。正面階段ではないので、ほかの生徒に見られる可能性はきわめて低いはずだ。果たして、自室に辿り着くまで誰ともすれ違わずにすんだ。

ドアを開け、娘を促す。彼女はここが学府長室と微塵も疑っていないようで、抵抗もなく室内に入った。カシアンは後ろ手にドアを閉めた。

# 第二十三話　エコルガルトへの旅　4

一方その頃、御者のロモッカは、いつまで経っても戻らない未明を心配し、そろそろと馬車を降りた。どのみち、こんなところで夜明かしをするつもりはない。さっさと大学府を引き上げ、キニッサにあるウェス・ハーシュ家の別邸に落ち着かないことには、下手をしたら凍え死んでしまう。

彼は迷わずに講堂へ向かった。以前に一度、執事のレンドルスに追従する形で訪れたことがある。

が、講堂の入り口は閉まっており、灯りも点いていない。彼は眉を寄せた。……ありゃあ、今日はもう店仕舞いってことか。

じゃあ明日出直すしかないが、ならあのフロンジーネはどこへ行ったのやら？　彼女をほっぽり出して馬車を出すわけにもいかないし。

厄介なことになってしまった。ロモッカは頭を掻いた。こうなれば、学生寮にいるはずの次期当主に泣きつくしかない。一介の御者に過ぎない自分が、こんな夜に連絡もせず彼を訪ねるというのは、不調法きわまりない行為であることは承知している。だが今回は仕方がないだろう。

のそのそと歩いていると、タイミングよく、一人の学生が棟から出てくるのが見えた。どういうわけがあるのか、ひどい仏頂面で枕を抱えている。ロモッカは躊躇（ためら）いなく彼に声をかけた。

「もし、すみません、フローゼ（ミスター）。ちょいとお訊ねしたいんですがね、オルグ・ジード卿はどちらの寮におられるんでしょうか」

突然現れた闖入者（ちんにゅうしゃ）によほど驚いたのか、彼は枕を取り落としてしまった。ロモッカは慌ててそれを拾い上げた。

「どうぞ、フローゼ」

目を白黒させながら枕を受け取ると、学生は胡散臭そうにロモッカを眺め回した。
「ここは原則的に、部外者は立ち入り禁止だよ。こんな時間に、いったいジードになんの用があるんだ？　ていうかあんた、誰だよ」
ロモッカは帽子を脱ぎ、恭しく腰を折った。
「これはどうも失礼を。あたしはですね、ウェス・ハーシュ家の御者で、ノラン・パエロ・ロモッカと申します。こちらの学府長様宛ての書簡をお届けにあがったんですが、遣いの者が戻ってまいりませんで、どうにも動きが取れなくなっちまいましてね。で、当家のオルグ・ジード様に、どうするべきかおうかがいを立てようかと」
学生は呆れたように言った。
「講堂は七刻半（夜七時）には閉まるし、ワンジオ翁もそれ以降は誰にもお会いにはならないよ。ご自分の居住に引っ込んでしまわれるからね。そんなことも知らないで来たのか」
「いえね、なにしろ、大学府というのは我々からすると天上の世界と言うか、まぁ謎の多い場所ですんで」
ロモッカの言動から、抜けてはいるが怪しい輩ではないと踏んだのか、学生は肩をすくめた。
「いいよ、ついてきなよ。ぼくも理由があって自分の部屋を追い出されたところなんだ。これからジードの友人を訪ねようと思ってたから、ついでにあいつの部屋まで連れていってやるよ」
ロモッカの顔が輝いた。二人は第二学生寮へ向かった。ジードの部屋は三階の角部屋で、ノックをするとすぐに応答があった。
だがドアを開けたのは彼ではなく、そのルームメイトであるホルツェンだった。
「あ？　第一寮のラウロじゃねぇか。……なんだ、その枕」
彼は怪訝そうに眉を寄せた。学生――ラウロは愚痴っぽい調子で答えた。
「いつものカシアンの気まぐれだよ。明日の試合前に精神統一したいから出てけって言われちゃってさ。レミットの部屋にでも転がり

込もうかと思って持ってきたんだ。……そうだ、それより、ジードは？　いる？」

　ホルツェンは肯いたが、浮かない顔だ。

「いるにはいるけどな。超――ぅテンション低いぜ。なんか用か？　あいつに」

「ぼくじゃなくて、この人がね」

　脇に控えていたロモッカがひょっこりと顔を出した。ホルツェンは瞠目した。

「あんた、確か、ジードん家の……」

「ええ、御者のロモッカです。お久しぶりで、ライゾックの坊ちゃん」

　ロモッカは軽く頭を下げた。ホルツェンの頬に微笑が浮かぶ。

「ああ。色々世話になったな、その折は」

「とんでもない。オサイオン市のライゾック家のご令息をおもてなしできるなんて、身に余る光栄ですよ。……ところでですね、当家のオルグ・ジード卿は……」

　ホルツェンは肩をすくめ、親指で室内を指し示してみせた。

「ふさぎ込んで寝てるよ。ここんとこ毎晩こうなんだ、いい加減こっちがまいっちまうぜ。それにしても、なんだってこんな夜に？　よっぽどの急用なのかい」

「ええ、まぁ。……呼んでいただいても？」

　彼はじっとロモッカを見つめていたが、じきに踵を返して室内に引っ込んだ。やがて、冴えない顔色のジードが現れた。

「ロモッカか。いったいなにごとだ？　お前が来るなんて、私は一言も聞いていないが」

　ジードはさして興味もなさそうにそう言った。

「ええ、ジード様にお報せするようなことでもありませんでしたんで。お館様からの書簡をお預かりしてきましてね、こちらの学府長様にお届けするようにと。それはいいんですが、同行してきましたフロンジーネが、講堂へ行ったきり戻ってまいりませんで……別邸

に移るにも移れずで、どうしたらいいのかお知恵を借りに来ました次第で」

「フロンジーネ？　アレクサか」

邸外への遣い役は、ベテランメイドのアレクサかスーシェと決まっている。しかし、ロモッカの答えは彼の予想をあまりにも裏切るものだった。

「いえ、フロンジーネ・ミハルですよ。二ヶ月ほど前にお邸に来た」

「――なんだと……？」

ジードの顔色が一瞬にして変わった。彼はロモッカの両肩をつかんだ。

「彼女がどうして……それに戻ってこないだって？　講堂はこの時間、閉まっていて中へは入れないぞ。それに……女性が構内にいれば、誰かしらの目につくだろう。いったい、どういうことなんだ」

「いえ、ですから、それをおうかがいに……どうしたものかと」

ロモッカはうろたえた。助け舟を出したのはホルツェンだ。

「落ち着け、ジード。ここの構内にいるんならむしろ安全だ。大方、学生の誰かに見咎められて、誰何（すいか）でもされてるんじゃないのか？　女人禁制とは言っても口も利くなってわけじゃあないからな」

「誰かにって、誰にだ、ホルツェン！　そうだとしても騒ぎにならないのはおかしいじゃないか。彼女はまだ完璧とは言えないが、大陸共通語もある程度は理解できるはずだ。出自を明かせばすぐに私のところへ連絡が来るだろう。なのになぜそれがないんだ」

もっともな意見だ。ロモッカはつい口を滑らせた。

「かどわかされでもしたんでしょうかねぇ？　あのとおり、若くて可憐な娘ですから」

その場にいた三人は一斉に彼を見た。ホルツェンがつぶやいた。

「ちょっと待てよ。……おい、ラウロ、お前カシアンに部屋から追い出されたって言ってたな。独りになりたいからって」

「え……ああ、うん。って……まさか、いくらカシアンがウェス・ハーシュ家に対抗意識を持ってるからって、そんなばかなこと……」

不穏な想像が頭を過ぎる。ラウロは枕を抱きしめた。
「あいつはかっとなるとなにをするかわからねぇぞ。ジード、念のためにやつの部屋を確かめた方が――」
「部屋はどこだ。第一寮の何号室だ」
押し殺した声がした。ジードの形相が変わっている。ラウロは思わず後退りながら答えた。
「に……二階の、五号室だよ。いちばん端っこの……」
ラウロの言葉が終わるよりも先にジードは部屋を飛び出していた。
ホルツェンは慌ててそのあとに続いた。

# 第二十四話　エコルガルトへの旅　5

この娘を辱めてやりたい。カシアンの頭に浮かんだのはただその想いだけだった。しかし、皮肉なことに、それはむしろ彼自身の破滅につながる。この場で彼女を陵辱するのは、手っ取り早い手段ではあるものの、実行不可能な方法でもあった。

そこで彼は考えた。ウェス・ハーシュ家のメイドというなら、それはオルグ・ジードの持ち物も同然だ。ならば、彼女の心を奪うことで、彼の所有権を侵害してやろう。仕える家の主人以外の人間に、それもライバル関係にあるウェス・ゴート家の次期当主に忠誠を誓うメイド。中々傑作じゃないか。

カシアンは長椅子に娘を座らせ、旅装を解かせた。臙脂の女官服に包まれた華奢な身体が現れる。

……可憐だ。

彼は口元を押さえた。ウェス・ゴート邸内にいるどのメイドよりも彼女は可愛らしかった。取り立てて美人というわけでもないのだが、不思議と目が惹きつけられる。

「あの……ここ、学府長室、ですか？　学府長様は……」

彼女は訝しげにカシアンを見上げた。彼は咳払いをし、冷静に答えた。

「むろん、ここがそうだ。学府長はいまお忙しい。だがじきに見えるだろう」

娘の表情が疑わしげなものになった。それはそうだ、ベッドやライティングデスクが置かれたさして広くない室内は、どう見ても学府長の構える応接室のイメージには相応しくない。

カシアンは彼女の真隣に腰を下ろし、肩に腕を回した。娘は驚き、身を引こうとしている。

「逃げなくてもいい。それより、オルグ・ジードのことでも聞かせてくれ。……やつは、邸ではどういう風に過ごしているんだ。本当に禁忌を守っているのか」

「……？　禁忌？」

娘は身をよじりながら訊ねた。カシアンはよりいっそうその身体を彼女に密着させ、低く囁いた。

「ああ、そうだ。お前は知らないのか？　大学府に通う学生は皆、卒業するまで女と交わってはならない。この禁を犯した者は退学になる。例外なくな」

娘の頬がうっすらと赤くなった。カシアンは目を見開いた。

「まさか……心当たりがあるのか？　もしや、お前、オルグ・ジードに……」

「違、違う、そんなことありません」

彼女は必死になって否定している。カシアンの胸に凶暴な焔（ほのお）が宿る。

「あの男に……抱かれたのか？　そうなのか、答えろ、お前は……」

「厭、やだ、離して、離してよっ」

カシアンは彼女を押し倒していた。長椅子の上で娘はもがき、聞いたこともない言葉でわめいている。

男の力の前ではあまりに無力な抵抗だ。彼は娘を組み敷いた。自分がなにをしようとしているのか、なにをしたいのか。どこか遠くの方から声が聞こえた。

――抱いてしまえ。そのまま、欲望のままに。

そのことが、オルグ・ジードに対する勝利にもつながるのだぞ。

カシアンは娘を押さえつけ、その口元にゆっくりと顔を近づけた。娘の悲鳴が高くなる。

荒々しい足音とともにドアが開いたのは、この時だった。

部屋に入った時から、なんだかヘンだなとは感じていた。
だって、この室内の様子、どう見てもただの寮だ。同じデザインのベッド、ライティングデスク、チェストがそれぞれ二対。学生向けの二人部屋以外のなにものにも見えない。
この人、嘘をついてる。早くここを出た方がよさそうだ。そう思った矢先、動きを封じるみたいにして肩を抱かれた。
……やばい。なんか空気がおかしい。そもそも、あたしがウェス・ハーシュ家のメイドだって名乗った時、このきれいな男の人の表情が凍りついたような気がする。もしかしたらジード様のことをきらっているのかもしれない。
あたしは長椅子の上で身をよじり、彼から逃れようとした。なのに彼はあたしを離してはくれず、その上、おかしな話を始めたのだ。
いわく、この大学府の学生は、卒業するまでエッチできないとかなんとか……ていうかそんなことどうでもいいし。あたしには関係ないし、だからその手、離して、そこ退いてよ！
「離して、退いてってば、ねぇっ」
あたしは日本語で叫んでいた。咄嗟になると大陸共通語が出てこない。でもきっと、どちらで叫ぼうが同じことだったんだろう。
だってこの人、あたしの言うことなんてまるで聞いてない。
「ジードに抱かれたのか。答えろ、どうなんだ、あいつは禁を犯したのか」
だから違うって言ってるじゃん！　必死で首を横に振っているのに、それすら目にも入っていないのか。彼の顔が目の前に迫ってきた。
「やだ、助けて、誰か」
あたしは必死でもがいた。彼の息が唇にかかった。
ものすごいいきおいでドアが開いたのはその時だった。
荒々しい足音が聞こえ、部屋の中に誰かが入ってきたのがわかった。あたしの名前を呼ぶ声。……少し懐かしい、あの低くて甘い声。
「ジード様……ジード様！」

あたしがそう叫ぶのと、あたしの身体の上に圧しかかっていた男の人が引き剥がされるのはほぼ同時だった。鈍い音がして、その人は吹っ飛んだ。ジード様に強かに殴られたのだ。さらにその人の首元をつかんで引き起こすと、馬乗りの体勢で何発も頬を殴りつけている。彼に続いて部屋に入ってきた男の人がジード様を後ろから羽交い絞めにし、焦ったように怒鳴った。

「ジード、よせ、その辺にしとけ。これ以上やったらお前まで退学になっちまうぞ」

「かまうものか。大学府などどうでもいい！　こいつは、ミハルに……ミハルに触れようとしたんだぞ、私のミハルに」

「自棄になるなって！　未遂だったんだ、だから落ち着け、頼むから。それより彼女の様子を看てやれ、な？」

ジード様の手が止まった。彼は弾かれたように立ち上がり、長椅子の上にようやく起き上がったあたしに近づくと、いきなり抱きしめた。……苦しいほどの力で。

「ジ、ジード様……」

彼はなにも言わず、ただ腕に力を込めた。そして次の瞬間、口づけをされた。

「……んっ……」

すべてを洗い流そうとでもするような、いままででいちばん激しいキス。息苦しさと、後ろめたさと、そういうのとは全然違う別の感覚が一度に襲ってきて、目眩がした。唇を吸われるまま、舌を絡められるまま、文字どおりされるがままになって、身体の芯が熱くなって、どんどん力が抜けていく。

「――無事か？　やつになにもされなかったか」

訊ねられ、あたしは肯いた。唇を離されてもまだどこか夢見心地だった。

ジード様はふたたびキスをし、そして囁いた。いつかみたいにかすれた声で。

「ミハル……好きだ。お前を愛してる」

イド・ライア・テス――以前にも聞いた憶えがある。いまならその意味がわかる。

……でも、どう答えたらいいのかわからない。

「お前の気持ちが私にはないことも承知してる。それでもいい。私のそばにいてくれ。……頼む」

「ジード様……」

胸が痛んだ。感謝してるし、いまは尊敬もしてる。決してきらいじゃない。

けど――それだけでいいんだろうか。こんなに真剣な想いを、そんなあやふやな状態のまま受け止めてしまっても。

口を開こうとした時、後ろの方で呻くような声がした。

「……オルグ・ジード。よくもこの私に、これだけの恥をかかせてくれたな。――この借りは明日の試合できっちり返してくれるぞ」

さっき彼に殴られた男の人が、むっくりと起き上がり、修羅の形相でジード様を睨みつけている。

でも、迎え撃つジード様の眼差しの方が、その何倍も恐ろしかった。

「……望むところだ。試合の形を借りて、貴様には厭と言うほど思い知らせてやる。私の小鳥を汚そうとしたその報いをな」

比喩でなく、空気が震えるのが見える。零下百度くらいの冷たい火花が二人の間で散った。

やがてジード様は、あたしをしっかりと抱き寄せたまま立ち上がった。そして静かに部屋を出て行く。廊下にはなぜかロモッカさんがいた。彼はすっかり安堵した様子であたしを見た。

「フロンジーネ！　心配しましたよ。まぁこれで、ようやく別邸に行けるってもんですが」

そうか、日帰りは無理だから、この近くにあるっていうウェス・ハーシュ家の別荘に泊まるんだっけ。あたしは肯き、ジード様から離れようとした。

ところが、彼の腕は相変わらず固くあたしに巻きついたままだ。

あたしは戸惑い、彼を見上げた。
「ホルツェン。……頼みがある。今夜一晩だけでいい。部屋を空けてくれないか」
思い出した。この、どことなく飄々とした雰囲気の男の人、秋季休暇を利用してウェス・ハーシュ邸に泊まりに来た、ジード様のご学友って人だ。彼は、ジード様の申し入れを聞くなり、にやりと意味深な微笑を浮かべた。
「そう来ると思ったぜ。ああ、カシアンじゃねぇが、精神統一ってやつのためにな。気にするな、俺はラウロに倣ってレミットのとこにでも行くからよ」
「悪い」
そう言うジード様の頬が心なしか染まっている。……え？　どゆこと？
「ロモッカ、別邸にはお前一人で行ってくれ。ミハルは責任を持って私が預かるから」
「へっ？　いや、しかし、坊ちゃま……ここの規律では、確か……」
ロモッカさんはあたしをちらりと見、口ごもった。ジード様は咳払いをした。
「大丈夫だ。問題を起こすつもりはない。そういうことだから、いいな、ロモッカ」
強い口調にロモッカさんはそれ以上抗おうとせず、肩をすくめた。混乱するあたしをなかば引きずるようにして、ジード様は歩き出した。

あたしはジード様に連れられて彼の部屋に入った。
とは言っても、入室する時はさすがに躊躇した。
だって、ひょっとして、二人っきりで一晩、過ごすってこと？
それって……やっぱ、まずくないですか？
そう思って敷居をまたげないでいるあたしに、彼はほんの少し含

羞んだような表情を見せ、右手を差し出した。
「おいで」
ずきん、と心臓が疼いた。
断るべきだ。理性はそう告げている。
でも、あたしは彼の手を取っていた。
ドアが閉まる。……意味もなく緊張してきてしまった。
引き換えジード様はわりと普通のテンションで、あたしのコートや帽子を入り口近くに置かれた木製のコートハンガーに引っ掛けると、書簡筒を手にした。ウェス・ハーシュ家の家章が入った正式なものだ。
「父上の御名で書かれたものか。しかし……いったい、どういう内容なんだろうな」
しばし見つめるものの、開けようとはしない。ライティングデスクにそれを置くと、ベッドに腰掛け、突っ立ったままのあたしを手招きした。
……身動きができない。行くべきか、行かざるべきか。
あたしの葛藤を読み取ったのか、彼はふと微笑した。
「そんなに警戒しなくてもいい。自分を失うつもりはないからな。……ただ、そばにいて欲しいんだ」
「……」
ランプが照らすほの暗い部屋の中、あたしは操られたように彼のもとへと歩いた。多分、顔は真っ赤になっていたと思う。目を合わせないようにうつむきながら、その隣へ浅く腰を下ろす。心臓が鳴り響く。
……なんで？　ついこの前までは、二人きりになろうと別に平気だったのに。
雰囲気に流されてるのかもしれない。だってあたしも、自慢じゃないけどこの手のことにそれほど免疫というか、経験があるわけじゃないから。
彼の手がごく自然にあたしの肩を抱いた。

……かすかに、乱れた息遣いが聞こえてきた。
この部屋は静か過ぎて、心の声までが漏れてしまいそうだ。
ジード様はあたしを見つめ、囁いた。
「接吻だけなら……かまわないか」
熱っぽい瞳が目の前にあった。……だめ。だって付き合ってもいない相手に、そんなこと、あり得ないでしょ。
なのに、そう思っていたはずのあたしの頭は勝手に肯いた。ジード様は間髪入れずにあたしの唇を奪った。

指先がしびれる。指先だけじゃない、全身の感覚がとろけていく。息が荒くなり、頬が熱を帯びる。身体の奥の方から、なにか熱いものがじわりとあふれ出す。

……これ以上はしないで。気持ち良すぎて、おかしなことを言ってしまいそうだから。
あたしは弱弱しく抗った。
「だめ……だめ、です……」
嘘。そんなこと思ってもいない。あたしは嘘つきだ。
もっとして。
キスをして、その手で身体中を触って。

――あたしを、抱いて。

あたしの目は、きっと、そう囁いていた。
でも、彼は、自分で宣言したとおり、キス以上の行為はしてこなかった。あたしをぎゅっと抱きしめ、つらそうに告げる。
「私は……生涯、お前以外の女には触れない。だから、お前も、一年待ってくれ。あの邸で、ほかのどんな男のことも見ないで私のことだけを考えていてくれ」
泣いているみたいな切ない声だった。

「私が戻るまで、どこにも行かないでくれ。……愛してる」
熱い息が耳朶を撫でる。
肯きたい。「ユアン・イド・レヒト」――そう答えたい。
……でも、あたしは、帰らなきゃいけない。元の世界に。
だから、いまここで返事はできない。
ジード様はなにかを感づいているのか、どこにも行くな、そのフレーズをずっと繰り返していた。

あたしはメイド服を脱ぎ、持ってきた寝巻きに着替え、彼に誘われるままベッドに入った。
そして一晩中、彼の腕枕に寄り添って眠った。

# 第二十五話　学内対抗戦　1（前書き）

ここからしばらく、ソフォモンドの「団体戦」のお話になります。
大学時代、フェンシングを四ヶ月だけかじっていました。
あの「アンガルドゥ」の姿勢が意外なほどきつかったことを思い出しつつ、けっこう楽しんで書きました。
とはいえ、相当描写が拙いと思います。それ以来格闘とか無縁なので。……その辺、多めに見ていただけるとありがたいです。

# 第二十五話　学内対抗戦　1

講堂二階の一面をぶち抜いて造られた武芸場で、ソフォモンドは行われる。一、二年生はその成り立ちや作法といった精神論をおもに学び、三年生になると型や組み手の習得が中心になる。その集大成が四年生になってから実施される学年対抗戦だ。

元々が、女神イグノディアスへの忠心を誓う騎士道精神を育てるために創設された大学である。ごく初期には授業といえど真剣を用いていたらしい、という話を聞き、レミットなど運動神経に自信のない生徒は震え上がったものだ。

「まずは個人戦。休憩を挟んで、次が団体戦か。まあソフォモンドの花は団体戦だからな、個人戦は前座みたいなもんだ」

そんな声があちこちで聞かれる。事実、個人戦で重視されるのは、勝敗そのものよりも、演舞や作法の美しさといった武学（ぶがく）に対する個々の理解度だ。闘技として楽しめるのは三名ずつのチームを組んで行われる団体戦で、トーナメント形式で優勝が決定され、その栄誉は成績の査定におおいに影響すると言われている。

開始時刻の二刻半（午前九時）を迎え、首から下をぴっちりとした白の武芸服に包まれた学生たちがずらりと武芸場に集合した。

「ああ、どうしよう、めちゃくちゃ緊張してるんだけど。ぼく順番早いんだよ、心の準備する閑もないよ」

レミットはその青ざめた両頬を手のひらで押さえた。

「個人戦なんて肩慣らしだろ。それよりお前、団体戦の方気にしろよ。俺たち同じチームなんだからな」

横のホルツェンは余裕の表情だ。昨夜、ラウロとともにレミットの部屋に転がり込み、長椅子で寝たせいで節々が痛い。にもかかわらず彼の顔が晴れやかなのは、入学以来の親友であるウェス・ハー

シュ家の跡取り息子が、昨日までとはうって変わって生気を取り戻したのを確認できたからだった。

朝になり、食堂で顔を合わせた時のジードは、それまでの彼とはまるで別人だった。

「――よっぽど、良かったってことか……？　いやいや、ワンジオ翁もあそこにああして鎮座してるわけだしな……禁を破ってりゃ気づかれるはずだ」

ホルツェンはぶつぶつと独りごちた。ソフォモンドはカリキュラムの中でもっとも重要視されている科目のため、特に対抗戦においては学府長が臨席するというのがお約束になっているのである。

あの、異国情緒漂う素朴なメイドとなにがあったのか。肌を合わせたのか。ホルツェンは敢えて訊かないことにした。

元気になってくれりゃ、それでいい。

こいつが退学になったら、俺はやっぱり淋しいしな。

「どうしたんだ、ホルツェン。私の顔になにかついているのか」

視線を感じたのか、ジードが訝しげに友人を見た。ホルツェンはなに喰わぬ顔でこう返す。

「いや。ま、もうしばらくはお前との付き合いも続きそうだなと思ってさ」

意味するところに気づき、ジードの頬がさっと赤らんだ。

実のところ、彼は、昨夜一晩、ほとんど寝ていない。

最愛の相手と同衾（どうきん）している、その状況でそもそも眠れるはずなどない。

馬車での長旅に疲れ切っていたのか、未明の方は、ベッドに入って十分も経つ頃には、安らかな寝息をたて始めた。その無垢な寝顔をこれだけ近くで見つめられる幸せをかみしめつつ、しかし、これだけ近くにいながら身体を重ねられないもどかしさに厭というほど悩まされる一夜。

だが、それでも、彼は満たされた。春までは会えないと思っていた未明に会えたのだ。

その上、彼女の態度は明らかに以前とは違っていた。自分の気持ちを完全に受け入れてくれたわけではないが、拒否もしなかった。邸を発つ前なら、おそらく同じベッドで休むことには同意もしてくれなかっただろう。

ジードは自らの唇にそっと触れた。未明とつながることができた、唯一の箇所だ。

やわらかく、あたたかく、そして切ない、春の宵にも似た物狂（ものぐる）おしさ。そんな感情がふたたび蘇るようだった。

「で、彼女、どうしたんだ？　もう帰っちまったのか」

ホルツェンは小声で訊ねた。開会式が始まっていた。

「ああ……朝、起きるなり学府長室へ連れて行ったよ。勤勉な娘だし、パドマにも可能な限り早く戻るよう言い含められているんだろう。――これでしばらくは会えないことになるな」

ジードは目を伏せた。

別れ際にもう一度唇を寄せた。そして、自分がいない間、ほかの男のことは考えないよう迫った。

未明は頬を染め、曖昧に肯き、しかしはっきりと囁いた。ユアン・イド・レヒト。昨夜は聞かれなかったＹＥＳの返事。

愛してる。……なんど言っても足りないが。

なぜここまで彼女に惹かれるのか、ジードは自分でも不思議だった。一目惚れ。言ってみればそういうことになるのだろうが、どうしてその相手が、突然どこからともなく現れた異国の娘でなければならないのか。

まるで――そう、現当主、オルグ・ヴィネックがそうだったように。

学生たちが散り散りになった。「開始（ヴォルラ）」の号令が発せられたためだ。ソフォモンドの個人戦が始まろうとしていた。

# 第二十六話　学内対抗戦　2

一刻半（朝七時）過ぎに目を覚ましたあたしは、自分の状況をあらためて確認し、茹でたように真っ赤になった。

すぐ真隣にはジード様の身体があった。一晩中、腕枕をしてくれていたんだ。

そう思うといても立ってもいられない気持ちがした。

カーテンを通し、冬の朝日が室内をやわらかく照らしている。あたしは、まだ眠っている彼の顔をじっと見つめた。

……寝てても崩れない顔って、こういう顔なんだなぁ。妙な感心までしていた。

――私が戻るまで、どこにも行かないでくれ。愛してる。――

そう言われたことを不意に思い出し、いっそう顔が赤くなる。

お腹の、鳩尾（みぞおち）の辺りが疼いた。痛いくらいに。

……あたしって、この人のこと、好きになっちゃったの？　……いつの間に？

でも――でも、あたしは、いつまでこの世界にいられるのかわからない。戻る方法を探さなきゃならないし、もしもそれが見つかればきっと……おそらく、元の世界を選ぶだろう。

それなのに、彼を受け入れるようなことを言うのって、卑怯なんじゃないだろうか。

「ミハル」

急に名前を呼ばれ、あたしはびくりと震えた。驚いた、起きてたんだ。

ジード様は上体を起こすと素早く腕を伸ばし、あたしを抱きしめ、

唇を寄せた。
……お腹の底が熱くなる。頭がぼうっとしびれる。
キスはものすごく長い間続いた。神様との「契約」のために、その先の行為はいまはできない。彼はそう言っていた。だからなのか、まるでキスだけで補完しようとでもするみたいに彼は激しかった。
「ミハル……」
唇を離すと、彼はあたしの頭をやさしく撫でながら囁いた。
「私が戻るまで、ほかのどんな男のことも考えないで……いつも私のことだけを考えていてくれ。私もむろん、お前のことだけをいつも想っている。約束……してくれないか」
あたしは肯いていた。肯いたことすら気づかなかった。
そして、昨夜は言えなかった承諾の言葉を口にした。

大学府の学府長さんは、童話に出てくる小人――ドワーフとかゴブリンみたいな感じの人で、いかめしいおじいさんを想像していたあたしはやや面喰らってしまった。
「よく来てくれましたね、フロンジーネ。さ、そこにおかけなさい」
甲高いのにどことなく知性を感じさせる声だ。あたしは一礼してから椅子に腰掛けた。
預かってきた書簡を筒ごと手渡す。彼は家章を一瞥してから中身を検めた。
「確かに。……遠いところを、さぞ大変だったでしょう。時にフロンジーネ、ソフォモンドに興味は？」
唐突に訊かれ、あたしはきょとんとした。
「ソフォ……モンド？　それは、なに、ですか」
「ああ、失礼。我が大学府での教目のひとつで、古い武道ですよ。学生は皆、これを習得することになっていてね。ちょうど今日は学内でチーム対抗戦が行われる予定なんです。もしよければ、見学し

ていきませんか」
「え……でも」
あたしは躊躇った。別邸にいるロモッカさんが、そろそろ迎えに来てくれる頃のはずだ。
その思いが顔に出たのか、学府長さんはにっこり笑って言った。
「従者の方になら、ここから電話を入れればよろしい。ぜひそうしておいきなさい。……ただ、お聞き及びかもしれませんが構内は一応、女性の立ち入りを禁じておりますのでね。都合上、これを着ていただくことになりますが」
「はあ」
学府長さんはそう言って、真っ黒なローブみたいなものを傍らのチェストの抽斗から取り出すと、テーブルの上に置いてみせた。……妙に用意がいい。
「これは女性の賓客をお迎えする場合に来ていただく道衣でね。イグノディアス神の逆鱗に触れぬよう、ヒジリギクの灰で清めてあるのです。そう、いま着ているその女官服の上から羽織って、首のところをひもで留めて。そうそう、それにフードをかぶって……それでよろしい」
満足そうに肯く学府長さん。なんだか、わけがわからないことになってきた。スポーツ観戦はきらいじゃないけど、そんなことのんびりやっていていいんだろうか。あたし、この世界じゃただの使用人に過ぎないのに。
ノックが鳴り、灰色のロングワンピースみたいな服を着た男の人が、給仕車を押しながら入ってきた。どうやらここの職員らしい。
「失礼いたします。お客人の方に、お食事をお持ちいたしました」
「ああ、ご苦労様。……フロンジーネ、朝食はまだなのでしょう？武芸場へ移る前に食べていかれるといい。団体戦が開始されるまではまだ半刻（約一時間）以上ありますから」
学府長さんの言葉にあたしは戸惑った。
「でも、あの……」

「エヴァノス、ウェス・ハーシュ家の別邸に連絡を入れて差し上げなさい。迎えは四刻過ぎ（正午）でいいとね」

職員の男の人は心得た様子で肯くと退去した。

学府長さんは振り向き、悪戯っぽくウインクをしてきた。

「さ、どうぞ、遠慮なさらず。我が大学府の食堂のメニューは中々の味なのですよ、フロンジーネ。特にその、斑野鹿（まだらのじか）のソテーは絶品でね。冬季以外は禁猟で口にする機会も少ない。肉は苦手では？」

「いえ、でも、あの」

「なら、ぜひ。ああ、私はこれから開会式に出なければなりませんので、しばし席を外しますが、どうぞごゆっくり。なにか用事があれば、そこのベルを鳴らすといい。誰かしら来てくれますから」

「……」

学府長さんはあたしを残して部屋を出て行ってしまった。あたしは途方に暮れた。

仕方なく、用意してくれた食事に手を伸ばす。ソテーは確かに美味しかった。赤味の肉で、赤獅子（クロッサ）みたいな臭みもない。巧く調理したエゾジカみたいな食感だ。

ていうか、こんなところでまったりとご飯食べてていいんだろうか。あたし。

鋭い音とともに剣が宙を舞った。動きを封じられ、レミットは呆然と立ちすくんだ。

「勝負あり！　勝者、ルグド・ホス・レヴァンノ」

無情な審判の声が響き渡る。対戦相手と握手を交わした後（のち）、レミットは肩を落として待機席へと戻った。

「あああ、やっぱり負けた。それも開始一分で……これだから厭なんだ、ソフォモンドなんて」

仲間の体（てい）たらくにホルツェンは渋い顔だ。

「お前、いくらなんでも弱すぎだろ。ほかのクラスのやつらになんて呼ばれてるか知ってんのか？　逆ポイントゲッターだぞ、お前と当たれば必ず勝てるからって。少しは奮起しろよ、悔しくないのか」

レミットは涙目で級友を睨みつける。

「どうせそのとおりだよ。ホルツェンなんかにぼくの気持ちがわかるもんか」

「そう気を落とすな、レミット。個人戦の成績はそれほど重視されない。ポイントはこのあとの団体戦で取り戻せばいい」

ジードの言葉は慰めにはなっていない。ホルツェンは深々とため息を吐き出した。

「闘気満々の相手に勝てるくらいなら、演舞の延長線みたいな個人戦で負けるわけがねぇだろ、そもそも。――とにかく、俺とお前で稼ぐしかねぇな。期を通して、団体戦は一戦だって棄てられないんだからな」

「普段、成績とか全然気にしてないくせに、なんでソフォモンドの時だけは燃えるんだよ、ホルツェン」

「勝負ごとで燃えるのは男の性だろうが。俺がこだわるのは査定なんかじゃねぇ、ただ純粋に勝敗だ」

ホルツェンは憤然と答えた。やっぱり筋肉ばかだ、とレミットはこっそりつぶやいた。

相手の出鼻をくじくという意味で、先鋒は腕に覚えのある俺。中堅はこの際目を瞑って、レミット。そして大将はもちろん、オルグ・ジード。ホルツェンは得々と繰り返した。

「そういや、あいつ、昨夜はあれからどうしたんだろうな。精神統一とやら、できたのかね」

意味深な笑みを浮かべるホルツェン。ジードの顔つきが変わった。

「俺たちはどっちもシードされてる。順当に行けば、当たるのは決勝戦だ。それまでは、お前のためにも絶対に負けるわけにはいかねぇな」

「――ああ」

ジードの拳に力が入った。彼だけは、カシアンだけは、どうしても赦すわけにはいかないのだ。

斑野鹿のソテーもエッカも、デザートのチーズまで食べ終えてしまっても、学府長さんは戻ってこなかった。ゴブレットに注いだ水も飲み干し、これからどうしようかと思っていると、ノックが鳴った。

「は、はい」

あたしは思わず返事をしていた。来たのはきっと学府長さんだろう。ところが、ドアが開いて姿を見せたのは、思いも寄らない人――女性だった。それも、とびきりきれいな。

あたしと同じか、ほんの少し年上くらい。ふんわりとウェーブのかかった長い金髪、バサバサの睫毛に覆われた大きな薄紫の瞳。濡れたみたいに輝くピンク色の唇。そしてなぜか、あたしがさっき学府長さんに貸してもらったのと同じ黒いローブを着ている、西洋絵画から抜け出したような美人だ。

彼女はあたし以上に驚いているらしく、形の良い口をぽかんと開けてこちらを見つめている。

「……あ、あなた……どなた？　その道衣は……ワンジオ翁は、いらっしゃらないのかしら」

透き通るようなきれいな声。鈴を振るような声って、きっとこういうのを言うんだろう。

「学府長様、えーと、いま、開会式に……」

口ごもりながらの危うい答えだったけれど、彼女はそれで得心したらしい。

「ああ、そうね、今日はソフォモンドの対抗戦がある日でしたわね。それじゃあ武芸場にいらっしゃるのね、きっと」

あたしは曖昧に肯いた。彼女はそのまま部屋を出て行こうとして、

ふと足を止めた。

「その道衣を着ていらっしゃるってことは、あなたも来賓の方なのね。よろしかったらご一緒しません？」

世にも麗しい微笑み。同性ながら、あたしは思わず赤面してしまった。

「さ、早く行きましょう、団体戦が始まってしまいますわ」

そう急かされ、あたしは慌てて彼女に続いた。学府長さんを待っていた方がいいような気もしたけれど、なんとなく、逆らえないような雰囲気だったのだ。

# 第二十七話　学内対抗戦　3

ドックと呼ばれる円形の演台に二名の選手が向かい合って立ち、審判の合図で剣を交える。五分ほどで決着がついた。猛攻勢を浴びて追い詰められた片方の選手がバランスを崩し、演台から転げ落ちたのだ。

待機席から歓声が上がった。おもに第一学生寮の生徒たちだ。勝者がマスクを取ると、現れたのはカシアンのチームの先鋒の学生だった。

「やっぱ……強いよな、あいつら」

レミットが怯えたようにつぶやいた。愛用の剣――レイピア［注-中世ヨーロッパにおいて護身や決闘のために用いられた片手剣］によく似た細身の長剣である――の手入れに勤(いそ)しみながら、ホルツェンは鼻を鳴らしてみせた。

「大したことねぇよ。あいつは力で押してくるだけだ。中堅のやつも、でかいだけで基本の動きは単純だ。お前にも充分勝機はあるって」

全試合が半分ほど進行した時点で、ジードたちもカシアンたちも、それぞれ勝ち上がっていた。そんな中カシアンは武芸場の一角にチームメイトを集め、作戦会議を開き、尋常ならぬ表情で彼らを鼓舞(こぶ)した。

「いいか。このままいけばあのエルミッダ寮のやつら、オルグ・ジードのチームとぶつかることになる。……なにがあっても負けてはならん。もしも負けた時は……この私の権限において、大学府から永久追放だ、そう思え」

二人は縮み上がった。カシアンは、やると言ったらなにがなんでも実行する男だ。なにしろ実家の威光がある。

カシアンが座を外した隙に、彼らは顔を寄せ合って密談を始めた。
「お前の相手は逆ポイントゲッターのレミット・ウォーザロワ・キッファンだろ、あれはいいとして……問題は、先鋒のホルツェン・オルレアド・シモン・ライゾックだよな」
「ああ。……やつは強い。個人戦じゃ負けなしだ、ただ実戦向きの戦い方を好むらしくて、教授連からの評価はいまいち低いらしいがな」
先鋒として彼と当たる予定の学生は肯いた。
「だからまずいんだ。団体戦はとにかく、勝てばいいんだから。とにかく、俺たちは確実に勝たなきゃならないんだ、そのためには手段なんか選んでる場合じゃない」
彼らは見つめ合った。そのまま放っておいたら手でも握りそうな雰囲気だ。
密談はこの直後に終了し、二人はこそこそと行動を開始した。

決勝戦が近づいていた。待機席で抜かりなくイメージトレーニングを繰り返すホルツェンに、声をかける者がいた。
「ホルツェン」
振り向くと、カシアンのチームの先鋒を務める、ハリドラン・ソーマス・オラエルが立っていた。思わず身構えるホルツェンだったが、相手の表情は対照的に親しげである。彼はホルツェンに向かって、あまつさえ右手を差し出してさえみせた。
「決勝戦、ぼくの相手は君だよな。よろしく、お手柔らかに頼むよ」
ホルツェンは訝しげに彼を眺めていたものの、すぐに微笑を浮かべてその手を取った。
「……ああ、こちらこそ。しかし、お前らも大変だな。あのカシアンのお守りしなきゃならないなんて」
ハリドランは苦笑した。

「とんでもない。あのウェス・ゴート家の次期総帥と同チームなんて、光栄の至りだよ。ああ、そういや君のチームの大将も、カシアンと張るぐらいの家柄なんだったっけね」
「まあ、そうなんだろうな。上流の連中で、ウェス・ハーシュの名前を知らないやつはいないだろうから」
そこでハリドランはふと黙り込んだ。そして声を潜め、意味深な顔つきでこう切り出した。
「……試合前にこんなことを言うのもなんなんだけど……ちょっと、君の耳に入れておきたいことがあるんだ。オルグ・ジードのことで」
ホルツェンの眉がぴくりと動く。
「なに？　なんだそりゃ、なんの話だ」
ハリドランは屈み込み、ホルツェンに耳打ちした。
「ここじゃちょっと……ほかの人間には聞かれない方がいいと思う。出られないか」
ホルツェンは周囲を見回した。ちょうどジードやレミットは席を外していたが、確かに同級の連中がひしめいているこんな中では、迂闊に訊き出さない方が得策かもしれない。
「――わかった」
彼は腰を上げた。剣を席に置き、ハリドランに続いて武芸場を出る。二人はそのままピロティーへ向かった。

どこぞのお姫様のようなこの女の人に引っ張られるまま、あたしは武芸場の貴賓席に座らされていた。ここは女性専用席らしく、周囲を正絹でできた御簾のようなもので囲まれている。
「ダルージュ織りと言って、こちらからは見えるけれど、向こうからは見えませんの。便利でしょう」
彼女はそう言って悪戯っぽく笑った。そんな表情はまるで少女みたいに愛らしい。

「それにしても、ワンジオ翁はこちらにもいらっしゃらないのねぇ。もう団体戦も始まっているというのに、どうなさったのかしら」

確かに、その言葉どおり、学府長さんの姿はここでも見当たらなかった。あたしはちょっと不安になってきた。

「あの……あたし、戻って様子、見てきます」

女の人は目をぱちくりさせた。

「まあ、あなたがそんなこと……ここで待っていればいずれみえると思いますのに」

でも、朝食までご馳走になっておいて、勝手に部屋を抜け出したというひけ目もあった。あたしは貴賓席を抜け出し、最上階の学府長室を目指した。

ところがである。

「ここ……どこぉ」

わずか十分後、あたしは途方に暮れてつぶやいていた。同じ棟の上階から降りてきただけのはずなのに、どうやっても戻る道が見つけられない。学府長室にも、それどころか武芸場にも。

早い話、迷ってしまったのである。

拡張工事のしすぎなのか、或いはテロ対策のつもりなのか、この建物の各階をつなぐ階段はいちいち途切れており、その都度位置がずれていく。案内書きはあるにはあったけれど、どうにもわかり辛い書体で書かれているため、文字の判別すらできない有様だ。

やばい。とにかく、誰かに訊くしかない。そう思っていた時だ。

ここの学生らしき若い男の人が、小走りに歩いてくるのが見えた。白い武芸服に、手にはソフォモンドで使うのだろう一振りの剣が握られている。あたしは迷いなく彼に声をかけた。

「あの、すみません」

彼は大仰なまでに肩を震わせた。女人禁制の構内で女に出くわしたことがよほど驚きだったのか。

「すみません。えと、学府長室、どう行ったらいいですか」

返事がない。もしかして口も利いちゃいけないとか？　いや、で

も、ジード様やその友達のホルツェンさんは気にしてないみたいだったけど……。あたしはもう一度繰り返した。
「あのう、学府長室、どこにありますか」
「……あ、ああ、学府長室ね。えーと……そこの突き当たりの階段を昇って、次の階に出たら今度は反対側の階段を昇って、そしたら……」
余計に混乱してきた。それが顔に出たのか、男の人はあたしをじっと見、こう言ってくれた。
「俺……連れていってあげようか」
あたしは顔を輝かせた。

「おい！　遅いぞ。決勝戦が始まっちまうじゃないか」
ハリドランは、武芸場にようやく戻ってきた彼の相棒、グラッド・ロワナ・ギルシュ・アシュレンを見るなり苛ついた様子で駆け寄ってきた。
「不戦敗にでもなってみろ、俺たちその瞬間に永久追放なんだぞ。わかってるのか」
しかし、彼の言葉は、グラッドの耳にはろくに届いていないらしい。ハリドランは眉を曇らせた。
「おい……おい！　聞いてるのか、グラッド」
グラッドの唇から、夢見心地のつぶやきが漏れる。
「……可愛い……」
「ああ？　……なんだって」
ハリドランは額に青筋を浮かべた。なんなんだ、いったい、この大事な時に！
彼は相棒の肩をつかむと乱暴に揺すぶった。そして声を潜めて訊ねた。
「お前、ちゃんとやってくれたんだろうな？　やつの剣はどうした」

「剣？　……ああ、剣ね。もちろんすり替えたさ、ほら」
グラッドは手元を示してみせた。そこには一振りの剣があった。
……ただしそれは、彼のものではない剣だ。
ハリドランはにやりと狡猾な笑みを浮かべた。
――先ほど、オルグ・ジードの話を餌にホルツェンをピロティーまで連れ出した隙に、彼の愛用の剣を別の剣とすり替えておくよう、相棒のグラッドに指示をしておいたのである。それもただの剣ではなく、ちょっとした細工を仕込んだ「代用品」を。
「それにしても、あいつよっぽどオルグ・ジードに惚れ込んでるんだな。あんなに簡単に釣れるとは正直思わなかったぜ」
「で、なんて言ってごまかしたんだよ。いまさら嘘だなんて通じないだろ」
グラッドの肩に腕を回し、ハリドランは囁いた。
「……やっぱり試合が終わってから話すってさ。この話をすることで、俺自身、精神的なダメージを受けるかもしれないからって。そう言われちゃ引っ込むしかないだろ？　しかも、巧くすりゃ、ホルツェンのメンタル状態そのものにも悪影響を与えられるしな」
愛用の剣が別の剣にすり替わっていても、気づかない公算が高くなる。グラッドは口笛を吹いた。
「お前って悪いやつだなぁ。付き合い長いけど、知らなかったよ」
相棒の賛辞に忍び笑いを漏らすハリドラン。そこへ折りよく、チームの大将であるカシアンが近づいてきた。二人は顔を見合わせ、一斉に口を噤んだ。

# 第二十八話　学内対抗戦　4

学府長室には果たして学府長さんが戻ってきていた。あたしは、付き添ってきてくれた男の人に頭を下げた。

「ありがとうございました。すみません」

頭を上げる。……またも、反応がない。どうしちゃったんだろう、この人。

「あの……」

彼はじっとあたしを凝視している。確かに構内で女子を見かけること自体相当めずらしいんだろうけど、そこまで珍獣扱いしなくても……。

「フロンジーネ、わざわざ申し訳ない。いま一緒に行きますよ。ああ、君は先に戻っていなさい、じきに決勝戦でしょう」

その声で彼は我に返ったらしく、弾かれたように学府長さんに敬礼すると廊下を駆け出していった。

学府長さんは、それまでどうやらあたしが預かっていた書簡の内容を確かめていたようで、巻物を筒に仕舞い込むと椅子から腰を上げた。あたしたちは連れ立って階下へ降り、武芸場のそれぞれの観覧席に落ち着いた。

「あら、絶妙のタイミングですわ、ほら、決勝戦が始まりますわよ」

隣の「お姫様」が興奮した面持ちで御簾（みす）越しに中央の演台を指差した。見ると、剣とマスクを手に歩いてくるのは例の、ジード様の友人のホルツェンさんだ。すごい、決勝戦なんて、強いんだあの人。

対戦相手の男の人はやたらと体格がいい。ホルツェンさんも大柄だけど、それをさらに上回ってる。

武芸場は水を打ったように静まり返った。審判の声が短く響く。

「構え（セ・ジョスト）て」

二人はやや腰を落とし、身体を斜めにしつつ、剣を相手に向けて突き出す独特のポーズを取った。これがどうやらソフォモンドの基本姿勢らしい。

「始め（モノ）」

号令が降りるが早いか、相手の選手がものすごいいきおいで突っ込んできた。ホルツェンさんは冷静にそれをかわす。立ち位置が変わる。歓声が沸き上がる。

ふたたび対峙し、睨み合う。じりじりと間合いを詰め、でも隙を見計らっているのか、どちらも飛び込もうとはしない。そのままの状態で三分ほどが経過した。学府長さんの話では、ソフォモンドには時間制限はないらしい。だから決着ははっきりとした勝敗によってしかつけられないのだそうだ。

五分が過ぎる頃、動いたのはホルツェンさんの方だった。居合を思わせるスピードで彼は刺突（しとつ）した。あたしのようなど素人が見ても、彼のフォームはすごくきれいだった。ていうか、勝ちにいくって意思にあふれている。切っ先は相手の選手の鳩尾にもろに入った。決まった、と誰もが思った。

――そして誰もが声を失った。

相手の選手が倒れ、膝をつくよりも先に、ホルツェンさんの剣の刀身が折れ、演台の上に滑り落ちたのだ。

武芸場から一切の音が消えた。が、一瞬の後（のち）、冷酷な審判の声が勝敗を決した。

「それまで！　ホルツェン・オルレアド・シモン・ライゾック、剣の毀損（きそん）により失格。よって勝者、ハリドラン・ソーマス・オラエル」

あたしは唖然としてホルツェンさんを見つめた。武芸場は野次と暴言を含む大歓声に包まれた。

「ふむ……」

すぐそばの席に座る学府長さんの意味深なつぶやきも、もちろん耳には入らなかった。

呆然と演台に佇んだままのホルツェンのもとに、ジードとレミットが駆け寄ってきた。
「ホルツェン……大丈夫かよ、おい」
レミットの声も届いているのかいないのか、ホルツェンの口元からは震えるような声が漏れる。
「なんで……なんで、折れる？　こんなこと、いままで一度だって……」
ジードは彼の手元から、無残な姿になった剣の柄（ヒルト）をもぎ取った。古武道らしく、複雑な曲線を組み合わせて作られている鍔（つば）部分をためつすがめつし、やがて言った。
「……名前の刻印がない。これはお前がいつも使ってる剣じゃないぞ」
ホルツェンは弾かれたようにジードから柄を奪った。彼の言うとおり、鍔に彫り込まれているはずのおのれの名は、どこにも見当たらなかった。
「――どういうことだ、だって俺は……この席に自分の剣を置いて……そのあとであいつと……」
彼ははっと顔を上げた。ジードが低い声で訊ねる。
「試合前に、どこかへ行っていたみたいだが……心当たりがあるようだな」
ホルツェンの顔が怒りに歪む。彼は吠えた。
「あの野郎……引っかけやがったな、よくも！　くそっ、俺としたことが、気づきもしなかったなんて……」
そう言って頭を掻き毟（むし）る。すり換えられた剣の違いに気づけなかった理由はよくわかっていた。
ハリドランが匂わせた親友の醜聞。その内容が気にかかるあまり、注意力を失くしていたのだ。
卑怯な手には違いない。だが、実戦ではそれだって戦術のうちだ。

ソフォモンドが重んじる騎士道精神には反するかもしれないが、元々ホルツェン自身、イグノディアス神のために武学を修めているわけではない。

勝利がすべて。その哲学は、皮肉なことに、ホルツェンにおのれのまごうことなき敗北を突きつける結果となった。

「ホルツェン……」

レミットはおろおろと友人に声をかけた。だが、瀕死の状態になろうがただでは起き上がらないのがこの男だ。

「――上等じゃねぇか。あっちがそう来るなら、こっちももう手は選ばねぇ。いいか、レミット、お前はなにがなんでも、死んでも勝つんだ。いいな」

彼は不敵な笑みを浮かべながら、小柄なレミットの両肩をがっちりとつかんだ。レミットは仰天した。

「そんな、無理だよ！　知ってるだろ、逆ポイントゲッターって渾名（あだな）。初めから中堅試合は棄てるはずだったじゃないか。大体ぼくがあんなマッチョに勝てるわけが……」

「勝つんだ。その気になりゃ勝てる。いいか、お前に足りないのは気概だ。死んでも勝つっていう気迫だ。お前、やる前から自分が負けたとこを想像してんだろ？　それがだめなんだよ。勝ったとこだけを想像しろ、いまから五分間、ひたすら勝った瞬間だけを想像するんだ」

レミットは絶句し、泣き出しそうな顔をした。いや、実際、その目はすでに潤んでいた。

ジードはなにも言わず、黙って二人の様子を見つめていた。

カシアンは満足そうな笑みを湛え、先鋒のハリドランを労（ねぎら）った。

「よくやった。まあ当然の結果だがな。あんなエルミッダ落（おちこぼ）れの連中に、そもそも我々が負けるわけがない」

ハリドランは追従笑いを浮かべた。
「そのとおりだよ。とにかく、これで、次の中堅戦に勝ってしまえばもうぼくらの勝利は決定するわけだし。なぁグラッド、頼んだぜ。ま、お前の場合は学年一ラクな相手だけどな」
相棒の返事がない。見ると、彼の視線は明後日の方向を彷徨っている。またか、とハリドランは拳を握りしめた。
……黒の道衣（ドゥーグ）は、位の高い女性の賓客のみが着る大学府の伝統着だ。ということは、あの可愛らしい娘は、ああ見えて高貴な血筋の姫なのか。
グラッドは、先ほど偶然出会った見知らぬ異国風の娘の面影を脳裏に思い描いていた。片言じみた言葉遣いは、かえって彼女の無垢な印象を強め、よりその魅力を高めているようにさえ思えた。
――もう一度会うことは可能だろうか。まだどこかに、この大学府の構内にいるのだろうか。
その時、喧騒の中から、同級の生徒の話し声が聞こえてきた。
「ああ、来てるみたいだよ、今日。ほら、この大学と実懇（じっこん）だろ、ノルド家って」
「ほんとかよ、あのレノラ姫が？　噂には聞いてるけど、すごい美人なんだろ。見てみたいよな」
ノルド家のレノラ姫？　グラッドは弾かれたように彼らを見た。もしや、さっきのあの娘……そう考え、しかし彼はそれを否定した。愛らしい娘ではあるが、絶世の美女というタイプではない。それに確か、レノラ姫というのは金髪に紫水晶のような瞳の持ち主と聞いたことがある。
さっきの娘は、こげ茶の髪に、あまり見慣れない黒い瞳をしていた。……そうだ。あの黒い瞳。
あの瞳で真っ直ぐに見つめられ、言葉を失くした。その目の奥に、いまだ見たこともない異国の風景が広がっている。そこへ吸い込まれそうな錯覚すら覚えた。
しかし、道衣を着ていた以上、大学府となんらかのかかわりを持

つ貴賓客であることには疑いがない。彼ははっとした。この武芸場には、そういった女性の賓客が試合を観覧するための専用席があるのだ。御簾に覆われ、こちらからはその内側を窺い知ることはできないが、もしも彼女がそこにいるとしたら。

自分を見ていてくれるかもしれない。そうだ、言葉を交わし、学府長室に案内までしたのだ。彼女はきっと自分のことを憶えているだろう。憶えているに決まってる。

「グラッド！　聞いてんのかよ、お前、いい加減にしろ」

目の前に相棒、ハリドランの顔があった。思わずグラッドはのけぞった。

「な、なんだよ、ハリドラン、びっくりするだろ」

「試合だよ、試合！　呼ばれてるのに聞こえてもいないのか。お前、万にひとつでも負けたりしたらどうなるか、わかってんのか」

敗北を恐れるあまり、あんな工作までしたのだ。グラッドはなんども肯いた。

「わ、わかってる、もちろんわかってるさ。レミットなんざ敵じゃない、じゃあ行ってくるよ」

彼はマスクと剣をつかむと演台へダッシュした。対戦相手である「逆ポイントゲッター」、レミット・ウォーザロワ・キッファンはもうすでに所定位置につけていた。

二人は向かい合い、一礼するとマスクをかぶった。目への攻撃を避けるため、銀蔦（しろがねづた）［注-ツタの一種で、針金に似た硬さを持つ］で作られた細かいメッシュが顔面を覆っているのだが、そのメッシュ越しにでも、レミットの表情がどこかおかしいのが窺えた。

目は据わり、念仏でも唱えているのか、半開きの唇からはぶつぶつと途切れなく意味不明のつぶやきが漏らされている。はっきり言って、相当不気味だ。グラッドはひいたが、試合を放棄するわけにもいかない。

幸い、弱いことで有名な相手だ。さっさと終わりにしてしまおう。審判の号令を聞くなり、彼は刺突の姿勢に入った。

その時、彼の五十メートルほど前方正面にある二階席のベージュの御簾が、ふわりと揺れた。

グラッドの動きが止まった。

……あの中に、あの内側に、レノラ姫と……いや姫なんてどうでもいい。あの娘がいる。おそらく、間違いなく。

いま、御簾が揺れたのは、もしかして、彼女が自分に気づいてその手を……自分に向かって振ろうとしてくれたからではないのか。

彼は剣を握りしめたまま演台に突っ立っていた。カシアンやハリドランを含む外野の声は一切聞こえない。

対戦相手のレミットが奇声を発しながら、自分に向かって体当たりしてきた時も、まったくの無防備だった。

タックルをまともに受け、彼は尻もちをついた。体勢を立て直そうとし、反射的に右手が床を探った。

――グラッドは我に返った。しかし、すでに遅すぎたのである。

「それまで！　勝負あり、勝者、レミット・ウォーザロワ・キッファン」

大歓声が湧き起こった。先鋒戦以上の興奮に武芸場が包まれた。

グラッドの全身から血の気が引いていった。

ホルツェンは狂喜乱舞し、放心して演台にへたり込んだままのレミットを抱きしめた。

「やった、よくやったぞ、レミット！　お前は最高だ、お前ってやつはほんとに最高だ！」

「……く、苦しいよ、ホルツェン……離せってば」

弱弱しい声が聞こえてきた。ジードは苦笑し、二人を引き剥がした。

レミットはごほごほと咳き込みながらも照れたような笑顔を見せた。

「ぼく、勝ったよ。……ホルツェンの言ったとおり、ずっと言い聞かせてたんだ、試合の間中。ぼくは強い、ぼくは無敵だ、ぼくは必ず勝てるって。でも……まさかほんとに勝てるとはね」

ジードは彼の、細いと言ってもいいような肩を叩いた。

「ああ、お前は大したやつだ。あれだけの体格差のある相手を一瞬で負かしたんだ。本気になれば強いんだろう、いままではそうなれなかったってだけで」

最上級の賛辞だ。レミットは破顔した。

レミットの対戦相手は様子がおかしかった。それは誰の目にも明らかだった。チームメイトが狂ったように怒鳴っていたのに、それすらも耳に届いてはいなかったのだろう。いったいなにに気を取られていたのかはわからないが、それでも勝利は勝利である。ソフォモンドには体技（たいぎ）も含まれるため、タックルも充分に決め技として認められるのだ。

「これで振り出しだな。……締めは任せたぜ、ジード」

ホルツェンは口の端を上げ、ジードを見た。ジードはゆっくりと肯いた。

「ああ。――必ず勝つ。必ずだ」

未明を汚そうとしたカシアンとの一騎打ち。

そして彼を完膚なきまでに叩きのめすこと。

それはいまやジードの宿願（しゅくがん）となっていた。

# 第二十九話　学内対抗戦　5

子どもの頃、ウェス・ハーシュ邸に父の姿があるというのは、かなりめずらしいことだった。

交易都市ロマドの中心街区であるヴィネックの町。その同じ名を戴くオルグ・ヴィネック・シオン・ウェス・ハーシュ卿は、放蕩親父を絵に描いたような父親で、邸内に不在であっても職務のためかどうかは甚だ疑わしく、教育係でもある女官長の眉をその都度顰(ひそ)めさせていたものだ。

「お父様はご立派な方でいらっしゃいますけれどね。でも、オルグ・ジード様、お父様をすべて見習おうとなさる必要はございませんよ」

彼女は折に触れてそんな辛辣(しんらつ)なせりふを口にしていた。

メイド頭の言う「見習う必要のない」父の悪癖のひとつが、賭けカードだ。元々は東大陸系の放浪民(ツィゼット)が占いに使用していた「キューズァロ［現地語で「西風」の意］」と呼ばれる絵札を用い、数字と絵柄をそろえて相手の手札と戦わせるもので、中央政府のお達しにより表向きは禁じられている。が、「春の町(ウェイ・モルド)」のような歓楽街ではなかば堂々と行われ、黙認されているのが現状だ。

ジードは、父からその手ほどきを受け、なんどか勝負をした。むろん賭博抜きで。

――私は、どうしても父には勝てなかった。

大将戦の直前、名を呼ばれるその寸前まで、ジードは控えの席に座って一人黙想していた。なぜなのか、少年時代の想い出がさかんに脳裏を過ぎる。父、オルグ・ヴィネックは、キューズァロを片手に繁華街で仕入れた怪しげな酒を豪快に呷(あお)っては、息子にこう教え込んだ。

いいか、奥の手ってのはな、相手よりあとに出すから奥の手なんだ。手そのものよりも、タイミングを見誤るな。そうすりゃ大概の勝負には勝てる。

……まぁ、もっとも、女神イグノディアスにきらわれていなければの話だがな。

およそ信仰からは世界一遠いところにいる男がそんなことを言うので、ジードは子ども心に呆れて父を眺めた記憶がある。そして若干の揶揄(やゆ)を込めてこんな風に訊き返した。

じゃあ、もしもきらわれていたら？　負けてしまうのですか。

父は意味深な笑みを浮かべて答えた。

――坊主(シグノ)、お前はイグノディアスの微笑をまだ見たことがないのか。だからそんな疑問が出てくるんだな。

その言葉の真意はいまでもわからない。女神の微笑――父はおそらく見知っているのだろう。それがなにを指しているのかを。

「両チーム、大将、演台(ドック)へ」

審判の声がした。ジードはゆっくりと腰を上げた。

終わりだな。氷のように冷ややかなハリドランの目はそう語っていた。グラッドは、小山を思わせるその両肩を必死に縮め、彼の視線を避けた。

絶対に負けられない試合を落とした。それも、あり得ないような内容で。

悪夢だった。大学府に入学してからこの方、いや、二十二年という自分の人生をすべて振り返っても、これほどの悪夢を見た憶えは

まだない。
「追放か」
ハリドランは吐き棄てた。ついさっきまでは同胞だったはずの男だ。グラッドは思わず声を震わせた。
「お……俺は、そんな、そんな……つもりじゃ」
「じゃあどういうつもりだったんだ？　勝つしか道はなかったはずだぞ。なのにお前は心ここにあらずで、ずっと試合以外のことを考えてただろう。まぁ、いまとなっちゃ、なにに気を取られてたかなんてもうどうでもいいけどな」
号令がかかり、ドックに二人の大将が姿を現した。彼らを見つめながらハリドランは続ける。
「カシアンでさえなにも言わなかったからな。……もう終わりだな、お前は」
冷たい汗が腋下（えきか）を幾筋も流れ落ちる。グラッドは床に座り込み、力なく顔を覆った。

三人目に登場した選手たちを見て、あたしは驚きに目を見開いた。だって、どちらも知っている人だったからだ。
一人は、昨日あたしを騙そうとした、プラチナブロンドのエキセントリックな男の人。遠目にもなんだかものすごい形相をしているのが窺える。そしてもう一人は……灰色の髪に緑がかった碧眼。全身に漂う、秀麗で理知的な雰囲気。その名を口にしようとした時、唐突に「お姫様」の興奮気味の声が聞こえてきた。
「オルグ・ジード！　やっぱり大将はジードね、ああ、思ったとおりですわ」
あたしは弾かれたように彼女を見た。「お姫様」の頬は桃色に染まっていた。……ぴんと来た。

この人、ジード様を好きなんだ。

そう思った瞬間、あたしは動揺した。知らぬ間に唇が動いた。

「あの……ジード様を……」

知ってるんですか、と言う前に、彼女はそのアメジストのような瞳を輝かせてこう答えた。

「ええ、許婚(いいなずけ)ですわ。わたくしたち、ジードが大学府(ここ)を卒業次第、結婚する予定なんですの」

「えっ――」

あたしは絶句した。そんなあたしを尻目に、「お姫様」は恭(うやうや)しい口調で続けた。

「そう言えば、まだ自己紹介もしていませんでしたわね。……わたくし、アーシア・レノラ・リン・ノルドと申します。どうぞ、レノラとお呼びくださいな」

それから彼女はもの問いたげな眼差しであたしを見た。

「あなたは……あなたも、有位爵家(ゆういしゃくけ)のお嬢様でいらっしゃるのよね？　どちらのお家の方なのかしら。あまり……お見かけしたことのないお顔のようですけれど」

「あ……あたしは……」

あたしは口ごもった。身分なんてありません、ジード様の家で雇われているメイドです。そう答えようと思って――だって、それ以外答えようがない――言葉が出てこなかった。

その時、審判の号令が発せられた。

「始(モノ)め」

お姫様――レノラさんの興味は瞬時に試合へと移り替わった。彼女は御簾をかき上げんばかりのいきおいで、食い入るように演台を見つめている。

あたしも同じように演台に目を向けた。ジード様と、対戦相手のあの男の人は、切れそうな緊張感の張り詰める中、互いに剣を向け合って対峙しているところだ。どちらもまだ一歩も動かない。

やがてあたしの視界から、プラチナブロンドの男の人の姿が消えた。あたしの意識は、試合でも、勝負の行方でもなく、ただジード様にだけ集中していた。

許婚。卒業したら結婚する。

あたしの頭の中で、さっきのレノラさんのせりふがぐるぐると回り始めた。

# 第三十話　学内対抗戦　6

静寂が空間を占め、ドック上をじりじりと動く二人の足音だけがわずかに空気を震わせる。

カシアンは渇いた唇を舐め、彼の対戦相手をじっくりとねめつけた。

オルグ・ジード・レア・ウェス・ハーシュ――中央政府にもつながりの深い、五大陸に名だたるロマドの名門の次期当主。また同時にウェス・ハーシュ家は、ウェス・ゴート家の筆頭の政敵でもある。たかだか学内のイベントとは言え、絶対に負けるわけにはいかないのだ。

しかしこの時、カシアンの集中力はやや乱れていた。中堅戦のあまりに無様な負け試合が響いてもいた。が、それだけではなかった。

――この男……あの娘といったいどういう関係なのだ。

昨夜、妖精のごとく突然現れた、異国風の顔立ちの娘。ウェス・ハーシュ家のメイドと言っていたし、事実、ジードと彼女は互いによく知った間柄のようだった。

主君と侍女、ただそれだけの関係とはとても思えないほどに。

娘に対し、狼藉（ろうぜき）を働こうとしていたカシアンを、ジードはかつて見たことがないような鬼気迫るいきおいで殴りつけた。まだそこまではいい。ノブレス・オブリージュ、騎士道精神の発露であると言えば言える。

だが、その直後、ジードが取った行動は、弱き存在を護らんとする騎士としての行為をはるかに逸脱してはいなかったか。

ジードはあの娘を引き寄せ、抱きしめ、あろうことか唇を寄せた。

そしてなにかを囁いていた。

傍目（はため）にも、二人は愛し合っているように見えた。

……カシアンの胸に黒雲にも似た冥い情念が湧き起こった。

「イヤァァッ」

掛け声とともに彼は突っ込んだ。寸前でかわされ、さらに切り込む。今度は剣で受け止められた。目にも留まらぬスピードでカシアンは剣を繰り出していく。それは一撃残らず防がれ、剣と剣が交わり合い、白い火花が散る。静寂から一転、武芸場を歓声が揺るがす。

キンッ……一際鋭い音がした。二人の剣は真正面からぶつかり合った。カシアンは血走った目で唸った。

「貴様……この大学府に来た時からずっと目障りだった。オルグ・ジード、今日を貴様の命日にしてやる」

「それはこちらのせりふだ。ほかの誰を赦せてもお前だけは赦せない。ミハルを汚そうとしたその罪の重さを思い知るがいい」

ミハル。それがあのメイドの名か。カシアンはふたたび唇の端を舐めた。

「ふん……貴様には許婚がいるだろう、あの忌々しいノルド家の姫君とかいう女が。あのメイドを囲い者にでもする気か、ええ？」

カシアンは声を潜め、嘲笑った。ジードの顔色が変わる。

「なにを……」

瞬間、腕のいきおいが弱まり、体勢が崩れた。その隙をカシアンは見逃さなかった。素早く剣を掃い、次なる攻撃に出る。

「――ヤアァァッ！」

カシアンの剣が上段から振り下ろされた。その切っ先は真っ直ぐにジードの咽喉元を狙っていた。

間一髪でジードは避けた。

直後、その灰色の髪が、わずかに一筋、はらりと舞った。ジードの目が見開かれる。

――これは……真剣だ。

彼は唾を飲み込み、カシアンを見やった。彼の表情には、あと一歩で逃げられた悔しさも去ることながら、獲物に少なからぬ衝撃を与えられたことに対するかすかな満足感と達成感がにじみ出ていた。

学内対抗戦は武学という授業の一環である。当然のことながら真剣の使用は禁じられている。というより、そもそも、真剣を使おうなどと考える学生は普通、存在しない。昔ならともかく、現代においては、ソフォモンドは剣技と体技を統合して作られたスポーツに過ぎないのだから。

カシアンの双眸に狂気に近い色が浮かんだ。

「なにを驚いている？　まさか貴様も、お遊びの騎士道に甘んじているくちか？　切れもしない剣を使って、相手を跪かせるだけで勝敗の決まる、似非武道に。……ウェス・ハーシュ家も地に堕ちたものだな」

くっ、くっ……カシアンは咽喉の奥で笑いを押し殺した。

「まぁそう案ずるな、真剣部分は刀身の先端だけだ。……貴様の息の根を止めるにはこれで充分だからな」

鍔から下をすべて真剣にしてしまっては、防御された時にジードの剣を折りかねない。そうなれば試合は中断され、カシアンの本懐を遂げるに至れない事態になるだろう。

つまり、彼、カシアン・レグノ・ウェス・ゴートは、明確な殺意のもとにこの試合に臨んでいるのだ。

「なるほど……大学府からの追放も意に介さないというわけか」

ジードはつぶやいた。

この時彼の脳裏に、幼い頃、気まぐれに剣技の指南をしてくれた父、オルグ・ヴィネックの姿が蘇った。彼はがむしゃらに立ち向かってくる息子を軽く払い除けてはニヒルに笑ったものだ。間違いなく達人の域だった。

ジードは静かに呼吸を整え、刺突の構えに入った。同じくカシアンも自分を狙い、剣を突き出している。

おそらくは次で勝負が決まる。

動いたのはカシアンの方が先だった。彼はその緑灰色の眼（まなこ）をかっと見開き、右腕に全体重をかけてジードの喉首へと突っ込んだ。歓声と悲鳴が同時に湧き上がった。

カシアンの手から剣の柄（ヒルト）が離れた。

命を失った生きもののように、剣はドックの上に横たわった。儚（はかな）い金属音がした。同時に、主（あるじ）であるカシアン本人も、前方へと身体を曲げ、がっくりと膝をついた。

「う……っ」

ジードの切っ先がまともに鳩尾（みぞおち）をとらえていた。カシアンの剣が届くよりも一瞬速く、ジードは姿勢を極端に低めてカシアンの懐へと飛び込んだのだった。

息が止まり、視界がかすむ。その耳に、割れんばかりの観衆の声がぼんやりと響く。

「――それまで！　勝負あり。勝者、オルグ・ジード・レア・ウェス・ハーシュ。よって優勝は第二学生寮！」

審判が叫んだ。熱狂の渦が巻き起こる。カシアンは顔を上げ、自分を悠々と見下ろす宿敵を眺めた。

負けた。

ウェス・ゴート家の次期頭領であるこの自分がだ。因縁深い政敵、ウェス・ハーシュ家の跡取りに。

……そんなことは、あってはならないことだ。

ジードが自分に向かって歩いてくる。試合後の握手をするためだろう。ばかげた慣習だ。実戦ならばどちらかが死んでいるのに、いったい、死体と握手を交わせとでも言うつもりなのか？

カシアンはなにも考えず、ドックに転がったままの彼の剣を探り、

柄を握った。そして跳ねるようにして起き上がると、わめきながらジードに飛びかかった。

「アァァァッ！」

大学府を永久追放になる。それがなんだと？　もっとも大事なのは名誉だ。二度も恥をかかされたままで退くなど、その方がきっと、彼の祖父は赦さないだろう。もしも存命であればだが。

あまりに常軌を逸したカシアンの行為に武芸場は凍りついた。その切っ先がジードの咽喉元めがけて解き放たれる。試合を終え、丸腰の彼に、カシアンを制する手立てはない。レミットは目を瞑り、ホルツェンは待機席を飛び出した。

――だが、カシアンの剣は、ジードに届くことはまたしてもなかった。

剣の切っ先は、ジード自身の両手のひらによって挟み込まれ、その動きを完全に封じられてしまったからである。

観衆は皆、一様に唖然としてこの光景を見守った。こんな技は授業では習ったことはない。確かにソフォモンドには体技も含まれてはいるが、それにしても未知の技だ。

カシアンの顔は真っ白だった。手元から力が抜けていき、やがて剣から放たれる。ジードは息をつき、剣から手を離した。かしゃん、という音とともに、ドックの上に剣が転がった。

「ジード、ジード！　おい、大丈夫か」

審判よりも先にホルツェンが駆け寄ってきた。すぐにその顔色が変わった。

「お前……その手、どうしたんだいったい！　血だらけじゃないか、どうして……」

ホルツェンははっと言葉を切った。蒼白になって立ちすくんでいるカシアンを一瞥し、すかさず彼が使っていた剣を拾い上げる。切っ先に指を滑らせると、果たしてうすい血の筋が浮かび上がった。

「……カシアン、てめぇ……真剣を仕込みやがったな！　なにをやったかわかってんのか？　殺しかけたんだぞ、ジードを！」

彼はカシアンの襟首をつかむと、激情のままに拳を振るった。ドック上に審判や教授連がなだれ込み、必死で二人を引き離す。一方、ジードの元には医務班と、さらに思いがけない人物が駆けつけた。黒い道衣（ドゥーグ）をまとったノルド家の姫君、レノラだ。貴賓席から一部始終を見ていた彼女は、勝敗が決した時点で御簾から飛び出してきたのだった。

レノラは道衣が血で汚れるのもかまわず、ジードに抱きついた。

「オルグ・ジード！　なんてことでしょう、大丈夫ですの？　ねぇ、あなた、返事なさって！」

ジードは面喰らったようだ。レノラが来るとは聞いていない。彼は訝しげに訊ねた。

「レノラ、なぜ君がここに？　ノルド家からはなんの通達もなかったと思うが……」

彼女はジードの首に両手を巻きつけ、その身体をすり寄せながら答えた。

「許婚に会うのに理由が必要ですの？　お会いしたかった。それだけです。だから、こっそり訪ねて来たんですわ」

そう言うなり、レノラはジードの唇を奪った。深く貪るようなキスではなかったが、それでも相当情熱的な口づけだ。なにしろ周囲には大学府中の人間の目があるのだから。

ジードは眉をしかめた。彼女のこの無軌道とも言えるような天真爛漫ぶりには昔から振り回されているのだ。

唇を離したものの、レノラはうっとりとジードにしがみついたままだ。ジードはため息をついた。そこへ医務班のチーフが近寄り、彼の両手を取った。

「これは明らかに刃物で傷ついた痕だ。……やはり、さっきカシアンが使用していた剣は、真剣だったと……そういうことですね」

ジードは肯いた。レイピアに似た細身の剣は、重みがあまりないせいもあってか、傷そのものはそれほど大したことはない。出血は派手だが、切断までは至っていないし、神経も無事だ。

「学内の試合に、禁じられている武器を使用するなど……なぜ、あのウェス・ゴート家の跡取りともあろう人間が……まったく嘆かわしい」

放心状態のカシアンに付き添っている教授たちが、首を振りながら口々につぶやくのが聞こえてきた。彼は間違いなく、重大な処分を受けるだろう。軽くて停学、だがおそらくは――退学。

カシアンはゆっくりと顔を上げた。その瞳は武芸場の誰も見ていなかった。

彼の視線は、二階の貴賓席に向けられていた。御簾のすぐそばに、黒い道衣の娘がもう一人立っている。彼女はじっとジードを見つめているようだった。カシアンはその胸中で独りごちた。

……あれは、昨夜の……ウェス・ハーシュ家のメイドだ。名前は、そう……ミハル。

こげ茶色の髪に、潤んだような黒い瞳。つやつやときめ細かな肌。細く華奢で、にもかかわらず真綿のようにやわらかな肢体。

オルグ・ジードから奪ってやれる、最後の駒だ。

# 第三十一話　オルグ・ジードとレノラ姫

審判の声が武芸場に響き渡った。ジード様の勝利。それで試合は、団体戦の勝敗は決したはずだった。

なのに、あの対戦相手の男の人は、試合後の礼節として握手をしようと近づいたジード様に、剣を構えて切りかかったのだ。会場中の人々が凍りつき、言葉を失った。

ところが、剣すら持っていないというのに、ジード様はふたたび相手の男の人を負かしてしまったのである。

「白羽取り……」

あたしは思わずつぶやいていた。時代劇なんかでよく見る、幻の神技（しんぎ）。よくわからないけれど、ソフォモンドの手数（てかず）にはそれも含まれるのだろうか。

これまでにない喧騒と興奮が武芸場を包んだ。あたしは立ち上がり、御簾席（みすせき）から外へと飛び出していた。

――でも、ジード様のもとへは行けなかった。

演台に立つ彼が、駆け寄ってきたレノラさんとキスをしているのが見えたからだ。

二人を見つめたままあたしはその場に立ち尽くした。目を逸らすこともできず、足はまったく動いてくれない。

あたしは、自分でも知らぬ間に、着ていた黒の道衣を外していた。そしてそれを、学府長さんがさっきまで座っていた席にそっと置いた。

……帰らなくちゃ。ウェス・ハーシュ邸に。

片道で十五時間もかかるんだもの。いまから出ても、着くのは真

夜中過ぎになってしまうだろうけど。
それに、そろそろロモッカさんが別邸から迎えに来てくれているかもしれない。
あたしは階段を駆け下り、講堂を出た。

二十分ほどが経ち、慌しく閉会式が執り行われた。優勝を決めた第二学生寮のレミットとホルツェンは、忙(せわ)しなく表彰を受けたあと壇上から降りるや医務室へと駆け出した。
「ジード！　ジード、大丈夫か」
荒々しく室内に踏み込む。が、思わぬ光景に、彼らの目が点になった。
ベッドの上にはジードがいた。カシアンによって傷つけられたその両手には、白い包帯が何十にも巻かれている。
そして、その隣で彼の手を取り、いとおしげに頬ずりをしているのは噂のレノラ姫だ。
「ジード……本当に、心臓に悪いですわ。お約束して。もう二度とあんなことなさらないって」
当のジードは渋い顔でため息をついている。純朴なレミットは顔を赤らめた。
これがあの、キニッサの神官一族のご令嬢、レノラ姫か。……あらためて見ると、ほんとに極上の美人なんだ。
そう思っていると、ジードの咳払いが聞こえた。
「来てくれたのか。すまなかったな、表彰式もあっただろうに」
ホルツェンは飄々(ひょうひょう)と片手を振ってみせた。
「一瞬出たって。まあそんなもんどうでもいいさ、俺が欲しいのは勝ったっていう事実だけだからな。それより、お前、まじで大丈夫なのか？　あのいきおいの真剣を受けたんだろ」
ジードはかすかに微笑し、肯いた。

「ああ、問題ない。……実戦で試すのは初めてだったが、巧くタイミングが合ったようだしな。二週間も経てば包帯も取れるそうだ」
レミットは急き込んで訊ねた。
「ジード、試すのは初めてって、あれは誰かに教わった技なの？あんなのぼく見たことないよ。授業でも聞いた憶えないしさ」
「……あれは、子どもの頃、父上から学んだんだ。成功率はきわめて低いから、もしも使う気でいるのなら完璧に習熟してからにしろ、と言われたものだ」

奥の手は相手よりもあとに出せ。問題なのはタイミングだ。

試合の間中、父の言葉がどこかで聞こえていた。まるでオルグ・ヴィネックが貴賓席にいて、自分を見ているかのようだった。
「ねぇ、ジード、皆様にわたくしを紹介してくださらないの？」
レノラが甘えたような上目遣いで囁いた。ジードはふと複雑な表情になった。……いつだったか、未明に勉強を教えて欲しいと頼まれた時、彼女も同じような甘い眼差しで自分を見つめたことがあった。そしてその瞳に全身が射抜かれたことを憶えている。
なのになぜ、レノラにはなにも感じないのだろう。
自分が触れたいのは、欲するのは未明だけだ。未明……未明に会いたい。
今朝、別れたばかりだというのに。
「ジードったら」
レノラは焦れ、彼をふたたび促した。彼は我に返った。あまり気が進まなかったものの、この状態でレノラの存在を無視し続けるというのもいかにも不自然だ。ジードは口を開いた。
「二人に紹介しておくよ。彼女はアーシア・レノラ・リン・ノルド。知ってるかもしれないが、キニッサの現神官長の孫娘で、私の従妹だ。年齢は、今年、二十歳になる」
「それだけじゃありませんわ。許婚でしょ、ジード」

彼女は可愛らしく頬を膨らませた。ジードが反論するよりも早く、レミットの素っ頓狂な声が医務室に響き渡った。

「やっぱり？　やっぱり、そうなんだ！　この前ホルツェンが言ってた、いくらでも相手はいるんだから落ち込むなって、こういう意味だったんだね」

間髪入れずに彼の後頭部をどついたのはそのホルツェンだ。――まったく、空気を読まないにもほどがあるぞ。

「余計なこと言うんじゃねぇよ。……ああ、失礼、こいつの言うことはどうぞお気になさらず。俺はジードの友人で、ホルツェン・オルレアド・シモン・ライゾックと言います。どうぞよろしく、レノラ姫」

彼はそつなく腰を引き、微笑を浮かべながらレノラの手を取ってその甲に接吻をした。レノラの紫色の瞳がやにわに輝いた。

「まあ。じゃああなた、オサイオンのライゾック様のご子息でいらっしゃるの？　ご実家のお噂はかねがね聞いていましてよ。ライゾック家の援助なしには、市の健全な運営も難しいって。そう……良い方をお友達にお持ちなのね、ジード」

ジードは顔をしかめた。

「私は出自を基準に学友をえり好んでいるわけじゃない。無粋な言い方はしないでくれ」

きつい口調だったが、レノラは一向に気にした様子もなく、今度はレミットに無遠慮な視線を向けた。

「あなたは名乗ってくださらないの？」

レミットはなぜか直立不動し、耳まで真っ赤になった。ぎくしゃくと口を開ける。

「あ……あの、えと、レミット・ウォーザロワ・キッファンです。出身はコーロンナで……コーロンナってわかります？　ツェノワ大陸の北端にある、田舎町なんですけど」

レノラの瞳から光が失せた。どうやらレミットは彼女のお気に召さなかったらしい。実際にはキッファン家の歴史は古く、由緒も名

誉も水準以上なのだが、これと言って政治的な肩書きを持たない家には興味を示さないのである。

ジードは苦々しい思いでそんな従妹を見た。これがレノラの最大の欠点だ。

天真爛漫（てんしんらんまん）で人なつこい一方、ひどく気まぐれで冷淡、傍若無人。いわゆる自分ルールにそぐわない人間は絶対に認めず、受け入れない。

「レノラ。悪いが今日は引き取ってくれないか。見てのとおり、私はしばらく両手も使えない身だし、とても君のお守りまでしている余裕はないんだ。それに、ノルド家からの事前連絡がなかったってことは、どうせお忍びで来たんだろう？　家人も心配しているはずだ」

レノラの表情がたちまち曇る。彼女はその形の良い眉を寄せて抵抗した。

「厭（いや）ですわ。せっかく抜け出してきたっていうのに……」

「わがままを言わないでくれ。ここは君の遊び場じゃないんだ」

言い合う二人の間に割って入ったのは、例によってホルツェンだ。

「ジード、そう頭ごなしに言わなくてもいいだろ。レノラ姫、もしよろしければ、俺があなたをご案内しますよ。大学府の中を見る機会なんて、特に女性にはほとんどないでしょうから」

彼はいたって紳士的な微笑みを浮かべた。ジードは驚き、慌てたように言った。

「ホルツェン、お前にそんなことを頼むわけにはいかない。午後の授業はどうするんだ」

「ソフォモンドの対抗戦がある日は、たいてい休講になっちまうだろ。それでなくたって今日は音楽と詩文の講義だ、俺には無縁だからな。……いかがです、レノラ姫」

レノラは値踏みをするような目でホルツェンを眺めていたが、じきに肯いた。

「ぜひお願いしますわ、ライゾック様」

「ホルツェンで結構ですよ。それじゃあ早速参りましょうか」
ホルツェンはレノラの差し出した手を取るとジードにウインクし、医務室を出て行った。彼女を持て余しているジードの心情を鋭く察知してのことかもしれない。彼は軽く息をついた。

講堂の真隣に建てられた大学府の図書棟はその蔵書数の多さで知られ、これまでに出版されたあらゆる書籍を閲覧することができる、特異な施設だ。しかし、そこへ連れて行っても、レノラはさして興味を惹かれた風でもなく、あまつさえ欠伸をかみ殺している。ホルツェンは苦笑した。
「読書はおきらいでしたか」
唐突な言葉に、彼女は頬を赤らめた。
「あ、あら。別にわたくし、そんなつもりじゃ」
「いえ、かまいませんよ。俺もそう読書家ってわけじゃありませんし」
そうくだけた口調で言うホルツェンの目を、レノラはじっと見据えた。

――紫水晶の瞳とは言うけど、むしろ猛禽みてぇな目だな。生まれながらのお姫様ってのは逆にこういうもんか。

傲岸不遜。外見のイメージからはほど遠い内面の持ち主のようだ。
「……ホルツェン。お伺いしたいことがあるんですの、よろしいかしら」
廊下に出たところで、彼女は立ち止まった。ホルツェンは鷹揚に肯いた。
「もちろん。なんなりと」
レノラの、桃色につやめく唇が優美に動いた。

「さっき、医務室で……わたくしがジードの許婚だと申しましたら、あの……小柄なお友達の方が、なにかおっしゃっていましたでしょ。あれはいったい、どういう意味なんでしょう」

彼女がなにを言いたいのかは瞬時に理解できた。レミットの失言の件だ。

「――あなたがお気になさるようなことではありませんよ。まぁ、女人禁制と言えど、時たま例外的に女性が構内を訪れることがあるんですが……そう、あなたのようにね。そういった女性たちの、どんなタイプが好みか、そんな他愛もない話をしていたってだけですから」

レノラは疑わしげな表情を浮かべている。

「そりゃあ、確かに賓客であれば、女性でも受け入れられるとは聞いておりますわ。今日だって、ソフォモンドを観覧していたのはわたくし一人じゃありませんでしたし……でも、先ほどのお話は、もっとこう、なんていうか……まるで、ジードが、あの人が、誰かに……」

「あなただけじゃない？　じゃあ、ほかにもいたんですか、女性の訪問者が」

ホルツェンはレノラの言葉を遮るようにして問うた。彼女は肯いた。

「ええ。ワンジオ翁のお部屋でお会いしましたの。道衣を召してらしたから、きっと高位のお嬢様だと思いますけれど、そう言えばお名前も聞いていませんでしたわ。あの方、あのあとどうされたのかしら」

レノラの表情が思案げなものに変わる。

「それが少し不思議な方なんですの。まだ十六になるかどうかというくらいの、とても可愛らしいお顔なんですけれど、夜の闇みたいに真っ黒な瞳をしていて……見ていると吸い込まれてしまうんじゃないかって思うほど。……あの方、異国の姫君かもしれませんわ。言葉遣いが少しおかしかったようですもの」

黒い瞳の、異国風の娘。すぐに思い当たる人物がいた。ウェス・ハーシュ邸の若いメイドで、おそらくはオルグ・ジードの想い人。

ホルツェンはふと眉を寄せた。いかに出自が確かであろうと、メイドはメイドである。貴賓席には通常、有位爵家か、よほどの実力者の縁故でなければ座ることはできない。女性であればなおさらだ。

例によって、茶目っ気の旺盛なワンジオ翁の気まぐれなのだろうか。どちらにしても、彼女のことはレノラの耳には入れない方が無難だ。そう彼は考え、なに喰わぬ顔で言った。

「そうでしたか。まあともかく、さっきのレミットの言葉には深い意味などありませんよ。気のいいやつなんですが、思慮が浅いというか、誤解を招くような言動がやや多くて……それよりもレノラ姫、昼食はどうされます？　よろしければここの食堂に行ってみませんか。近頃の新入生は甘党が多いのか、甘味メニューがこれで中々充実しているんですよ」

話題を逸らしてにっこりと微笑む。レノラの瞳がふたたび輝き出した。

## 第三十二話　拉致（前書き）

この三十二話あたりから、少しＲ１５的な内容になっていく予定です。
…というより、これまではＲ１５ってハッタリに近かったですね（^―^・）

# 第三十二話　拉致

閉会式が終わるなり、教授棟にある会議室では緊急会議が開かれた。大学府中の教授が集められ、ワンジオ翁を前にさかんに議論を戦わせている。議題はもちろん、カシアン・レグノ・ウェス・ゴートの進退だ。

「悪しき前例を作るわけには参らないでしょう。ウェス・ゴート家の者とはいえ、規律を乱すような精神の鍛錬のなっていない学生には、毅然として対応すべきです。……大体私は前からなにかやらかすんじゃないかと思っていたんだ」

リベラル派の教授がそう言うかと思えば、保守派の古参教授からすぐに反論が返される。

「しかしですね、ウェス・ゴートですぞ。ただの成り上がりとはわけが違う。そう短絡的に処断することが最善かどうか。退学にするのは一瞬だが、そのあとの禍根を考えれば……」

「そういった政治的な阿り（おもね）をこんな場で鑑みるのは、仮にも連邦最高の教育機関としてどうなんでしょうね？　私はマキューズ教授に賛成ですよ。エルリアン教授、あなた、彼を退学にしたくない個人的な理由でもおありなんでは？」

呼びかけられた古老の顔が真っ赤になる。怒号が飛び交う。紛糾し始めた事態を前に、ワンジオ翁は手のひらを組み、場違いなほどおっとりとした調子で誰に訊くともなく言った。

「ところで……当の本人はどうしたね。茫然自失の体（てい）だったが」

もっとも近い席にいた、数理担当の若い教授が答える。

「自宅謹慎のため、帰らせましたよ。すぐ近くにウェス・ゴート家の別邸があるでしょう。あそこから迎えが来たはずです」

本家はなにしろここロドア大陸からは四百ノール（約千キロメー

トル）ほども離れた中央大陸、バルネディアにあるのだ。ワンジオ翁はふと思い出したようにつぶやいた。

「別邸といえば……ウェス・ハーシュ家のあの娘はどうしたのやら。道衣は返されていたが、はて……」

昨夜、ロモッカさんが馬車を寄せた車停めに行ってみると、そこには果たして一台の馬車が停まっていた。ただし、あたしが乗ってきたのじゃない、もっと豪華な造りの四頭立て馬車だ。

御者台に座っていた男の人が降りてきた。彼はあたしに向かって軽く腰を引き、挨拶の仕草をした。

「ウェス・ハーシュ家のフロンジーネ・ミハルですね。遅くなりまして申し訳ございません。さあ、どうぞお乗りください」

そう言うと車両のドアに手をかけた。あたしは慌てた。

「あ、あの……あたし、ロモッカさん――御者、ウェス・ハーシュ家の、待ちます。それに、あなた、誰ですか」

彼は動じた様子もなく答えた。

「お聞きになっておられませんか。私は別邸の管理者ですが、御者殿の具合が悪くなりましてね。代わりにお迎えに上がったのですが」

ロモッカさんが？　あたしは急に心配になった。

「それなら、あたし、一度別邸に……」

しかし、なぜかあたしの申し出は遮られた。

「時間がありません、フロンジーネ。すぐに出立せねば、遅くなってしまいますぞ。さあ、お早くお乗りください」

声色がどこか高圧的になった。あたしは無意識のうちに身構え、咄嗟に馬車に目をやった。……ドアに彫られている家章が違う。双頭の蛇をデザインしたウェス・ハーシュ家のものじゃない。

ところが、そう気づいた時だった。

あたしは口元にハンカチを押し付けられた。漢方みたいな妙な匂

いがし、急激に意識が遠のいていった。……この事態は多分、かなり、やばい。

ジード様の顔が最後にちらりと浮かんだ。

# 第三十三話　消えた未明

グラッド・ロワナ・ギルシュ・アシュレンは、大将戦が始まるが早いか、独り武芸場を抜け出、講堂一階のピロティーに座り込んでいた。誰にも会いたくないし、話もしたくない気分だったからだ。

カシアンとジードのどちらが勝とうが自分は大学府を追い出されるのだろう。いまの彼を満たしているのは絶望感。ただそれだけだった。

……追放されるんなら、もうイグノディアス神に貞節を誓う必要などなくなる。

そんな考えが脳裏の彼方に閃いた。続いて浮かび上がったのは、とりもなおさず、あの異国風の娘の面影だ。

彼は力なく笑った。こんな事態になってもなお、忘れられないなんて。そもそも、自分が負ける原因になった娘だ。なのにこの体(てい)たらく。

どれほどの時間が経ったのか。かすかに漏れ聞こえていた歓声が止んだところを見ると、どうやら勝敗が決し、閉会式が始まっているのかもしれない。彼はふらふらと立ち上がり、講堂をあとにした。

このままいっそ、大学府を出ていこうか。

午後は休講になる確率が高い。自宅のあるレピュラス大陸まで、大陸間鉄道に乗り込んで――いや、冬季の間は列車は出ないんだったか――おぼつかない足取りで正門近くまでやってきた彼は、近くにある来賓用の車停めにふと目を向けた。えらく立派な馬車が停まっている。

車両の扉に彫り込まれているのは王冠をデザインした家章だ。見覚えがあった。

あれは確か……確か、カシアンの家の……ウェス・ゴート家の家

章だ。

大陸の歴史を学ぶ授業で必ず登場する、生粋の名家の証（あかし）。そしてグラッドを断罪する権力の象徴。

踵を返そうとしたグラッドだったが、次の瞬間、瞠目（どうもく）して立ち止まっていた。

若い娘が、車停めに向かって歩いてくるのが見えた。

――あの娘だ。

道衣を脱ぎ、臙脂の上品なドレスに身を包んではいるが、間違いない。彼は唾を飲み込んだ。……なんて、可憐なんだろう。それに……あの胸元。顔立ちは幼いのに、身体つきはむしろ扇情的と言ってもいいほどだ。

声をかけたい。ところが、そう思った時だ。

馬車から降りてきた男が、娘になにごとか話しかけたかと思うと、そいつはいきなり彼女の口元に布を押しつけて意識を失わせ、車両の中に娘を押し込むや御者台に戻り、馬車を発車させた。

馬車は正門の外に消えた。グラッドは唖然として一部始終を見守っていた。

この日、夜も更けた十一刻半（午前三時）、ウェス・ハーシュ邸の車停めに一台の馬車が到着した。

「ふう、やれやれ」

降りてきたのは中年の御者、ロモッカだ。十五時間かけて、キニッサの南端からロドアを真っ直ぐ北上してきたのである。

彼は一人だった。往路（いき）には乗せていたはずのメイドの姿はない。なぜなら、昼過ぎに、大学府の職員を名乗る男からこんな連絡を受けたためだ。

「ウェス・ハーシュ家の執事とおっしゃる方からお電話がありました。急ぎ、ヴィネックの本宅へお戻りください。遅くとも明け方までには着いていただきたいとのことですので」

そろそろ大学府まで未明を迎えに行こうかと思っていたロモッカは驚いた。

「当家のレンドルス様からですか？　しかし……なんだってまた、そちらに連絡が？」

ウェス・ハーシュ家は、五大陸中に十軒の別邸を所有しており、そのすべてに電話が引かれている。それなのになぜ直接連絡を寄越さないのか。

「学府長にお電話をしたついでだそうです。こちらで言付けてくれればいい、とおっしゃっておられました」

慇懃かつ無表情な声だった。彼はさらに続けた。

「ああ、それと、フロンジーネ・ミハルですが、学府長との謁見が長引いておりますので、お先にお帰りいただけますか。彼女については私どもで責任を持ってお送りいたします。どうぞ、ご心配なさらず」

「へっ？　はあ……」

彼は首をひねりながらも電話を切った。よくはわからないが、未明を待っている場合ではないようだ。

そういうわけで彼は単身馬車に乗り込み、出立した。遠路の旅を終え、馬車から二頭の馬を外すと水と飼い葉を与えて馬小屋につなぐ。馬たちの背中を撫でながら、ロモッカは大きなため息をついた。

「明日にするってわけには、いかないんだろうなぁ」

執事のレンドルスに目通りをしなければならない。彼は重い足を引きずりながら邸の中へ入った。

レンドルスがいるのは一階の東端、執事室と彼の居住を兼ねた部屋だ。ロモッカは真鍮のノッカーをつかむと躊躇なくドアを叩いた。

やがて現れた執事は、しかし、異様に不機嫌な顔をしていた。神経質なその青白い額には血管が浮かび上がり、不興の程度を報せる

かのようだ。彼は眼鏡をかけながら唸った。
「……なんなんだね、ロモッカ。こんな夜更けに、いったいどういう理由があれば私の安眠を邪魔しても赦されると思ってるのかね」
ロモッカはうろたえた。
「どういう理由もなにも――明け方までに着くよう戻れと指示をしたのはレンドルス様じゃありませんか。それであたしは、こうやって……」
レンドルスの瞼がぴくぴくと痙攣している。
「……長旅を終えて戻ってきた君を労いたい気持ちくらいは私にもある。だがそれは明日まで待ってくれないか。大体、なんだねその指示とは？　私はいっぺんだって君に連絡なんか入れてないぞ」
ロモッカの顔に焦りが浮かんだ。……なんだ、どうなってるんだ、いったい？
「エ、大学府に……昼頃電話をお入れになったんじゃなかったんで？　だってあたしはそう聞いたんです、大学府の職員だって男から」
「知らん。電話などいちどだってしていない。聞き間違いじゃないのかね」
「そんな――」
狼狽するロモッカ。そこへ、さらに別の人物がやって来た。
「ロモッカ！　いま着いたのか？　ミハルは？　まだ部屋に戻って来ないんだが」
ウェス・ハーシュ家の次男坊、アドリオだ。彼は寝巻きの上にガウンを羽織り、頬を紅潮させてそう訊ねた。
「……」
ロモッカにはなにも答えることはできなかった。アドリオの顔色が変わった。

# 第三十四話　囚われのベッド

ああ、そうだ。卒業したらレノラと結婚する。それがどうかしたのか。

ジード様はそうあたしに告げた。なにを当たり前のことを訊くのか、と言わんばかりの表情だ。

あたしは立ち尽くし、震える声でつぶやいていた。

……だって、じゃあ、あれは嘘だったの？　あたしを好きって言ってくれたことも、あたしのことだけを想ってるって……言ってくれたことも。

戻るまでの間、自分のことだけを考えていてくれって、あんなに切なそうに……あれも全部、嘘ってこと？

ジード様は哀れむように笑った。

お前のような離島の放浪民（ツィゼット）を、どうして本気で相手にするなんて思うんだ？　私にはちゃんと許婚がいるんだ。まあ、勘違いをしないと誓えるなら、相手をしてやってもいいが。

――視界がかすむ。頭が痛い。……ここはやっぱり、あたしのいるべき場所じゃない。

帰らなくちゃ。

目を開けると、そこはウェス・ハーシュ邸の使用人部屋じゃなかった。

といって、もちろん、日本のあたしの実家でもなければ、乗っていた電車の座席でもない。

宗教画みたいな絵の描かれた、ものすごく高い天井が見えた。……ここ、どこだろう。

両手を這わせる。ふかふかのベッドだ。寝室？　誰の？　ていうか、なんか、スースーするんだけど……

――あたしは飛び起きた。

「な……な、な」

なにこれ、と言おうとしたのに言葉にならない。

あたしは素っ裸だった。

下穿き一枚つけていない。文字どおり、生まれたままの姿ってやつになってる。

生唾を飲み込む。……なんなの、これ？　なんの冗談？　必死で思考をめぐらせるうち、今日の昼間にあったできごとをだんだんと思い出し始めた。

ロモッカさんの代理だという男の人が、大学府の車停めで待っていて……でも、その馬車はウェス・ハーシュ邸のものじゃなくて――見覚えのない王冠みたいな家章がついた、四頭立ての豪華な馬車だった。それであたしは逃げようとしたんだ、そしたら……急に意識がなくなって……。

「――お目覚めか」

心臓が止まりそうになった。

部屋にいくつかあるドアのひとつが開いて、白いバスローブ姿の男の人が現れた。

「あ……あなた……」

あたしは喘いだ。彼だ。大将戦の直後、ジード様に切りかかろうとした、あのプラチナブロンドの男の人。

……なんで彼がここに？　ていうより、なんであたしがここにいるの？

身動きもできないでいるあたしのそばに、彼はゆっくりと近づいてきた。

五人は余裕で寝られそうな、天蓋のついた巨大なベッドの上に飛

び乗り、あたしに迫ってきたかと思うと、そのままあたしをヘッドボード部分に枕ごと押しつけた。剥き出しの両肩に彼の手がかかっている。全身が粟立った。

「や……や、やだ……」

それしか言えなかった。目の前にある緑灰色の瞳がうっすら赤く濁っている。

彼はふと微笑んだ。あたしの耳元に唇を寄せ、わざと息を吹きかけるようにしながら囁く。

「――憶えていないのか？　あれほど激しく交わりあったというのに。……驚いたぞ、そんな幼い顔をして、あんな風にまで乱れるとはな」

あたしは絶句した。

嘘、と言いたかったのに、またしても言葉が出てこない。

気づくと唇を塞がれていた。ものすごく荒い息遣い。防ぐことすら忘れていたあたしの口の中に、彼の舌があっさりと侵入する。それはまるで蛇みたいな狡猾さで動き回り、あたしの舌に巻きついてきた。

「んっ……んん……っ」

あたしはようやく抵抗を始めた。顔を左右に動かし、彼の唇を外そうと試みる。

でも、その動きは彼を怒らせてしまったのか、かえって攻撃は激しくなった。キスというより、唇ごと喰らいつくそうとでもするような、あまりにも暴力的な口づけ。ジード様なら絶対にこんなやり方はしない。

ジード様なら。そう思うと同時に、武芸場で見た、彼とレノラさんのキスシーンがあたしの中で鮮やかに蘇った。

「オルグ・ジードのことでも考えているのか。あいつには許婚がいるんだぞ……お前など、囲われて棄てられるのがおちだ。忘れてし

まえ、あんなやつのことなど」
あたしの心情を盗み読んだみたいなせりふ。四肢から力が抜けていく。
その代わり、涙があふれ出した。
どうして泣けるんだろう。あたしは、そこまであの人のことが好きだったんだろうか。
唇が離れ、あたしは彼の身体の下に組み敷かれた。彼は言った。
「お前はもう私のものだ。いまさらあの邸には帰れまい。……ここで暮らせばいい。ずっとな」
彼の右手があたしの頬に触れた。思わず顔を背けた。
「メイドとしてなどではなく、正妻としてお前を迎えてやる。……ミハル……私を見ろ。ジードのことなど、記憶から消し去ってしまえ」
そんな風に名前を呼ばないで。
涙が止まらない。
彼は少し苛立ったような顔になった。そしてふたたび唇を奪われた。すかさず掛け布団が剥がされ、なにも覆うもののなくなった全裸のあたしを、彼はまじまじと見つめた。
「……美しい……」
あたしは我に返った。事態についていけず、自失してしまっていたけれど、これって立派な拉致&レイプだ。抵抗しなきゃ。どれだけ立派な家のお坊ちゃんか知らないけど、これ以上、好き勝手されてたまるもんか。
「は、離して！　退いて、退きなさいよっ」
あらん限りの力で身をよじる。足をばたつかせる。知っている語彙を掻き集めて叫ぶ。
どれも通用しなかった。哀しいかな、体格差がありすぎる。それにこの人、細身の割りに腕力がすごい。両の手首を押さえつけられ、逃げる手立てを完全に封じ込まれる。
「お前のその黒い瞳はなんなんだろうな……見ているだけで我を忘

れてしまう。ミハル……お前は私のものだ。オルグ・ジードのもとになど、返すものか。お前は一生、ここで……私のそばで暮らすんだ」

かすれ声が聞こえた。——ばかなこと言わないでよ。あたしは帰るんだから、ウェス・ハーシュ邸……じゃなかった、元の世界に。日本の、あたしの実家に。

そう言おうとした時、胸を弄られる感触がし、あたしは短い悲鳴をあげた。

「ひっ」

怖気（おぞけ）が立つ。彼はあたしの胸元に顔を近づけた。あたしは叫んだ。

「や、やめて、厭、お願いっ」

次の瞬間、これまで経験したことのない感覚があたしを襲った。胸を、乳首を、舌で舐められるという感覚。ひんやりとして、でも温かい、くすぐったいような、むず痒いような、とにかくいままで知らなかった感じ。

「あ……っ」

歯を当てられたのがわかり、あたしは声を漏らした。自分でも信じられないような甘い声。

その途端、あたしの上に覆い被さっていた彼は上体を起こし、荒々しい手つきでバスローブを脱ぎ捨てた。

ローブの下は——当たり前かもしれないけど、全裸だった。彼はすぐに続きを始めた。ものすごく荒い息を吐き出しながら囁く。

「ミハル……またあの可愛い声を聞かせてくれ。抱かれている間中、私を愛していると言ってくれただろう？　あんな風に、もう一度、乱れてくれ」

心臓を撫でられたような気がした。嘘だ。絶対、嘘。

だってあたしは……あたしは、処女だもの。

これまでの人生で、誰ともそんな行為はしたことがない。大体、

破瓜（バージンブレイク）の瞬間ってすごく痛いはずだ。それなのに記憶がないなんていくらなんでもおかしい。

「薬の量が多すぎたのか、朦朧とはしていたようだが……それともう一度抱かれれば思い出すか？」

「――っ」

反論を押さえ込まれた。血の気が引いていく。

……本当に、あたし、この人に……犯されたの？

あたしは呆然として黙り込んだ。彼はそんなあたしの両脚に手をかけて開脚させると、その間に腰を押しつけてきた。

異物感があった。すごく硬くて熱いものを押し当てられてる感触。

恐怖が全身を駆けめぐった。

あたしは涙目で懇願した。もしかしたら日本語だったかもしれない。

「や……やだ、お願い、やめて……やめてください、お願い……っ」

でも、彼はそんなこと、どちらにしても聞いてもいないようだった。

目を瞑り、眉根を切なそうに寄せ、搾り出すようにつぶやく。

「ミハル……ああ、私のミハル……愛してる、愛してるぞ、私だけのものだ……」

圧迫感が増した。彼が、入ってこようとしている。

助けて。

# 第三十五話　渇望

カシアンは、別邸の浴室で、白螺石（はくらせき）（※大理石に似た光沢を持つ天然石。産出量が少なく貴重とされる）の浴槽にゆっくりと身を沈めた。

これは、禊（みそぎ）だ。――あの娘と契るための。

首尾よく大学府から連れ出した娘を別邸の寝室に寝かせると、彼は人払いをさせ、扉に鍵をかけた。

そして、彼女の衣服を一枚一枚、自らの手で脱がしていった。すべて取り去った時に彼の目の前に現れた肢体は、まるで人形職人が丹精を凝らして作り上げた作品かなにかのように美しく、疵ひとつなかった。幼い顔立ちから、十五、六歳くらいかと思っていたが、その身体つきはどう見ても子どものものではない。おそらくは二十歳になるかならないか。十八、九といったところなのだろう。

彼は、渇ききった口中を湿らすため、唾を飲み込んだ。これほどまでになにかを心の底から欲したのは、人生で初めてと言ってもいい。

そのまま触れようとも思ったが、やめておいた。意識のない相手を陵辱するのは彼のプライドが赦さない。なにより、カシアンは、この娘が上げるだろう甘い嬌声を聞いてみたかった。自分に抱かれることで彼女がどれほど乱れるか、その姿態（さま）を、より甘美にはっきりと味わいたい。

でなければ、オルグ・ジードに勝ったことにならない。

浴槽から出、身体を拭き、バスローブを羽織る。寝台に近づく。
娘は起きていた。状況が飲み込めず、パニックに陥っているようだ。
馬乗りになり、両肩を押さえつけた。あまりに細い肩だ。比喩でなく、力を入れすぎてしまえば簡単に砕けることだろう。
カシアンの、天性とも言える嗜虐心が燃え上がる。
娘の黒い瞳は怯えのために曇った。
ああ、この黒い瞳……その眼差しが私を狂わせるのだ。
誰にも渡したくない。この娘は自分のものだ。
耳元に唇を寄せ、嘘を教え込んだ。この娘はおそらくは処女(きむすめ)だ。だとすれば、死にもの狂いで抵抗するだろう。その気概を少しでもくじくため。すでに犯されたあとだと聞かされれば、態度は軟化するに違いない。
獣が喰らいつくかのようないきおいで口づけをした。
かつて味わったことがないほどの恍惚感が湧き起こった。
身体の中心に、すべての熱が注がれる。……もう、堪えることはできない。
白くやわらかな乳房には血管が透けて見えた。その頂きには、遠い春を思わせる可憐な蕾(つぼみ)が二輪、揺れている。
口に含むと、そこが彼女の弱点なのか、すぐに反応があった。
……あまりにも甘い声だった。
全身を雷鎚(いかづち)に打たれた。娘は、羞恥のためかそれとも快感のためなのか、真っ赤になった顔を必死で逸らそうとしている。いとおしさが官能の度合いをいや増していく。カシアンは無意識のうちに囁いていた。
愛してる。
誰にも言ったことのないせりふだ。恋をしたことすらない。当然のことだ——女を含め、たいていの人間は、自分よりも劣っている

のだから。いずれウェス・ゴート家を継ぐ日が来ても、伴侶など家柄で選べばいい。それがもっとも重要なことだ、彼はそう思っていたし、彼の周囲もまたそうだったろう。

だが、いまの彼はなにかが違っていた。

この娘以外の女などは要らない。

この娘さえ、そばにいてくれればいい。

そんな感情に支配される自分を自覚し、その上、厭だとは感じなかった。なのに胸が痛い。彼女にも自分を好きだと、愛してると言って欲しい。オルグ・ジードよりも愛していると。

彼の腕ほどの太さしかない娘の両脚を広げ、その中心に猛り切った自身を添える。娘の顔が青ざめた。

そこは渇いているようだった。いや、わずかには湿っていたかもしれないが、挿入するには不十分だ。そのくらいの知識はあった。だが彼は退こうとはしなかった。

――痛みはやがて別のものに変わる。だから、私を受け入れてくれ……ミハル。

ゆっくりと腰を沈める。……しかし、抵抗は思った以上に堅固で、中々侵入することができない。女陰が濡れていないせいもあろうが、カシアン自身、できる限り彼女を傷つけないように、力を入れられないでいることが大きい。

娘の瞳に涙がにじんでいる。まるで天の川だ。彼はふたたび繰り返した。

愛してる。だから、お前も私を愛してくれ。

ノックとともに、キニッサの別邸を取り仕切る、あまりに無粋な

執務長の声が聞こえたのは、まさにその時だった。

# 第三十六話　追跡開始

アドリオは伝令室に走り、受話器をつかむや直通になっている大学府の執務局へと電話をかけた。だが、応答はない。なにしろ明け方に近い深夜のことである。彼は舌打ちをし、受話器を壁のホルダーに叩きつけると、自室へ駆け戻った。

数分で着替えを済ませ、革のバッグを引っかけて部屋を出、そのまま厨房に向かった。貯蔵室からパンやチーズ、干し肉を手当たり次第につかみ出すとバッグに詰める。

――馬車でなく、単騎なら半分の時間で行ける。だが食糧はあるに越したことはない。

彼はそう考えたのである。

「レンドルス、俺はこれからキニッサに向かう。お前は夜が明け次第、大学府に連絡を入れて、贋（ニセ）の電話をかけてきたのが誰なのかを探ってくれ。必要なら警吏庁にも連絡を取れ。いいな」

泡を喰って立ち尽くす執事に、彼はそう言い棄てた。邸を出、厩舎に立ち寄り、彼の愛馬である銀波号（ミシュリー）に飛び乗ると、まだ明け切らぬ暗闇の中を南に向かって出発した。

大将戦の翌日、二刻半（午前九時）から始まる哲学の講義に出ようとしていたジードは、学内の事務を取り仕切る執務局の職員に呼び止められ、伝信室に行くよう促された。

「ご実家の執事の方から、急なご用事とのことです」

「急な用事？」

殷懃（いんぎん）な物言いに眉を寄せるジード。職員は肯いた。

「ええ。おっしゃっていることが、どうも私どもにはわかりかねる内容でしたので……」

　要領を得ない回答だ。わけがわからないながらも、彼は第一教義棟一階の伝信室に向かった。

「ジードだ。レンドルスか？　どうしたっていうんだ、いったい」

『ああ、これはオルグ・ジード様。ご勉励中、まことに申し訳ございません』

　執事の声はいつもの冷静さを欠いているように聞こえた。ジードは重ねて訊いた。

「かまわないが、なにかあったのか。ああ、そう言えばミハルは？　無事に着いたんだろうな」

『――』

　返事がない。電話の向こうから、異様な空気が伝わってきた。ジードの顔が強張った。

「レンドルス、ミハルは……ミハルはちゃんと邸に着いたんだろう？　夜中は過ぎたかもしれないが、それでも――」

　彼は送話器に噛みつかんばかりのいきおいで怒鳴った。ややあって、消え入りそうな執事の声が聞こえてきた。

『あ、あ、あのですね……それが、つまり、昨日の話なんです。ロモッカが言うには、ウェス・ハーシュ家の執事を騙る男から、大学府宛てに至急邸に戻るようにとの電話が来たと。それで、電話を受けた大学府の職員という男に、ミハルは学府長との謁見が長引いているため、終わり次第自分たちが送るから先に帰れと……そう言われたというんです』

　ジードは愕然とし、その場に立ち尽くした。彼はかすれ声でつぶやいた。

「そ――その大学府の職員というのは……」

『ええ、それについてさっき訊いてみたんですが、そんな電話を受けた者にも、ロモッカに電話をかけたという者にも心当たりはないそうなんです。……ですから、オルグ・ジード様。ミハルは、おそ

らく、その誰ともわからぬ者によって、攫われた……ということになるのでは』

ぐらりと身体が揺れた気がした。額から厭な汗が噴き出す。ジードは懸命に自分を保った。

『オルグ・ジード様?』

「……ああ、聞いてる。大丈夫だ」

彼は額を押さえながらなんとかそう答えた。

『時にオルグ・ジード様、昨日はソフォモンドの学内対抗戦が行われたとか』

脈絡のない執事の言葉に、ジードはわずかながらも苛つきを覚えた。

「ああ。それがどうかしたのか」

『ロモッカから聞きましたが、ミハルは特別に観覧を赦されて見学していたそうですね。決勝戦まで観ていたとすれば、拉致されたのは少なくとも昼過ぎ、ということになりますまいか』

「……なんだと?」

ジードの緑がかった青い瞳が見開かれた。そんなことはまったく初耳だ。

「ミハルが……彼女が、試合を見学していた? 賓客としてか? それじゃあ、彼女は……」

レノラと同席していたことになる。――彼ははっとした。

大将戦の直後、駆け寄ってきた従妹は、興奮冷めやらぬまま自分に抱きつくなり唇を寄せてきた。

もしも未明がその時まで貴賓席にいたとすれば、自分とレノラが接吻を交わしている場面を見たことになるのじゃないか。

ジードは思わず口元を押さえた。黙り込んでしまった次期当主に、執事は訝しげな口調になった。

『どうされました、若君。ミハルの行方について、なにか、思い当たるようなことでも……』

「――いや、すまん、そうじゃない。レンドルス、とにかく私は学

内で手がかりを片っ端から集めていく。お前はすぐに動けるよう、待機していてくれ」

『承知いたしました、オルグ・ジード様』

レンドルスはそこで電話を切ろうとしたが、思い出したように慌てて付け加えた。

『ああ、そうでした、若君！　今朝明け方近く、弟君様が馬でそちらに向かわれました。おそらくは昼過ぎ頃に到着できるのではないかと』

「アドリオが？　あいつが、どうして……」

ジードは怪訝な面持ちになった。口数の少ない異母弟は、メイドの誰とも親しくすることもなく、邸内では常に独りで過ごす、一匹狼のような少年だ。これまで一度も大学府に来たことすらない。

そんな彼の胸中を読んだのか、レンドルスは遠慮がちにこう続けた。

『失礼ながら、弟君様は、ミハルには心を赦しておいでのようでした。ここ一ヶ月の間は、特にも。……ですから、ご心配のあまりだと思われます。昨夜も、深夜だというのにミハルが戻るのをずっとお待ちになっていらしたようですし』

ジードの心臓が妖しくざわめき出した。――あの一匹狼のアドリオが？　心を赦していただと？

じゃあ、私が大学府に戻っている間、あいつは毎日のようにミハルと一緒にいたのか？

私がそうしたように、あいつも……ミハルの部屋に入って、彼女と二人きりで……。

『若君。……若君』

執事の呼びかけが聞こえた。ジードは頭を振った。……いまはそれどころじゃない。ともかく、未明を捜し出さなければ。

「なんでもない。さっき言ったとおりだ、レンドルス。なにかわかったことがあれば逐一連絡してくれ」

彼はそれだけ言うと電話を切り、足早に伝信室を出た。

ジードは体調不良を理由に一限をサボタージュし、その足で講堂にある学府長室へ向かった。

逸る気持ちを抑え、ノックをする。いつもどおりの穏やかなワンジオ翁の声が応えた。

「お入り」

入室し、一礼するなり彼は切り出した。

「単刀直入にお伺いします。昨日、学府長に目通りいただいた、我がウェス・ハーシュ家のメイドの件ですが……」

ワンジオ翁はすぐに肯いた。

「あの可愛らしい侍女のことだね。実に興味深かったので、ソフォモンドを見学していくよう勧めたのだよ。しかし、決勝戦のあとでいつの間にかいなくなってしまってね。彼女は――」

「いなくなった？　決勝戦のあとに、ですか」

ジードは我を忘れて噛みついた。

「そう。それまでは確かに、二階の来賓者向けの席に座っていたのを見ているからね。……君がほら、あのカシアンに試合直後に切りかかられただろう、それで心配そうに席を立ったところまでは覚えているんだが。私もすぐに武芸場に降りたので、そのあとのことはわからないのだよ」

そこで一旦言葉を切り、さらに続けた。

「カシアンと言えば、彼の処分はとりあえず保留になってね。目下、自宅謹慎させているところだ。手は大丈夫かね」

「……ええ。包帯越しではありますが、日常生活をこなすのにこれといって不都合はありません」

ジードの返事に、ワンジオ翁はかすかな笑みを見せた。

「そうかね。それはなによりだ。……ああ、話が逸れてしまったが、あのフロンジーネがどうかしたのかね」

ジードは唾を飲み込み、どうにか搾り出した。
「――ヴィネックのウェス・ハーシュ邸に戻ってこなかったそうなのです。おそらくは、何者かに……拉致されたのではないかと」
ワンジオ翁の目が光る。
「拉致？　この大学府の構内でかね」
「わかりません。ただ、土地勘もない彼女が独りでここを出て行くことはまずあり得ないでしょう。ロモッカを……当家の御者を待っていればヴィネックまで帰れるのですから」
「ふむ……」
学府長はその白く長いあごひげを思案顔で撫でた。それから言った。
「彼女をこの大学府に引き止めた私にも責任の一端はある。なにか協力できることがあれば、遠慮なく言いたまえ」
ありがたい申し出だった。なにしろワンジオ翁は、学府長であると同時にロマド市長でもある。いざという時には力を借りることになるかもしれない。
ジードは深々と頭を下げ、退出した。

教義棟に戻る頃には一限が終わっていた。哲学の講義が行われていた教室から出てきたホルツェンとレミットが、級友の姿を見つけて駆け寄ってきた。
「ジード！　お前がサボるなんてめずらしいな。手が痛むんで気分が乗らないってやつか」
いつものように軽口を叩くホルツェンだったが、ジードのただならぬ表情に目を留め、眉を顰めた。
「おい、どうしたんだ？　なんか良くないことでも？」
「ジード？」
レミットまでが不安そうに彼を見上げている。ジードはそんな二

人を見つめ、口を開いた。
「――頼みたいことがあるんだ。申し訳ないが、協力してもらえないか」
いつになく真剣な口調に、友人たちは面喰らったような表情を浮かべている。ジードは手短に事情を話し、学内で未明の姿を見た者がいないか、さらに言えば拉致につながる手がかりを知っている者がいないかを、大学府中の人間に片っ端から訊いて回って欲しいと頼んだ。
思わぬ話にレミットは目を白黒させている。
「そ、そりゃあ協力はするけど、でもなんだってジードがそこまでするのさ？　いなくなったのはただのメイドなんだろ」
レノラ姫っていうあんな美人の婚約者がいるのに――彼にはその理由が理解できない。
だが反対に、もう一人の親友であるホルツェンは心得た様子で肯いてみせた。
「わかった、任せとけ。レミット、お前わかってないな。仮にもウエス・ハーシュ家のメイドだぞ？　あの貴賓席に座ることさえ赦されるほどの。使用人とは言っても、そこらの下級貴族より格式は上だ、なぁジード。心配するな、彼女は必ず見つけ出してやるから」
ジードは驚いた。ワンジオ翁に賓客扱いをされ、レノラと同席した事実までは話していない。なぜホルツェンがそれを？
「悪い、言いそびれちまってたけど、昨日レノラ嬢を案内した時、彼女がそんなことを言ってたんだ。異国風の可愛い子で、名前も聞かないうちにいなくなったってな。夕食の時にでもお前の耳に入れてやろうと思ってたんだが、お前、夜はやたら不機嫌で寮に戻るなり寝ちまっただろ？　それでタイミングを逃しちまってさ」
ホルツェンはそう言って片目を瞑った。そしてジードの肩を軽く叩いた。
「人海戦術だ。ほかの寮の、話のわかるやつにも声をかけて協力してもらおう。とにかくしらみ潰しに訊いていこうぜ」

頼もしいせりふだった。ジードはわずかに微笑した。

ラウロ・エウリック・グリザニカは、第二学生寮の友人であるレミットからの意外な頼まれごとに快く肯いた。

「ああ、いいよ、おやすいご用さ。第一寮の連中にはぼくが訊いておいてやるよ」

レミットの顔が輝く。

「いいのか？　仲の悪い第二寮の、それもジードの頼みだっていうのに」

昨日の「敗戦」はまだ記憶に新しいところだろう。だがラウロの表情はひどく晴れやかだった。彼はにんまりと極上の笑みを浮かべてみせた。

「ぼく、いま、すっごく幸せなんだ。わかるだろ、同室の王様がいなくなってくれたからさ」

なるほど。レミットはつられて噴き出した。カシアンの退学については保留にされたらしいが、いずれなにかしらの処分が下るのは間違いない。少なくともそれまでの間はラウロは心穏やかに過ごせるというわけだ。

レミットと別れ、ラウロは早速訊き込みを開始した。彼とてまったく関わりのない相手というわけではない。行方不明になったメイドというのは、あの対抗戦の前夜、カシアンがかどわかそうとした娘なのだろうから。

「構内に女？　見た覚えないよ。昨日だろ？」

「レノラ姫なら見たぞ。噂のとおり、絶世の美女だったよな」

「行方不明って、オーバーだな。たかがメイドじゃないか」

返ってきたのはこんな声ばかりだ。芳（かんば）しい結果は中々得られない。ラウロはため息をつき、それでも訊き込みをやめようとはしなかった。生来の正直者なのだ。引き受けたことはきちんとやり遂げたい。

「あれ、あいつら、確か……」
彼はふと目を留めた。寮の入り口にたむろしているのは、カシアンと同じチームだった、ハリドランとグラッドの二人だ。グラッドの試合は悲惨だったよなぁ――そう思いながらラウロは躊躇なく彼らに声をかけた。
「なあ、ちょっといいか」
「あ？　ああ、ラウロか。なんだよ」
ハリドランは居丈高に答えた。ラウロは内心、苦虫を噛み潰す思いだった。……まったく、だからこの第一寮は「高飛車寮（ゴディハラ）」なんて渾名されるんだ。カシアンだけじゃなく、そういうお高くとまった学生がほんとに多いんだからな。
ラウロは咳払いをし、いたって事務的に続けた。
「あのさ、昨日、昼過ぎくらいに、構内で女性を見なかったか。臙脂の女官服を着た、十六くらいの若いメイドなんだけど」
「……メイド？　なんでここにメイドなんかが……」
不審そうに眉を寄せるハリドラン。
「ウェス・ハーシュ家のメイドなんだってさ。第一寮のオルグ・ジードの家のさ。大学府に遣いで訪れて、そのまま行方不明になったって話なんだ。それで、誰かが彼女を見てないか、訊いて回ってるんだけど」
ハリドランの表情が、見る見る侮蔑的なものに変わっていく。
「ばかばかしい。いくらウェス・ハーシュ家ったって、メイドだろ？　なんでそんなに必死になって捜す必要があるんだよ。ジードのやつ、カシアンにやられた傷が悪化して、頭までおかしくなったんじゃないのか」
あまりな言い草に、ラウロはかっとなった。そのジードのチームに負けたのはどこのどいつだ、そう言い返そうとした時だった。
「臙脂の……十六くらいの女だって？　それが、ウェス・ハーシュ家のメイドだっていうのか」
ラウロはものすごい力で両肩をつかまれた。目の前に、グラッド

の巨体が迫っていた。
「あ、ああ……もしかして見たのか？　グラッド」
そう訊き返すも、グラッドはいきなり口を噤んでしまった。ラウロの肩から手を離し、露骨に目を逸らしている。
「おい、グラッド」
相棒のハリドランも怪訝そうに彼を見ている。どうやらグラッドは話す決心がつかないでいるようだ。
――この時、ラウロの頭に閃くものがあった。
「もしかして……カシアンが絡んでるのか」
グラッドの肩が大きく震えた。図星だ。間違いない。
「グラッド、どういうことだ？　教えろよ、おい」
ハリドランとも目を合わせようとしない。ラウロは言った。
「なあ、グラッド。もしなにか知ってることがあるなら、話してくれ。カシアンは、ウェス・ゴート家は確かに実力者だけど、大学府じゃあ誰だって公平に裁かれる。やつがなにか好からぬことをしたっていうならなおさらだ。それに問題になってるのはウェス・ハーシュ家の人間だぞ、カシアンの家に負けない名門だ。なにか知ってて黙ってたってことになれば、お前の立場だって後々危うくなるかもしれないぞ」
グラッドは怯えたような目をラウロに向けた。彼が匂わせた、保身という概念が効いたようだ。
やがて彼はぽつぽつと喋り始めた。
「……俺……見たんだ。昨日の昼、多分閉会式をやってる頃、来賓用の車停めにウェス・ゴート家の馬車がいて……それで、そこにあの女の子が近づいてったら、御者台から降りてきた男が、なにか布みたいなもので彼女の口を覆って。……きっと眠り薬かなんかだ、彼女すぐに意識を失っちゃったみたいだったから」
ラウロは目を見開いた。ハリドランも同様だ。
「ほ……ほんとかよ、おい？　それじゃあ誘拐じゃないか」
「グラッド、見間違いじゃないのか？　ほんとにウェス・ゴート家

の馬車だったのかよ」
二人は矢継ぎ早に質問を浴びせたが、グラッドは強固に肯いた。
「間違いないよ。そりゃ遠目だったけど、俺、視力は両方ともいいんだ。あの王冠をあしらった家章はウェス・ゴート家のだよ。教科書で厭というほど見てるから、間違いようがない。カシアンがいたかどうかはわからないけど」
「……」
ハリドランは呆気に取られて口を開いたままだ。逆に、ラウロは、驚きつつも妙に納得していた。
よく考えれば、試合が始まる前からカシアンの挙動はおかしかったのだ。女人禁制の学生寮に若い娘を引っ張り込もうとするなど、通常では考えられない。なにが彼の乱心を引き起こしたのかは不明だが。
「わかった。話してくれて助かったよ。ありがとう、グラッド」
ラウロは頭を下げるとすぐさま第一寮を飛び出し、第二寮のジードの部屋に向かった。

# 第三十七話　異母兄弟

カシアンが未明の身体を開いてその中に沈み込もうとしていた、まさにその時だった。

「若君。畏れながら申し上げます。……どうぞ、思い止まりくださいませ」

扉の外から、執務長の慇懃な声がした。

カシアンの眉がぴくりと動く。しかしそれは一瞬のことだ。彼はふたたび腰に力を入れた。未明の悲鳴が上がる。

「や、やめ……厭ぁ……っ」

恐怖と嫌悪に歪んだその声すらいとおしい。愛してる、そのせりふを熱に浮かされたように繰り返す。

――ところが、無粋な進言はなぜか止む気配がない。

「若君、どうか落ち着かれませ。先ほど、大学府より連絡がございました。退学は保留とのことです。ですから、いま、その娘と通じてしまうことは、あまりに早計な振る舞いです。どうか、どうか止まりくださいませ」

冷静ではあったが必死さがにじみ出てもいた。彼はさらに続けた。

「本宅のお館様より、お電話が入っております。此度のこと、僭越ながらお耳に入れさせていただきました。どうぞお出になってください、若君」

「……なんだと」

カシアンは振り向いた。舌打ちをし、そしてようやく未明から離れた。彼はさっき脱ぎ捨てたバスローブを羽織り、未明を名残惜しげに見やった。それから足音も荒々しく部屋を出て行った。

独り残された未明は、カシアンから解放された安堵と、意識のな

い時とはいえ彼に犯されたのだという絶望を同時に感じ、込み上げる嗚咽を必死で押し殺していた。

ジードの名を口にしたくても、それすらできなかった。

第二学生寮に息せき切って現れたラウロは、ジードの部屋のある三階へと階段を駆け上がった。彼も訊き込みに出かけているだろうから不在かもしれないが、とにかく一刻も早く伝えなくては。

角部屋に近づくと、人の声と物音がした。どうやら中にいるらしい。しかし、ノックをしようとして振り上げた手が、空中で止まった。――言い争いをしているようなのだ。

「兄上がついていながら、いったいどういうことだ！　俺は……俺は邸でずっと待っていたんだぞ、あいつの帰りを。なのに……」

聞き覚えのない、若い男の声。怒りのあまり語尾が震えている。

「ああ、私だって時間を巻き戻せるものならそうしたいさ！　だが――アドリオ、お前に責められる筋合いはないぞ。なぜ彼女のことでお前がそこまで激昂する？　お前、まさか……まさか、ミハルを……」

これはジードの声だ。あの冷静沈着な彼とは思えないほど苛立った口調。兄上、ということは、彼の弟が部屋を訪れているのか。兄弟の再会にしてはいやに穏やかでない雰囲気だが。

「兄上には関係ない。……だけど、これだけは言っておく。あいつのことは俺じゃなきゃわからない。あいつは、ミハルは、俺の母上と同じ国から来たんだ。だから絶対に兄上には、俺以上にミハルを理解することなんてできない」

「なんだと……」

ジードの声色に殺気がこもった。ラウロは身を縮めた。まるで自分がジードに胸倉をつかまれたような気がしたのだ。ラウロは咄嗟にドアを叩いていた。

「ジ、ジード、いる？　あの、第一寮のラウロだけど、見つかったんだよ手がかり」

室内が一瞬、静まり返った。間髪入れずにドアが開いた。そこには血走った目のジードがいた。

「ラウロ、本当か？　彼女はどこにいるんだ」

その迫力になかば気圧（けお）されながらも、ラウロはどうにか後ろ手にドアを閉めた。ことがことなだけに、あまり、他人の耳に入れたい話ではない。

「……拉致現場の目撃者がいたんだ。彼女、どうやらカシアンの家の馬車で連れ去られたらしいよ。閉会式をやってる最中に」

「な……」

ジードは絶句した。

自分憎さに、まさか彼がそこまでの手段に出るとは。

つまり、未明は、自分のために巻き添えになってしまったということか？

しかも――閉会式の頃といえば、自分は医務室に引き取り、レノラの相手をしていた。未明がカシアンの毒牙にかかって連れ去られようとしていたそんな時に、自分はなにも知らず、別の女のそばで……。

「兄上、カシアンって誰だ？　この学校のやつなのか」

呆然と立ち尽くすジードにアドリオが迫る。ジードは頭を振り、かすれ声で答えた。

「――ああ……お前も聞いたことくらいはあるだろう、オサイオンのウェス・ゴート一族の次期頭領だ。やつはソフォモンドの試合に負けたことで私をひどく恨んでいた。だからおそらく、その腹いせにミハルを攫ったんだ」

アドリオの顔が強張った。彼はジードの胸倉をつかんだ。

「腹いせだって？　そんなばかげた理由でか？　なのに兄上、あんたはあいつを護れなかったのかよ、同じ構内にいたっていうのに！」

鈍い音がし、ジードの身体がぐらついた。アドリオの拳をまとも

に喰らったのだ。
「お、おい、ちょっと！　学内で暴力行為はやばいぜ、へたすりゃジードが退学になっちまう」
仰天したラウロが割って入ろうとするも、アドリオの激情は止まらない。彼は燃えるような瞳で異母兄を睨みつけた。
「退学？　それがなんだっていうんだ。もしもミハルが……ミハルになにかあったら、俺はあんたを殺してやる」
ジードはなにも言い返さなかった。もし、未明が無事に戻らなかったら。その時は、自分の方から殺してくれと願うだろう。
深くうな垂れ、床に座り込んでしまったジードに、ラウロは声をかけた。そのメイドが心配なのはわかるが――いや、正直、なぜそこまで気を揉むのかはまったく理解不能だが――少なくとも喧嘩をしている場合ではない。
「ジード、なぁ、とにかくそのメイドを助け出さないと。ウェス・ゴート家の別邸は大学のけっこうすぐ近くにあるじゃないか。もしかしたらそこにいるかもしれないぞ」
「場所を教えてくれ。俺独りで行く」
そう言ったのはアドリオだ。彼の目は完全に据わっていた。ラウロは思わず後退った。
「ひ、独りでって……そりゃやめたほうがいいんじゃないのか。向こう、用心棒みたいなのがいるかもしれないしさ」
二人で仲良く、協力して……とはとても言い出せない雰囲気だ。
「アドリオ、ラウロの言うとおりだ。確実に彼女を助け出すためには、協力し合った方がいい。カシアンは手負いの獣のようなものだ。退学はかろうじて保留になったが、危険な精神状態にあることは間違いない」
この時、ジードの全身を戦慄が襲った。
――この大学府の禁忌は、学生でなくなった瞬間に破ることができる。
大将戦で見せた、狂気にも似た眼差し。あの男の腕の中に未明が

いる。そして、もし、もしも、彼の暴走が、最悪の事態を引き起こしていたとしたら。

「おい……ジード？　ジードってば、なぁ」

ラウロの怯えたような声がした。青白い焔（ほのお）のような怒気が、ジードの身体中を取り巻いていた。アドリオでさえひいた様子でそんな彼を見ている。

「……行くぞ、アドリオ。馬ならすぐに着く。四半刻（約三十分）もかかるまい」

そう言い棄てるとジードはドアを開け放ち、部屋を出た。我に返ったアドリオがすぐにそのあとを追いかけた。

# 第三十八話　証言

ウェス・ゴート家の別邸は、大学府から八ノール（約二十キロ）ほど離れた閑静な地に建っている。別宅とはいえ敷地は広大で、同じくキニッサにあるウェス・ハーシュ家のそれよりも規模が大きい。白亜の外観から、地元の人間は「白の屋敷」と呼ぶ、名家の赴き充分の邸宅だ。

ジードは大学府の厩舎から借り受けた駿馬に乗り、アドリオを従えて全速でそこを目指した。やがて目的地が見えた。実際に訪れたことはないが、聞いていた特徴どおりの屋敷だ。間違いないだろう。門衛が二人。ジードはアドリオと視線を交わした。直接当たるつもりだ。もし拒否されたら腕ずくで突破する。

馬に乗ったまま近づくと、門衛たちはあからさまに身構え、誰何（すいか）の声を張り上げた。

「客人があるとは聞いていない。何者だ、馬を降りろ」

ジードは冷静に答えた。

「オルグ・ジード・レア・ウェス・ハーシュ。こちらは弟のアドリオだ。ウェス・ゴート家の次期当主、カシアン殿に目通り願いたい」

彼らの顔色が変わった。二人は顔を見合わせ、肯きあった。

「これは失礼いたしました。ウェス・ハーシュ家のご子息で？　カシアン様のご学友でもあられる」

同学年というだけで、友人では決してないが、ジードは敢えて否定はしなかった。

「カシアン殿はおられるか。会って訊きたいことがある」

彼は重ねて訊ねた。

「あいにく、ご不在でございます。しばらくの間、旅行に出られることになりまして」

門衛は慇懃に答えた。だがここで退くジードではない。
「旅行？　行く先は？」
「さ、そこまでは我々には知らされておりませんので……ご出立されたのは昨日のことでございますが」
なにかを隠しているような空気ではなかった。だが本当に邸内にいないのか、確かめないわけにもいくまい。
「――ここを通してもらえまいか。どうしても確認したいことがあるのだ」
拒まれたら強行突破する気でいた。が、意外なことに、その言葉はあっさりと聞き入れられた。
「承知いたしました。ウェス・ハーシュ家の次期当主ともあろう方を門前払いするわけにもまいりません。どうぞ、中へお入りください」
門が開かれ、二人は敷地内へと招じ入れられた。ジードは眉を顰めた。この対応からすると、よほど巧妙に未明を隠しているのか、それとも真実留守にしているのか。
「兄上、どういうことだ。そのカシアンってやつは本当に出かけてしまってるのか」
「わからん。とにかく邸内を探るしかないだろう」
二人は馬上で囁き合った。
玄関前で馬を降り、扉に取り付けられた巨大なノッカーを手にする。二度ほど叩くとすぐに応答があった。
「……これは……もしや、ウェス・ハーシュ家の……オルグ・ジード卿では」
三十そこそこの長身痩躯の男が現れた。灰色の細い瞳からは表情が読めない。無言で肯くジードに、彼はそつなく礼をした。
「ようこそお出でくださいました。この別邸の執務長で、ロンディーグと申します。お目にかかれて光栄に存じます。ところで……本日はなにか、急なご用事でもおありでしたか」
「ああ。カシアンに会うつもりで来たんだが、旅行中で不在とか」

「ええ、そのとおりでございます。ご存知でしょうが、カシアン様には大学府より、自宅謹慎令が出されております。しばらくの間、気鬱を防ぐためにも、旅をなさったらどうかと私がお勧めしましたので」

そう言うと彼は玄関ホールに二人を促した。

「もしよろしければお茶でも……」

ジードは慎重に肯いた。

「……ああ、そうさせてもらう」

ジードとアドリオは客間に通され、ユニス［注‐バラに似た香りを持つ青い花を咲かせる多年草］の茶を供された。立ち昇る瑞々しい香気。アドリオは感嘆したようにつぶやいた。

「いい香りだ。これはもしかして、そこの庭園から？」

「ええ。種類もさまざまございます。中には、我がウェス・ゴート家の、このキニッサ邸でしか栽培していないものも」

そばに控える執務長、ロンディーグが答える。ジードは興味を惹かれた風を装い、言った。

「それはめずらしいな。アドリオ、お前はユニス茶が好きなのだろう。庭園を見せてもらってはどうだ」

彼の意図を瞬時に理解したらしく、異母弟の黒褐色の目が光った。

「そうだな……執務長殿、そうさせていただいてもかまわないか」

「ええ、もちろん。では私がご案内を」

ジードは素早く彼を引き止めた。

「ああ、執務長殿、君にはカシアンのことで伺いたいことがあるんだ。悪いがここにいてくれ。アドリオは元々、独りを好む性格でね。彼なら放っておいてくれた方がいい、そうだろう」

アドリオは無言だが、肯定の印に軽くあごを引いてみせた。

ロンディーグはじっとジードを見つめ、それからアドリオを見た。

二人の表情は特に変わらない。やがて彼は言った。
「その方が良いとおっしゃるのであれば。……では、アドリオ様、庭園へはこのテラスから降りることができますので」
客間に面する壁は一面がガラス張りの扉になっており、そこから外へ出られるらしい。アドリオはもう一口だけ、青い花びらの浮かぶ茶をすすってから腰を上げた。

アージュリン・フィリア・ロセットは、庭園にいくつも刈り込まれた見事なトピアリーにもたれ、やるせないため息を吐き出した。

……吸いたい。無性に煙草、吸いたい。

彼女は二ヶ月ほど前にキニッサ邸に勤めるようになった、十七歳の新参メイドだ。赤い巻き毛にそばかすが印象的な、やや蓮っ葉なところのある娘で、縁談前にどうしても箔をつけたい彼女の両親によって、強引にこの屋敷に送り込まれてしまったのである。
そもそも奉公などまともにできる性格ではない。それは自分でもよくわかっていた。お勤め中は禁煙しなければならないと聞き、それだけでも耐え難い苦痛だというのに、いざ来てみればなんというど田舎であることか。いくら名門中の名門、ウェス・ゴート家所縁の屋敷とはいえ、これでは出会いなどとうてい期待できそうもない。

だからあたしは言ったのよ、せめてオサイオン市の本家の方にしてくれって！　なのにうちの父親ったら、そこまでのコネがないもんだから、こんな超絶弩級田舎に人のこと閉じ込めてくれちゃってさ。

まだしも煙草が吸えれば、ストレスだって半減できるのに――。

彼女はもう一度ため息を吐き出すと、ゆっくりと歩き出した。昨日まで客が使っていた部屋の清掃を途中で擲(なげう)って出てきたのだ。

彼女はふと思いをめぐらした。……あの子、いったい何者なのかしら。

次期当主である若君が、あの若い娘に付きっきりでその面倒を看ていた。いや、というには少し様子がおかしかった。なにしろ彼が連れてきた娘は、寝台に裸で寝かせられており、ずっと服を着ることを赦されなかったのだ。アージュリンの頬が赤らんだ。

お湯を運ぶ時にちらっと見たけど、顔のわりにずいぶん、こう……発育のいい子だったわよね。あたしと同じ……ううん、もしかしたらもうちょっと年上だったりして。

それにしても……あれって絶対、エッチ目的で連れ込んだようにしか見えないんだけど。いいのかしら、カシアン様って、確か特殊な学校に通ってるんだったわよね？　卒業するまではそういうこと一切できないとかいう。

昨日の昼過ぎに本家の旦那様からお電話が来たと思ったら、カシアン様はあの子を連れて慌しくこの家を出ていっちゃったんだっけ。アージュリンは気が抜ける思いだった。二人の濡れ場がもしかしたら見られるかも、という不埒な期待がその胸に潜んでいたためだ。なにしろこのキニッサの別邸暮らしでは、刺激など求めるべくもない。俗界を感じさせてくれる嗜好品もお洒落もボーイフレンドさえも、お勤め期間が明けるまではすべてお預け。砂を噛むような味気のなさだ。

このままあたし、年老いていくのかしら――軽い恐怖とともにそう独りごちた時だ。

庭園の中を、見知らぬ若い男が歩いているのが見えた。

アージュリンは目を見開いた。年の頃はおそらく、十八かそれくらい。……遠目にも、かなりのいい男だ。

彼女は小走りになり、彼のもとへ近寄った。相手も気づいたようで、こちらを見やる。

美形だ。

艶のあるウェービーな黒い髪に、やや褐色がかった黒い瞳。ほんの少しだけ浅黒さの混じったなめらかな肌。すらりと均整の取れた体躯。

……美形だわ。

彼はじっと自分を見つめている。アージュリンは目を輝かせて――しかしあまり物欲しげには見えないように努めながら――話しかけた。

「お……お花が好きなんですの？」

男はかすかに微笑した。意外なほど人なつこい笑みだ。アージュリンの心臓がにわかに騒ぎ出す。

「ああ。この、紫のユニスは君が手入れを？」

彼の指差す先には、三人の庭師が丹精して管理している、世界でも貴重な種類の花が風に揺れていた。もっとも、そういった情緒的なものには関心のない現実主義のアージュリンの視線は、花ではなくもっぱら男の長い指に向けられていたが。

「え、ええ。そうですわ。わたくし、大好きなんですの、このお花」

大嘘である。が、男は信用したようで、その笑顔がいっそう華やかになった。

……ああ……これよ、これ。こういう出会い（ロマン）を求めてたのよ、あたしは。

彼女はうっとりと男に見惚れた。そこではっと我に返った。

――ていうか、この人、誰？

「失礼。ぼくは、アドリオ・マレストゥス・ミトラ・ウェス・ハー

シュ。君は？」
　アージュリンはあんぐりと口を開けた。ウェス……ハーシュですって？　あの、ロマド一の名家の？
「フロンジーネ（お嬢さん）？」
「あっ……あ、あの……アージュリン・フィリア・ロセットと申します、アドリオ様」
「アージュリンか。きれいな名だな、この花にも相応しい」
　彼はやさしげな微笑を湛え、アージュリンの手を取ると接吻をした。アージュリンの顔が文字どおり緋色に染まる。
「ぼくは兄上に面会するために大学府に来てるところなんだ。カシアン殿の様子を見に行きたいというんで、一緒についてきたんだが、どうも退屈してしまってね。……でも、来てよかった。君みたいな可愛い子に会えたんだから」
「……！」
　ものも言えずに固まっているアージュリンに、アドリオは顔を近づけて囁いた。
「ここだと、君のボスに見られそうだ。……少し移動してもかまわないかな」
　執務長のロンディーグのことだ。アージュリンは全力で肯いた。彼のいる客室のガラス扉からは死角になる隅のトピアリー群まで来たところで、アドリオはいきなり彼女の腰に手を回した。アージュリンの息が止まる。
「カシアン殿は、今日は不在なの？」
　耳元で囁かれる甘い声。返事すらできない。
「アージュリン？」
「え……は、はい、そうなんです。今日はというか、昨日のお昼過ぎから……」
「旅行に行かれたとか聞いたけど。誰かと一緒に？」
「ええ、あの……カシアン様が連れて来られた女の子と一緒に。旦那様からお呼び出しがあったみたいで」

アドリオの目が鋭く光った。彼は表情を変えず、表面はなにげなく、だが慎重に訊ねた。

「旦那様っていうと、オサイオン市におられるウェス・ゴート卿だね。ということは、彼はその子とオサイオン市に？」

「ええ、ええ。そのとおりですわ。旦那様のご命令は絶対ですもの」

アドリオはさらに続けた。

「しかし……カシアン殿は兄上と同じく大学府の学生だろう。女性を同伴するなんて不思議な話だな。その、連れ帰ったっていう娘は、どういう子なんだい。君も知っている子？」

アージュリンは力強く否定した。

「いえ、とんでもない。まるで知らない娘ですわ。こげ茶の長い髪で、夜空みたいな黒い瞳で。一度見たら忘れられません、なんていうか、外国人みたいな娘なんですの」

もう間違いない。アドリオの胸が震えた。

未明は、昨日確かにこの屋敷にいたのだ。アドリオはゆっくりと息を吐き出した。

「それにしても、カシアン殿はいったいなんのためにその娘を連れてきたんだろうね。……君は知らないの？」

突っ込んだ質問にアージュリンは頬を紅潮させた。――アドリオは眉を顰めた。

「あの……とても申せませんわ、わたくし。カシアン様がなにをお考えになって、あんなこと……」

――あんなこと、だと？

アドリオの形相が変わった。彼は、赤くなって目を逸らしているアージュリンの両肩をつかむと、一転して強い調子で迫った。

「アージュリン、それはどういう意味だ？　カシアンは彼女になにをしたんだ」

「な、なにをって……ですから、その……男女の、営みを……」

アージュリンは口ごもりながらも決定的な言葉を滑らせた。若干の語弊を招く言い方ではあったが。

「あ……あの、わたくしもはっきりと見たわけではありませんの、そんな、はしたない。ただ、その連れて来られた娘は、出立するまでの間、ずっと裸でしたわ。カシアン様もずうっと彼女に付き添っておられて。お若いんですもの、そんな状況（シチュエイション）であれば……ねぇ」

アドリオは絶句した。血の気が引いていくのがわかった。

「あの、アドリオ様？」

アージュリンの怪訝そうな声も耳には届かない。その時だった。

「アージュリン。こんなところでなにをしているのかね」

赤毛のメイドは思いきり肩を震わせて飛び上がった。背後に立っていたのは執務長のロンディーグだ。

「ウェス・ハーシュ家のご子息に、失礼な真似はしなかっただろうね。……邸内に戻りなさい。客室の清掃もまだ終わっていないのだろう」

彼女は無言のまま、屋敷に向かって一目散に駆け出した。その姿が見えなくなったあたりで、ロンディーグはあからさまにため息をついた。

「申し訳ございません、アドリオ様。教育が行き届いておりませんで、ご迷惑を」

アドリオにしてみればそれどころではない。彼はなにも答えず、アージュリンと同じように屋敷に戻った。ロンディーグが場を外した隙に邸内を探ろうとして回廊にいたジードを見つけるなり、押し殺した声で告げた。

「旅行なんて嘘っぱちだ。やつはミハルを連れてオサイオンの本邸に移ったらしい。俺たちもすぐにあとを追おう」

「本邸だと？　……そうか。特別急行を用意させたんだな、ウェス・ゴート家の権力を行使して」

なんにしても大きな収穫だ。ジードは異母弟を労（ねぎら）おうとして、その異様な顔色にあらためて気づき、訝しげに訊ねた。

「アドリオ。どうかしたのか？　……まさか、ミハルになにか……」
アドリオはジードから目を逸らした。そしてぶっきらぼうに言い棄てた。
「なにもない。あいつは無事だ、そうに決まってるだろ。ともかく早く向かわないと」
おのれに言い聞かせるかのような口調でもあった。ジードの胸に、不吉な黒雲がざわざわと広がっていく。
未明が消息を絶ってから、丸一日が過ぎようとしていた。

## 第三十八話　証言（後書き）

兄君と同じく、女子との接触がほとんどないはずのアドリオがなぜ、これほど器用に立ち回れるのか。

……たぶん、子どもの頃、父君に「春の街」あたりに連れていかれたんでしょうね。

（個人的にはもっとも動かしやすく、好きなキャラです。お父さん）

# 第三十九話　思惑

連邦の首都、オサイオン市が置かれる中央大陸バルネディア。定期的に各大陸の主要都市を治める要人が集まってのサミットが繰り返されており、つい先日も、そのうちのひとつとなる七日間会議が終了したばかりだった。

もっとも七日間とは言っても、実際の期間は必ずしもその日数で収まるわけではなく、故事に則(のっと)っての通称に過ぎないのだが。

終了日を迎えたオサイオン市の会議場には、お決まりのメンバーが顔をそろえていた。すなわち、東のレピュラス、西のゼドス、北のツェノワ、そして中央のバルネディアからのそれぞれの要人たちである。

「――ロドアのあの山師の姿が見えないが。例によってもうお帰りかね」

議場を見回し苦言を呈したのは、オサイオンの宰相と謳われるウェス・ゴート家の現当主、ゾデュー・エリアック・ウェス・ゴート卿だ。誰のことを指しているかは明白だった。

「まあ、主要議題についての論議はあらかた終わっていましたから……彼にしては長居した方なのでは」

苦笑雑(ま)じりに答えたのは、書記を務めたレピュラスの市議長である。ゾデューは遺憾そうに首を振った。

「私には理解できんね。なぜあれがイグノディアス神の寵愛を受けることができたのか」

「ノルド家の存在は無視できませんぞ。つながりも深い。それに彼自身、実に優秀な男だ」

「ああ、それにですね、なんと言いましてもイグノディアスは女神であられますから……神と言えど、好みがあるのかもしれませんな」

艶笑が漏れる。ゾデューは忌々しげに咳払いをした。

そんなことがあったのがついひと月ほど前の話である。この日、オサイオンの郊外に巨大な荘園を構えたウェス・ゴート邸では、サミットから戻った当主が、礼拝室で客人を迎えているところだった。

「ようこそ、オルヌ殿。お待ちしておりましたぞ」

ゾデューの歓待に、ラルモ・オルヌ副神官は、その磨き上げたようにつややかな頭をおごそかに下げてみせた。

中央政府の本拠地を管轄するのはオサイオン市だが、イグノディアスを讃えるイシオス（※）神殿を主管しているのはロマド市、つまりウェス・ハーシュ家だ。連邦の基本方針は政教一体であり、それもはっきりと「教」への偏りが強い。ゾデューがオルグ・ヴィネックをなにかと煙たがるのにはそういった背景があった。

着座を勧めたところでメイドが茶を持って現れた。副神官の好む紫のユニス茶だ。

「ああ、お前はもう下がりなさい。しばらくここに人を近づけないように。いいな」

心得ているのか、彼女は素早く退出した。そうしてからゾデューはおもむろに切り出した。

「ところで……本日はまた、どのような……」

副神官はカップに口をつけてゆっくりとすすり込んでから言った。

「……どうやら現れたようです。我が神の依坐（よりまし）が」

ゾデューの顔に緊張が走った。息子と同じ、緑灰色の切れ長の瞳が見開かれる。

「十九年前と同じ過ちは犯したくない。今度こそ、我らの手に……あの女神の依坐を。さすれば連邦、いやこの世界の舵は、我らが握ったも同然になりましょう」

「おお……」

興奮に身体が震える。オルヌはさらに続けた。

「『黒の経典（ザモド）』によれば、その存在は異界から突然現れる。ここ数ヶ月の間の兆候がそれを教えてくれております」

ゾデューは、いつだったか定例会議の場で囁かれていた奇妙な噂

のことを思い出していた。発行認定を下してもいないはずの恒久手形が、いずこともなく流通している。それはもしや、今回の依坐の出現と関係があるのではないか。

「それで、オルヌ殿、その存在というのは、いったいどこに……」

ゾデューは喘ぐように訊ねた。副神官の、濁った沼を思わせる青銅色の瞳が瞬いた。

「そこが厄介でしてね。……どうも、例の……ウェス・ハーシュ家の周囲に、気配を感じるのですよ」

「なんですと」

ゾデューの眉が引きつった。彼はその胸中で激しく毒づいた。

――あの、山師めが！　いったいどこまで我がウェス・ゴート家の邪魔をすれば気が済むのだ。

が、オルヌの次なる言葉はやや意外なものだった。

「それも現当主ではなく、次期当主であるその息子が関わっている。或いはすでに接触しているかもしれません。ただ、おそらく、気づかれてはいないでしょう……ノルド神官長は『黒の経典』の存在を知らない。つまり、ウェス・ハーシュ家の人間が真実を知る機会も、同様にないはずですのでね」

オルヌは邪まな笑みを浮かべてみせた。ゾデューは重ねて訊ねた。

「では――いまのうちであれば、まだその存在を奪取できると？」

「むろん」

副神官はゆっくりと肯いた。

そして、この密談のわずか一週間後、不祥事を起こして謹慎中となった息子カシアンから、ゾデューは思わぬ告白を聞くことになる。

――どうしても手に入れたい娘がいる。ついては父上に目通りいただきたい。

初めは怒り心頭だったゾデューだが、その娘の特徴を聞き出すうち、脳裏に閃くものがあった。

大陸共通語（イーザリア）に明るくない、異国風の若い娘……それも、ウェス・ハーシュ家のメイドだと？

よもやそれは、例の、依坐となる異邦人ではないのか。

カシアンは熱っぽくこう続けた。どうあっても彼女を正妻として迎えたい。ゾデューはしばし黙り込んだ。もし、その娘が当該者であるとすれば、どういう処遇が相応しいのか。生き神としてどこかへ閉じ込め、祀るべきか。それとも、生身の人間と同じ扱いをしてもかまわないものなのか。

すぐに答えが出るわけもなく、とりあえず彼は、その娘を連れてオサイオンの本邸に来るよう息子に命じたのだった。

（※「イシオス」……神代（じんだい）語で「光」の意）

夕刻を過ぎた「銀鼠」には、いい具合にできあがって長椅子にひっくり返る馴染み客の姿があった。女将であるロナジアの呆れ気味の声が飛ぶ。

「ファロダ、あんた、いい加減飲み過ぎだわよ。ほら、お水！　起きなさいったら」

強く揺さぶるも一向に反応がない。そのうち高鼾（たかいびき）が聞こえ始め、ロナジアの形の良い額に青筋が浮かんだ。

しかし彼女が怒鳴るよりも先に、入り口の扉が開き、およそこんな場所には似つかわしくないような人物が現れたのである。

入ってきたのは二人の若い男だ。片方は少年と言ってもいいかもしれない。どちらも美しい顔立ちで、一目で名家の子息とわかる身なりをしている。ロナジアは呆気に取られてまじまじと彼らを見つめた。

青年たちは店内を見回していたが、すぐに長椅子の上の酔っ払いに目を留めた。より年長らしい、灰色の髪の方が、なぜか深いため息をつきながら真っ直ぐに歩み寄ってきた。

「ち……いや、ファロダ殿！　起きてください。至急、対応願いたいことがあるんです」

彼はどこかぎこちなくこの酔漢の名を呼んだ。目を丸くしてその様子を見守るロナジア。

「ファロダ殿！　聞いているんですか。起きていただけないなら今後は一切外出禁止にしますよ、ファロダ殿」

ようやくファロダの目が開いた。彼は大欠伸をしながらのそりと起き上がった。

「って……おい、なんでお前らがここにいるんだ？　出入りは禁じられてるはずだろうが」

胡散臭そうにそうつぶやく。冷たい声が返ってきた。

「それはあなたも同様でしょう。そんなことはどうでもいいんです。それより、すぐに対応いただきたいことがあります。ともかくここを出て、私の話を聞いてください」

ファロダは面倒そうに頭を掻いていたが、青年の剣幕に抗うことはあきらめたのか、おとなしく従った。二人はファロダを引きずるようにして店を出て行った。

ロナジアはぽかんとして三人を見送った。

――どうなってるの、これ？

「お前らな、あそこへ来るのだけは勘弁してくれ。俺の唯一の憩いの場なんだからよ」

用意された二頭立て馬車に押し込まれたファロダ、つまりオルグ・ヴィネックは、世にも情けない顔つきで彼の息子たちに訴えた。

いつもならここで、生真面目な長男の説教が延々と始まるところ

だが、今回は少々勝手が違うようだ。
「父上。父上の権限において、カルマ駅から上りの特別便を出してください。いますぐにです」
ジードは単刀直入にそう言った。ヴィネックの目が鋭く光る。
「……どういうことだ」
「大学府に遣いに来ていたミハルが攫われたんです。犯人はウェス・ゴート家のカシアン。キニッサの別邸に行ったところ、すでにミハルを連れて本邸に移ったあとでした。このロドアからバルネディアに行くには、オサイオン向けの急行列車に乗るしかない。船では時間がかかり過ぎてしまいますからね。おそらくはウェス・ゴート家の名の下に、臨時便を強引に準備させたのでしょう。私とアドリオであとを追います。ですから、いますぐに」
彼は手短に事情を説明した。ヴィネックは真顔になり、あごを撫でた。
「ウェス・ゴート家だと？　ゾデューの倅（せがれ）がミハルを？　ふむ……」
「父上、考え込んでる場合じゃない。早くしなけりゃ手遅れになってしまう」
アドリオは悲痛な声を上げた。キニッサ邸でメイドから聞き出した話が頭にこびりついていたためだ。
――出立するまでの間、ずっと裸でしたわ。お若いんですもの、そんな状況であれば……。
彼は口元を押さえて黙り込んだ。神など信じたこともないが、未明の身になにごともないことを心から祈らずにはいられない気分だった。
「わかった、臨時便はすぐにでも出そう。お前らはそれに乗ってウェス・ゴートの本邸へ向かえ。場所はわかるな」
二人は紅潮した顔で肯いた。

# 第四十話　出立

あたしはベッドを降り、気は引けたけれど裸のまま、部屋の中をあちこちうろついた。あの男の人に触れられた部分をすべて洗い流したい。考えるのはただそのことだけだ。

多分、ここは客室なんだろう。それなら専用の浴室が設えられていてもおかしくはない。入り口の大きな両開きの扉は、予想したとおり施錠がされていた。でも、隅の方にある別のドアはなんの抵抗もなく開いた。

白い、貝殻みたいな模様の浮き出たきれいなバスタブが――確か白螺石（サウジルム）とか呼ばれる、高価な石だ。ウェス・ゴート家でも見た覚えがある――置かれている。わずかに青みがかった水が張られていた。あの人が使ったお湯かもしれない。その残り湯なんて絶対ごめんだ。

周りを見回すと、台車（ワゴン）の上に差し湯用の大きなピッチャーが載っている。下の段にはタオル。あたしはピッチャーを取った。仄温かく、まだ中身もあった。バスタブにつかる気にはとてもなれないので、ここで働いている人たちには申し訳ないけれど、その外で湯を浴びた。顔を洗い、唇をこすり、そして、股間に手を這わせた。

「……っ」

唇を噛んだ。あの感覚がまだこびりついている。あたしは集中的にそこを洗った。金色のソープディッシュから石鹸をつかみ取り、泡立ててその部分を厭というほどこする。あまりに夢中になっていたため、すぐ後ろのドアが開いて誰かが入ってくる気配にすら気づかなかった。

「ミハル……」

不意打ちだった。全身が硬直した。逃げる間もなく背後から抱きすくめられる。熱く湿った吐息が首筋にかかった。

「ああ……ああ、ミハル……」
あたしは声にならない悲鳴を上げた。あの人だ。彼はさっきと同じように――あたしと同じようになにも着ていなかった。そしてあたしを抱きしめたまま囁いた。
「ミハル……出かけるぞ。父上に目通りしていただく。私の正妻としてな」
あり得ないせりふにあたしはぎょっとした。じょ、じょ……冗談きつすぎるっつうの！
「行かない、帰る、離して」
わめいてもまるで無視だ。その上彼は、さらに信じられない行動に出た。――比喩でもなんでもなく、息が止まった。
彼の右手がお腹の辺りに這い回ってきたと思うと、ジード様と同じくらい細く長いその指が、あたしの股間に忍び込んできたのである。
泡まみれのその部分を、彼はなんの躊躇もなく弄（まさぐ）っている。あたしは一瞬、思考停止に陥り、抵抗することも、脚を閉じることも忘れていた。ぱくぱくと口を動かしているうち、どうにか声らしきものが出てきた。
「や、や、や、やめっ……は、離し、離して……っ」
涙雑じりのかすれ声。彼は首筋や肩、背中に執拗に唇を押しつけ、その合間にあたしの名前と「愛してる」を繰り返すばかりで、一向に聞き入れてくれる様子はない。しかも腰からお尻にかけて、ぐいぐいと下半身を押し当ててくるのがわかった。このままじゃやばい。このままじゃ……。
その時だった。
「若君。……若君、お客人のご出立のご用意を整えに参りました」
ノックの音とともに、やや年配っぽい、落ち着いた声の女の人がそう言うのが聞こえてきた。彼の動きが止まる。チャンスとばかり、

あたしは思いきり身をよじった。彼は舌打ちをしたけれど、どうやらあきらめたらしい。

「仕方ない。ミハル、続きは本邸に着いてからだ」

不穏な棄てぜりふとともに彼は浴室を出て行った。やがて、入れ替わるように、メイドの女の人が三人、新しい台車（ワゴン）を押しながら現れた。ところどころ泡にまみれ、自失状態で床に座り込んでいるあたしを、彼女たちは呆気に取られたように見下ろした。

カルマ駅に馬車をつけるなり駅舎に駆け込み、目を白黒させているノーゼスに臨時便の手配を指示したあと、オルグ・ヴィネックはすぐに屋敷に戻った。執事のレンドルス、それに女官長のパドマが彼を出迎えた。

「お帰りなさいませ、旦那様」

レンドルスは常と変わらず慇懃に頭を下げたが、その表情はいつにも増してぴりぴりしているようだった。ヴィネックは無言で肯くとその足で伝令室へ向かった。

「――ああ、シグルか？　ヴィネックだ。ノルド神官長はおいでか」

かけた先はキニッサの離れ島にあるイシオス神殿だ。七人の神官を統べるイシュレー・チェンマ・リン・ノルドはヴィネックの亡き妻の父で、レノラの祖父にあたる。高徳で知られ、また審議院のメンバーの一人でもある。

『これはオルグ・ヴィネック卿。ええ、おみえです。しばしお待ちを』

対応したのは、その神官長の侍者（じしゃ）、シグルだ。孤児だったところを神官長に拾われたという経緯を持つ、齢（よわい）二十の聡明な若者である。やがて、電話口に、ヴィネックの舅でもある神官長が現れた。

『そなたがこちらへ電話を寄越すとはめずらしい。なにか、変事でもありましたのかの』

ヴィネックは咳払いをした。どうも昔から苦手な相手なのだ。
「わざわざ申し訳ない、神官長殿。実は、少々伺いたいことがありまして」
『ほう。もしや、近頃そなたの屋敷に引き取ったという女官のことかの』
ヴィネックは瞠目した。なぜそれを、神官長が――？
『いや、なに……大学府のワンジオから連絡があっての。四方山話にかこつけて、どうもそんなことを言っておったのだよ。その娘にはなにかがある、気にかけておいた方が良いかもしれぬと』
ワンジオ翁自身は審議院のメンバーには入っていないが、このイシオス神殿をはじめ、要人とのつながりは深い。ヴィネックは得心した。
「その娘にかかわるかもしれないことです。――副神官のラルモ・オルヌ殿はいま、そちらに？」
沈黙があった。ヴィネックは重ねて訊いた。
「神官長殿？」
『あれは……昨日、急用ができたと言って出かけたきりだがの。ヴィネック、あれがなにか……』
今度はヴィネックが黙り込む番だ。確証などなにもない。未明の行方と、神官長の補佐を務める副神官との関係。そこになにかが絡んでいると報せるのは、ヴィネックの直感でしかない。
だが、副神官は昔から、ウェス・ゴート家と親交があった。公然と知られる事実である。
そして――これがいちばん重要なポイントなのだが――ラルモ・オルヌは、神職に身を置く人間にしては、野心の匂いのする男だった。それもひどく強烈な。
ヴィネックは人心掌握に長けており、心理の内奥部分を読むのを得意としている。たいていの人間の考えていることは読み切れる。
ところが、この副神官だけは例外だ。その表情や挙動からはなにも引き出すことができない。だが、漠然とした不穏な、肌を刺すよ

うな空気だけは伝わる。
彼がなにかをずっと狙っているのは明らかだ。問題は、そのターゲットである。

それが、今回の未明の誘拐ともしかかわりがあるとすれば。
ウェス・ゴート家とラルモ・オルヌが手を組み、いよいよ、なにかしら暗躍を始めているのではないのか。

『どこからか突然現れた不思議な娘だそうだの。まるで……十九年前の、あの出来事のように』
神官長は懐かしそうにつぶやいた。ヴィネックはわずかに動揺した。
『そなたを責めているわけではない。あれはすべて、我が神、イグノディアスの思し召しによるもの……そなたのもとに引き寄せられたのも運命なのでしょうな。おそらくは、此度（こたび）のその娘も同じようにの』
「……」
アドリオの母であり、ヴィネックが生涯初めて本気で愛したあの不思議な女。ともに過ごしたのは二年かそこらのほんの短い間だ。生来無口な性格らしく、片言を操れるようになってからも、ほとんどその出自について語ってくれることはなかった。
未明がもし、イグノディアス神によって召喚されたのだとすれば、彼女を庇護する役目はヴィネックではなく、その息子であるオルグ・ジードに与えられているのだろう。彼はふと微笑していた——ウェス・ハーシュ家の長い歴史の中で、なぜ自分たちの代だけが、こんな風変わりな宿命を背負わされるのだろうと。
ヴィネックは短く礼を述べ、通話を終えた。

メイドの女の人たちは、あたしにお湯を浴びせ、ブラシでこすり、やたら念入りに磨き上げたあげく、全身に大量のタルカムパウダーみたいなものを叩いた。そして下着を着せ、さらにやたらとデコラティブな刺繍飾りの施されたワンピースドレスをすっぽりとかぶせてきた。なにしろ三人がかりの上に息がばっちりで、その見事な流れ作業の前には、抵抗しようって気にすらならない。

仕上げにまんべんなく髪を梳くと、彼女たちは満足げににっこりと微笑んだ。……わけもなく悪寒が走る。

「お美しいですわ、奥様。これなら旦那様も必ず気に入られますわ、ええ、保証します」

女官長らしき年配の女の人がそう言った。あたしは目が点になった。

おくさま？

って……誰のこと？　まさか……まさかね。

あたしはなぜか笑っていた。ほかの二人の女の人たちも、それぞれ力強く肯き合っている。

「さすがに若君はお目が高くていらっしゃいますわ、ねぇ」

「ええ、本当に。きっと今夜辺り、大変ですわ、奥様」

そう言って含み笑いを漏らしている。あたしの方は、一瞬で笑いが凍りついた。あたしは後退ろうとし——がっちりと両腕を押さえ込まれた。女官長さんが、手のひらをぱんぱんと打ち鳴らす。

「さ、奥様。お急ぎくださいませ。これからロマドのカルマ駅まで移動していただくんですから。到着はきっと明け方になってしまいますわね」

あたしはごくりと唾を飲み込んだ。

とにかく、隙を窺って逃げなきゃ。

なにがなんだかわけがわからないけど、このまま連れて行かれたら、最悪の事態になりそうだ。

それだけはわかった。
「馬車の用意ができております」
ノックとともに男の人が入ってきた。――あたしの全身が総毛だった。
この人……この灰色の瞳、大学府の車停めで会ったあの人だ。
ウェス・ハーシュ家の別邸の管理者だって言ってあたしを騙そうとした……。
「奥様。どうぞこちらへ」
彼はなに喰わぬ顔でそう言った。あたしはさすがにかっとして怒鳴った。
「ふざけないで！　人のこと騙して、攫っておいて、奥様なんて。あたし、行かない、帰ります」
「本邸で旦那様がお待ちです。長い道程（どうてい）です。出立はできる限り早くしていただきたい」
人の言うことまるで聞いてない。あたしはそれでも続けた。
「だから、行きません！　帰してください、帰ります、帰る、帰るってば！」
強固に言い張るあたしを彼はじっと見、かすかにため息らしきものをついた。そして、なぜか扉の外に声をかけた。
「……仕方がありませんね。よろしいですか、若君」
えっ？　なにが？
一瞬後（のち）、彼は素早くあたしに近寄り、またしてもあのヘンな匂いのする布を口元に押し当ててきた。
「ちょっ……」
吸っちゃだめ、意識を失ったふりをして逃げるんだ、必死でそう考えていたはずなのに、あたしの身体からはみるみる力が抜けていった。
帰らなきゃ……心配してる、きっと。
でも……誰が？　帰るって、どこに……？

三秒後、あたしは完全に眠りに落ちた。

# 第四十一話　花嫁と義父の図

オサイオン市のほぼ中央、ゴドラム街区の実に三割を占める広大無辺な荘園の、さらに中心部に建つ古城めいた邸宅が、ウェス・ゴート本邸である。連邦国家が成立する以前からの歴史を持つ文字どおりの旧家で、代々の当主は、現在でも周辺市民の間では畏怖と尊敬、それに若干の揶揄を込めて「公主(こうしゅ)様」と呼ばれている。

この日、邸内はひどくざわめいていた。なにしろロマドに留学中の次期当主、カシアンが、その花嫁を連れて里帰りしに来るというのだからそれも当然だ。

「しかし、修道期間はあと一年残っていたはずじゃないのか。こんな半端な時期に、なんだってまた」

「花嫁となりゃ、当然、つきものの儀式があるんだしなぁ」

「お館様がよくお赦しになったもんだな。あの、なんとかって学校を退学になってもかまわないんだろうかね」

下男たちは意味深な笑みを交わし、また端下女(はしため)たちも頬を染めながら遠慮がちに肯いた。

カシアン一行が本邸に到着したのは昼近くのことだ。長旅を終えた花嫁は、しかし、なぜか眠りこけているようで、未来の夫となるカシアンの腕に抱かれて馬車を降りた。その一部始終をたまたま見ることのできた厩番(うまや)の男は、あとになって使用人仲間にこう語っていたものだ。

――驚いたね。あの氷細工みたいに冷たい若君が、あんなやさしげな顔をなさるなんてさ。この屋敷に仕えて三十年になるが、いまだにあんなのは見たことがないよ。いや、そりゃあ遠目だったけど、見間違いなんかじゃないさ。

しみじみ思ったねぇ、若君、本当に心底、あの若い奥方を好いてらっしゃるんだなって。

カシアンは彼女を軽々と抱えたまま、真っ直ぐに当主の間へと向かった。二人の侍従が控える分厚い扉の前で一呼吸置き、両足の踵をそろえ、父に呼びかけた。

「父上。カシアンにございます。ただいま戻りました」

入れ、という声が聞こえ、侍従たちがそれぞれ扉を片方ずつ開ける。入室すると同時に扉が閉められる。

父、ゾデュー・エリアック・ウェス・ゴート卿は、肘掛け椅子に委ねていた身体をゆっくりと起こし、どこか飢(かつ)えるような表情で息子を迎えた。

そしてより正確に言うならば、その緑灰色の目は息子ではなく、彼が連れてきた娘に向けられていた。

「……意識がないようだが……眠っているのか」

カシアンは肯いた。

「睡木草(すいぼくそう)の花粉を使いました。無駄に抵抗させないために」

その美しい眉がわずかに歪んだ。本来ならこんな手段は取りたくはない。だが残念ながら、未明はまだ、自分に対して心を開いてくれてはいない。薬を盛りでもしなければ、移動のための丸一日もの長い間続く緊張に、彼女自身が参ってしまうだろう。

ゾデューは息子の腕に抱かれた、見ようによってはまだ子どものような娘の顔をまじまじと眺めた。

――十五、六か……ほんの少女ではないか。処女(きむすめ)には違いないのだろうが……なるほど、確かに見慣れぬ顔立ちだ。絶世の美女というほどでもないが、不思議と惹きつけられる。

これが、我が神、イグノディアスがお望みになった娘なのか。

彼はちらりと横に視線を送った。その先には、漆黒の神官服をま

とった、ラルモ・オルヌの姿があった。
オルヌもまた同じように娘を見た。やがて彼は肯いた。
「……確かに」
カシアンは訝しげに副神官を見やった。なぜこの場に彼がいるのだろう。
「父上。ご覧のとおり、ミハルはまだ眠っております。正式な目通りは、彼女が目覚めてから、あらためて……」
「その必要はありませんな」
答えたのは副神官だ。カシアンは眉を顰め、嫌悪を顕わにした。
「あなたには訊いていない。父上、どうか、いまいちど……」
「口を慎め、カシアン」
鋭い怒声が飛んだ。父が自分を睨みつけている。わけがわからないながらも、カシアンは黙り込んだ。
「オルヌ殿。では、この娘……」
その語尾はかすかに震えているようだ。副神官は無言で目を瞑った。
ゾデューはカシアンに向き直ると、興奮を抑えきれない様子で告げた。
「いいだろう。その娘をお前の妻として認めよう。ついてはすぐにでも婚儀を執り行う。準備が整い次第すぐにだ」
思いもかけない言葉にカシアンは頬を紅潮させた。――この数日のうちに、晴れて彼女を妻にできるのだ。彼は唇を舐め、喘ぐように問いかけていた。
「では……大学府の、イグノディアスの禁忌の件ですが、それも……」
息子がなにを言いたいのか、ゾデューは素早く察知し、苦笑を浮かべた。
「好きにするがいい。……ただし、婚儀が終わってからだ。それまではその娘と通じることは罷(まか)りならん、いいな」
カシアンは勇んで首を縦に振った。どうせたった二、三日のこと

だ。婚儀さえ済んでしまえば、心置きなく未明と愛し合えるのだ。大学府を退学になることなど、もはや喜びでしかなかった。

それに、その期間は彼にとってむしろ望ましいと言ってもいい。その間に未明の警戒を解き、あの憎きオルグ・ジードを忘れさせ、そして自分のことを――自分を愛してくれるよう、できる限りやさしく迫るつもりだ。自分とて彼女を、愛する女性をむやみに傷つけたくはない。

彼は恭しく礼をすると退出した。その直後、父と副神官が交わしていた会話の内容など知る由もなく。

ラルモ・オルヌは、閉じた扉を眺めながら低くつぶやいた。

「ご子息、よほどあの娘に惚れこんでいるようですな。……少し、気の毒な気もする」

「感傷などは余計ですぞ。息子にはいくらでも、あの娘に似た別の女を与えてやりましょう。我がウェス・ゴート家の繁栄のためには、それがもっとも最適な方法なのですから」

真実を知れば、カシアンがどういう行動に出るか。

我が実子ながら、激情に囚われるとなにをしでかすかわからないところがあれにはある。まぁ、気づく術（すべ）などはないのだがな。

オルヌの声が、ゾデューを思考の海からすくい上げた。

「時に、ウェス・ゴート卿。例の……供儀（くぎ）についてですが、あれらはもう……」

「ええ、現在、手配を進めているところです。動物はともかく、生身の人間となると、これが中々厄介でして」

だが条件がそろうのは時間の問題だ。彼は至極満足げな笑みを浮かべた。

## 第四十二話　それぞれの想い

大陸間鉄道がつなぐロドアからの臨時便は、翌日の朝、一刻半（午前七時）を過ぎる頃に、ようやくオサイオン中央駅舎へと滑り込んだ。胡散臭そうな眼差しを向ける老いた駅舎長に通行手形を示すや、ジードとアドリオは通りに出、辻馬車を拾った。途中、ウェス・ハーシュ別邸に立ち寄り、単騎に乗り換えるつもりだ。

晴れやかなはずの朝だというのに異様に暗い空だ。雨か、嵐でも来るのかもしれない。

この長旅の間というもの、二人はほとんど無言のままだった。目すら合わそうとせず、どこか張り詰めたような緊張感が漂っている。しかし、互いの考えていることは手に取るようにわかった。

未明は無事なのか。

カシアンは彼女を陵辱してはいないのか。

未明が大学府の車停めでウェス・ゴート家の手にかかって拉致されてから、丸二晩が経とうとしていた。

ジードは背を曲げ、膝の上で固く手を握り合わせた。大学府からの追放を免れたカシアンが、暴走を思いとどまってくれていることを願うしかない。

こうしていても思い出すのは、学生寮の彼の部屋で、未明を左腕に抱いて眠ったあの夜のことだった。

彼女はいじらしいほど頬を染め、極力目を逸らそうとし、それなのに時折、頭をジードの胸にこすりつけるような仕草をしては彼を悩ませた。朝が来てキスを求めても、もはや抗うことはなかった。

――自分ほどではないかもしれないが、しかし彼女も確かに自分を憎からず思ってくれている。

込み上げる幸福感。と同時に、契らないまま彼女を帰さなければならないという焦慮。これからの一年、果たして彼女が自分のことだけを想っていてくれるのか、その息詰まるような不安。いつでも未明を独占できる異母弟、アドリオに対するかすかな嫉妬。

「……上。兄上、聞いてるのか」

ジードははっと我に返った。道が悪いのか、大きく馬車が揺れた。顔を上げると、わずかに苛立った表情のアドリオが目に入った。

「すまん――少し、ぼうっとしていた」

「しっかりしてくれ。これから敵の本拠地に乗り込もうっていうのに」

「ああ……」

ジードは肯いた。アドリオはそんな異母兄にため息を漏らしながらも続けた。

「あと半刻（約一時間）ほどでウェス・ハーシュの別邸に着く。そこから単騎でウェス・ゴート本邸まで、どれくらい時間がかかる？」

「……おそらく一刻半（約三時間）というところだろうな」

彼は思案顔でそうつぶやいた。

「真っ昼間とはいえ、今日はひどく天気が悪い。いまだって夕刻のようだからな。我々にはかえって好都合だ」

到着が昼頃になると計算し、夜闇（よやみ）に紛れることができそうにないとわかった時には気を揉んだが、どうやら運が向いてきたらしい。

馬車は郊外に差しかかってきた。どこまでも続く畑や放牧地。車窓には牧歌的で長閑（のどか）な風景が広がる。こんなところはロマドとそう変わらない。

こうやっていつか、未明と二人で旅をしたい。ロマドを出たことのない彼女に、もっともっといろんな世界を見せてやりたい――気

づくとそう思っている自分がいる。焦がれるような気持ちが胸を侵す。

奇しくも兄弟はまったく同時にやるせなく首を振っていた。

店仕舞いを終え、盛り場から少し離れたアパートに戻ってきたロナジアは、凍えるような空気の中で思わず立ち止まり、あっと声を上げた。

「よお、ローニャ」

自室の前にはあまりに見慣れた人物が立っていた。彼女は慌てて駆け寄った。

「ファロダ！　なにしてんのよあんた、こんな……凍え死んじゃうわよ。冷え切ってるじゃない」

その言葉どおり、彼の、よれてはいるものの意外なほど仕立ての良い外套はすっかり冷たくなっていた。ロナジアは呆れたように言った。

「なんだってこんなとこに突っ立ってんのさ。どうして店に来ないわけ？　あんたったら、もう……」

真鍮の鍵を取り出し、忙しなく開錠する。が、ファロダは動こうとしなかった。

「店じゃあな……気分が出ないだろ」

「え？」

ロナジアは眉を寄せた。あらためてまじまじと、彼女の惚れている男の顔を見つめる。

「――ちょっと……なんなのよ。なんかヘンよあんた」

訊きたいことは自分の側にもいろいろとあった。「銀鼠」に現れたあの二人の青年は誰なのか。一方（ひとかた）ならぬ間柄のように見えたが――そう言えば、ロナジアはこのファロダという男のことを、ほとんどなにも知らない。

ロナジアが「春の街」にやって来る前からの界隈の馴染みであるらしいが、なんの仕事をしているのか、住まいはどこなのか、そして家族はいるのか。敢えて訊ねなかったこともあり、親しく言葉を交わすようになってからも、二人の間には微妙な距離感がつねに保たれていた。また、そんな関係を、ファロダ自身が望んでいるようにも思えた。

「ねぇファロダ。ファロダったら……気分でも悪いの？」

「いや。なんでだ」

「だって……」

彼女は口ごもった。彼の雰囲気は明らかにいつもと違う。

戦争にでも行くみたいな顔しちゃってさ、とロナジアはつぶやいた。ファロダは微笑し、なにも言わずに彼女を引き寄せ、頬に軽く唇を当てた。

「お前さんといる時がな……俺はいちばん楽なんだ」

ロナジアの心臓が高鳴った。まるで十代の娘みたいに。

あたし……この人が好きだわ。本当に本気で好きみたい。

「ローニャ。俺はこれからちょいと留守にする。行くとこがあってな。だからその前に、お前さんの顔を見に来たってわけだ。悪かったな、突然」

ロナジアは戸惑った。

「行くとこって……どこへ行くのよ。いつ戻るの？　またいつもの行商なの？」

ファロダは答えず、そのまま踵を返した。ロナジアの伸ばした指先は、月が照らし出した彼のシルエットに触れた。

彼女は途方に暮れる想いでその後ろ姿を見送っていたが、ふと、室内に目を向けて頼りなげに独りごちた。

「しまった、忘れてたわ。あの、ウェス・ハーシュ家のメイドの子が店に置いてったバッグ、どうしようか訊こうと思ってたのに……」

# 第四十三話　ヴォルムハルトの少女

ウェス・ゴート邸を取り巻く荘園の中にところどころ存在する鬱蒼とした森は、通称「狼森（ヴォルムハルト）」と呼ばれている。

その名のとおり、狼をはじめとする獣たちの住処であり、時には当主一族やその客人の無聊（ぶりょう）を慰める恰好の狩り場にもなる。荘園で働く者たちは、決して夜は外に出歩いたりはしない。いつ危険な目に遭ってもおかしくないからだ。

そんな森の中を、ジードとアドリオは馬で疾走していた。ここから近づき、邸内に巧く潜り込んで未明を奪還する。もとより正攻法で頼んだところで、素直に返してくれるはずもないのだから。

夜と変わらぬ帳（とばり）の下りた不穏な空間。金や銀に光る眼（まなこ）、どこからか聞こえる猛々しい唸り声。飛び立つ鳥の羽音。

アドリオの眉がぴくりと動いた。彼は低い声で、隣をゆくジードに告げた。

「……瘴気を感じる。この先になにかいそうだ」

ジードは目だけで返事をした。幼い頃からそうだが、感覚器の鋭敏さだけならばアドリオの方が若干上だった。

間を置かず、どこかで銃声がした。

じきに、咽（むせ）るような生暖かい風が流れ込んできた。――血の匂いだ。

慎重に歩を進めるうち、その正体がなんなのか、明らかになった。

森の中を、少女は必死で走っていた。

こんなことになるとは思っていなかった。だってあたしはこの森

をよく知ってる。それにいくら真っ暗でも、昼は昼だもの。お父さんは行っちゃだめだって止めたけど、だからあたしは聞かなかった。

彼女は追われていた。木の根に足を取られ、草で切り傷を作りながらも、止まろうとはせずひたすら走った。

すぐ背後に生暖かい吐息を感じた。と思った刹那、大きな石につまづき、彼女は転んだ。

「あ……っ」

起き上がろうともがいたが、すでに遅かった。振り向いた少女の身体の上にその獣は迫ってきた。

銀色の毛皮。闇に輝く赤い単眼。身の丈九トーティ（約三メートル）はあろうかというほどの巨躯。鋭い鉤爪。いま時分はとっくに冬眠しているはずの獰猛な雑食獣、ウィーマだ。冬を越えるための眠りに就けず、凶暴化するものがたまにいる。「穴持たず」と呼ばれ、食人などの深刻な害をもたらす恐るべき野獣である。

このオスのウィーマも典型的な穴持たずだった。唸り声をあげ、涎を垂らしながら少女に襲いかかった。少女は目を瞑った。

耳を劈（つんざ）くような轟音が森に鳴り渡った。

恐る恐る目を開けると、彼女の足元に、命を失くし、すでに物体となったウィーマが倒れていた。続いて、狩人らしき恰好の男たちが二人、猟銃を抱えて現れた。――少女は安堵に胸を撫で下ろした。助かったんだ。

「危ねぇとこだったな。お前、この荘園の使用人の娘かなんかか」

どちらも二十代くらいの若者だ。少女は肯いた。

「名前は」

「ヨナ。狩場の番小屋の娘よ」

若者たちは顔を見合わせた。

「独りでこんなとこうろつくなんて、了見がなっちゃいねぇな。年はいくつなんだよ」

「……十四。だって、おじいちゃんが身体悪くしちゃって、どうしても必要だったんだもの、黒蓮草(こくれんそう)が」

冬季の一時期、それも沼地にしか咲かないと言われている黒蓮草の花は、滋養強壮の薬効で知られ、高値で取引される貴重な薬でもある。少女――ヨナの答えに彼らは納得したようだ。

「十四か。じいさん孝行なんだな。それでこんな目に遭うなんて、神様の目ん玉ってのはよっぽどの節穴だよな」

少女はきょとんとし、笑ってみせた。

「あら、そんなことないじゃない、こうしてあなたたちが助けてくれたんだもの」

二人は不意に真顔になった。

「そういう意味じゃねぇよ」

「え？」

訊き返すよりも先に、彼女はいつの間にか背後に回り込んでいた片方の男に羽交い絞めにされていた。わけがわからず、ヨナは必死で身をよじった。

「な、なにすんのよ、離してよ」

もう一人には、あごを乱暴につかまれる。

「十四って言ったな。お前、処女(きむすめ)か」

ヨナの全身に戦慄が走った。

「そ……そんなこと、あんたに……」

「答えろよ。ただし、正直にな」

「訊くまでもねぇだろう、こんな痩せっぽちだぜ。色香の欠片もねぇや」

背後の男が嘲るように言った。ヨナはかっとしたが、言い返す余裕はさすがにない。

「少しばかり確かめてみるってのはどうだ。処女じゃなきゃまずいんだろう」

「……なるほどなぁ。入り口に先っぽを突っ込むだけなら、破ったことにはならねぇな」

男たちは下卑た笑みを浮かべ、口の端を舐めた。ヨナの足が震え出す。

「善は急げだ。お館様にもできる限り急ぐよう言われてるしな、でないと婚儀が執り行えねぇって」

「しかし、なんだってまた処女が必要なんだ？　結婚式を挙げるってのに供物ってわけでもねぇだろうに」

「知るかよ。俺らには関係ねぇ、それより、この娘を――」

言いかけた男のかぶっていた帽子が、銃声とともに飛んだ。

枯葉を踏む、馬の蹄の音。顔を向けた先にいたのは、騎士のような身なりをした、二人の青年だった。

「本来飛び道具は好まないんだが、この際止むを得まい。……もう一発喰らいたくなかったら、その娘を離してから私の質問に答えるんだ」

灰色の髪をした男が、その美しい顔立ちには似合わない、冷え冷えとした声でそう告げた。その手元には、鈍色に輝く最先端の型の拳銃が握られている。

娘を捕らえていた狩人たちはあからさまにうろたえ出した。帽子を飛ばされた方の男が、精一杯の虚勢を張って怒鳴った。

「てっ……てめぇ、なんだいきなり！　う、馬から降りやがれ！」

間髪入れず、二発目の弾が放たれる。男の右頬に焼けつくような感触が走る。彼はたまらず、娘から手を離して仰け反った。

「悪いが、こちらも切羽詰まってるんだ。もういちどだけ言う。その娘から離れて質問に答えろ」

「……」

青年――オルグ・ジードの全身を、鬼火のような闘気がゆらゆらと取り巻いている。そのさまに二人は腰を抜かし、そのまま後退り始めた。ジードはふたたび口を開いた。

「さっき、婚儀がどうとか言っていたな。それはなんのことだ」

「そ、それは……」

三発目の弾は、頭髪をすれすれでかすめ飛んだ。男は泡を吹かん

ばかりのいきおいでしゃべり始めた。
「け、結婚式だよ！　知らねぇのか、近々、ウェス・ゴート家のカシアン様がご結婚なさるんだ。異国から輿入れしてきたっていう娘とな。それで、その式のために若い娘が……処女が必要だってことで、お館様に言われてこうやって捜しに来たんだよ。それ以上のこた俺らは知らねぇ、勘弁してくれ」
男は必死の面持ちでそう吐き出したが、青年の形相が修羅のごとく変貌するのを見て、さらに縮み上がった。
「……結婚式だと……？　カシアンと……ミハルのか」
地獄の底から響くような声だ。いつかと同じく、アドリオまでがたじろいだ様子でそんな異母兄を見守っている。――こいつは悪魔の貴公子だ、地を這いながら彼らは胸の中で叫んだ。
「相手の娘の名前までは知らねぇ。ともかくカシアン様が強くお望みになったとかで……ロマドのなんとかっていう名門の学校も辞めるらしいんだ、でないと花嫁をもらう意味がないからな」
男の一言はまさに致命的だった。それはなによりもジードが恐れていたことだ。
大学府を自主退学する。禁忌から自由になって、花嫁を抱くために。

未明を抱くために。

「兄上……落ち着いてくれ。さすがにこの場で殺人はまずいぞ」
危険を察知し、アドリオが囁いた。その言葉が聞こえているのかいないのか、ジードは言った。
「服を脱げ」
「へっ？」
男たちは地べたに座り込み、抱き合いながらジードを見上げている。言われた意味がわからないようだ。
「いま着ているその服を十秒で脱いで消え失せろ。いいか、十秒だ」

「な、な、なんで……」
「十、九、八」
ジードの無情なカウントが始まった。意味不明ながら、逆らえばどうなるかは想像するだに恐ろしく、彼らはあたふたと身につけている衣類を剥ぎ取り始めた。ベージュの下着姿になったところでカウントが止まった。
「それ以上は要らん。とっとと消えろ」
彼は、自らの羽織っているマントを外すと男たちに向かって投げ捨てた。さすがにこの季節、下着一枚では昼間とはいえ凍死しかねない。意図を汲み取り、アドリオも兄に倣った。彼らはそれぞれマントを拾い上げると一目散に逃げていった。
ジードは硬い表情のまま馬を降り、残された衣服を拾い上げた。すぐに着替えようとして、脇から注がれる視線に気づいた。
「あ、あの……」
それは先ほど、あの狩人たちに襲われかけていた少女だった。彼女は顔を赤らめながら礼を言った。
「ありがとうございました。あたし、ヨナっていいます。あの、あなたたちは……」
「オルグ・ジード。こっちは弟のアドリオだ。お前の家はこの近くなのか」
彼の声はまだどこか冷たさを帯びて聞こえた。ヨナはそれでも怯まなかった。
「はい、あたし、この荘園の狩場を管理する番小屋の娘なんです」
ジードはため息をついた。
「こう夜のように暗いんじゃ、送っていかないわけにも行くまいな。仕方ない、着替える間、少し待っていろ」
「兄上、じゃあ、あいつらになりすましてウェス・ゴート邸に侵入する気か」
「ああ。ちょうど二人いて助かったな」
「だけど、俺たちがそのまま戻ったところで、中に入れてもらえる

のか？　あいつら、カシアンの父親になにかを命じられて来てたんだろ」

アドリオには不安が残った。連中は貢物を探しに森をうろついていたはずだ。獲物もなしに邸内に戻れるだろうか。といって、まさか本当に処女を連れていくわけにも――第一、そんな心当たりなど……。

「あたしを連れてってください」

アドリオは弾かれたように顔を上げた。頬を紅潮させたヨナが二人を見つめている。

「ヨナ、連れてってくれって……ウェス・ゴート邸にか？」

彼女は力強く肯いた。

「あのお屋敷に入り込みたいんでしょう？　きっとなにか理由があって。あたしの恩人ですもの、協力します。ううん、させてください」

熱っぽい眼差しだった。ジードとアドリオは顔を見合わせた。

「……確かに、お前が一緒に来てくれれば、侵入も容易になるだろうが……危険もあるかもしれないぞ。私たちにはどうしてもしなければならないことがある。お前を護り切れるかは正直わからない。それでもいいのか」

「はい。……恩人にはできるだけ早く恩を返せって、おじいちゃんがいつも言ってるんです。いつか、そのうち、なんてつもりでいると、九割は音信不通になって、残り一割は死んじゃうからって」

ユーモラスなせりふにアドリオは噴き出した。彼は兄の肩を叩いた。

「兄上、この際だ。この子の力を借りよう。ヨナ、お前は俺の馬に乗るといい。ああ、その前に着替えないとな」

ヨナは破顔した。よく見ると、十四にしては少々大人びた、赤毛のおさげがよく似合う、可愛らしい娘だった。

## 第四十三話　ヴォルムハルトの少女（後書き）

ウィーマのモデルはヒグマです。「肉食獣」にしたいところですが、普通、冬眠するのって雑食系だよなぁと思い……でも「凶暴な雑食獣」って語感いまいちですね（苦笑）。

# 第四十四話　カシアンという男

いったいいまって夜なのか昼なのか。この部屋、来た時から分厚いカーテンが四方を覆っていて、時間の概念が奪われる。あたしがここに連れて来られてから何日が経ったんだろう。食事の回数から数えると、多分、丸一日から二日、それくらいだとは思うんだけど。

部屋にはすごく豪華な浴室が併設されていて、気が向けば入浴することができる。でも水道が引かれているわけじゃないから、侍女らしき女の人がお湯を用意してくれないと基本的には使えない。あたしを捕らえているあの男の人がいる時じゃないと彼女たちは入室してこないので、迂闊にものを訊ねることもできない。

唐突に扉が開き、あの男の人が入ってきた。そのあとから食事の載った給仕車（ワゴン）とともに若いメイドの女の人が現れた。

「もういい。下がれ」

ベッドの脇に台車が置かれ、彼は手ずからあたしの口に食事を運んだ。あたしが厭がる素振りを見せてもまったくおかまいなしに。軟禁状態ではそもそも食欲なんて湧くはずもなく、あたしはスープを飲むのがやっとだった。

「気分が悪いのか？　本邸に来てからろくにものを食べていないだろう。それ以上痩せるな、せっかくの美しい身体が台無しだ」

あたしは黙っていた。そりゃあ気分がいいわけないでしょうが、そう言い返したかったけど、でもやめておいた。

彼はお酒らしき瓶を取るとゴブレットに中身を注ぎ、なぜか自分の口に含んだ。そして素早くあたしのあごをつかみ、口移しに生温い液体を注ぎ込む。……思わぬ行為にあたしは咽（む）せ、唇から漏れたお酒が咽喉を伝って高価そうな寝巻きを汚していく。それを見るなり、彼は台車を押しやり、唇、あご、咽喉元、鎖骨と舌を這わせ、

こぼれたお酒を丹念に舐め取る。恥ずかしさと嫌悪、くすぐったさであたしは身をよじった。

「や、やだっ」

でも逃げることはできなかった。彼はベッドの上に乗り、あたしを組み敷くと、薄い寝巻き越しに、胸を……乳首をくわえた。意思とは裏腹に身体が跳ねる。

「あ、あっ」

口を押さえた。こんな声、自分でも聞きたくない。なのに彼の愛撫はずいぶん長いこと続いた。

「やめて、やめてください……っ」

腕を突っ張らせ、必死で抗う。彼はやめてくれない。でも、それ以上の行為をしようとはしなかった。

あたしの上に身体を重ね、ぴったりと密着する。……硬いものが押し当てられている感触。鳥肌が立った。

耳朶（みみたぶ）を舐めるようにしながら囁くのが聞こえる。

「愛の言葉が欲しいのならいくらでも言ってやる。……どうすればオルグ・ジードを、やつを忘れて私を見てくれる？　お前はなにを望むんだ、ミハル。いったい、どうすれば……どうしたら私を愛してくれるんだ」

あたしは首を横に振った。なにも欲しいものなんてない。ていうより、あなたにはなにも望まない。

彼は顔を歪め、唇を押しつけてきた。やめて、苦しい、離れてよ。

「お前を愛してる。愛してるんだ、ミハル。頼むから応えてくれ、私のことを見てくれ」

情熱的な言葉がすべて耳を素通りしていく。

「……ごめんなさい」

それだけが口をついて出た。彼ははっとしてあたしを見た。

「なぜ謝る？　私を愛せないからか？　それとも……オルグ・ジードを忘れられないからなのか」

顔が強張るのがわかった。そうだ。

正直、こういうことになるまで、自覚はあんまりなかったかもしれない。

でも多分、そうなんだ。

あたしは、あの人のことが好きなんだ。

あたしを呼ぶやさしい声。髪を撫でるやさしい手。

羽が触れるような、なのに激しい、どこか遠くへ連れていかれそうなキス。

……それがたとえ全部嘘だったとしても。

低い、冷たい声がした。

「ウェス・ハーシュ邸にはもうお前の居場所などはないぞ。お前は、政敵であるこのウェス・ゴート家の人間に抱かれたのだからな。それでもまだ私を拒むのか。意味もない操をやつに立てる気か」

知らぬ間に肯いていたみたいだ。

たとえこの人に身体を奪われたのだとしても、心は赦したくない。

もう二度とジード様には会えなくても。

その想いは顔に出たのかもしれない。彼の口調が強くなった。

「帰すものか。絶対に帰さない、やつのもとには。ミハル、お前はずっと一生、ここにいるんだ。この私のそばに、妻として……そして私の子を生むんだ、お前はもう私のものだ、永遠に」

うわごとのように彼は囁き続けた。あたしは頭を振った。

「やめて、触らないで、離れて」

無駄だとわかっていても言わずにはいられない。でも、それが彼を刺激してしまったらしい。

「愛してる……愛してる、ミハル……」

めちゃくちゃなキスが降ってきた。顔のあらゆるところを舌と唇

で撫でられる。息すらまともにできず、苦しくてたまらない。そう思っていると、ふと彼の身体が離れた。馬乗りになった状態でじっとあたしを見つめている。

「……ミハル、この邸ではいま、婚儀の準備を進めているところだ。お前はじきに、私の正式な妻になるのだ。現当主である父上も承諾済みだ。ほかに許婚のいるオルグ・ジードとは違う」

――婚儀？　って誰の？

まさか、あなたとあたしの？　……いろんな意味でそれ、あり得ないでしょ！

「やつの父親には正妻以外にも女が……愛妾がいたらしいな。お前もその立場に甘んじるつもりか？　……そんなことはこの私が赦さん。この場で誓うが、私は生涯お前だけだ。お前以外の女になど、触れる気にもならん。だからミハル、やつのことは忘れてくれ。お前のことはこの私が必ず幸せにする。……だから、頼む。私を愛してくれ」

そう言って、真っ直ぐにあたしの目を見る。

ずきん、と胸が痛んだ。

それは心が揺れたからじゃなく、なんとなくわかったからだった。

多分、この人、ずっと独りだったんだ。

心を赦せる友達とか、恋人とか、家族すらもしかしたらいなかったのかもしれない。

これだけ激しい愛の言葉がどうして琴線に響かないのか、その理由がわかる気がした。

正直言うと、あたしにも似たところはある。上京して半年、最初は誰一人頼れる相手もいなくて、ずっと孤独と闘ってた。ひたすら勉強とバイトに打ち込む日々が続いて、時には厭世的になることすらあった。

早く一人前になって、独り立ちしなきゃ。その想いが強く、傍か

ら見るとけっこう突っ張ってたと思う。

恋愛にも積極的になれなかった。そんなことより学費を稼ぐ方が先、恋人なんて卒業してから探せばいい。そのくらいに思ってた。

ジード様に惹かれたのは、そういうあたしのことをすべて包み込んでくれるような気がしたからかもしれない。

それは錯覚だったのかもしれないけど、だとしても大差のないことだ。

この人も、誰でもいいから信頼できる対象が欲しかったんだろう。

それは身近な人間より、異分子みたいなまるで未知の相手の方がきっと都合がよかったんだ。

無意識のうちにそういう存在を求めてた。そこへタイミングよくあたしが現れた。

きっと、それが真実だ。

この世界でなくて、たとえば日本の、あたしが通っている大学の同級生として会っていたなら、もしかして友人くらいにはなれたんだろうか。

ここでは、いまさらもう無理かもしれないけど。

でもあたしは言っていた。

「名前……教えてください」

彼の緑灰色の瞳が大きく見開かれた。あたしはなぜか微苦笑した。

# 第四十五話　ラルモ・オルヌの野望

闇と光。誕生と死。善と悪。終わりと始まり。

世界樹（ラ・ミュゴン）の化身にして全能の神、イグノディアスには、あらゆる相対し合う性質が秘められている。彼女は宇宙そのものなのだ。

さらには、祭祀の方法によって異なる属性を強く帯びる。一般には知られていないことだ。イシオス神殿近くの古い遺跡からオルヌが偶然発見した禁断の聖書、『黒の経典（ザモド）』には、この絶対にして不安定な女神をいわば「色づける」方法について、神代語で記されていた。

――あらゆる条件をそろえ、イグノディアスを「色づけ」た者に永久（とわ）の祝福あれ。すべての災禍はその者によって裁定され、世界中に降り注ぐであろう。

そうなった時、世界を救えるのは「色づけ」た者のみである。なぜならば、イグノディアスはすでに、彼（か）の者の言葉しか耳に入れることはないのだから。（中略）

まずは依坐（よりまし）を捜さなければならない。この広い世界のいずこかに、イグノディアスを宿すさだめを持った者が現れるはずである。それは必ず異界より出現する。気配ははじめは頼りないが、しかし時を経てよりはっきりと感じられるようになるだろう。

だが、留意せよ。それを護るため、姫巫女と通ずる存在が近くに現れ、邪魔をするかもしれぬ。その者はおのれの力によって依坐を覆い隠してしまう。しかし、幸運にして通ずる前であれば、見つけ出すのは比較的容易となろう。（中略）

依坐は、完全な虚無となる必要がある。すなわち、魂の粛清だ。

そうさせるための儀式を執り行わなければならない。この手順は、特に正確に踏まれるべきである。（後略）

ラルモ・オルヌは、薄暗い客室の長椅子にもたれ、深く息を吐き出しながら『黒の経典』を閉じた。

婚儀の名目のもとに行われる粛清の儀。それは具体的には、依坐自身の精神を破壊する行為を意味する。

どのみちそうしなければ、たかが生身の人間のキャパシティがイグノディアスという大いなる存在に耐えられるはずがないのだ。依坐の廃人化は、イグノディアスを「色づけ」るためには、決して避けて通れない過程なのである。

だから、あの可憐な娘はじきに毀（こわ）れる。

毀れて、新しい生を受けるのだ。

その時こそ、新たなる歴史の始まりだ。

中央政府でも審議院でもなく、この私が。そう、ウェス・ゴート卿でもなく、ただこの私だけが。世界の命運を握る唯一絶対の存在となるのだ。

くっ、くっ……という堪え切れない笑みがそのひび割れた唇から漏れ、やがて甲高い哄笑となって部屋中に響き渡った。

# 第四十六話　侵入

女主人の間は、いつからか空っぽになっていた。

私がそのことに気づいたのはいつだったろう。もの心つく前、そう、おそらく三つか四つ。それくらいの時だ。

父と母は別々の部屋で暮らしていた。当たり前のことだ。なにを意外そうな顔をしている？　……ああ、やつの母親も他界しているんだったな。

高位の一族というのはそういうものなんだ。一人一人がそれぞれ独立した居住を持つ。むろん、同じ家の中でだ。

……淋しい？　そんな感情は知らん。ともかく、母はいつの間にか姿を消していた。父は特に変わった様子もなかった。愛していたのかいないのか……私が真実を知ったのは十年ほど前のことだ。

母は不義を働いていた。私を生んでしばらくしてから、姿を消すまでずっと。

嗅ぎつけたのはオルヌ副神官らしい。イシオス神殿はわかるか？　キニッサの離れ島にある神殿だ。そこの副神官をしている男で、我が家とは昔から懇意なんだ。ともかく彼の進言によって、母の不貞は明らかになった。

相手などは知らん。知りたいとも思わん、どうせ邸内の使用人の誰かだろう。それとも荘園で働く者か。そいつを処断したのかどうかは不明だが、母は父自らが断罪した。

礼拝室で斬首されたんだ。父自身によって。

怯えた顔をしているな。恐ろしいのか？　心配するな、私はお前を殺したりはしない。……いや、できない。お前が私を殺すことはあっても、その逆は不可能だ。

――お前を愛しているからに決まってるだろう。

お前がいなくなってしまったら、私は生きていけない。だからお前には私を殺すことができるんだ。

そんな目をしないでくれ……ああ、同情でも憐れみでもかまわない、お前が私を見てさえくれるなら！　過去のことなどどうでもいい、お前さえここにいてくれれば。

名前を呼んでくれ。……もう一度だ。もう一度。……もっと、もっと私の名前を呼んでくれ。

気が狂いそうだ。もっと、お前のその声を聞かせてくれ。

愛してる。愛してる……

カシアン、というのが彼の名前だった。ソフォモンドの大将戦の時、武芸場で聞いていたはずのその名を、あたしはあらためて思い出した。呼び捨てにしていいものかどうかちょっと迷ったけれど、尊称をつけるのもおかしな話だ。あたしはこの人に拉致されてきたんだから。

カシアン。そう呼びかけると、彼は泣き出しそうな顔になった。胸が痛んだ。なにか苦しみを抱えていて、それを吐き出す方法を知らないでいる人の表情。小学校時代、同級生から苛められていた妹の榛名が、そのことを悟られないように必死で自分を押し隠していた時のことをふと思い出した。

同情と憐れみ。確かに大差はない。少なくともあたしが抱いている感情は、純粋な恋慕の情ではまったくない。

……でも、なんとなくほっとけない気がする。きっとこの人がここまで内面をさらけ出した相手はあたしがはじめてなんだろう。行きがけの駄賃というか乗りかかった船というか、そのどれも当てはまらない気もするけど、とにかくなんだかほっておけない。

どうかしている。薬を盛って、意識のない間に女に――あたしに暴行するようなろくでもない人だっていうのに。

ただ、ひとつだけ、わかったことがある。

「カシアン、大学府に友達はいるの」

彼は首を横に振った。友人として付き合うに値する人間などあそこにはいない。そう冷たく言い捨てた。でも、それって本心だろうか。そりゃ、集団の中では浮き上がるほどきれいだし、なんでも器用にこなしそうだけど……。

そのうち、彼は自分の母親について語り出した。

子どもの頃からのトラウマには違いなさそうな話だった。

ベッドの上に横になり、あたしを左腕に抱きかかえていた彼は、やにわに起き上がると今度は身体を重ねてきた。そして悲痛な声で囁き続けた――名前を呼んで欲しいと。

なにかが足りていないんだ。でもそれを埋められるのはあたしじゃない。

黒雲がざわざわと蠢き、ついに雨が降り出した。ウェス・ゴート邸の二人の門衛はため息をついて空を仰いだ。職務とはいえ、こんな機嫌の悪い空の下で立ち続けるのはやはりつらい。

「婚儀が始まりゃあ、振舞い酒にもありつけるさ。それまでの辛抱だ」

仲間の言葉に、もう一方の男は肯いてみせた。なにしろこの名門一族の跡取り息子の結婚式だ。さぞ盛大に執り行われるのだろう。

そうなれば浴びるほど酒を飲んでやる。
そうつぶやき、自分を励ましていると、前方から、二頭の馬とともに二人の男が近づいてくるのが見えた。緊張が走ったのもつかの間、彼らはすぐに手にした長銃を下ろした。
やって来たのはウェス・ゴート家の狩人二人組だ。家章の縫い込まれた上着がそれを証明している。ただ、身なりは確かにそうだが、見慣れぬ顔だった。片方はぼさぼさの赤茶色の髪に汚れた布で眼帯をしている。そしてもう片方は、漆黒の髪に褐色の混じった黒い瞳。門衛たちは訝しげに声をかけた。
「いま戻りか、ご苦労なことだな。ところで、お前ら、新入りか？あんまり見た覚えがないんだが」
赤茶の髪が肯く。
「ああ、臨時に雇われたんだ」
「その目はどうしたんだ？　怪我か？」
男は苦々しそうに背後を示した。
「やられたんだよ。小娘と思って油断した」
気を失っているらしい十四、五歳の愛らしい娘が、馬上で黒髪に囚われている。得心がいったようで、門衛は肩をすくめた。
「必死に抵抗したんだろう。まあいい、通れ。お館様もお待ちかねだ」
狩人たちは目配せをし、肯き合った。そして悠々と門を抜けた。
――まずは第一関門突破だ。
「ほらね、ばれなかったでしょ、あれを使ったおかげよ」
正体を失くし、黒髪に抱かれていたはずの娘はやおら身を起こすと、茶目っ気たっぷりにそうつぶやいた。
「おい、起き上がるなよ。お前は気絶してるところなんだから」
黒髪の青年、つまりアドリオは慌てたように言ったが、彼女はどこ吹く風だ。
「平気よ。もうあんなに離れてるし、見えやしないわ」
「慎重の上にも慎重を期さなきゃならないんだ。俺たちがどんな思

いで……」
「それより、その髪意外と似合ってるじゃない。灰色より明るめでいいんじゃない」
少女は赤茶の髪に向かってにっこりと微笑んだ。笑いかけられた男――ジードはちらりと娘を見、冷ややかなため息をついた。
「しおらしげな娘に見えたんだが……勘違いだったか」
「失礼ねぇ、勘違いなんて。あたしは淑女よ。だから髪の色を変える草木のことだって詳しいんじゃない」
少女、ヨナは口をとがらせた。ジードは彼女を無視して手綱を引いている。
その言葉どおり、ジードの髪を赤く染めるためのレグドラ草を短時間で集めてきてくれたのはヨナだ。本邸に侵入するにあたり、門衛はともかくも、執事はおそらく彼の顔を見知っている。当主も同様だ。少しでも見た目を変えておいた方がいい、そう考えていたところ、ヨナがこの案を授けてくれたのだ。
もっとも、カシアンと鉢合せしてしまえばそれまでなのだが。ただ彼にしても、最後まで欺き通せるとは思っていない。とにかく屋敷に入り込まなければ始まらないのだ。
やがて四本の支柱に囲まれた玄関に着いた。ジードは馬を降りた。アドリオは娘を抱きかかえて彼に続く。
待ちかねているという言葉は嘘ではないらしい。すぐに老齢の執事が姿を見せたからだ。
「おお、ようやく戻ったか、待ちわびたぞ。……ん？　お前たち、出て行った者らとは違うようだが……」
ジードはなに喰わぬ顔で答えた。
「あいつらだけじゃ心配だったんで、こっそりついていったんです。案の定、やつらウィーマにやられてしまいましてね。……だが、我々はこのとおり、首尾よく仕留めましたよ」
彼は背後をあごで示した。執事の顔が輝いた。
「うむ……よくやった。ところでこの娘、処女なのだろうな」

「ええ、むろん。男を知っているように見えますか」
聞きようによっては無礼なせりふに、ヨナはぴくりと眉をしかめた。それが伝わったのか、彼女を抱く腕にやや力がこもる。――なぜか、ヨナはどきりとした。
「よし、入れ。これで婚儀の準備は整ったな」
ジードは、大して興味もなさそうな風を装い、訊ねた。
「しかし、なぜ未通の娘が必要なんです？　異教徒の結婚でもあるまいし、彼女を供物にでもするおつもりですか」
「……お前が知る必要などはない。さあ、とっとと娘を運べ」
執事の目が鋭く光った。ジードは肩をすくめてみせた。

# 第四十七話　破綻

地下にある礼拝室では、着々と婚儀の準備が進められていた。純潔を表す貴重な白いユニスが壁一面に飾られ、中央に鎮座する青銅のイグノディアス神像には、祝詞（のりと）をしたためた布がショールのようにかけられる。

オルヌは『黒の経典（ザモド）』を片手に、彼の欲する神をまじまじと見上げた。……もうじきに、その力は自分のものになるのだ。その時は、すぐそこまで迫っている。

「副神官殿」

執事、シディエ・バロウ・ノラルクの声がした。振り向くと、二人の若い狩人を従えたノラルクが慇懃に頭を下げている。

「例の娘ですが、ここに用意してございます」

年少らしい黒い髪の男の腕の中に、まだほんの十五にも満たないような少女が収まっている。オルヌは目を見開いた。

「素晴らしい」

イグノディアス神像の前に置かれている棺の蓋を彼は自ら開け、彼らを手招いた。

「この中にその娘を入れるのだ」

大量の睡木草と、その花を敷き詰められた特別な褥（しとね）だ。乾燥しているせいか匂いが一段と強い。意識を失わせたままにしておくつもりらしい。

アドリオは兄を見やった。彼は無表情だ。いまは言われたとおりにしておけ。そんな意図を読み取り、ヨナを棺の中にそっと横たえる。それを見届けるなり、執事の手によって蓋が閉められた。

「お館様に伝えなければ。式は今夜執り行う。準備は万端、そろった」

オルヌは満足げにつぶやいた。その隙を窺うようにして、ジード

は室内を抜け目なく一瞥した。

――花は飾られているが、それ以外に婚礼の儀を彷彿とさせるような装飾が取り立ててなされているわけでもない。むしろ……簡素なほどだ。これはやはり、ただの婚儀ではないのだな。

礼拝室の隅にはその予想を後押しするものが置かれていた。鉄製の檻だ。中には数種類の動物たちが囲われている。すでに死んでいるのか、それとも薬でも打たれているのか、ぴくりとも動かない。

ジードの脳裏をある記憶がかすめた。聖書に記されている一節だ。

「なにをしている、聞こえなかったのか。さっさと下がれと言っているんだ」

ノラルクが自分たちを睨みつけている。ジードは抗わず、アドリオを促すようにして退出した。

廊下に出るなりジードの顔つきが変わった。彼は緊迫した声で言った。

「式が始まるまでにミハルを捜し出さないと……思ったとおり、あのヨナって娘は供儀として求められたんだ。おそらくウェス・ゴート卿は、婚儀の名のもとに禁じられた儀式を行おうとしている」

「なんだって？　どういうことだ、兄上」

「あの檻を見なかったか？　あの中にいたのはすべて、イグノディアスを汚す六罪（りくざい）を象徴する動物ばかりだ。姦通、殺人、強奪、嘘、見得、不孝。そんなものを婚儀を控えた礼拝室にわざわざ集めるなんてどう考えてもおかしい」

「しかし、禁じられた儀式っていうのは……」

「イグノディアスを信仰しない異教徒が、それを示すための儀式を行うことがある。ウェス・ゴート卿は、少なくともまともな信者じゃあない」

地上へ続く石段を昇り切り、そのまま廊下を進む。未明が囚われているはずの客室はいったいどこなのか。

「まともな信者じゃないって……じゃあ、ミハルは……」
「――しっ」
突き当りを曲がったところでジードの足が止まった。
見ると、数歩離れた先に、三人の女官たちが固まっている。その手元には、湯殿の支度を載せた大型の台車（ワゴン）。ジードは思わず唾を飲み込んだ。
「若君。奥様のご用意を整えに参りました」
そうはっきり言う声が聞こえた。

……奥様、だと……？　それはまさか、ミハルのことか？

あの鬼火にも似た焔（ほむら）が、ジードの身体からゆらゆらと放たれる。
アドリオは慌てて彼の肩を押さえた。
女たちはそのまま入室した。ほぼ間を置かず、入れ替わるようにして部屋から若い男が出てくるのが見えた。
カシアンだ。
ジードの拳が震え出した。あの男を、未明を攫ったあの憎き卑劣漢を、できるならいまこの場で殺してやりたい。――だが、未明を救い出すのがまずは最優先だ。彼は必死の努力で自分を抑えた。
カシアンの姿が見えなくなったところで、二人は肯き合い、おもむろに部屋の扉をそっと押した。

彼、カシアンはいつの間にか眠ってしまったみたいだった。あたしを抱き寄せたまま、子どもみたいな顔をして寝息を立てている。そう、まるで、お気に入りのぬいぐるみを寝てる時まで離さない幼児みたいに。
これ以上身体に触れることはしないで。せめてちゃんと結婚するまでは――そんな気もないくせにそういうことを言うのは気が引け

たけど、このせりふは効果絶大だったらしい。彼は微笑み、緑灰色の目を潤ませてあたしの頬を撫で、愛してるとなんども囁くうちに眠り込んでしまったのだった。

いまなら逃げ出せるかもしれない。あたしが独りでいる時、この部屋は外から施錠されているけど、いまは彼が中にいる。きっと開錠されているはずだ。あたしはカシアンの腕をそおっと解き、広大なベッドの上を這って床へ降りた。ほっと息をつく。

なのに、だ。どういうタイミングなのか、まるで計ったみたいに、扉をノックする音と、メイドの女の人の口上が聞こえてきたのである。あたしはがっくりと肩を落とした。間髪入れず、お湯やタオルを用意した台車とともに、女の人たちが三人、室内に入ってきた。

「奥様。お式は今夜になりました。さ、お支度をいたしましょうね」

「……なに……今夜？　そうか……いよいよ、お前が私のものになるんだな」

他人の気配に異様なほど敏(さと)いカシアンまでが起きてしまったみたいだ。もっとも、このメイドさんたちがあたしを逃がしてくれるとは思ってないけど……。

あたしはメイドさんたちに引きずられるようにして浴室へ連れて行かれた。でも、このままじゃまずい。いくら無理やりとはいえ、いや、だからこそ、愛してもいない相手と結婚式を挙げるなんて絶対あり得ない。とはいえ、いったいどうやって逃げればいいんだろう。

そう思案を巡らせていた時、まるで思いもしなかったことが起こった。

踏み込んだ部屋は、明らかに最賓客をもてなすためのＶＩＰルームだった。広い室内にはサラン織（※西大陸の放浪民の間で伝わる伝統的な織布。美しい模様と防寒性の高さで知られる）の上等な絨

毯が敷き詰められ、天井には水晶でできたシャンデリア。中央に置かれた巨大な寝台は空だった。

ジードとアドリオは無言で視線を交わした。先ほどの侍女たちは湯殿の用意をしていた。ということは――。

迷いなく進む。どこからか、物音と人の話す声がする。

浴室らしき扉を開け放つと、そこには、彼女がいた。

金色の寝巻きを着た未明が、侍女たちに取り囲まれて立っている。こげ茶色の長い髪も、服の上からでもわかる細い肢体も、そして銀河を宿したあの黒い瞳も、なにひとつ変わってはいなかった。

ジードはその邂逅の一瞬を、永遠のように感じていた。だが、三人の侍女が悲鳴をあげるより先に、上着のポケットから取り出したハンカチを彼女らの口元に素早く押し当てた。睡木草の花粉を溶いた水に浸しておいたものだ。仇であるウェス・ゴート家の人間とはいえ、女性に手荒な真似はなるべくなら避けたい。三人は声もなく次々に崩折れていった。

そしてようやく、未明に手を伸ばした。引き寄せ、抱きしめ、唇を重ね、大丈夫だったか？　と訊ねる――つもりでいた。

未明は後退（あとずさ）った。

ジードの手から逃れようとでもするかのように。

なにか大きな硬いもので頭を殴られた、そんな衝撃を覚えた。足元がぐらついた。

「ミ……ミハル？　どうしたんだ、私だ、ジードだ。こっちへおいで、さあ」

喘ぐように言い、彼女に近寄ろうとした。だが、未明はさらに後ろへ逃げた。その大きな黒い瞳には涙が浮かんでいる。唇がかすかに動いた。

「……あ、あたし……もう……」

滑らかな頬を水滴が滑り落ちていく。ジードは呻いた。

「ミハル……いったいどうしたっていうんだ。お前を助けに来たんだぞ。まさか、私を忘れてしまったわけじゃないだろう？　一緒にヴィネックの屋敷に帰ろう。なにも心配しなくていい、お前は私が護る。さあ、こっちへ……」

ジードが差し出した手を、彼女は取ろうとしなかった。泣きながら首を左右に振っている。

その時だった。

未明の表情が凍りついた。訝しく思う間もなく、ジードの左胸は、背後からの一突きによって真っ直ぐ貫かれていた。

狂ったような女の絶叫が部屋中に響き渡った。

## 第四十八話　オルグ・ジードの死（前書き）

一部、流血シーンがあります。ご注意ください。

# 第四十八話　オルグ・ジードの死

浴室の扉がいきなり開いた。

はじめは、カシアンが戻ってきたのかと思った。でも、そうじゃなかった。

入ってきた二人の男の人を見て、あたしは言葉を失った。

見慣れない赤茶色の髪に眼帯をした、けれどそれは間違いなくジード様だった。なぜそんな恰好をしているのか――彼と同じ、狩猟服みたいなものをまとったアドリオ様までが続いて現れた。二人はメイドさんたちを眠らせてからあたしに近づいてきた。

あたしは反射的に後退っていた。

ジード様の瞳が戸惑っている。手を差し出し、一緒にヴィネックの屋敷に帰ろうと言ってくれた。その手を取りたい。……でも取るわけにはいかない。

だってあたしは――あたしはもう……カシアンに……。

あたしは必死で自分を抑えた。カシアンが言うとおり、すでに彼に抱かれてしまったあたしが、なに喰わぬ顔でジード様のもとに戻ることなんてできない。真実を伝えることはもっと無理だ。……あたしには、行き場がない。

そのあと、あの一連の悪夢が起きたのだ。

ジードの左胸から、赤く濡れた細長いものが飛び出してきた。
彼の背後にはカシアンがいた。血走った目をして、刺突（しとつ）の姿勢で剣を突き出している。まるで、そう――あの大将戦の時のように。
やがて剣が引き抜かれ、おびただしい量の血が噴き出した。それは浴室中に振り撒かれた。未明の顔にも、髪にも、寝巻きにも、その全身に血が飛び散った。彼の隣にいるアドリオも、床に転がっている三人の侍女も同じように真っ赤になった。
我に返ったらしいアドリオは、崩折（くずお）れたジードを支えながらカシアンを睨みつけ、なにかを叫んだ。
長い悲鳴をあげたあと、未明はその場にへたり込んだ。彼女の感情は完全に死んでいた。ただ映像を記録するテープみたいに、一部始終を見ることしかできずにいる。
カシアンは、今度はアドリオに切りかかってきた。彼は咄嗟に避け、腰に押し込んであった短剣を引き抜くと応戦を始めた。だが鬼気迫るカシアンの方がやや上手だった。寸でのところで黒髪が切り掃われ、血まみれの床にはらはらと舞い落ちる。浴室の壁にアドリオを追い詰め、ふたたび刺突に出ようとしたカシアンを、さらに現れた別の人物が背後から羽交い絞めにした。ウェス・ゴート卿とオルヌ副神官だ。
「カシアン！　お前、お前というやつはいったい……なんてことを……」
彼の実父、ゾデューは蒼白になりながら必死で彼を押さえつけた。しかし、狂気の域にいるカシアンを止めるのは至難のわざで、見かねたオルヌが彼の鳩尾（みぞおち）に一発、拳を叩き込んだ。抵抗が一瞬にして消え失せる。
「兄上、兄上！　しっかりしてくれ、兄上」
アドリオは悲痛な声で叫びながらジードを抱え起こした。オルヌは冷酷な眼差しをそんな彼に向けた。
「中央駅舎から連絡があった通りですな。臨時便を出せる人間などはそういない。乗ってきたのは二十歳前後の若い男子二人連れ……

あの小ざかしいウェス・ハーシュ家の小蝿どもか」

「し、しかし……この事態はまずい。いくら我がウェス・ゴート家とはいえ、こんな……しかもカシアンが刺したのはよりによって嫡男の方だ。次期当主のオルグ・ジードだ。こんなことをしてはいるが、間違いない。ああ、まずい、まずいぞ……なんてことを、なんてことをしてくれたんだ、カシアン」

ゾデューは震える声で繰り返した。だが、オルヌはまったく逆だった。彼の顔には、不思議なことに微笑すら浮かんでいる。

「ほ……なにをそう焦るのです。どうせ今夜、世界は我らの手に落ちる。ウェス・ハーシュ家がどう出ようがいまさら痛くも痒くもない。中央政府、審議院、イシオス神殿、すべてが取るに足らない存在に変わるのですぞ。この娘……イグノディアスの依坐（よりまし）となるこの娘さえいれば、我らに畏るるものなどはない。違いますか」

未明の悲鳴、それにカシアンの奇声を聞いて駆けつけてきた下男たちが、浴室になだれ込んできた。彼らは数にものを言わせてアドリオを捕らえ、ぴくりとも動かないジードから引き剥がした。

「地下牢にでもつないでおけ。処遇はあとで考える」

オルヌは当主に代わってそう告げた。アドリオは縄で縛り上げられ、動きを封じられたまま廊下へと引きずり出された。

「さて……ふむ。この出血の量ではまず、生きてはいまいな」

オルヌは爪先でジードの脇腹を軽く蹴った。反応はない。蝋のような顔色は、すでに命が抜け、物体に変わり始めていることを示しているようだ。

「ご子息、中々の腕前ではありませぬか。背後からとはいえ、見事に心の臓を一突きとは。いや、恐れ入った」

ふふふ、と口元に手を当てて笑みを漏らす副神官の姿は、さすがのゾデューをして心胆寒（しんたん）からしめるものがあった。

「こうなれば一刻も早く悲願の成就を。ウェス・ゴート卿、いますぐに娘を連れて礼拝室に向かいましょう。ああ、この小蝿の屍骸も、供物のひとつにするというのはどうです？　おもしろい趣向とは思

われませぬか。さあ、婚儀の……いや、粛清の儀の始まりですぞ」

# 第四十九話　儀式の始まり

暗闇の中、ヨナは息苦しさに目を覚ました。そうだ、なんだか知らないけど、棺みたいなものに寝かせられてるんだった。それにこの匂い、やっぱり睡木草ね。でもお生憎様、あたしはあらゆる草木（そうぼく）を相手に日がな一日暮らしてるのよ。ちょっとやそっとじゃもう効きゃしないんだから。

腕を突っ張らせる。鍵がかかっているようで、蓋は開かない。強気のヨナの背筋に、ふと寒気が忍び寄る。

落ち着いて。こういう時は、落ち着かなきゃだめ。おじいちゃんも言ってるじゃない、果報は寝て待て……じゃない、なんかそれちょっと違うわ。とにかく落ち着かなきゃ。

ここがどうやら礼拝堂のような場所らしいということはわかっていた。アドリオの腕の中で、ずっと薄目を開けていたからだ。……そう、あの人たち、いったいどこに行っちゃったのかしら。やらなきゃいけないことがあるって言ってたけど、それがなんなのかははっきり教えてくれなかった。

ならず者じみた狩人たちに襲われかけていたのを助けてくれた二人の若者。毛並みの良い馬といい、最初に着ていた高価そうな仕立ての服といい、どこぞの騎士か貴公子なのかしら――でも、連中に化けてまでウェス・ゴート邸に忍び込むだなんて、いったいどういう事情を抱えてるんだろう。

灰色の髪の青年はヨナには一切関心を示さない。それどころか失礼と言ってもいい態度をしばしば取る。ヨナの頬がふと赤くなった。黒髪の青年に抱かれたまま馬から降りた時、彼が一瞬、その腕にぎゅっと力を込めたことを思い出したためだ。他意などあったはずもないが、そもそも男性にそこまで接近したこと自体これまでに一度もない。

名前は、アドリオって言ってた。ちょっと見、無愛想っぽいけど、でも笑うとすごく可愛い。あたしより年上に決まってるのに、なのに可愛い。

心臓が高鳴り出した。顔が熱くなる。こんな状況だというのに。

と、不意に、戸板が軋むような音が聞こえた。扉が開き、誰かが入ってきたらしい。緊張が走り、狭い棺の中で身をすくめる。

「ふふ、惚け切っているな。これなら魂の粛清を行うまでもない。抜け殻同然だ。ご子息は良い働きをしてくれたものですな」

聞き覚えのある禍々しい声。

「副神官殿、こやつの遺骸はどこへ置けばよろしいですか」

執事のノラルクだ。……遺骸？　遺骸って……死体よね？　いったい誰の？　ヨナの身体を戦慄が駆け抜ける。

「檻を開放し、中の動物どもを神像の前に並べろ。そいつも一緒にだ」

「御意」

彼は短く答えるなり、行動に移った。次いで、がしゃん、という金属音、弱弱しい鳴き声が漏れ聞こえてくる。

「さて……では、始めるとしましょうか」

いまや場の実権は完全にオルヌが握っていた。首領（ドン）であるはずのウェス・ゴート現当主は、息子の狂態に強い衝撃を受けたためか、それともいまさらながら尻込みでもしているのか、先ほどからなにも言わずに黙りこくったままだ。そういう意味では、補佐役を務めてきたノラルクの方がよほど胆が据わっていると言えた。

オルヌは『黒の経典（ザモド）』を開くと、ゆっくりと息を吸い込み、神代（じんだい）語で禁断の祝詞を読み上げ始めた。

ウェス・ゴート邸の地下牢は礼拝室と同じ階の真北にある。一族の歴史が始まったはるかな昔から、絶えることなく存在し続けてきた呪われた空間。石造りの簡素な小部屋ではあるが、ここで絶命した人間は百名を下らない。

「入れ。お達しがあるまでは大人しくしていろ」

アドリオは突き飛ばされ、三人がかりで鎖につながれた。散々抵抗を試みたものの、さすがに多勢に無勢、しかもさっきなどはこの三倍ほどの人数を相手にしていたのだ。何発殴られたかわからず、瞼や唇は切れ、自らの血の味で舌が痺れる。ぐったりと力を失くしている彼を見やりながら下男たちは囁き合った。

「けどよ、いいのかね、こんなことして。こいつ、こんななりしてやがるけど、ウェス・ハーシュ家の人間なんだろ？　いくらお館様だって、ばれたらまずいんじゃねぇのか」

「不法侵入って名目があるだろ。だいたいなんでこのウェス・ゴート家の狩猟服を着てるんだ、こいつにも後ろ暗いとこはあるんだろうよ」

「とは言ってもなぁ……見たかよ、さっきの。浴室が血の海だっただろ、あれやったのはカシアン様なんだろ。おっ怖ない人だってのは知ってたけど、まさかほんとに殺っちまうとはなぁ。昔ならともかく、現代じゃさすがにまずいぜ。いったいお館様、どう揉み消すつもりなんだろうな」

まぁ、俺ら下々には関係ないがな……彼らは口々にそう言い合いながら牢を出て行った。独り残されたアドリオは、ただぼんやりと彼の足元を眺めた。小さな、本当に小さな羽蟻が、よろよろと石の床を這っているのが目に入った。そのさまは、自分のいまの状態を暗喩しているのかと思えるほど、彼は無力だった。

……俺はなにをしているんだろう。兄上をむざむざ殺され、ミハルを救い出すこともできず、こんなところに捕らわれて――いっそ、一緒に殺してくれた方がましだった。

ああ……あの、狼森（ヴォルムハルト）で出会った娘、あの子は巧く逃げ出してくれるといいんだが。ヨナと言ったっけ、元気で明るくて勇敢で、可愛い子だった。なのに俺たちと関わったばかりに……。

どれだけの時間が過ぎたのか。不意に、窓のないはずの地下牢に、どこからか一条の明かりが差した。

# 第五十話　降臨

生と死、創造と破壊、黒と白、始まりと終焉。そのすべてを我の名のもとにあまねくこの世に与えたまえ。

世界樹の精霊（みたま）にして全生命の母なるイグノディアスよ、大いなる贖（あがな）いの印をこの手より受け取りたまえ。

言い終わるやオルヌは手にした短剣を振りかざし、なんの躊躇もなく、目の前に用意した六匹の獣たちを殺していく。蛇、蜘蛛、山羊、梟、白獅子、火蜥蜴（サルドマント）。聖書に描かれた人類の原罪、「天道の六罪（りくざい）」に擬（なぞら）えて調達した六種類の生きものである。薬で弱らされていたとはいえ死んでいるわけではない。彼らは消え入るような断末魔の叫びを発しながら、その命を終えていった。

死者の正装となんら変わらぬ白装束を着せられ、礼拝室中央の椅子に座らされた未明は、なんの感情もなくその光景を見つめていた。彼女の目の前には、哀れにも生を奪われた動物に交じって、オルグ・ジードの遺骸が転がっている。

ジード様が死んだ。あたしのせいで。

そのせりふは、ひと時も途絶えることなく、未明の脳裏をぐるぐると駆け巡っていた。

自分さえ、カシアンに捕らわれなければ。あの時、もっと早くカシアンの襲撃に気づいていれば。いや、彼（ジード）が差し出してくれた手を、躊躇（ためら）いなく取っていさえすれば。

彼は死ななくて済んだだろう。

どれだけ後悔しても足りることはないが、せめて一言伝えること

ができたなら。
ごめんなさいと。……いや、違う。
あなたが好きでした、と。

このあと彼を追って命を絶てば、もしかしてもう一度会えるのだろうか。

礼拝室に点々と燈された蝋燭の灯りが、だんだんぼやけていった。
薄暗い空間が闇に包まれる。
それと同時に、青銅でできた、命のない物質であるはずの女神像が、うっすらと輝き始めた。
黄金と桃色を混ぜ合わせたような神々しい光が放たれる。すぐそばでオルヌが唱え続けているはずの祝詞すら聞こえない。
未明の身体がふんわりと宙に浮いた。
……誰かが問いかけている。男とも女ともつかぬ、空に揺蕩うような不思議な響きだ。

――お前が次代の依坐か。ふん……まぁ、及第というところだな。

未明は口を開かず、心の中で訊ねていた。あなたは誰？　ああ、もしかして……神様？

――中々察しはいいな。そうだ。これからお前に宿る予定のな。

あたしに？　それ困る。あたし、行かなきゃいけないところがあるから。未明は困惑気味に答えた。

――彼岸にでも旅立つ気か。勝手なことはさせんぞ。お前には、さだめを受け入れてもらう。

そんなこと言われたって……ジード様を追いかけないと。未明の言葉に「声」は言った。どこか楽しげな響きすら感じられる口調で。

――お前がさだめを受け入れるというならあれを現世（うつしよ）に返してやろう。ただし条件がつくが。

えっ……本当？　ほんとに？　ほんとに、ジード様を生き返らせてくれるの？

未明は靄（もや）の漂う空間に向かって叫んでいた。「声」は続ける。

――条件つきだと言っただろう。望みを叶えるためには、失わなければならないものもある。時には、耐えなければならないこともな。それでもいいと言うなら。

未明は即答した。

いい。あたしがあげられるものならなんだってあげる。それに、どんなことでもするから。

だからジード様を生き返らせて。お願いします。

――いいだろう。我が生命の雫をあの男に垂らしてやろう。

そう「声」は答えた。

# 第五十一話　バイバイ

オルヌは次第に焦り出していた。『黒の経典（ザモド）』に書かれている文字が霞み出し、草髄紙（フェノメット）（※植物繊維から作られる紙の一種）の上からじわじわと消え始めているのだ。

こんな……こんなことはどこにも書かれていなかった。いったい、どういうことなのだ。

彼ははっとした。そうだ。贄（にえ）はもう一体、残っている。あの村娘、あれの血を捧げさえすれば、きっとイグノディアスは降臨するはず。

オルヌは、狂ったようないきおいで棺に取りつくと鍵を外して蓋を開け、娘を引っ張り出した。もとより眠っていなかったヨナはいきなりのことに仰天し、抵抗してわめき散らす。

「なっ……なに、なにするのよ、やだ、離してよっ」

オルヌの手には、まだ血を吸ったままの短剣が握られている。ヨナは蒼白になった。逃げようと身をよじっても、男の力には敵わない。オルヌは短剣を振り上げ、ヨナの胸元に向かって真っ直ぐに振り下ろした。

しかし、貫通はしなかった。

いや、触れることさえなかったのだ。オルヌの剣は、なにかに阻まれるかのように、ヨナの身体に届かない。どれだけ力を入れようが同じことだ。彼は半狂乱になった。

「どういう……どういうことだ！　イグノディアス、あなたは私が『色づけ』たはずじゃないか！　なぜ私を拒むんだ、なぜ……」

見えない力によって短剣が叩き落とされる。予想外の事態に、脇に控えていたゾデューやノラルクも顔色を変えてこの様子を見守っている。じきにノラルクが叫んだ。

「その娘……依坐の娘、浮いているぞ！　確かにイグノディアスが宿っているんだ」

ゾデューは弾かれたように未明を見た。彼の言うとおり、白装束をまとった未明は、妖しい光に包まれながらゆらゆらと椅子から浮かび上がっていた。

そしてさらに、信じられないできごとが続いて起こった。

「……ひぃっ」

ゾデューはかすれた悲鳴を上げた。彼の視線の先にあったのは、死んだはずのオルグ・ジードが、あちこち血がこびりついたまま、ゆっくりと起き上がろうとしている姿だった。気だるげに首を振りながら周囲を見回すそのさまは、どう見ても生身の人間と変わらない。

「そんな……そんなばかな！　死んだはずだ、確かに心臓が止まっていたんだ……」

ゾデューは腰を抜かして後退った。ノラルクは声を裏返して怒鳴っている。

「ふ、副神官殿！　これはどういうことなんです、儀式は……儀式は失敗したんですか」

オルヌはそれどころではなかった。彼は「黒の経典」をやみくもに繰りながら、手当たり次第に祝詞をつぶやき続けた。すでに狂人と変わらぬ状態だった。

そんなただならぬ喧騒の中で、ジードはいまやはっきりと意識を取り戻していた。

……生きている。

そうつぶやき、手のひらを見つめる。血の通った、体温のある、まごうことなき自分の手だ。だが、あの時――どうやら背後から不意打ちを喰らい、左胸に違和感が走った直後、なにも感じなくなった。なぜかすぐに死んだのだということが理解できた。まだ死ぬわけにはいかない、せめて未明をここから助け出すまでは……そう思う間もなく、永遠らしい闇が訪れた。

後悔はあった。ついにただの一度も未明と愛を交わせなかったこと。だが魂は肉体を離れ、太古からの理（ことわり）のとおりにどこかへと召喚された――はずだった。

にもかかわらず、辿り着いたのは、なぜか俗世だ。彼にはわけがわからなかった。が、ともかくも生きていることを知った途端、頭に浮かんだのはやはり未明のことだった。ジードはふらつきながらも身体を起こし、顔を上げた。そして見た。

世界樹（ラ・ミュゴン）の映像に重なるようにして中空に浮き上がる、神々しい娘の姿を。

こげ茶の髪は薄い緑色に、白いやわらかな肌は半透明に変貌していたが、ジードが焦がれてやまないあの黒い瞳はそのままだった。

「……ミ……ミハル……？」

震える声で語りかけていた。娘は――未明は、彼を見下ろすとかすかに微笑んだ。ジードは弾かれたように立ち上がり、真っ直ぐに手を伸ばした。

しかし、その手が彼女に届くことはなかった。

「ミハル……ミハル！　こっちに来い、来てくれ、ミハル！」

真昼の陽光のような、真っ白な目映い光が彼女を包んだ。そして礼拝室全体が凶暴なまでの光に侵される。ジードは思わず手を翳（かざ）した。恐怖に近い確実な予感が彼を襲った。

未明が消えてしまう。自分のもとから――この世界から、いなくなってしまう。

「ミハル、ミハル！　だめだ、行かないでくれ、ミハル！　戻ってきてくれ……戻って……」

光が消えた。

天井を見上げたまま、ジードは呆然と立ち尽くした。未明はもう、

どこにもいなかった。

全身から力が抜けていく。彼はふらふらとその場に崩折れた。

なにかの鳴き声が聞こえる。オルヌによって殺されたはずの六匹の動物たちだ。彼らはそれぞれ、食餌を求めて騒がしい声を上げている。

どかどかいう足音がしたかと思うと、礼拝室の扉がぶち破られ、何人もの男たちが室内に踏み込んできた。その中には、ジードの実父にしてウェス・ハーシュ家現当主、オルグ・ヴィネック卿の姿も交じっている。さらに、地下牢から救出されたらしいアドリオもいた。傷だらけだったが、どうにか大丈夫そうだ。彼は生きて動いている異母兄の姿に心底驚いた様子で駆け寄ってきた。

「あ……あ、兄上！　生きてたのか、本当に兄上なんだな、なんてこった！」

彼は喜び勇んでジードを抱きしめた。が、なにも言わずにいるジードを見、その顔がふと曇る。

「――兄上、ミハルは？　儀式ってやつは行われたのか？　ミハルはどうなったんだ」

ジードは答えない。死人のような表情でうな垂れたままだ。喜びもつかの間、アドリオはジードの両肩をつかんで激しく揺すぶった。

「兄上！　ミハルはどうなったんだ、どこにいるんだ？　答えてくれ、兄上、兄上！」

そこでジードの意識は切れた。彼の身体は毀（こわ）れた操り人形のように急速に力を失っていった。

それは、未明という不思議な娘が汽車に乗ってヴィネックの街に現れてから、ちょうどふた月半が過ぎた冬の日のことだった。

## ◆閑話 - 夢の中で -

白いユニスの花は、母様と同じ匂いがする。

小さな手にいくつも傷をこしらえながら作った花束。可憐な花房とは裏腹に、ユニスは無数の鋭い棘を持つ。

カシアンは巧い摘み方を知らなかった。嫡男である彼に、花の愛で方を教えてくれる者は、この館にはいない。

――もう、一ヶ月も、母様にお会いしていない。

具合がお悪いのですよ。傍仕えの侍女や女官長たちは、そろって曖昧にそう答えた。だから奥様のお部屋にも近づいてはなりませんよ、坊ちゃま。男子(おのこ)ですもの、お淋しくなどありませんわよねぇ。こんな風に言われては、肯かないわけにもいかなかった。

けれど会いたい。母が恋しい。カシアンはまだ四つで、乳離れするには早すぎる年頃だ。儚げな母に生き写しの、美しく利発な子どもではあったが、だからといって母への情までコントロールできるほど賢しいわけではない。

母について、邸内の誰に訊ねてもまともな回答は返ってこなかった。父は為政に忙しく、滅多に会うことは叶わない。たまに屋敷にいることがあっても、いつもあの山吹色の装束に身を包んだ男と一緒だった。イシオス神殿に籍を置く副神官、ラルモ・オルヌと。

あの人、きらいだ。厭な人だ。カシアンの可愛らしい顔がわずかに歪んだ。

神様に仕えてるなんて嘘だ。だって、あんなに冷たくていやらし

い目、ぼくは見たことない。

父に取り入ってなにかと屋敷に招かれるオルヌに、カシアンは不信を抱いていた。根拠があるわけではなかったものの、子どもならではの直感が彼にそう教えていたのかもしれない。

父の居室と隣り合って設けられた「女主人の間」の前までやってきたカシアンは、息を整えると、ノックをするべく右手を振り上げた。

「なにをされているのです？　カシアン殿」

濡れた葦で心臓を撫でられるような不快な声――カシアンは飛び上がった。

背後に立っているのはほかでもない、オルヌ副神官だった。相変わらず、濁った沼を思わせる青銅色の眼が、じっとこちらを見据えている。

「な……なにって、母様のご様子を窺いに来たんだよ。ぼくの母様だぞ、お前になにか言われる筋合いなんてないぞ」

精一杯の虚勢を張って言い放つも、発せられる不気味な存在感の前に、どうしても後ずさりしてしまう。

「母君は長の患いで臥せっておられるとか。部屋に入られてはなりませんぞ、病人の気に障るでしょうからな」

オルヌの手がぬっと伸ばされた。カシアンは咄嗟に、ユニスの花束を後ろ手に庇った。

「……わ、わかったよ。室内には入らない。それでいいだろ、あっち行けよ」

彼はなおもじっとカシアンを見つめていたが、やがてなにも言わずに踵を返すと、廊下の端に消えた。カシアンは詰めていた息を吐き出し、花束を抱きしめた。

そして、母の部屋の扉の足元に、そっと花束を置く。

早く元気になって、お顔を見せて。ぎゅっと両手を握りしめ、胸の中で祈りを捧げる。

「……また来るね、母様」
このユニスの花が、枯れてしまわないうちに。

気づくと、一面の花畑の中にいた。
母と同じ甘い香りのする、白いユニスの咲き誇る花畑。
ここはどこだろう？　うちの庭より広いみたいだ……そうだ、母様を連れてきてあげよう。これを見せれば、もしかして元気になってくれるかもしれない。
カシアンはユニスの海の中を走り出そうとし、ふと足を止めた。
ずっとずっと向こうに、誰かがいる。
「母様？」
思うより先に駆け出した。きっと母だ、間違いない。覚束ない足取りで懸命に走る。
ところが、それは母ではなかった。
母よりずっと若い女だ。少女と呼んだ方が相応しいかもしれない。白い飾り気のないワンピースが、風にふわふわとたなびいている。
黒い髪に黒い瞳――まるでお伽噺に出てくる妖精みたいな、不思議な顔立ち。そして雰囲気。
「誰？」
まじまじと見上げ、そう訊ねた。女はきょとんとして彼を見下ろしている。なにを言われたのかわからないのかもしれない。が、女はふと微笑んだ。――カシアンの胸が、どきり、と鳴った。
白く細い手が伸ばされ、彼の頭をやさしく撫でた。
これまで感じたことのない感情が、胸の奥に湧き上がる。

……あなたは、誰？

女は口を開き、なにごとかを喋った。

それはまったく耳なじみのない、小鳥の囀り（さえずり）にも似た言葉だった。
胸の奥のざわめきがどんどん大きくなっていく。
触れようとして手を伸ばした時、不意に突風が起きた。
目を開けると、花畑も、女も消えていた。いつもの自分の部屋、自分のベッド。カシアンは夢見心地のまま、たったいま聞いたばかりの不思議な言葉を、口の中で反芻した。

「……ミハル……」

眠りに落ち、ふたたび目を醒ました時、あの不思議な夢のことを、カシアンはきれいに忘れていた。
十九年後に「彼女」と再会することなど、思いも寄らず。

## ◆閑話 - 夢の中で - （後書き）

ｗｅｂ拍手御礼用小話その2、カシアン幼少篇です。
幼いみぎりには可愛らしかった彼が、なぜあんな風にねじまがってしまったんでしょうねぇ……。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます（＾・＾）

# 第一話　ただいま

瞼の裏が白くなった。窓から差し込む強い西日のせいだ。
あたしは目を開けて、手元の携帯を覗き込んだ。午後四時を少し回ったところ。思ったより早く着けそうだ。
「ふわぁぁ」
大きな欠伸が漏れた。周囲には乗客が誰もいないので見られる心配はないけれど。
それにしても、ずいぶん長い間眠ってしまっていた気がする。おまけになんだかよくわからない夢まで見たような。
うーん……どういう夢だったっけ？　確か、舞台は外国で……あたしはメイド服を着て働いていて……その上どこかに監禁されて――って、なんて脈絡のなさだ。伸びをした時、到着を予告する車内アナウンスが聞こえてきた。あたしは立ち上がり、棚からミニボストンを引きずり下ろした。ポケットに手を突っ込み、引っ張り出した「青春十八きっぷ」は、どういうわけだか妙に色褪せ、その上ボロボロになっていた。

地元の駅に着くと、改札口には二つ下の妹、榛名（はるな）が待っていた。
「あっ、未明ちゃん、未明ちゃん！　お帰りなさい！」
彼女はあたしを見つけるなり破顔して駆け寄ってきた。くりくりした大きな瞳に愛嬌のある丸顔は、やっぱり……に似てる。……ん？　似てるって――誰に？
「未明ちゃん？　どうしたの、ぼうっとして。疲れちゃったの？」
そう言いながらあたしの顔を覗き込む。あたしははっとして首を

横に振った。
「ううん、別に。あ、これ、お土産」
あたしは赤い紙袋を榛名に差し出した。テレビでもよく紹介される有名パティシエがプロデュースしたという話題のスイーツショップのマカロンで、あたし以上に甘いもの好きの榛名が一度食べてみたいと言っていたお菓子だ。
「うわぁ、ありがとう、未明ちゃん！　覚えててくれたんだ」
榛名の顔がいっそうほころんだ。彼女はあたしの左腕に自分の右腕を絡ませ、ぴったり寄り添って歩き始めた。こういう、年齢よりもひどく甘えたがりというか、可愛らしいところは、あたしが上京する前となにも変わっていない。
「お母さん待ってるよ。散らし寿司作って」
「それにローストチキンも？　真夏なのに」
「そうそう。真夏なんだけど」
あたしと榛名は顔を見合わせて噴き出した。でも、真夏って……いま、真夏だっけ？　なんか、ずっと……すごく寒いところにいたような気がするんだけど……。
「明日ね、お父さんのお墓参り、みんなで行こうって。……未明ちゃん、こっちの大学に進めばよかったのにな。そりゃあ東京の大学の方が、レベルは高いんだろうけど」
彼女はぼそりと付け加えた。またそれを言う。あたしは仕方なく苦笑した。

駅からバスで二十分揺られた先の住宅街にあたしの家はある。ごくごく普通の、建て売りの二階家。いまでは女三人で——あたしが帰省した時は、だけど——暮らすこの家を、狭いなんて感じたことは一度もなかったのに、どうしてだか到着した途端、奇妙なほどの違和感を覚えてしまった。半年ぶりだからだろうか。

カーポートの車。エアコン。冷蔵庫。お風呂。テレビ、電気、水道……数え上げればきりがない、ごく当たり前の文明の利器と生活インフラ。なぜそれが、こうまであたしの目には奇異に映るんだろう。

お母さんの心づくしの夕食を終え、あたしは二階の自分の部屋に引き上げた。ミニボストンを開けて中身を取り出す。ほんの少しの着替えと化粧品くらいしか入ってはいない。あとは、手帳代わりに使っているバンドのついたノート。ふと中身を繰ろうとした時、ノックの音がして、榛名が現れた。

「未明ちゃん、お風呂沸いたから、一緒に入ろうよ」

彼女は下着やパジャマを抱えていて、もうすっかりそのつもりみたいだ。あたしはまたも苦笑いした。二つしか離れていないせいもあるけれど、榛名はあたしのことをお姉ちゃんとは決して呼ばないし、まるで同い年の仲のいい友達みたいに接してくる。どちらかというと醒めているあたしみたいなタイプからすれば、そういう甘え上手なところはいっそ羨ましく感じるほどだった。

「わかった。ちょっと待って、準備するから」

榛名は部屋に入ってきた。そして、あたしが机の上に無造作に放ったノートを取り上げ、ぱらぱらとページをめくる。そのうち不思議そうな声が上がった。

「……ねぇ、未明ちゃん……これなに？　暗号？」

「へ？」

パジャマを取り出そうとしてクローゼットを開けたあたしが振り向くと、榛名はノートを左右に広げて立っている。あたしは眉を寄せてそれを覗き込んだ。

「――なにこれ」

思わずつぶやいていた。だって、そこに書かれていたのは、まるで見たこともない文字の羅列だ。……いや、日本語も混ざってる。それは間違いなくあたしの字だった。でも……書いた覚えがまるでない。

基本構文、禁止構文、依頼、命令、丁寧語。そんな言葉が解説とともに書かれていた。ファンタジー映画にでも出てきそうな、金釘文字みたいな形のおかしな字体がびっしりと綴られている。

「なにこれって、未明ちゃんが書いたんでしょ？　外語大って、こういう研究もやるの？」

「いや、これ、授業で使うノートじゃないし……ていうか知らないし。あたしこんなこと書いた覚えないんだけど」

あたしは首をひねった。でもやっぱり思い出せない。

と、階下から、お母さんの呼ぶ声が聞こえた。

「あっ、お風呂。忘れてた、行こ、未明ちゃん」

榛名は慌ててノートを机の上に置き、あたしの手を握った。部屋を出る時、不意に誰かが囁いたような気がした。

――イド・ライア・テス――

あたしは咄嗟に振り向いていた。でも、当たり前だけど、そこには誰もいなかった。

その夜、ウェス・ゴート邸に踏み込んできたのは、中央政府のメンバーである数人の宰相及びその部下たちだ。彼らは、臨時列車を走らせて直接要塞島に向かったオルグ・ヴィネックの直談判に折れる形でやってきたのである。その対応は、文字どおり超法規的措置といえた。

イグノディアスへの冒涜罪、それに加えてウェス・ハーシュ家子息に対する暴行致傷、監禁罪。現場を押さえられてしまっては、さすがのゾデューも言い逃れのしようがなかった。頼みのオルヌ副神官はすでに気が触れてしまっているのか、まともな回答すら返ってこない状態だ。二人は警吏庁長官のユブロンに捕縛され、オサイオ

ン中央獄舎へと連行されることになった。
「副神官とウェス・ゴート家が懇意なのは公然の事実ではあったが……まさかこんな大それたことを企むとはな。ウェス・ハーシュ卿、あなたはいつ気づかれたのかね」
ユブロンは、証拠物件として押収した『黒の経典（ザモド）』をぱらぱらとめくりながら訊ねた。
ヴィネックは肩をすくめてみせた。
「いつってこともないがね。ただのカンだよ。外れてくれることを願ってはいたんだが。……ゾデューの倅のことも、あまり悪いようにはしたくなかったんでね」
「ああ……あなたは彼が幼い頃を知っていたんだっけな。彼の母親の件も――」
「いまさら言うことでもないが……例の副神官が絡んでるような気がしてならないんだ。ゾデューの奥方は万事控えめな女性で、不貞など働けるような性格じゃなかった。オルヌのやつが、ゾデューから手っ取り早く信頼を勝ち得るために、仕組んだんじゃないかとね」
ヴィネックは苦々しげに吐き棄てた。彼とウェス・ゴート家現当主、ゾデュー・エリアック・ウェス・ゴートは、実は大学府での同期生でもある。在学当時から犬猿の仲で、お世辞にも友人という間柄ではなかったものの、五大陸を代表する名家同士、それでも付き合いはなにかと続いた。ゾデューの婚儀には義理で呼ばれ、ヴィネックも義理で出席した。やがて生まれた一粒種の男の子にも会ったことがある。
「天使みたいに可愛い子だったよ。それがなぁ……どうしてこんなことになっちまったんだか」
乱心を起こしたと聞き、カシアンの部屋に赴くと、彼は寝台の上に仰向けに寝かせられ、その身体はロープで幾重にも縛りつけられていた。自傷を防ぐためか、口には布が押し込まれている。
使用人によると、彼は花嫁を奪われそうになったせいで逆上し、不法侵入を働いたウェス・ハーシュ家の長男を刺し殺した――との

ことであるが、そもそもその娘を拉致してきたのはカシアンの方だ。それに殺されたはずのジードには傷ひとつない。諸々を加味した結果、ジードとアドリオの行為は純粋な正当防衛として認められたのだった。

ユブロンは訝しげにつぶやいた。

「で、その、攫われたっていう娘なんだが。あなたの家のメイドだって？　彼女はどこにいるんだね」

「俺もそいつを訊きたいんだよ。現場にいたはずのジードは気絶しちまって、ものを訊き出せる状態じゃないしな。アドリオは牢に捕らえられていたし、『儀式』の贄（にえ）として連れて来られた村娘は……」

「ああ、荘園の使用人の娘か。彼女も現場にいたんだろう？　なら……」

「そうなんだがな。……部屋が真っ白になって、気づいたら消えちまったって言うだけなんだ。オルヌはともかくゾデューならわかるかとも思ったんだが、結局は同じことを口にしていたしな」

ヴィネックの顔が暗くなった。どこからともなく現れ、どこへともなく消えてしまった異国の娘。それはかつての彼の最愛の恋人が辿った運命を、そのままなぞっているようにも思える。

……このまま、二度と会うことはないのかもしれない。だとしたら、彼の息子、オルグ・ジードはその事実を受け入れることが果たしてできるだろうか。

## 第一話　ただいま（後書き）

未明がウェス・ハーシュ邸に置いていったはずのノートが、なぜ鞄の中に一緒に入っているのか。
どういう風に使うべきか悩んだんですが、まあ、異質な存在はすべて現代日本に呼び戻されたってことにしました。
ガジェットがアバウトなため、矛盾点がどんどん出てきそうで怖い……（＜＿＞）

# 第二話　彼のお母さん

夏の休暇はあっという間に終わり、あたしはとんぼ返りみたいに東京へ戻った。それからも季節はどんどん変わっていき、やがて秋が通り過ぎて、冬が来た。東京で迎える初めての冬だ。

月曜日、二限の講義が終わり、教室を出るところであたしは瀬川(せがわ)淳(じゅん)に声をかけられた。

「昼、一緒に行かない？　よかったらだけど」

艶のある黒い髪、角度によって褐色の混じる独特の瞳。まじまじと彼を見つめていたあたしに、彼は怪訝そうな顔をした。

「あの……なんかついてる？　俺」

あたしははっとし、赤面した。

「あ、ごめん、なんでもない。うん、行こ」

どうしてだろう。無性に懐かしい気がしていた。秋になって後期の講義が始まって以来、ずっとそのおかしな感情は続いている。

あたしたちは生協に併設されたカフェテリアに向かった。混んではいたけど、顔見知りの女の子たちが取っていた席があって、そこに同席させてもらうことができた。

「寒っ。今日って一段と冷えない？」

あたしは湯気を上げるトレイを持って席に着くなりそう言い、両手をこすり合わせた。先に座っていた女の子の一人、中原香奈(なかはらかな)がぷっと噴き出した。

「未明、オーバー。だから鍋焼きうどんなの？　真冬じゃん、そのチョイス」

「オーバーじゃないって。あたしほら、あったかい海育ちだからさ。東京の冬ってまじ寒いのよ。受験時(とき)とか、凍るかと思ったもん」

「まだ十二月じゃん。そんなんじゃ一月二月、どうやって越すのよ」

彼女たちは楽しげに笑った。そのうち、思い出したように、冬期休暇の話になった。

「初スノボ、どこにしようかって言ってたんだけどさ。なるべく宿泊費安く押さえたいし。どっかいいとこないかなぁ」

そう言ったのは長谷部里佳子（はせべりかこ）だ。アクティブな性格で、夏は海、冬は雪山で過ごすのが鉄板（テッパン）だといつも主張している。

「あ、なら、うち来れば？　実家、蓼科でペンションやってるから」

瀬川君はコーヒーを飲みながらさらりとそう言った。長野出身なのは知ってたけど、ペンションを経営してるっていうのは初耳だ。

女の子たちはいっせいに目を輝かせて彼を見た。

「えっ、いいの？　もしかして、お友達価格で提供してくれるとか？」

里佳子の言葉に彼はにっこり笑った。

「まあ、その分サービスは割り引かれますけど。って嘘嘘、みんなで来てくれるならうちも助かるしさ。久世も来るだろ」

あたしは曖昧な表情を作った。正直、寒いのは苦手だし、それに休みはデフォルトでバイトを入れるつもりでいたからだ。でなければ帰省を優先させたい。年末だもの。

「二、三日だもん、いいじゃん。一緒に行こうよ、未明がバイトの鬼なのは知ってるけどさ」

「そうそう、決まり！　じゃあ日程練ろっか。冬休みっていつからだっけ」

彼女たちに押し切られる形で、なぜか参加することになってしまったらしい。うーん、正直、あんまり気乗りしないんだけど……。

三限の開講を報せる予鈴が鳴り響いた。あたしたちはトレイを片付け、ばらばらとカフェテリアをあとにした。

ウェス・ハーシュ邸一階の最西端にある使用人部屋は、あれ以来

ずっと空き室のままだ。
ピアは室内に入り、そっとベッドカバーに手を触れた。淋しさが込み上げてくる。
「ミハル……いったいどこ行っちゃったの？　みんな超心配してるんだよ。ジード様なんか……」
独りごち、ため息をつく。大学府に戻ったジードがどれほど落ち込んでいるか。それはもう、目も当てられないほどだ。かろうじて授業には出ているらしいが、このままでは首席での卒業だって危うくなる。
執事のレンドルス、女官長のパドマも、同様にそのことを心配していた。事実、ジードは先月の春期休暇の折、父であるオルグ・ヴィネックにこんなことを願い出たのである。
「大学府を休学したいんです」
爆弾発言ではあったが、ヴィネックはさほど驚かなかった。いずれそう言い出すだろうことは予測していたのかもしれない。彼は息子を見据え、訊ねた。
「理由は」
「ミハルを捜すためです。いまのままでは、なにも手につかないんです」
彼は即答した。ヴィネックにしても、訊くまでもなくわかっていた回答だ。ジードは続けた。
「私は彼女を愛しています。生涯、彼女以外の女性を好きになることはないでしょう。……ノルド家にもそのことをお伝えください。レノラと結婚するつもりはないと」
ヴィネックは肘掛け椅子の上で脚を組み替えた。そして軽く息を吐き出した。
「……認めるわけにはいかんな。ノルド家とのつながりは、お前一人の思惑で断ち切っていいもんじゃない。俺に言われるまでもなく、わかってるんだろうが……愛妾としてなら認めよう。だが坊主（シグノ）、お前の正妻はあくまでもレノラだ」

ジードは表情を変えずに父の言葉を聞いていた。彼は静かに口を開いた。

「では、この家を出ます。家督はアドリオに。それなら文句はないでしょう」

「縁を切るっていうのか」

彼は肯いた。ヴィネックは首を横に振ってみせた。

「アドリオは嫡子じゃない。ノルドの娘が嫁ぐ相手はあくまで嫡男だ、それもわかってるだろう。……とにかく、坊主、ミハルの行方なら俺も可能な限りの手を尽くして捜してるんだ。いまお前にできることは、大学府に戻って勉励し、首席での卒業を果たすことだ、いいな。わかったら部屋に戻れ」

ジードは黙り込んだ。それ以上なにも言わず、部屋を出て行った。父、ヴィネックは、そんな息子を見送ったあと、なぜか心底おかしそうに笑みを漏らしたのだった。

十二月の二十六日から三日間の予定で、あたしたちは蓼科にあるペンション「スノウハウス」を訪れた。瀬川君の実家だというこのペンションは、和モダンな別荘風の洒落た建物だ。客室は全部で八つ。こじんまりと落ち着いていて、いかにも過ごしやすそうな雰囲気を漂わせている。

荷物を持ってレンタカーを降りると、大きな白い毛並みの犬が車に向かって走ってきた。あたしは思わず顔をほころばせ、そのやわらかそうな被毛に手を伸ばした。

「おいで、ラギ」

……え？　あたし、いま、なんて言った？　初対面のこの犬を知ってるはずもないのに……。

「スノウ、ただいま。久しぶりだな、俺のことちゃんと覚えてるか」
あたしの隣に屈み込んだ瀬川君が、そう名前を呼びながら犬の頭を撫でた。よほどうれしいのか、犬はさかんに尻尾を振っている。
ペンションの中から、赤いエプロン姿の女の人がやってくるのが見えた。髪をひっ詰めてポニーテールにまとめた、可愛らしい感じの人だ。年齢は多分、三十代真ん中くらい。細面の顔もくっきりとした目元も、よく見ると瀬川君にそっくりだった。お姉さん……にしては年が離れすぎてるから、従姉(いとこ)かなにかだろうか。
「淳、お帰り。皆さん、ようこそ。大変だったでしょう、雪が深くて」
「あ、ただいま、母さん」
そのせりふに、あたしはびっくりしてしまった。だって、ずいぶん若いお母さんなんだもの。
「えっ、瀬川君のお母さんなんですか？　嘘、すごい若ーい！」
素っ頓狂な声を上げたのは香奈だ。でもあたしも同感。
「やだ、若いなんて。もう三十八ですよ。あ、私、この『スノウハウス』のオーナーで淳の母の美沙紀(みさき)って言います。よろしくね、皆さん」
「こちらこそ、お世話になりまーす」
「若く見えんのは作り込んでるからだよ。素顔(すっぴん)見たら固まるって」
「淳！　余計なこと言わなくていいの、あんたは。……あら？　あなた、どうしたの？　車酔いしちゃった？」
え？　車酔いって……あたしのこと？　なんで？
「顔色悪いわよ。淳、あんた運転乱暴だったんでしょ！　免許取りたてなんだから、雪道はもっと気を遣わなきゃ――」
彼女、美沙紀さんは、そう言ってゆっくりとあたしに手を伸ばしてきた。
あたしはそのまま、駐車場に崩れ落ちた。

# 第三話　スノウハウスと廃隧道

ああ、まだ起き上がらなくていい。お前は貧血を起こして倒れたんだ。

そもそも食べる量が少なすぎるんだ。これじゃ心配で、おちおち大学府にも戻れないな。

そのままにしていろ。いま、水を飲ませてやるから。……起きなくていいと言ってるだろう、暴れないで……ほら……。

ミハル……ああ、もう……これ以上は無理だ。お前がそんな風に、その黒い瞳で私を……ああ、ミハル、お前が好きだ。お前が欲しい……愛してる、ミハル……

気づくとあたしは知らない部屋のベッドに寝かされていた。独りだった。周りには誰もいない。耳にはまだ、あの甘い囁き声が残っているのに――そう思った途端、顔が真っ赤になった。

外国の貴公子かなにかみたいな若い男の人が、映画でしか見たことのないような天蓋つきの寝台の上であたしに添い寝してくれていた（ただ、顔はもう思い出せない）。それだけならまだしも、あたしを抱き寄せて、く、口移しに……水を……って、あたしはいったい、どういう夢を見てるんだ。欲求不満？　冗談じゃない、もう。

「あら、起きたの？　大丈夫？」

ドアが開き、瀬川君のお母さん、美沙紀さんが入ってきた。その後ろから瀬川君もひょいと顔を覗かせている。

「ごめんなさいね、淳の運転が下手なせいで酔っちゃったのよね。お水、飲めるかしら、ここに置いておくからよかったら飲んでね」

彼女はミネラルウォーターのペットボトルとグラスをテーブルの上に置いた。あたしは慌ててお礼を言った。

「ありがとうございます、すみません、着いたばっかりでご迷惑おかけして」
美沙紀さんはにっこり笑ってくれた。
「迷惑なんて。それよりゆっくり休んだ方がいいわよ。あなたさっき、本当に顔色悪かったもの」
そう言い置くと彼女は部屋を出て行った。入れ替わるように瀬川君が入ってきて、申し訳なさそうにあたしを見ながらベッドサイドの椅子に腰掛けた。
「ごめん、久世。気分どう？　治った？」
「あの、ううん、こっちこそごめん。瀬川君のせいじゃないよ、車酔いでもないと思う。あたし酔わない人だもん」
それは本当だ。あたしは並み以上に三半規管が発達してるらしく、子どもの頃でさえ車酔いを起こしたことがない。だから、どうして倒れたのかっていうと……原因は謎だった。
「過労とかじゃない？　きっと疲れ溜まってんだよ。他人のこと言えないけど、久世、めちゃくちゃなペースでバイトしてるだろ。無理しない方がいいって」
思いもかけない労いにあたしはきょとんとし、それから微笑した。瀬川君の顔がちょっと赤くなった。柄にもないことを言ったっていう照れなんだろう。
「大丈夫、そんな深刻な状態じゃないって。ていうか、瀬川君のお母さんてほんと若いんだね。最初、従姉かなんかかと思っちゃった」
「……ああ。シングルマザーでさ、あの人、いわゆる。俺生んだの十代の時だから。俺、父親の顔って知らないんだ」
「え……そうなんだ」
微妙な話題を振ってしまったみたいだ。瀬川君はその雰囲気を変えようとしてか、明るい口調でこう言った。
「ちょっと外出ない？　スノボは無理そうだけど、散歩くらいならできるだろ」
あたしは肯き、ベッドから降りた。コートを羽織りながら訊ねる。

「そう言えば香奈たちは？」
「長谷部の運転でゲレンデ行ったよ。久世は俺が看てるからって言って。……じゃあ行こっか、すぐ近くにちょっとおもしろい場所があるんだ」
瀬川君は悪戯っぽい顔になった。

ロナジアは久しぶりに満ち足りた気分で朝を迎えた。寝室では彼女の最愛の恋人がまだ眠っている。その間に熱いお茶を淹れて、その香りで彼をそっと起こすのが彼女のお気に入りのやり方だった。
「ファロダ……ねぇファロダ。起きてったら……」
ローハン茶を一口すすり、甘い声で囁く。炒った豆を煮出して飲むため、独特の強い風味とコクを持つ男性好みのお茶だ。ファロダは――つまり、現ウェス・ハーシュ総帥ことヴィネックは、ベッドの中で寝返りをうっていたが、やがて寝惚けたようにつぶやくのが聞こえてきた。
「……ミサキ……ここにいてくれ……俺のそばに……」
小さな声ではあったがはっきりと聞き取れた。ロナジアの顔が強張った。

ミサキ。それはいまも忘れられない、彼の永遠の恋人の名前なのだろう。

「……ああ、ローニャ。起きてたのか」
ロナジアは微笑んだ。嫉妬という感情を男に見せたら終わりだ。相手との関係も、自分自身のプライドも。
「いい天気よ。お湯、遣う？」
窓辺からは初夏の陽射しが燦々と差し込んでいる。じきに来る夏に向け、気温は日に日に上がっていく。

ヴィネックは上体を起こし、伸びをした。その身体にはなにもまとってはいない。ロナジアの頬がふと赤らんだ。

「そうだな……それより、俺にも一杯くれないか」

ロナジアは手にしていたカップを彼に渡した。その時、ふと思い出したことがあった。

「そうだわ。ねぇ、ほら、いつだったかウェス・ハーシュ家の女の子がお屋敷から逃げ出したのを助けたことがあったじゃない。うちの店でガラの悪いのに絡まれててさ」

未明のことだ。もうあれから半年も経つのか。そう思いながらヴィネックは肯いた。

「ああ、憶えてる。それがどうかしたのか」

「あの子、店に鞄忘れてっちゃったから、あたしずっと預かってたのよ。どうしようかあんたに相談しようと思って。そしたらさ、その鞄、知らない間になくなっちゃったの」

ヴィネックは眉を顰めた。「……なくなった？　盗みに入られたわけじゃなく、か」

「自慢じゃないけど、うちみたいなとこ狙う空き巣はいないわよ。鍵は一応つけてはいるけど、なくたっておんなじだわね。とにかく、この前……ほら、あんたがどこかへ行商に行ってた時よ、気づいたら消えてたの。跡形もなく」

ロナジアはキッチンに向かい、自分のためにローハン茶を淹れ直すと寝室に戻った。ベッドの端に腰を下ろして続ける。

「どういうことなんだかさっぱりよ。あの子に申し訳ないことしちゃったわ。あの時も、お屋敷には戻りたくないって言ってたのに、結局送り届けちゃったわけでしょ。そりゃ具合が悪くなったんだから仕方ないけど。あの子、いまもウェス・ハーシュ家にいるのかしら？　あの鞄がなくて困ってないかしらね」

ヴィネックはローハン茶をゆっくりと飲み込み、つぶやいた。

「なくなったか。そうか……本人とともに消えたってわけか」

「えっ？　なによ、あの子また逃げ出したの？　そんなにあのお屋

敷が厭だったの？　ファロダ、あんたなんでそんなこと知ってるのよ」

ロナジアの心臓が跳ねた。不意に、空いている方の左手を握られたためだ。それくらいのことでいまさら、未通娘（おぼこ）でもあるまいし――理性は呆れているのに、感情は別の生きもののようにその声を裏切り続ける。

ヴィネックの、緑がかった青色の瞳が、彼女に近づいてきた。唇が触れ合う。……ヴィネックの手が、ロナジアの手元からカップを奪い、テーブルの上へと退ける。

彼は自分を欲している。おそらくは、つい先刻まで夢で逢瀬を果たしていた、ミサキという女の代わりに。

それでもいい。ロナジアは自ら男の頭に腕を回し、その唇を貪った。

「スノウハウス」はゲレンデにほど近いペンション村の外れに位置している。瀬川君があたしを連れ出したのは、そこから歩いて十分くらいのところにある、人気（ひとけ）のない古びた隧道（ずいどう）（※）だった。煉瓦造りで、入り口には一本のロープが張られている。銘板に彫られている文字らしきものは、ここからじゃ判別不能だ。

「昔の廃線跡なんだ。雪で埋もれちゃってるけど、線路も部分的に残ってる。でも、ここ、いつ造られていつ廃止されたのか、地元の人もほとんど知らないんだ」

あたしは感心したように全容を見渡した。五十メートルほど向こうには、隧道の出口が白い光を放っている。

「いろいろ、怖い話とかもあるんだぜ。ここを通ると別の世界に行っちゃうとか、入ったが最後戻って来れないとかさ。神隠しも実際に何件か起きてるらしいし。……ってごめん、もしかしてその手の話ダメだった？」

瀬川君は慌てたようにあたしを見た。あたしは笑って否定した。
「全然。基本的にリアリストだから、あたし。瀬川君は信じるの？」
「いや……どうだろ、まあ信じるかどうかって言われたら……信じない方かな。でも雰囲気あるじゃん、俺、昔からこの場所好きなんだ」
確かにそれは同感だ。トンネルにまつわる怪談奇談は古今東西、いくらでもある。あたしは肯き、雪の積もったロープに手をかけ、向こう側を覗き込んだ。
……風が吹いてきた。違和感を覚え、背筋に怖気が走った。
真冬だというのに、そのはずなのに――さわやかで心地の好い、そしてほんのり暖かい、それはまぎれもなく初夏の風だった。
（※「隧道」……トンネルの古い言い方）

# 第四話　美沙紀の忠告

里佳子と香奈は、夕食の始まる午後七時に合わせてゲレンデから戻ってきた。相当楽しんだらしく、二人とも頬が紅潮している。あたしたちはダイニングに集まり、食事が始まった。

「未明、大丈夫？　具合、ほんとに良くなったの？」

瀬川君も入れて、四人で乾杯したあと、香奈が心配そうに訊ねてきた。あたしは笑顔で肯いた。

「うん、ごめん。明日は朝から行けるから」

「きっと気が抜けたんだよ。あたしもよく、夏休みとかＧＷになった途端に熱出したりすることあるもん」

里佳子がしたり顔でそう言った。

「でももったいなかったね、貴重な半日を寝て過ごすなんて」

「あ、だけど、この辺ちょっと歩いたりしてたんだよ。瀬川君がいろいろ案内してくれたんで」

「へえ？　そうなの？」

そこへ、美沙紀さんが、しゃぶしゃぶ用の薄い豚肉を載せた大皿を持って現れた。あたしたちは歓声を上げた。

「お待たせ。地元のブランド豚でね、『夢ごろも』って言うの。脂身がすごくさっぱりしてて女性に好評なのよ」

「すごい、ほんと、きれいな色ですね」

「お代わり自由だから、好きなだけ食べてね」

美沙紀さんはすごく可愛らしい笑顔でそう言った。ほんとに、こういう表情はまるで少女のようにすら見えてしまう。

「いろいろ案内って、どんなとこ行ってきたの？　未明」

早速しゃぶしゃぶ鍋の中で肉を泳がせながら香奈が言った。

「えーと、近くの神社とか、あと、古いトンネルとか。廃線跡なん

だって、煉瓦造りで雰囲気があってね。なんか良かったよ」
「えっ……」
あたしの答えにいち早く反応したのは香奈でも里佳子でもなく、空いた食器を片付けようとしていた美沙紀さんだった。彼女は空になったビール瓶を持ったまま、じっとあたしを見つめている。ふと、視線を感じて隣を見ると、瀬川君は額に手を当てていた。しまった、という表情だった。
「……淳、あんた……あの隧道へ行ったの？　未明さんを連れて？　近づかないようにってあれほど……」
美沙紀さんは明らかに怒っている。あたしはうろたえた。なんで？　言っちゃいけないことだったの？
「いや、だってさ。別に危険なことなんてなかったぜ、中にも入ってはいないし……母さん、神経質になり過ぎだって。神隠しってのもただの迷信だろ。事実、俺、子どもの頃からなんども行ってるけど、いままで一度だって――」
瀬川君は後ろめたそうに弁明を始めた。あたしをはじめ、香奈も里佳子も、ぽかんとしてそんな二人を見守っている。
「そういうことじゃないのよ」
美沙紀さんの声が彼の言葉を遮った。怒りのためなのか、わずかに震えていた。その直後、彼女ははっとしたようにあたしたちを見、無理やり笑顔を作った。
「……ごめんなさい。でも、危険なところには近づかないでもらいたいの。……じゃあ、なにか、足りないものがあったら言ってちょうだいね」
それだけ言うと、彼女は厨房に戻ってしまった。瀬川君はため息をついている。里佳子は小声で彼に訊ねた。
「ねぇ……どうしちゃったの、美沙紀さん。めっちゃ怒ってなかった？」
瀬川君は温んだビールを飲み干すと口を開いた。
「……昔からなんだよ。俺があの廃隧道に行くの厭がっててさ。理

由訊いても教えてくれないんだ。変質者が出るかもしれないからだめだ、ってそればっかで。まずった、明後日から俺、超こき使われそう」

あたしたちが帰るのは明後日の午後だから、その夜からはスタッフの一人として彼も働くことになっているんだろう。あたしは申し訳ない思いで謝った。

「ごめん。あたしがうっかり言っちゃったせいで」

「いや、違う、こっちこそごめん。久世のせいじゃないって。俺もそのこと言うの忘れてたわけだし、気にしないでよ」

そう言われてもなんだか複雑だ。妙な雰囲気になってしまった場をどうにかしようと、瀬川君はスノボの話に話題を振った。

夕食を終え、あたしたち女子はそろって三人部屋に引き上げた。

「スノウハウス」には温泉、しかも露天風呂があるので、そこを貸切にさせてもらって雪見風呂を楽しもうという話になり、着替えを用意してから別棟に向かった。

「ええ、もちろんいいわよ。うちのお風呂は源泉かけ流しで、加水加温一切なしだから、もう明日の朝はお肌つるつるになってること請け合いよ」

フロントに姿を見せた美沙紀さんは快活な笑顔を浮かべてそう言った。あたしはなんとなくほっとしていた。でも、里佳子たちと一緒にそのまま露天風呂に行こうとしたあたしを、彼女はなぜか引きとめた。

「あの……未明さん、今日、具合悪くなっちゃったでしょ。温泉に行く前に、お薬とか渡したいんだけど……ちょっと、いいかしら」

「えっ……薬、ですか？　でも……」

あたしは正直戸惑った。確かに倒れはしたけれど、いまはすっかり快復しているのに。けど、美沙紀さんの表情は、どこか……すが

るようなっていうのか、真剣そのものだった。それでいて、できればあたしにはあまり関わりたくないというか――率直に言って、いますぐここから帰って欲しいみたいな空気がなぜか伝わってきた。

「わかりました」

あたしは肯いた。里佳子と香奈には先に行ってもらった。ほかに誰もいなくなったフロントで、美沙紀さんは素早く本題を切り出した。

「――おかしなことを言うと思うかもしれないけれど、聞いて欲しいの。未明さん、あなた、あの廃隧道に行ったのね？　その時……なにか感じなかった？」

なにか。……なにか、って……なに？

「なんて言ったらいいのか――説明のしようがないんだけど……いえ、感じなかったのならそれでいいの。でも、あなたは……その……」

美沙紀さんはあたしを凝視し、口ごもった。彼女がなにを言いたいのかその趣旨がよくわからず、あたしはただ黙っていた。

「ごめんなさい、わけのわからないことを言って。……でも、とにかく、あそこには近づかない方がいいわ。地元の人もあまり近寄らない場所だし、行方不明者も過去には本当に出ているらしいのよ。私も……」

「え？」

あたしは思わず訊き返した。でも美沙紀さんは言葉をそこで切った。

「いえ、なんでもないわ。引き止めてごめんなさい。じゃあ、お風呂、楽しんでね」

それ以上話すつもりはないみたいだった。あたしは釈然としないながらも露天風呂に向かった。脱衣所で服を脱いでいる間、結局美沙紀さんはなにを言いたかったのかを考えてみる。

……わからない。ただ、でも、確かにあの廃隧道には独特の雰囲気があった。数十メートル先の出口を覗き込んだ時に感じたのは、

真冬とは思えないおかしな一陣の風だ。一瞬だったから錯覚かもしれない。でも、あの風は……なんだか日本の風じゃあないみたいな……。

「未明、ねぇ、あたしたち言ってたんだけどさ」

浴場に入り、湯船に浸かるなり里佳子が近寄ってきた。

「え？　なにを？」

「ほら、昼間、あんたが瀬川君と行ってきたっていう……トンネル？　いまはもう使われてないっていう」

「ああ……」

あたしはほんのりと緑色に濁ったお湯をすくいあげ、肩を撫でた。ほんとにつるつるして気持ちいい。

「そこさ、行ってみない？　これから」

「ええ？」

あたしは思わず大声を出していた。里佳子は口元に人差し指を当てている。

「声大きいって。……だってさぁ、美沙紀さん、なんだか知らないけど超テンパってたじゃん。ああいう風に言われちゃうと逆に行きたくなっちゃわない？」

「……」

それは……わかんないでもないけど、でも、なんでいまから？　もう十時近いんだし、さすがに夜ってのは……。

「夜の方がさらに雰囲気盛り上がるじゃん。あたしも行ってみたいし、ねぇ、案内してよ、未明」

香奈までが瞳を輝かせて迫ってきた。どうやら肝試し感覚でいるらしい。あたしはさすがに渋った。なにしろたったいま、美沙紀さんに釘を刺されたばかりなのだから。

「いや、でも……ならせめて明日にしない？」

「だめだよぅ、だって明日じゃ瀬川君もいるじゃん。美沙紀さんに怒られちゃったから、きっと反対されちゃうよ。だから瀬川君がいない時じゃないと。ってなると夜しかないでしょ」

香奈のせりふには説得力があった。あたしは黙り込んだ。なんとなく、押し切られそうな予感がしていた。

# 第五話　落下

キニッサの南端、大学府から五ノール（約十三キロ）ほど離れたところに建つ宮殿風の邸宅が、イシオス神殿を統轄する代々の神官長一族の居住である。

もっとも神官長自身は自邸では暮らさない。七人の神官、それに補佐役の青年とともにイシオス神殿をつねに護らなければならないからだ。

夏季休暇を目前にしたこの日、キニッサのノルド邸にはオルグ・ジードの姿があった。最終学年も残り数ヶ月。レノラとの婚礼の儀は、彼の卒業後間を置かずに行われる予定になっている。……あくまで予定ではあるが。

そのレノラの寝室で、ジードはこれ以上ないほどむっつりと塞ぎ込んでいた。隣にすり寄って来る従妹には目もくれず、ひたすら眉間に皺を寄せている。彼は心底うんざりした調子でつぶやいた。

「……就寝（やす）む部屋は別にして欲しいと言ったはずだが。悪いが失礼させてもらってもいいかな、もう夜も遅いことだし」

「ジード……どうしてそんなことをおっしゃるの？　別にする必要などはありませんわ。わたくしたち、許婚なんですもの」

彼女はそう囁くと、ジードに向かってそのつややかな唇を突き出してきた。ジードの苛立ちがいや増していく。

「君も知っているとおり、修道期間はまだ終わったわけじゃない。だから（というわけでもないが）……そういう行為を君とするつもりはない。頼むから、レノラ、聞き分けてくれ」

つれない態度にレノラの瞳が曇った。彼女は涙声で訴えた。

「……あなた、以前とは少し変わったようですわ、ジード。ええ、冷たくなったんだわ。どうしてですの？　わたくし、ずうっとあな

たのことだけをお慕いしてきましたのに……あなたの妻になるべく教育をされて……」

「わかってる。正直、君も気の毒だと思う。自分の意思など入る余地はなかったんだからな。でも、いまならまだ変えることは可能だ。君も私も、自分自身の運命は、自分で切り開くべきだと思う。……どうか、私の言うことを受け入れてもらえないだろうか」

レノラはすっとジードから離れ、彼を見つめた。

「それは……わたくしとの婚約を解消したいということですの」

女神のように美しいはずの彼女の顔は、恐ろしいほど険悪に歪んでいた。ジードはその射るような眼差しを正面から受け止めた。

「そもそも正式に婚約しているわけではないが、そう取ってくれてかまわない。すまない、君にはもっと早く告げるべきだったな。――私には、心に決めた女性(ひと)がいるんだ。君のほかに」

「認めませんわ」

彼女は即答した。そして驚くべき素早さでジードの唇を奪った。不意を突かれ、防ぐこともできずにいるジードの口中に、その狡猾な蛇にも似た舌先が潜り込み、動き回る。彼は顔をしかめ、思わず強い力でレノラを突き飛ばしていた。

レノラは肩で息をし、赤く濁った瞳でジードを睨みつけた。

「あなたの妻はわたくしです。ジード、あなた、わかってますの？　我がノルド家とウェス・ハーシュ家のつながりは、ひとえに両家の婚姻関係があるからこそ成り立っているんですのよ。それともあなたの代で関係を断ち切ってしまうおつもり？　……そんなこと、たとえあなたが望んだとしても、あなたのお父様がお赦しになるはずはありませんわ。むろんわたくしの父もですけれど」

「家なら棄てる覚悟はある。心から欲しいもののためなら、手段など厭(いと)わない」

ジードは静かに言い切った。しかし、最終宣告とも言える彼の告白を聞いたレノラは、世にも麗しげな微笑を浮かべてこう答えた。

「わたくしもですわ。心から欲しいもののためには手段などは選び

ません。……どうぞ、憶えておいてくださいませね、オルグ・ジード」

そのせりふにはなんとも不吉な響きが込められていた。ジードはなにも言わずに腰を上げ、一度も振り返ることもなく寝室を出て行った。

ペンション近くのゲレンデは年末年始の特別期間中のみ深夜営業もしているとのことで、そろそろ夜の十一時を回ろうかというこんな時刻になっても外に出ることができる。温泉を出たあと、あたし、香奈、里佳子の三人は、充分に着込んで防寒対策をしてからこっそりと「スノウハウス」をあとにした。

「ね、何分くらいかかるんだっけ？　そのトンネル」

「多分、十分もないと思う」

香奈の問いにあたしは短く答えた。口を開けると冷気が入り込んできて気道が寒いのだ。もともと気乗りのしていないあたしとしては、一分でも早くペンションに戻りたいところだ。

国道沿いに黙々と歩いていくと、やがて目指す場所が見えてきた。周囲にはほとんど明かりがない。あたしは携帯についているライトを前方に翳（かざ）した。――昼間と同じ、とはとても思えないような黒い威容が姿を現した。

「うわぁ……なんかけっこう、迫力あるね」

里佳子の声がした。あたしも思わず肯いた。そして、ふと眉を寄せた。

ロープが外されてる。

瀬川君と来た時には張られていたはずだ。誰か、ここを訪れた観光客が取り去ってしまったのだろうか。そりゃ別に危ないことはないだろうけど、それにしても勝手に外すなんて……。

と思っていると、香奈が入り口から中へ、すたすたと入り込んで

いくのが見えた。
「ちょ、ちょっと香奈、やめときなよ」
あたしは慌てて言った。彼女は振り向き、きょとんとしてあたしを見た。
「なんで？　短いじゃん、このトンネル。つうか中に入らなかったら来る意味ないじゃん。未明もおいでよ」
「え……いや、あたしは……」
無意識に尻込みしていた。美沙紀さんの忠告のため、というよりは、多分あたし自身が怯えていたせいだと思う。なにに？　と訊かれてもよくわからないんだけれど。
ところが、そんなあたしを置いてきぼりに、里佳子までが香奈に続いて隧道の中に姿を消した。……こうなると外に独りでいる方がちょっと、怖い。あたしはつい、二人のあとを追っていた。
「いや、でも煉瓦造りってなんか圧迫感あるよねぇ」
「実際狭いって。相当昔の時代のなんだよ、きっと」
香奈たちは楽しそうにおしゃべりしながら歩いている。あたしはおずおずとその後ろについていった。
じきに出口に差しかかり、外へ出る。里佳子たちはすぐにUターンして戻ってきた。あたしも同じように隧道を抜けた。外に広がっていたのは、なんの変哲もない、入り口とも変わらない、国道の風景だ。
そう思ったのはほんの一瞬だった。
足元になにもないと感じた瞬間、あたしは自分の身体が真っ直ぐにどこかへ落下していくのを知った。
崖だ。隧道の外には崖があった。だから立ち入り禁止の意味を込めてロープが張られていたんだ。
……って、そんなばかな！　だって里佳子と香奈は外に出て、なにごともなく中に戻ってきたのである。それに、ごく当たり前の国

道沿いの風景がちゃんとあたしの目には映ったのだ、確かに一瞬ではあったけれど。なのに、現実にあたしはいまこうして崖から足を踏み外して、延々と落下し続けている。

――これ、最後まで落ちたらやばいんじゃないかな。死ぬかも。

この高さ、まじで相当あるって。

いつの間にか意識は消えていた。

# 第六話　レノラ姫、来襲

さわやかで、それでいて仄かに熱を帯びた、夏の始まりを感じさせる風が大学府の構内を吹き抜けた。レミットは慰安室（レクリエーションルーム）のテーブルに着き、大きく伸びをした。その顔は心底幸せそうに輝いている。

「ああ、やっと明日から夏期休暇だ。こことももしばらくはおさらばか、名残惜しいなぁ」

はす向かいに腰掛けるホルツェンが噴き出した。

「それが名残惜しいって面（ツラ）かよ。まったく、気を抜くのもいいけど、卒業前には最終試験が控えてるんだからな。少しは準備しとかないとあとで泣くことになるぞ」

したり顔でそう言ってから、彼はもう一人の親友に声をかけた。

「なぁ、ジード、俺またお前の家に行こうかと思ってるんだが、かまわないか？　ほら、俺、実家に長いこといれない性質（たち）だからさ」

「まだ折り合い悪いのかよ、ホルツェン。反抗期の子どもじゃあるまいし、いい加減自分から歩み寄ればいいのに」

お返しとばかりに小声で突っ込んだレミットの両頬をホルツェンはすかさずつねり、左右に引っ張った。

「お前にだけは言われたくないな。ええ？　この伸びっぷり、餓鬼の頬っぺたとまるっきり変わんねぇぞ」

「い、いひゃい……ひゃめ、ひゃめろっへ……」

が、すぐ傍（はた）でじゃれ合う二人には一瞥もくれず、ジードはただ沈鬱に黙り込んでいる。レミットをようやく解放するとホルツェンはやや声を落としてそんな彼に訊ねた。

「ジード。……まだ、彼女の行方はわからないままなのか」

「――ああ」

彼はそれだけ答えた。

あの冬の日、ウェス・ゴート邸で未明が消えてから、もう半年近くが経とうとしていた。自分の目の前で白い光とともに「消滅」した未明。……よもや死んだのだとは思いたくない。カシアンによって致命傷を与えられ、絶命していたはずの自分の身代わりとなって天に召されたなどとは。

彼女は必ず、どこかで生きている。ジードは一日中、気づけばイグノディアスに祈っていた。ほかにはなにも望まない。ただ、未明に会いたい。

そして二人きりで暮らしたい。ウェス・ハーシュ家を取り巻く柵（しがらみ）などにはまったく関わりのない場所で。もしも再会することができたなら、その瞬間に自分は、家も名誉も大学府の掟もすべて棄て去るに違いない。

正気を保てているのが我ながら不思議だった。おそらくは、未明を探し出すまでは狂ってなどいられないという自負のためもあるのだろう。ジードは額に拳をついた。

「そういや、ウェス・ゴート家の方は、『取り潰し』まではいかなかったんだよね」

レミットがつぶやいた。

「ああ。多少の領地没収と、現当主のウェス・ゴート卿の、国政参加に対する限定的な制限措置だったっけな。……俺は甘いと思うけどな。国家への転覆罪と変わらねぇだろ？　彼らのしたことは」

ホルツェンの言うのももっともだった。だが、思った以上に軽いお咎めで済んだのには理由があった。ウェス・ゴート家という頭抜けた家格のなせるわざ。それに加え、冒涜罪の根拠として押収された「黒の経典（ザモド）」に、なにも内容が記されていなかったためというのが大きい。気の触れた副神官によって引き起こされた茶番劇、そういった方向で事態は収束していったのだった。

「で、カシアンは……このままじゃ復学できても留年は免れないけど……」

「転地療養中って聞いたな。まぁ、あいつはもとからちょっと不安

定なやつだったから、治すにしても長くかかるんじゃないか？　けどもし本人に復学したいって意思があるなら、戻ってくるための受け皿を用意しておくのは、俺はいいことだと思うぜ」

意外なせりふにレミットは目を見開いた。

「やけにやさしいじゃん。ホルツェン、カシアンのこときらってたんじゃないのか」

「好きじゃねぇよ、確かに。けど、あいつの家もけっこう複雑らしいからさ。ろくでもない親や家族に振り回されるしんどさは、そこそこわからないでもないしな」

ホルツェンは咳払いをしながら答えた。レミットは噴き出した。照れを誤魔化そうとしてか、ホルツェンの拳がレミットの頭に飛んだ。その時、彼らのテーブルに誰かが近づいてきた。

「――レミット・ウォーザロワ・キッファン。すぐに講堂の応接室に来てください。お客様がお見えです」

それは執務局の職員だった。レミットは首を傾げた。

「お客？　誰？」

「ご親戚の方とおうかがいしました。先ほどからお待ちでいらっしゃいます。お急ぎください」

それだけ言うと職員は無表情に去った。レミットは頭を掻きながらも席を立った。……親戚？　うちの？　ツェノワからわざわざ？　が、講堂に設えられた来賓用の応接室に足を踏み入れた彼を待っていたのは、およそ思いもかけない人物だった。

「お待ちしてましたわ、キッファン様。……いえ、レミットとお呼びしても……よろしくて？」

そう言って衣擦れの音も麗しく腰を上げたのは、あのノルド家の姫君、レノラ姫だった。波打つ見事な金髪、きらきらと輝く紫水晶の双眸。彼女はあふれんばかりの笑顔を湛えて自分を見ている。レミットの目が文字どおり点になった。親戚って……どこがだよ、あの大嘘つき！

「あ……あの……は、はい、もちろん……」

彼は上ずった声で答え、生唾を飲み込んだ。――やっぱり、こんな美女、ほかには見たこともない。

「レミット、どうぞお楽になさって。あの……実は、わたくし、あなたにお訊きしたいことがあってお呼び出ししたんですの。ご迷惑だとは思ったのですけれど」

「そそそんな、迷惑だなんて！　ぼ、ぼくに答えられることならなんだって、ええ、レノラ姫」

レノラの瞳が鋭く光った。

「嬉しいわ。あなたは本当のお友達ね。……訊きたいことというのは、オルグ・ジードのことなんですの」

「へ？　ジードの……こと？」

レノラは肯いた。

「去年の初冬、ソフォモンドの学内対抗戦が行われた日ですわ。ジードが対戦相手に怪我をさせられてしまったことがあったでしょう。それでわたくしが医務室で彼に付き添っていた時、あなた、こうおっしゃったわ。……いくらでも相手はいるんだから落ち込むな。そう、ライゾック家の子息の方が言っていたと」

「え……ああ……」

レミットはぼんやりと記憶を辿った。そういえばそんなことがあったような気もするが……この美しい令嬢はいったいなにを言いたいのだろう。

「彼……ジードには、誰か……好きな方がいたんですの？　そのお話ぶりからすると、そうとしか思えないのですけれど」

ここにいたってようやくレミットにも話の趣旨が読めてきた。ようするにレノラは嫉妬しているのだ。ただその相手が誰かは彼女自身つかめていないに違いない。わかっていないからこそ自分に訊ねているのだろうから。

「えーと……でも、その……」

彼はもごもごと言葉を濁した。自分が話してしまっていいものだろうか。それにはっきりと知っているわけではない。むしろホルツ

ェンの方が、そういうことについては把握していそうな気もするのだが。

「ライゾック様に訊ねてもはぐらかされてしまいましたの。……頼れるのはあなただけなんですわ、レミット」

レミットの心臓が跳ね上がった。レノラの、白くやわらかで少しひんやりとした両手が、不意に自分の手を取ったからだ。彼女は目を潤ませて迫ってきた。

「お願いですわ。あなたはお友達でしょう？　わたくしを助けると思って、ね、お話しになって」

レミットは全身真っ赤になった。そして喘ぐように口を開いた。

「メ……メイドらしいんです、ジードの家の。異国から来た、見慣れない容姿の……ぼくも実際に会ったことはないけど、そりゃ可愛い子だって……あ、いや、ともかく、ジードのやつ、その子のことがずっと忘れられないみたいで。ただ……この前の、ウェス・ゴート家の醜聞に巻き込まれて、いま行方不明って聞いてます。だからあいつ、めちゃくちゃ落ち込んじゃって……」

レノラの手――いや、その貝殻のような爪の先に力がこもり、レミットは思わず眉を歪めた。

「そう……そういうことでしたのね。外国人のような顔立ちの……それで、その娘、名前はなんというんですの」

「いや、あの、名前までは聞いたことないんです。それはホルツェンかジード本人じゃないと」

レミットは手を引っ込めようとしたが、レノラは彼を逃がそうとしなかった。が、すぐに彼女の表情は、もとの穏やかな令嬢然としたものに戻った。彼女はにっこりと微笑した。

「お礼を申し上げますわ、レミット。話してくださって本当に嬉しいわ。……そう、もうひとつお願いがあるんですの。わたくしと今日、ここでお会いになったこと、誰にも言わないでいただけるかしら。もちろんジードにも」

その、花がこぼれるような笑みはやはり美しく、レミットは操り

人形さながらに肯くしかなかった。レノラの胸のうちに燃え盛る激しい炎になど気づく術（すべ）もなく。

# 第七話　ふたたびの異世界

ゾデュー・エリアック・ウェス・ゴート卿と共謀し、世界をその手中に収めようと企んだラルモ・オルヌ。彼がそもそもそんな大それた陰謀を抱くきっかけになったのは、イシオス神殿の近くにある古代遺跡、フェロキオンだった。

神代語で「闇」を意味するフェロキオンは、さらに古い時代に作られた古代人の祭祀遺構だというのが現代の定説である。光を表すイシオス神殿と対になる存在として信仰の対象にもなっているこの場所で、オルヌがある日偶然見つけたのが、禁じられた聖書――「黒の経典（ザモド）」だった。

そのオルヌが失脚し、副神官がいなくなってしまったいま、フェロキオンの日常的な管理を誰がするか。結局そのお鉢は、もっとも下っ端であるシグルに回ってきたのだった。

とはいえ、午後から日の入りにかけて人気（ひとけ）のない古代遺跡を散策するのは、シグルにとってはひとつの楽しみでもあった。そんなわけで、じきに真夏が来ようとしているこの日の夕暮れ、彼は掃除道具を片手に独りフェロキオンを訪ねていた。

地下三十数トーティ（約十メートル）の場所に位置するフェロキオンは、百五十年ほど前の地震によってその埋もれた入り口が発見されたという経緯を持つ。中央にあるのはいわゆる巨石遺跡で、九つの巨大な石が環状に並べられており、また東に向かって通路らしき空間があることから、その信仰対象は太陽神であるとも言われている。そして、その太陽神がイグノディアスの前身となっているというのが、考古学者たちの唱える通説だった。

シグルは箒を手に、ゆっくりと遺跡に歩み寄った。年に二回の祭祀期間を除き、この離れ島には通常、一般人が立ち入ることはでき

ない。基本的に独りを好む彼にはもってこいの仕事場といえた。

「おや……？」

彼は眉を寄せた。巨石と巨石の間に、なにか、見慣れない白いものが横たわっているのが見えた。白獅子（ホノマ）だろうか？　いや、あれはこの島にはいまはもう生息していないはずだが……。

「これは……」

彼は息を呑んだ。それは人間だった。奇妙な白い服をまとった、十五、六くらいの若い娘が、うつ伏せに倒れ込んでいる。シグルは恐る恐る手を伸ばし、彼女に触れてみた。

恐ろしく冷たかった。夏を迎えようとしているというのに、彼女の髪もその服も、すべてが冷え切っていた。

そう、まるで、たったいままで――真冬の国にいたかのように。

シグルは娘を抱き起こした。痛みがあれば声を上げるだろうから、怪我はないようだ。それにしてもなぜこんなところに……その上、この娘の身につけている、おかしな着物はなんなのだろう。つるつるした手触りの、白い大きな防寒着のようだが、いまは夏だ。足元にはブーツのような靴を履いている。そして、女だというのに、生地の硬そうな青いズボン。

「君……君、大丈夫ですか、君」

彼はすっかり途方に暮れながらも声をかけてみた。頬に手を当てると温かく、生きていることはわかる。こげ茶の混じった長い黒髪――きっと瞳も黒いのかもしれない。少し変わった顔立ちだが、つややかで透明感のある肌といい、小さく整った鼻梁（びりょう）といい、決して醜くはない。

いや、むしろ、かなり可愛らしい。

「……ん……」

ごくかすかな声が聞こえ、娘の薄い瞼がぴくりと動いた。意識を

取り戻そうとしている。シグルは続けて呼びかけた。
「君、君……ああ、だめだ。また落ちてしまったらしい」
ふたたび反応がなくなった娘を見て彼はつぶやいた。仕方がない、ここに放置していくわけにいかないし、と彼は娘を抱き上げ、そのあまりの軽さに驚きながらも、フェロキオンを出、神殿の近くに構えている彼の居住へと向かった。

目を開けると、そこには知らない男の人がいた。
お坊さんを連想させる、きれいに剃り上げた頭に、独特なデザインの黄色い修道着のようなものを着た、二十歳そこそこくらいの若い男の人。

――あたし、死ななかったんだ。ていうか、崖から落ちたのって……夢？　それとも、もしかしてこの人が助けてくれたのかな。

男の人はほっとしたようだった。あたしは慌てて身体を起こした。
八畳ほどの簡素な部屋だ。木造のシンプルなライティングデスクにチェア、それから、ざらっとした手触りの布を組み合わせたキルトのようなカバーのかかったベッド……の上にあたしは乗っかっているみたいだ。
「すみません、ありがとうございます。あの、ここ……あたし……」
彼の顔に戸惑いが広がる。その理由はすぐにわかった。
「……君、異国の人でしょうか？　ああ、弱ったな、言葉が通じないのか……」
あたしは咄嗟に――自分でも知らぬ間に答えていた。
「言葉、わかります。ありがとう、あなたが助けてくれた、あたしのこと」
そして自分で自分に心底驚いた。どうしてこの言葉が理解できる

のか。英語でもドイツ語でもフランス語でもない。中国語でも、南方系の言葉でもない。要するに、まったく知らないはずの言葉なのに――どうして？

「言葉がわかるんですか？　それはなによりだ。……でも、外国人には違いないようですね。君、いったいどうしてあんなところに倒れていたんです？　それに、その恰好……いまは夏だというのにまるで真冬の国からやってきたみたいに見えますが」

彼はしげしげとあたしを眺めた。夏？　そんなばかな。あたしは蓼科にいたはずだ。瀬川君の実家のペンションに。で、すぐ近くにある廃隧道を夜訪れて、向こう側に出たら……そこは崖で……。

「あの、ここ、どこですか。蓼科？　それとも、えーと……軽井沢？　あの、長野……です、よね」

あたしの言葉はどんどん尻すぼみになっていった。男の人の表情がみるみる曇ってしまったからだ。

「……ここはキニッサの離れ島で、ハーマッド島というところです。イシオス神殿のある……イシオス神殿はわかりますか？　……ロマド市は？」

あたしはぶんぶんと首を横に振った。なんで？　ここ、外国なの？　あたし、長野にいたはずなんだけど。

「あたし、日本人です。ここは日本じゃないんですか？　ヨーロッパ？　トルコ？　……アジア？」

彼は立ち上がり、いったんどこかへ引っ込んだ。そしてコップと水差しを持って戻ってくると、水を注いであたしに差し出した。気を落ち着けて、とでも言いたげな感じだ。

「ゼーレンディア合陸連邦の南端に位置するロドア大陸ですよ。……どうやら君は、この五大陸以外の国からやってきたみたいですね。しかし、現在のところ連邦の国交範囲はごく限定されているわけだし……つまり、その……」

密入国者。そう言おうとして止まったようだった。あたしはまたしても首を横に振った。

「違います。パスポート、持ってないけど、こっそり入り込んだのと違います。あたし、蓼科で、トンネルの……崖から落ちて……気づいたら、ここに……」

男の人の表情には困惑がにじみ出ていた。でもそれは、あたしだって同じだ。

ゼーレンディア合陸連邦？　そんな国、聞いたこともない。どこか地球の果ての方にある極小国だろうか？　確かにあたしは地理にはあまり明るくないけれど、それにしても……いや、それにロドア大陸って？　ていうか五大陸って……言うまでもないことだけど、地球上に存在するのは、五じゃなくて六大陸でしょ？

「――私はシグル。シグル・ノディオと言います。イシオス神殿に仕える、まぁ……下級神職ですね。よければ、君の名前を教えてもらえませんか」

混乱に陥っているあたしを見かねたように彼は言った。あたしは条件反射的に答えていた。

「……ミハル。ミハル・クゼです」

もっとずっとあとになってから、あたしは折りに触れてこの日の出来事を思い出すことになる。

そう、この世界に、ふたたび召喚された運命の日のことを。

けれど、この時はまったく、あの「神様」と交わした会話のことなんて、欠片も脳裏を過ぎりはしなかったのだ。

――もちろん、彼……オルグ・ジード、のことも。

# 第八話　望まれ得ぬ再会

フェロキオンに倒れていた異国の娘を介抱したあと、シグルはイシオス神殿に赴いた。彼女のことをノルド神官長に報告するためだ。

神官長の居室である「玉璧の間」の前に立ち、ノックをしようとした時、室内から聞こえてきた女性の声に、シグルの頬が紅潮した。

「……お祖父様からよくおっしゃっていただきたいんですわ、あの人に、ジードに。両家の血統を護るためには、わたくしたちの結婚がどうあっても必要だと」

彼女の口調はいつになくいきり立っていた。シグルは、振り上げた手を止め、しばし中の様子に耳を傾けた。

「わたくし、わたくし、幼い頃から心に決めておりましたわ、ジードの妻になることを。それはお父様も同じでいらっしゃるはずです。お祖父様だって……」

感極まったのか、その美しい声が潤み始めている。シグルの胸が震えた。

「落ち着きなさい、アーシア。我がノルドとウェス・ハーシュとのつながりは、お前が思うほど単純なものではない。すべては偉大なるイグノディアスの思し召しのままに……お前も姫巫女の血を引く者ならば、いずれはわかろう」

「そのとおりですわ、わたくしは姫巫女です！　ですからジードの妻にはわたくし以上に相応しい女など、いはしません」

ヒステリックな一言が放たれたかと思うと、荒々しい足音とともにドアが開いた。予想に違わず、興奮に赤らんだ顔のレノラが現れ、シグルはうろたえた。

「あ……あの、レノラ姫……」

レノラは彼には一瞥もくれずに足早に去った。シグルは思わずそ

のあとを追いかけていた。
神殿を出たところでレノラは立ち止まった。そして唐突に振り向くと、シグルの胸に身を投げ出し、しくしくと泣き出した。
「レ、レノラ姫、いったい……どう……」
彼の心拍数はいっきに高まった。恐る恐る、右手をレノラの細い肩に触れさせる。すすり泣きは止まない。シグルは意を決し、両腕を彼女の背中に回して力を込めた。

身分違いの恋。十三になる頃には、そのことを厭というほど自覚していた。シグルは孤児だった。ロマドのとある養護院で暮らしていたところをノルド神官長に見出され、お半下（はした）としてイシオス神殿に引き取られたのは六つか七つの時だ。幼年ながら聡明で働き者の彼は年長の神官たちにも可愛がられ、じきに祭祀行事にも参加が赦されるようになった。神官長の孫娘である姫巫女、レノラと初めて出会ったのも、フェロキオンで行われる祭祀の儀がきっかけだった。
シグルは一瞬で彼女に心を奪われた。これほど美しく汚れなく清らかな少女は見たことがなかった。その隣にいる許婚だという凛々しい少年の存在にも関わらず。
叶うはずもない恋だ。それでも彼は敢えてあきらめようとはしなかった。ただ、気の済むまでレノラの幸せを祈ろう。ウェス・ハーシュ家の次期当主だというあの男といずれ結ばれる日が来れば、自分は心からの祝辞を彼女に捧げよう。そうずっと思っていた。
レノラは傷ついた小鳥さながらに肩を震わせ、嗚咽を漏らしている。シグルはできる限り息を整えてから訊ねた。
「姫……いったい、なにがあったのです。なにがあなたをそこまで……」
「……誰も、わたくしの気持ちなど、わかってはくれませんわ。わたくしの気持ちなんて……」

彼女は小声で言い捨てた。シグルは思わず強い口調で反駁した。
「なにをおっしゃるんです。私がいます。私は、なにがあってもあなたの味方です」
すると反応があった。レノラは顔を上げ、涙に濡れた瞳を細め、弱弱しく微笑んでみせた。
「……嬉しいわ。そう言ってくださるのはあなただけね、シグル」
シグルの胸が締めつけられる。おそらく、レノラは、許婚のオルグ・ジード卿とのことでなにか悩みを抱いているのだろう。あれほど似合いのカップルに見える二人ではあるが、いまはなにしろ婚儀を控えたデリケートな時期だ。シグルは重ねて言った。
「私は誰がなんといおうとあなたの力になります。ですからどうか、姫、元気を出してください。……そうだ、もしよろしければ、私の家に寄って行かれませんか。ユニス茶をお淹れします。少しは気が落ち着かれるでしょう」
夏の日差しは傾き始めていたが、ここからキニッサに戻るには船で四半刻（約三十分）もかからない。むろん帰りは送る。そう告げると、レノラは無言で肯いた。

海沿いに建つ小屋の扉に手をかけたところで、シグルは唐突に先刻の娘のことを思い出した。そもそも彼女の処遇について神官長の指示を仰ぐつもりで神殿に向かったのである。彼は言った。
「そう、実は、先ほどちょっと不思議なことがありましてね。フェロキオンで変わった拾いものをしたんです」
レノラは怪訝そうに眉根を寄せた。
「拾いもの、ですって？　なんですの？」
「お見せしますよ。……と言っても、正確にはモノではないんですが」
悪戯っぽく笑ってから扉を開ける。室内に入ると、果たしてあの

娘は所在なげにベッドに腰掛けていた。
「ただいま、ミハル。すまなかったね、独りにさせてしまって」
娘――未明は慌てたように立ち上がった。不安に襲われていたのか、顔色がひどく悪い。
「いえ、すみません、あたしこそ図々しく」
シグルは彼女を手で制しながら、続いて入ってきたレノラに向かって言った。
「レノラ姫、彼女はフェロキオンに降臨した妖精です。名前はミハル。どうも異国から来たようなんです」
レノラの耳にはシグルの言葉は入っていなかった。――いや、娘の名前だけははっきりと聞こえていた。
ミハル。
それは忘れもしない、あの日ソフォモンドの大将戦を隣席でともに観戦していた、黒い道衣（ドゥーグ）の娘だった。
そしておそらくは、オルグ・ジードの心を彼女から奪ったに違いないウェス・ハーシュ邸のメイド。
紫水晶の瞳に、収まりかけていた焔（ほのお）がふたたび渦巻き始めた。

# 第九話　動き出す気配

従兄、オルグ・ジードは自分との結婚を望んでいない。それは先日、彼をキニッサの屋敷に招いた際、残酷なほどはっきりと突きつけられた事実だった。自分の言葉にはもはや耳を貸してくれない。レノラはそう思い、父や祖父の力を借りることを思い立った。だが、ノルド神官長の娘婿である実父、エピネル・コルシオス・リン・ノルド神官は、オサイオン市で行われている中央会議（サミット）に出席中のため談判が叶わなかった。

神官という職位がついてはいるも、彼は実際には市議員の一人に過ぎない。もともと神職とは所縁のない家の出身だ。それなりに名誉欲はあるものの、娘ほどには貪欲になりきれず、と言って家長らしく手綱を捌くことにもいまひとつ不器用な、要するにごく当たり前の小市民タイプ。それがエピネルという男だった。

そんな彼が頼り切っている相手というのが、縁戚関係にあるウェス・ハーシュ家現当主のオルグ・ヴィネックだ。

「実際のところヴィネック卿、あなた、どう思うね？　あれは過剰防衛というか、費用対効果が弱すぎる気がするんだが。大体、恒久手形の複製など、そう簡単にできるとはとても……」

今回の主要議題は、連邦周辺に散らばる離島の一部住民及び放浪民（ツィゼット）たちによる、一連の越権行為に関する対策だ。領海侵犯、密入国、そして紙幣や旅券の贋造。だが旅券について言うなら、ジョーカー的存在である恒久手形の場合、極上の草髄紙（フェノメット）を何十にも重ね、さらに特殊な技法で神の祝詞を透かし彫りにする。いかに腕のいい贋造師といっても、これを作り出せるほどの技術を持った者などそうそうはいない。

オサイオン市長の渋い顔に、ヴィネックはすまして答えた。

「備えるに越したことはないんじゃないか？　取り締まる側と造り出す側はいつでもいたちごっこなんだ。やつらの技術は日に日に上達しているっていうしな。恒久手形は発行歴が明瞭だ。ばか正直にコピーを使うことはまさかなかろうが、本質はそこじゃない。あれを複製するだけの技術を誇示してくるかもしれないってことだからな」

「ああ、そうだね、ヴィネック。まったく君は慧眼（けいがん）の持ち主だな」

すり寄るようなエピネルの言葉にもヴィネックの表情は変わらない。オサイオン市長は心なし冷たい視線をそんなエピネルに注いだ。それからふと思い出したのか、声を落とし、ヴィネックに囁いた。

「……小耳に挟んだんだがね。その『天上の切符（イグノード）』に関する噂だ。あなたの――ウェス・ハーシュ家に滞在していた客人が所持していたっていうのはいったい、本当の話なのかね」

ヴィネックはけろりとして返した。

「本当なわけがないだろう」

「……しかし、現に審議院の連中は――」

「棺桶に片足を突っ込んだようなやつらの言うことだぞ。権威を独り占めにしておきたいってだけさ」

市長は黙った。十二名のメンバーからなる審議院は、連邦の最高決裁機関であり、あらゆる超法規的特権の発動が認められている。「天上の切符」もそのひとつで、これを発行するということは、すなわちその所持者に対する永劫的な免罪を認めることを意味している。

「その根拠はあやふやなもんだ。イグノディアスの寵を得（う）るに値する人間であるかどうか。審議院がどうやってそいつを定めているのかはいまもって謎なんだからな」

とはいえ、皮肉なことに、ヴィネック自身の彼らに対する受けはなぜか良く、次に発行対象となるのは彼に違いないというのが議会筋でのもっぱらの評なのだが。ヴィネックは大仰に両手を広げてみせた。

「それはまぁ、ともかくとしてだ。目下の問題は連邦への越権行為の取り締まりだろう。対策としてはお決まりっちゃお決まりだが、周辺の海路関（かいろせき）の対応を厳しくする――場合によったら新たな通行証を設けるくらいやらなきゃだめだろうな」

思案げに肯くオサイオン市長を見やりながら、こちらは欠伸交じりにつぶやくヴィネック。

「それで……なんと言ったっけ？　やつらが生み出した独自のネットワークってのは」

「インヴォルタン。……聞き慣れない言葉だろう？　『夜明け』とか、そんなところを意味するらしい」

彼は苦々しげに言い捨てた。

こげ茶混じりの黒髪に夜空を宿した瞳。幼いが、どことなく神秘的な雰囲気を漂わせる顔立ち。

レノラは身じろぎもせずに目の前の少女を見つめた。

ミハル。……この娘に間違いない。

だが、やがて彼女はひとつの違和感に気づいた。

「ミハル、こちらはイシオス神殿を治めるノルド神官長の令嬢、レノラ姫です」

そうシグルに紹介を受けた少女は、ぎこちない表情を自分に向けている。

――半年前、大学府で会っているというのに。そのことを彼女は憶えていないのだろうか。訝しく思いながらもレノラは瞳を細め、ドレスの裾を持ち上げて貴族風の挨拶をした。

「……初めまして、フロンジーネ・ミハル。アーシア・レノラ・リン・ノルドと申します。どうぞ、レノラとお呼びくださいな」

このせりふは二度目だ。けれど相手にとってはそうでもないらしい。

「あ、は、初めまして、レノラ……さん。ミハル・クゼです」
含羞んだような微笑みが返された。やはり、間違いない。
彼女は完全に自分を忘れている。——忘れている？
「シグル、あなたさっき、フェロキオンで彼女を拾ったっておっしゃったわね。あれはどういう意味ですの」
「言葉のとおり、そのままの意味ですよ。掃除のためにフェロキオンを訪れたところ、石柱と石柱の間に彼女が倒れていましてね。言語は解するものの、この合陸連邦に関する知識をミハルはまったく持っていないんです。記憶喪失かとも思ったんですが……」
彼はそこでちらりと少女を見た。
「それだけとも思えません。……この服装はどう見ても冬のものだし、それに……異質だ」
白い防寒着の下には、細かな撚糸（よりいと）で編まれた赤い長袖の着物。さらに男のような濃青（のうせい）のズボン。五大陸すべてを回っても、こんな衣装風俗はどこでも見られないだろう。
レノラは我知らず唾を飲み込んでいた。そしてシグルに訊ねた。
「それじゃあ、彼女……フロンジーネ・ミハルは、ロマドに関する知識も、全然、なにも、持っていないということですのね？」
「ええ、むろん」
シグルは力強く肯いた。そこで慌てたように言った。
「ああ、私としたことが、あなたを座らせもせずに戸口に立たせたままにするなんて……申し訳ありません、レノラ姫。さあ、どうぞ中へ」
彼は恭しくレノラを促した。彼女に遠慮しているのか、娘はおずおずと後退（あとずさ）る。レノラはその細い手首をすかさず握った。
「ミハル、わたくし、あなたともっとお話がしたいわ。ねぇ、そんなに緊張なさらないで。あなたのこと教えてくださらない？　さ、ほら、お座りになって」
少女の顔には親しみに勝る戸惑いの色がじんわりと浮かんでいる。
レノラは努めてやさしげに微笑んだ。

――なんという好機だろう。ここで出会ったのはきっと、天運だ。そう、祖父の言う、イグノディアスの思し召しに違いない。

「それで、あなた、どこからいらしたんですの？　ここいらはとうに夏ですのに、なぜそんな恰好で」

シグルの淹れたユニス茶を優雅にすすりながらレノラは訊ねた。

「……あの……きっと、知らないです、言っても。そこ、冬だったんです。だから、みんなこういう服を着ていた」

彼女はどこか恥ずかしそうにそう答えた。あの時と同じく、不自然なイントネーションだ。

五大陸には時差も時節の差も存在しない。ということは、彼女はやはり、異国出身の放浪民なのか。それがどういう経緯でウェス・ハーシュ家に引き取られたのかは不明だが、理由などいまさらどうでもいい。

「神官長に目通りをお願いしようと思っているんです。いまの時期、フェロキオンには一般人が近づくことはできない。それなのに彼女はあの場所に突然現れた。私にはわかりかねますが、もしかしたらなにか、神学的な意味があることなのかもしれません」

シグルの言葉を聞き、レノラは意味深な笑みを浮かべた。

「そうね、お祖父様ならきっと、最善の策を与えてくださるわね。明日、イシオス神殿にはわたくしもご一緒しますわ」

そして窓の外に視線をやり、慌しい調子でこう言った。

「いけない、すっかり遅くなってしまいましたわ。シグル、わたくし、そろそろキニッサに戻りますわね。送ってくださるかしら」

拒否されることなど微塵も考えてはいない口ぶりだ。シグルは魅せられたように肯き、立ち上がった。

「それじゃあ、ミハル、またお会いしましょうね。行きましょう、シグル」

レノラはとびきりの笑顔を少女に向けるとシグルのエスコートで

小屋を出た。木製の簡素なドアが閉まるなり、その表情が変わった。シグルを引き寄せるようにして腕を絡め、声を落とし、緊張を装って囁く。

「……恐ろしいわ。恐ろしいことだわ。わたくし、気づいてしまいましたわ」

ただならぬ様子に青年は薄い茶色の眉を潜めた。

「どうなさったんです、姫」

「――あの娘、悪霊の化身ですわ。イグノディアスに害をなす、恐ろしい悪鬼（フィドラ）。間違いありませんわ」

シグルは仰天した。思ってもみなかった言葉だった。

「姫巫女たるわたくしにはわかります。それに、民間の者は立ち入ることのできないはずのフェロキオンに知らぬ間に入り込んでいたというのが、そもそもおかしいですもの。……なんとかしなくては。でなければ、このロマドに……いえ、連邦全体に恐るべき災厄が降りかかるでしょう」

シグルの顔が強張った。彼は唾を飲み込みながら言った。

「では……一刻も早く、神官長にご報告を……」

「それはだめですわ」

レノラの腕がいっそう強く彼の腕に巻きついてきた。シグルは狼狽し、それでもどうにか平静を保ちつつ訊ねた。

「なぜです？　そういうことであれば、誰よりも神官長が対処の方法をご存知のはず。私などが言うのもおこがましい話ですが、誰よりも高徳なお方なのですから」

「イシオス神殿にあの娘を近づけてはだめ。穢れが入り込んでしまいます。神殿内で、あの娘のことを口にするのも同じことですわ」

彼女は威厳をもって言い放った。すべては出まかせだ。

あの娘をこの世界から消し去るための。

「で、では……いったい、どうすれば」

姫巫女としてのレノラを信じ切っているシグルの態度に、レノラは満足げな笑みを浮かべて答えた。

「――わたくしに考えがありますの。協力していただけますわね、シグル」

夕陽を背に、そう言って佇む彼女の姿は思わず見惚れるほど美しく、シグルは跪いてその足元に接吻をしたい衝動を押し殺しながら、こくりと肯いた。

# 第十話　謀略

シグルさんに続いて部屋に現れたのは、びっくりするほどきれいな女の人だった。

ふんわりと波打つワンレンの金髪に、一点の曇りもない真っ白な肌。磨き抜いたアメジストを填め込んだみたいな瞳。ファンタジー映画に出てくるお姫様そのものだ。どこかで会ったような気が一瞬したのは、きっと昔観たその手の映画のせいなんだろう。だって、あたしがこの人のことを知っているはずはないのだから。

シグルさんが言うには、彼女はすごく位の高い巫女なんだそうだ。事実、彼はその女の人のことを姫と呼んでいる。……あたしは軽い眩暈を感じた。ここは確かに日本じゃない。言葉も文化もまるっきり違う。でも……じゃあいったい、どこなんだろう。地球上のどこか――それともまさか、地球ですら……なかったりして？

「大丈夫ですの？　顔色がお悪いようですけれど」

バラに似た香りのする青いお茶をすすりながら、心配そうに彼女があたしを覗き込む。あたしはなんとか笑顔を作ってみせた。笑顔に見えるなら、だけど。

「心配なさらないで。わたくし、必ずあなたのお力になりますわ、ね、ミハル。このシグルも、わたくしの幼友達なんですけれど、お祖父様……神官長の補佐をしている、とても優秀な人ですの。ですからそんな顔をなさらないで、すべてわたくしたちにお任せになって。ね」

レノラさんはそう言ってあたしの両手を取った。見ず知らずのあたしに対する親切でやさしい言葉――のはずなのに、なぜだかあたしは身震いしていた。

脈絡もなく、悪寒のようなものを感じたせいだった。

そのあとしばらくして、レノラさんはシグルさんに見送られる形で帰っていった。一時間後に――半刻と表現するらしい――戻ってきたシグルさんは、なにがあったのか、ものすごく顔色が悪い。心配になり、あたしは訊ねた。

「あの、大丈夫ですか。顔、青白い。具合、悪いみたい」

「……いえ、そんなことありませんよ。灯りのせいでしょう。大丈夫です」

彼の額には脂汗が浮いていた。それが灯りのせいのはずはない。いったいどうしちゃったんだろう。でも、それ以上訊くなと言わんばかりに、シグルさんは話題を変えてしまった。

「ミハル、しょ――食事にしましょう。お腹が空いているでしょう。口に合うかわかりませんが、支度をしますから、そこに座っていてください」

抗うわけにもいかず、あたしは肯いた。彼は無理やり笑顔をこしらえると別の部屋に消えた。

＊　＊　＊

使用人専用の食堂から、一階西端の自分の部屋に戻り、ドアを開けると、そこには彼がいた。

ライティングデスクの上に置いておいたノートをぱらぱらとめくっている。彼はあたしに気づき、少し決まり悪そうな笑顔を浮かべた。

すまない、勝手に入ってしまった。そんなようなことを言われ、あたしは思わず首を横に振っていた。大陸共通語（イーザリア）を教えてくれるという好意に甘えているのはこっちの方なのだ。それもこのお屋敷の御曹司相手に。ドアを閉め、室内に入る。彼は立ったままあたしを手招きし、ジェスチャーで着座を促した。

チェアに腰掛けてノートを開き、今日の『講義』が始まる。命令と依頼の構文の差について、彼はイラストを添えながらわかりやすく教示してくれた。低く甘いその独特な声はとても聴き取りやすく、そのためか上達のスピードは自分でも信じられないほどだった。あたしは感謝を込めて彼の横顔を見つめた。いまの状況を打破するためにも情報収集は欠かせない。言語が理解できれば、それだけ帰り道を探し出せる確率が高くなるはずだ。

不躾な視線に気づいたのか、彼がふと顔を上げる。あたしは慌てて目を逸らした。……なんだか妙な空気が流れる。あたしの不審な態度のせいだろう。

なんでもないです、ごめんなさい――語彙を掻き集めて弁解したけれど、彼は講義を再開しようとしない。気分を害してしまったのかもしれず、緑がかった青い瞳でじっとこちらを凝視している。……そういえば、いままでにもなんどかこんなことがあった。それ以上どうしたらいいかわからず、あたしはうな垂れてしまった。

ごめんなさい。今夜は、もう、ここまででいいです。そういうつもりであたしは立ち上がった。ところがその時、唐突に右手をつかまれ、動きを封じられてしまった。あたしは戸惑った。……本当に、怒ってしまったんだろうか。

彼はあたしを見つめたまま、早口でなにかをつぶやいている。知らない単語ばかりで聴き取ることができない。彼の手に力がこもり、あたしは思わず身をよじった。

椅子から腰を上げ、あたしを素早く引き寄せると、その両腕はあたしの背中にしっかりと回された。間髪を入れず、彼は囁いた。

＊　＊　＊

どこからともなく聞こえてくる水音が、あたしを眠りの世界から

現実へ引き戻した。

いつの間に眠り込んでしまったんだろう。それに……風変わりな夢まで見ていたみたいだ。妙にリアルで、夢とは思えないような――確か、この前、瀬川君のペンションで倒れてしまった時にも、似たような内容の夢を……見ていて……。

ぐらり、と地面が揺れ、あたしは硬い床の上で転がった。

はじめは地震かと思った。けれどすぐにそうじゃないことを知った。

あたしは、海の上にいた。

夜空との境目がわからないほどの真っ暗な海。その波間にゆらゆらと漂う、ボートみたいな大きさの木造の小船にあたしは乗っかっていた。飛び起きようとして、一枚の布が掛けられていることに気づいた。月明かりに浮かび上がる、キルトのような山吹色の――あたしは目を見開いた。この手触り、これって、シグルさんの家のベッドカバーだ。……どういうこと？　あたしはどうして、こんなところに独りでいるの？

あたしは必死で記憶を反芻した。夕方、レノラさんというあのきれいな女の人が帰ったあと、シグルさんは夕食の支度をしてくれて、あたしたちは二人で食事を摂ったんだ。千切るのに苦労するほどの硬いパンと干し肉、それに野菜のスープ。ハーブでも入っているのか、すごく変わった香りのするスープで、あたしがそう訊ねると、彼はなぜかひどく狼狽したみたいな顔であたしを見た。それははっきりと思い出せる。

その時は別になんとも思わなかった。あまり口に合わないかもしれないが、体力を回復する薬膳の一種だからぜひ食べなさい。あたしは言われたとおりスープを飲み干した。それで、そのあと……そのあとどうしたんだっけ……。

「シグルさん」

呼びかけても返事なんてあるはずがない。恐怖とパニックで身体が硬直する。夜の海。周囲には助けてくれそうな船なんてまるで見えない。もちろん陸地も。どれだけ流されたんだろう？　いつ、あたしはこの小船に乗せられたんだろう？

……どうしてシグルさんはこんなことをしたんだろう？

疑問符だけが山のように沸き上がる。それでも必死で打開策を得るため、あたしは身を起こし、狭い小船の中を這い回った。けれど、使えそうなものはなにもなかった。というより、あたし自身と一枚のベッドカバー以外、ここにはまったくなんにも置いてなかった。

幸いにも海はいまのところ凪いでいる。……でも、食べものどころか水すらないこの状態で、いったい助かることなんて可能だろうか。水を飲まなくても三日くらいなら保つかもしれない。だけどその先は？　その間に一隻も船が近くを通らなかったら？

あたしは自分の身体を抱きしめた。あの廃隧道には近づかないで――ペンションで美沙紀さんに言われた言葉をいまさらながら思い出し、その忠告に従わなかったことを心底悔いた。お母さんと榛名の顔が脳裏を過ぎる。

が、すべてはもう遅すぎた。だって、不意に襲ってきた大きな波が、あたしの乗っているこの小船の上に思いきり覆いかぶさってきたんだもの。抗う間なんて一秒もなかった。

こうしてあたしは呆気なく海の中に放り出された。

# 第十一話　決別

ここはどこなのだろう。

ジードは波間にゆらゆらと揺蕩うような感覚を心地よく味わっていた。寝台の上でも浴室でもない、どことも知れぬ場所。ゆっくりと身体を起こす。薄い黄金色の空間。どういうわけなのか、なにも衣類をまとっていない。訝しく思うよりも先に、遥か彼方を歩いていく、ぽつんとした人影を見つけた。長い黒髪と袖のない白いシンプルなドレスが風にやさしくなびいている。

……ミハル……？

彼は喘いだ。そして駆け出していた。もつれる足で転びそうになりながら、ぬかるんだ湿地のような手ごたえのない空間を必死で走った。近づいてくる気配に気づいたのか、人影がゆっくりとこちらを振り向いた。

それは確かに未明だった。懐かしさと困惑の入り混じったような彼女独特の表情。ジードは手を伸ばし、彼女を思いきり抱きしめた。

「ミハル……ミハル！　ああ……ああ、ミハル……」

それ以外の言葉が出てこない。彼は未明の小さなあごを荒々しくつかむと、そのまま唇を押しつけた。未明は目を瞑り、頬をうっすらと染めながら、ジードの行為を受け入れている。その細く華奢な両腕が、おずおずと自分の背に回されていることに気づくや彼は未明をその場に押し倒した。

そして唇を離し、瞳を見つめる。アーモンド形の夜空は潤み、星々が美しく煌めいている。ジードはかすれ声で囁いた。

「会いたかった……どれほど私がお前に会いたかったか、わかるか

？　ミハル……私はもう……お前なしでは生きていけない。お前のいない世界に残されるくらいなら死んだ方がましだ。頼むから、どこにも行かないでくれ。私と一緒にいてくれ、ずっと」

未明は微笑し、肯くかわりにこう告げた。

ジード、あなたが好き。

聞こえるか聞こえないかのようなかすかな声。だがはっきりと彼女はそう言った。ジードは瞠目した。

「ミハル、いま……私のことを……」

好き。彼女はふたたびそう答えた。ジードの、緑の混じり込んだ青い瞳が、赤く濁りを帯びていく。初めて彼女の口から聞く愛の言葉。

――もうこれ以上、惑う理由も、躊躇する謂(いわ)れもない。

口づけを繰り返しながら、手のひらを彼女の胸元に這わせる。まとっているのはひどく薄い生地らしく、その可憐な蕾は、淡雪の下から顔を覗かせる春の草々(くさぐさ)のごとく、少し尖っているのが感じられた。ジードの全身が興奮に震える。彼は迷いなくそれをくわえ、舌で愛撫した。漏れ聞こえる甘い喘ぎ。歓喜のあまりどこかへ飛びそうになる意識を懸命につなぎ止める。

ジード……あっ……ん……っ。あ、ああ……っ。

ドレスの裾をたくし上げた右手が、その内側へと侵入を果たす。彼女は下穿きを着けておらず、ももの付け根に到達した指先が直接、しっとりとした滑(ぬめ)りをとらえた。ぴくん、と敏感な女体が跳ねる。

さらに指先を忍ばせ、その場所を弄る。生まれて初めての感触だった。だが中にまで指を潜らせるのは躊躇われた。自分がそうであ

るように、未明もおそらくは未通なのだろう。彼女を「知る」役目は、あくまで自分そのものに委ねたい。ジードはあらためて囁いた。

「ミハル……愛してる。私にはお前しか……お前しかいない」

そしておのれの分身たる部分に右手を添え、未明の秘所へと押し当てた。それはいまや主（あるじ）とは切り離された別の生きものであるかのような生命力を訴え、時にびくびくと痙攣さえ起こすほどだった。その激しさに怯えているのか未明の眉がわずかに震えた。

ジード……ジード、あたし……

彼女は慄（おのの）いている。はじめての女性というのはそういうものだ、おぼろげながらそのことは彼も知っていた。愛の代償として支払わなければならないのは、行為によって与えられる痛みをこらえること。最愛の相手に苦痛を強いなければ得られない愉悦。――だが、もう、止めることなどできはしない。ジードはやさしく微笑み、ふたたび告げた。

「ミハル、お前を愛してる」

静かに腰を沈め、彼女の内側に広がる深い海の中へ、ゆっくりと潜り込んでいく。それは本当に海のようだった。果てなく続く温かい大海原――そうだ、彼女はきっと海の女神の化身なのだ。脳裏がそんなイメージで満たされ、身体中に幸福感があふれ出した。ジードはいつの間にか目を瞑っていた。

次第に感覚が薄れていき、やがて彼は目を開けた。黄金色ではない、そこにはただの暗闇があった。しばらくして見えたのはなんの変哲もない、ウェス・ハーシュ邸の自室の天井だった。

……夢……だったのか……。

圧倒的な虚無感。そして絶望感。腕の中に在るはずのいとしい温もりはどこにも見当たらない。乾いた唇を動かし、未明の名を呼ぼうとした時、背中に密着する人肌を感じた。

大量の花を煮詰めて作られる高価な香水の、ひたすら甘ったるい匂い。――怖気（おぞけ）が走った。

飛び起き、背後を確かめる。信じられない光景がそこにはあった。

「……なにをしてる」

彼は喉の奥からそれだけをどうにか絞り出した。さらさらと床の上にこぼれる金色の髪、闇の中でも妖しいほど美しく輝く二つの紫水晶――そう、その瞳は開かれていた。彼女は起きていたのだ。

「見てわかりませんの？　あなたに、会いに……来たのですわ」

ジードの従妹にしてノルド家の姫巫女、レノラは、喘ぐようにそう答えた。彼女はなにも身につけておらず、雪のような裸身が黒い空間にぼんやりと白く浮かび上がる。

夏季休暇に入ったジードがヴィネック街区の屋敷に帰省するなり、彼女も当然のようにキニッサの自邸からここへやってきた。客人ではなく次期当主の妻として、館の新たなる住人の一人として。

それでも客室はきちんと与えられたはずだ。が、レノラは悪びれもせず言った。

「わたくしたちは夫婦になるのですもの。問題などありはしませんわ」

彼女の顔は羞恥と欲情に赤く染まっている。対照的にジードの全身を貫いたのは、誤魔化しようのない嫌悪感だった。妹としてなら接することもできよう。だが彼女が自分に向けるような感情に応えることは生涯、不可能だろう。

ジードは、レノラが伸ばしてきた右手を反射的に払い除けながら告げた。

「レノラ。もうこれ以上は無理だ。私は君を愛せない。君は幼なじみで、従妹だ。それ以外の存在じゃない。わかってくれ、私には君

を受け入れることはできないんだ」
　レノラは怯む様子を見せない。露を含んだ花びらのような唇が揺れる。
「ほかに慕っている女がいるからと言うのでしょう。あなたは愚かですわ、ジード。二度と会うこともない相手に本気で懸想するなど……」
　未明の話をどこからか聞き出したのか――ジードはしかし、惑うことなく言い返した。
「必ず捜し出してみせる。彼女は必ず、この世界のどこかにいる。私は絶対にあきらめたりはしない」
　レノラは嘲るように言い捨てた。
「だから愚かと言うんですわ！　会えるはずなどあるものですか、あの女は、もう……」
　海の中。そう続けようとして我に返った彼女の手首を、ジードの手が素早くつかんだ。その形相ははっきりと変わっている。
「レノラ、まさか君、ミハルのことでなにか知っているのか？　君は……もしかして彼女に会ったのか？」
　彼女は口を噤んだが、なにかしら事情を知っているのは明白だった。ジードは重ねて詰め寄った。
「レノラ！　君はなにを知っているんだ。ミハルはどこにいるんだ。無事なのか、どうなんだ、答えろレノラ！」
「……わたくしがあの女のことなど知るものですか。いま頃どこにいるやら……せいぜい大海の塵にでもなっているのが落ちですわね」
　ジードの顔色が一瞬にして失われた。
「……なんだと」
「塵でなければ藻屑ですかしらね。ああ、それとも、深海に棲むという精霊の褥（しとね）にでもたどり着いたやら。いずれにしても生きてはいませんわ、ええ、生きてなどいるものですか」
　レノラはヒステリックに言い放った。ジードはそんな従妹の裸体を力の限り突き飛ばし、寝台から挙動も荒々しく飛び降りると部屋

を出、真っ直ぐに父の部屋へと向かった。

# 第十二話　南へ

深夜、長男であるジードがノックもなしに寝室に乗り込んできたのには、さすがのオルグ・ヴィネックも驚きを隠せないようだった。彼は寝台からのっそりと上体を起こすと、四柱に設えられた常夜灯の照らし出すか細い光を頼りに、手元のランプに火を入れた。それからようやく口を開いた。

「……坊主、お前なぁ……いったいいま何刻だと……」

「父上。いまこの時をもって、正式にレノラとの婚約を破棄します。それを申し上げに参りました」

彼は父よりも先にそう言い切った。対するヴィネックは、眠気を追いやろうとでもしているのか、しきりに眉間を揉みながら答えた。

「だから前にも言っただろう。その話は……」

「認めていただけないのならば、いますぐに私を勘当してください。いま、この場でです」

ジードは寝台の脇に片膝をつき、裁きを待つ罪人のように頭を垂れた。ヴィネックはじっとそんな息子を眺めていたが、じきにため息を吐き出した。

「――ミハルはただの娘じゃないぞ。お前、覚悟はあるのか？　なにがあってもあいつを護り抜き、生涯そばにいるっていう覚悟が」

「あります」

即答した。こんなことが以前にもあった、と内心懐かしくさえ思った。そして真っ直ぐに父の、自分によく似た緑碧の瞳を見据えた。

折れたのはヴィネックの方だった。

「一ヶ月だ。夏期休暇の間に、ミハルを捜し出してここに連れ戻せ。それができれば婚約破棄についても認めてやる。だが、叶わなかった時には、すっぱりあきらめろ。潔くウェス・ハーシュ家の長子としての責任を果たしてもらうぞ」

ジードは戸惑った。期間が短すぎる。もとより見つかるまでは何年でもかける気でいたのだ。もしも見つからなかったら、自分の人生はある意味そこでゲームオーバーだ。愛してもいない相手（レノラ）を受け入れ、心を殺してこの先五十年以上も続く余生を過ごすことを余儀なくされるのだから。

だが、彼は肯いていた。動き出さなければ始まらない。ヴィネックはにやりと笑い、さらに続けた。

「よし。捜索中は、お前の名のもとにウェス・ハーシュ家の権限を発動できるようにしておいてやろう。使えるものはなんでも使え。……ただし、きっかり一ヵ月後には戻ってくることを忘れるな」

「はい」

そう言うなりジードは腰を上げ、父に向かって一礼するとその場を辞去した。

ジードは大股に自室に戻り、寝台の上に裸のまま佇む従妹には目もくれずに、手早く旅支度を始めた。数枚の衣類、身分証明書を兼ねた旅券を小型のトランクに詰めると、今度はおもむろに着替えを済ませ、夏用の薄いマントを羽織る。そして、なにも言えずにいるレノラに冷徹な一瞥を投げた。

「最後に訊いておきたい。君はどこでミハルと会ったんだ」

彼女は黙り込んでいる。その紫水晶の双眸は見る影もなく赤濁（せきだく）し、頬にはいく筋もの涙の痕が刻まれていた。しかしジードの心はもはやぴくりとも揺れることはなかった。

返事が期待できそうにないと感じ、彼は頭を一振りするとトランクを手に踵を返した。その後姿にレノラはつぶやいた。

「……キニッサ湾の船着場ですわ。わたくしが言うとおりにシグルが動いてくれたとすれば」

ジードは弾かれたように振り返った。

「フェロキオンに倒れていたところを介抱したと言っていましたわ。……一目見てすぐにわかりましたの。半年前、大学府で会ったあの娘だと。――あなたが恋している、行方知れずになったウェス・ハーシュ邸の侍女だと」

レノラは淡々と、まるで独白するかのように語った。ジードはじっと彼女を見つめた。

「赦せなかった。わたくしはずうっとあなたのことだけを慕ってきたというのに……どうしてこんな仕打ちをうけるのか、死ぬほど悩みましたわ。どうしたらあなたの心を取り戻すことができるのか……そんな時、あの娘に――ミハルに再会して、わたくし……わたくし、自分を止めることなどもうできませんでしたわ」

語尾が震えていた。ジードは寝台に近づくと静かに腰を下ろし、従妹の頭をそっと引き寄せた。

「――すまなかった。君の時間を拘束し、無駄に追い詰めてしまったな。……本当にすまない、レノラ」

彼はレノラの額にかすかに唇を触れさせ、立ち上がった。許婚という大人同士の契約を押しつけられさえしなければ、可愛い妹だったはずの従妹だ。胸の中にやるせない想いが広がった。

邸内中央に位置する大階段を降り、玄関ホールに向かったジードの足がふと止まった。彼と同じく旅支度を整えたアドリオの姿がそこにあったからだ。

「ミハルを捜しに行くんだろう？　俺も同行させてもらう」

浅黄色のマントをまとい、扉にもたれかかった恰好でアドリオは言った。褐色の混じった黒い瞳は、不敵な光を放ちながら彼の異母兄を見つめている。

「……かまわないが、父上には伝えたのか」

「俺の部屋に手紙を置いてきた。そのうち誰かが気づくさ」

そう言って彼はにっと笑ってみせた。ジードはそんな弟を呆れ気味に眺め、やがて苦笑した。

「単騎で向かえば昼前にはキニッサに着く。まずはそこで情報収集だ」

「キニッサに？　……確証があるのか、兄上」

ジードは曖昧に首を振った。レノラはあれ以上、なにも話そうとはしなかった。キーワードとなるのはキニッサ湾の船着場。そして海。ノルド神官長補佐の青年が、姫巫女の命を受けてそこでいったいなにをしたのか。恐ろしい想像が頭をもたげる。彼は実際に赴き、それを確かめるつもりでいた。

二人は館を出、厩舎に向かうと、それぞれの愛馬に跨り、一路南を目指して出発した。

# 第十三話　漂着

ロドア大陸をさらに南下すること千二百ノール（約三千キロ）の海域は、ゼーレンディア合陸連邦にとっては完全な外海であり、連邦法の及ばない治外の地である。海流が交差しないため、海産資源も貧弱なこの辺りでは、行きかう漁船もほとんど見られない。

だが、シルフ漁を生業とする漁師にとってはまた別の話だ。

シドンは朝も暗いうちから舟艇を出し、沖に出たところで素潜りに励んでいた。シルフというのは真珠の一種で、シルフ貝と呼ばれる二枚貝の内側に形成される天然の宝石である。数自体が少ないのと殻の脆さから、海底を根こそぎ浚うやり方は向いていず、こうしてひとつひとつ丁寧に採取していくしかない。効率はきわめて悪いが、生活のためだった。どうせほかにやれる仕事などはないのだ。

そう思い、さてもうひと潜りと身を乗り出したシドンの目に、おかしなものが映った。

舟の前方十ノール（約二十五キロ）ほどの海上に、なにか光るものが揺れている。彼は目を凝らした。

……なんだありゃあ？　ランタンクラゲか？　いや、それにしちゃ、でかすぎか。

シドンはぱちぱちと瞬きを繰り返した。たまに見かける発光クラゲの仲間かと思ったが、そんなサイズではない。櫂を取り、ゆっくりとそれに近づく。薄暗い夜明けの海の上を、その奇妙なものは妖しい光に包まれながら、ゆらゆらと揺蕩っている。……彼は息を呑んだ。

こりゃあ……こりゃあ、人間だ。

そこに浮いていたのは、まだ少女と言っていい若い娘だった。血の気のないその顔は毀れた玩具人形を思わせたが、まだ生きているかもしれない。シドンは大慌てで娘を引き寄せ、両腕を伸ばして船上に乗せるとその身体をできるだけそっと舟床に横たえた。それからまじまじと――頭のてっぺんから足の先まで――見回した。

可愛らしい娘だった。だが同時に見慣れぬ顔立ちでもある。それに着ている服も珍妙そのもので、特に濃青のごわごわとしたズボンなど、生まれてこの方見たことも聞いたこともない。大体、なぜ女の身でズボンを？

しかし、それよりなにより彼を驚かせたのは、彼女がまとっている不思議な光だ。

黄金色のような桃色のような、美しくもどこかおぞましげな、なんともいえないあやかしの陽炎（かげろう）。それはほんのりと娘の身体を取り巻き、儚く揺らめきながらも消える気配はない。その時シドンは唐突に気づいた。

舟床に水滴が溜まっていない。

狭い船の上で思わず飛び退った。海上を漂っていたはずの人間が、これっぽっちも濡れていないだと？　いったいそりゃ、どういう冗談だ？

彼はあらためて娘を見つめた。よくよく観察すると、赤い着物に覆われたその胸元は、規則正しく上下しているのがわかった。――どうやら生きているらしい。

なんとも、厄介なもんを拾っちまったもんだ。シドンは途方に暮れたが、まさかふたたび海に放り出すわけにもいかない。彼は櫂を取り、ともかくも浜辺に戻ることにし、舟艇を転回させた。

青年は、やわらかな寝床の中で、ようやっと訪れた安眠を心ゆくまで貪っていた。深酒をしたせいか、かえって目が冴えてしまい、ほとんど明け方まで寝つけなかったのだ。

ヘルのやつとやったキューズァロ（※）のせいだ。あいつがイカサマなんかしやがるから……寝返りを打ち、苦々しい記憶を追い払う。だが、それも長くは赦されなかった。

「ヴァル、ヴァリー、起きてよ、起きてってば！」

甲高い声が聞こえたかと思うと、ベッドに衝撃が走った。今年九つになる同居人のゼノン少年が助走をつけてダイブしてきたのだ。これにはたまらず、青年は上体を起こすと思いきり渋い顔をこしらえて怒鳴った。

「ゼノン！　ここから放り出されたいのか、お前は？　今朝は俺が起こせって言うまで起こすなって言っておいただろう」

無茶苦茶なせりふではあったが、怒鳴られた少年の方はまったく堪えた様子もなく、澄まして用件を告げた。

「シドンがさ、なんかヘンなものを拾ったんだってさ。みんな見に行ってるけど、ここはやっぱ頭領（ヘッド）にどうしたらいいか意見を仰ぎたいから、呼んできてくれって」

青年は相変わらず不機嫌に唸った。

「ああ？　そういう話ならそっちから出向けよな。なんで俺がわざわざやつのとこまで行かなきゃならないんだよ」

「知らないよ。でもとにかく来てくれって言ってるんだから、行ってみようよ、ヴァリー」

ゼノンは言うなりベッドの上で跳ねた。青年はすかさず、短めのサロペットから覗く、子ども特有の細い足首をつかんだ。可愛らしい悲鳴が上がる。

「それ以上やる気なら今夜の寝床を他所で確保してからにするんだな。……ったく、久々に昼まで寝てやろうと思ってたっつうのに……たいしたもんじゃなかったら張り飛ばすからな」

ぶつぶつ言いながらも彼はようやくベッドから降りた。ゼノンは

好機とばかりに舌を出した。
「サビーネにふられたからって自棄酒なんかするから、寝起きが悪くなるんだよ。ほんと傍迷惑なんだから」
「なんだと、こら！　待ちやがれ、このくそ餓鬼！」
ゼノンは素早く屋外へと避難した。青年はそのあとを追って家を飛び出した。

埠頭には人だかりができていた。一人乗りの漁業用舟艇が接岸しており、どうやらシドンはそこにいるらしい。青年は、足元にまとわりつくゼノンの耳朶を引っ張り上げながら舟に近づいた。彼の出現に気づいた人々がさっと道を開け、口々に話しかける。
「頭領！　こりゃあわざわざご苦労なことで」
「しかしさすがの頭領でもこいつは見たことがないでしょう。あやかしか魔か……肝を潰しますぜ」
大概の珍事には慣れっこのはずの海の男たちが色めき立っている。彼らの様子に眉を寄せつつ、初老を迎えようとしているなじみの漁師に声をかけた。
「よお、シドン。おかしなもんを拾ったって？　いったいなんだよ、こんな朝っぱらから」
「ああ、頭領、来てくれたのか。いや、それがな、ともかくこいつを見てくれよ」
シドンの指差す先には、舟床に横たわる年若い娘の姿があった。気の毒に土左衛門か、と覗き込もうとした青年の茶褐色の瞳が、大きく瞬いた。――思わずうろたえていた。
「おい……なんだこりゃ。なんなんだ、この光は……」
娘を包み込む黄金色の光が一回りも大きくなったようだ。野次馬たちを警戒でもしているのか、その光にはまるで意思があるようにさえ思えた。おのれの主を近づく者から護ろうと、牙を剥いている。

そんな絶対的な意思が。
青年はごくりと唾を飲み込み、同伴した少年を無意識のうちに下がらせていた。静かにかがんで右手を彼女に伸ばす。ギャラリーの緊張が伝わってくる。
指先がその真っ白な頬に触れた途端、ぴくりと薄い瞼が震えた。
……生きている。
同時に、揺らめいていた陽炎が、どんどん縮んでいくのがわかった。身じろぎもせずその様子を見守る青年の目の前で、光はやがて音もなく消滅した。あとには、意識を失って倒れたままの、身元もわからぬ少女だけが残された。
「アーマンドラだ……」
誰かが惚けたようにつぶやくのが聞こえた。じきに、四方から同意する声が次々と上がった。
「そうだ、アーマンドラだ！　海の女神だ、海と戦の女神、アーマンドラだ。この娘は女神の化身に違いない！」
「これは俺たちへの祝福だ！　天は俺たちに味方しているんだ！」
声はうねりとなり、祝砲のように一帯を揺るがす。その中央に立つ青年は、ゆっくりと娘の身体を抱き上げた。そして辺りを睥睨（へいげい）し、力強く言い渡した。
「静かにしろ！　……この娘は俺の家で預かる。真実アーマンドラの化身かどうか、見きわめるためにもな」
歓呼の渦がふたたび沸き起こる。青年は舟を降り、彼の家に向かって厳かに歩き出した。小さな同居人が、置いていかれまいと慌てて彼を追いかけた。

「なーんて言っちまったが……おい、ゼノン。お前、どう思うよ」
床の上にあぐらを組み、気だるげに伸びをしながら青年は言った。
問いかけられた少年は、ちらりと片隅に置かれたベッドを見やり、

所在なげに答える。
「……ぼく、今晩、どこで寝ればいいのかなぁ」
「はぁ？」
「だってさ。この家、ベッド二つしかないだろ。そっちのベッドは埋まっちゃったわけだし……もうひとつはヴァルが使うだろ？　そしたらぼく、納屋にでも行くしかないよね、きっと」
ゼノンは上目遣いにそうつぶやいた。青年は呆れたように頭を掻いている。
「なに言ってんだ。お前は俺と一緒に寝りゃいいだろ。なんか不都合あるのか」
「寝相と寝言と歯軋り、いびき。不都合だらけだよ」
間髪入れずに飛んできたクッションを少年は身軽に避けてみせた。そして不意に真顔になった。
「その子……何者？　本当にアーマンドラなの？」
「俺が知るか」
青年は短く言い捨てた。事実、確かめる術など見当もつかない。
ゼノンは大仰にため息をついた。
「いい加減だなぁ、前から知ってたけど。じゃあなんで連れ帰ったりしたのさ。エッチなことするため？」
堪忍袋の緒が切れたらしい青年が、怒気とともに立ち上がる気配があった。ゼノンは慌てて飛び退り、前言撤回した。
「ジョークだよ、もう、大人気ないんだから。……けど、じゃあ、どうするのさ。ここに置く気なの？」
「意識が戻れば身元も知れるだろ。そうすりゃもといた場所に帰してやることもできるさ。どこから流されてきたんだか知らないがな、こんな恰好は少なくともここいらじゃあ見たことがない。ひょっとして、異国の娘かもしれないな」
「異国って……もしかして、ゼーレンディア……とか」
「ああ、十分考えられる」
青年は、先ほど埠頭から連れ帰った不思議な娘を、まじまじと眺

めた。あの奇妙な光はすっかり消え、服装を除けば、十五、六の可憐な少女そのものだ。品のある顔立ち、陽に焼けていないつややかな肌や髪、ひとつの傷もない形の良い手などを見るに、上流の出身のようにも思える。ゼーレンディア合陸連邦の貴族の娘か、或いはその屋敷で働く女官か。

と、不意に、娘の瞼が動いた。長い睫が鳥の羽ばたきのようにやわらかく上下する。

彼女はゆっくりと覚醒した。

（※「キューズァロ」……東大陸の放浪民から広まった、絵と数字入りのカード。遊興及び賭博に用いられる）

# 第十四話　若者と少年

ここが天国じゃないことはすぐにわかった。あたしはクリスチャンじゃないから、多分違う場所へ召されたんだ。

ってことは……極楽浄土？　でも、それにしては様子がおかしい。だっていま目の前にいるのって、どう見ても外国人だよね。茶褐色の瞳に栗毛の髪、日に焼けた肌……温かい手のひら……あれ？　なんか感触がやけにリアルなんだけど……。

「気がついたか」

あたしの頬を撫でているのは、見知らぬ若い男の人だった。当然、その言葉は日本語じゃなく、あの変わった響きの外国語。どうして理解できるのか自分でもまるでわからないけれど。

――つまりあたしは死ななかったんだ。あんな小舟で海に投げ出されたっていうのに。

「大丈夫？　お姉ちゃん」

十歳前後の、そばかすの浮いた可愛らしい男の子があたしを覗き込んでいる。あたしは反射的に肯いていた。

「あ……あの……ここ……」

身体を起こそうとして眩暈を感じ、ぐらついてしまった。そのあたしの背中を、この精悍な顔の男の人がとっさに支えてくれた。

「無理に起きるな。生身で海を漂流してたんだぞ、死んでてもまったくおかしくはないんだ。……水は飲めるか？　気分は？」

あたしは額を押さえ、ひどく弱弱しい声で答えた。喉がかすれ、うまく喋れないのだ。

「へ、平気……です……」

男の子が水の入ったコップを差し出してくれた。あたしはそれを受け取り、ほんの少しだけ中身を飲んだ。男の人が言った。

「ここはカジュヌ港に接する港町だ。ああ、俺はヴァル。ヴァリーとも呼ばれるけどな、好きな方で呼んでくれ。こいつは俺の同居人で、ゼノン。弟みたいなもんだ」

彼はいっきにまくし立てた。それからじっとあたしを見つめた。

「……見たことない色だな、その瞳は。まるで、なんだか……吸い込まれちまいそうな……どっか別の世界につながってるみたいだ。こうして見てるだけで、いまにも……」

その大きな手が、ふたたびあたしの頬に伸ばされる。触れる寸前、男の子――ゼノンの揶揄気味の声が飛んだ。

「なんだよ、やっぱエッチ目的なんじゃん。目が覚めるなり口説いたりしてさ。もう少し分別持って欲しいよ、弟分としては」

ヴァルと名乗った男の人の拳が、ゼノンの頭を威勢良く叩いた。大げさな悲鳴が響き渡る。

「それ以上余計なこと言いやがったら、ほんとに納屋に放り込むからな！　あーっと……悪い、ええと……そうだ、名前だ。お前、名前はなんていうんだ」

イエロートパーズみたいな澄んだ瞳があたしを見据えた。

「ミハル・クゼ。……あの、ヴァリーさん、あたしを助けてくれた、あなたが」

「さんは要らねぇって。……いや、実際に海から引き上げたのは俺じゃない。ちょうどシルフ漁をやってたシドンて地元の漁師だ。ランタンクラゲみてぇにきらきら光って、しかも海に浸かってたってのにちっとも濡れてない、不思議な娘を拾ったって騒ぎになってな。事態を収拾するために、とりあえずここに連れてきたんだよ。――連中はお前のこと、アーマンドラの化身だって言ってんだけど……そうなのか？　ミハル」

聞き慣れない単語にあたしは首を傾げた。

「アーマンドラ？　知らない……それはなんですか」

「なにって、海と戦を司る女神だろ。そうか……お前やっぱり、このエンザンテの人間じゃないんだな。言葉遣いもちょっと不自然だし……なぁ、お前、ほんとにゼーレンディア合陸連邦から流されてきたのか？　ずいぶんと珍妙な服だが、それもあっちじゃ普通なのか」

あたしは困り果ててしまった。ゼーレンディアという名前には聞き覚えがあるけれど、そもそもどうしてそんなところにいたのかは謎のままだからだ。でも、日本から来ましたなんて言ったところで、きっと通じやしないんだろう。

「ゼーレンディアの南、離れ島から舟に乗せられて流されました。途中、舟が転覆して、あたし、放り出された。そこからは、憶えていない……」

「舟に乗せられたって、いったいなんで」

「……わかりません。あたし、知らないうちに離れ島にいた。どうしてそこにいたのか、わからない。親切な男の人が助けてくれて……でも、その人、あたしを舟に乗せて、海に流した」

「ひどいなぁ。助かったからいいけど、それじゃあまるで、ミハルを殺そうとしたみたいじゃん」

憤慨したように言うのはゼノンだ。――そのとおりだ。

水も食料もないあの状況では、あたしは死んでもおかしくなかった。というより、シグルさんは明らかに殺意を持ってあたしを眠らせ、舟に乗せ、海に棄てたんだ。ただ、その動機はいくら考えてもわからないけれど。

「ふーん……まあとにかく、ゼーレンディアに帰してやりゃあいいんだな」

「簡単に言うけどさ、ヴァル。国交がないんだぜ。どうやって送り届けるっていうのさ」

「俺がインヴォルタンの頭領（ヘッド）だってわかって言ってんのか？　娘一人くらい、どうにでもなるさ」

あたしをそっちのけで話を進める二人に、慌てて言った。

「ゼーレンディアに帰ってもだめです。あたし、そこの人間じゃない。別の……別の国から来たですから」
「え？」
彼らは異口同音に訊き返した。
「別の国です。でも、どうやったら帰れるのか、全然わからない。どうしてゼーレンディアにいたのかもわからない。あたし、帰る方法探してるところ」
「……」
ヴァリーとゼノンは顔を見合わせ、黙り込んだ。あたしははっとした。彼らにしてみれば、面倒な厄介ごとを背負い込んだのとまったく変わらないに違いないのだ。気まずい沈黙が流れる。でも、この空気を打開してくれたのは、ヴァリーの明るい声だった。
「まあ、別に焦るこたないさ。いたけりゃいつまでもいてくれてかまわないしな。とにかく、その元いた国ってとこに帰る方法を探すんだ。俺たちもできる限りは協力するから」
あたしは驚き、彼をまじまじと見つめた。ゼノンまでが意外そうに目を瞬いた。
「いいの？　ヴァル」
「なんだ、異論があるのか？　ゼノンは」
悪戯っぽくそう言われて、ゼノンの方がうろたえている。
「異論なんかないけど……でも、ミハルは女の子だよ。ぼくは紳士だからいいけど、ヴァルは……」
言い終える前にまたもゼノンは殴られてしまった。
「阿呆か。言っとくがな、餓鬼に手を出すほど飢えちゃあいねぇよ。まったく、どっからそういう知識を仕入れてきやがるんだ、こいつは」
ヴァリーは憤慨し切った様子で悪態をついた。あたしは仕方なく、曖昧に笑いながらそんな二人の掛け合いを見守った。いくつに見られてるのか知らないけど、敢えて否定する必要もないだろう、そう思ったので。

ハーマッド島から南海を漂流すること、多分丸一日。たどり着いた港町で、あたしはなぜか、この風変わりな二人組の暮らす家に居候することになったのだった。

# 第十五話　シグルの告白

ハーマッド島中央に位置するイシオス神殿では、朝の禊に引き続き、七人の神官による奉献の儀が行われていた。二刻（午前八時）から正午までの約四時間の間、主神の間と呼ばれる中央殿舎にこもってひたすらイグノディアスへの祈りを捧げるのである。外光が遮断された空間は暗闇そのもので、鍛錬された精神の持ち主でないと完遂は中々難しい。

修道後には、ヒジリギクの灰を使ってふたたび身清めをしなければならない。その準備をするのも、下っ端の神官長補佐の役目だ。そういうわけでシグルは、夏の日差しが燦々と照らす神殿の中庭を、摘んだばかりの大量のヒジリギクが入った籠を抱えながら歩いていた。

この花を冠にして、我が想い人に捧げたのはいつのことだったか。幼い日の情景が蘇った。思い出の中で、美しき姫巫女レノラは、聖女そのものの笑顔を浮かべて喜んでくれた。その微笑みは、いつしか先日の――キニッサ湾で異国の娘を「始末」したと伝えた時に見た彼女のそれと、ぴったり重なった。

そう、わたくしの言うとおり、海に沈めてくださったのね。よくやってくれましたわ、シグル。

彼女は満面の笑みを湛えて自分を労（ねぎら）った。そして、いまさらながらおのれの犯した罪の大きさに慄いているのか顔色の冴えない幼なじみに向かって、さらにこうも続けた。気にすることなどない。あれは人の形をした悪鬼（フィドラ）だ。姫巫女である自分の直感を信じろ、と。

シグルは逆らえなかった。逆らいたくなかったのだ。正直なとこ

ろ、あの娘が人外の者であろうがただの人間であろうが、彼にはどうでもよかった。レノラの歓心さえ買えるなら。

だが、日に日に、心は重くなった。果たして本当に自分の行為は正しかったのだろうか。その自問は、やがてはっきりと罪悪感に形を変え、彼を責め苛み続けることになった。

不意に馬の嘶(いなな)きが聞こえ、シグルは訝しげに顔を上げた。二頭の馬に跨った二人の貴公子たちが近づいてくるのが見えた。遠目ではあったが、それがウェス・ハーシュ家の次期当主とその異母弟であることはすぐにわかった。

「……オルグ・ジード様、アドリオ様。来られるとは聞いておりませんでしたが……それに、恐縮ではありますが、ここに騎馬のままというのは……」

ジードはシグルを見据え、馬から降りもせずに答えた。

「ああ、わかってる。悪いがすぐに確認したいことがあるのだ。シグル、お前に」

シグルの心臓が大きく跳ねた。玉璧にも似た緑碧の瞳は、真実のみを映し出すという逸話に描かれる鏡のようだ。

「なんでございましょうか、ジード様」

平静を装ったつもりだったが、わずかにかすれていたかもしれない。ジードは続けた。

「単刀直入に言う。ごく最近、異国風の若い娘をフェロキオンで見つけたらしいな。……その娘をそのあとどうしたのか訊きたい」

びくり、と隠しようもなく震える肩が、言葉よりも雄弁に彼の関与を物語っていた。そのさまに、ジードは確信した。

「レノラに頼まれて、好からぬことを仕組んだとも聞いている。それは……本当なのか。真実だとすれば、お前はいったい、彼女になにをしたんだ」

押し殺した声だった。シグルは顔色を変えた。……レノラ姫が話したというのか？　自分から？

「シグル、頼む、教えてくれ。お前が拾ったという娘は、私の……

私の想い人なんだ。彼女は私の生命そのものだ。居場所さえわかれば、すぐにでも迎えに行くつもりだ。だから……」

「――薬を盛り、小舟に乗せ、海に流しました」

シグルはジードの乗る月光号（アルジュラ）の足元にひれ伏した。ジードとアドリオの形相が変わる。

「なんだと……？」

「私の一存でございます。フェロキオンに現れた怪しい輩を、そのままにしておくわけには参らないと思った故です。姫巫女は関係ありません。私には、どうぞふさわしい罰をお与えください」

あまりの衝撃にジードの身体がふらついた。それはアドリオも同様だった。二人はしばしの間、無言のまま神官長補佐を務めるこの若い青年を見下ろしていた。

思いがけない声がかけられたのは、その時だ。

「……その娘ならば生きておるぞ。海を渡り、このゼーレンディアではない外国（とつくに）での」

中庭に面した渡り廊下に、ノルド神官長が立っている。高齢のため白く濁ったその両目は、にもかかわらず迷いなくまっすぐに三人を見つめているようだった。真っ先に反応したのはジードだ。彼は馬上から飛び降り、老人のそばに駆け寄った。

「神官長殿……それは、それは本当なのですか。では、ミハルはいまどこに……外国とはどこの……」

ジードとアドリオ兄弟の外祖父でもある老いた神官長、イシュレーは、ゆっくりと首を横に振った。

「残念ながらそこまではわからぬ。だが、生きていることは明らか……あの娘には天より与えたもうた、大いなる光が宿っておるからの」

謎めいた宣託に三人は言葉を失った。やがて喘ぐようにジードは言った。

「……生きていることは確かなのですね。それも、この五大陸以外のどこかの国で――イシュレー様、ありがとうございます。心より

感謝いたします」
そしてすぐに愛馬に飛び乗り、中庭を出て行こうとしたジードの背に、老人は言った。
「レノラのことはすまなかったの、オルグ・ジード。しかしあれにもじきにわかろう、おのれに課せられた役目というものが。……そのうち、また、キニッサの館に会いに行ってやってくれぬか」
その声は威厳というよりむしろ慈愛に満ちていた。ジードは振り向き、微笑んだ。
「ええ。必ず、祖父上」
ジードのあとを追い、アドリオも神殿を辞去した。シグルは言葉もなくその場に崩れ落ち、膝をついた。ヒジリギクの入った籠が地面に転がり、辺り一面が白い花で埋まった。

# 第十六話　ハプニング

しばらくこのお家で厄介になることに決まったところで、ヴァリーは用事があると言って出て行った。帰りは夜になるらしい。詳しくは聞かなかったけど、きっと仕事かなんかだろう。去り際、彼はゼノンに向かってこんなことを言っていた。

「俺がいない間はお前がミハルをしっかり護ってやれよ。わかってると思うが、いろいろ物騒だからな」

「ヴァルに言われるまでもなくわかってるよ。ていうか、ヴァルと二人にする方がよっぽど危ないと思うけど」

そう言って舌を出すゼノンの頭を、ヴァリーは乱暴に小突いた。

「このませ餓鬼が！　……帰るのは多分、八刻（夜八時）を過ぎると思う。じゃあな」

彼の後ろ姿を見送ったあと、ゼノンは殴られたところをさすりながら戻ってきた。あたしは思わず吹き出した。

「なにがおかしいのさ」

むっつりと言われ、慌てて誤魔化す。

「ごめんなさい。あの、仲いいんだなって思って」

その時不思議に思った。ヴァリーはこの子のことを、同居人で弟みたいなものと言っていたけれど……二人にはほかに家族はいないんだろうか。

まるで思考を読んだみたいに、ゼノンがぽつりと言った。

「……大好きなんだ。血もつながってない、赤の他人だけど、ぼくにはほんとの親なんかより全然大事なんだ。ヴァリーが」

彼は、ベッドの端っこに腰掛けると、自分の身の上について語り始めた。

「五つの時に父さんが死んで、母さんはすぐに新しい父さんと再婚

して……それが絵に描いたようなろくでなしでさ。働きもしないでお酒ばっか飲んで、ぼくをさんざん殴るんだ。母さんは見て見ないふりをしてた。そのうち、ぼくを奉公に出そうって話になったんだけど、奉公先のお屋敷へ向かう途中で会ったヘンなやつにぼくのこと売っ払おうとしてさ。そいつ、どう見てもまともじゃないんだ」

ゼノンは、その可愛らしい唇をきゅっと噛んだ。

「二人がやり取りしてる間にぼくは逃げたんだ。必死で走ったよ。死ぬんじゃないかって思うくらい。走って走って、カジュヌ港に出た時、ヴァルにぶつかって……それで知り合ったんだ」

二年前の話だ、と彼は付け加えた。

「ヴァルはほとんどなんにも訊かなかった。この辺じゃぼくみたいな子どもって珍しくないから、訊く必要もないって思ったのかもしれないけど。……それからずっと一緒に暮らしてるんだ」

あたしはなんとなく肯いていた。確かにあの人なら、たいていの相手はなにも言わずに受け入れてくれそうだ。現にあたしのことだって、身元不明の厄介者であるにも関わらず、それほど引かずに接してくれたのだし。

そう思っていると、ゼノンがあたしをじっと覗き込んできた。……え？　なに？

「ミハル……あの、あのさ……ヴァルのこと、好きにならないで」

「……はっ？」

予想もしないせりふにあたしは驚き、まじまじとゼノンを見た。

「元いた国に戻る方法が見つかるまではここにいるだろ。――でも、その間に、ヴァルのこと好きになったりしないで。ぼくから、ヴァルを獲らないで」

「……」

なにも言えないでいるあたしにゼノンは続けた。

「ヴァルはいいやつだし、割と恰好いいし、ああ見えてけっこうもてるんだ。いまのところちゃんとした恋人っていないみたいだけど、いつかは結婚しちゃうってことはぼくだってわかってる。……でも、

いまは厭だ。ヴァルは、ぼくだけのヴァルだ。だから……だからミハル、お願いだから約束して」

あたしを見つめる真摯な瞳は、血のつながりがないなんて信じられないほど、ヴァリーにそっくりなトパーズ色をしていた。あたしはこくんと肯いた。

カジュヌ港の外れに建つ、古ぼけた一軒の倉庫。ここが、ヴァリーを頭領（ヘッド）とする地下組織、インヴォルタンの本拠地となったのは、いまから三年前――彼の父親だった腕利きの贋造師、ランセルロが、警吏官とのいざこざの挙句に射殺されたことがきっかけだった。

「ここ二ヶ月くらいの間に、海路関の取り締まりがやたら厳しくなったって話だ。新しい通行手形を設けたりとかな。まったく、気が抜けないったらないよなぁ」

葉巻を吹かしながらそう言うのは、ランセルロの友人でもあった漁師のヘルだ。ヴァリーにキューズァロを教え込んだ張本人だが、彼とはイカサマ抜きで勝負したことがない。おかげで戦績はいつでもヘルの圧勝だった。

「へっ、ゼーレンディアの連中がなにを仕掛けてこようが、こっちには二代目がいるんだ。びびるこたねぇ、なぁ頭領」

未明を海から引き上げた老漁師、シドンは鼻で哂った。ヴァリーは肯いた。

「ああ、もちろんだ。……計画は予定どおり実行する。一週間後に出航だ、いいな、みんな」

この場に集まった十人ほどのメンバーの顔がたちまち紅潮する。その中の一人が不意に訊ねた。

「そうだ、なあ頭領、あの娘……いや、アーマンドラは？　もちろん連れて行くんだろう？」

「そりゃあそうだな、なにしろ海と戦の女神だ。あの娘さえ一緒に

いれば、恐れるものなんかないさ」
　予想に反して黙り込んだヴァリーを見、彼らは不審げに声をかける。
「頭領。見きわめとやらはついたのか？　どうだったんだ？　アーマンドラなんだろう、あの娘は」
「……まだ結論を出すのは早い。一日も経っちゃいねぇんだぞ。まぁ、そうだとわかればむろん連れて行くがな」
　場がざわつき始める。それを制したのは、やはり年の功か、シドンだ。
「頭領の言うとおりだ。それについては任せようじゃねぇか。それより、どうだ、この辺で一杯！　いい酒が手に入ったんだぜ、ゴズビオで作られる古酒だ」
　男たちの興味はあっさりとそちらへ移った。それぞれの前に杯が置かれ、ヘルの音頭でいっきに呷る。やがてほろ酔い加減になったところで、上機嫌のシドンが言った。
「頭領、そろそろ戻るんだろ？　ゼノンが待ってるからな。ほら、こいつを持ってきな。シルフは不漁だったが、雑魚ならいくらでも手に入ったからな」
　手渡された魚篦（びく）の中には、塩を揉み込んで防腐処理を施した数匹の魚や貝が入っている。
「悪いな、いつも。それじゃそろそろ上がらせてもらうわ。じゃあな、みんな」
　笑顔でそう言うと、ヴァリーは魚篦を手に倉庫を出た。

　六十度を超えるゴズビオ酒はさすがに強力で、いつになく足がふらついている。また、あの小うるさいゼノンのやつになにを言われるやら――ヴァリーは息をつき、頭を一振りしてから家のドアを開けた。

部屋の中には誰もいない。かすかに湯を遣う音が聞こえてきた。ゼノンが風呂に入ってるのか。そう思い、なんの気なしに浴室の扉を押し開けた。

――浴槽に浸かっているのは女だった。

ヴァリーの全身が硬直した。後ろに退くことも、前に進むこともできず、言葉すら出てこない。それでいて、なぜか視線だけはしっかりと、透明な湯に浸された女の裸身を見つめていた。場違いといえば場違いな感想だが、ものすごくきれいだ――純粋にそう思った。

だが次の瞬間に起こったものすごい悲鳴が、彼をすぐさま現実の世界に引き戻した。

「あっ……いや、そ、その――ゼ、ゼノンが……ゼノンかと……」

意味不明の言葉の断片が口をついて出る。女は――未明は、これ以上ないほど身体を縮ませ、顔を伏せて怒鳴った。彼女の母語なのか、まったく耳なじみのない言語だったが、なにを言っているのかは明白だ。

「で、で、出てって！　出てってよ、早く！」

ヴァリーは立ち尽くしていた。一刻も早く退出しなければ。それはわかっていたし、彼の理性は苛々と主（あるじ）を急かしていた。だというのに、動くことができない。まるで金縛りにでも遭ったみたいに、ヴァリーの両足は浴室の入り口に釘付けにされた。

やがてその足はぴくりと動いた。だが、後方に向けてではなく、なぜか前方に――未明のもとへ、彼は近寄ろうとしていた。吸い寄せられる。抗えない。彼は右手をゆっくりと伸ばした。

「……ヴァル。ぼくならここだけど。なにしてんのさ」

真夏とは思えぬ冷ややかな空気が背後から漂う。ゼノンだ。ヴァリーは文字どおり飛び上がった。慌てて回れ右をし、浴室のドアを大急ぎで閉める。……大きなため息を吐き出す。

そんな彼を尻目に、ゼノンはごく落ち着いた様子でドアをノックした。

「ミハル。タオルと着替え持ってきたよ。外に置いとくから、出た

ら使って」
「……あ……ありがと……」
消え入りそうな声が聞こえた。ヴァリーはその場に留まり、生唾を飲み込んだ。
なんてこった……子どもじゃなかったのか？　俺はてっきり、十五かそこらかと……。
彼は口元を押さえた。いま見たばかりの美しい裸体がフラッシュバックする。二十三のこの年になるまで女を知らないわけではないなのに、不思議なほどの興奮と高揚感が全身を包む。
水を弾いて輝く、ほんのりと紅潮した滑らかな肌。人形のように華奢な腕。小柄な体格には不釣合いとも思える、豊かな乳房。細い腰。すんなりと伸びた形の良い脚。
アーマンドラの化身。本当にそうなのかもしれない、なぜなら彼女は……彼女はすごく、きれいだ。
咳払いが聞こえた。ヴァリーは大仰に仰け反った。同居人の少年が、軽蔑も露わに彼を見つめている。
「……だから言ったんだよ。ヴァルと二人にした方がよっぽど危ないって」
「なっ……お、俺は別に……」
「これ、今夜のおかず？　もらっとくね」
ゼノンはヴァリーの手元から魚篭を掏り取った。そしてしきりにため息をつきながらキッチンへ消えた。が、よく見ると顔を覗かせてじいっとこちらをねめつけている。
「ヴァル。いつまでもそこにいたらミハルが出て来れないよ。のぼせて倒れちゃうだろ。閑なら料理、手伝ってよ」
もっともな意見だ。ヴァリーは彼らしくないほど従順に、彼の弟

分に従った。酔いはいつの間にか、すっかり醒めていた。……十代の餓鬼でもあるまいし、たかが女の裸ぐらいで、なにをこれほど動揺しているのか。ヴァリーは自分自身に呆れ、懸命に言い聞かせた。

だが、この夜の体験は、彼の中で薄れることは決してなかった。

## 第十六話　ハプニング（後書き）

八十年代のラブコメに弱いんです……。こういう展開書くの大好きで……つい（―＿―；）

# 第十七話　千鳥花が散る頃に

手を伸ばした先に、やわらかな髪が触れる。

ミハル。今夜も会えた。私の恋人、ミハルに。

あの日から、カシアンは毎晩、夢の中で未明との逢瀬を重ねていた。彼女は屋敷にいた時と同じように、金の刺繍の入った白い寝巻きを着ていて、相変わらず可憐だった。抱き寄せれば恥ずかしそうに目を逸らし、頬を染める。いとおしさに眩暈がし、湧き上がる劣情をすべて彼女にぶつけ、精を放つ。彼女は決して拒まず、幾度となく自分を受け入れ、そしてやさしく囁いてくれる。

カシアン、あなたを愛してる。

ああ、ミハル、私もだ。むろん私もお前を愛している。この世などいっそ消えてしまえばいい、お前さえこの手の中に残っていてくれるなら、私はお前とどこまでだって一緒に行ける。

だが彼女は必ずどこかへいなくなってしまう。無情な朝の訪れとともに。

もう目覚めたくはない。永遠に夜が終わらなければ、ずっと未明と一緒にいられる。

春告げの花と呼ばれる、薄い黄色の千鳥花（ちどりばな）がほころび始めたある雨の日、カシアンはついに「実行」した。ゴブレットを砕き、その破片で左手首を切ったのである。

だが本懐を遂げるにはいたれなかった。ベッドメイクをするため

部屋に入ってきた新参のメイドによって、寝具を血に染めて眠り込んだように倒れているところを発見され、すぐに手当てがなされたからだ。傷は存外浅く、命に関わることはなかった。しかし、彼の精神は立ち直るどころか、より深い闇へとどんどん沈み込んでいくようだった。

侍医の勧めを受け、転地療養が決まったのはそれから二週間後のことだ。ウェス・ゴート家で所有する小型の帆船に数人の使用人とともに彼は乗り込み、連邦中に散らばる別邸を転々とした。北のツェノワ、西のゼドス、東のレピュラス。ウェス・ハーシュ家の領地とも言える南のロドア以外、五大陸を隅々まで回ったものの、気鬱が晴らされることは結局なかった。もとよりカシアン自身、なにを期待しているわけでもない。未明に会えるはずもない旅のどこに、そもそも続ける意味などがあるだろう。

――だが、それは彼の早計に過ぎたのである。

オサイオン市、いや連邦全体を揺るがした、ウェス・ゴート家の醜聞。あの一件のあと、屋敷のメイドの半数が里帰りを申し出ており、ノラルクの後任として新しく執事となったユイル・ジェンセン・バージェットは、使用人の確保に奔走することになった。

家格を下げられたわけではないが、それでもウェス・ゴート家と聞くと尻込みをされる。この際、多少のことには目を瞑ろう。そこそこの家の娘でなくとも、怪しげな身元でさえなければかまわない。そんな思いで人集めにやっきになっていた彼のもとに現れたのが、没収となった元領地の番小屋の娘、ヨナ・フォルスだった。

年齢は十四。受け答えもはきはきとして、中々利発そうな娘ではあったが、彼は正直戸惑いを隠せなかった。なにしろこのヨナという娘は、例の一件に巻き込まれて命を落としかけた被害者の一人なのである。

「あんたもの好きよねぇ。なにが嬉しくて、こんな没落しかけのお屋敷に奉公になんて来たりしたわけ」

お勤め初日、厨房で仕事の説明を受けている最中、先輩メイドのアージュリンに、あけすけにそう訊かれた。彼女は元々、ウェス・ゴート家がロマド市に所有しているキニッサ邸で働いていた侍女だったが、本邸で人を募集しているとの話を聞いた彼女の両親が、その勤め先を強引に変更してしまったのだ。キニッサよりはよほど都会であるオサイオン市に移れることはかねての望みどおりだったが、あんな事件があったあとである。アージュリンのテンションはすっかり下がってしまっていた。

ヨナは曖昧に笑って答えた。

「ええ、まあ、その……実家がいろいろ大変で。こちらのお屋敷、条件はとても良かったもんですから」

このヨナが「生贄」として殺されかけたことまでは知らないアージュリンは、それで納得したようだった。

「そうなの。……いいわ、なにか困ったことがあったらあたしに言いなさいね。お互い、お勤め期間が明けるまでは助け合いましょう」

「はい、よろしくお願いします」

そう言って、素直に頭を下げた。

猟場の番人という仕事がなくなったのは本当の話だ。現在、彼女の父親は――母親は彼女が五つの時に流行り病で亡くなっていた――家族とともにそれまで住んでいた小屋を出、市での職と家を得て働いている。四人きょうだいの末っ子であるヨナが、よりによって命を奪われそうになった因縁の屋敷に侍女として上がりたいと言い出した時には、家族全員が反対したのだが、ヨナの決意は固かった。

仕事の合間には読み書きなどの教養も身につけられるし、なにより給金が破格といえるほど良い。粘り強く説得した結果、やっと彼女はウェス・ゴート家に勤めることを父から赦されたのである。

「ああ、それにしても、ついてないわ。ここのお坊ちゃま、カシアン様って、ちょっとおかしくなっちゃったんでしょ、この前の事件

のせいで。なんでも、花嫁を奪われたショックでってことだけど…少なくともルックスは好かったじゃない？　もったいないわよねぇ。アドリオ様もいいけど、カシアン様でもこの際いいかなぁなんて思ってたっていうのに」

口淋しいのか、アージュリンはしきりに唇を舐めながらつぶやいた。何気ないそのせりふに、ヨナが目を見開いたのは言うまでもない。

「アー――アドリオ様って……」

彼女は喘ぐように言った。アージュリンは怪訝そうにそんなヨナを眺めている。

「アドリオ様よ、ロマドのウェス・ハーシュ家の。あんたも知ってるでしょ？　このウェス・ゴート家と張るくらいの名門貴族だもの。あそこん家、お兄さんもいるらしいのよ、残念ながらあたしは見たことないけど。でも、弟のアドリオ様があれだけ恰好良いんだから、お兄さんもさぞ素敵なんでしょうねぇ」

厨房の壁にもたれながら彼女はうっとりとそう言った。ヨナの頬がみるみる紅潮する。

アドリオ……あの人、そんなものすごい貴族のお坊ちゃんだったの？　でも、確かに身なりはすごく良かったし、物腰もどことなく品があったわ。あたしに対しても、さりげなくやさしくて……。

ああ、でも、ともかく、あの人のことが少しでも知れた！　父さんを必死で説得した甲斐があったってものだわ。

胸のうちが歓喜で震えるようだった。待遇の良さに惹かれたのはもちろんだが、高家の出身らしい彼に接近できる機会が万一にもあるかもしれない、なによりもそう思って就いた仕事である。身分違いなど百も承知だ。それでも、彼女はアドリオのことが忘れられなかった。

こうして数ヶ月が過ぎる頃、ヨナは、その度胸の良さと捷さ（はしっこ）を買

われ、カシアンの傍仕えの一人に任ぜられることになった。彼の自殺未遂を最初に発見したのも彼女だ。執事のバージェットは、倒れもせずに冷静に応急処置を施してから侍医を呼びつけたヨナの気丈さに、内心舌を巻いていた。

そうした行動を見込まれ、カシアンの転地療養に侍女として付き添うよう命じられたのも、なかば当然の成り行きと言えるだろう。彼女は一も二もなく快諾した。だって、もしかしたら、旅先でウェス・ハーシュ家所縁の人間に――アドリオを知る誰かに会えるかもしれないのだ。いや、可能性は限りなく低いが、アドリオ本人に再会できる確率だってゼロとは言えない。

千鳥花が満開を迎える頃、カシアン一行はバルネディア大陸を出帆（しゅっぱん）した。

その旅の終焉に待ち構える出来事には、誰一人気づくことなく。

# 第十八話　ヴァリーの物語

あの、ちょっとした「ハプニング」の夜から三日後の夕暮れ。じきに迎える出航の日に備えて奔走していたヴァリーは、片手に一揃いの荷物を抱えて家に戻ってきた。

無意識のうちに深呼吸をし、いつものようにドアを開け、中へ入る。――自分の家だというのに、なぜかこのところ、奇妙な緊張感があった。

帰宅の挨拶をしようとして、室内がひどく静かなことに気づく。誰も出てくる気配がない。

「ゼノン。……ミハル」

やがて、キッチンのテーブルに突っ伏して眠っている未明を見つけた。近づいても起きる気配はない。

「ミハル……？」

静かに声をかけてみたが、反応はない。リビング兼寝室ではなくて、こんなところで寝てしまっている理由はすぐに察しがついた。強く差し込む西日を避けてのことだろう。

ふと見ると、テーブルの上には拙い字で書かれたメモが載っている。ゼノンの書き置きだ。二十日芋（※）が切れているので買いに行ってきます。そんな内容だった。

ヴァリーは、眠り続ける未明の顔をそっと覗き込んだ。整ってはいるが、少女と言ってなんら差し支えのない、幼さの残る顔立ちだ。それなのに――彼の脳裏に、あの夜の甘美な映像がまたも鮮やかに蘇った。

つくづく、反則だ。こうして見てるとまだせいぜい十五の餓鬼だっていうのに。あの肢体は……。

ヴァリーの失態を、未明は責めはしなかったが、しばらくの間はまともに口を利いてくれなくなった。だがそれは怒っているからというより、恥ずかしさのあまり顔を合わせられないためのようでもあった。首から上を真っ赤にして目を逸らす彼女の姿は、ヴァリーの中に潜む奇妙な感情をむやみに刺激した。

彼はテーブルの上に、市(いち)で仕入れてきた女ものの衣類を置いた。海から引き上げられた時、未明が着ていたのは袖の長い冬用の上着で、年間を通して温暖な気候であるこのエンザンテに合っているとはとても言えない。ズボンにしても、彼が知る限り、この世界では女性がそういったものを穿く習慣がないので、変に悪目立ちしてしまうだろう。そう思ってのことだ。

彼女はいま、ヴァリーが貸した彼の古着を着ている。袖のないシンプルなベージュのシャツ。小柄な未明には丈が余り、ちょうど太ももの辺りまでを覆い隠している。腰をひもで結べば、ワンピースのように見えなくもない。……というよりむしろ、ヴァリーの目にはやけに扇情的な恰好に映った。シャツの合わせ目から、白く細い脚がちらちらと覗くのだ。

家の中だけならいいけどな。——船に乗るっていうのに、不特定多数のやつらが見るかもしれないっていうのに、こんな……こんなエロい恰好、させておけるか。

俺以外の男の目には触れさせたくない。が、俺と二人だけの時は、まあ別にかまわない。……なんなら服を脱いでくれていても——脳裏のどこからか勝手に生じる、あまりに不埒な考えを彼は必死で追い払った。どうかしている。身元もわからない異国の子ども相手に、インヴォルタンの頭領(ヘッド)たる百戦錬磨のこの俺が、なんでここまで振り回されなきゃならないんだ。しかし、そう思いつつも彼の右手は理性に抗い、未明の頭へと伸ばされていた。

あくまで起こさないように、つややかな髪をやさしく撫でる。指先から伝わってしまうんじゃないかと思うほど、心臓の高鳴りが煩い。触れるだけでここまでのときめきを覚えるなど、もしかしたらこれが初めてかもしれない。

「ミハル……」

水の滴る熟れた果実にも似た、桃色の唇。吸い寄せられるように指が動き、そこに触れた。

身体中を駆け抜ける、甘い雷鎚。

指じゃなく、俺のこの唇で味わいたい。

未明はいまだ起きもせず、彼という男に弄られるままになっている。ごくり、と喉が鳴った。この華奢な身体を抱き上げて、ベッドに運んで、そして――彼女は抵抗するだろうか。でも、ほんの少しでも自分のことを憎からず思っているのだとすれば、もしかしたら受け入れてくれるかもしれない。いまだって、ほかに選択肢がないからとはいえ、ひとつ屋根の下で暮らしている仲なのだ。

……なんてこった。俺はこいつに惚れちまったのか？　どっから来たのかもわからない、アーマンドラの化身かもしれないなんておかしな娘に。

自覚は唐突に訪れた。出会ってからまだたった数日だ。だが、気づいてしまった以上、もう誤魔化すことはできない。未明の髪、肌、瞳、唇、首筋――いや、すべてだ。すべてが可愛い。彼女のすべてを自分のものにしたい。

「……なさい……ごめんなさい……」

不意に小さな声が聞こえてきた。驚きのあまり、ヴァリーの指がびくりと揺れる。息を殺したが、起きてしまったわけではないらし

い。彼は身を屈め、未明の口元に耳を寄せた。夢の中で誰かに謝っているのだろうか。形の良い眉がわずかに歪んでいる。

「ごめんなさい……ジード様……」

はっきりと聞き取れた。ヴァリーの顔が強張った。――ジード？……誰のことだ？

「ん……ヴァリー……？」

耳元で名前を呼ばれた。どうやら今度こそ目を覚ましたようだ。ヴァリーは軽く咳払いをし、未明から離れた。

「着替えを持ってきた。いつまでもその恰好じゃあな」

「えっ……あ、ありがとう」

テーブルの上に置かれた衣類を見やり、彼女は笑顔になった。何気ない一言が、いまの彼には背筋を震わせるほど魅惑的に響く。……相当、重症だ。

ヴァリーはそれでも素っ気ない素振りを装い、椅子を引いて腰を下ろすと口を開いた。

「四日後にここを発つ。いつもどおりゼノンには留守番を頼むつもりだが、お前は連れて行くからそのつもりでいろ」

「えっ？」

突然の宣言に未明は戸惑いを隠せないでいる。衣類を抱きしめたまま、所在なげにヴァリーを見つめているその仕草に、ヴァリーは胸の疼きを止められないでいた。

「あの……連れて行くって、どこへ……」

重ねて訊ねられ、ヴァリーは我に返った。そうだ、彼女を随伴するにあたり、言っておかなければならないことがある。

「ミハル、いいか。お前は海を漂ってこのエンザンテに来た。それも、不思議な光をまとい、水にも濡れず、溺れることもなくだ。この辺の漁師はみんな、お前のことをアーマンドラの化身だと言っている。海と戦の女神、アーマンドラの化身だと」

いきなりなにを言われるのかと、未明の表情が少し硬くなった。

「でも、それは、違います。あたし、アーマンドラじゃない。あた

しは日本人で、日本という国からここに……」

「ああ、俺だって、お前がアーマンドラかどうかなんてわかりゃしないし、そもそも確かめる術なんかはない。だが、お前はそのニホンってところに戻りたいんだろ？　どこにある国なのかは知らないが、ここに留まってるよりは見つける可能性が高くなるはずだ、違うか」

未明は黙った。確かに一理ある。

「いまのうちに話しておくが、俺は――俺は、ある地下組織のリーダーをやってる。元々は、親父の弔いのために始めた組織だった」

彼はあらたまった調子で語り始めた。

黄昏を過ぎ、窓の外には夕闇が迫ってきていた。買い出しに行っているゼノンはまだ戻る気配がない。

「俺の親父は、本業は漁師だったんだが、学の要る仕事ってやつにずっと憧れてたんだな。漁に出る傍ら、古い古文書や書簡なんかの修復や鑑定を独学で習得して……いつの間にかその方面じゃちょっとは知られた存在になったらしい。町政のお偉いさんからも依頼を受けるようになって、それで……ある時から歯車が狂った」

彼はそこで言葉を切った。立ち上がり、コップを手にするとピッチャーから水を注ぐ。一息に呷ってからふたたび続けた。

「町の役人の中にあくどい輩がいたんだな。人の好い親父は、利用されてることにも気づかないで、修復の名の下に文書の贋造を手がけるようになったんだ。それが明るみに出かけた時、親父を利用した役人は、保身のために親父を殺させた」

ヴァリーは拳を握りしめた。何年経とうが薄れることのない悪夢の記憶だ。

「俺が十三の頃のことだ。でも、死ぬまでの間に、親父は俺に持てる技術をすべて叩き込んでくれた。親父の仲間だった漁師のヘルや

シドンたちと、弔いの意味を込めて地下組織を――インヴォルタンを立ち上げた。エンザンテの古語で、夜明けって意味だ」

未明は口を挟むこともできずに、ただ彼の告白を聞いている。

「初めの目的は、ただ復讐だった。親父を陥れた役人連中を奈落の底に叩き落してやるための。……俺は、親父仕込みの贋造術を使って贋札製造機を造り、紙幣や旅券を市場にばら巻いた。愉快だったよ。カジュヌの町だけでなく、エンザンテ全体にそれは広がって、収拾がつかないほどの事態になった。伝説の贋造師である親父はとっくに死んでて、遺児の俺はまだ餓鬼だ。疑いをかけられることもなかった」

彼は深い息を吐き出した。

「……異邦人のお前に言っても仕方がないが、この国はろくなとこじゃない。ゼノンがどうしてここにいるか、あいつから聞いたんだろ？　子どもにだって容赦ないんだ。貧富の差もひどいしな。なにより、自由な商売ってのが認められてないんだ、ここは」

ロドア大陸の南方に位置する小さな島国、エンザンテ。人口十万ほどの都市国家であり、政治を司るのは町議選で選出された、数十名からなる議員たちである。そして、彼らの許可を取りつけた者のみが、市街で店を構える権利を持てる。事実上の所場代（ショバだい）だ。それだけではない。

「ごく限られた人間だけが、外国との商取引を黙認されているんだ。たとえばゼーレンディアとのな。だが国政の基本は、鎖国の名の下に表向き外交を禁じてる。だから、一般民は異国との商売はもちろん、このエンザンテから出ることだってむずかしい。旅券が取れないからな」

そのやり方に一矢報いようというのがインヴォルタンなのだという。

「海路関を突破するには通行手形が要る。それもゼーレンディアの方針でころころ変わりやがる。そいつを贋造するのが俺の仕事だ。カジュヌ港の倉庫の地下に隠した製造機を使ってな。で、次の船出

がいよいよ四日後に迫ってるってわけだ」
そこまで話したヴァリーは、ふと微苦笑を浮かべて右手を伸ばし、未明の頬に触れた。
「……確かに俺たちは犯罪者だ。だがな……そうでもしなきゃこの現実の中ではやっていけない。誰も助けてもくれないし、救ってもくれないからな。ミハル、俺のことを軽蔑したか」
未明は首を横に振った。伸ばされた手を拒まず、目の前の男に撫でられるままに任せている。
「この国のことはあたしにはわからないです。いいことも悪いことも。でも、あなたは悪い人じゃない。あたしがわかるのはそれだけ」
「……」
静かな言葉にヴァリーは瞠目した。彼女を抱きしめたい。衝動が込み上げた。
が、その時、唐突に先ほどの未明の寝言が頭を過ぎった。
「なぁ、ミハル、お前、さっき……」
訊ねようとした矢先に、玄関のドアが威勢良く開く音がした。ヴァリー、と彼を呼ぶ幼い声が聞こえ、思わず舌打ちをしていた。
「ヴァル、帰ってたんだ。じゃあちょうどいいや、芋剥き手伝ってよ」
がさごそと音がし、大きな紙袋を手にゼノンが現れた。呆れたように口を開けるヴァリー。
「なんだ、その大荷物は。いったいどれだけ買い込んだんだ、これから四日間、毎日二十日芋を喰わせる気か」
「どうせ使うんだからいいだろ。それにヴァル、二十日芋の塩煮、大好物じゃん」
ゼノンはすましてナイフを彼に渡した。それから未明を振り返り、思い出したように言った。
「そうだ、ミハル。ミハルの穿いてたズボン、洗おうと思ったんだけど、ポケットになにか入ってたよ。切符みたいだったけど」
「え？　……切符？」

心当たりがなく、未明は首を傾げる。対して、芋を剥きながら肯くゼノン。

「うん。薄い空色みたいな色で、ちょっと変わった紙でさ。なんか木みたいな模様が入ってるの。あれ、切符じゃないの？」

未明が返事をする前に、がたん、と大きな音がした。ヴァリーが椅子を蹴立てて立ち上がっていた。顔色が変わっている。

「……ゼノン、そいつはいまどこにある？　この家の中にあるんだな、すぐに持ってきて俺に見せろ。いますぐにだ」

ただごとではない形相にゼノンは怯んだ。理由を訊き返すこともできず、剥きかけの芋とナイフを盥（たらい）の中に置くと、リビング兼寝室である隣の部屋へ走った。じきに戻ってきた彼は、一枚の紙切れをおずおずとヴァリーに差し出した。

それは、ゼーレンディア合陸連邦でも限られた人間しか持つことができないはずの「天上の切符（イグノード）」に違いなかった。

（※「二十日芋」……文字どおり二十日で収穫のできる小芋。救荒作物としてポピュラーな野菜）

# 第十九話　出帆

キニッサ湾の船着場に停泊しているウェス・ハーシュ家所有の気帆船「レモナ・ウィリーズ号」。二本マストに縦帆を張った、すっきりとスポーティなタイプの中型船で、家章を模った船首像（フィギュアヘッド）を除けば、装飾もそれほど華美ではない。ちなみにその名は聖書からの引用で、「神の祝福」を意味している。

「風を捉えればより速度も上がる。まずはロドアの南を下って行こう。小さな島国に上陸できるはずだ」

ジードの言葉に、そろそろ五十に手が届こうという寡黙な船長は短く応答する。

「ユアン・ルード（イエッサ）」

凪いだ海の上を白い海鳥たちがのんびりと舞う、穏やかな日和だった。ジードは船室には赴かず、甲板（デッキ）に出たまま、船乗り以外は滅多に使うことのない航海用の世界地図を開いた。

表向きの鎖国政策を採るゼーレンディア合陸連邦では、基本的に国民には世界のありようを教えない。それがここ数百年ほどの間に根付いた教育方針だった。大学府のカリキュラムでも、船舶の操り方は一部の、たとえばウェス・ハーシュ家のような特殊階級に属する学生しか学ぶことができないのである。

「この海路で行くと、最初に上陸するのは……エンザンテって国か」

ジードの隣にはアドリオがいた。彼もまた、船室にこもる気にはなれないでいたのだ。ジードは肯いた。

「人口十万ほどの小規模な都市国家らしい。我が連邦とはむろん正式な国交はないが、限定的に商取引は行われているとも聞く。政情はあまり安定していないという噂もあるがな」

特に内政がひどい。父、オルグ・ヴィネックがかつて語っていた

話だ。

「政府の方針に反発する地下勢力が結託し、密貿易や未許可での出入国の手引きを繰り返しているそうだ。やり方がひどく巧妙で、どれだけ海路関での取り締まりを厳格にしてもすり抜けられてしまうとか聞いたな」

そういったケースは、未成熟な国家ではとりたててめずらしい話ではない。アドリオは訊ねた。

「ミハルがいるかどうかを探り出すのに、どれくらいの時間がかかると踏んでるんだ、兄上」

「……むずかしいな。エンザンテの上層に面会を取り付けて協力してもらうつもりではいるが、国交がないという建前上、うまくいくかどうか……それに、そういった連中が国内のすべてを把握できているとはとても思えない。小さな国とは言っても、最低十日は必要だろう」

答えるジードの脳裏に、父と交わした約束の期日が浮かび上がる。彼にとってのリミットは一ヶ月。夏期休暇が終わる時が、捜索の終焉を意味している。

そのことを知っているのかいないのか、アドリオは異母兄をじっと見据え、こんなことを言い出した。

「兄上。俺はあいつが見つかるまでは絶対にあきらめるつもりはない。見つからないうちは連邦にも戻らないつもりだ。兄上がどういう覚悟でいるかは知らないが、それだけはいま伝えておく」

褐色を帯びた黒い瞳が、陽光を弾いて煌めいた。対するジードも一切怯みはしない。異母弟の真剣な眼差しを受け止め、ずっと気になっていたことを口にする。

「……お前はいつからミハルのことを？」

「もう憶えていない。……初めて会った時からかもしれないな、いま思うと」

彼はわずかに苦笑した。ウェス・ハーシュ邸の自分の部屋で、未明と最初に言葉を交わした時のことを思い出したためだ。屋敷に来

たばかりの、小柄で可憐な黒髪の娘に、ずいぶんと無体なことをしてしまったものだ。きっと彼女の印象は最悪だったに違いない。

が、その後、未明が自分の行方知れずの母親とどうやら同郷人らしいことがわかり、お互いの利害のためもあって、なにかと行動を共にする時間が増えた。言語を含む一般常識に疎い彼女にできる限りの知識を授け、様々な話をした。誰にも気づかれないように、こっそりと――数週間に渡って行われた秘密の授業は、なんと甘美で幸せな体験だったことか。

だがその日々も、未明が大学府への遣いを命じられて屋敷を出たあの日、唐突に終わりを告げた。出立前夜に頬にキスをしたことを、彼女はいまも憶えているだろうか。

アドリオは、自分の想いがもはや後戻りできないところまで来ていることを知った。異母兄であるジードもまた彼女に惹かれている。だが、彼にはウェス・ハーシュ家の次期当主としての責任がある。自分は違う。未明さえ自分を望んでくれるのなら、家など即刻棄て、どこにでも行くつもりだ。彼女と一緒に。

ジードは静かに答えた。

「私も、あきらめるつもりは毛頭ない。家も名誉もすべて棄てられる、いまならはっきり言える。ミハルがいない人生など、生きる価値はない」

二人の視線が真っ向からぶつかり合った。一人の女をめぐって対峙する二人の男――ひどく陳腐な構図といえばそのとおりだが、恋情に燃え上がっている彼らにはすでに外野の声など届きはしない。

その時、操舵室からやってきた水夫が、甲板で睨み合う二人の主君に船長からの伝令を告げた。

朝の二刻半（午前九時）、あたしたちを乗せた「栄光号（ヘレーデ）」は、なにごともなくカジュヌ港を出た。映画やテーマパークでしか見たこ

とがないような、古風な帆船だ。大きさは中程度で、だからこそ港の岩場にうまいこと隠しておけるんだろう。ちなみにこの船は、インヴォルタンの仲間の一人である、大工のリューイさんて男の人の手作りらしい。

出航前、あたしは乗組員のみんなに「お披露目」をされることになった。ただ、その内容がちょっと――あたし的にはかなり――問題を孕んでいたのだけど。

「みんな、知ってのとおり、俺たちの新しい仲間、アーマンドラの化身だ。名前はミハル。なにしろ生き神様だからな、俗世については知らないことの方が多いんだ。いろいろ教えてやってくれ」

ヴァリーはあたしの肩を抱きながらそう紹介した。集められた男の人たちの間から、どっと歓声が上がる。あたしはどぎまぎと頭を下げた。

「あの、えーと、ミハル・クゼです。ヴァリーの言うとおり、知らないこと、いっぱいあるので、迷惑かけるかもしれません。えと……よろしくお願いします」

「閨（ねや）のことなら頭領（ヘッド）に任せるがな、それ以外ならなんでも聞いてくれよ、アーマンドラ」

恰幅のいいおじさんが楽しげに声を張り上げた。なんのことを言われたのかわからずにきょとんとするあたしの隣で、ヴァリーはごほんと咳払いをしている。

「ああ、まあ、敢えて否定はしない。……お前ら、つくづく言っとくが、こいつに手なんか出すなよ」

途端に、嵐のような口笛や冷やかしの声が沸き起こった。……なんか、空気がおかしい。あたしはさすがに戸惑い、ヴァリーを盗み見た。彼はなに喰わぬ顔をしている。

「頭領、そんじゃあその……アーマンドラと夫婦（めおと）になったってことか？　本当に？」

船上がしん、と静まり返った。ヴァリーは厳かな口調でこう宣言した。

「ああ。――インヴォルタンの頭領と、海と戦の女神、アーマンドラだ。これ以上の組み合わせはないだろう」

彼はそう言うなりあたしのあごをつかみ、あろうことかいきなり――キスをしてきた。みんなの見ている前で、ていうかまさかヴァリーにそんなことをされるとはこれっぽっちも思っていなかったあたしは、完全に固まってしまい、まったく抵抗なんてできなかった。

「今日のこの日をあいつに知らせてやりてぇなぁ。お前の死んだ親父、ランセルロのやつによ」

乗組員の男の人たちはみんな大喜びで、中には涙ぐんでるおじいさんまでいる。あたしはぱくぱくと口をただ動かしていた。なにを言って否定したらいいのか、パニック過ぎて思い浮かばないのだ。

「そういうわけだ。とりあえず、俺はこいつを船室に連れて行くから、しばらくの間、航行は頼むぜ」

ヴァリーはみんなにウインクをすると、あたしを引きずって船艙（せんそう）に向かった。

# 第二十話　求愛

いちばん奥の船室のドアを開けると、彼は入室するようあたしを促した。あたしはしぶしぶ、中に入った。

そこは思ったよりも広い部屋で、簡素ながら机とか椅子とか、ダブルサイズのベッドなんかが置いてある。背後でドアが閉まる音がしたかと思うと、ヴァリーは後ろからあたしに覆いかぶさってきた。

「やっと二人になれたな……ミハル」

耳元で囁かれ、あたしは硬直した。なんで？　どういうこと、これ？

「俺の気持ちにまだ気づいてないのか？　同じ家で暮らしてたっていうのに」

拗ねるみたいな甘い口調。そんなこと言われたって、わけがわからない。だって、あたしはヴァリーのお家に一時的に居候してた厄介者に過ぎないし、第一、彼自身、あたしのことは完全に子どもだと思ってるって言ってたはずじゃ……。

「ヴァ、ヴァリー、あたしその、そんな……そういうつもりは」

「これからその気になってくれりゃいい。心配するな、俺だって少しは心得てる。けど……家じゃ正直、きつかったぜ。お前のことが四六時中頭から離れないのに、抱きしめることすらできないんだからな。ゼノンのやつも妙に目を光らせてやがったし」

その気ってどの気？　心得てるって……いったい、なにを？

「ミハル。俺はお前が好きだ。どうしようもないくらい、惚れちまった。俺のものに……なってくれないか」

熱っぽい声が聞こえた。ちょ……ちょっと待ってよ。なんでいきなりそういう展開になるの？　あたしは無我夢中で身をよじった。

「ヴァリー、待って。あたし、この船に乗った理由、日本に戻るた

め。そのためにはアーマンドラのふりした方がいい、ヴァリーがそう言うから、従った。でも、夫婦なんて聞いてない。同じ部屋、同じベッド、困ります」

「お前がアーマンドラなら夫婦のふりをした方がより自然だろ。そうなりゃ別室ってのもおかしな話だ。だが、お前が俺を受け入れてくれるまでは、無理やりはしない。誓うよ。だから同じベッドだってかまわないさ」

彼は両腕にいっそう力を込めた。あたしはほとんど悲鳴を上げていた。

「同じベッド、だめです！　あたし、この部屋、出ます。だから離して、離してったら」

その時だ。あたしは自分で自分のせりふに戸惑っていた。強烈な既視感。以前にも同じようなことを誰かに言ったような気がする。同じベッドはだめ、この部屋を出るって……でも、いったい誰にそんなこと……？

「ミハル……お前に訊きたいことがあったんだ。なぁ、ジードってのは誰のことだ？　元いた国の知り合いなのか」

あたしを抱きしめたまま、少し苛立ったようにヴァリーは言った。あたしは首を傾げた。ジード？　……それ、誰？

「この前、寝言でそう言ってた。ジード様、ごめんなさいってなんども繰り返してたぞ。なにを謝るんだ？　そいつはお前のなんだ、友人……じゃないな。主君かなにかか？　それともまさか……」

「知らない、そんな……そんなこと言ってない」

本当に心当たりがないので、あたしはそう言い張った。日本には外国人の知り合いなんていないし、こっちの国ではそもそも知ってる人自体がごくわずかだ。

「それに……お前が持っていたあの切符は、ゼーレンディアの最高機関が発行してるっていう恒久手形だ。親父にレプリカを見せてもらったことがあるから、俺にはわかる。一説によると、この世界全体が分断されてそれぞれの国交が表向き絶たれてからも、あの切符

さえ持っていればどこへだって渡れると――あらゆる地での永劫の免罪と権力を約束された印だと聞いたことがある。神の祝福を受けた証だからだってな」

あたしのジーンズのポケットにいつの間にか入っていたおかしな切符のことだ。どうしてそんなものを持っていたのかはまるで謎だった。色といい大きさといい、日本ではごく当たり前の電車の特急券か、そう、帰省の時に使った青春十八きっぷみたいにも見えたけれど。

「そいつを持ってたってことは、お前はやっぱりゼーレンディアの人間じゃないのか？　ゼーレンディアの貴族の娘……だとするとジードってのは、お前の……」

言いかけたせりふは、船がぐらりと大きく揺れたために遮られてしまった。あたしとヴァリーはバランスを崩し、船室の床に倒れ込んだ。絨毯なんて気の利いたものは敷かれていない。あたしは思いきり後頭部を打ち、顔をしかめた。――起き上がろうとして、それどころじゃないことに気づいた。

「ミハル……お前は俺の女だ。どこにも行かせない、そのジードってやつにももちろん渡すもんか。元の国に帰るなんて言うな、ずっと俺のそばにいてくれ。俺の女房になって、ゼノンと三人で……あの家でずっと一緒に暮らそう」

茶褐色の瞳が、ものすごく近いところからあたしを見下ろしている。あたしは焦った。

「ヴァリー、ヴァリー！　退いて、お願い、ねぇ、退いてってば」

「ミハル……愛してる」

彼の眉が切なげに歪んだ。こんな表情を見るのは、知り合って数日になるけれど初めてのことだ。一瞬言葉を失くしてしまったあたしの唇を、彼は素早く塞いだ。二度目のキス。さっき、みんなの前でされたのとは全然違う、深く潜水するみたいな激しいやり方で、ヴァリーはあたしの口の中を貪った。

「んん……っ」

あたしは呻いた。ヴァリーは海育ちのせいなのかすごく体格が良く、身長だって多分一九〇センチ近くあるんだろう。とてもじゃないけど力で敵う相手じゃない。――それよりなにより、重い！　ずっしりと圧し掛かってくる彼の身体は、ヘンな喩えだけどまるで巨大な土嚢みたいだった。振り払うことなんてとてもできそうにない。となると……全身から血の気が引いた。

この人のことはきらいじゃない、でもそういう風に見たことは一度だってない。大体あたしは、自慢じゃないけど処女なのだ。いくらなんでも、こんなレイプまがいのシチュエーションで萌えられるほど、プログレッシブな気質ってわけじゃない。

唇が離された隙を見逃さず、あたしは怒鳴った――情けないほどのかすれ声になっていたと思うけど。

「ヴァ、ヴァリー、さっき言った！　無理やりはしないって……誓うって、さっき」

ヴァリーの目が充血している。……餓えた獣のように。

「前言撤回する。俺は男だぞ。耐えられるわけがないだろう」

「ちょっ……」

あたしの身体がふわりと浮いた。船室の隅に置かれたダブルベッドの上に横たえられ、身を起こす間もなく、ヴァリーが覆いかぶさってくる。やだ、ちょっと……ちょっと待ってよ！

「ミハル、好きだ、俺のミハル」

荒い息が顔にかかったかと思うと、口づけが再開された。

「栄光号（ヘレーデ）」での船出はこれが初めてではない。だが、今回の航行は特別な意味合いを帯びている。

すなわち、将来の妻と心に決めた娘を随伴するということ。それは二週間ほど前、突然カジュヌ港に現れた異国の少女、未明（ミハル）だ。

同志の前でお披露目を済ませたあと、戸惑いを隠せないでいる彼

女を、旅の間は二人だけで過ごすことになる船室に導いた。ドアを閉めると、辛抱もここまでとばかりに背後から抱きつき、あらためて愛を告げた。本当はそのまま彼女を抱くつもりでいた。そもそも、こんな状況で我慢などこれ以上できるはずがない。

しかし、未明の反応は芳しくなかった。戸惑いのあとに示されたのは拒否。それも恥じらいによる表面的なものではなく、本心からの拒絶。少なからぬショックに襲われた。

同時に苛立ちが迸り、訊ねていた。――ジードというのはお前のなんだ、と。

彼女は憶えていないという。そんなはずはない。あんな風に切なく、しかも夢に見るほどの相手だ。忘れてしまったなんて信じられない。

元いた国での恋人か。それとも、もしもゼーレンディアから来たのだとすれば、尊称をつけて呼んでいた点から察するに、連邦の貴族階級に属する貴公子の名なのか。

……その男に恋をしていたんじゃないのか。

そう思った瞬間、彼は止まらなくなった。厭がる彼女の身体を組み敷き、口づけを繰り返す。魂を焦がすほどのこの感情の名前を、未明に会うまでは知らずにいた。

嫉妬。

元の国に帰りたがるのは、その男会いたさのために違いない。……だめだ、帰すもんか。お前は俺のものだ。愛してる、ミハル。囁きながら執拗に口の中を弄る。歯列を味わい、たっぷりと舌に唾液を絡める。軽い酸欠に陥ったらしく、唇を離すと彼女はぐったりと枕に沈み込んだ。息が上がっており、顔はまるで高熱に魘される病人のように真っ赤だ。ヴァリーは満足げに微笑んだ。

「ミハル、俺のキスでそんなに感じたのか？　……可愛いよ、もっと、もっと乱れてくれ」

こちらも赤く染まった顔で彼は言った。未明は力なく首を左右に振っている。

「や……やめ、て……お願い……」

こんな甘い声で、切なく歪んだ表情で懇願されて、撤退できる男などこの世にいるだろうか？　否、いるわけがない。ヴァリーは思わず舌なめずりをしていた。まだほとんどなにもしていないというのに、これまでの、どんな相手との情交よりも興奮していた。

「ミハル、お前、初めてなのか？　……そうなんだな、ああ……心配しなくていい。痛みは最初だけだ。俺が、お前を……お前を連れてってやる。気持ちよくさせてやる、だから、すべて俺に任せて……」

だが、そううまくはいかないようだった。船がふたたび大きく揺れ、二人はベッドから放り出されそうになったのである。じきに、彼らのいるこの船室に近づいてくる荒々しい足音がいくつも聞こえてきた。ドアをけたたましく叩くノックと、入り乱れる怒鳴り声。

「頭領（ヘッド）、頭領！　来てくれ、海の様子がおかしいんだ」

ヴァリーの顔色が変わった。

# 第二十一話　憑依

階段を駆け上がり、船上へ出た途端、荒れ狂う暴風雨がヴァリーを襲った。ぐらぐらと足元が揺れる。嵐だ。出帆の時、ほんの数刻前まではこれ以上なく凪いだ穏やかな海だったというのに、空一面には厚い黒雲がずっしりと垂れ込め、そのさまはとても同じ日とは思えぬほどの暗転ぶりだ。ヴァリーは傍らに佇む老漁師を見やった。

「どうなってんだ。この時期、海は一年でもっとも落ち着いているはずだろう」

「俺(おい)らに言われたって、知るかよ！　いや、確かにそうなんだ、だからこそアーマンドラを連れての船出の日に相応しいと……」

稲光が降り注ぎ、激しい雷鳴が鳴り響く。航海図を手にしたヘルが叫んだ。

「おそらく西大陸の南方から吹いてくる季節風のせいだ。数年に何度か、こういう変則的な嵐が起きることがあるんだ。だがこれほどでかいのは俺も初めてだ、なにしろここまで荒れちまうのにほんの瞬きするくらいの時間しかなかったんだからな」

見る見るうちに、豪雨が甲板を水で埋めていく。帆を下ろし、舵を取り、必死でこの場から退散しようと試みるも、荒ぶる自然の猛威の前では船はあまりに無力だった。船員たちの誰もが、最悪の事態を想定し始めた。

「――ミハル！　ばか、なんでここに……お前は船室に戻ってろ、放り出されちまうぞ」

いつの間にか甲板に現れた未明の姿に、ヴァリーはぎょっとして声を張り上げた。とはいえ、このままでは船が沈没してしまう。そうなったらむしろ船艙(せんそう)にこもっている方が危険だ。彼は立ちすくむ未明の腕を引き寄せ、その胸の中にしっかりと抱きしめた。

「大丈夫だ、お前は俺が必ず護る。心配するな」
安心させようとやさしく囁いてから、ヘルに向けて怒鳴る。
「ボートの用意だ！　船は棄てるしかない、脱出用のボートを出せ」
「頭領（ヘッド）、けど積荷はどうする？　すべて棄てるのか？　今回はいつもとは積載量が違うんだぞ。シルフだってこれまでにない量を積み込んでるんだ、あれを棄てるなんてとても……」
うろたえながらも未練を見せるシドン。ヴァリーは苛々と繰り返した。
「馬鹿野郎、一緒に沈んじまったら元も子もねぇだろ！　あきらめるんだ、さっさとボートを用意しろ！」
「その必要はない」
ヘルよりも先にヴァリーに答えたのは、誰も聞いたことのない、毅然とした声だった。男とも女ともつかぬ、ひどく冷静な、そして不思議なほど穏やかで、それでいて威厳に満ちた声。
――それはヴァリーの腕の中から発せられたものだった。
未明の髪が、こげ茶混じりの黒から薄い緑色に、肌が半透明に変わっていく。そして身体全体が金色の眩（まばゆ）い光をまとい、ゆらゆらと輝いている。ヴァリーは腰を抜かさんばかりに驚き、思わず腕の力を緩めていた。未明の変貌に気づいたシドンが、泡を喰ったように怒鳴った。
「そ、それだ、その光！　アーマンドラの光だ、あの時と一緒だ」
未明はヴァリーから離れ、際に向かって歩き出した。止めることすらできず、ヴァリーはただ呆然とその姿を見守った。アーマンドラの光。初めて会った時、確かに彼女が得体の知れない妖しい光に、まるで加護されているかのようにその身を包まれていたことを思い出していた。
やがて未明の口から、厳かな言葉が紡ぎ出される。
――荒ぶる大海の精霊（フィボニー）よ。我が名の下に、その震える御魂を治め鎮めよ。我は全能にして全生命の母、イグノディアス。我の言葉を

受け入れるがいい――

呪文なのか古代の祝詞なのか、彼女がなにを言っているのかは誰にも理解できなかった。だが、その崇高な空気に皆が圧倒され、危険な水際に寄ろうとするのを黙りこくったまま眺め、そして立ち尽くしていた。

数分後、変化が起こった。風が止み、波が治まり、雨の勢いが弱まった。やがて黒雲が引いていき、晴れ間すら覗き始めた。そして、未明の身体を覆っていたあの光も、だんだんと薄れていくのが見えた。完全に消えると同時に、彼女は甲板の上に崩れ落ちた。真っ先に我に返ったのはヴァリーだ。

「ミハル！　ミハル、大丈夫か？　ミハル、返事をしてくれ、ミハル」

頬には赤みが差しており、生気を使い果たしたというわけでもないらしい。彼は未明の上体を抱き起こし、安堵の息を深く吐き出した。

「おい、ぼうっとしてる場合じゃねぇぞ！　早く水を掻き出せ、でないと沈んじまう！」

ヘルの合図で船員たちも弾かれたように動き出す。ありったけのバケツを総動員し、甲板に行き渡った海水を船外に棄てる。四半刻（約三十分）も経った頃、ようやく「栄光号（ヘレーデ）」は船としての体裁を取り戻そうとしていた。これならすぐにでも元の航路に戻ることができる。

ところが、そう思った時だ。

「なぁおい……あそこを見てみろよ、あれ、沈みかけてやがるぞ」

望遠鏡で海路を確認していた仲間の一人が、素っ頓狂な声を上げた。彼の指差す方を全員が注目する。ヴァリーはその手から望遠鏡を奪い取った。

「――本当だ。どうやら局地的に嵐が起きていたみたいだな、おい、みんな！　救助に行くぞ」

異を唱える者は皆無だ。彼らはすぐにそれぞれの持ち場に着いた。四ノール（約十キロ）ほど前方でいままさに沈没しようとしている一隻の帆船に向かって、「栄光号」は全速力で走り出した。

嵐は去ろうとしている。だが壊滅的な被害を受けた小型帆船「ブロイーデ号（貴なる血）」は、すでに救える段階を過ぎていた。マストは折れ、甲板には大穴が開いてしまい、水が入り放題だ。それほど多くもない乗員たちは、船員の手引きに従い、水面に下ろされた脱出用ボートに次々乗り込んでいく。

「若君！　若君はどちらです？」

まだ船上に残っているうちの一人が血相を変えて叫び立てた。化粧っ気もなく健康そうな赤い頬をした、年端もいかないような素朴な少女だ。

「お捜ししているんだが、見つからないんだ。まさか、さっきの嵐のせいで……」

きちんとした身なりの中年の男が、青ざめた顔で答えた。少女は身を翻し、海上を見渡した。――じきに、その澄んだ青い瞳が大きく見開かれた。

「いたわ！　あそこ、あのままじゃ沈んじゃう！」

少女は悲鳴を上げた。彼女の指差す方向には、確かに彼らの主君である青年が波間に漂っているのが見えた。美しいプラチナブロンドの髪が、まるで海草かなにかのように頼りなく浮いては沈み、いましも海中へ引き込まれようとしている。少女はやみくもに怒鳴った。

「誰か！　若君が、カシアン様が溺れちゃうわ、助けて！」

だが船員たちは顔を見合わせ、互いに尻込みをした。無理もない。つい先刻、なんの前触れもなく船を襲った嵐のために、命を落としかけたばかりなのだ。せっかく助かったというのに、その余韻も生々しいうちに、主君とはいえ他人のために無茶な行為など、そう易

々とできるものではない。
助けが得られそうもないと踏み、少女は歯を喰いしばった。泳ぎに自信などまるでないが、少なくとも自分はいまこの屋敷に雇われていて、令息であるカシアンについてはお傍仕えを命じられてもいる身分だ。それなりの責任を負っている、そういう自負があった。彼女は思いきり息を吸い込み、海に飛び込もうと体勢を整えた。その意図を察したのか、先ほどの中年男の顔が強張った。
だが、少女の動きはまさに直前で止まった。
水面に揺れるプラチナブロンドが、ゆっくりと金髪に変化（へんげ）していくのが目に入ったからだ。
少女は息を呑んだ。その変化は髪だけに留まらず、カシアンが浮き沈みしている辺り一帯が、妖しげな、黄金色のような光にぼんやりと包まれ、明るい輝きを放っているのがわかる。
「……な……なに、あれ……」
ごくり、と唾を呑み込んだ。カシアンの身体が、光を帯びたままふわりと浮き上がるのが見えた。脱出を図り、すでにボートに収まっていた乗客や船員たち全員が、呆気に取られてその光景を見守っている。

あの光には……よもや意思があるのか。

最後まで船上に残っていた、この一行の責任者でもある男は知らずにつぶやいていた。光はゆらゆらと空間を移動し、用意されたボートの中央にカシアンを誘導した。やがてその身体が安置されるや、燭台の炎が吹き消されるような具合で光は失せた。
意識はないものの、彼は無事なようだった。だが、いま見たばかりの信じられない光景に、誰もが声ひとつ立てられないでいる。
この直後、数ノール程度離れた海上を航海中だったらしい帆船が近づいてきたのに気づいたのは、少女が最初だった。

# 第二十二話　女房？　正妻？

あと数日でバルネディア大陸に到着いたします。
……ご気分はいかがです、若君？　少しはその、ご気鬱の方も晴れましたでしょうか。
カシアンは鬱陶しげに首を振り、同行したウェス・ゴート本邸の執事補佐（ヴァレット）であるホヴァロンを下がらせた。
――今夜からは食事も要らん。いいか、港に着くまで私には一切声をかけるな。一切だ。
あの小娘にもそう言っておけ。

そう言い置くとベッドの中に潜り込み、夏掛けを頭から引っかぶった。四ヶ月にも渡る時間の無駄遣い。いまさらながら、あの時命を棄てられなかったことが忌々しくてならない。

そうだ。傷は浅かったというが、発見さえ遅れれば、もしかして初志を貫けたかもしれなかったのに。ヨナとか言ったか、あのおせっかいな小娘のせいで……。

数分が過ぎる頃、瞼の裏に、いとしい娘の面影がぼうっと浮かび上がった。ああ――ミハル、お前に会いたい。どれほど想えばお前にふたたびめぐり合うことができるのだろう。これ以上どれだけ神に祈れば、もう一度お前の身体に触れることが叶うのだろう。カシアンの表情が悲痛に歪んだ。
やがて、船が大きく揺れ、どうやら嵐に巻き込まれたらしいことがわかった。彼はのっそりとベッドから降りた。きっとこれは最後

のチャンスかもしれない。
未明に会えない人生の残り時間を清算するための。そう思い、そして迷わなかった。
船上はパニックに陥っていた。カシアンは静かに微笑みながら、眼下に広がる青い褥（しとね）を目指し、なんの躊躇（ためら）いもなく飛んだ。
――名前を呼んでくれないか。もう一度だけでいいから。

海は温かく、やわらかく、まるであの時少しだけ触れた未明の肌のようだった。幸せな想いが胸を包む。未明の髪に口づけた時に嗅いだ、甘くやさしい香りがした。

次に目を醒ました時、カシアンが目にしたのは、わずかに灯りの燈された中に浮かび上がる、「ブロイーデ号」のそれとは比べるべくもない、なんとも殺風景な天井だった。彼は露骨に眉をしかめ、薄暗がりの中で半身を起こした。身体がひどくこっている。これまでの人生でいっぺんだって寝転がったことすらないような、硬い木の寝台に横たわっていたためだろう。

……なんだ、ここは……ブロイーデ号ではないな。天井の低さや窓のないところを見ると、どうも船室らしいが……狭い。しかもひどく質素だ。我がウェス・ゴート邸の使用人部屋の方が、まだいくらかましだぞ。
いや、そんなことはどうでもいい。なぜ私はこんなところにいるのだ？　……まさか、また、失敗してしまったのか？

もはや舌打ちをする気にすらなれず、彼は寝台を降りた。海難事故に乗じて海に飛び込んだものの、間抜けにも救助されてしまったというところか。息をつき、頭を振り、のろのろと部屋を出る。
船艙は静まり返っている。夜になったのかもしれない。ぎしぎし

と音を鳴らす廊下を抜け、階段を昇り、甲板（デッキ）に出る。
一面の星空が目に飛び込んだ。やはり、とっくに日は暮れていたらしい。
カシアンは船べりに近づいた。いまなら確実に成功するはずだ。この粗末な帆船の乗員たちは皆、そろって眠りに就いているに違いないのだから。
が、その予想は外れた。
そこには先客がいた。

こげ茶混じりの黒く長い髪が、夜風に煽られてふわりと靡（なび）く。それを厭うように手で払いながら、彼女はゆっくりと振り向いた。

沈没した小型帆船「ブロイーデ号」の乗員の一人である十四歳の侍女、ヨナは、船内も静まり返った十刻半（午前一時）、数人のメイド仲間たちとともにあてがわれた船室をそっと抜け出すと、甲板に続く階段を昇った。
危機一髪のところを助けてもらったわけだが、それにしてもレトロなデザインの船である。ロドア大陸を南下したところにあるエンザンテという国から出航した商船とのことだが、バルネディアに寄港したところで上陸などできるのだろうか。なにしろ、各国の外交政策は、ここ数百年の間、基本的な鎖国という点で一致をみているのである。よほどの身分でもなければ、通行手形の発行など認められることは稀だ。

まぁ、それはどうでもいいんだけど。オサイオン市に戻ることさえできればね。
それよりも……あたしが心配なのは、若君。カシアン様よ。――あれ、絶対身投げだわ。事故なんかじゃない。

世にも不思議な光によってサルベージされ、一命を取り留めたものの、ヨナは内心で確信していた。その兆候ならいくらでもあった。旅が進めば進むほど、カシアンのふさぎ込みようはどんどんひどく、傍目にも手の施しようがないほどになっていったのだから。

おそらく彼は、助けられたことになんの喜びも見出せず、むしろ絶望感を強めただけだったろう。だからこそ、先ほど隣の部屋の扉が開けられる気配を感じたヨナは、厭な予感を封じ込められず、ついそのあとを追っていたのだった。

ところが、廊下に出たところで、別の人物と鉢合わせしてしまった。この「栄光号（ヘレーデ）」の乗員、ヴァリーだ。鍛え込んだ身体つきの、二十三歳の青年で、中々整った精悍な顔立ちをしている。なにより、きらきらと輝く意志の強そうな茶褐色の瞳がひどく印象的だった。

「こんな時間になにやってる？　トイレにでも行きたいのか」

彼は訝しげに訊ねてきた。露骨な子ども扱いに気を悪くしたヨナは、唇を尖らせて言い返した。

「違うわよ、お生憎。そういうあなたこそ、こんなとこでなにやってんのよ」

「……俺の女房がいつの間にか部屋を出て行っちまったまま、戻ってこねぇんだ。多分甲板にいるだろうから、連れ戻そうと思って」

彼は心なしか決まり悪そうに答えた。ヨナは思わず吹き出した。

「なによそれ。夫婦喧嘩？　見つけても戻ってきてくれないかもしれないわよ」

ヴァリーは顔をしかめた。

「厭なこと言うな、餓鬼のくせに。ほら、お前はもう部屋に戻っとけよ」

腕をつかまれそうになったヨナは、慌てて飛び退いた。

「そういうわけにいかないの、あたしだってちゃんと仕事中なんですからね。……うちの若君がいないみたいなのよ。きっと夜の空気を吸いに外へ出たんだと思うけど、なにしろちょっと不安定な人だ

から……」

青年の表情が微妙に曇る。彼はどこか焦ったように小走りで階段を駆け上がった。ヨナは慌ててその後ろに続いた。

小さな顔の中に形良く収まった黒い瞳が、驚いたようにカシアンを見ている。なにかを告げようとしてか、その唇がかすかに動いた。

しかし、言葉にはならなかった。

カシアンは駆け出していた。――未明のもとへ。文字どおり死ぬほど恋い焦がれ続けた、あのいとしい娘のもとへ。

小柄な身体を掻き抱き、腕の中に閉じ込める。……もう、なにがあっても、絶対に離しはしない。たとえこれが夢だったとしてもだ。彼は知らぬうちに泣いていた。涙が頬を転がり落ち、未明の髪を幾筋か濡らしていく。

「……ミハル……ああ……私のミハル……やっと、やっと会えた……」

ほとんど気が触れんばかりにつぶやき続け、両腕に力を込める。苦しいのか、未明がさかんに身をよじる気配が伝わってきた。だが、拘束を弱めた途端に逃げられてしまう気がし、カシアンはよりいっそう強く彼女を抱きしめた。

「は……離して……っ」

必死の反駁も耳には届かない。彼は未明のあごに手をかけると、唇を寄せるために顔を近づけた。小さな悲鳴が起こった。

その時だった。

「てめぇ、なにしてやがる！　俺のミハルに！」

甲板を打ち鳴らす、荒々しい足音が聞こえてきたかと思うと、ものすごい力で襟首をつかまれ、未明から引き離されていた。と思った瞬間、左頬に強い衝撃を感じた。いきなり現れたこの大柄な男に、渾身の一撃を喰らったのだ。カシアンはよろけ、甲板の上に膝をつ

いた。
「若君！　……ちょっと、やり過ぎよ、加減しなさいよっ」
泡を喰ったような少女の声が聞こえた。傍仕えの侍女、ヨナだ。
だが男の方も怒りは収まらないようで、ひどく猛々しい口調で言い返している。
「やかましい！　こっちは善意で乗せてやってるんだぞ、いますぐに海に放り出してやったっていいんだ。……おい、貴様、どういうつもりか知らねぇがな、こいつは俺の女房だ。次に手を出してみやがれ、こんなもんじゃすまさねぇぞ！　わかったらバルネディアに着くまでおとなしく船艙にこもってろ！」
一気に怒鳴り棄てたかと思うと、男は未明を引き寄せ、彼女の太ももの倍ほどもありそうな腕の中にすっぽりと抱え込んだ。肩で息をし、血走った目でカシアンを睨みつけている。
だがここで引く気などはカシアンにこそなかった。彼は起き上がり、まっすぐに男の目を見据え、恐ろしいほどの低音を響かせて告げた。
「……勘違いも甚だしいぞ。ミハルと私はすでに婚儀を挙げた仲だ。彼女は私の正式な妻だ。バルネディアに着きさえすればはっきりすることだがな」
このせりふには相当の破壊力があったらしく、男の表情が見る見る強張っていくのがはっきりわかった。
「なん……だと？　婚儀……じゃあまさか、てめぇ、ジードとかいう貴族の……」
思いもかけぬ名を出され、緑灰色の双眸が憎々しげに光る。
「ウェス・ハーシュ家に所縁（ゆかり）の名など聞きたくもない！　私はカシアン・レグノ・ウェス・ゴート。ウェス・ゴート家の次期総帥だ。ミハルは我が父に認められた、私の正妻だ」
ウェス・ゴート――ゼーレンディア合陸連邦の大貴族。その家名には聞き覚えがあったのか、男は喘ぐようにつぶやいた。
「ウェス・ゴート家の……正妻？　こいつの……ミハル、本当なの

か、それは」
カシアンはじっと未明を見つめた。当然、肯くものと信じ切っていた。
しかし、それは期待外れに終わった。
「し……知らない、人違いです。この人も、その家も、あたし、知らない」
――なに……？
カシアンの身体が硬直した。未明は困惑も顕わに男を見上げている。彼はその回答に心底ほっとしたようで、ばかにし切った眼差しをカシアンに放った。
「というわけだ。聞いたか？　お坊ちゃん。お屋敷ん中で妄想に励むのもいいがな、ちょっとは現実ってやつに目を向けることも大事なんじゃねぇのか？　ま、とにかく、ミハルが知らないって言ってる以上、てめぇとこいつは赤の他人だ。指一本触れるんじゃねぇぞ、次は容赦しねぇからな」
男はそのまま踵を返し、未明を連れて甲板を去った。そばには侍女のヨナだけが残された。船室に戻ろうとか、夜風は身体に毒だとか、その類のことをしきりに囀（さえず）っている。だが彼女の存在など、カシアンの目には初めから映ってはいなかった。
人違いです。この人も、その家も、あたし、知らない。
なぜ？　婚儀の実効力を否定されることはあっても、まさか見知らぬ他人扱いをされるとは夢にも思っていなかった。……なぜだ？
なぜミハルは、私のことを知らないなどと……。
それに――あの男はいったい、彼女のなんだ。女房だと？　ぬけぬけと、痴れ言を……よくも。

殺すか。

躊躇はむろんないが、しかし、この船に乗っているうちは得策とも思えない。あの男一人とってみてもそうだが、ブロイーデ号とは比べるべくもない下賤の連中が乗り込んでいるのだろう。仲間が殺されたとなれば、形勢は明らかにこちらが不利だ。

ともかく、バルネディアの港に着いてさえしまえば、ウェス・ゴート家の力で、彼女を無理やりにでも船外へ連れ出すことができる。いまはその時をひたすら待とう。

そうだ。そうすれば彼女は今度こそ本当に、自分の妻になるのだ。

その時が来さえすれば。

カシアンの唇に、かすかな笑みが浮かんだ。

# 第二十三話　エンザンテ、上陸

エンザンテの海路関での検問を受けたあと、ジードらを乗せた「レモナ・ウィリーズ号」は無事、オーズロ港に入港を果たした。一部の例外を除いては、おもに内国貿易のために設けられた、エンザンテの主要商港である。

「どうも、周辺の海域では局地的な嵐が起きていたみたいでしてね。いや、なにごともなく到着できてなによりですよ」

船長の言葉に、ジードは短く肯いた。時間は寸刻たりとも無駄にはできない。彼はアドリオをともない、港湾内に建てられている入国管理局へ向かった。

「我がエンザンテにようこそ。連邦のやんごとなきお方にお越しいただけるとは、光栄の至りですな」

二人を出迎えたのは、裾の長い臙脂のローブをまとった恰幅のいい中年男だった。だらんとした袖口からは、何本ものカラフルな組み紐が垂れ下がっている。やや風変わりないでたちではあるが、これがここでの正装なのかもしれない。

「突然の訪国の非礼をお赦しいただきたい。私はオルグ・ジード・レア・ウェス・ハーシュ。こちらは弟のアドリオ。到着早々申し訳ないが、すぐにでも貴国の政府上層の方々に目通りを願えまいか」

ジードの言葉に、男は意外にもあっさりと肯いた。

「よろしいでしょう。では、馬車を用意させますので。どうぞこちらへ」

管理局から移送された先は、都市国家エンザンテの政治の中枢、ヤーニン街区だった。往来の激しい広小路に面して、煉瓦造りの質素な庁舎が建っている。馬車はその真隣に停まった。

門衛に身分を明かし、中へ入る。通された部屋には数人の、明らかに要人らしき男たちが椅子に掛けていた。ノックに続いて室内に

姿を現した異国の若者二人を見るなり、彼らはいっせいに立ち上がって恭しく礼をした。

「管理局より連絡を受けております。ようこそ、ゼーレンディア合陸連邦からのお客人。私はこのエンザンテの副宰相を務めております、エッタイヤと申す者です。以後、よろしくお見知りおきを」

コ形のテーブルの中央に座していた、もっとも年配らしき濃紫のローブ姿の男が、ジードに向かって右手を差し出した。その手を握り返しながらジードは手短に訪国の口上を述べた。

「こちらこそ、エッタイヤ殿。私はオルグ・ジード・レア・ウェス・ハーシュ。それに弟のアドリオです。父はウェス・ハーシュ家の現総帥、オルグ・ヴィネック卿です」

声にならないざわめきが起こる。副宰相エッタイヤはわずかに微笑みを浮かべた。

「むろん、存じております。ところで、今回のご訪問は、ご遊興が目的ではないとか……」

ジードは肯き、用件を切り出した。

「ええ。単刀直入に申し上げますが、ある人物の捜索を依頼したいのです」

エッタイヤの眉がぴくりと動いた。

「ほう……それはまた。で、ある人物とは？」

「私の婚約者です。数ヶ月前に行方不明になってしまったのですが、ごく最近、事件に巻き込まれ、ロドアから貴国に舟で漂着したらしいとの情報を得るに至りました。ただし、どの町にいるのかまではわかっておりません。ついては、ぜひとも彼女の捜索にご助力願いたいのですが」

祖父の言う「海を渡った外国（とっくに）」がこのエンザンテかどうか、まだ確定したわけではない。ハッタリ混じりではあったものの、淀みのない口調でそう言い終えると、ジードはじっとエッタイヤの目を見つめた。おそらくは六十代半ばというところか。一見温厚そうな細い眼（まなこ）は、しかし、この副宰相が好々爺（こうこうや）とは呼びがたい、老獪な人物

であることも同時に感づかせてくれるような、鋭い光を放っている。
数瞬後（のち）、彼はどこかおかしそうに答えた。
「なるほど、そういうわけでしたか。ええ、むろんのことご協力は申し上げます。ただし、全面的にというわけには参りかねますが」
思わず前へ出ようとしたアドリオを制しながら、あくまで冷静にジードは訊ねた。
「どういうことでしょうか」
エッタイヤは、こほん、と小さな咳払いをしてから続けた。
「オルグ・ジード卿。五大陸でも有数の大貴族の次期総帥であられる貴殿なら、皆まで言わずともおわかりでしょう。我がエンザンテと貴国、ゼーレンディアとは、正式な国交がないのですぞ。貴殿らの訪問も、あくまで非公式なものです。それなのに国を挙げて力を尽くすとは、さすがの私もお約束しかねます。……逆であったとしても、おそらくは同じ対応をされるのではと推察しますが」
正論ではあった。だが、道理などこの際問題ではない。ジードは怯まなかった。
「では、滞在中、私たちは独自に貴国での捜索活動をさせていただきたいと思います。なにか情報が得られましたらすぐにご一報ください。しばらくの間は、オーズロ港に船を停泊させておきますので」
いい、ともだめだ、とも言われぬうちに、ジードはさっさと未明に関する資料を取り出し、彼に渡した。絵師に描かせた彼女の肖像画と、名前はもちろん年齢などいくつかの特徴が書かれた紙だ。受け取ったエッタイヤの顔に、かすかな賛嘆の色が浮かぶ。
「……ほう……これは。あまり見ないお顔立ちですが、さすがに貴殿のような方が選ばれるだけありますな。いや、可愛らしい」
ジードはわずかに微笑した。
「ええ。私にとっては、この世でもっとも気高く美しい女性です」
ミハル。待っていてくれ。
お前がどこにいても、私は必ずお前を捜し出してみせる。

たとえこの世の果てにいようとも、必ずだ。

彼は決意を新たにし、アドリオとともにその場をあとにした。

庁舎を出ると、ジードはすぐに辻馬車を拾った。彼に続いて乗り込んだアドリオは、どこか不機嫌そうな仏頂面を浮かべて黙ったままだ。

「旦那、どちらまで？」

「ああ、どこでもいいから、港町へ向けてくれ。いちばん近いのはどこだ」

「へっ？　えーっと……カジュヌの町ですかね。こっから二刻半（約五時間）、てとこですが」

「わかった。なるべく急いでくれ」

そりゃあお銭次第ですがね、とつぶやく声が聞こえ、じきに馬車は走り出した。

「外部の人間が上陸するには、港を介するほかないからな。すべてあたっていけば、必ず目撃者にぶつかるだろう。……どうした？　船旅で調子でも悪くしたのか、アドリオ」

アドリオは険のある眼差しで異母兄を見やった。

「気に入らないな。ミハルが兄上の婚約者だって？　大嘘もいいところじゃないか」

「嘘なんかじゃない。私は最初からそのつもりで捜索に臨んでる。出立前、父上からも了承を得ていることだしな。ミハルを連れ帰ったら夫婦として認めてやると」

異母弟の顔色が変わった。

「なんだって？　冗談じゃない。大体、兄上には許婚がいるじゃないか」

庶子であるアドリオには氷のように冷たい、あのいけ好かないノ

ルド家の姫巫女が。だが、ジードの答えはさらに意外なものだった。
「それもミハルを連れ帰りさえすれば破談にできる。私にとってはいまが人生の分岐点なんだ。あらゆる意味で、彼女を見つけ出せなければゲームオーバーだ。悪いがお前に勝てる余地はないぞ、アドリオ」
ジードの、緑碧の瞳が不敵に微笑んでいる。アドリオの胸に火が点いた——子どもの頃から、剣技でも体技でも、或いはキューズァロですらこの兄には勝てたためしがない。四つ年上の異母兄は、すぐれた外見もさることながら、その明晰な頭脳や大胆な判断力で、つねに弟の自分を上回っていた。
だが、今回ばかりは話が別だ。なにがなんでも負けるわけにはいかない。自信だってある。なにしろ、ジードが大学府に戻っている間、未明に「秘密の授業」を施したのは誰あろうこの自分なのだ。それになにより、未明はどうやら母、ミサキと同じ国の人間であるらしいこともわかっている。その息子である自分に対し、親近感を抱いてくれていたとしてもなんら不思議はない。
「俺は家も、この国も棄てられる。ミハルが望むのなら彼女の国ってところに行ったっていい。彼女が見つかったら、俺はすぐにでもプロポーズする。兄上、あんたはどうせ口だけだ。大した覚悟もないくせに、彼女を翻弄するようなことを言うのだけはやめてくれよ」
冷え冷えとした空気が漂ってきた。ジードの怒りが臨界点に近づこうとしている。アドリオの過ぎた言葉のせいであることは言うまでもない。
「……口だけだと？　覚悟もないだと？　この私がか。アドリオ、この際はっきり言っておくが、ミハルは誰にも渡さない。あの声も、微笑みも、爪の先から髪の毛一本に至るまで、すべて私のものだ。この私だけのものだ。むろん私も、彼女が見つかり次第正式にプロポーズするつもりでいる。軽はずみな発言は控えろ。次は弟だろうと容赦はしないぞ」
言い返したいのは山々だったものの、これにはさすがのアドリオ

も黙り込むしかなかった。
　車内にはロドアの真冬に匹敵するほどの冷気が流れ、その異様な気配が伝わったのか、二頭の馬を操りながらも御者はしきりに後方を気にし、首をひねっていた。

# 第二十四話　ゼノンの涙

ほぼ一年中温暖な気候が続くこのエンザンテでは、夏季の日の入りは一段と遅くなる。ゼノンは銅貨一枚をポケットに突っ込むと、七刻半（午後七時）を回った頃、カジュヌ港近くの市場へと買い出しに出かけた。この時間帯、売れ残りの野菜が安く手に入ることがあるのだ。

数日前、大量に買い込んだ二十日芋も、はや残り少なくなっている。少年の頬に、ため息混じりの苦笑がふと浮かんだ。

――ヴァルのやつが大喰らいだから、食費がかさむったらないよ。家族を新しく迎えようっていうなら、少しは考えてくれればいいのにさ。

本当はもうわかっていた。親代わりの同居人、ヴァリーが、海から連れ帰った異国の少女に恋心を抱いていることを。狭い家の中である。それでなくても単純な彼の思っていることなど、年齢よりも賢しげなゼノンの目には呆れるほど筒抜けだった。ただ、肝心の未明（ミハル）の方は、生来鈍感な性質（たち）なのか、ヴァリーが自分に向ける熱っぽい眼差しにはまるで気づいていない風情だったが。

ヴァリーを獲られたくない一心で、彼を好きにならないように釘を刺したこともあった。だが、未明ならいい。彼女は街の盛り場でヴァリーの気を引こうとする女たちとはどこか違っている。

……うん。ミハルならいいや。ヴァルと恋仲になっても。ヴァルと結婚しても。

もしかしたらすでに「夫婦」になってしまっているかもしれない。

なにしろ手の早い海育ちの男だ。ゼノンは赤くなり、頭を乱暴に振って気持ちを切り替えると、慌てて駆け出した。これ以上遅くなると店が閉まってしまう。

それが災いした。

角を曲がろうと飛び出した瞬間、街道をやってきた二頭立ての辻馬車とぶつかりそうになり、咄嗟に避けたものの、体勢を立て直すこともできず思いきり地面に転がされてしまったのである。天地がひっくり返り、ひどい衝撃に襲われた。馬の嘶き、蹄の音、慌てふためく大人たちの声。起き上がろうとしたところで、右肘に強い痛みを感じた。

「なんてこった、坊主、平気か？　おい、大丈夫か、ええ」

嘆息と悲鳴の混じった御者の声が聞こえ、同時に身体を抱き起こされる。ゼノンはなんとか気丈に答えた。

「へ、平気……こんなの、どうってことないよ……てっ」

御者の隣には、馬車の乗客らしい二人の青年の姿があった。どちらも背が高く、身なりが良く、そして驚くほど整った顔立ちをしている。

「血が出ているぞ。破傷風になったら大事だ、手当てをするから送っていこう」

灰色の髪をした、より長身の男が、いとも軽々少年を抱き上げた。驚きのあまり言葉も出ないゼノン。

「い、いいよ、手当てなんて。こんな怪我くらい、舐めとけば治るよ」

慌てて降りようとするも、青年は頑として聞き入れない。

「自分の肘を自分で舐めるのはむずかしいぞ。いいからおとなしくしていろ。家はどこだ」

「……カジュヌ港近くの小屋。ここから港に向かって東にちょっと行ったとこ」

「よし」

青年は目を細め、肯いた。ゼノンがこれまでに見たこともない、

それはまるで宝石みたいに澄んだ緑碧に輝く瞳だった。

少年の案内で馬車を走らせるうち、やがて一軒の粗末なログハウスが見えた。そこが彼の家なのだという。

「お前、独りで暮らしているのか」

彼に誘われて室内に入った灰色の髪の青年――ジードが、訝しげに訊ねた。問われるまま、少年は首を横に振る。

「親代わりの同居人がいるよ。それから、近々結婚する予定なんで、その相手の女の子も一緒に」

答えを聞き、青年は少し安心したように微笑した。

「そうか。私はオルグ・ジード。こっちは弟のアドリオだ。お前は？」

「えっ……あの、ゼノン」

彼はどぎまぎと答えた。

「兄上、先にゼノンの手当てをしてやらないと。水場はどこだ？」

そう言ったのは黒髪の青年、アドリオだ。ゼノンは彼をリビングの隣室であるキッチンに促した。それに続こうとしたジードの足がふと止まり、同時にその目が大きく見開かれた。

「――これは……」

リビングの隅に置かれたベッドの上に、彼の視線は注がれている。いや、より正確に言うなら、きちんと洗濯を済ませて畳まれた、見慣れぬ意匠の衣類にだ。ふらふらと吸い寄せられ、無意識のうちに手が伸びた。

冬物らしく首元と袖の長い、シンプルなデザインの赤い上着。それに、帆布のような手触りの、ごわごわとした生地の青いズボン。どちらもこれまで目にしたことはない。

――だが、奇妙な既視感があった。ロマド市のカルマ駅で、初めて未明に会った時、彼女が身にまとっていたなんとも奇妙な服に、

それは不思議と似て見える。
彼は震える手で、その衣類を掻き抱いた。
「なにしてるのさ、ジード！」
水場から戻ってきたゼノンの素っ頓狂な声が聞こえた。その右肘部分には、元はアドリオの持ちものだった白いハンカチが巻かれている。ゼノンはジードのそばに駆け寄ると、憤慨したように抗議した。
「もう、せっかく畳んでおいたのに……なんで広げちゃうのさ。そりゃ、ちょっとめずらしい服なのはわかるけど、女物だし、ジードには関係ないだろ」
彼の手元からそれら衣類を奪い返そうとし、ゼノンはふと眉をひそめた。
「ジード？　どうしたのさ、固まっちゃって」
「兄上？」
アドリオまでがなにごとかと覗き込む中、ジードは渇いた声を絞り出し、ゼノンに訊ねた。
「ゼノン。――これは誰の服なんだ？　女物だと言ったな。両方ともか？　……もしや……ごく最近、異国から舟でここに漂着したという娘はいなかったか。少しこげ茶色の混じった、つやのある黒髪で、瞳も美しい黒で、外国訛りの言葉を話す、十六くらいの……私の……」
ゼノンはどこか怯えたように後退った。
「し、知らないよ、そんな子。それは……その服は、ヴァリーのお嫁さんになる女の子のために買ってきた古着なんだ。だから返してよ、ジード」
彼の言う異国の娘の特徴は、すべてあの居候の少女に当てはまる。
――本当のことを言っちゃだめだ。きっとこの二人はミハルの知り合いで、ミハルを捜しに来たんだ。もしもここにいるってばれたら、いまはいないけど、でも戻ってきたらすぐに連れていかれちゃう。
そんなのだめだ、だって、ヴァリーは彼女のことが大好きなんだも

の。結婚しちゃうのは淋しいけど、ミハルならいい。ぼくたちは、三人で幸せに暮らせるはずなんだ。だから本当のことなんて、絶対に言うもんか――ゼノンはその小さな拳をかすかに奮わせた。

「ヴァリー？　さっき言っていた同居人の名か。ゼノン、教えてくれ。その娘の名は――」

「違うって言ってるだろ！　出てってよ、二人とも。これ以上いられたら迷惑だよ、さあ、出てってってば」

少年は必死の形相で言い続けた。その態度は、彼がなにかを知っていることをはっきりと示していた。ジードに倣い、説得に出ようとしたアドリオは、続いて異母兄が取った行動に絶句した。

ジードは、片膝を床につき、頭(こうべ)を垂れ、静かな、だがあまりに真摯な口調でこう言った。

「ゼノン、頼む、教えてくれ。私は、私とアドリオは、ゼーレンディアから彼女を……ミハルを捜しに来たんだ。彼女は以前、ある事件に巻き込まれ、行方知れずになってしまい……それから私はずっと彼女を捜し続けてる。むろんこれからも、見つかるまでは永遠に捜し続けるつもりだ。

もし、もしもここに彼女がいるのなら、頼む。……私と会わせてくれ。私に、彼女を返してくれ」

断罪を待つ罪人(とがびと)。父、オルグ・ヴィネックにする以外に、彼がこんな姿を晒したことなどはこれまでにない。

「兄上……」

アドリオはただぼんやりとそのさまを見守った。彼の知るジードは、名家の長子として、並以上に高い矜持を持つ男だ。属する階級によって他人を見下したりはしないが、決して媚び諂(へつら)ったり、ましてこんな風に誰かに頭を下げることなど、そうそうは考えられない。それもこんな、年端のいかない子ども相手に。

不意に、移動中の馬車の中で聞いた、ジードのせりふが脳裏をかすめた。人生の分岐点。だからお前に勝機はない、と。

アドリオは頭を振った。退却などもってのほかだ。未明を好きな

気持ちは、ほかの誰にも負けてはいない。
「ゼノン、俺からも頼む。俺たちはどうしても彼女を連れて帰らなきゃならないんだ。その代わりに望むものがあるなら、言ってくれ。このエンザンテの貨幣じゃないが、金貨なら少しは持ち合わせてる。なぁ、頼む、ゼノン」
「お金なんか要るもんか」
ゼノンはぽつりと言い捨てた。彼はジードを睨みつけた。
「なんで……なんで来ちゃったのさ。せっかく、ヴァリーが……ヴァリーが好きな子と一緒になって、三人で幸せになれるはずだったのに……あんたたちはどうせ、なんでも持ってるんだろ。なのに、どうしてなにも持ってないぼくから、ぼくやヴァリーから、ミハルまで奪おうとするのさ」
黄褐色の瞳から、ぽろぽろと涙がこぼれ落ちた。ぼろぼろのサロペットの裾を震える手で握りしめ、嗚咽をこらえながら彼はつぶやいた。
「ミハルが……いるんだな。ここに」
ジードは飢えたように言った。ゼノンは乱暴に涙を拭うと、首を横に振った。
「いまはいない。ヴァリーと一緒に船で出かけてる。戻ってくるのは多分、二週間後だ」
「船？　どこに？　国内か、それとも――」
「……ゼーレンディアだよ。どこの港かまでは知らないけど」
ジードの顔色が変わった。
「ゼーレンディアだと？　エンザンテとの商取引は、ごく一部にのみ限られているはずだが……」
交易都市ロマドにも、時折エンザンテからの商船が訪れることはあるが、回数はきわめて少ない。しかも相手は必ず決まっている。エンザンテの上層にコネを持つ、富裕な豪商だ。
「そうか……わかった。ゼノン、よく話してくれたな。心から礼を言うよ。ありがとう」

ジードは微笑んだ。ゼノンは目を逸らしたが、教えてしまったことに対し、不思議と後悔は感じなかった。

なぜなら、未明はずっとどこかに帰りたがっていた。

その場所が、もしかしたらこの男のもとなのかもしれない。

ヴァリーはさぞがっかりするだろう。彼のために、しばらくは好物料理でも作ってやらなければ。鼻をすすり上げながら少年は思った。

## 第二十五話　本気の恋

エッタイヤ副宰相に面会するべくヤーニン街区にとんぼ返りしたものの、時刻はすでに深夜。用意された賓客室で、ジードとアドリオは文字どおり、眠れぬ夜をじりじりと過ごした。二人の胸を去来していたのは、カジュヌの町で知り合った少年、ゼノンがなにげなく漏らしたあの一言だった。

――親代わりの同居人がいるよ。近々結婚する予定なんだ。その相手の女の子と一緒に暮らしてる。

寝台に浅く腰掛けたまま、ジードは頭を掻き毟った。とても眠れるような気分ではない。

ゼノン少年が言うには、数週間前、未明は近海を漂流しているところを地元の漁師に助けられたとのことだった。漁師仲間の間で、頭領（ヘッド）と慕われている彼の同居人――それがヴァリーという名の二十三歳の青年であるらしい――が、独断で彼女を浜から連れ帰り、やがて親しくなるうち、結婚を考えるようになったとも続けた。去り際、ゼノンは泣きべそをかきながら二人に訴えた。

ヴァリーはミハルのこと、すごくすごく好きなんだ。……どうしてもゼーレンディアに連れて帰っちゃうの？　ぼく、あいつが悲しむところ、やっぱり見たくないよ。

ジードは顔を覆い、深いため息を吐き出した。

――なぜ、私のもとでなく、誰とも知らぬ異国の男のもとに身を寄せるなど……私がこれほど恋い焦がれているというのに、どうし

て彼女はゼーレンディアに、ウェス・ハーシュ家に戻ろうとしてはくれなかったのだ。まさか、命を助けられたことで、情が湧いたのか……そのヴァリーとかいう男にか？　……よもや、本気でそいつと添い遂げようなどと思っているわけではないだろうな。

彼はいつしか目を閉じていた。夢の中で未明と肌を重ねた、一夜（ひとよ）限りのあのあまりに甘い記憶が胸のうちにやるせなく蘇る。

愛してる。ほかにはなにも要らない。なにも望まない。

戻ってきてくれ。私のこの両腕の中に。

知らぬ間に時は過ぎ、白々と夜が明けていく。眠れるはずもないと思っていたジードの頬を、一筋の涙が伝い落ちた。その瞼の裏側では、最愛の少女の面影が、時にやさしい微笑みを浮かべながら、真夏の陽炎のようにゆらゆらと頼りなく揺らめいていた。

あと七刻（約十四時間）ほどで、目的地であるバルネディア大陸の第一海路関、マージュオン港に到着する。ゼーレンディアにいくつか存在する商港の中でももっとも大きく、もっとも活気のある、連邦の要衝港湾だ。

だというのに、ヴァリーの心はなぜか晴れなかった。彼は船室の床の上に乱雑に広げた、古びたマットレスの上で苛々と寝返りをうった。そう、この状況も、そもそも彼の抱える煩悶の原因のひとつだった。

すぐ隣の寝台の上では、彼が心からの恋慕を寄せる娘、未明が、安らかな寝息を立てている。ヴァリーは彼らしくもなく、思わず大きなため息を漏らした。

同じベッド、絶対、だめです！　あたし、この部屋、出ます。倉庫でもどこでもいいです。

熱っぽい眼差しで強引に同衾を迫るヴァリーを、未明は頑として退けた。しかしこの部屋から出すなどもってのほかだ。最大限の譲歩を見せ、寝床だけは別々にするという訴えをしぶしぶ呑んだ。それでもあきらめきれず、追いすがるように詰問していた。

――聞かせてくれ。お前は俺のことをどう思ってる？　好きか？　なぁ、ミハル、教えてくれ。

未明は寝台の隅に追い詰められながらも、遠慮がちに答えた。……ヴァリーは、いい人。助けてくれて感謝してます。でも……そう口ごもり、目を逸らす彼女の仕草に、ヴァリーは落胆を隠せなかった。恩人に対する好意。未明が自分に対して抱いている気持ちは、それを超えるものでは決してない。

その上、つい五日ほど前、ヴァリーの焦燥をさらに煽る事態が船内で発生していた。バルネディア大陸に帰還する途中で難破した小型帆船「ブロイーデ号」の乗員の一人が、あろうことか自分は未明の夫だと宣言したのである。未明自身は身に憶えのないことだと言ってはいたが、もしかしたら、彼女は一時的な記憶喪失に陥っているのかもしれない。あの男が夫だなど信じたくはないが、少なくとも顔見知りである程度の可能性は否定し切れない。

マージュオン港に着きさえすればわかることだ。ウェス・ゴート家の若き次期総帥と名乗るあのカシアンという男は、そう言い放ち、不吉に哂っていた。あれから未明に接近してくる様子はないが――ヴァリーが片時もそばから離さないようにしているせいもあるだろう――つねにつきまとう漠然とした不安を、彼は拭い去ることができずにいた。

ヴァリーは上体を起こし、薄闇の中で未明の寝顔をそっと盗み見

た。

品良く整った、けれどどこか幼さの残る、可愛らしい顔だ。そういえば年齢すらまともに聞いていないが、こうやって静かに眠る姿は、どう見てもごく当たり前の十代の娘にしか見えない。

だが、あの時――出航して間もなく変則的に発生した嵐に巻き込まれ、船が沈没しかけた時、身体中から不思議な光を発散し、ヘレーデ号の危機を救ったのも、まぎれもなくこの未明だ。仲間の誰もが彼女をアーマンドラの化身だと確信した瞬間だった。

エンザンテに語り継がれる古い伝承。海と戦の女神、アーマンドラ。……本当にそうなのだろうか？

「……う……ん……」

小さな呻き声が聞こえた。はっとして目を凝らすと、未明の表情が苦しげに歪んでいるのが夜目にも見て取れた。

「ミハル？」

ヴァリーは思わずつぶやき、彼女の頬に手を伸ばした。

「……さま……ジード様……あたしも……」

ぴくり、とその手が揺れ、止まった。まただ。ウェス・ハーシュ家とかいう、ゼーレンディアの貴族の御曹司の名。ヴァリーは舌打ちし、聞こえていないと知りつつも恨みがましい口調で囁いていた。

「ミハル、そいつはお前のなんなんだ？　……恋人なのか？　どうしてそんなになんども……それも、そんなに切なそうな顔をしてそいつの名を呼ぶんだ。あのカシアンってやつにしろ、そいつにしろ、お前は知らないと言ったじゃないか。なのに、そうやって夢の中では会ってるのか？　俺がここに、お前のすぐ隣にいるっていうのに……お前って女は、ほんとに残酷だな」

いますぐこの薄い掛け布団を剥(は)いで、彼女を自分のものにしてしまえば。そうしないで耐えている自分のことが、ヴァリーには我ながら信じられなかった。

自慢じゃないが手は早い。カジュヌの下町で育ち、十三で父親を亡くしてからは、大人とほぼ同じ世界で生きてきた。酒も煙草も、

もの心つく頃には覚えていた。女を知ったのはやっと十四の頃。それからいったい何人の女を抱いてきただろう。気に入った相手なら、口説くのに躊躇など不要。ベッドをともにするまでの平均所要時間は一日半。それが彼の掲げる男としての哲学でもある。

本気の恋はつらいもの。ヴァル、覚悟しておけよ。

父がいつかそう言っていた。キューズァロを片手に、仲間たちと酒を交わしながら。当時十かそこらだったヴァリーは、その言葉を鼻で哂い飛ばしたものだ。俺はもてるから、女なんて選り取りみどりだよ。つらい恋なんて誰がするもんか。そう言って、ヘルに頭を叩かれた。生意気言いやがって、この餓鬼！　仲間たちがどっと笑い転げ、彼は茶目っ気たっぷりに舌を出してみせた。

そんなことよりも父さん、俺にも教えてよ。父さんの秘技ってやつを。俺は二代目なんだろ？

父は黙り込み、じっと彼の息子を見つめ、そしてつぶやいた――そうさな、そろそろ、時期ってやつが来たのかもしれねぇな。想い出が、大波のように押し寄せ、心の埠頭にぶち当たっては砕け散る。ふと、眉根を寄せた。未明のことを考えていたはずなのに、なぜ、昔のことばかり想い出されるんだろう。

それが亡き父の静かなる警告であったと彼が気づくのは、マージュオン港に到着したあとのことだった。

# 第二十六話　不測の事態

水平線の彼方に日も沈みかける頃、中規模商用船「ヘレーデ号」は、バルネディア大陸の第一海路関であるマージュオン港にどうにか接岸を果たした。

まずは、航海途中で拾った「ブロイーデ号」の乗員たちを速やかに下船させる。本乗員であるヴァリーたちが降りるのはそのあとだ。なにしろ今回は、通常の二倍近い貨物を抱えている。荷役（にやく）には相当の時間がかかるだろう。

だが、ここでヴァリーを始めとするインヴォルタンの思惑は、大きく狂うことになる。

「なんだって？　もう一度言ってくれ」

ヴァリーは声を荒げ、対応した係官に詰め寄った。その手には、無情にもつき返された一枚の通行手形が握られている。前回の航海でも使用した、対マージュオン港向きの「特別製作品」だ。

四十代と思しき見慣れない係官は、冷ややかな一瞥を彼に――ヘレーデ号の乗組員たちに投げつけた。

「海路通行証は十日前に変更されている。これは旧式のもので、上陸を許可するわけにはいかない。これで納得がいったかね」

「なんだと……おい、いつもの係官はどうした？　ザイマンだよ。あいつを出してくれ」

ヴァリーの言葉にも係官はいっこうに怯まなかった。鼈甲（べっこう）ぶちの鼻眼鏡（バンスヌ）をわざとらしげに中指で持ち上げ、頬にはかすかな蔑笑を浮かべてさえいる。

「彼（ザイマン）は配置換えになったんだ。彼でなければ具合が悪いとでもいう

のか？　……ともかく、この手形は使えない。わかったらとっとと郷国（くに）に帰るんだな」

そう言うと、彼はさっさと踵を返してしまった。ヴァリーらヘレーデ号の乗組員たちの間に、困惑と失望、落胆のざわめきが瞬く間に広がっていく。……なんのためにここまで来たんだ？　なぜ、いつもは問題なく通過できる関所が、今回に限って抜けられないんだ。

この時、仲間の一人であるヘルの目が、なにかを思い出したかのように大きく見開かれた。彼は肩に引っかけたぼろぼろのズタ袋からとっさに浅葱（あさぎ）色の紙切れをつかみ出し、やみくもに叫んだ。

「ま、待ってくれ！　……こいつを見てくれ、これなら問題ないだろう」

係官とヴァリーは同時に振り返った。ヘルの手元を見やったヴァリーの表情が、さっと強張った。

「ヘル、そいつは――」

「貸したまえ」

係官の手が伸び、ヘルから紙切れを奪い取る。彼の顔色が、みるみる変わっていく。

「……これは……」

緊張に満ちた面持ちで、係官はヴァリーらをじろじろとねまわした。やがて彼は言った。

「――なるほど、そういうことか。わかった。少し待っていてくれ」

言い残し、港湾局に向かって走っていく係官を、ヴァリー以外の男たち全員が安堵の表情で見送った。ヘルは破顔し、若き党首の肩を叩いた。

「さすがだ、頭領（ヘッド）！　あれはまさに錦の御旗だな。噂にゃあ聞いてたが、ここまで効果があるとは思わなかったぜ」

だがヴァリーの表情は晴れない。眉間にしわを刻んでなにごとか考え込んでいる様子の党首に、シドンが声をかける。

「どうしたんだ、頭領？　なんかまずいことでも？」

「……なんであれがここにある？　ヘル、お前、なんであれを持ち

出したんだ。俺に黙って」

ヴァリーは顔を上げ、厳しい口調でヘルを問い詰めた。思わぬ言葉に彼はうろたえた。

「なんでって……あれはジョーカーなんだろ？　あの手形さえ持ってりゃ、この世界中どこでなにをしようが自由だって。俺もそりゃ本物は知らねぇが、倉庫（アジト）の地下にあれをこさえて隠してあるのは知ってたからよ。ヴァリー、お前が造ったんだろ？　そうだ、造ったのになんで持ってこようとしなかったんだよ。俺はてっきり――」

「あれは軽々しく使えるもんじゃねぇんだ！　連邦の下で発行履歴がすべて管理されてるんだぞ。どんなに巧妙に造ったところで、偽造品だってことはすぐに知れちまう。だから俺は敢えて持ち出さなかったんだ」

ヘルは絶句した。が、彼を庇うようにして、仲間たちから次々声が上がる。

「おかしいじゃねぇか、使う気もないならなんで造ったりしたんだよ」

「そうだ、それに、現にあの係官のやつ、目の色変えやがったぜ。きっとうまいこと騙されたんだ、間違いねぇよ」

ヴァリーは苛々と頭を振った。

「あれを造ったのは、あくまで俺自身の技術向上と、ゼーレンディアの偽造防止技術を知るためにだ。実際に使うなんて危険過ぎる。……騙されてくれたんならそれでいいが、しかし……」

乗員たちのいちばん後ろに控えていた未明は、襲い来る不吉な予感に自らの身体を抱きしめた。あの切符を――携帯していることすら気づかなかったとはいえ――エンザンテに、インヴォルタンに持ち込んだのは自分だ。それをもとにヴァリーが贋造を試したというなら、責任の一端は自分にもある。血の気が引き、顔色が青ざめていく。

その不安はじきに現実となった。やがて現れた十数人の男たちによって彼らは取り巻かれ、身柄を拘束されてしまったのである。港

湾局の局長であるらしい白髪の男は、さっきヘルから押収した「天上の切符（グノード）」を指先でつまみ上げ、憎々しげに言い放った。

「まったく、よくできた紛（まが）いモノだな、ええ？　どこで本物を見かけたんだか知らんが、よくもまぁここまで巧妙に模造できるもんだ。その技術には実際、敬意を表したいくらいだよ。……しかしな、この切符は、そこいらの手形とはわけが違うんだ。真似りゃあいいってもんじゃない。正規に発行されたものでなければ、使うことすら叶わんのだ。貴様らがこうしてお縄になったようにな。それくらい、非常に畏れ多い切符なのだぞ」

後ろ手を縛られ、身動きを封じられながらも、ヴァリーは怒りと屈辱で血走った眼差しを彼に向けた。対する男の顔にあからさまな嘲笑が浮かぶ。

「ははは、悔しいか。このならずものどもが！　ウェス・ハーシュ卿のお言葉どおりだな、費用対効果は圧倒的に低いと思われたが、こうして人員を投入するだけの見返りが充分にあったのだから。……ああ、卿には早速ご連絡を差し上げねばな」

彼はどこかうきうきと高揚した様子で港湾局へ戻ろうとし、慌てたようにやってきた下っ端の係官になにごとか耳打ちをされ、ぴくりと足を止めた。

「……なに？　あのお方がか？　しかし、ここには……」

十五名の乗組員たちを訝しげに見回していた彼の目が大きく開いた。その視線の先には、こんなむくつけき集団にはあまりにふさわしくない、黒髪の可憐な少女の姿があった。

「――あの娘か。まぁ、あの方がそうお望みであるなら……道を開けよ！　そこの娘、お前にはこやつらとは別に聞きたいことがある。こっちへ来い。さっさとせんか」

ヴァリーの顔色が変わった。身をよじり、噛みつかんばかりに青筋を立て、男に向かって激しく吼える。

「ミハルに手を出すんじゃねぇ！　貴様、こいつになにかしやがったら、殺してやるぞ！　ミハル、逃げてくれ、ミハル！」

「ヴァ……ヴァリー、やだ……っ」
顔を歪ませて抵抗するも、男数人がかりで捕らえられてはとても敵うものではない。未明は籠の鳥さながらに自由を奪われ、彼らによって何処(いずこ)へともなく連行されていった。
「ミハル！　ミハル……畜生！　ミハル、待っててくれ。必ず、俺が助けに行くからな、ミハル！」
悲痛な叫びが、暮れなずむマージュオン港に響き渡った。

# 第二十七話　絶体絶命

マージュオン港に設けられている港湾局の局長、ルドニクから連絡が来た時、ヴィネックはちょうど、ウェス・ハーシュ邸の玄関ホールに向かうべく、中央階段を降りている途中だった。

「旦那様、お館様！　お出かけになる前でようございました、港湾局のルドニク様からお電話が入っております」

執事のレンドルスが、神経質な声で彼を呼びつける。ヴィネックは舌打ちし、頭を掻いた。

「どこがよかったんだよ、まったく……息抜きくらいこっちの好きな時にさせてくれ。せっかく小うるさい坊主（シグノ）のやつが外出してるっつうのに」

「は。なにやら喜ばしい一報があるような口ぶりでございましたが」

畏まってそう告げるレンドルスを横目に睨みつつ伝令室に入り、壁のホルダーから受話器を毟り取る。椅子にもかけず、咳払いをしてから口を開く。

「ああ、ヴィネックだが。なんだ？　なにかあったのか、港で」

『これはオルグ・ヴィネック卿！　その後お変わりもありませんようで、なによりでございます』

見えていないと知りつつ、ヴィネックは顔をしかめた。

「用件があるならとっとと言ってくれ。新しく作った通行手形のことで、トラブルでもあったのか」

『いえ、そんな滅相もない！　それどころか、まったくの逆でございますよ。あれのおかげで、でかいネズミが網にかかったんでございます、つい先ほど』

「あ？　ネズミだって？」

訝しげに眉根を寄せるヴィネック。ルドニクは思い入れたっぷりに間を置き、告げた。

『……インヴォルタンでございますよ。エンザンテから商売でもしに来たんでしょうが、生憎、やつらとつながりのあった係官はとっくに免職処分にしておりますのでね。そこでまごついていたところ、よっぽど焦ったんでしょうねぇ、やつらなんとあれを出してきたんですよ。……恒久手形の複製を』

「……なに？　本当か、それは」

ヴィネックの表情が瞬時に引き締まった。受話器の向こうでは、ルドニクが満足げに話を続けている。

『ええ、ええ。まさか馬鹿正直に複製を使うはずもない、だがインヴォルタンの末端組織に手形が流れるという可能性もある、と卿が以前おっしゃっておられたでしょう。商取引の活発化する夏の間だけでもと、配置人員数の拡大を図ってはおりましたが、まさにそれが的を得たわけで。ここから芋づる式にやつらの組織を潰していけるでしょうな』

ヴィネックは壁にもたれ、あごを撫でていた――思索に耽る時に見せる、彼の息子と同様のくせだ。

『しかしインヴォルタンというのはまったく、ごろつきの集団というか……なんともつかみどころのない連中ですな。男ばかりかと思っていたら、場違いに小娘が混ざっていたりしましてね。まぁ、どこぞの港で後ろ暗い取引にでも使おうという腹だったのでしょうが』

ルドニクは嘲るように言った。その言葉を、ヴィネックは聞き逃さなかった。

「小娘？　やつらの仲間にか？　……初耳だな。あいつら、海賊を気取るだけに女は乗せないもんだと思ってたが……」

『ええ、ですから私も意外でして。その上、どういうわけか、あのウェス・ゴート家のご令息じきじきに、その小娘の身柄引き渡しを要求されましてね。まさかあの高貴なお方が、そんな娘と顔見知りとも思えませんので、おそらくは……』

ヴィネックは弾かれたように壁から身体を離し、受話器を握りなおした。同時に送話口に向かって、唾を飛ばさんばかりのいきおい

で怒鳴っていた。
「おい！　いまなんて言ったんだ。ウェス・ゴートの倅が、その娘を引き渡すよう迫っただって？　カシアンがか？　あの坊主、そっちに――マージュオン港にいるのか？」
『え、ええ……実は、カシアン様の乗られたブロイーデ号が、不運にも航海中に嵐で難破したそうでして。どういうめぐり合わせか、そこへその、ヘレーデ号が――インヴォルタンの乗る船が通りかかったようで、連中、気まぐれ起こして助けてやったらしいんです。ですから、その、おそらく、話を聞きつけてお慈悲をお示しになったのでは、と』
ヴィネックの剣幕に驚いたルドニクは、しどろもどろになりながらも詳細を語って聞かせた。ヴィネックは大きく息をついた。
「――その娘の特徴だが……こげ茶混じりの黒髪に、黒い瞳、小柄で痩身、年齢は十五、六。合ってるか」
息を呑む気配が伝わってきた。ヴィネックの手のひらにじんわりと汗がにじむ。
「ルドニク。二つばかり頼みがある。聞いてくれるな」

港湾局の係官たちに捕らえられ、後ろ手をひねり上げられ、それでもあたしは抵抗をあきらめなかった。わめき散らし、身体をねじり、どうにかして彼らから逃げようと試みた。――でも、無駄だった。
「静かにしないか！　……まったく、おとなしそうな顔して、とんだ跳ねっ返りだな。なんでまたこんな娘をご所望なんだ、あの方は」
「さあな、なにしろ『高貴なる血（ブロイーデ）』に乗っておられるくらいの方だ。しょせん庶民の俺たちには及ばないようなお考えをお持ちなんだろうよ」
嘲るようにあたしを見るこの男の人たちを、あたしはありったけ

の憎悪を込めて睨みつけた。彼らは意にも介さない様子であたしを引きずりながら歩き、やがて石造りの大きな建物の前まで来ると、躊躇なく中へと入った。

薄暗い階段を昇り、二階の奥まった部屋の扉が見えたところで、ようやく止まる。いちばん年長らしい男の人がおもむろに咳払いをし、ドアをノックした。

「カシアン・レグノ・ウェス・ゴート卿。インヴォルタンの娘を連れてまいりました」

「入れ」

すぐに返事が聞こえた。ドアが開き、あたしは突き飛ばされるようにして室内に転がり込んだ。直後にドアが閉められ、施錠される音がした。ノブに取りついてどんなにがちゃがちゃ動かしても、ふたたび開く気配はない。

「……ようやく、この時を迎えられたな……ミハル」

ここにいたってあたしはやっと気づいた。この声――どこか底冷えするような低い声、沈没した船に乗っていたあの男の人だ。人違いをしてるのか、甲板であたしに抱きついてきたあの人。あたしは恐る恐る、振り返った。

ランプに照らし出されたほの暗い空間。賓客室なのだろうか、床には毛足の長い高価そうな絨毯が敷き詰められ、そして窓際には豪華な装飾の施された金色の肘掛け椅子が置かれている。

彼は、その椅子に座っていた。世にも優美な笑みを湛えながら。

目の前に、彼女が、未明がいる。

カシアンの鼓動は、彼自身抑えようもないほどの速さで打ち鳴らされ、荒い息遣いは静かな部屋の中にはっきりと響き渡った。未明はドアにへばりついたまま、こちらに来ようとはしない。彼は微笑んだ。

「なぜそんなところにいる？　……さあ、おいで。私の可愛いミハル」

「だ、出してください。ここから。あたし、みんなのところ、行きます」

未明は首を左右に振り、血の気のない顔で必死に訴えた。カシアンの薄い唇から、堪えようもなく忍び笑いが漏らされる。

「く……くく。みんなのところ？　あのろくでなしの賊どもか。やつらはいま頃、そろって獄舎につながれているだろうな。当然のことだ。この私を愚弄した罪を思い知るがいい」

未明の表情が一瞬にして強張る。彼女はカシアンのもとに駆け寄り、泣き出しそうな顔で哀訴（あいそ）した。

「お、お願い、助けてあげてください！　みんないい人たちです、あたしの友達です。お願いします、助けてあげて」

それは必死そのものだった。カシアンの眉がぴくりと歪む。

友達。

――カシアン。大学府に友達はいるの？

いつか、そんな風に訊いてきた娘が一人だけいた。未明だ。彼女を攫い、ウェス・ゴート本邸に軟禁していた時、自分の腕の中で、未明はそう問いかけてきた。

付き合うに値するような人間など大学府には存在しない。いや、私の人生には友人などそもそも必要ない。

そうだ。必要なのはお前だけだ。ミハル。

私のことを忘れてしまったとしても、かまうものか。これから思い出させてやればいい。じっくりとな。

カシアンは唇の端を舐めた。そして言った。

「そんなにあの連中を助けたいのか」

未明は大きく肯いた。期待に満ちた眼差しで彼を見つめている。
が、カシアンの告げた言葉は、あまりに苛烈なものだった。
「なら……いま、ここで、私の妻になると誓え。私を愛していると、結婚して欲しいと。そう言えるのならやつらを釈放してやってもいい」
「――」
蒼白になり、絶句する未明。渇いた口中を湿らすため、唾を飲み込みながらカシアンは続けた。
「どうした？　やつらを助けたいのだろう。手形の偽造は重罪だ。最重刑も充分にあり得る。生きてふたたび故郷の土を踏めるかどうかも怪しいものだな。……お前の返答ひとつで、連中の命の灯火が消えるかどうかが決まるというわけだ、ミハル」
彼はほとんど楽しげにそう言い放った。未明は唇を噛み、込み上げるなにかに必死で耐えているのか、その華奢な身体が小刻みに震えているのが見て取れた。
「強制するつもりなどはない。すべてはお前の意思に任せる。……どうする気だ？　ミハル」
彼女は目を逸らし、やがてゆっくりと口を開いた。
「あ……あなたを……あ、愛しています。つ、妻に、して……ください」
かすかな、頼りなく消えてしまいそうな涙声ではあったが、確かに聞き取れた。
頭の天辺からつま先まで、激しい歓喜が走り抜けた。背筋がぞくりと震え、興奮が全身を包み込む。いますぐに立ち上がり、その場に未明を押し倒したい。脳を支配しようとする熱い衝動をどうにかして押さえつけ、彼は血走った目でさらに続けた。
「言葉だけではだめだ。態度で示せ。私を愛しているのなら、妻になりたいというなら、その証をここで見せろ。……そうだ、服をすべて脱いで、自分から口づけてみせろ。私のものになりたいと懇願しろ」

「……っ」

未明は悲痛な表情を浮かべ、カシアンを凝視した。あまりといえばあんまりなせりふだ。

だが彼が本気であることはその態度からはっきりとわかった。未明は言った。

「そうすれば、本当に、ヴァリーたちを助けてくれるんですね」

「ああ。私は嘘は言わん」

答える声もかすれていた。ゆったりと脚を組み、アームに肘をつきながらも、その胸中では心臓が割鐘のごとく鳴り響いている。

ついに観念したのか、未明は目を瞑った。深呼吸し、胸のボタンを外し始めた。シンプルなデザインのベージュのワンピースだ。ウエスト部分を麻のひもで縛り、その下には同系色の膝丈のスパッツ。少しふくらんだ袖口がなんとも愛らしい。

扇情的な衣擦れの音が、カシアンの心を否が応にも燃え上がらせる。ひもが床の上に舞い、次いでスパッツが剥ぎ取られ、ワンピースがはらりと儚げに散った。あとは薄手の上下の下着だけだ。

「むろん、それもだ。すべて脱いで、お前から私に口づけしない限りは、先ほどの言葉を信用するわけにはいかんな」

そう言いながら、彼は穴の開くほど、目の前に佇むいとしい娘の姿を見つめ続けた。身体が熱い。甘い疼きで気が変になりそうだ。

――早く、早く来てくれ。ここに。私のもとに。お前を抱きたい……ミハル、ああ、早く……これ以上焦らさないでくれ。

長い時間が――実際にはほんの数分だったに違いない――過ぎ、未明の身を覆っていたものすべてが取り払われ、白い裸身が部屋の中に妖しく浮かび上がった。初めて見るというわけでもないのに、この恐ろしいほど圧倒的な官能はなんなのだろう。愛ゆえか。彼女をどれだけ愛しているか、おのれの気持ちの果てを知らぬ底深さが、これだけの感覚を呼び起こすのか。

「ミハル……おいで……」

喘ぐように囁くと、椅子に座ったまま、カシアンは両手を広げた。

未明は、つややかな頬に涙を伝わらせながらも、ゆっくりと彼の方へ歩み寄っていく。豊かな乳房と局部を健気にも手で隠しつつ、一歩一歩――「最後の仕上げ」をするために。

カシアンの細く長い指が、未明のやわらかな髪に触れた。

## 第二十七話　絶体絶命（後書き）

この回、カシアンと某大佐が重なっちゃいました（私の中で）。
「次は耳だ。ひざまずけ！　命乞いをしろ！」
はい、大好きなんです、大佐。キングオブサディスト。

# 第二十八話　悲愴なる再会

まんじりともせずに夜を明かしたジードとアドリオは、日が昇るとともにエッタイヤを待つべくエンザンテの中央庁舎へと赴いた。業務の開始は二刻半（九時）からで、ようやく姿を見せた副宰相に、彼らは噛みつかんばかりのいきおいで情報を迫った。

「エンザンテ（ここ）からゼーレンディアに？　……奇妙ですな。ここ数週間、我が国からの渡航者は、どの港向きにも出ていないはずですが」

二人が通されたのは、昨日とは違い、エッタイヤの個人執務室のようだった。あまり広くもなければ豪奢でもないその部屋には、彼らのほかには誰もいない。副宰相はゆったりと椅子にかけ、白いあごひげを撫でながら答えた。ジードは内心の苛立ちを押し隠しつつ、重ねて訊ねた。

「正規の手段でとは限りません。――私も貴国の内政について詳しく存じているわけではありませんが、非合法な手を使い、海外との商取引に臨む者も中にはいるとか。そういった連中の船に、彼女が……ミハルがなんらかの事情の下に乗せられていないとも限らない。エッタイヤ殿、立ち入ったことを伺っているのは承知の上です。ですが、どうか……どうかお教え願えないでしょうか」

副宰相の眉がぴくりと動く。ジードは瞬きもせずに彼をじっと見つめた。これは賭けだ。そこまで知っているならと腹を割って応じてくれるか。それとも内政干渉を厭われ、すげなく助力を断られるか。

幸いなことに、事態は前者へと転んだ。

「ふ……さすがは連邦きっての切れ者、ウェス・ハーシュ卿の長子であられる。いや、お恥ずかしながら、確かにわがエンザンテには、そういった輩が数年前から存在しております。インヴォルタン……

そやつらであれば、あり得えない話でもないでしょうな」
エッタイヤは苦笑を浮かべた。聞き慣れない響きにアドリオは眉を寄せる。
「インヴォルタン？」
「この国の古語で、夜明けという意味らしい。数十名のメンバーからなる地下組織の名前だ」
素早く答えたのは彼の異母兄、ジードだ。エッタイヤは無言で肯いた。
ゼノンは未明のことは教えてくれたものの、彼の同居人の実際の生業についてはほとんどなにも知らされていないようで、あれ以上の情報を引き出すことはできなかった。だがジードには奇妙な確信があった。以前、七日間会議から戻ってきた父、オルグ・ヴィネックと茶席をともにした際、彼がそんな話をふと漏らしたことがある。
「連中が向かうならば、行き先はおそらく貴国の港の中でももっとも繁栄しているというマージュオン港でしょうな。そのあとにも各地を訪れるつもりかもしれませんが、まずはあそこへ立ち寄るのが、商売としてはやりやすいと踏むでしょう。また、これまでにも事実、そういった噂を聞いたことがあります」
出国許可など間違っても出したことはない。旅券にしろ通行手形にしろ、すべてはインヴォルタンの党首による偽造品だ。連中の使っている帆船の名は「栄光号（ヘレーデ）」。マージュオン港に着けば、さらなる足跡含め手がかりが得られるだろう。エッタイヤはそう言い、ジードたちを庁舎から送り出した。
エンザンテでつかんだ貴重な情報をもとに、二人は早速オーズロ港に戻ると「レモナ・ウィリーズ号」に乗り込み、出航した。ここから目的地であるマージュオン港へは、最高速で飛ばし続けても丸五日ほどかかる。気は急くが船内で焦っても仕方がない。ジードはひたすら神経を鎮めようと試み、そして未明の身になにごとも起きていないことを祈った。――正確には、彼女がおそらくはインヴォルタンのメンバーであるヴァリーという男と、恋仲になってしまっ

ていないことをだ。未明と出会い、おのれの恋情を自覚してからというもの、それはジードの胸をひと時たりとも去ることのない焦慮の種となっていた。

つまり、彼女はなんというか……周囲の人間の気をやたらと惹きつけるんだ。私もそうだが、アドリオも、その上あのカシアンさえも――皆、気づけばミハルのとりこになっている。きっとそのヴァリーとかいう男も、彼女と一緒に暮らすうちに、自然と魅せられていったんだろう。あの抗いようもない、不思議な魅力に。

時間はあまりに鈍く過ぎていく。「レモナ・ウィリーズ号」は補助動力として蒸気機関を備えた最先端の汽帆船だが、彼にはまるで海上で停まっているかのように感じられた。それはアドリオも同様で、昼となく夜となく、磨き上げられた甲板をうろうろと歩き回っては、飛び交う海鳥をぼんやりと眺め、祈るように頭を垂れてため息をつく。そんな日々が延々と続いた。

エンザンテを発って五日目。日没を迎える頃、船は無事、マージュオン港にたどり着いた。イグノディアスの加護でもあろうか、嵐や時化に巻き込まれることもなかった。

「オルグ・ジード卿！　お待ちしておりました」

下船するや待ち構えてでもいたのか係官にそう迎えられ、ジードは少々面喰らった。

「ここに寄港する予定は告げていなかったと思うが、待っていたとはどういうことだ。父から……ウェス・ハーシュ卿からなにか連絡でも？」

訝しげに訊ねるジード。係官は大きく肯いた。

「そのとおりでございます。実は本日つい先ほど、ロマドの本邸のお父上様より、緊急のご通達を受けておりまして。なんでも、お捜しになっておられる娘が見つかったとか」

ジードと、その脇に立つアドリオの瞳が、一瞬にして見開かれた。

「――見つかった？　ミハルが？　本当か、それは。しかしなぜ父上が……いや、彼女は、彼女はどこに？」

マージュオン港に立ち寄ったはず、という情報は得ていたものの、行き違いになる可能性も高かった。ここを手がかりに、さらに足を伸ばす必要が出てくるかもしれない。そう思っていただけに、告げられた言葉の持つ衝撃は大きかった。アドリオは兄（ジード）を突き飛ばすようにして、係官を問い詰めた。

「ミハルはどこにいるんだ。彼女は無事なのか？」

「は……はい、怪我をしているとか、そんな話は聞いておりませんが……ただいま、港湾局内の賓客室にて、ウェス・ゴート卿のご子息、カシアン様がご一緒におられるはずです。ですので、どうかご安心を」

二人の剣幕に驚きつつも、係官はなんとか笑顔を繕ってそう答えた。醜聞があったとはいえ、世に聞こえた名家の跡取りがその娘の身柄を預かっているのだ。これ以上の安心材料はない。彼がそう考えたのも無理はなかった。

が、そんな思惑とは裏腹に、それはまったくの逆効果だった。修羅の形相に変貌したジードが、哀れな係官の胸倉をつかみ、押し殺した声で詰め寄った。今度ばかりはアドリオも止めようとはしなかった。

服を脱ぎ、自ら口づけし、抱いてくれと懇願すること。そうしなければ口先だけの愛の言葉など信用はできない。

このカシアンという男の人は、氷のように冷たい声でそうあたしに言い放った。自分の耳が信じられず、あたしは言葉を失い、まじまじと彼を見返した。けれど、どうやらそれは冗談でも酔狂でもないらしく、その灰色がかった緑の瞳は瞬きもせずにあたしをじいっと凝視している。

あたしは決意した。……ヴァリーたちを助けたい。こうするよりほかに方法がないというなら、呑むしかない。たとえそれがどんなに無茶苦茶な交換条件だったとしても。

ヘレーデ号の船上以外で会ったこともないこの人が、いったい誰と勘違いしてあたしを求めているのかは謎だ。でも、説得に応じてくれる気配はないし、それにぐずぐずしていたら事態はどんどん悪化してしまうかもしれない。ヴァリーたちの行為が、やむない事情があるとはいえ犯罪だということは、出航前に知らされている。

インヴォルタンのみんなの命と引き換えだというなら、それくらい――あたしの身体を委ねることくらい、どうってことない。

わざとさばさばした態度で服を脱ぎ捨て、彼の前に立った。……つもりだったのに、あたしの頬には生ぬるいなにかが止め処なく伝い落ちる感触があった。情けない。親切にしてくれたみんなを助けるためなのに、あたしにできるのはこんなことしかないのに。

「ミハル……おいで」

白い手が伸ばされ、髪に触れるのがわかった。肌が瞬時に粟立つ。それでもあたしは、後退したがる両足を必死で抑えつけた。

そして腰を屈めた。顔を近づけ、キスをしようとして、目を瞑った。

廊下をやってくる荒々しい足音が聞こえたかと思った次の瞬間、ドアが破られた。

賓客室は二階の東端の部屋。泡を喰った係官からそう聞き出すなり、ジードとアドリオは階段を駆け昇った。言われたとおりの場所に、フォモック材と思しき重厚そうな造りの扉が見えた。鍵がかかっている、そんな声が背後から聞こえたが、ジードはなんの躊躇もなく、そのまま右肩から体当たりしていた。

扉は呆気ないほどすんなりと開いた。彼の全身を覆っている青白い闘気（オーラ）のせいもあったのかもしれない。なだれ込むようにして室内に踏み込んだジードと、彼に続いたアドリオは、その場で絶句し、立ち尽くした。

全裸の未明がそこにいた。突然の侵入者に驚き、怯えたように背後を――こちらを振り返ったその顔は、まぎれもなく未明のものだ。潤んだ黒い瞳も、もの問いたげに開かれた唇も、つややかな白い肌も、すべて、夢に見るほど焦がれ続けたあの可憐な少女のものに違いなかった。

「……ミハル……」

ジードは惚けたようにつぶやいた。だが、すぐに、事態（ことと）の異様さに気づき、我に返った。なにしろ、目の前の未明は下着一枚着けておらず、その上あろうことかあのカシアンの腕の中にしっかりと抱きすくめられているのである。

――ジードの中で、なにかが外れる音がした。

「カシアン……貴様……」

殺気にまみれた声で彼はつぶやいた。青白い光が一回りも大きく膨らみ、揺らめき、宿敵に向かってしゅるりと触手を伸ばす。が、そのさまを見ても、カシアンが退く気配はない。

「オルグ・ジード……また貴様か！　いつもいつも、貴様のせいで……いったいどれだけ私につきまとえば気が済むんだ、ええ？　ミハルを奪いに来たとでも言う気か？　笑わせるな、彼女はとっくにこの私のものだ、いまさら貴様の出る幕などないわ！」

ヒステリックに言い捨て、ジードを睨みつける。だが彼（ジード）の耳にはその言葉は届いてはいないようだった。

「ミハルを離せ」

彼は躊躇なくカシアンに、カシアンに捕らわれている未明に近づいた。そして未明の身体に縄のごとく絡みついているカシアンの両

腕に手をかけた。
「さ……触るなァッ！」
悲鳴にも似た怒声が響き渡る。いや、事実、それは悲鳴だった。苦痛に顔を歪めたカシアンの腕が、未明から離された。その一瞬の後、ジードは自由になった未明を素早く引き寄せ、思いの丈を込めて抱きしめた。これ以上力を入れたら毀れてしまう――そんな気がするほど強く、激しく。
「離せ、貴様、ミハルから手を離せ！」
憤怒の形相のカシアンがジードに迫る。が、ジードの腕に触れようとした瞬間、焼き鏝を押しつけられでもしたかのような耐え難い熱さと痛みがカシアンを襲った。彼は咄嗟に飛び退っていた。わなわなと震えながら、しかしジードを取り巻く鬼火にも似た炎の前には手出しすらできず、ただひたすら、その眼差しに殺意を込めて彼を睨み続ける。
二人のやり取りに毒気を抜かれていたアドリオははっとし、自分のまとっている浅黄色のマントを外すと、ジードに手渡した。未明の服はどうにでも調達できるが、とりあえず、その姿ではここから移動することもままならないだろう。そうしつつも彼は未明に声をかけた。
「久しぶりだな、ミハル……無事だったか？　ずいぶん心配したんだぞ。でももう大丈夫だ、俺と……俺たちと一緒に、ロマドに帰ろう」
ほかの誰にも見せたことのないやさしい微笑を浮かべ、黒くつやのある髪をそっと撫でる。胸が高鳴った。堪えていた彼女への気持ちがいっきに迸り、外へ向かってあふれ出す。ミハル、お前が好きだ。結婚して欲しい――いますぐにでもそう伝えたい。そんな逸る想いを懸命に堪える。
だが――ここでようやく二人は、未明の様子がおかしいことに気づいた。
やっと再会できたというのに、彼女は先ほどからなにも言わず、

黙りこくったまま沈痛な面持ちで顔を伏せている。三人もの男に全裸を見られているのだから、羞恥のあまりとも考えられるが、それにしても不自然だ。

なにより、名前を呼ぼうとしない。ジードの名も、アドリオの名も。

アドリオの胸を、突如巨大な黒雲が襲った。

「ミハル？　……どうしたんだ、気分でも悪いのか？　なぁ、ミハル、なんとか言ってくれ」

未明は決して顔を上げようとはせず、消え入りそうなか細い声で答えた。

「……あの……あ、あなたたちは……誰ですか」

ジードの表情が凍りついた。むろん、アドリオも同様だ。

「ミハル、いまなんと言ったんだ？　まさか……私だ、ミハル、ジードだ。オルグ・ジードだ。……ミハル、いったいどうしたというんだ、ミハル」

狼狽のあまり我を忘れ、未明の小さなあごを荒々しくつかみ、無理やり上を向かせる。その黒い瞳は確かに以前の彼女とまったく変わっていなかったが、しかし、そこに浮かぶ感情は懐かしさでも恋慕でもなく、ただ、怯えと戸惑いだった。

ジードの目の前が、すうっと冥(くら)くなっていく。いつの間にやら部屋のすぐ外には港湾局の人間が何人も駆けつけてきていたが、それももはや彼の意識には届かぬ外界のできごとだった。冷たい汗が幾筋も額を流れ落ちる。彼はただひたすら、ようやく出会えた最愛の少女の裸身を抱(いだ)く腕に力を込めた。

# 第二十九話　彼の名は

ウェス・ハーシュ卿こととオルグ・ヴィネックが、港湾局長であるルドニクに依頼した二つの頼みごととは、こうだ。

ひとつは、カシアンが「保護」しているという娘を、彼のもとから即刻引き離すこと。そしてもうひとつは、五大陸中のすべての港に、レモナ・ウィリーズ号がもしも寄港した場合、乗船しているはずの自分の息子たちに、急ぎマージュオン港へ向かうべく伝えてくれるよう通達すること。

ルドニクの対応はそれほど迅速とは言えなかった。そうであったなら、少なくともジードたちよりも先に、港湾局の人間によって未明は救出されていたはずである。ウェス・ゴートという家名の重さ――マージュオン港が、オサイオン市のあるバルネディア大陸の要衝港湾だったことも大きい。なにしろ現ウェス・ゴート卿の異名は「オサイオンの宰相」或いは「ゴドラムの公主様」なのだから。

だが、ともかくも、未明を見つけることはできた。

しかし、ジードとアドリオの胸には、再会の喜びよりもはるかに大きな衝撃が重く圧しかかっていた。

――あなたたちは、誰ですか。

廊下の壁に力なくもたれ、深く嘆息するジード。その隣で床の上に座り込むアドリオも同じく、険しい顔つきで髪を掻き毟っている。言葉を交わす気にもなれない。

がちゃり、とドアノブが回される音がし、着替えを終えた未明がおずおずと隣室から姿を現した。弾かれたように立ち上がるアドリオと、無意識のうちに彼を牽制して前に出るジード。二人のいきおいに、未明は後退った。

「あ……あの……」

不安げに言いよどむ彼女を、ジードは素早く抱き寄せた。そしてできる限りやさしく囁く。

「なにも心配しなくていい。いまはなにも考えないで、一緒に来てくれればいい。ミハル、私たちはお前の味方だ。たとえ、記憶を……一時的に記憶を失くしているとしても、私とお前の関係が変わることはない」

アドリオは息を呑んだ。記憶を失くしている。はっきりと口にすることで、それは覆しようのない、確定した事実となった。

未明は、徐々にきつくなる腕の中で、どうにかして身体を離そうと試みているようだった。見かねたアドリオが兄（ジード）に声をかける。

「兄上、ミハルが苦しがってる。離してやってくれ。それに彼女にいま、俺たちに関する記憶がないっていうなら、関係がどうこう言ったところで無意味だろう。ミハルを追い詰めるような行為はやめてくれよ」

嫉妬混じりとはいえ、的を得た発言だった。ジードは眉を歪めたものの、結局は弟の言葉に従った。両腕の力を抜き、拘束を緩める。未明はすぐに彼から離れた。が、なにかを思い出したのか、かすかに赤らんでいたその顔が急に強張った。

「あの、さっきの男の人は……」

「さっきの男？　……お前を捕らえようとしていたやつのことか？　あいつならお前には触れられないよう遠ざけてある、心配するな。あんなやつのことはもう二度と考えないでくれ」

ジードは嫌悪も顕わに言い捨てた。ウェス・ハーシュ家とウェス・ゴート家。家格は本来同等であったものの、半年前の醜聞のために、現在の政治的権力はウェス・ハーシュ家の方が上であると誰もが認めざるを得ない。そのため、港湾局を取り仕切る局長のルドニクも、カシアンではなくジードの采配に、結局は全面的に従った。結果、カシアンは彼の侍従たちとともに、ここマージュオン港のすぐ近くにあるウェス・ゴート家の別邸に移動するべく、手配が整うまで別

室で待機しているはずである。
　ところが、それを聞いた未明の反応は、ジードの予想するものとは少し違っていた。彼女は慌てたように首を振ると、こんなことを言い出したのだ。
「あ、あの、助けてくれてありがとうございます。でも、あたし、しなきゃいけないことがあるんです。あの人のところに連れていってください、お願いします」
「な……なに？」
　ジードとアドリオの表情が硬直する。ジードは喘ぐように訊ねた。
「なにをばかな……しなきゃいけないこと？　なんのことだ、ミハル。やつになんの用があるというんだ」
　未明は一瞬目を伏せたが、じきに顔を上げ、こう告げた。
「あたしの友達が捕まってるんです。あの人なら彼らを助けてくれるって、そう言ってました。だから……」
「――なるほどな。助けてやる代わりに自分のものになれ、とでも言って脅したってわけか」
　アドリオは憎しみを込めて吐き棄てた。思えば卑劣な手段で大学府から未明を拉致したのもあのカシアンだ。彼ならばいかにも考えそうな算段である。
　ジードはしばしの間黙り、やがて口を開いた。
「ミハル、捕まっている友人っていうのは……ヘレーデ号の乗員、インヴォルタンって連中のことか」
　未明は瞠目した。なぜこの男が彼らのことを知っているのか。その目はそう語っていた。
「エンザンテの副宰相から話は聞いてる。連中は犯罪者だとも。だから相応の罰を受けるべきだと、私は正直なところ思ってもいる」
　未明の顔から血の気が引き、唇が震えた。が、彼女がなにか言う前に、ジードは続けた。
「だが――海を漂流しているお前を助け、面倒を看てくれたのもまた事実だ。お前の恩人なら、それは私にとっても恩人ということに

なる。借りは返さねばならないな」
「え……」
戸惑うように自分を見る未明。ジードは力強く宣言した。
「お前のために、インヴォルタンのメンバー全員を釈放させるよう手続きを取ろう。だから、カシアンに会う必要などはない。それでいいな」
思いもかけないせりふだった。未明の頬が紅潮し、瞳がみるみる潤んでいく。彼女は深々と頭を下げた。
「ありがとうございます！　あの、え、えーと……」
「ジード。オルグ・ジードだ。……ようやく会えたな……ミハル」
彼はあらためて名乗った。どこか淋しげな微笑みが、緑碧の双眸に宿っていた。

唐突に赦免（しゃめん）され、獄舎から解放されたインヴォルタン一行は、わけがわからないながらも降って湧いた幸運を喜びあった。紙幣や手形類の偽造が重罪であることは承知している。一時はこの地での処刑も覚悟していたのだ。
「どうなってんだかさっぱりだがよ、とにかくよかったなぁ、頭領（ヘッド）。俺（おい）らはもう、二度とカジュヌには戻れねぇとばかり思ってたぜ」
涙を流さんばかりに高揚した様子のシドンだったが、一方のヴァリーはそれどころではない。彼は釈放されるや否や、対応した係官の胸倉をつかむいきおいで詰め寄った。
「おい！　俺たちと一緒にここへ来た娘はどうなった、どこへ連れていったんだ、答えろ！」
慌てた仲間たちが止めようとするも、頭に血の上っているヴァリーにはまるで聞こえない。彼は重ねて怒鳴った。
「ミハルはどうなったって聞いてんだ、さっさと答えやがれ！」
「あ、あの娘なら、現在、オルグ・ジード卿のもとに保護されてい

るはずだ。案ずる必要はない」
　ヴァリーの剣幕に怯みながらも係官は答えた。オルグ・ジード――その名を聞いて、青年の表情がさっと変わった。
「……オルグ・ジード……ジードだと？　おい……そいつ、何者だ？　ゼーレンディアの貴族かなんかなのか」
　係官の顔に、あからさまな嘲弄（ちょうろう）の色が浮かんだ。
「無知とは恐ろしいものだな。まぁ、片田舎の極小国出身の貴様らが知らぬのも無理はないが……連邦でも名だたる大貴族、ウェス・ハーシュ家の次期当主様だ。そもそも、貴様らに恩赦を処すことになったのも、オルグ・ジード卿の情けによるのだぞ。感謝こそすれ、その方をそいつ呼ばわりとはな」
　係官は大仰に肩をすくめ、両手を広げてみせた。ヴァリーは硬直し、渇いた声を必死で絞り出した。
「だ……だが、どうしてその男がミハルを保護するんだ。あいつは俺の女房だぞ。俺たちと一緒にエンザンテへ帰るんだ。頼む、そいつのところへ案内してくれ。頼む」
　ヴァリーはその場に片膝をついた。面喰らいつつも係官は言った。
「ばかを言うな。罪人の分際で、あのやんごとなきお方に目通りだと？　それ以上ふざけたことをぬかすと獄舎に逆戻りだぞ。いいか、貴様らの船は埠頭に停泊させてある。当局の気が変わらぬうちに、とっととゼーレンディアを出て行け」
　そう言い棄てるなり、彼はヴァリーの腕をつかみ、歩かせようとした。だが、未明を残して出航などできるわけがない。ヴァリーは必死の形相で叫んだ。
「ミハルに会わせてくれ！　あいつと一緒でなけりゃ帰れるもんか。頼む、頼むからあいつに、ミハルに会わせてくれ……頼むから……」
「頭領、まずい、落ち着いてくれ。ほんとに帰れなくなっちまうぞ。ここはいったん退こう、な？」
　小声で制するヘルの声も耳には届かない。彼は、数名の係官と、仲間たちに引きずられるようにして獄舎をあとにした。

# 第三十話　さよなら、ヴァリー

オルグ・ジードと名乗ったこの男の人は、約束どおりヴァリーたちを自由にしてくれた。手続きを終えたのを見計らい、港湾局のロビーで、あたしは感謝を込めてもう一度頭を下げた。

「ありがとうございます。あの……じゃあ、あたしも、これで」

ヴァリーたちのもとに戻り、船旅を続けるつもりでいたあたしは、ごく当たり前の口調でそう言った。

けれど、この時彼が――彼と、その弟であるアドリオという男の人が見せたリアクションは、あまりにも激しいものだった。

「どこへ行くつもりだ、ミハル！　お前はこれから私たちと一緒にヴィネックの本邸に帰るんだ。そう言っただろう、さっき」

灰色の髪に緑がかった瞳の、びっくりするほどきれいな顔をしたこの人が、鬼気迫るいきおいであたしの両肩をつかんだ。

「あ、あの、でも……あたし、この国の人間じゃないし……」

あたしは口ごもりながら答えた。そう、そもそも、ヴァリーたちと一緒にヘレーデ号に乗ったのだって、日本に帰る手がかりを探すためなんだから。助けてくれたことには死ぬほど感謝しているけれど、ここはどう見たって日本じゃなさそうだし、次の国に移動した方が明らかに得策だろう。

そう言ったあたしの顔を、彼はじっと見つめた。そしておもむろに、とんでもないことを宣（のたま）ったのである。

「お前は私の婚約者だ。私が大学府を出るまで、一年待っていてくれると言ったのを憶えていないのか？　大学府の寮で……私の部屋で肯いてくれただろう」

……は？

あたしは固まった。
婚約？　エコルガルト？　……一年待つ？
……すべてが初耳だ。ていうか、完璧、誰かと勘違いしてる。
黒い髪に黒い瞳の、どことなく日本の友人を思い出させるアドリオという人が、ものすごい剣幕で怒鳴っているのがぼんやり聞こえた。
「婚約だと！？　俺はそんなこと、一言だって聞いてないぞ。どういうことだ、勝手に決めるな、兄上！」
「お前に断る必要がどこにある？　大体、最初にミハルをカルマ駅から連れ帰ったのは私だぞ。それに前にも言ったが、ミハルとの結婚については、父上の承認をすでに受けているんだ。いいか、はっきり言っておくが、彼女は私のものだ。私の妻としてヴィネックの屋敷に連れ帰る。お前にも誰にも異論は赦さない」
「冗談じゃない。そんなこと、受け入れられるか！」
世にも恐ろしい形相で対峙する二人。あたしはただおろおろと見守るしかできず、その一方で、これが噂に聞くモテ期到来ってやつなんだろうかとうっすら考えたりもしていた。もっとも、まるで身に憶えのない相手に（しかも絶対人違いだし）言い寄られたところで、対処の仕様がないんだけど。
「あの……畏れながら、オルグ・ジード卿。ご指示に従いまして、エンザンテよりの密入国者どもを先ほど釈放いたしました。じきに出航となるはずですが、これでよろしかったでしょうか」
港湾局の係官が、いつの間にかそばに来ていた。恐る恐るという感じで進言している。二人は顔を見合わせ、それぞれ咳払いをした。
「ああ、ご苦労。我々もすぐに発つ。ミハル、おいで」
灰色の髪の男の人、オルグ・ジード卿が、あたしの手を引いた。
あたしは焦った。
「あ、あたしもヘレーデ号に……船に戻ります。ヴァリーたち、きっと心配して待ってる」
通行証を跳ね除けられ、あの妙な切符の複製を提出したためにこ

んなことになってしまったけれど、事態が収束した以上、一刻も早くみんなと合流したかった。少なくとも日本に戻るための手がかりを見つけるまでは、彼らと一緒に動いた方が良さそうだし。

でも、彼はあたしを離そうとはしてくれなかった。

「お前を連中のもとに帰す気などはない。――ミハル、なぜそこまでしてあの船に戻りたがるんだ？　まさかとは思うが、やつらの中にいるヴァリーとかいう男と、本当に結婚するつもりでいるんじゃないだろうな」

ひどく真剣な口調で問い詰められ、あたしはぽかんと口を開けた。ヴァリーに船の中で迫られたことを、なんでこの人が知ってるんだろう。いや、そもそも、ヴァリーのことだって……。

「エンザンテでお前を捜している時、その男の同居人だという少年と偶然知り合ったんだ。彼は、ヴァリーという親代わりのその男が、お前との結婚を考えていると言っていた。……本当にそうなのか」

あたしは思いっきり首を横に振った。そして、咳き込むようにして言い返した。

「違います！　確かにヴァリーには……その、好きだとは言われたけど、でも、結婚なんて……あたしまだ十八です。そんなこと、考えたこともありません」

今度は彼の方が面喰らったみたいだ。きれいな瞳を見開いて、まじまじとあたしを見つめている。

「じゅ――十八？　……そういえば年齢をちゃんと聞いたことはなかったな。しかし……そうか。てっきり十六かそこらかと思っていたんだが……」

「ミハル、お前、俺と同い年だったのか？　二、三歳は下なのかと……」

代わる代わる言われるとさすがに気分が悪い。若く見えるというよりは、子どもっぽい、垢抜けてないって見られてるのと同じことだからだ。思わずむっとしたのが顔に出たのか、二人は慌ててあたしをとりなした。

「いや、その、年齢などはどうでもいいんだ。たとえお前が十二の時に出会ったとしても、私は恋に落ちただろうからな。そんなことより、じゃあそのヴァリーってやつとは本当になにもなかったんだな？　ミハル」

オルグ・ジード卿は、ふたたび真面目な表情に戻ってあたしを見つめた。あたしは無言で肯いた。彼は心底ほっとしたようにため息をつくと、口を開いた。

「それならなおのこと、連中のもとにもエンザンテにも戻る必要はないだろう。さあ、一緒にヴィネックの屋敷に帰ろう、ミハル」

「……でも、あたし、元いた国を捜してる途中なんです。どこにあるのか、どうやったら戻れるのかわからないけれど、少なくともここは違う。ここは日本じゃないでしょう？　一日も早く帰らないと、家族もきっとみんな心配してる。だから、ヴァリーたちの船に乗ったんです。移動してる方が捜しやすいと思ったから」

知らぬうちに語尾が震えた。あらためて、自分の置かれた状況の異常さを実感したためだ。

蓼科の廃隧道の外にあった崖から落ちて、気づいたらまったく知らない島にいた。介抱してくれたはずの人になぜか殺されかけ――小舟に乗せられて海に流され――エンザンテなんて、見たことも聞いたこともない国の浜辺にたどり着き、そこで知り合ったヴァリーとゼノンの家に厄介になって……。まるで三文ジュブナイル小説かファンタジー映画だ。忘れていたはずの心細さがいっきに込み上げてきた。

それも顔に出たのかもしれない。ふんわりとやさしい腕が、あたしを抱き寄せ、落ち着かせようとしてか静かに囁くのが聞こえた。

「……心配するな。お前はきっと、なにか理由があってここに来たんだ。出会うべくして私と出会ったんだ。だから、もしもふたたび、元いたその国に帰る時がやってきたら……その時になれば、帰れるのだろう。自ら捜す必要などはない。だから……それまではせめて、私のそばにいてくれないか」

「……」

穏やかに諭すような声。でもそれはどこか苦しげでもあった。安易に受け入れてしまうにはあまりに切ない、あまりに真摯な言葉。

それなのに、あたしはなぜか肯いてしまったのである。

夜の帳（とばり）が下りる八刻（午後八時）過ぎ、マージュオン港の埠頭に、来た時と同じように、ヘレーデ号は佇んでいた。

インヴォルタンの十五人の乗組員たちが、ぞろぞろと乗船していく。あたしはそのさまを、少し離れたところから、じっと見つめていた。

せめて最後にお別れがしたい。遠くからでもいいから。そう訴えると、オルグ・ジード卿はやっと肯いてくれた。彼とその弟に連れられ、あたしは船出を迎えようとするヘレーデ号のそばへと歩み寄った。月光、灯台、そしてところどころ備えつけられた常夜灯以外、周辺には灯りはない。きっとあたしの存在には誰も気づかないだろう。それでも、無事にエンザンテに帰り着けるよう、そっと祈ろうと思っていた。

列の最後尾にいたヴァリーが、その時、振り返った。

目が合うのがわかった。

彼はなにかを口走りながら、あたしに向かって駆け寄ってきた。あたしも走り出そうとして——背後から、肩を押さえられた。

行くな、と言われた気がした。

ヴァリーはあたしの前まで来ると、息を整えながら口を開いた。

「ミハル……ミハル、良かった、無事だったんだな。すまん、助けに行くと言っておきながら……いったんエンザンテに戻って、俺だけもう一度出直すつもりだったんだ。お前を救い出すまではあきらめる気なんてなかった、信じてくれ」

そう言いながらあたしの両手を取る。

「帰ろう。一緒にエンザンテへ、俺の家へ帰ろう。そしてゼノンと三人で暮らそう。……必ず、幸せにするから」

肩にかけられた両手が強張る気配が伝わる。あたしは微笑み、首を横に振った。

「ありがとう、ヴァリー。本当に感謝してる。ヴァリーが助けてくれなきゃ、あたし、カジュヌの町で野垂れ死んでたかもしれない。でも、あたし、もう大丈夫だから。ヴァリーにはきっと、戻ってからもやらなきゃならないことがいっぱいあるでしょう？　ゼノンも淋しがってる。早く戻ってあげて」

ヴァリーの目が見開かれる。彼は喘ぐように言った。

「一緒に……俺と一緒に来てくれないのか？　なんでだ、ミハル、なんで……」

あたしの背後に立つオルグ・ジード卿の存在に初めて気づいたのか、彼ははっとして目線を上げた。

「……あんたが、ジードとかいう……ミハルの……」

「ああ、オルグ・ジードだ。私のことを知っているのか」

意外そうな声がした。そういえば――あたしが寝言でなにかおかしなことをつぶやいていたとか、前にヴァリーが言っていたっけ。でも、あたしはこの人のこと、ほんとに知らないんだけれど……。

「そうか。あんたが……。礼を言うよ。俺たちを釈放するよう動いてくれたんだろ？　でなきゃ、こんなに簡単に獄舎を出してもらえるわけがないもんな」

「犯罪組織（インヴォルタン）を助けたつもりなどは毛頭ない。ただ、ミハルの恩人と思えばこそだ。次にもし会うことがあったら、容赦はしない」

冷徹なせりふだったけれど、ヴァリーはなぜか苦笑している。彼の大きな手が、あたしの頬にそっと触れた。

「ミハル。俺はお前が好きだった。心底本気でな。しばらくは、夢にでも見るだろうな」

そして――額に、やわらかななにかが一瞬、触れた。

顔を離すと、彼は微笑んで、囁いた。きっと、あたし以外には聞

こえないくらい、小さな声で。
「さよなら。……俺の女神（アーマンドラ）」

やさしい夜風の通り過ぎる中、「栄光号（ヘレーデ）」はゆっくりとマージュオン港を離れ、エンザンテを目指し、真っ暗な海へと漕ぎ出した。

# 第一話　帰還

揺りかごに揺られているのか、不安定で、なのに心地好い感覚。
それに、なんだか懐かしい景色が見える。
て言っても、富士山とか海とか実家のある町並みとか、大学の構内とかそういう類のじゃなく、もっとこう……はっきりとした記憶じゃないんだけど、見たことのあるような景色。
桃色と黄金色を足した、ちょっとクリムトの絵画っぽい——ああ、あたしって絶望的に表現力ないな。

——なにをぶつぶつと独りでつぶやいているかと思えば。面白い娘だな、お前は。

揶揄するみたいな声が聞こえてきた。それも唐突に。あたしは眉をしかめた。
あなた、誰よ。……あ、思い出した。神様でしょ。

——憶えていたのか？　あの時の記憶はすべて摘み取ったはずだが。

そう言われると……あれ？　前後の文脈がつながらない。なんであたしは「神様」なんて存在を知ってて、しかもけっこう気安く話しかけてるんだろう。……あ、夢か。
受験で切羽詰ってた時に、神頼みのあまり見た夢。東京のビジホに独りで泊まって、心細さと不安と緊張で泣きそうだった入試前夜。きっとその夜に見たんだ、神様の夢。
得心して肯くあたしを尻目に、どこか呆れたような声が響く。

――前代とはひどく異なっているな。それなりに賢しいかと思っていれば。この手合いでは、片羽となる者もさぞやり辛かろうに。

片羽？　なにそれ？　なんのこと？

あたしは思わず訊ねていた。「神様」は答えてはくれず、代わりに勝手に話し出した。

――願いを叶える代償としてお前の記憶の一部を預かっている。いずれ時期が来たなら返してやろう。だが、もうひとつの契約については、まだ果たされていないな。

さだめを受け入れるということは、その契約を自ら果たすということだ。次代の依坐よ。

語りかける声がどんどん遠くなっていく。なんのこと？　代償？　さだめ？　それって、なんの話、いったい？

やがてはっきりと靄が晴れた。

――あたしは、揺りかごではなく、どうやら誰かの腕に抱かれて移動中だったらしい。

「……え……」

目に入ってきたのは――どこか西洋の宮殿とか美術館みたいな、大豪邸の玄関ホールだった。日本で言ったら（中を見学したことはないけど）迎賓館か。やたら高い天井、太い柱、贅を凝らした装飾。それに両脇に居並ぶ使用人らしき制服姿の人々。間違いなく豪邸だ。

……なに、ここ？　えーと……出入国管理所？

「お帰りなさいませ、若君」

「お帰りなさいませ、ジード様、アドリオ様」

次々に声がかけられる。目を醒ましたものの、どうしたらいいかわからず硬直したままのあたしは、声も出さずに目の前の光景を見守るしかなかった。

明らかに地位が高そうな、眼鏡をかけた男の人と、小柄で丸っこくて可愛らしい、中年の女の人が進み出てきた。
「若君、よくぞご無事でお戻りになられました。皆、ご帰還を心待ちにしておりました」
あたしを抱えている男の人が――確か、オルグ・ジード卿って言ったっけ――短く肯いている。
「坊ちゃま方、まあ、よくお顔を見せてくださいませ。ご無事でいらっしゃいますの？　まぁ……それにミハルも。イグノディアス様のご加護ですわね、こうして皆そろって戻って来られるなんて」
女の人は感極まったように言い、声を詰まらせた。オルグ・ジード卿の苦笑混じりの返答が聞こえる。
「大袈裟だぞ、パドマ。なにも戦に行ったわけでもあるまいし。ひと月で戻ると言ってあっただろう」
「私を見くびらないでくださいませ。ミハルが見つからなければどうせ、ひと月どころか何ヶ月、いいえ何年だって世界中を旅してまわる気でいらしたのでしょう。承知しておりましてよ」
彼女は皮肉っぽく言い返しながらも、エプロンの端で眦を忙しく拭いている。よっぽどこの人のことが大事なんだな、と微笑ましく思っていると、そのくりくりとした瞳は今度はあたしを捉え、迫ってきた。
「……ミハル……あなた、無事なの？　どこも怪我はないの？　お腹は空いてない？」
「えっ……あ、あの……」
あたしは焦った。ここでも人違いは続いているらしい。それを口にする前に、オルグ・ジード卿の冷静な声が彼女を遮った。
「パドマ、ミハルのことで、あとで話がある。――レンドルス、早急、父上と祖母上に目通りを願いたいと思うんだが」
眼鏡の男の人が心得たように礼をする。彼はそれだけ口にすると、今度は無言で、ホールから続く大きな階段を昇り始めた。もちろん、あたしを抱いたまま。そのあとを、彼の弟だという黒髪の男の人が

追いかけてきた。
「兄上、どこへ行く気だ」
横に並び、険のある口調で問いかけているのに、オルグ・ジード卿は答えようとしない。彼は苛立ったように怒鳴った。
「兄上！　聞いてるのか」
「自室に決まってるだろう。お前も自分の部屋に戻ったらどうだ、アドリオ」
顔色ひとつ変えずにそう言い放ったオルグ・ジード卿。対照的に、黒髪の男の人の表情はみるみる強張っていく。踊り場まで来たところで、通せんぼをするみたいにして立ち塞がる。
「……まさか、ミハルを、兄上の部屋に連れ込む気じゃないだろうな」
その声は怒りに震えているようだった。……ていうか、不穏な言葉に、あたしも思わず目を瞠った。
オルグ・ジード卿は、けれどもただ素っ気なく答えた。
「そこを退け」
「ミハルを渡してくれ。でなきゃ退くことはできない」
「退けと言ってるんだ、アドリオ」
ものすごく冷たい、地響きみたいな声だった。――黒髪の人が、はっとしたように口を噤んだ。
青白い鬼火。ゆらゆらと揺らめく凍てついた焔。あのカシアンという男の人と対峙した時にも、彼の全身を取り巻いていた不可思議な光だ。
黒髪の男の人が、唇を噛みしめるようにしながらも道を開ける。
オルグ・ジード卿は、去り際に彼の弟を一瞥してから、悠々と階段を昇っていった。

その部屋の前まで来ると、彼はあたしを抱えたまま、観音開きの大きな扉を軽々と開けた。室内に足を踏み入れる。背後では厳かな

閉扉（へいひ）の音がした。

あたしはものも言えず、ただ室内を見回した。

だだっ広い部屋だ。そして豪華。とにかく豪華。高い天井に巨大なシャンデリア、クラシカルで高級そうな家具。キングサイズの天蓋付きのベッド。それだけで家が一軒買えそうな気配漂う、複雑な模様の織り込まれた絨毯やカーテン。なにもかも、あまりに縁のないものばかりだ。

と、その中で、ひとつだけ例外を見つけた。――あたしたちが入ってくるや否や、嬉しそうに尻尾を振りながら、白い大きな犬が走り寄ってきたのだ。あたしは目を輝かせた。大きさといい毛並みといい、「スノウ・ハウス」の看板犬、スノウにそっくりだ。

「ラギ、すまなかったな。淋しかっただろう」

オルグ・ジード卿は、足元にじゃれつくその犬をやさしげに宥めている。さっきとはまるで別人だ。あたしは戸惑い、じっと彼の横顔を見つめてしまった。

あらためて見ると、この人、とんでもなく整った顔をしてる。灰色の髪は一本一本が細くやわらかで、シルクかなにかみたいだし、緑がかった青い瞳は上質な翡翠を思わせる。すっと通った上品な鼻筋といい、形良く引き締まった口元といい、まさに貴公子というか王子というのか、絵に描いたような美形。

……そういう人が、どういうわけでいったい誰とあたしを間違えちゃってるんだろう。

飼い犬の相手をしつつも、彼は一向にあたしを降ろそうとはしてくれない。あたしはここへ来て、さすがに言わずにはいられなかった。

「あの……あの、あたし、ここに泊めてもらうわけには……」

「泊める？　お前を？　……おかしなことを言うな、ミハル」

意外そうに言われ、拍子抜けした。なんだ、じゃああの黒髪の弟さんが言ったみたいに、あたしをこの部屋に「連れ込んだ」わけじゃないんだ。まあそりゃそうだよね、こんな超のつく美形が、なに

が悲しくてあたしみたいな平凡そのものの一般人を相手にしなきゃいけないんだ。自分で自分の杞憂っぷりに笑いそうになった時だ。

「お前はずっとここで暮らすんだ。泊めるという言い方は相応しくないな」

「は？」

彼は意味深な微笑を浮かべている。言ってる言葉の意味がわからず、あたしはぽかんと口を開けたまま固まった。

「言っただろう、お前は私の婚約者だと。記憶を失くしているというのなら、それでもいい。私のそばにいるうちに、厭でも思い出すだろうから」

――ちょっと！

声にならない叫びが喉に込み上げた。と思う間もなく、あたしの身体は、あの巨大なベッドの上に横たえられ、さらには間髪入れず、彼が馬乗りの体勢で圧しかかってきた。まとっていた薄手のマントを仕草も荒々しく脱ぎ捨てる。慌てて起き上がろうとしたところを素早く封じ込まれ、真上からまっすぐに見下ろされた。あの、宝石みたいなきれいな瞳で。

「……逢いたかった……」

その顔がわずかに歪んだ。……どきり、と胸が鳴った。

こんな表情で、いつかも見つめられたような気がする。

こんな切ない声で、前にも囁かれたような気がする。

……この人は、誰？

気づくと、唇を塞がれていた。嵐みたいに激しく、でも、それなのにやさしい、いままで誰にもされたことのないようなキス。なぜなんだろう……拒むことができなかった。

誰かとあたしを間違えてる。そうに決まってる。それなのに、あたしの心の中には、このオルグ・ジードという男の人の感情が、津波みたいに流れ込んでは満たしていく。身体中が、この人の気持ち

でいっぱいになる。
お前が好きだ、と、声に出されなくても伝わった。
ようやく唇を離された時、あたしはいったいどんな顔をしていたんだろう。低い、震えるような声が、耳に忍び込む。
「ミハル……もう、どこにも行かないでくれ。頼むから、私のそばにいてくれ。……頼む」
ぽつ、と、頬になにか温かいものが当たった。絶句しているあたしの唇を、彼はふたたび奪った。
「ん……んっ……」
二度目のキスは、一度目よりももっと情熱的で——というより扇情的だった。荒い息遣い。手首を封じる手のひらに力がこもる。あたしは身をよじった。だって、そうしながらも、彼の右手はあたしの胸元に伸ばされ、薄いワンピースの上から揉むような感じでそこを撫で回し始めたのである。さすがにこれは……聞いてないし、だめでしょ、いくらなんでも!
ワンピースの下には、ヴァリーが仕入れてきてくれた簡素な下着しか着けていない。つまり、ノーブラ状態なのだ。こんな状態でそんなところを触られたら、ダ、ダイレクトに……ちょ……っ。抑えようもなく、あたしの肩がぴくんと跳ねた。
「やっ……」
恥ずかしい声が出、顔が真っ赤になる。厭だ、聞きたくない、自分でもこんな……やめて、お願い、お願いだからそれ以上……あたしは文字どおり必死で抗った。
「や、やめてください、厭です……っ」
ぴくり、と彼の手が震えた。かすれ声が聞こえてきた。
「私がきらいなのか?」
「き、きらいとか、そういう……」
「私がどれだけ耐えてきたかわかるか、ミハル。起きていてもお前のことしか考えられず、眠ればお前の夢ばかり見る。気が触れるかと思ったぞ。……それなのに、やっと再会できたというのに、お前

は私を拒む気なのか」

「……だ、だって……」

人違いです。あたしは、あなたたちが捜してる「ミハル」じゃない。あたしは日本人の久世未明で、あなたの婚約者でもなければ、そもそもこの国の住人でもないんですってば。

そのせりふはすべて虚しく呑み込まれてしまった。そんな余裕が一気に奪われたせいだと言ってもいい。

オルグ・ジード卿は、ワンピースのボタンを手早く外し、ついでに腰紐も簡単にほどいてしまうと、下着を捲り上げて、あたしの胸に顔を近づけてきた。

そして、躊躇なく乳首をくわえた。

「……っ！」

息が止まる。頭の天辺からつま先まで、電撃が駆け抜ける。どこか知らない場所へ連れていかれるような錯覚を、感じた。舌が動き回るたび、ぴくんぴくんと、勝手に身体が反応する。……抗えない。

彼の――オルグ・ジード卿の吐く息がどんどん荒くなっていき、やがて彼はあたしからいったん両手を離すと、上体を起こして自分の着ているノースリーブの白い上着のボタンを外し始めた。「次の段階」へ進もうというつもりなのがわかった。

このまま流れに任せて、なんとなく――ってのはやばいでしょ、自分！　人違いだっていうのに！

そんな心の叫びが天に通じたのか、この時、ずっとおとなしくクッションの上で寝そべっていたラギが、いきなり吼えた。その理由はすぐにわかった。

「若君。旦那様と、大奥様が、お待ちでございます」

ノックとともに扉の外から聞こえてきたのは、多分執事なんだろう、慇懃な眼鏡の男の人の声だった。

# 第二話　結婚宣言

「謁見室にて、旦那様と大奥様がお待ちでいらっしゃいます。お早く参られますよう、若君」

二度繰り返すと、それっきり、声は止んだ。ラギは扉の前に行儀良く座り、促しているつもりなのか、こちらをじいっと見つめている。……オルグ・ジード卿の漏らす、地鳴りみたいに深いため息が、胸元にかかった。

「……確かに、目通りを願いたいと申し出たのは私だが……やり切れないな、正直」

独り言をつぶやくと、上体を起こしてあたしの髪を撫でた。そのあまりにもやさしい仕草に、いちいち心臓が反応してしまう……だめだ、まともに受けちゃ。人違いなんだから。

「ミハル、いまさら言わなくてもわかっていると思うが、私はお前を愛している。一日も早くお前と婚儀を挙げ、正式に夫婦となりたい。お前ときちんと結ばれたい。……だから、私がいない間になにがあっても、絶対に貞節を護ってくれ。頼むから、ほかの男のことは考えないでくれ」

緑碧（りょくへき）の瞳に見惚れていたあたしは、操られたように肯きかけ、はっと我に返った。慌てて身体を起こし、乱れた下着を直す。

「ミハル――」

「あ、あの、ほんとに人違いですから！　あたしはあなたの言ってる『ミハル』じゃないです、あたしはただの日本（ニホン）の学生で、な、長野（ナガノ）のペンションの近くにある崖から落っこちて、どういうわけかあの島に……だからあなたのことも知らないし、こ、このお屋敷で厄介になることも、その……」

目を逸らしながら一気にまくし立てた。けど、オルグ・ジード卿

はほんの少し淋しげな顔をしただけで、あっさりとあたしの反駁を封じ込めた。

「それならなぜ言葉がわかるんだ？　お前は大陸共通語（イーザリア）を知らなかったはずだろう。かなり上達はしたが、まだイントネーションには若干の訛りが残っているしな。それに、エンザンテでお前が世話になっていた先の家で、お前のものだという奇妙な服を見つけたぞ。そう……初めてカルマ駅で出会った時に着ていた服と雰囲気がよく似ている。あの青いズボンなんか、長さこそ違うがほとんど同じものだ。

ミハル、お前は記憶を失っているだけだ。私が捜し求めていた相手は間違いなくお前だ」

「う……で、でも」

彼はそこでなぜか、にやりと不敵な笑みを浮かべてみせた。そして、あたしの耳に口元を寄せると、涼やかな声でとんでもないことを言い放ったのである。

「――左の脚の付け根に、小さな黒子（ほくろ）がふたつあるだろう。以前、お前を泣かせてしまった時に見た。私の婚約者である証拠だ」

一瞬で顔が真っ赤になるのがわかった。絶句し、飛び退ろうとして、肩を押さえ込まれた。そしてすかさず唇を奪われた。ほとんど初対面みたいな相手にここまでされるって、やっぱりいくらなんでもあり得ない。だけど抵抗しようにも、その手がかりはすべて奪われてしまってる――肩も、腕も、いまやすっぽりと彼の胸の中に抱き寄せられているせいで。

「記憶がないならそれでもいい……だが、私を拒まないでくれ。私が望むのは、欲しいのはお前だけだ。お前だけなんだ……ミハル」

言葉が出てこない。なにを言おうと彼は納得してくれないだろう。だけど、だけど……。

数分の後（のち）、やっと彼はあたしを放し、ベッドから降りた。上着を整えてから、名残惜しそうにこちらを一瞥すると、真顔でこう言った。

「あのヴァリーという男や、カシアンのことだけじゃない。私以外のすべての男を、お前の意識から消してくれ」

唖然とするあたしを残し、彼は部屋を出て行った。扉の閉まる重々しい音が、あたしとラギ以外誰もいない空間に響き渡る。

あたしは、知らず、つぶやいていた。

「……激しすぎない？　このモテ期」

とことこと近寄ってきたラギが、まるで相槌を打つみたいに、ワンと鳴いた。

ヴァリー、カシアン、それに――アドリオだ。目下、もっとも警戒が必要なのは。

父と祖母の待つ謁見室に急ぎつつも、ジードは苛々と頭を振った。ほかの二人はまだいい。カシアンは療養中の身だし、ヴァリーにいたっては他国の人間だ。この先、再会することもまずないだろう。

だが、彼の異母弟であるアドリオは話が別だ。広大な屋敷とはいえ、同じ家に暮らしている事実に変わりはない。いつ未明に接近してもおかしくないのだ。現に、彼は帰途の船旅で、そう宣言していた。

――父上がなんと言おうと、俺はあんたとミハルの仲を認める気なんかない。ミハルが記憶喪失だというなら、そもそも条件は同じなはずだ。俺は絶対に、退くつもりはないからな。

不穏な感情が腹の底から湧き上がる。自室に施錠はしたものの、あの女あしらいの妙に巧いアドリオのことだ。自分が不在の間に、メイドの誰かを口説き落とし、女官長が管理しているはずのマスターキーを持ってこさせることだってやろうと思えば可能だろう。そうだ、パドマにも伝えておかなければ。未明が記憶喪失であること、

それに、自分の花嫁として彼女を迎えるつもりだということを。
謁見室の前まで来ると、ジードは呼吸を整えた。ここは父の部屋の真隣に設けられた、公式な会見用の部屋である。部外の者がこのウェス・ハーシュ邸を訪れること自体滅多にないのだが、それでも時折、ロマド市長をはじめ市議員など、政(まつりごと)に関わる人間がやって来てはヴィネックに面会を申し込むことがある。この部屋はそういったケースで使われることがほとんどで、ジード自身が入るのはこれが二度目だ。
一度目は四年前、大学府に入府した時。そして二度目となる今日、四年前をはるかに上回る緊張に、彼は襲われていた。
「父上、祖母上。遅くなりました。オルグ・ジードです」
「ああ、とっとと入れ。待ちくたびれたぞ、いい加減」
口上を述べると、ヴィネックの素っ気ない応答が聞こえてきた。軽く息をついてから扉を引き、入室する。
大して広さのあるわけではない、どちらかというと簡素と言ってもいい造りの部屋である。元々、一族の長であるウェス・ハーシュ卿と、訪問者が対面するためだけの場所だ。狭いのは当然といえば当然だった。
扉から向かって真正面の椅子に、父が掛けていた。相変わらず退屈そうに欠伸を噛み殺しながら。そして、その脇に設えられた少し小ぶりの椅子には、父の実母であるアウラの姿があった。雪のように白い髪を編み込んでひとつにまとめ、凝った刺繍の施されたヘアバンドで留めており、夏だというのに肌をほとんど出さない、青灰(せいかい)色のぴったりとしたドレス(しょく)が、彼女の首元も手首も覆い隠している。豪奢なものをきらい、質実剛健を旨とするこの祖母から、どういうわけで享楽嗜好を具現化したようなヴィネックが生まれたのかは、永遠の謎だ。
ジードは前に進み出、慎重に頭を下げた。
「お待たせして申しわけありませんでした。ただいま戻りました、父上、祖母上」

「ああ、前置きはいい、前置きは。俺も眠いんでな、単刀直入にいこうぜ、坊主（シグノ）」

気だるげに首を振る息子に、アウラの一喝が飛んだ。

「ヴィネック！　なんど言えばわかるのです。名誉あるウェス・ハーシュ家の現当主としての矜持をお示しなさい。……ジード、よく無事で戻りましたね。顔を見せておくれ」

彼女は、その枯れ枝にも似た両腕を、いとおしそうに孫へと伸ばした。ジードは微笑み、その手を取った。

「おお、ジードや……ウェス・ゴートの者と一悶着あったとか。老い先短い年寄りを、あまり心配させないでおくれ」

手のひらを頬に押し当て、おとなしく肯くジードを尻目に、ヴィネックはぼそりとつぶやいた。――そんな簡単にくたばるタマかよ、まったく。幸いにもその独白は、彼の母親の耳には届かなかったようだ。ヴィネックは頭を掻きながら、さも面倒そうに切り出した。

「で、おい、坊主。お前、言いたいことがあって俺たちをここに集めたんだろ」

ジードの顔に緊張が走る。彼は祖母の手をそっと離すと、父の目をまっすぐに見据え、口を開いた。

「ミハルのことです。……正式に、彼女との婚姻をお赦しください」

「ああ、いいぜ」

ヴィネックはあっさりと言い放った。文字どおりの即答に、反応を返せず瞠目するジード。なかば狼狽えたように自分を見る息子を、ヴィネックはにやにやと眺めた。

「俺はとっくに赦しを出してるだろ。一ヶ月以内にあいつを連れ戻すことができりゃあ、その時はお前の好きにしろってな。……ま、けど、本人はどうなんだ？　お前の嫁になるってことで、承諾してんのか？　俺が言うのもなんだが、色々面倒くさい家だぜ、作法だのしきたりだの。その辺わかった上で一緒になるんだろうな」

「……」

ジードは詰まった。しかし、ここで話さないわけにもいかないだ

ろう。彼は息を吸い込んだ。
「おい、坊主？」
「父上。実は、彼女は記憶を失っているんです。この屋敷でメイドとして働いていたことも、むろん、私たちのこともすべて。言葉だけは憶えているようなんですが……」
ヴィネックの顔色が変わった。頬杖を解き、椅子から軽く身を乗り出すようにしてジードを凝視している。
「な――んだって？　記憶を？　なんでまた……いや、それじゃあれか？　去年の秋、カルマ向けの汽車に乗ってこの町に来た時とおんなじ状態だってことか、おい」
「……ええ」
ジードは苦しげに肯いた。二人のやり取りを黙って見つめていたアウラは、重々しいため息を吐き出した。
「ジードや。ノルド家の姫を差し置いて、なぜそんな、どこの誰とも知れぬような怪しげな娘を求めるのです？　一時期の気の迷いであるなら、いまここで想いを断ち切りなさい。お前はまだ若い……若さゆえの激情のなせるわざなのですよ。頭を冷やし、よくよく考えれば、正気に返るでしょう」
アウラの言葉には悪意などはない。彼女はただ、そういう環境で育ったというだけだ。それがわかるだけに、ジードには祖母を責めることはできなかった。彼はゆっくりと首を横に振った。
「ミハルを忘れることなどはできません。もしもそれが可能であるなら、私はそもそも彼女を捜して船旅に出ようなどとは思わなかったでしょう。……彼女は、私の魂の半身なのです」
アウラは絶句した。その隣で、小気味よさそうに口笛を吹くヴィネック。
「いい覚悟じゃねぇか、ジード。そこまで腹（ハラ）が決まってんなら、俺はもう言うことはねぇ。好きにしろ。ただし――卒府は二ヵ月後だ。それまでは禁忌を守り通せ。いいな、これだけは誓ってもらうぞ」
「父上、私は――」

ジードは思わず抗っていた。未明がこの腕の中に戻ってきたというのに、添い遂げることができないのでは、以前とまるで状況が同じだ。しかも、夏期休暇はあと一週間で終わってしまう。そうなれば、目下の最大の危険人物である異母弟、アドリオがどういう行動に出るか。考えただけでも気がおかしくなりそうだ。

そんな煩悶を読み取ったのか、ヴィネックの言葉は続く。

「アドリオのことなら心配するな。俺が（一応）監視しといてやるから。要は、お前が不在にしてる間、あいつがミハルに手を出さないかどうかが心配なんだろ。大丈夫だって、俺を信用しろ、な」

「……」

ジードは懐疑に満ちた眼差しを実父に向けた。アウラまでが呆れたようにそんな息子を見つめている。ただしその理由は、彼らとは別のところにあった。

「お前、ヴィネック、なんですって？　アドリオもその娘を好いているというの？　まあ……なんてこと。あの子だって、嫡子ではないとはいえ、来年は大学府（エコルガルト）へ進む身ですよ。それを……同じ屋敷の中にそんな相手がいるだなんて。由々しき事態だわ、なんてことでしょう、まったく！」

ヴィネックは眉をしかめ、あからさまに耳を押さえた。

「仕方ないでしょうが。あいつだって年頃なんだ。大体、奴は大学府に入る気なんてさらさらないんだしな。この家の名誉とやらも、最悪、長子が首席で卒府さえできりゃなんとか守れるわけだし。そう考えたら、アドリオのことは、そろそろこの家から解放してやっても――」

「父上！　アドリオにまさか、そんなことをおっしゃるつもりじゃないでしょうね」

修羅の形相のジードがヴィネックに迫った。さすがのヴィネックも黙り込むほどの迫力だ。彼はしどろもどろに言い返した。

「いや、だからそれは、たとえばの話だけどよ。ともかくだ、禁忌は守れ！　それさえ誓えるんなら、ミハルをどうしようがお前の勝

手だ。もういいだろ、俺は眠いんだ。解散だ、解散」
彼は返事を待たずに立ち上がった。そして、追いすがるジードを振り切り、逃げるように部屋を出て行った。
あとに残されたジードとアウラは、無言のまましばしその場に佇んでいたが、やがて口を開いたのはアウラが先だった。
「ジード、お前……禁忌を犯したら首席どころか卒府すらできなくなるのですよ。そのことを……」
「――失礼します、祖母上」
短く言い捨てると、ジードは祖母の顔も見ずに退出した。呆気に取られ、言葉も出ないアウラ。間を置かず、彼女の傍仕えの侍女が謁見室に現れたものの、不興を顕わに黙り込んでいる女主人の姿に、怯えて足をすくませた。

# 第二話　結婚宣言（後書き）

「貞節を護れ」……マッチョイズムっぽい発言ですね、コレ。

# 第三話　女官長の困惑

それから小一時間ほどして――確か、半刻とか表現するんだっけ――オルグ・ジード卿は部屋に戻ってきた。出て行った時と同じように、なんだか難しそうな顔をしている。声をかけた方がいいのか、それともへたに刺激しない方がいいのか判断しかね、あたしはとりあえず黙っていた。ちなみに、ベッドの上というのはどうにも居心地が良くないので、部屋の比較的隅っこに置いてある長椅子に移動済みだ。

そんなあたしとは対照的に、ラギの方は忠実な愛犬らしく、ご主人様の足元に駆け寄っていった。その毛並みをやさしく撫でながらも彼は目ざとくあたしを見つけたみたいだった。

「ミハル、どうしてそんなところにいるんだ。眠っていてもよかったんだぞ、船旅で疲れただろう」

あたしはぶんぶんと首を横に振った。滅相もない……じゃなくて、だから、同じベッドで眠るわけにはさすがにいかないんだってば。

ていうより、いくらだだっ広い部屋でも、同室は無理。この人が誰かとあたしを間違えて、その相手に猛烈なアプローチをかけてる最中だってことを知ってる以上、やっぱり無理。どうがんばっても無理。

彼はなにを思ったのか、得心したように肯いた。

「ああ、すまない、気が利かなかったな。湯を使いたいのだろう？汗もかいただろうし」

そう言うと大股に近づいてきて、あたしの腕をつかんだ。

「浴室はこっちだ。いま、湯殿の用意をさせよう。……そうか、着替えも要るな……メイドに準備をさせるから、少し待っていなさい」

さすが豪邸は違う。個室にちゃんとお風呂があるんだぁって、そ

こじゃない！　彼はあたしを抱えるようにしてベッドサイドに近寄ると、花や蔦なんかの凝った装飾が彫り込まれている電話機――親子電話みたいなものだろうか――を取り上げて、なにごとかを短く指示した。通話を終えるのを見計らい、あたしは言った。

「あの、そうじゃなくて、あたし」

「気を遣わなくていい。呼んだのはパドマとピアだ、お前と仲が良かったメイドの。憶えていないかもしれないが、きっと会えば彼女も喜ぶだろう」

「オルグ・ジード卿、あの、あたしは」

あたしはつい苛立ったような声を出していた。すると、ようやく彼はまともに耳を傾ける気になったのか、じっとあたしを見つめ、口を開いた。

「……その呼び方は気に入らないな。夫婦になるというのに、他人行儀過ぎるぞ、ミハル。私のことはジードと呼んでくれればいい。尊称も要らない。……呼んでごらん」

あたしは口ごもった。そんな話をしたいわけじゃないし、それに、厄介者のあたしがこのものすごい家の御曹司らしき人を呼び捨てにするなんて、ちょっと不自然だし。そう思っていると、彼はあたしのあごに手をかけ、ふたたび促した。

「ジードだ。ほら、呼んでごらん、ミハル」

「じ……ジード……様」

消え入りそうな声でなんとか復唱してみた。けど、彼は満足してくれなかったらしく、意地悪っぽく首を横に振っている。

「確かに以前はそう呼ばれていた。お前はこの家で、メイドとして働いていたからな。だが、いまはもう事情が違う。夫を様付けで呼ぶ必要などないだろう？　それともお前の国ではそうなのか？」

「え……」

言われて言葉に詰まった。いや、でも、時代劇とかだと、身分の高い夫婦の場合、けっこう普通に尊称つけて呼んでる気がするけど……って、だからそれはどうでもいいんだっつうの。

「ジード様、そうじゃなくて、あたし、この部屋を」
出ます。と言い終わる前に、ノックの音と、メイドさんらしき女の人の声が、部屋の外から聞こえてきた。
「若君。湯殿の用意を整えてまいりました」
扉が開き、ヴィクトリアンメイドスタイルの女の人が二人、台車（ワゴン）を押しながら部屋に入ってくる。一人はさっき、玄関ホールであたしたちを涙ながらに出迎えてくれたおばさんだ。そしてもう一人は、ふんわりとした明るい栗毛に目のぱっちりとした、十六歳くらいの可愛い女の子だった。どことなく妹の榛名（はるな）を思い起こさせる顔立ちの――と思っていると、彼女はあたしをまじまじと見て、たちまち目を潤ませた。
「ミハルぅ……無事だったんだぁ、よかった、あたし超心配したんだよ」
え？　と思う間もなく、思いきり抱きつかれてしまった。いや、ていうか、ごめんなさい……誰？
「ピア、お止めなさい、まったく。どうしてこの子はこう、なんにつけても情動的なのかしら」
どうやら監督役らしい女の人に叱られ、彼女はあたしから顔を離した。小柄なあたしよりもさらに五センチほど身長が低く、そんなところも榛名にそっくりだ。
「パドマ、それにピア。はじめのうちに言っておくが、彼女は記憶喪失に陥っていて、ここで暮らしていた頃のことを一切憶えていないんだ。色々不都合なこともあるかもしれないが、心得ておいてくれ」
オルグ・ジード卿が――ジード様が咳払いをしてから、そう切り出した。二人は呆気に取られたように、あたしとジード様を交互に見比べている。
「き……記憶喪失ですって？　あら、でも、だってミハル、あなたそもそもこのお屋敷に来た時、そうだったのよね？　放浪民（ツィゼット）として着の身着のままで汽車に乗って……憶えていないの？」

さっぱり身に憶えのない話を持ち出され、あたしが答えるより先に、ジード様が勝手に返事をする。

「ああ、そうだ。だが、言葉はかなり上達したようだぞ。……それから、これも先に伝えておくが――彼女は私の妻になる身だ。私が卒府したらすぐにでも婚儀を挙げる。父上にも赦しを得ている。そのつもりでいてくれ」

今度こそ、二人の目は点になった。素っ頓狂な声を上げたのは、やっぱりピアの方だ。

「つつつ妻!?　ええっ、嘘、そうなのミハル？　いつの間に？」

「ぼ……坊ちゃま、それは本当なんでございますの？　お館様もご了承済みだと？　まあ……まあ、じゃあ、二ヵ月後には――」

「ウェス・ハーシュ家の若き奥方になる。式の準備も進めなければな」

ジード様はにこやかにそう宣った。慌てて反論しようとしたあたしの言葉は、またしてもかき消された。

「ミハル、すごぉい！　超玉の輿じゃん、羨ましい！」

「ちょっ……あの、いや、そうじゃなくて」

ピアは感極まったのか、あたしに抱きついたまま離れようとしない。ジード様の澄ました声が聞こえてくる。

「ピア、彼女を浴室に連れていってやってくれ。パドマ、お前には少し話がある」

パドマさんは驚きに頬を紅潮させながらも恭しく肯いた。この辺はやっぱり、年の功というやつなのかもしれない。

一方、あたしは、台車に押されるようにしながら、ピアに連れられて浴室へ向かった。

未明とピアが浴室に消えるのを見届けてから、ジードはパドマに向かい、おもむろに本題を切り出した。

「わかっていると思うが、私はあと一週間でまた大学府へ戻らねばならない。不在の間、お前には気をつけておいてもらいたいことがあるんだ」

「心得てございますわ。ミハル……いえ、奥様のことですわね。ええ、お任せくださいませ。とりあえずは礼儀作法ですかしらね、まぁ、頭の良い娘ですから、すぐにでも――」

したり顔で話し始めた女官長を、ジードは遮った。

「そうじゃない。……いや、それもあるが、つまり……アドリオのことだ」

思いがけない言葉に、彼女はそのつぶらな瞳をぱちぱちと瞬(しばたた)かせた。

「弟君様の？　なんですの、いったい」

ジードは口元に拳を当て、わざとらしく咳払いをした。

「――あいつはミハルに惚れている。卒府次第すぐにでも結婚すると伝えたにも関わらず、私たちのことなど認めないと言い切っていた。たとえ父上の赦しがあろうが関係ないと。だから、つまり、見張っていてくれないか。あいつの挙動を」

パドマはあんぐりと口を開け、次いで、はっとその口を閉じた。

「……まぁ……ちっとも存じ上げませんでしたわ、そんなこと……でも、だって、お館様がご承認なさっているのでしょう？　それではいくらアドリオ様が岡惚れなさろうと、勝機などは……」

驚きのあまりか、パドマの口調が若干下司なニュアンスを帯びているようだった。ジードはわずかに苦笑いした。

「むろんそのとおりだ。だが……無鉄砲なところのあるやつだからな。なにをしでかすかわからない。私の不在を狙ってミハルに接近し、既成事実を作ろうと考えたとしてもおかしくない。だから、そんな隙をあいつに与えることのないよう、目を光らせていてくれ、パドマ」

ジードの表情は至極真面目だった。その迫力になかば気圧されながらも、有能な女官長は頼もしく肯いてみせた。ただ、その胸中で

は、とても主君に知られるわけにはいかない、こんなことを思ってもいたのだが。

そもそも、ミハルがジード坊ちゃまを好きだということにさえ、私、気づかなかったけれど……あら？　……やだ、だってお互い好き合っているからこその結婚なのよね？　まさか、そんな、ねぇ……。

……岡惚れじゃないかもしれないなんて、私ったらなんてことを考えちゃってるのかしら。

貝殻の模様の浮き出た白い天然石で作られているバスタブにお湯を張り、ついでに香油を垂らす。バラのようなすごく良い香りがほわんと広がる。

「ほら、ミハル、冷めないうちに入って入って。あたしが隅々まで洗ってあげるから」

腕まくりをしながら言うピア。あたしは赤くなった。女同士とはいえ、やっぱり裸を見られるのは普通に恥ずかしい。でも、ピアは一瞬きょとんとしたあと、おかしそうに笑い出した。

「そんなこと言ってたら奥様稼業務まんないよ、ミハル。なんでも他人にやってもらうのが仕事みたいなもんなんだから。……あっ、そういや、もう旦那様や大奥様にご挨拶したの？　お嫁に来ます、って」

あたしは噴き出した。ピアの言葉がツボに填まったからでは決してなく。

「じょ、冗談でしょ！　あのね、あたし、結婚なんてする気ないから、ほんとに。お願いだから誤解しないで」

ソープを泡立てていたピアの手が、ぱったりと止まる。

「へっ？　……なんで？　だって、さっき、ジード様が」

「だから、あの人が勝手にそう言ってるだけなの。あのね、ピ……ピア？　こんなこと言うとアレなんだけど、あたし、ここのみんなが言ってる『ミハル』じゃないのよ。人違いしてるの、みんなして。相当似てるみたいだけど、あたしはその『ミハル』じゃないの、お願いだから信じて」

あたしは泣きそうな顔でそう言った。ピアは訝しげに眉を寄せつつも、申しわけなさそうに首を横に振っている。

「……ごめん、ミハル、悪いけど人違いじゃないよ。顔も声もおんなじだもん。童顔なのに胸があるとこも一緒。ていうか……まじで記憶喪失なんだ、じゃああたしのことも、全然憶えてないんだね」

逆に淋しげにつぶやかれてしまい、あたしは焦った。そして言わでものことをなぜか口走っていた。

「あ、えと、その……あのね、ピアってあたしの妹に似てる。榛名（ハルナ）っていうんだけど」

「今年十六で、甘えん坊なんでしょ。妹だけどミハルのことお姉ちゃんとは呼ばないって。前、言ってたよね」

愕然とした。……なんで？　なんでピアが、榛名のこと知ってるの？

「だから、お茶しながら教えてくれたじゃん。ミハルが遠くの学校に行っちゃったんで拗ねちゃって大変だったとかさ。で、あたし、ミハルのいたとこって、普通の家の娘でも大学府みたいなレベルの高い学校なんて行けるんだねって答えたの。インパクトある話だったから憶えてるよ」

あたしは目を瞠った。……無意識のうちに、左脚の付け根に視線が向いていた。

ごくり、と喉が鳴る。

そこには、彼が言ったとおり、小さな黒子が二つ並んでいた。

## 第三話　女官長の困惑（後書き）

「岡惚れ」……要するに横恋慕ってやつですね。古き良き死語。

# 第四話　イグネラの樹

目を開けると、ぼんやりとした薄闇が見えた。

広い部屋の四隅には、ちょうど一晩で消えるように調整されているキャンドルタイプの常夜灯が設置されているので、夜中になにかあっても真っ暗闇でパニックに陥るってことはないらしい。寝返りを打とうとして、いま自分が置かれている状況を唐突に思い出し、顔が真っ赤になった。

あたしの真横には、オルグ・ジード卿が――もといジード様がいる。

眠っていてもまったく崩れない、こっちが恥ずかしくなるくらいきれいな顔のままで。

神に誓って（イグノディアス）、絶対に身体に触れたりはしない。だから同衾（どうきん）を承知して欲しい。涙目で迫られ、結局あたしは折れてしまったんだった。こんなこと、死んでもお母さんに知られるわけにはいかないと思いつつも（知られるはずもないんだけど）。

「ミハル……」

いきなり名前を呼ばれ、あたしは硬直した。起きてるのかと思ったけれど、どうやらそれは寝言だったらしく、長い睫に縁取られた瞳は閉じていた。でも、あたしの肩に回された左腕には、眠ってるとは思えないくらいの力が不意に込められた。……どういう夢を見てるんだろう、と一瞬不安になった。

あたしは極力、意識の中から彼を締め出すことにした。

それから、ゆっくりと、思考の海に潜る。

浴室でのピアとのやり取り。左脚の黒子（ほくろ）。――そうだ、それに、ひとつ思い出したことがある。

これなに？　未明ちゃん。外語大って、こういう研究もするの？

実家に帰省した日、榛名にそう訊かれた。彼女が示していたのは、あたしの持っていたバンド付きのノートの中身。そこには、見たことも聞いたこともないような、おかしな文字が並んでいて、でもあたしにはまったく身に憶えのない内容で――あれってもしかして、この国……ていうか、この世界の国語だったんじゃないだろうか。

いや、でも、そうだとして、いったいいつあたしはここに来たんだろう？　あの怪しげな廃隧道の崖から落っこちたのは年末の話だ。それより以前に一度来ているんだとしたら……。

あたしは、ジード様やその弟さんやピアが言うように、本当に記憶を失っちゃってるってことになる。あたしの人生のどの時点でかはわからないけど、ある日突然「こっち」に召喚（よば）れて、同じように突然日本に戻されて……ってことに。

そう思った途端、全身からすうっと血の気が引いていくのを感じた。

だって、それじゃ、あたしの意思とはまったく無関係に、この先もそういう事態が起こり得るって話になってしまう。たとえば日本にどうにか帰れたとして、大学を無事卒業できても、就職したとしても、またいつこんな不条理な状況に巻き込まれるかわからないなんて……そんなの冗談じゃない。

……頭痛くなってきた。だめだ。眠ろう、とりあえず。あたしは強引に瞼を閉じた。

――こんな風に腕枕されたのって、もしかして二回目だったような気がする。

でも、一度目はいったい誰に……？

「ミハル……愛してる、ミハル」

小さな声が聞こえた。不意打ちのような愛の言葉。ぎょっとして

ジード様を見ると、その目は相変わらず閉じられていて、でも、眉がどこか苦しげに歪んでいた。……胸が痛んだ。

なんの変哲も取り得もない、どこにでもいるような女子大生。そんなあたしを、どうしてこの人は、ここまで求めてくれるんだろう。

それから一週間の間、ジード様は文字どおり、ひと時たりともあたしをそばから離そうとしなかった。お茶の時間も、食事の時間も、この部屋で二人きりで過ごした。庭に散歩に出る時ももちろん一緒。天使みたいに可愛らしい双子の姉弟、ユ・テラとユ・ゼルがやって来て、あたしにしきりに話しかけようとしてくれたのに、ジード様はさりげなく二人を遠ざけてしまった。

あたしはつい不満げな顔をしてしまったみたいだ。彼は申しわけなさそうに苦笑しつつも、あたしの肩を抱く手のひらに力を込めた。

「すまない。だが、いまだけは……せめて大学府に戻るまでは、お前を独占させてくれ。二ヶ月間もお前の顔が見られないなんて、私には拷問に等しいんだ」

不覚にも、きゅん、と胸が鳴ってしまった。……いや、だって、このレベルの人にそんなこと言われたら、たいていの女子はときめくだろう。それでもあたしは微力を振り絞って、抵抗っぽいことを試みた。

「……ジード様、趣味、悪いです。ほかにもっときれいな子、いっぱいいるでしょう。あたしみたいな素性もわからないような怪しい女、どうしてそんなに大切にしてくれるのか、不思議です」

「――驚いたな。本気で言ってるのか？　ミハル。私の気持ちが信じられないってことか？」

身体の向きを変えられ、そう詰め寄られた。怒っているのか、それとも傷ついているのか、その声はいつもの穏やかな声色とは少し違って、かすかに震えてさえいるようだった。あたしは焦った。

「し、信じられないとか、そういうことではなくて、その……」
「いますぐにだってお前が欲しくてどうにかなりそうなのに、それを必死で抑えているっていうのに、お前はそんなにつれないことを言うんだな。……信じさせて欲しいのか？　ベッドの中で」
　とんでもないことを言い出され、あたしは首を必死で横に振った。けれど、彼は攻撃の手を緩めてくれない。狼狽えるあたしを抱きしめ、頭に頬をすり寄せながら、甘く低い声で囁き続ける。
「禁忌など本当はもうどうでもいい。お前さえ私を受け入れてくれるなら、私はすべてを棄てられる。わかってくれ、ミハル……愛してる、愛してるんだ。……気が狂いそうなくらいに」
　彼の気持ちが流れ込んでくる。胸が苦しい――自分の感情なのか相手のものなのか、それすらわからないほど。
「本当はこんな状態のまま、お前を置いていきたくはないんだ。お前の心が完全に手に入ってもいないというのに、このままお前をこの屋敷に残したりしたら、それこそあいつの……」
　言いかけて、彼ははっとしたように口を噤んだ。怪訝そうに彼を見上げるあたしにぎこちなく微笑み、話題を変えた。
「少し風が出てきたな。移動しよう、いい場所があるんだ」
　小さな男の子みたいな表情だった。手を引かれ、美しく手入れされた芝生を歩く。五分ほど歩いた先に、見たこともないような立派な巨木がどっしりと立っていた。太く入り組んだ幹、いく筋にも分岐して天へ伸びる枝葉。たとえて言うなら、ＣＭなんかで観たことのあるガジュマルみたいな――あたしは思わず嘆声を漏らした。
「すご……きれい……」
「イグネラの樹というんだ」
　ジード様は幹にもたれかかるようにして腰を下ろし、あたしにもそうするよう促した。彼に倣い、その隣に座り込む。
「イグノディアス神の宿る世界樹と同じ種類（もの）だという説もあるんだが、確かにそう思えるくらい見事な樹だろう。……だから、この樹の下（もと）では、お前に触れることはできないんだ。かの神が嫉妬し、恋

人同士の仲を引き裂くと言われているからな」

弁財天とか、山の神様みたいな存在なんだろうか。引き裂かれるほどの仲ではないんじゃ、と思ったけれど、さっきのことがあったので黙っていた。

それにしても、この手の巨木信仰って、どこの世界にもあるんだなぁ。日本の場合だと、神話に出てくる高御産巣日神（※）は、別名が高木神。元々は神格化された木を指しているって言われてるわけだし。

「子どもの頃、勉強や剣技の授業に嫌気が差すと、こっそり屋敷を抜け出してはここに来て、隠れていた。私がこの場所を気に入っていることは皆が知っているはずなのに、不思議と見つからなかったんだ。イグノディアス神が味方してくれたのかもしれないな」

悪戯っぽい微笑。あたしもつられて笑っていた。真夏の黄昏の、どこか切ないような風が、ふわりとあたしたちの間を通り過ぎていく。

心地好いはずのその風に、あたしの身体はなぜか震えた。

あの廃隧道を覗き込んだ時に感じた夏の風と、同じ匂いを嗅ぎつけたせいかもしれなかった。

（※「高御産巣日神」……天地開闢の折、高天原に現れたとされる「造化三神」の一柱。結合、生産を司る）

# 第五話　アドリオの画策

お屋敷に来てからちょうど一週間後の朝早く、例によって二人きりの朝食を済ませたあと、ジード様は馬車に乗って、通っている学校――大学府（エコルガルト）と呼ばれる超名門校らしい――へと旅立った。その直前に撮った、あたしと二人で写っている写真を携えて。

「ジード様、まじでメッロメロだよねぇ……いいなぁミハル、あたしもあんな風に誰かに溺愛されてみたーい」

いまやあたし付きの侍女ということになってしまった（これもジード様が独断で決めてしまったのだ）ピアが、髪のセットを手伝ってくれながら、両腕で自分の身体を抱きしめているのが、鏡越しに見えた。……あたしは深いため息をついた。

「どしたの、ミハル？　ははぁん、淋しいんでしょ、旦那様がいなくなっちゃって。卒府まで二ヶ月は逢えないんだもんねぇ」

にやにやと意味深な笑みを浮かべるピアを、あたしは情けない顔で睨んだ。

「……旦那様じゃないわよ。もう……どうしたらいいの、あたし」

「どうしたらって、だから、パドマ様が言ってるじゃん。これからは毎日みっちり奥様修行があるんだから、淋しがってる閑なんてないって。早速今日の夜から食堂デビューなんでしょ？　いままではジード様がどうしても二人っきりで過ごしたいからって、パスさせてくれてたみたいだけど」

ブラシを振り上げながらしたり顔で肯くピア。ずーん、と胸の辺りが重くなった。

そうなのだ。このお家の一員になる以上、朝と夕の一家が顔をそろえる正餐（せいさん）の場には必ず列席してもらいたいと、あの一見柔和だけれど怒らせたら怖そうな女官長さんは、厳格な口調であたしに告げ

た。反論しようにも、なにしろ横にぴったりと寄り添うジード様が口を開く方が早く、あれよあれよと段取りが取り決められ、結果、あたしの「お披露目」は今夜と決定してしまったのである。

「正直、旦那様は超気さくな方だし、小さい坊ちゃま方もひたすら可愛いだけだし、ここん家の方たちって基本、やりやすいと思うんだけど……問題はまぁ、大奥様よね。あたし、このお屋敷に来て二年になるけど、大奥様とお話したことって、まだ二回くらいしかないもん。なんていうか、空気が凄くてさぁ……よし、できたっと」

ピアは満足げに、鏡に映るあたしを見つめている。いく束かに分けた三つ編みをヘアバンドのように頭に巻きつけ、余った髪はそのまま垂らし、背中の辺りでリボンでまとめている。……あたしは赤面した。可愛いけど、なんだかまるでコスプレでもしてるみたいだ。ていうか、それを言ったら、いま着せられているこの「部屋着」だって、充分にコスプレなんだけど。白い絹タフタで織られた、ハイウェストのドレス。シンプルだけれど素人目にも仕立てが良く、高級品だってことは極上の手触りがすぐに教えてくれる。

「うん、似合ってる。これなら大奥様も気に入ってくださるんじゃないかな、清楚系お嬢様に見えるから」

ウインクされても喜べない。――やばい、このままじゃほんとにあたし、なし崩しでこの家に嫁ぐことになってしまう。ふたたびため息を吐き出そうとした時、ノックが鳴った。

「は……はい」

慌てて返事をすると、なぜか犬の鳴き声が聞こえてきた。ピアと二人、思わず顔を見合わせる。

「ミハル！　開けてよう。パドマが呼んでるよう」

小さな男の子の声。慌てて部屋のドアを開けると、このお家の末っ子、ユ・テラとユ・ゼル姉弟がいた。その傍らには、ジード様の愛犬であるラギがちょこんと座っている。……そういえば今朝、ジード様を一緒に見送ったあと、戻ってこなかったんだっけ。愛らしい構図に、思わず頬が緩む。

「おはよ、ミハル！　あのね、パドマが呼んでる。お勉強の時間だって」
ジード様に良く似た灰色の髪の男の子が、あたしの手を取って引っ張った。
「もうそんな時間？　ごめんミハル、遅くなっちゃったみたいね。……じゃあ坊ちゃま方、あたしと一緒に遊戯室にでも参りましょうか」
腰を上げたピアを見て、なぜか二人はぎくりと身を固くした。間髪入れず、お姉さんのユ・テラが――正直、この子たちって見た目で区別するのはかなり難しいんだけど――ピアにこう言った。
「ピア、えーと、アレクサが用があるみたい。厨房に来てほしいみたいなこと、言ってたわよ」
思いもかけない言葉だったのか、大きな茶色の瞳をぱちくりさせているピア。
「アレクサさんが？　ふうん……どうしたんだろ。じゃあ、ミハル、またあとでね」
ピアは軽く手を振るなり部屋を出て行った。その後ろ姿を見送っていたユ・ゼルが、ふうっと大きく息をついた。
「？　どうかしたの？」
訊ねると、ぶんぶんと首を横に振った。そして、しきりにあたしの手を引き、外へ連れ出そうとする。
「とにかく来てってば、ミハル」
「あ、うん……お勉強、だったね」
「そうそう、そうなの」
あたしは、二人と一匹に誘われるようにして、ジード様の部屋をあとにした。ふと、小首を傾げていた。
――確か、礼儀作法の勉強については、このお部屋でやるから、待ってるようにって言われた気がするんだけど……。

ユ・テラとユ・ゼルに連れられていった先は、同じ階のいちばん奥まった場所にある、ちょっと薄暗い感じの部屋だった。大きな両開きの扉はいかにも重そうで、色味もくすんで見える。

ユ・ゼルはあたしの手を握ったまま、もう片方の手で可愛らしくノックをした。

間を置かずに足音が聞こえて来、中から男の人が現れた。つややかな黒髪に、茶褐色の混じった黒い瞳。――ジード様の弟さん、アドリオ様だ。

て、いうか……なんで彼がここに？　パドマさんは？

ぽかんとしてるあたしを見て、彼はものすごくやさしげな微笑みを浮かべた――と思ったら、部屋の内側にぐいっと引っ張り込まれ、さらには彼の腕の中にすっぽりと抱きすくめられてしまった。え？

なに？　なんで？

「兄様、約束だよ。今度街に行く時は、ぼくらも連れてってくれるって」

ユ・ゼルの声が聞こえる。ど――どういうこと？　混乱するあたしにはまったく構うことなく、アドリオ様はすまして答えている。

「ああ、約束は守る。その代わり、このことはパドマには絶対内緒だぞ。いいな、二人とも」

「大丈夫よ、ゼルはともかく、あたしは口が堅いんだから。信用して、兄様」

「なんだよ、テラ！　ぼくだって絶対、誰にも言ったりするもんか」

二人はじゃれ合いながら廊下を駆けていってしまった。そのあとをラギが懸命に追いかける。あたしは――わけがわからないまま、アドリオ様の腕の中で、彼らをぼんやり見送った。――はっと我に返り、ともかくも口を開く。

「あ……あの……」

「久しぶりだな、ミハル」

慌しく扉を閉めるなり、彼はあらためて両腕であたしを抱きしめ、

耳元で囁いた。……って、だから、これはいったい、どういうこと？
「あの、アドリオ様……ええと、べ、勉強……礼儀作法の……ぱ、パドマさんが……」
しどろもどろなあたしの言葉を、彼はあっさりと遮った。
「お前、元の国に帰りたいんだろ。俺が協力してやる」
……えっ？
あまりにも唐突に言われ、目が点になった。
彼はちょっとだけ腕の力を抜くと、そのどこかエキゾチックな眼差しで、あたしをじっと見つめた。ていうか――この人、なんだか、大学の友達に……瀬川君に似てるなぁ。彼よりもはっきりと美形！
って感じだけど、顔の基本的な作りとか雰囲気が、なんかすごく近いものがある。
そんなことを思っているあたしに、彼は真顔で続けた。
「このままこの家にいたら、お前、二ヵ月後には兄上の花嫁にされちまうぞ。いいのか？　身に憶えがないんだろ、婚約云々の話なんか」
そうだった。確かに、いくら証拠を示されても、あたしの中には一向にここで働いていたっていう時の記憶が蘇ってはこない。この状態で結婚なんて、どう考えてもやっぱり無理だ。でもそれをいくら訴えかけたところで、ジード様は聞く耳持たないし……。
「結婚なんかする必要ないさ。だから俺がお前の力になってやる。……お前、ニホンって国から――俺の母上と同じ国からこのゼーレンディアに来たんだったな。初めはカルマ行きの汽車に乗って、二度目は……」
「母上と同じって、えっ！？　アドリオ様のお母さん、日本人なんですか！？」
あたしは目を瞠った。誰もいないらしい広い空間に、素っ頓狂な声が響き渡った。
アドリオ様は、どういうわけか苦笑さえ浮かべている。
「やっぱりそれも憶えてないんだな。……そうだよ、ミハル。母上

も、お前と同じようにニホンから汽車に乗ってこの国に来たんだ。
そして、俺がまだ赤ん坊の頃に行方不明になった。
名前はミサキ。お前の名に、少し感じが似てるだろう」
あたしは、今度こそあんぐりと口を開いて彼を見た。

だって、ミサキって……それじゃ、あの……まさか、瀬川君の…
…お母さんが？

あたしが転がり落ちた廃隧道のそばにある「スノウハウス」のオーナー、美沙紀さんの顔が、この時、脳裏にくっきりと浮かび上がったのは言うまでもない。
これって……偶然の一致、なの？

# 第六話　図書室での出来事

瀬川君によく似たアドリオ様のお母さんが実は日本人で、しかも、名前は「ミサキ」。

これって、偶然の一致っていうレベルだろうか。

「父上から聞いた。ハーマッド島のフェロキオン遺跡の中で倒れてるところを発見されたって。……いったい、なんでそんなところに……」

彼はまじまじとあたしを見つめ、訊ねた。……間近で見ると、この弟さんってほんと、相当な美形だ。バサバサの睫といい、オニキスに琥珀を溶かしたような瞳といい――思わずどきまぎと目を逸らし、答えた。

「わ、わからないんです。ペンションに……友達の家に遊びに行って、近くにある崖から落ちて、気づいたらあの島にいたから。知らないはずなのに、どうして言葉がわかるのかも……」

顔を曇らせたあたしに、アドリオ様はやさしく微笑んだ。

「ずいぶん熱心に勉強してたからな。それで憶えてたんだろう。……けど、それが事実とすると、お前は行方不明になっていた間、元の世界に戻っていたってことになるな。理由も手段も謎のままだが……」

考え込むようにして口元に拳を当てたあと、こう続けた。

「逆に言うと、帰る方法は確かにあるってことにもなる。それを模索しよう、二人で。……とりあえずはまた、大陸共通語（イーザリア）の勉強でも――まぁ、そこまで不自由なく喋れるようになったのなら不要かな」

彼はあたしの手を引くと、部屋の中央に置かれた椅子に座らせた。

多分三十畳くらいの室内には、壁に沿って背の高い本棚がぐるりと設（しつら）えられている。棚には厚さも大きさも様々な本がぎっしり。こ

こって、もしかしなくても、図書室なのかな。
アドリオ様は棚から本を取ってはめくり、また戻しては別の本を手にしている。あたしは興味をそそられ、思わず腰を上げた。書架に近づき、中から一際立派な装丁の本を抜き出そうとして――あっと声を上げた。
本と本の間に一分の隙間もないせいか、書棚が雪崩を起こしたのだ。
「ひゃ……っ」
「ミハル！」
ぐい、と手を引っ張られていた。――同時に、あたしがついさっきまで立っていた場所目がけて、百科事典並みに重量のありそうな本が数冊、ドサドサといきおいよく落下した。ふぅ、と息をつく気配がすぐ背後でした。
「危なかったな、足の上に落ちてたらことだぞ」
「あ……あの、すみません……」
赤面しながら謝っていた。きっと高い本に違いない、このお家に置いてあるくらいだから。慌てて拾い集めようとして、身動きが封じられていることに気づいた。
アドリオ様は、あたしの身体をすっぽりと腕の中に包み込んだまま、じっと固まっている。髪に使っているのか、かすかに香油のような甘い香りがした。
「あ、の……」
「もう少しだけ……このままでいさせてくれ。……ずっと、ずっと逢いたかった……」
語尾が震えていた。彼のお兄さん、ジード様にもまったく同じことを言われたのを思い出し、あたしの混乱はさらにヒートアップした。……仮に本当に記憶喪失に陥ってるとしたら、あたしはいったい、この国でどういう風に過ごしていたんだろう？　それに、どういうわけで、ジード様みたいな高貴な人の婚約者になんてなっちゃったんだろう。それなりに経緯はあったのかもしれないけど、あま

りにも謎だ。
「……兄上と結婚なんてするな。兄上のものになんて、ならないでくれ。ミハル、俺はずっと、ずっとお前のそばにいたい。お前と一緒にいたいんだ」
あごに、手がかけられた。なにを思う間もなく、唇を塞がれていた。
ジード様やヴァリーにされたのとはまるで違う、ほんの一瞬触れただけの軽いキス。
――なのに……眩暈がした。

私がいない間になにがあっても、絶対に貞節を護ってくれ。
頼むから、ほかの男のことは考えないでくれ。

ジード様のせりふが脳裏を過ぎる。頭がグラグラする。これってもしかして……不貞ってやつ？
いや、だって、あたし、そもそも彼と結婚するつもりは……それにいまのキスは正直、不可抗力じゃ……。
「お前がニホンに帰る方法を見つけたら、俺も一緒に行く。この家も、この国も、全部棄てたっていい。
……ミハル……好きだよ」
囁かれ、そしてふたたび、やわらかな唇を感じた。
背中に回された腕が、ぎゅうっと強くなる。
……だめだ、ろくに免疫がないから、こういうことってどう対処すればいいのかさっぱりわからない。あたしは身動ぎし、唇が離されると同時にしどろもどろにつぶやいた。
「あ、アドリオ様……あの、べ、勉強……」
「――ああ……ごめん」
淋しげに苦笑すると、彼はようやくあたしを解放してくれた。恥ずかしくて顔も見られない。慌てて屈み込み、散らばった本を手当たり次第に拾い上げる。

その中の一冊の表紙に、ふと目が留まった。
「聖（キリエル）……典？」
臙脂のびろうどが張られた、辞書くらいの大きさの古びた本だった。
「イグノディアスへの信仰の拠りどころとなる聖書だ。いつ、誰が書いたのかはわかっていない。ゼーレンディアで生まれ育った人間なら、誰でも一度は読んだことはあるはずだ」
ゼーレンディアで生まれ育った人間なら。
ふと、眉を寄せた。そういえば――エンザンテは、多分この国とは別の国なんだろうけれど、言葉は基本的に一緒だった。あたしがなぜか話せる「大陸共通語（イーザリア）」が、あそこでも通じたのだから。
……この世界って、いったいどういう世界なの？
「まだお前に教えたことはなかったっけな」
言いながら、アドリオ様はぱらぱらと聖書をめくり始めた。

＊　＊　＊

すべての原初（はじまり）に、一本の木が生えていた。
遍（あまね）く地上に根を這わせた巨大な木は、世界樹（ラ・ミュゴン）と呼ばれた。
長い時を経て、世界樹は実をつけ、そこから神々が生まれた。
最後に、世界樹の精霊（みたま）である女神イグノディアスが生まれ、そして世界樹は役目を終え、枯れた。
はじめ、すべての大地はつながっていたが、張りめぐらされた世界樹の根が、本体が枯れるとともに地を砕き、それぞれ離れ離れになり、陸地ができ、隙間には水が染み出、海が現れた。
それから神々は生命や人間を作り、現在の世界となった。

＊　＊　＊

これが「創世神話」の概要だという。

「ただの言い伝えだ。妄信的な教徒以外、誰も信じちゃいない」

彼は皮肉っぽい笑みを浮かべた。さらにページを繰り、別の箇所で手が止まる。

「こんなのもある。人類の愚かさ、汚らわしさを表してるとかいう逸話だ」

＊　＊　＊

神に匹敵するほど美しい人間の男がいた。彼は神々に呼ばれ、女神に謁見する。

「そなたは何故、それほどに美しいのか」

理由を問われた男は、現世での悪行を隠し、美談を語る。

だが、女神はすべてを見通していた。男の舌は独りでに動き、六罪を並べ立てる。

ひとつの罪ごとに女神は男の肉体を切り取り、最後は六つの肉片となった男を、天上から下界へと投げ捨てたのだった。

＊　＊　＊

アドリオ様は、どこか苦々しげな表情を浮かべて聖書を閉じた。

「お前はおそらく、この『天道の六罪（りくざい）』を逆利用しようって叛徒に――あのウェス・ゴート卿の一味に生贄として捕らえられたんだろ

うな。お前が選ばれた理由まではわからないが……イグノディアスを穢す行為は国家クラスの大罪だ。なのになぜ領地没収程度で済んでるのか、理解に苦しむよ」

あたしが？　……生贄に？

「憶えてないか。――いいんだ、その方がいい。……なあ、ミハル。お前、戻ってからこの屋敷の外に出たことないんだろう？」

聖書をはじめ、床にばら撒かれたほかの本も含めて書棚を元通りにしたあと、彼は真顔になってあたしに訊ねた。

あたしは肯いた。ジード様に付き添われ、朝夕、庭を散歩させてはもらえたけど、敷地の外には確かに一歩も出たことがない。

アドリオ様の瞳が、きらりと輝いた。

「なら――街へ行ってみないか。俺と一緒に」

「……えっ？」

思いもかけない申し出に、あたしはぽかんと口を開いていた。

# 第七話　デート？

霧がいっそう濃くなってきた。

足元がふらつき、目が翳（かす）む。それほどの高度もないはずなのに――やはり、さすがは聖山、オルド・カルマ。……いや、ここはむしろ魔の山と呼ぶべきか。

なにしろ自分のような「叛徒」を引き寄せる魔性の地だ。

くっ、と暗い笑みがこぼれた。都落ちしたおのれの身に対する自嘲。もとはイシオス神殿に、ノルド神官長に仕えていた身分だ。それが、半年以上前のあの出来事以降、失墜の一途を辿っている。なぜ、こんなことに……。

なぜ？　――決まっている。あの『黒の経典（ザモド）』がくだらぬ紛いものだったせいだ。

薄汚れた草髄紙（フェノメット）（※）を束ねてつづられた、いわば裏の聖書。フェロキオン遺跡で発見した時は、文字どおり全身が熱くなったものだ。必死で内容を紐解き、神代語を解読し、ウェス・ゴート卿に取り入ってまで行った「色付けの儀式」は、しかし、呆気なく失敗した。理由はわからないが、女神イグノディアスは、彼らに服従の意を示すことはなかった。依坐（よりまし）の娘は何処へともなく消え、『黒の経典』は押収され、そして自分は拘束後、投獄された。壁を削り、地を掘って、獄舎からの脱出を成功させたのはようやく二週間前のことだ。

――だが彼は、ラルモ・オルヌは、まだあきらめてはいなかった。

あれが紛いものだったとするなら、やはり本物があるのだ。そう

……秘せられた真実をのみ記す、神の書が。

副神官としてイシオス神殿に仕えていた当時、こんな噂を耳にしたことがあった。ロマド市内に位置する聖山、オルド・カルマのどこかに、禁断の聖書が埋まっている。昔から濃霧の発生地として有名な霊山だ。それもみな、聖書を俗人の手から護るための霊障であり、逆にいうなら、相応しい人物が現れた時のみ、霧は晴れると。

てっきり『黒の経典』こそがその書だと信じていた彼は、内心ではほかの神官たちを嘲笑していた。愚かな者どもよ、神の真意も知らず、その在り処もわからず、ただ禊の祝詞を唱えるしか脳のない木偶（でく）人形の集まりめ。世界を治めるに足るのはこの私だ。審議院だろうと神官長だろうと、この私以上に神の近くにいる人間などはいないのだ。そんな信念のもと、彼はイシオス神殿を見限り、儀式を実行したのだった。

しかし現実には、イグノディアスは彼を拒絶し、いまもまた、その足元から彼を追い払おうとしている。

短い夏が過ぎ行き、下界には残暑の気配が漂う季節。だというのにここオルド・カルマの山中には、まるで厳冬の最中のような冷気が満ち満ちており、しかも高度が上がるにつれ、気温ははっきりと氷点下を下回っていくのが肌で感じられた。禽獣の類から身を護るべく用意した錫杖もこれでは出番がないだろう。なにしろ周囲にあるのは枯れ木ばかりで、生きものの姿など絶無と言っていいからだ。オルヌの眉が苦しげに歪んだ。

イグノディアス、あなたは……あなたは二度も私を拒まれるのか。なにが足りないというのだ、この私に、いったいなにが欠けていると！

膝が折れた。分厚い霧の中、意識が朦朧と薄らいでいく。――こんなところで朽ち果てるのか？　四肢の爪という爪すべてを剥ぎ落

としてまで脱獄を果たしたというのに。悲願の成就も叶わず、こんなところで……塵芥のように……。

その時、手にした錫杖の鈴が、ちりんと鳴った。視界を埋め尽くしていた霧が、うっすらと晴れていく。

顔を上げたオルヌの目に映ったのは、赤茶けた外観の小さな庵。

……そして、白い装束を身にまとった、若い男の姿だった。

石畳の道を行き交うたくさんの人々。野菜を載せた荷車。その中に時折混じる馬車。歓声を上げて通り過ぎる子どもたち。

なにもかも、いつか映画で観たような、古い西欧の街角そのものだ。エンザンテでヴァリーのお家にお世話になっていた時は、ほとんど外出ってしたことがなかったから、こういう光景は心底新鮮でもの珍しい。あたしは目を丸くしながらも、興奮を抑えきれず、道端に並ぶお店をいちいちキョロキョロと覗き込んだ。

「子どもみたいだな、ミハル。俺の手を離すなよ、こんなとこではぐれたりしたら面倒だからな」

アドリオ様に言われ、ちょっと顔が赤くなる。……確かに、大学生にもなって迷子なんて事態は絶対に避けたい。でもだからって、あんまり馴れ馴れしくアドリオ様の手を握るのも――なんて思っていたのに、彼はあたしの右肩に素早く腕を回すと、ぴったりと身体を密着させてきた。そして耳元で囁いた。

「この方がいいな、俺は。デートらしくて」

「デ……って、あの、アドリオ様」

「その呼び方はやめろって言っただろ、特に街にいる間は。一応、お忍びなんだから」

彼の言うとおり、あたしたちはあのあと二人して、こっそりお屋敷を抜け出してきたのである。いかにも仕立てのいいドレスじゃ下

町では浮くから、というアドリオ様の言葉を受けて、あたしの格好は船旅の間に来ていたシンプルなワンピースとスパッツ、それに今朝、ピアがきちんとまとめてくれた髪を隠すためのスカーフ。アドリオ様はといえば、いったいどこに隠し持っていたのか、まるでヴァリーが着ていたような洗いざらしのシャツに麻のズボン。育ちの良さそうな顔立ちそのものはごまかせないけれど、こうしているとぱっと見、ほんとに大学の友人と一緒にいるみたいだ。

生きた情報収集と気分転換を兼ねて、下町を見に行かないか。アドリオ様の提案は、正直なところ、かなり魅力的だった。――だって、あのままお屋敷にいたら、あたしはパドマさんやピアのいう「花嫁修業」をする羽目になってしまうのだから。なし崩し的に結婚なんて流れを回避するためにも、二ヵ月後にジード様が大学を卒業して戻ってくる前に、なんとかして日本に帰るための突破口を見つけ出さなくちゃ。

「ミハル？　なにぼんやりしてるんだ」

怪訝そうに問いかけられ、はっと我に返る。……ていうか、顔近すぎ！　あたしはどぎまぎと視線を逸らした。

「いえ、あの……ならなんて呼べばいいかな、と思って」

「言っただろ、アドリオでもアドでも、好きな呼び方でいいって。……いや、お忍びって都合上、本名はできる限り隠した方がいいか。ここにいる間は、俺はウェス・ハーシュ家のアドリオじゃない。お前の恋人、アドだ。いいな、ミハル」

熱っぽい声に頭がくらくらする。自分の免疫のなさが恨めしい。

「欲しいものがあったら買ってやる。あの髪飾りなんか、どうだ？　お前によく似合いそうだぞ」

指差す方を見やると、こじんまりとした一軒のお店が目に入った。軒先にはゴザが広げられていて、その上に色とりどりの細工を施されたアクセサリーが並んでいる。デコラティブなものもあれば、シンプルでどことなくアジアンテイストなデザインのものも混じっていて、ついつい興味をそそられるのは女の性ってことなんだろうな、

きっと。

アドリオ様は、その中のひとつである、ラベンダー色の髪留めを手に取った。紙を撚って作ったコサージュみたいな飾りがついていて、すごく可愛い。

「ほら、やっぱり似合う。お前の雰囲気にぴったりだ」

スカーフをふわりと外して髪にあてがうと、彼はいとおしげに目を細めて囁いた。……もう、なんか、逆に拷問だ、こういう会話って！　真っ赤な顔をどうにかして隠そうと、あたしは反射的にスカーフに手を伸ばした。その時だった。

「あんた……あんた、あの時の子じゃない！　ええと、名前、なんて言ったかしら……確か、ええっと……」

お店の奥にいた女の人が、椅子から立ち上がってあたしをまじまじと見つめている。よほど驚いているのか、紫色のアイシャドウがたっぷりと塗られた、女優みたいに形の良い瞳はまん丸だ。厚めの唇がさらに動いた。

「そう、ミハル！　ファロダが確かそう呼んでたわよね。ミハルでしょ、あんた、ウェス・ハーシュ家のメイドの」

思いもかけない言葉に、あたしとアドリオ様は同時に固まって、ただお互いを穴の開くほど見つめ合っていた。

「憶えてない？　全然？　……そりゃさ、半年以上も前のことだけど――やあねぇ、ずいぶん薄情な話じゃない」

あたしたちをお店の奥の部屋に招き入れ、ローハン茶という、コーヒーによく似た香りのするこげ茶色のお茶を淹れてくれたこの女の人は、ローニャさんと名乗った。まオレンジに染められた派手なロングヘアといい、胸元ぎりぎりまで大きく開いた藤色のドレスといい、ものすごく似合ってはいるんだけど、なんていうか……夜の匂いのするお姐さんだ。

「『春の街（ウェイ・モルド）』でごろつきに囲まれてさ。ファロダが助けてやったじゃない、それでそのあとあたしのアパートに来て……熱出しちゃって大変だったの、ほんとに憶えてないの？」

あたしはおどおどと肯いた。……それって多分、この国に関する失くした記憶の一部なんだろうな。あたしの隣に座るアドリオ様が、得心した様子で彼女に答えているところを見ると。

「そういやそんな騒ぎがあったな。ミハルが来て間もない頃だった。ち――じゃない、ファロダって男が、彼女を屋敷まで送り届けてくれたんだ。パドマやレンドルスが大騒ぎしてたのを憶えてる」

「そりゃ、ファロダみたいなのがいきなり現れれば驚くでしょうよ、あんな名家の連中は。ていうか、あんたもあのお屋敷に勤めてるの？　この子の同僚かなんか？　……あんたもなんだか、見たことのある顔だけど……」

ローハン茶を噴き出しかけたあたしとはまるっきり対照的に、アドリオ様はすました顔で肯いた。

「そんなようなもんだ。――ずいぶん遅くなってしまったけど、礼を言うよ。ミハルを助けてくれて、ありがとう」

丁寧に頭を下げられたローニャさんは、一瞬ぽかんとしていたものの、やがて豪快に笑い声を上げた。

「やぁだ、そんな、畏まんないでよ。この子を泊めたのだって成り行きなんだからさ」

そう言ってから、彼女は意味深な表情を浮かべて、アドリオ様をじっと見つめた。

「あんた……この子のただの同僚じゃないわね。恋人……ううん、ずばり言い寄ってる最中でしょ。違う？」

あたしは今度こそ噴き出した。だって、あたしならともかく初対面のアドリオ様相手に、なんてことを言い出すんだこのお姐さんは。

「……まぁな。わかるのか」

どこか決まり悪そうな声が聞こえる。対してローニャさんはその大きな瞳を生き生きと輝かせた。

「もちろん。こう見えてもあたし、占い師の端くれなのよ。夜は別の仕事してるんだけど、昼はこの雑貨屋で店番の合い間に占いやってるの。だからすぐに見抜いちゃうのよねぇ」

「占い……ですか」

鸚鵡返しにつぶやくあたし。ローニャさんはにやりと笑うと席を立ち、部屋の隅に置かれたチェストの抽斗（ひきだし）から、一揃いのカードらしきものを取り出して戻ってきた。

「キューズァロか」

テーブルの上に並べられたそれらの絵札を見て、アドリオ様がつぶやいた。キューズァロ、という名前には聞き憶えがあった。ヴァリーがしょっちゅう漁師仲間のおじさんたちと賭けカードをしてはいいように毟られてるって、ゼノンがよく呆れたように言っていたからだ。

絵と数字の描かれた、タロットとトランプの合いの子のようなカードだ。使われ方も似たようなもので、ゲームの媒体にも、占いの道具にもなる。ローニャさんは手際よくカードを切り、何枚かを抜き出してあたしの前に並べた。

「さて、と。……生年月日を教えてくれる？　ミハル」

あたしはきょとんとした。

「占ってあげる。――あんたもなにか面倒ごと抱えてるんでしょ？　初めて会った時も思ったけど、まだ解決してないみたいだから」

見事に言い当てられ、あたしは思わず狼狽えた。占いの類には興味がなく、雑誌の占い欄すら読んだことがない。でも、このお姐さんはなんとなく――無視できない気がする（おっ怖なくて断れないってせいもあるけど）。

ただ、西暦ってここでは通用するのかどうかわからなかったので、とりあえず誕生日と年齢だけを伝えるに止めておいた。一年の数え方は日本と――ていうか太陽暦と同じみたいで、そこは問題なく通じた。

ぶつぶつと口の中でなにごとかをつぶやきながら、ローニャさん

はカードを抜いたり混ぜたり裏返したりしている。五分ほど経った頃、彼女は口元に手を当て、唸り出した。額にははっきりとしわが寄っている。

……なにか、悪い卦でも出たんだろうか。

「おかしいわね……なんで？　間違ったのかしら？　あたし」

再度、カードを切り直し、同じような手順を繰り返したあと、ローニャさんはまたも眉を曇らせた。あたしは恐る恐る口を開いた。

「あの……」

同時に、ローニャさんの手が、テーブルの上のカードを乱暴に払い除けた。数枚のカードがひらひらと宙を舞い、床に落ちる。びっくりしてなにも言えずにいるあたしとアドリオ様に、彼女は投げやりな口調で言い放った。

「だめ！　……なにも出てこないわ。どうして？　なんなの、これ」

不吉な宣託をされたみたいな気がして、胸がざわめいた。アドリオ様も同じように感じたのか、低い声でローニャさんに詰め寄っている。

「なにも出てこないってどういうことだ？　ミハルの占いはできないってことか？」

「……そのとおりよ。意味を為さないのよ、何回やっても。こんなの初めてだわ。どういうことなの……ねぇ、あんた、放浪民（ツィゼット）なんだったっけ？　いったいどこの島出身なの？」

逆に詰問され、あたしはさらに狼狽した。日本、って言ったら……もしかして、もしかしたら、通じるだろうか。

「放浪民じゃないんだ。彼女は――トラブルに巻き込まれて、知らないうちにこの国に来てしまったらしい。それで元いた国に帰る方法を探してるところなんだが、その国っていうのが、そもそもどこにあるのかわからなくて」

アドリオ様の言葉に、ローニャさんはあんぐりと口を開けた。そして頭を掻きながら息をつく。

「そういうこと……ふぅん、厄介ねぇ。残念だけど、あたしはこれ

以上は力にはなれそうにないし……」

「そうか……まあ、仕方ないな。気にしないでくれ、俺たちもすぐに手がかりが見つかるとは思ってない」

アドリオ様は頭(かぶり)を振り、椅子から立ち上がった。お茶のお礼を言おうとした時、ローニャさんは不意にこんなことを言い出した。

「助言をくれそうな人に、一人だけ心当たりがあるんだけど……」

思いもかけないせりふだった。あたしは目をぱちくりさせた。

「占い師仲間の噂なんだけどね。なんでも聖山に、仙人みたいな占い師が住んでるんだって。どんなことでも、答えられないことなんてないらしいわ。ただ……正確な居場所は不明だし、そもそも実在してるのかもわかんないの。それにあそこってほら、遭難の名所じゃない？　濃霧の発生地でさ。教えといてなんだけど、やっぱやめた方がいいわね」

彼女は決まり悪そうに笑い、あたしたちを店先に送り出した。

けれどお店を出てからも、あたしの耳にこびりついた聖山というキーワードは、いつまで経っても消える気配がなかった。

（※「草髄紙」……ある種の草木の茎から作られる筆記媒体。触感はパピルスに近い）

# 第八話　「姑」登場

夕刻近くにお屋敷に戻ったあたしを待ち構えていたのは、パドマさんの怒号だった。

「ミハル！　……いえ、奥様！　いったいこれはどういうことですの、あれほど申しましたでしょ、空き時間はみっちり礼儀作法に取り組んでいただくって！」

玄関の扉を開けた瞬間にそう怒鳴られ、身体が縮み上がった。あたしは頭を下げ、平謝りした。

「ご、ごめんなさい、あの……もうしません」

それでも赦してくれる気配はない。彼女はあたしのラフな服装と、そして飄々とそばに立つアドリオ様の姿に、さらに眉をつり上がらせた。

「その恰好はなんなんですの。卑しくも次期当主様の奥方になる女性が、そんな、町娘みたいな服を着て……それにアドリオ様。どうしてあなた様が奥様とご一緒におられるんです？　ご自分のお立場を――」

「立場とはなんだ、パドマ？　俺は彼女が好きだ。この家や兄上のことなんて関係ない。それに、まだミハルは兄上のものになってしまったわけじゃないだろう。……お前に指図なんかされる謂れはない、そっちこそ憶えておけ」

彼はパドマさんを睨みつけると、ふいっと視線を逸らしてその場を立ち去った。呆気に取られて後ろ姿を見送るあたしとパドマさんは、数秒後、同時に我に返った。

彼女は、全身を震わせて、大きなため息を吐き出した。

「あ、あの……ごめんなさい、あたし、その……」

しどろもどろに声をかけるあたし。パドマさんはぱっと顔を上げ

ると、あたしの両手首をがっしりつかんで、こう迫ってきた。
「――ミハル、いえ奥様。お願いですから、ジード坊ちゃまの不在中、アドリオ様にはできる限り近づかないでいてくださいませ。お約束なされましたのでしょう？　貞節を護ると。坊ちゃまも、奥様のため、イグノディアス様のために、日々勉励にお努めになられて、修道に励んでおいでですのよ。そのことをよくお考えになってくださいね。私の、心からのお願いですわ」
　涙ながらに懇願されては肯くほかはない。どうしようもなく、あたしは首を縦に振った。ようやく笑顔になった彼女に連れられるようにして自室（というか、要するにジード様の部屋なんだけど）に戻り、朝脱いだ服をふたたび着せられた。今夜の晩餐デビューのためだ。
　……ていうか、「奥様」はやめてほしい。真面目な話。

　三時間にも及ぶ夕食の時間は、はっきり言って、拷問だった。
　あたしはふらつく頭と足を引きずりながら、階段をよろよろと昇った。あのバラみたいな香りのする香油をたっぷり入れたお風呂に入って、さっさと寝てしまいたい。
　ようやく部屋にたどり着き、重い扉を開けて、ベッドに倒れ込む。……と同時に、このお家の「法律」、女主人のアウラ様の言葉が、頭の中で勝手にオートリピートを始める。

「これが、ジードが……あの子がノルド家の姫を差し置いてまで選んだという娘なの、ヴィネックや」
　アウラ様の最初の一言というのが、これだった。正直、普通に凹むと思う。
　品格ある細面の顔に、ジード様や旦那様と同じ緑碧の瞳。尖った鼻、血の気の薄い唇。多分若い頃は相当の美女だったんだろう。刻

まれたしわの多さも手伝って、いまは迫力の方が勝っちゃってるけど。

長いテーブルの、家長席に座る旦那様は、ゴブレットを傾けながら、彼女を見もせずに悠々と答えた。

「ええ、そのとおりですよ、母上。あいつの趣味も中々のもんでしょう。俺に似たんでしょうな、おそらくは」

なにがまずかったのか、アウラ様の頬がぴくりと引きつるのがわかった。あたしは生きた心地もせず、ただ、彼女のはす向かいの席で、顔を伏せた。

「軽口はおよしなさい、ヴィネック。お前の過ちを、私はまだ完全に赦したわけではありませんよ」

なんのことを言っているんだろう。どちらにしても、それは旦那様に向けられた言葉だったはずだ。なのに、反応したのは彼ではなく、むしろアウラ様の横の席に掛けるアドリオ様だった。彼はフォークとナイフを皿の上に乱暴に放り出した。

「それだからお前はジードに甘いのでしょう。自分と同じ過ちを犯そうとしているというのに……イレイラの魂も浮かばれないこと、まさか自分の息子までこんな……」

「母上、その話はもう済んだことでしょう。ジードにもミハルにも関係ない。晩餐の話題に相応しいとは思われないんですが、如何でしょうね」

旦那様の声が若干荒くなった。けれどもアウラ様も負けてはいない。

「この私がイシュレーほど寛容ではないからといって責める気なの、ヴィネック、お前は？　筋違いも甚だしいこと！　あの時、私さえもっとしっかり目を光らせていれば、あんな破廉恥な過ちが起きることは――」

「母上！」

食卓の上で睨み合う二人。ぼんやりとだけど、なんとなく話がつかめた。要するに、アドリオ様のお母さんというのはお妾さんみた

いな立場だったんだろう。そう、彼の実母である可能性大の、あの美沙紀さんがってことだけど。

でもそんな話を、息子であるアドリオ様の前でするなんて――他人事ながらあたしははらはらした。と思っていると、彼女の矛先は、唐突にあたしに向けられた。

「お前、名はなんと言ったかしら」

「へっ」

あまりに急だったので、間抜けきわまりない声が出てしまった。旦那様が額を押さえているのが見えた。彼女は苛々と繰り返した。

「私の問いにはすぐに答えなさい。名前は？　年齢はいくつなの。出身は？」

「え、あ、ミ……未明（ミハル）です。年は十八で、出身は、その……ニ、日本（ニホン）、です」

超テンパりながらもどうにか答えたけれど、最後の方は明らかに尻すぼみになっていた。アウラ様の眉が怪訝に歪んでいる。

「ニホン？　まさか、お前、放浪民（ツィゼット）なの？　いえ、どこかで聞いた覚えがある地名だけれど……」

旦那様が咳払いをしながら助け舟を出してくれた。

「放浪民じゃありませんよ。正しくはね。ただ、ところどころ記憶が欠落しているんで、いまものを訊いたところで、大したことは答えられない。その辺は、追々ということでいいでしょう、母上」

「よくはありませんよ。身元も知れないような不審な娘を迎え入れるだけでも問題だというのに、よりによってジードの妻にだなんて。身の程知らずもいいところだわ。まったく……あの子ときたら私の言うことも聞かず、どうしてこんな娘に夢中になって……」

彼女は大仰なため息とともにそう言い棄てた。さすがにこれには、あたしもかちんときた。言いたくないけど、こっちだって、なにも頼み込んで嫁にもらって欲しいなんて懇願したわけじゃない。言い返そうとして口を開きかけた時、意外なフォローが入った。パドマさんだ。

「大奥様、大変失礼ながら、彼女はこう見えてとても聡明な娘ですわ。勉強熱心で贅沢も好まず、思いやりもあります。出自は確かにいまのところ不明ですけれど、少なくとも相当高度な教育を受けていることに疑いはありません。若君の……ジード坊ちゃまの奥方になるのに、不都合などはないと思われます。差し出がましいことを申し上げるようですけれど、それだけはお知り置きいただきたくて」

肉料理（アントレ）のあとの野菜料理をサーブしながら、彼女は一気に言い切った。語尾がわずかに震えているところを見ると、女主人にたてつくような意見を口にするのは、女官長といえど勇気が要るのだろう。アウラ様に取り入りたいわけじゃ全然ないけど、あたしは素直にパドマさんに感謝した。

「お前もまだ教育が足りないようね、パドマ。この私に意見する気なの？　給仕が終わったならすぐに下がりなさい。これは命令ですよ」

あんまりな言葉にあたしは固まった。でも、当のパドマさんの方は、それほどの打撃も感じさせない表情で一礼すると、即座にテーブルを離れた。もしかしたらもう慣れっこなのかもしれない。

「邪魔者」を片付けたあと、アウラ様はあたしに集中砲火を浴びせてきた。このお家の歴史、名誉、立場、ジード様の妻になるための心得、礼法の知識、貴婦人としての心構え、その他諸々。それは食後の小菓子とお茶が出るまで延々と続き、ようやく解放されたのは八刻半（午後九時）過ぎ。傍仕えの侍女二人を従えて彼女が退出したあと、あたしもよろよろと椅子を降りた。一秒でも早く独りになりたかった。

食堂を出ようとした時、アドリオ様に腕をつかまれた。

「大丈夫か？　ひどい目に遭ったな、ミハル」

あたしは力なく笑った。ていうか、それは彼も同じなはずだ。

「平気です。……ちょっと、驚いたけど」

「気にするな。どうせ誰を連れてきたって気に入らないんだ。祖母上は、兄上を溺愛してるからな」

それはなんとなく伝わってきた。ああいう「姑」さんがいるんじゃ、ここん家に嫁ぐ子って大変だなぁ……ってそれ、あたしなんじゃん、いまのところ。

「心配しなくていい。お前は俺が護ってやる。この家からも、ほかのすべてからも」

まっすぐに見つめられ、そう囁かれた。——なんだか、いつもと様子が違う。

「アドリオ様？」

「……じゃあな。お休み、ミハル」

屈んで頬に軽くキスをすると、彼は微笑んだ。そして食堂を出ていった。

ってところまで思い出し、あたしはベッドの上で跳ね起きた。湯殿（バス）の準備は後回しで部屋を出、二階に向かう。

アドリオ様の部屋は、予想どおり、空っぽだった。

中央の大階段を下りていくと、案の定、彼がいた。小型のランタンを手に、フード付きの黒いマントをまとってはいるけれど、流麗なシルエットですぐにわかる。

「アドリオ様！」

踊り場から声をかけると、その肩がびくりと震えた。彼は驚いたように振り向いた。

「ミハル——」

あたしは階段を駆け下り、彼の腕に取りついた。

「もしかして……聖山ってところに行くつもりですか、これから」

図星だったらしく、アドリオ様は目を瞠った。そして苦笑した。

「ばれてたのか。……ああ、昼間、あの女占い師が言ってただろう。あそこにならヒントがあるかもしれないって。だが明瞭な情報じゃ

ない。だから俺がまず独りで行って、場所を確かめてくる。ある種の都市伝説なのかもしれないしな」

あたしは息を吸い込み、申し出た。

「なら……あたしも連れてってください」

そう来ることがわかっていたみたいに、彼は即座に首を横に振った。

「だめだ。実在するのかどうかもわからないんだぞ。お前はここで待ってろ。夜明け頃には戻ってくるから」

「厭です。あたしのことなのに、なにもしないで待ってるだけなんて。それに占いしてもらうなら、あたし自身が一緒の方がいいです。本当にいるのかどうかわからないって言っても、もし運良く見つかったら、逆に二度手間になっちゃうわけだし」

「それは……けど、危険かもしれないぞ。遭難者も多いっていう話、聞いただろ」

渋る彼に、あたしは詰め寄った。

「じゃあどうしてアドリオ様、いま行こうとするんですか。朝まで待った方が安全じゃないですか」

「あの山の濃霧は、夜の方が晴れる確率が高いらしいんだ。俺自身、登ったことはないから詳しいことはわからないが……それに……」

「それに？」

彼は黙り込んだ。やがて、ふっと息を吐き出し、微苦笑した。

「わかったよ。――防寒着を用意してこい。夜の山は相当冷えるはずだ」

あたしは顔を輝かせ、思いきり肯いた。

# 第九話　真夜中のプロポーズ

大急ぎで自室に戻り（でも極力誰にも姿を見られないように注意しながら）、ウォークインクローゼットというにはあまりにも規模の大きすぎる衣裳部屋の中から真っ黒なマントと手袋、底の平らなブーツを引っ張り出すと、あたしはふたたびこっそりと大階段を降りて、お屋敷の外に出た。中庭を過ぎ、厩舎に赴くと、すでにアドリオ様が待っていた。そのそばには、夜闇では相当目立ちそうな白い馬が、おとなしく控えている。ところどころに銀色の毛並みが混じっていて、まるでペガサスとかユニコーンみたいな美しさだ。

「聖山の麓まではこいつ（銀波号）で行こうと思う。馬に乗ったことは？」

あたしは首を横に振った。馬術部に入っている友達ならいるけど、あたし自身は馬に触れた経験すらない。

「わかった。怖がらなくてもいい、銀波（アシュリー）は利口でおとなしい性質だ。牝馬（ひんば）でもないから、お前に嫉妬することもないだろうしな」

悪戯っぽくつけ加えるアドリオ様。ランタンの灯りに照らし出されたその馬は、とてもきれいな琥珀色の瞳をしている。恐る恐る、ではあったけれど、自分から微笑みかけてみた。「よろしくね、アシュリー」

ごく小さく、「彼」は鼻を鳴らした。親愛の印なんだろうか。

アドリオ様はあたしを銀波号の上に乗せると、すぐに自分も軽々とその背に跨った。そして背後からあたしの身体を抱え込むようにして手綱を捕り、聖山を目指して出発した。

このロマド市に唯一存在する駅舎、カルマ駅をその麓に抱える聖

山、オルド・カルマ。聞いたところによると、標高は六千五百トーティ、つまり二千メートルほどで、それなりに高山といえる規模らしい。ただ、基本的に、この山には巡礼者とか神殿の関係者とか、そういった人しか登ることはないそうだ。

駅舎の入り口にある木製のゲートに銀波号の手綱の先端をくくりつけてから、あたしたちは山に入った。山中には、前述の人たちが整えたのか、頼りないながらも歩道らしき道が存在している。それほど木が密集して生えているわけでもなければ、危険な岩場があるわけでもない。ここが遭難の名所と言われる所以は、やっぱり、異様なほど高い発生率で生じる濃霧のせいにあるようだ。

「寒いか？」

歩き始めて二十分くらい経った頃、アドリオ様がそう訊いてきた。あたしは首を横に振った。

革の手袋と、裏地にたっぷりと毛皮を縫い込んだ上等のマントのおかげもあるけれど、いまはまだ残暑の季節だってことだし、深夜とはいえそこまで気温は低下しない。アドリオ様も意外そうにつぶやいた。

「思っていたほどの冷え込みじゃないな。それに、噂どおり、霧もほとんど発生してない。――まぁ、だからってあっさりお目当てのものが見つかるかどうかはわからないがな」

あたしも肯いた。そのとおりだ。この広い山の中、ほとんどなんの手がかりもない状態で歩き回ったところで、ゴールに辿り着ける確率っていったい数パーセントもあるのかどうか。あのお姐さん、ローニャさんだって、噂話だってところを強調していた。でも、それでもあたしは、こうして来ずにはいられなかった。晩餐でのアウラ様との対面が、というよりあたしの意思を置いてきぼりにして勝手に進められる事態が、自分で思っていた以上に堪えたのかもしれない。

あたしたちはお互い、無言で歩き続けた。当たり前だけれど、アドリオ様の掲げる小さなランタン以外には、周囲に灯りなんてない。

木々を縫うようにして差し込む月の光は思いのほか頼りなく、不安ばかりが増幅されていく。

そんな想いが伝わったのか、少し休憩しよう、とアドリオ様が言い出した。倒れた丸太の上に腰掛け、持参した革袋の中から水筒を取り出すと、水を注いであたしに差し出してくれた。お礼を言ってそれを受け取り、一気に飲み干すと、あたしも彼の隣に掛けた。

「けっこう登ってきたな。疲れたか？」

「え……いえ」

「そうか。それほど歩きにくい道もなかったしな。……あともう少し探して、見つからなかったら、今夜はとりあえず戻ろう」

「……」

「心配するな。なにも今日しかチャンスがないってわけじゃない。それに、もし本当に見つからなかったとしても、それならそれで別の方法を探せばいいんだし」

あたしは曖昧に肯いた。――それから、ずっと気になっていたことに対して、こう切り出した。

「アドリオ様、訊いてもいいですか」

「ん？」

「さっき……お屋敷を出る前、なにを言いかけたんですか」

単独で、しかも夜中に聖山に向かおうとする理由を質すあたしに、彼は答えようとして口を噤んだ。そしていまも、ふたたび黙り込んでしまった。そんなに答えにくいことなんだろうか。

それでも、アドリオ様はなにかを思い切ったような顔になり、じきにぽつぽつと喋り始めた。

「――祖母上に、俺の母上のことを言われた時……やっぱり、いい気持ちはしなかった。それほどつらく当たられたわけじゃないけど、愛されてもいない。それくらいのことは子どもでもわかるし、いまも変わってないからな」

ああ……と、あたしは肯いてしまった。そんなことはないですよ、きっとアウラ様だって内心ではジード様と同じくらいアドリオ様の

こと大事に思ってるはずです。なんて適当なことは、部外者であるあたしにはとても言えない。

「けど、それだけじゃないんだ。……正直、お前のことを言われたのがいちばん堪えた。それに、兄上の妻になるための心得とかなんとか、そんな話が始まっただろう。聞いてるだけで、なんだか頭がおかしくなりそうだったんだ。このままじゃ、確実にお前を奪われてしまう。そう思うと、いても立ってもいられなくて……それで、気づくと支度をして、部屋を飛び出してた」

ランタンの灯りの中に、彼の眼差しがぼんやりと浮かび上がる。

「一刻も早くお前のいた世界を探し出して、そして俺も一緒に――お前と一緒に行きたいと思ってる。ミハル、俺は……」

アドリオ様はいったん息を吸い込むと、あたしをまっすぐに見据えた。

「俺は、お前を一生護っていきたい。もしも元の世界に戻れたら、俺と……俺と、結婚してくれないか」

褐色の混じった黒い瞳が、瞬きもせず、あたしを見つめている。

結婚してくれないか。俺と。

……なにを返すこともできず、あたしは固まってしまった。

だって、だって――答えるための材料がない。いや、ていうか、つまり、どうしてアドリオ様がそこまであたしを気に入ってくれてるのかがわからない――要するに身に覚えがないのだ。あたしには。

アドリオ様は照れたように微笑み、続けた。

「記憶がないことはわかってる。思い出したところで、俺のことなんてせいぜい友達か、協力者くらいにしか思ってなかったのかもしれないけどな。それでもいいんだ。たとえそうだとしても、俺の気持ちだけは知っておいてほしかったんだ、お前には」

あたしは口を開こうとして、結局また閉じてしまった。なにを言

ったらいいのか、まったくわからない。
「……初めは、ただの放浪民（ツィゼット）の娘だと思ってた。修道生活のつらさのあまり、兄上が気まぐれを起こしてどこからか拾ってきたんだろうって。あの生真面目を絵に描いたような性格の兄上が連れてくるなんてどんな女かと思って、興味が湧いた。でも、あくまでその程度だ」
水筒から注いだ水を含み、一息入れると、彼はあたしの手をそっと取った。革の手袋越しなのに、そうとは思えないほどの熱が、はっきりと伝わってきた。……こめかみにどくどくと響くほど、心拍数が上昇してる。
「次に感じたのは親近感だ。俺の母上と同国人だって知ったからだろうな。それからほぼ毎日、お前と話をするようになって……なんだか、ほっとけなくなって……気づいたら、好きになってた。ぎこちない話し方とか、笑い方とか。ちょっとした仕草とか……いつの間にか、お前のことばっかり考えるようになってたんだ」
真正面からの、直球の告白に、あたしはもう限界っていうくらいにテンパってしまった。いまなにか言おうとしたところで、絶対まともなせりふは出てこないだろう。
――ていうか、こういうの、だめだ。
これ以上聞いちゃいけない気がした。ジード様との約束のせいじゃない。アドリオ様のためでもない。
自分でも理由はわからない。ただ、だめだっていう強い想いだけが込み上げた。
「アドリオ様のお母さんかもしれない人、あたし、知ってます」
……なにを言い出すのか、とあたし自身思った。なんでいきなり、しかもこのタイミングでこんなこと言ってしまったんだろう。案の定、彼は怪訝そうに、そして心底驚いたように目を瞠っている。
「あたしの学校の友達のお母さん、美沙紀さんっていうんです。そ

の友達、アドリオ様によく似てる。だからもしかしたら……もしかしたら、ですけど」

「ミサキ……本当か、ミハル？　なら……お前と一緒に行けば、母上に会えるかもしれないんだな」

そうすれば、俺や父上の前から姿を消した理由を聞き出せるのかもしれない。アドリオ様はそう言い、それから苦笑した。少し、淋しげに。その表情に気づき、あたしの胸は猛烈に痛んだ。

百メートルほど離れた場所にぼんやりと浮かび上がる頼りない灯りが視界に映ったのは、そんな時だった。

# 第十話　庵の男

あたしたちはほぼ同時に、その妖しい光に気づいた。百メートルほど前方の、木々を抜けた辺りに、ここいらとは対照的な霧がもやもやと発生している。その霧に反射し、頼りなくぼんやり揺れる、小さな光。顔を見合わせ、ごくり、と唾を飲み込む。

先に口を開いたのは、アドリオ様だった。

「……巡礼者が利用する山小屋か、或いは巡礼者自身があそこにいるのかもしれない。ともかく――行ってみよう」

あたしは声もなく肯き、彼に倣って腰を上げた。アドリオ様は革袋を担ぐと、あたしの肩に左腕を回し、しっかりと抱きかかえるようにして歩き始めた。静謐という言葉が似合う森の中、湿地に足を取られないように、慎重に進んでいく。

夜の闇に距離感覚を狂わされていたのか、光は中々近づいてこない。風が吹き抜ける音、威圧的にすら感じる、梟をはじめとした鳥たちの奏でるざわめき。だんだんと濃くなっていく白い霧。――これ以上近寄っちゃいけない。そんな警告が、どこかから聞こえた気がした。

気づくと周囲はすべて霧に覆われていた。あたしたちは、まさに、白い空間に迷い込んでしまったみたいだった。引き返した方がいいのかもしれない。戻れなくなってしまう――下界（日本）にも、あたしの世界にも。

恐怖に近い感情に襲われ、足が止まりかけたその時、不意に視界が晴れてきた。白い空気が、まるで意思でも持ってるみたいに、左右に割れていく。

あたしの肩を抱くアドリオ様の手に、ぎゅっと力がこもった。そして彼はつぶやいた。

「これは……」
粗末な平屋建ての小屋が、目の前に、唐突に現れた。

意図的に伐採でもしたのか、その場所は不自然なほど急激に開けていて、周囲には木々もほとんどない。
そんな中にぽつんと建てられている、一軒の小屋。ウェス・ハーシュ邸の厩舎ほどの大きさしかないため、簡素きわまりない印象を受けてしまう。
「誰かいるみたいだが……聖山の巡礼者なのかな」
あたしたちは、小屋の外観を検めようとして二、三歩歩き回った。すると入り口らしき扉が見つかった。ノッカーなんてものはついていない。アドリオ様はちらりとあたしを見、それからノックしようとして右手を振り上げた。
その時、中から、低い男の人の声がした。わずかにかすれた、ひどくハスキーな声だ。
「音を立てるな。煩くて敵わん」
驚きのあまり、アドリオ様の腕がびくりと揺れた。あたしも同様だった。
「入りたいなら勝手に入れ。鍵などは掛かっていない」
誰なんだろう。アドリオ様の言うとおり、この山の関係者なのかもしれない。――それとも……ローニャさんの言っていた、あの謎の占い師その人なのか。
アドリオ様は、革袋を担ぎ直すと、深呼吸して扉に手を掛けた。木が軋む音とともに薄明かりが漏れてきて――そして、扉が完全に開いた。
「用があるのならさっさと入って来い。あまり外気を入れるな、お前たちのせいでそれでなくとも今夜は乱れがひどいのだから」
素っ気ないせりふがまたも聞こえてきた。後ろ手に扉を閉めたあ

と、あたしたちは微妙に警戒しながらも、室内へと足を踏み入れた。
古びたログハウスのような板張りの間に、ラグのようなものが敷かれ、その上にはロッキングチェアタイプの椅子がひとつ。暖炉に、小さなテーブル。家具と呼べるのはそれだけ。
「まったく……招かれざる客とはまさにこのことだな」
心底大儀そうに言い捨てたのは、目を瞑ったまま椅子に深々と座る男の人だった。白く長いローブを身にまとい、足には動物の革で作ったらしいベージュの室内履き。ほんの少し浅黒さの混じる肌。腰まであるストレートの髪はローブと同じように真っ白で、そのせいか年齢がまったくわからない。若いようなそうでもないような、なんとも不可思議な雰囲気が漂っている。
気持ちが逸り、心臓が早鐘を鳴らし始めた。……だってこの人、どう見ても、普通の人じゃなさそうだ。
「なにを突っ立ってる。用があってここへ来たのではないのか」
不興げに訊かれ、アドリオ様ははっと我に返ったみたいだった。男の人をまっすぐ見据えながら、軽く息を吸い込むのがわかった。
「……こんな夜遅く、いきなり訪れたりしてすまない。俺たちは、その……いや、あんたは――下界で噂されてる凄腕の占い師っていうのは、あんたのことか」
男の人の目が、ゆっくりと開いた。濁りのない群青の瞳だ。
「下界のことなどは知らん。占いを生業にしているわけでもむろんない。……それで？　お前たちは、なにしにここへ来た。大方、なにかしら訊ねたいことでもあるのだろうがな」
ごくり――知らぬ間に、咽喉が鳴った。それから、急き込むようにして口を開いていた。
「帰る方法を知りたいんです」
アドリオ様が驚いてあたしを見下ろしている。あたしはかまわず、続けた。
「元いた国に――日本（ニホン）に戻りたいんです。どうしたら帰れるのか、もし……もしもご存知なら、教えてください。お願いします」

「ミハル、落ち着け。事情も説明せずにそんなこといきなり言ったって――」

「異邦人なのだな。どこか異郷からの」

彼の言葉を遮るみたいにして、男の人はつぶやいた。あたしは夢中で肯いた。――やっと、やっと話を聞いてくれる人に出会えた。興奮に脚が震え出し、口の中がカラカラに渇く。

そんなあたしをじっと見ていたこの男の人は、やがて、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

床の上にじかに置かれた、白螺石（はくらせき）と呼ばれる大理石にそっくりの天然石でできた水鉢を、あたしは言われたとおり覗き込んだ。そして三回、そおっと息を吹きかけた。水面には漣が立ち、音もなく揺れ、像が――そこに映っていたあたしの顔がたちまちぼやける。

占鏡（せんきょう）、という占いの一種なんだそうだ。

「幼い頃、わけがあって独り身になってから、この聖山に庵を結び、爾来（じらい）ずっとここで暮らしている。喰うには困らない。木の実にしろ獣肉にしろ、山にはいくらでも食糧があるからな。

だが、時たま、どこからか迷える人間がやってきては『道』を訊ねていくようになった。いまのお前たちのようにな。……そんな時は、山の気が揺れるからすぐにわかる。それが今夜は特に顕著だった」

彼――テオルーグと名乗ったこの人は、じろりとあたしを見た。年齢不詳の上、妙に中性的な顔立ちで、口を利かなければ男か女か判然としないほどだ。けれど、ローブから覗く手は意外とごつごつしているし、身体つきそのものはむしろ男性的なのかもしれない。

「じゃあ、あんたは、俺たちが今日ここへ来るってことがわかってたのか」

訝しげに訊ねるアドリオ様。後ろに控えているように言われ、ど

ことなく所在なげにしているのが気配でわかった。テオルーグさんは面倒そうに首を動かした。
「ああ。空気がひどく乱れたと言っただろう。……少なくとも、誰かが私を訪ねてくることはわかっていた」
水面の上に手を翳し、ゆっくりと円を描く。その指の長さとしなやかさに、思わず見惚れてしまった。
「余計なことを考えないでくれ。……名はなんというんだ」
「えっ――あ、えと、ミハル・クゼです」
どぎまぎと答えると、彼はなぜか複雑そうな顔になった。
「……ミハル……やはり、そういう名か……」
「は？」
謎めいたつぶやきに、きょとんと彼を見返した、その時。

思いっきり、視線がぶつかった。

しかも、彼、テオルーグさんは、全然目を逸らそうとしない。群青に濡れて輝くきれいな瞳に見つめられ、あたしは不自然なくらい思いっきり顔を横に向けてしまった。
「そうか……やはり、お前が……」
そんなせりふが聞こえた。しかも、なぜなのか、そのハスキーな声は震えていた――はっきりと。
憎しみ、みたいな感情が、そこにはにじんでいた。
あたしはたじろいだ。どういうわけかはわからないけれど、あたし、初対面のこの人に、多分きらわれてる。
っていうより、憎まれてる。でも、どうして――？
「異界より突如現れし娘、またふたたび消ゆ……『見送りの儀』をもって、かの娘、その地に尋常に返すべきなり……」
謎めいた言葉を唱えたかと思うと、うろたえるあたしの目の前で、彼は身を屈め、水面を手刀で割った。ぱしゃん！　飛び散った水滴が顔にかかった。

そして、彼はこう言った。

「お前のいた国はこの世界には存在しない。だが、戻る方法はひとつだけある」

# 第十一話　見送りの儀

戻る方法はひとつだけある。
そう宣言したあと、「占鏡」で得たらしい結果を、彼はあたしに語り始めた。
「世界には『穴』があるものだ。それを通ってこちら側へ迷い込んでしまったというなら、同じように戻してやればいいだけだからな」
「えっ――」
あたしは瞠目し、思わずその場に立ち上がっていた。
「に……日本に帰れるんですか！？　本当に？　ど、どうやったら――どうしたらいいんです？」
彼の膝にすがりつかんばかりにして問いかける。深く澄んだ青い双眸が、あたしを見据え、きらりと光った。
「『見送りの儀』を行えばいい。やり方について、お前たちが知る必要はない。一応の秘儀でもあるのでな。ただ……それには条件がある」
「条件……」
あたしとアドリオ様はそろって鸚鵡返しにつぶやいた。
「そうだ。――儀式には、この娘を心から愛する『見送り人（びと）』が二人、必要なのだ。思い当たる男はいるか」
あたしは黙り込んだ。……あたしを心から愛する男の人？　それも複数？　……ええと、それって……。
「ああ、都合はつくと思う。二人でいいんだな、とりあえず」
アドリオ様の力強い声が、背後から聞こえてきた。慌てて振り向いたけれど、彼はいまや、あたしじゃなくてテオルーグさんのことしか見ていない。
そのテオルーグさんは、アドリオ様の念押しに、鷹揚と肯いた。

「ならば、その二人とこの娘を連れて、もう一度ここへ来い。そうすれば望みを叶えてやろう」
「――わかった。それで、もうひとつ訊きたいことがあるんだが」
アドリオ様の顔つきが、さっきまでよりさらに真剣なものになっている。
「言ってみるがいい。なにが知りたい」
「……俺も一緒に行くことは可能か？　つまり……ミハルと、彼女の世界へ」
アドリオ様の言葉に、あたしは思わず息を呑んでいた。
でも――よく考えたら、彼は確かにそう言っていた。あたしが、日本に帰る術（すべ）を見つけたら、自分も一緒に行くと。
そして……そして、自分と、け……結婚してほしい、と。
でも、あたしはまだ、なんとも返事をしてない、否、しようがない状態なんだけど……。
あたしとアドリオ様が見守る前で、テオルーグさんははっきりと首を縦に振った。それからつけ加えるように言った。
「お前が『見送り人』の一人になる資格を有しているというなら、簡単な話だ」
アドリオ様の顔がみるみる紅潮した。感極まったのか、彼は背後からあたしに抱きついてきた。
それとは対照的に冷静なテオルーグさんの眼差しが、あたしたちを静かに射抜いている。
「もう一人の『見送り人』をここへ連れてこい。儀式を行うのなら、早い方がいい。……わかったな、この娘を心から愛する男だ。そいつがいなければ成功はしない」
彼は言葉を切った。そして、それ以上はなにも言おうとはしなかった。
テオルーグさんの口にした『見送りの儀』が、本当はなにを意味していたのか。

そもそも、彼はいったい、何者なのか。
この時のあたしには、日本に帰れるというその部分だけが重要で、とても想像することなんてできなかったのである。

後日、もう一人の『見送り人』を同行し、再度この庵を訪ねる。
そういうことで話は一応、落ち着いた。
アドリオ様は、テオルーグさんに深々と頭を下げた。
「なんと礼を言ったらいいかわからないが、本当に助かった。来てよかったよ。ありがとう。それじゃあ、とりあえず、俺たちはこれで」
「ありがとうございました、テオルーグさん」
あたしは感謝を込めて一礼した。顔を上げると、また、目がぶつかった。
……ところが、今度はさっきとはまるで様子が違ったのである。
テオルーグさんは、椅子にかけたまま、じいっとあたしを――あたしのことだけを見つめている。それも、なんていうか、こう……慈愛に満ちた、ひどく名残惜しそうな眼差しで。正直、真隣であたしの肩を抱くアドリオ様のことは、眼中になさそうな感じだ。
異様な空気はアドリオ様にも伝わったらしく、少し訝しげに彼のことを見ているのがわかった。そのまっすぐな視線を遮るみたいにして、踵を返す。
「行こうか、ミハル」
「あ、は、はい」
うろたえながらもアドリオ様に促されるまま、庵を出ようとした時だった。
「待て」
短く声をかけられた。
「……霧が濃くなってきた。夜半を過ぎたせいかもしれん。お前た

ち、しばらく仮眠でもしていくといい。部屋を用意するから」
意外過ぎる言葉に、あたしとアドリオ様は顔を見合わせた。どう考えたって歓迎はされてなかったと思うのに、いったいどういう風の吹き回しなんだろう？

＊　＊　＊

ロマド市公認の花街、「春の街（ウェイ・モルド）」。いまでこそ多少の法整備が布（し）かれ、無茶な商売をする店は減ったものの、以前のこの界隈は無法地帯と言ってよかった。そう、少なくとも十九年前、彼が夜な夜なこの街を流離っていた頃までは。
たった一枚のコインと交換に、初めて春を売ったのは九つの時。相手はオサイオン市から訪れたという観光客だった。病的に太っていて、体臭がひどく、嘔吐を堪えるのに必死だった。それでも、生きるために彼は行為を繰り返した。
あの長い黒髪の女に出会ったのは、確かイグノディアスを讃える祭りの日のことだ。街中に花が飾られ、街路にあふれ返る人々はみな、楽しげに、幸福そうにさんざめいていた。彼もまた街角に立った。ただし、客を探して、だが。
女はふらふらと、なにかに魅入られでもしたかのように頼りない足取りで歩いていた。だから彼のことも目に入ってはいなかったのだろう。ぶつかった相手が幼児にすら見える痩せこけた少年だったことで、ようやく正気を取り戻したらしく、慌てて手を差し伸べてきた。
――その手を取りさえしなかったなら。
自分の運命は、おそらくまるで違うものになっていたに違いない。

だが彼は、女の白いやわらかな右手をつかんだ。
女は、聞いたこともないような言葉を口にし、おそらくは謝意を込めて目を細めた。
そこへ飛んできた身なりの良い若い男が、彼女を抱きかかえるようにしてどこかへと連れ去っていった。女は抵抗もせず、おとなしく彼に従った。――愛し合っているのだ、と、幼いながらも理解できた。

人生が一変したのは、それから十日後の朝。
家とも呼べぬ裏町の塒（ねぐら）にやってきた男たちに有無を言わさず拘束され、ロドアの南端、キニッサの町に連れていかれ、そして――。

＊　＊　＊

ゆらゆらと揺れる椅子の上で、テオルーグははっと目を醒ました。
それで自分が寝入っていたことを知った。
眉間にはしわが寄っていた。厭な夢を見たせいだ。ここ何年もの間、忘れていられたというのに。心を惑わされた理由にも見当がついた。

あの、ミハルという娘だ。あれがここに――私のもとに現れたために……。

九つのあの日以来、彼は運命に翻弄され続けてきた。そして十六の年にすべてを棄てた。ようやく静かに暮らせるものと思っていた。いや、事実、ここでは誰も、彼を苦しめたり、賤（いや）しめたりなどはしない。
椅子から立ち上がると、彼は別室に向かった。あの娘と、その連

れの若者には、それぞれ一部屋ずつをあてがってある。彼はなんの迷いもなく娘のいる部屋のドアを開け、その中に入った。

物置のような狭さの小部屋である。もとより、客人を迎え入れること自体が稀なのだ。寝台の代わりに藁を敷き、その上に厚めの布をかぶせた。よほどこの娘が大事なのか、こんな場所に彼女を寝かせることをあの若者は渋ってはいたものの、庵を取り囲む霧を前にして結局引き下がった。……内心、安堵していた。

こんな山の中を夜中に彷徨って、彼女の身に、もし万一のことでもあったら。

彼は――テオルーグははっとした。焦慮とともに、猛烈な苛立ちが同時に込み上げる。冗談じゃない。この娘は元凶だ。死んでくれた方が都合がいい、そうではなかったのか？

――あなたの人生を奪った審議院に。神殿の連中に。目にもの見せてやろうではありませんか、テオルーグ殿。

数日前、山中を彷徨い、行き倒れようとしているところを救ってやったあの男の言葉が、不意に蘇った。

# 第十二話　未明の煩悶

大学府へ出立する前日、あたしはジード様と二人で写真を撮った。お屋敷に人を呼び、大掛かりな機材を使わせた、カラーですらない、白黒の写真。そこに写っているあたしは、なんだかひどく遠く見えるというか、ヘンな話、自分じゃないみたいだった。

それでもジード様はすごく満足そうで、微笑を浮かべながら、写真のあたしにそっと唇を触れさせた。

……恥ずかしいのと、リアクションに困るのと、そしてかすかに感じる胸の痛みとで、どういう顔をしたらいいのかわからず、あたしは彼から目を逸らしてしまった。

そうしたらジード様は、少し慌てたみたいにあたしを抱きしめて囁いた。どうしたんだ、ミハル。なにか気に入らないことでもあるのか？　って。

あたしはこう答えたんだ。いえ、そうじゃなくて……ただ……。

思い出すたびに自己嫌悪に陥ってしまう。なんであんな、わけのわからない、はっきりしない言い方しかできないんだろう。

ジード様のことを受け入れられないのに、拒み切ることもできない自分。

もしかして、心のどこかで、きらわれたくないとか思ってるんだろうか。ああいう風に、情熱的に迫られることが厭なわけじゃほんとはなくて、だから、どっちつかずの曖昧な態度を無意識のうちに取ってしまってるとしたら。

それってただのだめな女じゃん。

――あたしって、結局のところ、彼をどう思ってるんだろう。

親切でやさしくて、でも（超がつくくらい）強引で、ほんの少しだけ危険な感じのする人。この平凡なあたしのどこをそこまで気に入ってくれたのか、さっぱり謎な人。好きだと言われて厭な気なんてするわけがない。

厭な気はしないけど、だけど……。

その先が……わからない。

ただ——時折、なぜかひどく不思議な気分になることがあった。懐かしいというか、どこかで会った気がするというか……廃隧道に落っこちる前の記憶が消えているのなら、それ以前の感情の断片が残っていたとしてもおかしくはない。でも、多分違う。そういうんじゃなくて、もっとこう……なんていうのか……。

あたしは、敷き藁のベッドの上で、ごろんと寝返りをうった。窓さえない、暗闇そのものの空間。ひどく落ち着かない気分だった。

帰る方法はある。「占鏡」が答えを示してくれたのか、テオルーグさんはそう言い切った。——帰れるんだ、日本に。あたしの世界に。

けれどそのためには、あたしを心から愛する二人の「見送り人」が必要だという。「見送り人」が実際になにをするのかはわからない。でもまさか命を捧げるとか、そういう次元の話じゃないだろう。

二人のうち、一人はアドリオ様が引き受けてくれると約束してくれた。でも——もう一人は？

そこであたしの思考は堂々巡りを始めてしまうのだった。だって、なんど考えても、最終的にあの人の顔が浮かんでしまうのだから。

そう、ジード様の、あのやさしい微笑が。

急ごしらえの寝台の上で、娘は静かな寝息を立てている。眠りはいかにも深そうだ。張り詰めていたなにかが切れたのかもしれない。帰る方法がある、と聞いた時の彼女の様子は、こちらが驚くほど嬉

しそうで――テオルーグの心に、わずかな軋みが走った。

本気で帰れると、そう信じているのだ。この娘、ミハルは。

廊下から漏れ入る灯りのおかげで、赤みを帯びた頬、つややかな瞼、わずかに開いた瑞々しい唇がはっきりと見て取れる。あどけなさすら感じさせる顔立ち。テオルーグの表情が、複雑に歪む。……この娘さえいなければ。いま、ここで、息の根を止めてしまえば……。彼は床に屈み込んだ。我知らず、その長い指先が、娘の咽喉元に伸ばされた。

だが、触れた先はそこではなく、頬だった。

まるで赤ん坊の肌を思わせるすべらかさ。それは温もりそのものだった。彼がこれまでの人生で一度たりと得たことのない、触れているだけで安心できるような、温かいなにか。

もっと、もっと知りたい。思う間もなく、指は唇へと移動した。ぷっくりと弾力のある、人肌の果実。それは指の腹に吸いつき、そして水滴が弾けるように離れた。彼の、テオルーグの意識は、娘に釘付けになった。

この娘が欲しい。どうしようもなく。自我が壊れそうなほど強い、あまりに圧倒的な欲求。どれだけその存在を憎もうが否定することすら叶わない――やはり、「本物」なのだ。おのれの心が、宿命が、そのことを教えてくれている。

息が荒くなっていた。娘の口元から手を離し、ゆっくりと自分の唇に押しつける。衝動はいよいよ高まり、頭のどこかがぼうっと翳(かす)む気すらした。

「……テオルーグさん？」

小さな、訝しげな声がした。人の気配に眠りを邪魔されたのか、娘がしきりに目を瞬かせている。身体を起こそうとする彼女を、テ

オルーグは制した。
「そのままにしていろ。……案ずるな、様子を見に来ただけだ」
娘はおとなしく従い、しかし、微笑を浮かべて彼を見上げている。
「あの……本当に、ありがとうございます。まさかこんなにすぐに帰る方法が見つかるなんて、思ってもみなかった」
「……帰れた気になるのは早計だな。言ったはずだ、資格を有した人間が二人必要だと。お前の周囲に、本当にそんな男がもう一人いるのか？　真実、お前を愛している人間など」
聞きようによっては辛辣なせりふだったが、娘はかすかに苦笑しただけだった。
「わかりません。正直、あたしも……考えてたところですから」
「心当たりがないのか？　お前と一緒に来たあの若者は、都合がつくようなことを言っていたが」
「……あたしのことを好きだと言ってくれる人は確かにいます。でも、その人にそんなこと頼んでいいのか……それに、本当のこと言うと、わからないんです。その人がどうしてあたしを、その……好きって思ってくれてるのか」
闇の中で娘の表情は曇った。しばしの沈黙の後、彼女はふたたび口を開いた。
「あの……訊いても、いいですか」
テオルーグは黙って肯いた。
「その『見送り人』がなにをしなきゃいけないとか、知らなくていいって言ってましたけど、その――危険はないんですよね？　……つまり、その人たちの命と引き換えに、とか、そういう話じゃないんですよね」
娘の口調が真剣さを帯びている。テオルーグは首を横に振った。
「そんなことは一切ない。儀式の詳細について知りたがるな。お前のためにもならない。いいな、ミハル」
どくん、と血がざわめいた。娘の名を初めて自ら口にしたためだろうか。彼は唇を噛んでいた。……どこまで愚かなのだ、私という

男は！　元凶そのものである相手に心を乱すなど、あってはならないことだというのに――。

娘は怯えたように口を噤んでしまった。その表情に、彼の胸はまたも揺れた。らしくもなく、思わず、語気を弱めて付け足していた。

「大丈夫だ。お前は心配などしなくていい。もう少し眠れ、まだ霧が引いていないようだからな」

そう言い残すと、彼は立ち上がった。衣擦れの音をさせながら部屋を出ていこうとした時、背後から娘の声がした。

「ありがとうございます。テオルーグさん」

彼は、つぶやくように答えた。それこそ無意識のうちに。

「――テオでいい。次にここへ来た時は、そう呼んでくれ。ミハル」

返事も待たずに廊下へ出、ドアを閉める。娘の含羞んだ顔が目に浮かび、彼は慌てて乱暴に頭を振った。

奥の間の方から、人の足音が漏れ聞こえた。あの若者にあてがったのではない部屋だ。テオルーグの眉が、ぴくりと動いた。

# 第十三話　真実の影

遡ること十日ほど前の話になる。そう、マージュオン港にて、ウェス・ゴート家とウェス・ハーシュ家の次期当主同士が、またしても悶着を引き起こしていたその頃、中央大陸バルネディアの西南八百ノール（約二百キロ）の位置に浮かぶある島に、一隻の小型船が接岸した。

すぐさま積荷が降ろされ、荷役（にやく）が行われる。書物、食糧、それに生薬の基材となる植物、そして――数種類の生物。檻の中に入れられたそれら動物たちは、おのれの辿るべき運命を鋭く感じ取ってか、盛んに威嚇の声を上げている。だが、その声に耳を傾ける者は、ここにはいない。

「いつものことながら、騒がしい光景だな」

島の中心にそびえ立つ古城。その中の一室に集まる十一人の老人のうち、ことさら小柄な一人が、窓の外を見下ろしながら、呆れたようにつぶやいた。

「あれももう、必要はないかもしれぬ。――いや、それを言うなら、我らこそがこの役目から解放される日が近い、ということになるが」

別の一人が感慨深げに相槌を打った。

目と口元が小さくくり貫かれた白い仮面に、足元まで覆う同色のローブ。例外なく、全員が同じ恰好をしている。

「それでは、いよいよ、切符の発行を……そういうことでよろしいですかな」

ひどくしわがれた、そして一段と厳かな声色が、その場に響いた。縦長のテーブルの先端に座する老人だった。

時は、満ちた。

十人の頭が、同時に揺れる。
「枚数は、六……」
「いや。五枚で良い」
くぐもった笑みをこぼしたのが誰だったのか。或いは全員だったのかもしれない。
「まさか十二年も経って、ふたたび囚われの身になろうとは、あの男も思ってはいまいな」
「すべては神の御(おん)ため。……あやつもいずれはわかるであろう、この世の理というものの意味が」
時は来たれり。
海上を渡る生温い西風が、さぁっと音を立てて島を吹き抜けた。

夜明け近く、空が白み始める頃、あたしたちはテオルーグさんの——テオの庵を辞去することにした。下山には多分、三、四時間くらいかかる。こっそりお屋敷に戻ったとして、夜中の外出がばれるかばれないか、微妙なところだ。
「いいな。繰り返すが、この娘を心から愛する男だ。心当たりがあるなら、とっととそいつを連れてもう一度ここへ来い」
テオは、戸口にもたれ掛かりながら、素っ気なく言い捨てた。神妙な顔で肯くアドリオ様。
「ああ、わかってる。こっちももたもたしてるつもりはない。できる限り早くそうするよ」
「それじゃ、テオ、あたしたちはこれで。本当にありがとう」
あたしはあらためて頭を下げた。砕けた口調に驚いたのか、アドリオ様が訝しげにあたしとテオを眺めている。
そんな彼の視線にはかまわず、テオは右手を伸ばし、あたしの頬にそっと触れた。

「……気をつけて戻れ。儀式を行う前に怪我でもしたら元も子もないからな」

その声はひどくやさしく、心底あたしのことを気遣ってくれているのがはっきりと伝わってきた。アドリオ様に手を引かれて下山する途中、彼は納得がいかないみたいな顔をして、こんなことを漏らした。

「無愛想を絵に描いたような男だと思ったのに。いつの間に親しくなったんだ？　昨夜、仮眠する前は、そうでもなかっただろう」

名前だって愛称で呼んでいたし――眉をひそめられ、ついどぎまぎと目を逸らしてしまった。

「あの……少しだけ、話をしたんです。それで……」

「話？　いつ？」

「……眠って、少ししたら、彼が枕元にいて……」

だんだんと険しくなる彼の表情に、あたしの声はなぜか小さくなっていった。テオに対しても、もちろんアドリオ様に対しても、後ろめたいことなんてないはずなのに。

アドリオ様は思いっきり顔をしかめ、大きなため息を吐き出した。

「――こうなったら、とにかく一日も早く、あのなんとかの儀ってやつを成功させないと。屋敷に戻ったら即、連絡を取らないといけないな」

半分独り言のようにつぶやくアドリオ様に、あたしはなんとなく恐る恐る、訊ねていた。

「アドリオ様……もう一人の『見送り人』って、誰に……誰に、頼むつもりなんですか」

彼はあたしを一瞥すると、きっぱりと言った。

「決まってるだろ。兄上だよ」

麓に着き、おとなしく待っていてくれた銀波号と一緒にお屋敷に戻ったのは、朝の二刻（八時）過ぎ。

……パドマさんの最大級の雷が落ちたのは、言うまでもない。

二人の客人が辞したあと、奥の間から、のっそりと現れた人影があった。

「やれやれ。……気配を殺し続けるのも、楽ではありませんな」

禍々しさを帯びた低い声。見る影もない蓬髪（ほうはつ）。古着を接ぎ合わせたような襤褸（ぼろ）。

――イシオス神殿に叛旗を翻し、失脚した挙句投獄された、ラルモ・オルヌその人だった。

数日前、あてどもなく聖山を彷徨い、行き倒れる寸前のところを、この庵の主であるテオルーグに拾われたのである。

「助けたつもりなどはない。山の気が穢れるのを好まないだけだ。死体を片付ける趣味はないからな」

死に場所を探しているのなら、他所へいけ。ここで果てられては迷惑だ。介抱してやった後（のち）、テオルーグは冷たくそう言い放った。

だが、男は意外なことを語り出した。

自分が神殿の人間だったこと。「黒の経典（ザモド）」を手にし、野望を抱いたこと。その失敗。中央政府によって捕縛され、投獄されていたこと。命からがら脱獄を果たしたばかりであるということ。

そして、まだあきらめてはいないということを。

「失敗の原因は、経典が贋物だったためだと踏んでおります。……本物があるはずなのです。それも、この聖山のどこかに」

そう言って、男は意味深な眼差しをテオルーグに向けた。

「なにが言いたい」

「……神殿に勤めていた頃、こんな噂を耳にしたことがあります。イグノディアスの真言を記した聖典が、この世のどこかに――いや、この聖山のどこかに埋まっていると。しかし、私は、あの経典こそがその聖典だと信じて疑わなかった。だから確かめようとは思わずにおりました。だが……」

フェロキオン遺跡で偶然見つけた「黒の経典」は、彼の望む奇蹟を起こしてはくれなかった。あまつさえ文字までが紙上から消え失せた――オルヌをあざ笑うかのごとく。

「牢に囚われている間、ずっと考えておりました。もし、もしも本物がどこかに存在しているのなら。もう一度だけ、自分の運を試したいと。神の御許に近づくのにもっとも相応しい人間が私である、そのことを証明したいと。その想いだけを胸に、脱出を図りました。……そして、ここにやってきた」

そこまで語り終えると、男はじっと目の前の庵主を見た。テオルーグは静かに問うた。

「……なぜ、その話を私にする」

「耳にした噂はもうひとつありましてね。審議院の連中が、かつて神への供物として子どもを攫い、秘匿して育てていたと。真偽は定かではありませんでしたが、しかし……もしや、その子どもとは……」

濁った沼にも似た、青銅色の双眸を、テオルーグは無言で見据えた。

テオルーグ。……テオルーグ・シス・イグニオス（神への供物）――その名をつけられたのは、九つのあの日だ。

街で不思議な女と出会った十日後、神職だと名乗った数人の男たちによってキニッサへと連れて行かれ、フェロキオンの地下空間にて幽閉された。七年もの間、日の光すら一度たりと浴びることなく、彼は完全に世間から隔絶された環境で育った。

「それがあなたであるなら……ぜひ、お力をお貸しいただきたい。私はなんとしてもこの聖山の中に埋もれた真の経典を探し出す覚悟でおります。庵に暮らすあなたなら、土地勘もおありでしょう。或いは経典そのものについても、なにかご存知のことなど――」

「いかにも経典なら持っている。だがそれを手に入れて、なにをするつもりだ」

眉ひとつ動かさず、テオルーグは言い捨てた。両の眼を見開き、

身を乗り出すオルヌ。

「……申し上げたはずです。審議院と神殿に一矢報い、そして、世界をこの手にし、神の御許に近づくこと。

それが、私の抱く本懐のすべてです」

審議院への恨みは、あなたとて同様のはず。オルヌの言葉は確信に満ちあふれていた。

……そして、テオルーグは、この元神官という怪僧じみた男に協力し、策を授けてやることになったのである。

# 第十四話　使者、来たる

「お……奥様、それにアドリオ様！　これはいったい……いったいどういうことですの！？　お二人で、いったい全体どこへ行っていらしたんです！　さ、お話しになれるものなら、お話しになってくださいませ！」

玄関ホールに踏み込んだ瞬間に落とされた、これまでで最大級の雷に、あたしは肩をすくませた。死んだお父さんも怒ると怖かったけれど、パドマさんはもしかしたらそれ以上かもしれない。

「お二人がお部屋においでにならないと聞かされた時の私の驚きがわかりまして！？　心臓が止まるかと思いましたわ。それもそろって外からお戻りになるだなんて、夜の間中出かけていらしたということですの！？　ミハル――じゃない、奥様、アドリオ坊ちゃまといったい、どこへ、なにをしに行っていたんです？　わかるようにお話しになってください、さぁ、奥様」

彼女は、つぶらな瞳に涙を湛えて、ずいずいとあたしに迫ってきた。反射的におどおどと後退るあたし。どこへ、なにをしにと言われても……まさか正直にすべて打ち明けるわけにもいかないだろう。

「日本に帰る方法を探しに、聖山に登ってきた」なんて。

アドリオ様はしかめっ面でパドマさんを睨みつけた。

「ミハルを責めるな。彼女を連れ出したのは俺だ。……その理由については、お前に教える義理も筋合いもないがな」

刺々しい口調に、あたしはびっくりして彼を見上げていた。パドマさんはジード様だけじゃなく、アドリオ様にとっても乳母みたいな人なんじゃないかと思うのに、その彼女に向かってこんな言い方をするなんて……。

「ぱ、パドマさん、ごめんなさい！　あたしが悪いんです。あたし

が、眠れなくて、その……庭をうろうろしてたら、アドリオ様が気づいて、つきあってくれて……」

思わず下手な言い訳をしていた。――ところが、それはかえって逆効果だったらしい。

「な……じゃあ、一晩庭にいたっていうの？　庭で……いったいなにをしていたんです、二人で！」

彼女はますます激昂して頬を引きつらせている。どうやら、好からぬ誤解を与えてしまったみたいだ。なにも後ろめたいことなんてないけれど、そのいきおいに、あたしは弁解する勇気を失ってしまった。

思いもかけない援軍が現れたのは、その時だった。

「おい、パドマ。そのくらいにしといてやれ。朝食の時間も過ぎてるんだ、まず朝飯にしようぜ」

麻のガウンを羽織った旦那様が、がりがりと頭を掻きながら、呆れたような顔で立っている。パドマさんは弾かれたように振り返った。

「お館様！　問題をすり替えないでくださいませ。ジード坊ちゃまのためにも、私は断じて……」

「そのジードも絡んで、ちょっと面倒なことが起きてるらしいんだよ。……アドリオ」

旦那様は、パドマさんには目もくれず、まっすぐにアドリオ様を見つめて声をかけた。アドリオ様は、無言のまま旦那様を――彼のお父さんを見返した。

「さっき中央から連絡があってな。午後一で使者が来るらしい。面倒臭ぇが、おとなしく部屋にいろ。いいな」

「なぜ？　父上に用があるんじゃないのか」

「ああ、俺にもだが、お前にも会いたいってことだ。『重要な用件』でな。わかったら飯だ、飯」

そう言い棄てると、旦那様は欠伸をしながら踵を返し、食堂へと歩いていってしまった。おかげでパドマさんのお説教はここでお開

きになったんだけれど、なぜだかあたしの胸のうちには、得体の知れない黒々としたざわめきが、どんどん広がっていったのだった。

テオが「占鏡（せんきょう）」を使って教えてくれた、見送りの儀。そのために必要となる、二人の見送り人。

中央からやってくるという、使者。その目的。

――ジードも絡んで、面倒なことが起きてるらしい。お前にも会いたいってことだ、『重要な用件』でな。

旦那様のさっきの言葉が、頭の中に響く。

あたしは、防寒用のマントを羽織った身体を、知らぬ間に自分でぎゅっと抱きしめていた。

朝食の時間は、それはそれでかなりつらいものだった――想像はしていたけれど。

延々と続くアウラ様の厭味、聞こえよがしなため息。今度ばかりはパドマさんも助けてはくれず、あたしはただひたすら時が過ぎるのを待った。お皿の上のものはなんにも減らず、作ってくれた人に申しわけないとは思いつつも、手をつけたのは食後のローハン茶とほんの少しの果物だけだった。

微妙に痛む胃を抱えて食堂を出、階段を昇ろうとすると、一瞬早く旦那様に腕をつかまれた。驚いて振り向くあたしに、緑がかった青い瞳が笑いかける。

「すまんな、厭な思いばかりさせて。……特殊な家なんだ。あまり、思いつめないでいてくれるか。ジードのやつが帰ってきた時、お前さんがいなくなってたりしたら、あいつ発狂しかねないからな」

ずきん。思いきり胸が痛んだ。あたしは頬を引きつらせながらも、

なんとか微笑してみせた。
「あ、いえ、あの……平気です。ただ……」
「ん？」
「……アドリオ様が、パドマさんと……仲、悪くなったりしないか、その……心配で」
つい漏らしていた。旦那様はふっと息をつき、あたしの頭を撫でた。
「大丈夫だ。さっきのやり取りだろ？　パドマに対して悪感情があってのことじゃない。ただ、パドマのやつは、イレイラの――ジードの死んだ母親の姉みたいな存在だったからな。どうしても肩入れしちまうんだろう」
そうか。言われてみれば、ジード様とアドリオ様って、お母さんが違うんだった。
そして、アドリオ様のお母さんは、多分、日本人。
「アドリオが気になるのか？」
不意に訊ねられ、あたしはきょとんとし、固まった。慌てて首を横に振る。
「い、いえっ。別に、そういうわけじゃ」
「俺には本音を言ってくれていいぞ。あいつらのどっちを選ぼうが、お前さんの勝手だからな。まぁ、しかし、それにしても……やっぱり血は争えねぇってことなのかもしれねぇなぁ」
「え？」
謎めいたせりふに、眉を寄せるあたし。旦那様の顔に、どこか切ないというか、懐かしそうな表情がじんわりと浮かんでいる。
「こうしてると、似てないはずなのに、不思議なほど重なって見えるんだ。……この髪といい、その瞳といい……あいつが俺の前に現れた時も、ちょうどお前くらいの年齢だった。見たこともないような服を着て、怯えた目をして……知らない言葉で、名前を名乗って……」
「旦那様……？」

背中に腕が回された。抗う間もなく、あたしは彼の胸の中に抱き寄せられていた。――ミサキ、と囁く小さな声が、耳元でした。

「……すまん。どうもお前を見てると、忘れたつもりのことまで思い出しちまってな」

すぐに身体が離された。旦那様は照れくさそうに苦笑している。どう反応したものか、あたしはただぎこちなく笑った。

五刻（午後二時）ちょうどにウェス・ハーシュ邸を訪れた使者を、レンドルスはすぐさま謁見室に通した。中央政府からの使いは過去なんどか迎えたことがあるが、今回はどうもただごとではなさそうだ。執事としての経験から、彼はそう直感した。

「時間を取らせて恐縮です、オルグ・ヴィネック卿。それに……アドリオ殿。

此度、中央政府ひいては審議院より、お二方への命を受けて参じました、ロルーヌと申します」

館の主人とその息子を前に、訪問者は丁寧に礼をしてみせた。中年であるという以外になんら特徴のない、無機的な顔つきの男。対するヴィネックは、椅子の上で鷹揚にあごを引き、使者を促す。

「口上はけっこう。それより、手早く本題に入ってもらえるか」

ロルーヌは肯き、懐から二通の封筒を取り出した。世界樹を模った臙脂の封蝋は、それが間違いなく審議院からのものであることを証明する役目も果たしている。彼は恭しく頭（こうべ）を垂れたまま、一通をヴィネックに、そしてもう一通をアドリオにそれぞれ渡した。

中身を取り出したヴィネックの眉が、ぴくりと動いた。

「……はん。こいつを俺たちに寄越そうっていうのか、元老院の連中は」

「左様で」

父に倣って内容を検めたアドリオも、驚きを隠せずに使者を眺め

た。それから訝しげにヴィネックを見やった。
「父上、これは……」
「恒久手形だ。見るのは初めてだったか、お前は」
天上の切符（イグノード）。
あらゆる栄誉と免罪を約束する、世界共通のジョーカー。
「こんなもんを発行してもらえるほど、政府に貢献はしてねぇと思うけどな」
ヴィネックは皮肉交じりにつぶやくと、浅葱色の切符を人差し指と中指の間につまみ、ひらひらと振ってみせた。不敬とも取れるその態度に、だがロルーヌの顔色は一切変わらない。
「審議院の判断は絶対です。いずれ、真意がわかる時が来るでしょう。……では、私はこれで」
相変わらず無表情のまま一礼すると、訪問者は踵を返して退室した。二人の前で、扉がゆっくりと開き、そして閉まる。
「予想はしてたが、つまんねぇ用事だったな。もう戻っていいぞ、アドリオ」
ヴィネックは大欠伸をし、首を鳴らしてから立ち上がった。アドリオは口を開きかけ、なにごとかを問いかけようとしたものの、言葉が見つからず、結局口を閉じた。彼もまた、ぞんざいに切符を握りしめ、部屋を出て行く。
一人残されたヴィネックは、打って変わって神妙な顔になり、つぶやいた。
「――中央からの情報によると、確か同時にあいつにも発行されてるって話だったか……。どういうことなんだ？　こりゃあ」
三枚もの切符が同時代に発行されることすら稀だというのに――ヴィネックの額にしわが寄った。
その脳裏を過ぎったのは、いまだ胸のうちに巣食う忘れ得ぬ恋人、美沙紀の面影。
そして二人の息子の想い人、未明の姿だった。

# 第十五話　共通項

「淑女の嗜みとしての修練」の一環。そう言ってパドマさんがあたしに突き出したのは、イラスト入りの教本、針と糸、それに丸い木枠を填め込まれた小さなキャンバスのような刺繍セットだった。今日はこれを一日かけて仕上げるように――鬼教官みたいな声が頭に響く。修練とはいうものの、これって明らかに朝の一件に対する罰（ペナルティ）なんだろうな。

昼食のあと、すぐに部屋に戻って「格闘」を再開すること約半刻（一時間）。ノックとともに、ピアが顔を覗かせた。

「お疲れ、ミハル。どう？　進んでる？」

てきぱきとお茶の支度をしてくれながらも、からかい半分に、でもどこか同情をにじませて訊ねるピア。

「……全然」

あたしは盛大なため息を吐き出し、刺繍セットを床に放り出した。

「こういう細かい仕事向いてないの、あたし。手芸とか裁縫とか才能ゼロだし。ああ、もう、目が痛くなってきちゃったよ」

「まぁまぁ、とりあえず一休みしなって。これね、黒蓮茶（こくれん）って言って、疲労回復に効くんだってさ。眼精疲労にもいいらしいから。見た目悪いけど、騙されたと思って飲んでみ」

カップを覗き込むと、強烈な漢方臭さが鼻を襲った。色は真っ黒で、なんとも奇怪なお茶である。それでもピアに促され、恐る恐る口をつける。――なんていうか……身体にはすごく良さそうな味がする。

「でもさぁ……アドリオ様、相当真剣だよねぇ。ミハル、どうするの？　ジード様とどっち選ぶの？」

頬杖をしながらさらりと訊かれ、あたしは思わず黒蓮茶を噴き出

しかけた。
「ど……どっちって、なによそれ。あたしは――」
「ジード様との婚約なんて認めないって豪語したんでしょ、アドリオ様。ずばり、ミハルはどっちが好きなの？　やっぱジード様？」
薄茶色の丸い瞳が、女子特有の好奇心に爛々と輝いている。口を開こうとし、でも言葉が出てこず、結局なにも言えないあたし。
「二ヵ月後にジード様が戻ってきたら、厭でも決めなきゃいけないんだよ。……ていうか、もし、いますでにアドリオ様の方が好きならさ、言ってあげた方がいいと思う。でなきゃお気の毒だし、ジード様」
「……」
あたしは黙り込んだ。胸がずきずきと痛んだ。
「打算的なこと言うと、アドリオ様ならこのお家のしきたりとかあんまり縛られなくて済むかもしれないしね。……あ、アドリオ様と言えば、さっきなんだか偉そうな役人の人が面会に来ててさ。旦那様も同席してたっぽいけど、なんの用事だったのかなぁ」
「役人？」
ピアは大きく肯いた。
「あれね、きっと中央政府の人だよ、レンドルス様の態度からすると。滅多に来ることないんだけどね。でも、旦那様はわかるけど、なんでアドリオ様まで呼ばれるんだろうね？　電話じゃ済まないほどの重大な用事なんだろうけど」
そう言って可愛らしく小首を傾げるピア。と、そこへ、ノックの音が聞こえてきた。入ってきたのは――パドマさんだった。
「奥様、そろそろ出来上がる頃かと思って、ご様子を窺いに来てみたんですけれど」
にこやかに宣われ、あたしは思わず椅子から立ち上がっていた。床の上には、さっき放り出したままのやりかけの刺繍セットがだらしなく転がっている。彼女の眉が、みるみる急角度につり上がっていく。

「ごっ、ごめんなさい！　すぐにやります、あの、その前に――トイレ行かせてくださいっ」

言うなりダッシュで部屋を飛び出した。我ながら意味不明の逃げ口上。「お待ちなさい、御不浄ならちゃんと室内にあるでしょう！」そう怒鳴る声を振り切って廊下を駆け、踊り場まで来たところで、あたしは小さく声を上げた。

「アドリオ様」

階下へ向かおうとしていた彼は足を止め、あたしを見上げた。

「ミハルか」

階段を駆け下り、彼の隣に並ぶ。その顔は、なんだかちょっと緊張しているように見えた。――あたしは直感した。

「あの……もしかして、ジード様に……」

「ああ。『見送り人』として協力してくれるよう、頼むつもりだ。これから」

大学府内の執務局にはウェス・ハーシュ家との直通電話が敷かれていて、連絡は容易に取ることができる。時差もないから、おそらくすぐに兄上につないでくれるだろう。アドリオ様はさらに続けた。

「あいつ、あの占い師は、早ければ早い方がいいと言ってた。俺も同意だ。……お前だって、花嫁修業かなんか知らないけど、こんなばかげた生活いつまでもしていたくないだろ」

憎々しげな口調に、あたしは答えあぐねてただ黙った。

「……いや、そうじゃないな。俺が純粋に厭なんだ。お前が兄上のものになるための準備をしてる姿なんて、これ以上見ていたくない」

アドリオ様は急に早足になり、あたしを置いてきぼりにして一階の伝令室にすたすたと入っていった。あたしは慌ててそのあとを追った。

「――アドリオ様、待って！」

咄嗟に怒鳴ると、そのいきおいのまま、彼の腕を押さえていた。壁のホルダーから受話器を外そうとしていたアドリオ様は、目を丸くしてあたしを見ている。

「ミ……ハル？　どうしたんだ、一体」
あたしは息を整えると、アドリオ様をじっと見据えた。
「あたし……自分で話します。ジード様に」

相当戸惑っているのか、アドリオ様は外しかけた受話器を戻そうともせずしげしげとあたしを見つめた。
「お前が、自分で？　……だけど、どう説明する気だ？　俺の口からならともかく……」
帰るための方法が見つかった。だから大学府から一時帰宅して、協力してほしい。
「そんなこと、ちゃんと言えるのか？」
不安そうに訊かれ、それでもあたしは退かなかった。
「こんなこと、だからこそ、せめて自分で伝えたいんです。じゃないと……」
あまりにも不誠実だから。
決意が伝わったのか、やがてアドリオ様は、ふっと息をついた。
「……わかった。じゃあ、まず俺が執務局に電話して兄上を呼び出してやる。ちょっと待ってろ」
あたしは肯き、手を離すと少しだけ後退した。アドリオ様がダイヤルを回すたび、ジーッというアナクロな音が小部屋に響く。
「――ウェス・ハーシュ家の者だが、そちらに在籍しているオルグ・ジード卿を至急呼び出してくれ。緊急の用があるんだ」
そう告げると、彼はあたしに受話器を寄越した。話しかける時には、小卓に置かれた送話器を使うらしい。ものすごい緊張が全身を包む。なんども深呼吸し、ジード様が出るのを待った。
十五分近く経った頃、誰かが電話口に現れる気配が伝わってきた。あたしは弾かれたように口を開いた。
「じ、ジード様、あの、あたし、ミハルです！　あたし、その……

実は、お願いがあって――」
『大変申しわけございませんが、オルグ・ジード卿は学内にはおいでになりません。イシオス神殿に向かわれているとのことです』
……へっ？
思いっきり間の抜けた声が漏れていた。
大学府にいない？　神殿に向かってる……。
ていうか……イシオス……神殿？
どこかで聞いたことのあるその名前を、ばかみたいに突っ立ったまま、あたしはその場で繰り返した。

講堂最上階の学府長室。ワンジオ翁こと大学府長は、ぽっかりと空いた空洞のような眼（まなこ）で、先ほど呼び出した学生をじっと見据えた。
「ご用事とはなんでしょう、学府長」
恭しく慇懃な美声。灰色の髪に、緑碧の瞳。全身に漂う、聡明怜悧な雰囲気。
名門ウェス・ハーシュ家次期当主、オルグ・ジードである。
「ああ、わざわざ呼び立ててすまなかったね。実は、君に手渡したいものがあるのだ」
いつもと変わらぬ調子でそう言い、机の上に置いた一通の封筒をおもむろに示す。
「受け取りたまえ。君宛だ」
臙脂の封蝋に、美麗な眉がやや傾ぐ。その表情は、やがてはっきりと驚愕のそれに変わった。
「……学府長、これは……」
彼とは対照的に、目の前の老人は驚きひとつ浮かべる様子がない。
「見てのとおりだ。少し前、審議院から通達があってね。――いや、さすがにウェス・ハーシュ一族というべきか。同じ代から、三名もの人間にそれが発行されるなど、前代未聞だ」

ジードは瞠目した。
「三名……それでは、まさか」
ワンジオ翁はわずかにあごを引いてみせた。
「君の父君（ふくん）、それに弟君についても、すでに使者が使わされているはずだ」
「……」
思いもかけない事態に、ジードは混乱を隠せず、手の中の浅葱色の切符を穴の開くほど見つめた。
草髄紙（フェノメット）を使った、独特の手触りの小片である。世界樹に絡みつく双頭の蛇、そして神の祝詞が隠し文字として掘り込まれている。天上の切符。恒久手形。
「あまり嬉しくなさそうだね。なにか、気がかりな点でも？」
はっと我に返り、思わず本音を漏らしていた。
「父に、というのはわかります。ですが……なぜ、若輩の私に？その上、弟に……アドリオにまで、というのは、正直に申し上げて、とても解せません」
「ふむ」
ワンジオ翁の声は、もっともだと言いたげな響きを含んでいる。彼は、その白く長いあごひげをゆっくりと撫でながら、さらにこんなことまで付け足した。
「実をいうと、君の一族だけではないのだ」
いったん言葉を切り、瞑目する仕草を見せ、ふたたび口を開く。
「ウェス・ゴート家次期当主。カシアン・レグノ・ウェス・ゴートにも、その手形は発行されているのだよ」
意外といえば意外過ぎるそのせりふに、ジードはまともな反応を示せず、ただ目を見開くばかりだ。
「カシアンにも……ですって？　学府長、しかし、彼は――」
「不祥事を起こして謹慎中。復学の目処もいまだ立っていない。……だが、審議院は彼を適性ありと見たわけだね。恒久手形の発行対象として」

それはあまりに不条理な事実だ。さすがのジードも眉をひそめざるを得ない。

「学府長。いったいこれはどういうことなのでしょう？　天上の切符とは、あらゆる徳を備えた人間にのみ発行されるべき免罪符ではないのですか？」

我知らず、語気を強めて言いつのるジードに、老人の声はあくまで静かだった。

「その切符の性質については、イシュレー殿の方が詳しいだろう。これ以上は、私から伝えるべきことはなにもない」

「祖父が？　それはどういう意味です、学府長」

「下がりたまえ。用事は以上だ」

そう言うなり立ち上がり、ジードに背を向けて窓の外を見下ろすワンジオ翁。しばしの沈黙の後（のち）、ジードは追求をあきらめ、部屋を辞した。

廊下に出た瞬間、とある記憶が脳裏に閃いた。

――天上の切符だと？　しかし、あれは……。

これは……本物だ。

ただの難民の娘じゃない。他大陸からの放浪民（ツィゼット）でもない。しかし、だとすれば……？

――この娘は、何者なのだ？

父、自分、アドリオ、そしてカシアン。切符を授与された者すべてが、ある人物に共通して関わっている。

夜の闇のような黒い瞳を持つ、出自不明の娘。

所持しているはずのない恒久手形とともにどこからともなく現れた、未明という、あの謎めいた少女に。

# 第十六話　カシアンの決意

オサイオン市中心部はゴドラム街区の大邸宅、ウェス・ゴート本邸。四ヶ月もの船旅から戻るなり、カシアンはずっと臥せったままだ。

マージュオン港到着直後のちょっとしたトラブル――政敵であるウェス・ハーシュ家との小競り合いに精神的ダメージを受けたため。同行した執事補佐（ヴァレット）のホヴァロンは、そう現当主に説明した。

「ねぇ、小競り合いって、いったいなにがあったのよ？　向こうの当主様まで出てきちゃったの？」

「え、えーと……私もよくわからないんです。どういうわけなんでしょうね、ほんと」

先輩メイドのアージュリンに声を潜めて訊かれても、ヨナにだって答えることはできない。曖昧に笑ってその場を凌いだ。

――十中八九、予想はついてるけど……お傍仕えの侍女としては、口が裂けても喋るわけにはいかないわね。

アージュリンから逃れ、そのカシアンのもとへ向かいながら、ヨナは独りごち、肯いた。

そう。あれは要するに、失恋だ。

もともと神経質というか、不安定な気質の持ち主には違いないが、そこへもってきてこっ酷い失恋の痛手がとどめを刺したというところなのだろう。

ヴァリーという豪快な青年の船で出会った、あの可憐な黒髪の娘に、彼女の主君である次期ウェス・ゴート卿は、尋常ならぬ執着を見せた。妻だとさえ言っていたが、いったいそれは事実なのか。彼

の父親、ゾデューに訊ねればすぐにもわかることではあるが、なんとなくそれは躊躇われた。カシアンの名誉に関わることでもある――少なくともヨナはそう感じた――し、それに、一介の使用人にすぎない自分に、そういう立ち入った事情まで教えてくれるものかどうか。現ウェス・ゴート卿は、決して気安いタイプの男ではない。

「あら……？」

廊下を曲がったところで、ヨナは首を傾げた。カシアンの部屋の扉が開き、中から現れたのは誰あろう、噂の次期当主だ。いつの間に来ていたのか脇に控えるホヴァロンに付き添われ、中央階段を降りていく。

「どうしちゃったのかしら、若君が部屋をお出になるなんて」

後ろ姿を見送りつつ、訝しげにつぶやいた。なにしろ屋敷に戻ってからというもの、彼は一度として自室を出たことがないのだ。ヨナや侍医がどれだけ庭の散歩やちょっとした遠出に誘おうが、カシアンは聞く耳持たず、広大な寝台の奥深くに潜り込んだまま。入浴や食事はかろうじて行うものの、いまや完全な引きこもり状態に陥っていたのである。

その彼に、いったい、どういう心境の変化が訪れたのだろうか。

好奇心を刺激されながらも、ヨナはとりあえず主君の部屋に入り、日課となっている掃除を始めることにした。

ゾデュー・エリアック・ウェス・ゴート卿の居室は、別棟の最上階に存在する。

広い室内には、当主のほかに、邸内では見かけぬ男の姿があった。

「おお、来たか、カシアン。――ああホヴァロン、お前はもうよい。退がるがいい」

ゾデューの声はどこか高揚しているようだ。ホヴァロンは従順に一礼すると、主人の間を辞去した。

「父上。……ご用事とは、なんでしょう」
むっつりと、つまらなそうに、カシアンは口を開いた。重大な用件と言われて無理やりベッドから引きずり出されたのだ。当分は誰にも会いたくないというのに。
「うむ。――大変な名誉だ。心して聞くがいい、我が息子よ」
そう答えると、ゾデューは脇に立つ男を促した。髪をきっちりと撫でつけ、立て襟のマントをまとった、使者らしき風体のその人物は、カシアンに向かい直り、中央政府より参りました、ラグソムと申します。
「審議院の命を受け、殿勲に頭を下げる。
カシアン・レグノ・ウェス・ゴート殿、あなた様に対し、このたび審議院は恒久手形の発行を裁可いたしました。ついては、これをお受け取りいただきます」
ラグソムは、懐から一通の封筒を恭しく取り出すと、カシアンに手渡した。思いがけぬ事態に、灰色の混じった緑の瞳がわずかに見開かれる。
「素晴らしい、実に素晴らしい。これで我がウェス・ゴート家も、永劫の安泰を約束されたようなものだ」
父の上げる満足げな笑い声も、カシアンの耳には入っていなかった。気づくと、全身が小刻みに震え出していた。――生きている限りの栄誉と免罪。これを持つ者は、あらゆる制約から解放され、その意のままに行動することが赦される。
そう。なにを望もうが自由。もはや、自分を拒むことなどはできないのだ。
……たとえそれが、宿敵、ウェス・ハーシュ家所縁の人間であっても。
「では、私はこれにて失礼いたします」
短い口上とともに使者が退出する気配があった。カシアンはゆっくりと父を――現ウェス・ゴート卿を見た。
「カシアン。秋になったら大学府に戻るのだぞ。早速、復学の手配

に取り掛からねばな」

ゾデューにしてみればそれは当然ともいえる帰結だった。通常は認められない留年も、この切符さえあれば誰も文句はつけられまい。

しかし、彼の息子の思惑は、彼のそれとはあまりにかけ離れたところに向けられていたのである。カシアンは微笑とともにはっきりと宣告した。

「そんな必要はありません。……大学府に戻る？　なんのためにです。私にはすぐにでもやらねばならないことがある。そうだ、こんなところで時間を無駄になどしていられない」

ゾデューは仰天した。カシアンの顔つきががらりと変わっている。血の気のなかった頬は紅潮し、瞳は爛々と血走り――それはまるで、半年前のあの悪夢の夜を思い起こさせるような、鬼気迫る表情。戦慄を感じ、ゾデューは椅子をなかば蹴立てるようにし、腰を浮かせた。

「カシアン、お前、いったいなにを……」

「花嫁を迎えに行くのです。父上もご承認くださったはずです、私の花嫁、ミハルのことを。よもやお忘れではないでしょう？　大学府の禁忌すら犯してもかまわないと言ってくださったではありませんか。

彼女は……彼女は、あの憎き（にっく）ウェス・ハーシュ家のオルグ・ジードによって拉致されてしまったままだ。私が迎えに行ってやらねば……そうだ、私のこの手の中に、一日も早く取り戻さなければ」

「カシアン――」

ごくり、と渇いた咽喉を鳴らし、ゾデューはおのが息子を見つめた。その目は熱っぽく空を彷徨い、伸ばされた腕はなにかを掻き抱こうとしているのか、あらぬ方向を這い回っている。

この顔は……あの時と一緒だ。ウェス・ハーシュの、ヴィネックの長男を刺したあの時と。

「わかった。ともかく部屋に戻れ。その娘についても、すぐに手を打とう。あらためて、婚儀の支度も整えよう。お前が動くまでもない、いいな、カシアン」

父のせりふに、カシアンの目がいっそう輝いた。彼は一礼し、高揚した様子のまま部屋を出ていった。

と同時に、ゾデューは即刻、執事のバージェット及び彼の補佐役であるホヴァロンを呼びつけ、あることを命じた。二人は心得顔で肯くと、速やかに彼の前から退がった。

ゾデューは深々と椅子に身を沈め、大儀そうに息を吐き出した。息子によく似た面差しの、優美な女の微笑みが、その脳裏に白々と浮かび上がる。

――これは、罰なのか。それともお前の呪いなのか、クリスティア？

中央政府からの使者が屋敷を訪れてから三日後の夕暮れ、ヨナは廊下をゆくバージェットをようやくつかまえると、語気も荒く問い詰めた。

「バージェット様、いったいあれはどういうことなんです！？　痛々しすぎて見ていられません、若君が、いったい今度はなにをしたっていうんですか」

ヨナのいきおいにバージェットは慌てた。つきあたりのリネン室に彼女を引っ張り込むと、渋い顔で口元に指を当ててみせる。

「頼むから、大声を出さないでくれ。……私たちだってやりたくてやったんじゃないんだ、あれはあくまで旦那様のご意向で……」

「旦那様のですって？　父親ならなにをやっても赦されるっていうんですか？」

バージェットはため息をついた。力なく頭を振り、愚痴めいた口

調で言い訳を始めた。
「……尋常じゃないことぐらい、私だって承知だ。だがね、仕方がないだろう。あのまま放っておいたら、若君はなにをされるかわからない。今度はいままでとは事情が違うんだ、なにしろ『天上の切符（イグノー ド）』を手に入れてしまわれたんだからな」
聞き慣れない単語に、ヨナの素朴な眉が歪む。
「い……イグノード？　なんなんです、それ」
「中央政府から発行される免罪の手形だよ。あれさえ持っていれば、どんな行動をしようが罰せられることはない。神の名（イグノディアス）のもとに、あらゆる望みを叶えることができるのだ」
ヨナはぽかんと口を開いた。まるで聞いたこともない、荒唐無稽な話だ。バージェットは眼鏡を押し上げ、大真面目に続けた。
「若君は、ロマドのウェス・ハーシュ家所縁の娘に、どういうわけかひどく執着されている。君も知っているだろう、そもそもマージュオン港での衝突も、それが原因だっていうんだからな。ウェス・ハーシュ家が相手では、真正面からはさすがの当家も手を出せない。……だが、あの切符さえあれば……。そうお考えになったんだろう、若君は」
「で、でも、だからってあんなやり方……それに、だったら、若君のご希望どおりにさせてあげればいいじゃないですか。その切符があればあの女の子、簡単に手に入れることができるんでしょう」
卑怯なやり方かもしれないが、それにしてもなぜウェス・ゴート卿自ら息子を阻むような真似をするのか。ヨナの疑問に、バージェットは悲痛な顔をした。
「――その娘が絡むと、若君はおかしくなってしまわれる。例の醜聞にしたってそうだ。旦那様は、若君の狂態をこれ以上ご覧になりたくないんだよ。わかるね、ヨナ。君も、若君のことを思うなら、我々に協力してくれたまえ」
低い声で逆に詰め寄られ、ヨナは黙り込んだ。はい、とも、厭です、とも答えず、逃げるようにリネン室をあとにし、カシアンの部

屋に向かう。扉を開けようとした瞬間、なにかが割れるような鋭い音がし、咄嗟に身をすくめた。すかさず顔を上げ、取っ手に手をかけた時、その鼻がぴくりと蠢いた。――捕らえたのは油の匂いだった。

「若君っ！」

部屋に踏み込んだ途端、目に映ったのは、割れて方々に飛び散ったガラスの破片。扉のそばに転がっているのは、ベッド脇に置かれているはずの小型のランプだ。漏れ出たオイルに引火したらしく、さかんに炎を上げている。ヨナの全身から血の気が引いた。

「わ、若君……」

少し離れた位置にカシアンが立っている。錦糸の縫い込まれた寝巻きをまとい、ザンバラ状態の髪を振り乱しながら。そして、その右足首には、長い鎖のついた鉄の枷が填められていた――彼の自由を奪い、この部屋から外には決して出さないようにするために。ヨナは瞬時に理解した。

「若君、なんて……なんてことを！　か、火事になっちゃうわ、け……消さなきゃ」

なにがおかしいのか、カシアンはくぐもった笑い声を漏らした。

「ばかか、お前は？　火をつけたのだ。燃えてもらわねば困るだろう。火事になれば、その騒ぎに乗じてこの屋敷から出ることもできる。ほら、じきに壁に燃え移るぞ」

ヨナは弾かれたように振り返った。その言葉どおり、火は思いがけないスピードで触手を伸ばし、着実に絨毯を蝕んでいく。彼女はカシアンには目もくれず、バスタブの残り湯にそれらを浸すと、すぐに取って返し、燃え上がる炎をタオルで叩きつけた。無我夢中だった。

「貴様！　なにをしてる、火が消えてしまう、やめろ、やめないか！」

カシアンの金切り声さえ、いまのヨナには外野に過ぎない。彼女は怒鳴った。

「火を消さなきゃ、火事になっちゃうでしょ！　わかってるの、お屋敷が燃えちゃうのよ、そんなことになったら――」

「燃える？　それこそ私の望むところだ！　燃えてしまえばいい、こんな家！　愛着も未練もないわ！」

そのせりふに、ヨナは切れた。彼女はタオルを手にしたままカシアンに突進すると、身体が仰け反るほど手を振り上げ、頬を張った。渾身の力を込めて。

――ぱぁん、と小気味良い音が響いた。

「あなた……なんにもわかってないわ。火事になったら死人が出るかもしれないのよ。人が死ぬってのはね、もう取り返しがつかないってことなのよ。それなのに……燃えればいいですって？　あなたのことを心配してる人まで死んじゃうかもしれないのに？」

唇が震え、声がかすれた。怒りで眩暈がした。五つの時に亡くなった母親の顔が、無性に思い出された。

カシアンは呆然とヨナを見下ろしている。あまりの衝撃に毒気が抜かれたのか、口を開けたまま、ただ固まって彼女を眺めている。ヨナは踵を返すとふたたび消火活動を開始した。やがて、火は鎮静し、小さくくすぶるのみになり、消えた。辺りには鼻を衝く厭な臭いが漂っている。

糸の切れた操り人形さながらに、その場に崩れ込むヨナ。沈黙とともに長い時間が過ぎていく。

やがて口を利いたのは、カシアンが先だった。

「私は……ミハルさえ手に入るならほかになにも要らない。あの切符を受け取って、やっとそれが叶うと思ったのに……父はその邪魔をしようとしたのだ。――なぜ、いつもこうなる？　オルグ・ジードにしろ、あの船での男にしろ、皆私を妨げる。そして今度はお前だ。……どうして邪魔をするのだ。どうして……」

ヨナは床に膝をついたまま、ゆっくりと振り向いた。

「どうあっても彼女に会えないのなら、いっそ死を選びたい。生きてなどいたくはない。……お前、ヨナと言ったか……私を殺してく

れないか？　私の侍女として、主君の望みに応えてくれないか」
　ヨナは立ち上がった。迷いのない足取りでバスルームに向かう。じきに戻ってきた彼女の左手には、大判のタオルが。そして右手には、陶器のピッチャーの取っ手が握られていた。
「若君。失礼します」
　言うなり、躊躇なくピッチャーを振り上げると、ヨナはその中身をカシアンに向かってぶちまけた。
　髪も、顔も、寝巻きから足の指先にいたるまで、彼の身体は全身くまなくずぶ濡れになった。
「――――」
　自分の身になにが起きたのか、信じられないでいるカシアン。ヨナは身動ぎもせずに言った。
「あいにく微温湯なんですけど……目、醒めました？」
　空っぽのピッチャーを床の上に置くと、言葉も出ないカシアンをしっかりと見据え、さらに続ける。
「若君の気持ち、あたし、わかります。あたしにも、すごく好きな人がいるから。きっと一生叶うことないかもしれないけど、それでも、あきらめたりなんてできません。叶わないなら死んだ方がいいなんてちっとも思わない。だって……だって、死んじゃったら、もう絶対に会うことすらできなくなっちゃうもの。
　だから、若君も、あきらめないでください。あきらめなければ、チャンスは必ずめぐってくるんですから」
　そう言って、彼女は深々と礼をした。
「出過ぎた真似をして、申しわけありませんでした。……あたし、お勤めを辞めます。やっぱり、こういうお仕事、向いてないみたいです」
　悪戯っぽく笑うと、左手に用意していたタオルをカシアンに差し出した。そして部屋を出て行こうとした、まさにその時だった。
「――待て！」
　無意識のうちに、カシアンは彼女を呼び止めていた。怪訝そうに

立ち止まり、振り返ったヨナに、彼は言った。
「主君として、侍女のお前にあらためて頼みがある。――力を貸してくれ」

# 第十七話　おかしな二人旅

黒く潤んだ瞳が、恥ずかしそうに俺を見つめ、甘い声で囁く。お願い……激しくしないで。……くらっと来た。気づくと、無我夢中で、彼女の着ている麻のワンピースを毟り取っていた。出立前に俺が市で買ってきたものだ。古着だけど、小柄で可憐で、喰っちまいたいほど可愛い彼女はなにを着ても似合う。

一糸まとわぬ姿になった彼女に、俺は抱きついた。そして囁いた。愛してる、ミハル。

彼女は――ミハルは、頬を染め、かすかに肯くと、目を閉じた。歓喜と興奮が全身を燃え立たせる。我慢？　これ以上できるわけがない。したって無意味だ。俺は愛の言葉をもう一度口にし、それから唇を重ね……重ねようとして……。

＊　＊　＊

少年の金切り声と同時に、ヴァリーはベッドからいきおいよく転がり落ちた。強かに頭を打ち、かすむ目をしょぼつかせる。仁王立ちで彼を見下ろしているのは――最愛の少女ではなく、弟分の同居人、ゼノンだ。

「あ？　……なんだ、なんでお前が船に乗ってんだ？　ミハル……ミハルは……」

ゼノンは肩で息をし、真っ赤な顔で怒鳴った。

「ここはヘレーデ号じゃなくて、カジュヌ！　航海から戻ってきたのはもう二週間以上も前のことだろ！　……ったく、ミハルに振ら

れてショックなのはわかるけど、いい加減しっかりしてよ、ヴァル」
「――ああ……」
空気みたいな、気の抜けた声が漏れた。なんとなく、状況も理解できた。おそらく未明と間違えて、ゼノンを抱き寄せようとでもして、咄嗟に突き飛ばされたのだろう。情けなさに頭を掻き毟る。
「悪い。けど、明け方に帰ってきたのはお前も知ってるだろ。もう少し寝かせてくれ、午後には起きるから」
失恋の痛手は自覚する以上に大きく、カジュヌに戻ってきてからというもの、ヴァリーは夜な夜な飲み仲間とばか騒ぎを繰り返していた。その傷心ぶりには彼自身が呆れてもいた。――たった十日かそこら一緒に暮らしただけの相手だ。それが、なんだ？　この体たらく。俺は決してもてないタイプじゃない。女なんかいくらだっているだろうが。なのに、どれだけそう言い聞かせようと、癒えないものは癒えない。未明の面影は日を追うごとに鮮明になり、昼も夜もなく彼を悩ませ続けた。
その結果が、さっきの夢である。
ゼノンが邪魔さえしなけりゃ、夢の中とはいえ彼女を抱けたかもしれないのに――不条理な苛立ちが込み上げ、ヴァリーは罪なき弟分を睨みつけた。が、口を開いたのは彼よりもその弟分の方が先だった。
「ぼくだって好きで起こしたんじゃないよ。お客さんだよ、ヴァルに。外で待ってもらってんだから、さっさと起きてよ」
ヴァリーは大欠伸をした。それからさも不興げに舌打ちを鳴らす。
「客だぁ？　非常識なやつだな、こんな朝っぱらから」
「お日様はとっくに真上に来てるけどね。……ていうか、普通のお客じゃないみたい。なんか……お役人みたいなんだ」
ゼノンは声を潜め、気遣うように背後を振り返った。ヴァリーの表情が俄然、引き締まる。
「……役人だと？　まさか……この間の一件についてか。いや、けどあれは、あえて不問ってことで収まったはずじゃ……」

マージュオン港での一幕を嗅ぎつけた政府の連中が、あらためて罰則を与えに来たのだろうか。それとも、インヴォルタンとしての活動がいよいよばれたのか。

「わかんないけど、でも、そういう雰囲気じゃなかったよ。すごい名誉がどうとか言ってたし……とにかく起きて、ちゃんと支度してよ。これ以上待たせたらどっちみちまずいしさ」

ゼノンの言葉が終わるより早く、ヴァリーはベッドから飛び降りた。胸の中を不安が渦巻いている。十代の頃から研ぎ澄まされてきた、インヴォルタンの頭領（ヘッド）としての直感。

――なにか、やばいことに巻き込まれようとしてるんじゃないか。

五分後、服を身に着けたヴァリーは、神妙な面持ちでドアを開けた。

深夜のウェス・ゴート邸内は、墓場のごとく静まり返っていた。家人も使用人も、皆そろって床に着いている、十一刻半（午前三時）。

庭の一隅、厩舎の陰からこっそりと出てきた怪しげな人影が、二つ。すらりと長身の方は全身を黒装束に包み、顔すら外からはほとんど窺えない。もう一方は対照的に小柄で、つばの丸まった麦わらの帽子を深々とかぶり、お仕着せではない自前の外出着をまとっている。赤い花模様のエプロンドレスに、きっちりと結われたおさげ髪。きらきら輝く、捷（はしっこ）そうな目元。

ウェス・ゴート邸に勤める十四歳の侍女、ヨナ・フォルスである。

「若君、足音立てないようにしてください！　誰かに見つかったらお終いなんですからね」

長身の靴音が気になったのか、彼女は振り向くと小声でそう告げ

た。相手はむろん――カシアンだ。

「脱出の手引きをお前に頼んだのは確かに私だが、なぜこんな時間にこそこそと抜け出さねばならんのだ。この私が……夜盗まがいの恰好までして……」

覆われた布の内側で、彼は思いきり顔をしかめた。呆れたように、だがあくまで声を殺して言い返すヨナ。

「昼間にどうやってお屋敷を抜け出せるっていうんです？　いいですか、若君はご自分のお部屋に閉じ込められてたんですよ。外をふらふらしてるだけでも大騒ぎになっちゃうわ。人目を避けるには、この時間帯にお屋敷を出て、オサイオン中央駅舎を目指す。それしかないんですからね」

そう言われてはぐうの音も出ない。カシアンは渋面のまま、ため息をついた。

「……皆まで言わずともわかってる。すべてはミハルに会うまでの辛抱だ。ロマドに着きさえすれば、ミハルに会えさえすれば……」

この茶番も、彼女のためだと思えばなんとか耐えられる。ぶつぶつと独りごちるカシアンの姿に、ヨナは思わず笑みを漏らした。

「なんだ？　なにがおかしい」

「いえ。……やっと、らしくなったなって思ったものですから。若君はやっぱり、そうやってミハル様を追っかけてるのがいちばんですよ」

カシアンの頬がかっと赤くなった。九つも年下の、妹のような小娘のくせに――そう思っても、実際にうまい言葉が口に出てこず、彼は忌々しげに目を逸らした。……どうも、この娘といると調子が狂う。

だがともかく、彼女の助力がなければ、自分はいつまでもあの部屋に閉じ込められたままだったろう。足枷を外す鍵も、人目を避けるための扮装も、すべては彼女が用意してくれたものだ。主君である自分の頬を叩き、水を浴びせかけた前代未聞の侍女ではあるが、無能ではない。なぜなのか、彼女なら――このヨナという純朴な娘

なら、自分をウェス・ゴート邸から連れ出してくれるのではないか。そんな気が、カシアンはした。

使用人だけが使う通用門から、二人は音もなく外へと滑り出た。ここからしばらく歩いた先に、かねて手配しておいた辻馬車が待っていてくれるはずである。御者はヨナの顔見知りの男で、賃金を弾むの一言に、夜中の仕事にも二つ返事で応じてくれた。

「……あ、いたわ。ウェッツさん」

軽い足取りで駆け出すヨナ。そこには一台の辻馬車が停まっていた。御者台に座る男が、軽く帽子を取って挨拶する。

「よう、公主様んところのお嬢さん。そちらが異国からのお客さんで？　またずいぶん、変わった恰好なさってるねぇ」

ひげを蓄えた、小太りで陽気な男だ。ヨナは曖昧に笑って肯いた。

「ええ、まぁ。お生まれになったお国の関係でね、日の光にも弱い方なの。だからこういう衣装が必要だし、それに夜の夜中でないと外出もできないのよ」

「へえぇ、そりゃまた、不便な話だねぇ。いや、しかし、相当な美丈夫じゃないかい。いままで乗せた客ん中じゃいっとうの玉だ」

ウェッツは感心したように口笛を吹いた。ヨナはさすがに慌てた。

「あ、あら……布で全身隠れちゃってるのに、わかるの？　おじさん」

言葉が通じないと踏んでいるのか、ウェッツの軽口は止まらない。

「そりゃあわかるさ。俺(おい)らの趣味は人間観察だからね。どこの国のお方か知らないが、これなら男どもが放っとかないだろう。俺らだって、独身なら、ぜひ一晩お相手願いたいとこだね」

「ウ、ウェッツさん！　早速だけど乗らせてもらうわね、急ぎなの、あたしたち」

ヨナは悲鳴に近い声を上げ、怒りに震えるカシアンがなにかを言い出す前に、彼の身体を座席へと押し込んだ。

カシアンとヨナを乗せた馬車は、オサイオン中央駅舎に向けて、夜の闇の中をゆっくりと走り出した。ここから到着まではおそらく四時間、というところか。ひとまずの緊張が解け、ふう、と息を吐き出したヨナを、カシアンはじっと見つめた。

「若君？　どうかされました？　あ、この中なら、その布取っても大丈夫ですよ。もう見る人もいないし……」

カシアンは言われたとおり、フード部分に手をかけ、顔を覗かせた。それからおもむろに口を開いた。

「――お前……なぜ私に協力してくれるのだ」

「え？」

思いもかけないせりふだったのか、ヨナはきょとんとして彼女の主君を見つめている。

「私を逃がすということは、父上に背いたも同然だろう。屋敷にももう戻れまい。なのに……なぜ、私のために尽力してくれるのだ、お前は」

カシアンも、使用人であるヨナの立場くらいはわかっている。助けてくれるのはありがたいが、いったい自分に力を貸すことで、彼女になんのメリットがあるのか。無私？　そんなばかな。あり得ない。だが――事実、見当がつかない。単純に、純粋に、彼は不思議だったのだ。

「お仕事のことは、いいんです。元々、若君に無礼を働いてしまった時点で、辞めるつもりでしたし……それに……あたしにも、ちゃんと計算はありますから」

カシアンの目が訝しげに見開いた。そんな彼の前で、ヨナは、初々しく頬を赤らめた。なにを勘違いしたのか、カシアンは眉をひそめて咳払いをしている。

「お前……好きな男がいるとか言っていたな。一生叶わないとかどうとか……まさか、それは、私のことではあるまいな」

「あり得ません」

文字どおり即答し、冷たい目で主君を見つめるヨナ。数秒後、彼女はふっと表情をやわらげた。

「――一生叶わないのは本当です。多分……きっと。会ったのなんてほんの数時間のことだし……でも、それでも、あきらめられないんです。どうしても。若君も、同じ気持ちでしょう？」

「……そうだな」

知らず、そんな風に肯いていた。すると、ヨナの大きな瞳がまん丸になった。

「わ、若君の笑ったところって……初めて見ました、あたし」

いっつも塞ぎ込んでて、もしかして表情筋固定されてるのかってぐらい――そこまで言って、はっと口元を覆う。カシアンの眉がみるみるつり上がっていくのがわかったからだ。彼はむっつりと腕を組み、目を瞑った。

瞼の裏に、未明の顔が浮かんだ。――もうじきに会える。私の天使に。

待っていてくれ、ミハル。

# 第十八話　神官長との対面

「だから、なんど言やわかるんだよ！　俺は家を継ぐ気も、見合いをする気もない、少なくともいまのところはな！
……大学府（こっち）に来る？　冗談はやめてくれ、卒府試験だってあるんだぞ。頼むから、邪魔しないでくれ、お袋」
第一教義棟一階の伝信室に、時ならぬ学生の大声が響き渡る。いまは午後の講義が行われているはずの時間帯だ。短いやり取りのあと、彼は叩きつけるように受話器を置いた。そして腰に手を当て、忌々しげに頭を掻き毟る。

――実家からの電話って聞いた時、そもそも厭な予感がしたんだ。虫の報せだかなんだか知らねぇけど、こういうのに限って外れやしねぇからな。

ぶつぶつと独りごちながら伝信室を出、教室に戻ろうとした時だった。
「――ジード！　お前の方も、用ってやつは済んだのか」
親友の姿を見かけ、思わず駆け出していた。相手の方も気づいたようで、講堂からこちらに向かって歩いてくるのが見えた。
「なぜここに……講義中じゃなかったのか、ホルツェン」
訝しげに訊ねられ、学生――ホルツェンは苦笑してみせた。
「実家（いえ）から強制呼び出しだよ。ったく、卒府前の最後の自由時間だってのによ。うちの親は、ほんとそういうとこ頓着ねぇからな」
肩をすくめてそう言い棄てたホルツェンだったが、ふと、眉を寄せて友人に声をかける。
「おい。……なんかあったのか？　えらく剣呑（ツラ）な顔して」

「……」

ジードの眉間には、くっきりとしわが寄っていた。思えば、彼のこんな表情は以前にも見たことがあった――そう、ウェス・ハーシュ家の若いメイドが大学府内で誘拐され、行方不明になってしまった時だ。あの時もジードは講堂に向かい、いまと同じように緊張した面持ちで戻ってきたのだった。胸騒ぎを感じ、ホルツェンは重ねて訊いた。

「ジード？　なにか、よくない内容だったのか」

「――恒久手形を受け取った。学府長から直々に」

唐突に言われ、ぽかんと口を開けるホルツェン。

「な……に？　恒久……おい、まじでか、それ？　『天上の切符』をか？　って、まさか、だって……」

いくらウェス・ハーシュ家の次期当主とはいえ、目の前の親友はすなわちまだ学生の身分だ。家督を継ぎ、それなりの業績を残したあとでならなんの不思議もない。だが、それは少なくとも三十年は先の話だろう。

ホルツェンの反応に、ジードは肯いた。

「ああ、得心のいく話じゃない。しかも、今回の授与における対象者は私だけではないんだ。父と弟、それに……カシアンにも発行されているらしい。父はともかく、未成年の弟や、謹慎処分を受けたカシアンまでがというのじゃ、さすがに腑に落ちかねるだろう」

「……学府長は、ワンジオ翁はなんて？　お前、当然、発行理由を訊いたんだろう」

ジードの眉がいっそう曇った。

「それについては、私の祖父に――ノルド神官長の真意を仰ぐよう、言われた。それ以上食い下がっても無駄だった。正直……学府長のおっしゃる意味がわからないんだ。なぜ、あの場で答えていただけなかったんだ？　答えられない理由があるのか、それとも……学府長でさえ、実はご存知ないのか？」

ロマド市長をも兼任する、叡智と仁愛の権現のような存在。それ

が大学府の学府長、ワンジオ翁である。ジード初め学生たちはもとより、歴代の教授陣からの信頼も厚く、また、決してそれを裏切らないはずの徳高い教育者。

その彼に対して、ジードは初めてこの時、懐疑に近い感情を抱いた。

ワンジオ翁は確かに審議院のメンバーではない。だが、要人たちとのつながりは、誰よりも深いことでも知られている。その彼が、いくら連邦のトップシークレットとはいえ、切符の発行基準、またその持つ意味について真実を語れないなどということがあるだろうか？　それでは、彼の存在とはなんなのだ。彼が統治を任されているこの大学府はいったいなんなのだ？

そう思った時、力強い手に肩を叩かれた。

「無駄に悩んでんじゃねぇよ。要はノルド神官長に訊けってことなんだろ？　だったら、訊きに行こうじゃねぇか。こんなとこでうだうだしてるより、まずは行動を起こさなきゃな」

笑顔で片目を瞑ってみせる親友に、ジードは瞠目した。そして、つられたように微笑を浮かべていた。

二人は四限の講義をサボタージュすることで一致し、外出届けを出すため、その足でまずは執務局に向かった。

キニッサ湾から小型舟艇を操り、ハーマッド島の船着場に到着したのは、うっすらと日も傾きかけた六刻（午後四時）近くのこと。すぐ近くにイシオス神殿と、そして古代遺構、フェロキオン遺跡がある。

「普段は人も来ねぇとこだよな。イベントもないし」

畏敬心の薄いホルツェンらしい言葉に、ジードは苦笑した。

「『清浄の儀』のことか？　確かにそれ以外では、そもそもフェロキオンには一般人は近づけないようになっているしな」

ここでは年二回、天道の六罪（りくざい）と名づけられた人類の原罪を清めるための儀式が行われる。それを除けば、民間人は通常、立ち入りを禁止されているのである。

そういえば、とふと思い出したことがあった。確か、この地だったはずだ。ウェス・ゴート邸でいったん消息を絶ったあと、ふたたび未明が現れたという場所は。

「――オルグ・ジード卿！」

不意に声をかけられた先に目をやると、そこにいたのは日課をこなしに来たのか、掃除用具を手にしたシグルだった。ジードの前で、恭しく片膝をついて挨拶する。

「ご無沙汰をしております。その節は……本当に、申しわけございませんでした」

レノラの姦計に携わったことを言っているのだろう。律儀な彼らしく、その表情にはいまだ苦悶の影が残って見える。ジードは静かに答えた。

「そのことはもういい。ミハルも無事に見つかったし、卒府後すぐに行う予定の婚儀の支度も進んでいるしな。……それに、お前にもレノラのことで迷惑をかけてしまった。祖父に恩のあるお前のことだ、彼女に頼まれては断ることもできなかったのだろう？　……彼女の暴走は、私にも責任の一端がある。――すまなかった」

そう言うと、ジードは頭を下げた。慌てたように口ごもりながらも、シグルは思わず問い返していた。

「お顔をお上げください、オルグ・ジード卿！　……しかし、婚儀……と申されますと、その……レノラ姫ではなく……」

「私が迎える花嫁は、ミハルただ一人だ。――レノラには厭な思いをさせてしまったが、今後なにがあろうと、これだけは変わらない」

ジードの熱のこもった宣言に、隣に佇むホルツェンは思わず口笛を吹いた。が、彼らとは対照的に、シグルの表情は晴れない。黙り込んでしまった彼を見て、ホルツェンは苛立ちを隠せず口を開いた。

「なぁ、ともかく神殿に行かないか。日が暮れちまうぜ。えーと、

あんた……神殿の人なんだろ？　俺たち、神官長にお会いしたいんだが、いまはお忙しいのかい」

「シグル・ノディエと申します。いえ、本日のお勤めはお済みになっておられるはずです。もしよろしければ、私がご案内を……」

腰を上げたシグルに、ジードは頭（かぶり）を振った。

「大丈夫だ、我々だけで行ける。お前にはお前の勤めもあるだろう。……ホルツェン、行くぞ」

「あ、ああ」

シグルの申し出をすげなく断り、さっさと歩き始めたジードに追いつくと、ホルツェンは思わず小声で訊ねた。

「なぁ。いまのはどういうことだ？　お前ら、レノラ姫も交えて、なんか揉めたりしたのか」

ジードは答えない。だが、その表情はかすかに強張っている。

「あのメイド――ミハルって言ったか、その子が行方不明になった件に、さっきの男が一枚噛んでたのか？」

「言っただろう。そのことはもういいんだ」

「いいって、お前……」

有無を言わさぬ雰囲気に、さすがのホルツェンも口を噤まざるを得ない。二人は言葉も交わさず、黙々と歩き続けた。じきにたおやかな水音が聞こえてきた。

イシオス神殿の有する広大な庭先に造られた、噴水の音だ。

イシュレー・チェンマ・リン・ノルドは、彼の孫息子とその学友を、常と変わらぬ穏やかな態度で迎え入れた。翡翠の装飾があちこちに施された「玉璧の間」。代々の神官長のみが居住を赦される部屋である。

ヒジリギクを煎じて淹れた茶の醸す独特な香りが漂う中、ジードはあらためて訪問の口上を述べるべく、口を開いた。

「祖父上、オルグ・ジードにございます。先日はご助言をいただき本当にありがとうございました。こちらは大学府での私の友人です」
「ホルツェン・オルレアド・シモン・ライゾックと申します。お初にお目にかかります、ノルド神官長殿」
老人の威厳に圧倒され、神妙な顔つきで畏まるホルツェン。イシュレーの白みがかった眼(まなこ)がじっと彼をとらえた。
「固くなられることはない。ようこそ、ライゾック殿。ジードが世話になっているようですの。祖父として、礼を申しますぞ」
ゆっくりと頭を下げられ、ホルツェンは慌てた。
「いえ、そんな、世話になってるのはもっぱら俺の方で……」
「謙遜なされることはない。良い友人を持ったの、ジードや」
祖父の言葉に一瞬笑みを浮かべたジードだったが、すぐに表情を引き締めた。
「祖父上。今日ここへ参りましたのは、お訊ねしたいことがあったからです。審議院のメンバーでもある祖父上であれば、きっとお答えいただけると信じて」
イシュレーは微動だにせず、問い返した。
「――例の……切符のことかの」
直球の返答に、ジードの長い睫がぴくりと動いた。
「……そうです。つい先ほど、大学府長から受け取りました。祖父上。どうか教えてください、あの切符は、『天上の切符』とはいったいなんなのです？　ただの免罪符ではないはずだ。あれにはいったい、どういう意味が――いや力が秘められているのですか」
ジードは息も継がずに疑問をぶちまけた。上座に掛ける老神官長と、下座から彼を仰ぐその孫息子。二人の視線が真正面から絡み合う。と、その時だ。
「ジードが、あの人が来ているですって!?　なぜお祖父様は彼をここに通したりなさるの！」
部屋の外からヒステリックなわめき声が近づいてきたかと思うと、恐ろしいいきおいで扉が開いた。

そこに立っていたのは――美しい金髪を振り乱し、頬を真っ赤に染め、わなわなと肩を震わせた姫巫女、レノラだった。

# 第十九話　レノラ騒動

ホルツェンは思わず立ち上がり、唖然として彼女を――夜叉さながらに目を吊り上げてジードを睨みつけるレノラの姿を眺めた。薄い黄色の花模様を散らした正絹（しょうけん）のドレスの裾を翻し、足音も荒々しく「玉璽の間」に乗り込んできたレノラは、人差し指をジードに突きつけ、金切り声をさらに張り上げる。

「あれだけの恥をわたくしにかかせておいて、よくものうのうと顔を出せますこと！　……百歩譲って婚約破棄は認めてあげますわ。でも、そうする以上、二度とここには、このイシオス神殿には姿を見せないでくださいませ！　ここはわたくしの聖域です、おわかりですの!?　さぁ、早く出ていって！　あなたの顔など、生涯見たくはありませんわ！」

紫水晶と称えられるその双眸からは、とめどない涙が流れ落ちた。痛々しさにジードは眉をひそめた。それがまた、レノラの気に障ったらしい。衝動的に右手を振り上げた彼女を、駆け込んできたシグルが間一髪で食い止めた。

「お放しなさい、無礼者！　わたくしを誰だと思ってますの!?」

「姫、どうか、どうかお気を鎮めてください。ここを出ましょう、姫、さあ」

レノラは暴れ、シグルを突き飛ばした。そしてふたたびジードを見据え、声高に言い放った。

「出ておいきなさい、この恥知らず！」

そう言うや否や、彼女は部屋を飛び出した。一部始終を見守っていたホルツェンは、そこで我に返った。沈痛な面持ちで頭（こうべ）を垂れるジードを一瞥し、考えるよりも先に、なぜかレノラのあとを追って駆け出していた。

長い廊下を渡り切った先の、中庭を臨む縁台に彼女は座っていた。シグルでさえ声をかけられないのか、少し離れた場所から心配そうに彼女を見つめている。ホルツェンはかまわず縁台に近づいた。

「見事な庭ですね。さすが、格式高いイシオス神殿だけある」

飄々とした口調で話しかけるものの、レノラは振り向きもしない。彼は勝手にその隣に腰掛けた。

「なにか……ご用ですの」

ひどく険のある声色にも怯まず、肩をすくめてみせる。

「ジードとなにがあったか詳しくは知りませんが、あれだけ怒鳴るとエネルギーを使うでしょう。キニッサに戻るなら、ついでになんか、甘いものでも食べに行きませんか？　まぁ、ろくな店はありませんが……あなたさえよければ、どうせ大学府（エコルガルト）も夕食時ですし、またうちの食堂でも」

レノラは冷たく言い捨てた。

「大学府など、二度と行くものですか！　あんなところ……誰もかれも、わたくしをばかにして……」

婚約者の心を奪った娘と出会った場所。見慣れぬ黒い瞳に可憐だなどと思った自分が赦せない。レノラはぶるぶると肩を震わせた。

そんな彼女の変容ぶりを、ホルツェンは興味深く見守った。

金糸の髪と紫水晶の瞳を持つ、妙なる巫女。神に愛された娘。

アーシア・レノラ・リン・ノルドというのは、そういう存在のはず――だった。少なくとも世間一般にはそう知られている。ホルツェンは思わず噴き出した。弾かれたように顔を上げ、はったと彼を睨みつけるレノラ。

「なにがおかしいんですの！？」

口元に手を当てながらも、ホルツェンは笑いやめようとはしない。

「失礼。いや……ずいぶん、印象が違うものですから。つい」

レノラは黙り込んだ。大学府でこの男と挨拶を交わしたことを、彼女とて忘れたわけではない。

「あの時はいやに上品な態度で、いかにもノルド家の姫巫女然と振舞っていたでしょう。まぁ、どことなく、嘘くさい気はしたんですがね」

無遠慮な物言いに、レノラの方は言葉すら出てこない。

「な……」

「あなたはジードには似合ってませんよ。ご存知でしょうが、あいつはひどく古風なんです。おとなしくて可愛くて、従順な女ってやつが好みなんだ。誰かが護ってやらないと、っていう感じの――どう考えたってそういうタイプじゃないでしょう、あなたは」

片目を瞑られ、レノラは気を殺がれたようにそっぽを向いた。

「あいつがはまってる彼女はまさにそんなタイプなんでしょうね。確かに可愛いけど、俺はそそられないな。どうせ自分のものにするなら、じゃじゃ馬というか暴れ馬というか、こう――時々手に余るくらい、激しい女の方がいい。死ぬまで飽きずにすむでしょうから」

怒りも忘れ、レノラはまじまじと目の前の大柄な青年を見つめた。……この男は、大胆にも、ウェス・ハーシュ家にも連なる由緒正しきノルド家の姫を、口説いているのだろうか？

「あなた……ええと、ライゾック様」

「言ったでしょう。ホルツェンでけっこうですよ」

「卒府したら、すぐにでもご結婚されるんじゃありませんの？　ああ……そういうお相手と？」

ホルツェンは微妙に顔をしかめた。

「冗談じゃない。うちの親が、そんな気の利いた見合い話なんて持ってくるもんか。――ああ、失礼。いまのところ、思い当たる相手はいません。残念ながらね。目下、捜している最中なんですよ」

レノラは赤く濁ったままの瞳をぱちくりさせた。捜す？　親の意も介さずに？　ライゾック家ほどの名家が、一人息子にそんな勝手を赦すというのだろうか。彼女は沸き上がってきたそんな素朴な疑

問を、素直にぶつけた。
「ご両親はお認めになりますの？　もしも、あなたが……ご自分で選んだお相手を連れていったとしたら」
ホルツェンは苦笑し、両手を広げてみせた。
「あり得ないでしょうね」
「それでは、意味がないのでは……」
「俺にとって意味がないってのは、誰かに決められた事柄をいうんです。俺が自分自身で決め、選んだことなら、すべて意味がある。――一生を添い遂げる相手だ。そもそも、誰かに押し付けられるという方が異常だとは思いませんか」
彼はにやりと笑い、大きく伸びをした。そのさまに、レノラの胸が、かすかな音を立てた。

誰かに決められ、押し付けられた婚約者。

従兄、オルグ・ジードのことを、なぜ自分は生涯の伴侶と思い決めていたのだろう。……いや、そもそも、彼のことを本当に愛していたのだろうか？
夕暮れのやさしい風が、中庭を静かに吹き抜けた。

猛然と立ち去ったレノラをホルツェンとともに追おうとしたジードは、しかし、祖父の鋭い一声に足を止められた。
「待ちなさい、ジード。……お前はそもそも、なにをしにここへ来たのだえ」
「祖父上、しかし……」
「レノラのことなら、案ぜずともよい。じきに頭も冷えるだろうて。それより、話の続きを……私の知っている真実を、まずはお前に伝えておきたい。聞きなさい」

ジードの顔に緊張が走る。彼は下座に設えられたフォモック製の座椅子に掛け直すと、背筋を正した。

イシュレーは深く息を吐き出すと、瞑目した。そして語り出した。

「大学府がなぜキニッサに建てられたのか、お前は知っているかの」

唐突な問いかけに、戸惑いつつもジードは答えた。

「ええ。かつて世界樹（ラ・ミュゴン）が生えていたという伝説の地であることと、イグノディアス神との契約を護るために好立地であったという二点のためだと心得ておりますが」

前者はともかく、後者は確かに効果を発揮したと言わざるを得まい。寮生活の間に禁を犯した学生は、これまで一人たりと存在しないのだから。

イシュレーはかすかに肯いた。

「そのとおりじゃ。そして、世界樹は神代（かみよ）の頃、イグノディアス神を生み出すとともに役目を終え、枯れた。世に知られた創世神話じゃな」

そこまでなら子どもでも知っていることだ。ジードは祖父の真意を測りかね、眉を寄せた。

「――しかし、真実はこれだけではない。創世にまつわる秘せられた神話が存在するのじゃよ。審議院が発行するあの恒久手形は、そこに深く関わっておるのじゃ」

ジードは顔を引き締めた。父と弟、それにカシアンにまで発行されたという「天上の切符」。その持つ意味はなんなのか。なぜワンジオ翁はあの場で詳細を語ってくれなかったのか。

彼の疑問は、この夜、思わぬ形で答えを与えられることになる。

# 第二十話　もう一人の神

世に知られた創世神話とは別に存在する、もうひとつの始まりの物語。

イシュレーはふたたび双眸を閉じ、厳かに暗誦した。詠うようなその声は、いったいどこから出ているのか、茫洋と空（くう）に響いては消えていく。

「神代（かみよ）の初めに、尊い樹が生えていた。大地のすべてに根を張るこの巨大な樹は、世界樹（ラ・ミュゴン）と呼ばれた。

樹は、その枝が宿した最初の実から、一人の神を生んだ。

――後にイグノディアス神と結ばれることになる、男性神を」

そこまで聞いていたジードは、緑碧の瞳を瞬かせた。

「男性神……ですって？　しかし、聖典（キリエル）では……」

心得たように肯くイシュレー。ほんのかすかに衣擦れの音がした。

「もうひとつの、そして真実の神話がこれじゃ。一般には秘匿され、語られることもないがの。……審議院以外の場ではな」

混乱がジードを襲う。それも当然だった。世界を創ったのは女神イグノディアス。唯一にして最高の神格である彼女に夫がいたなど、初耳もいいところだ。

「この神は――男性神は、イグノディアス神と夫婦になるも、やがてその生を終え、魂を六つに別（わか）ったのじゃ。六つの魂は、それぞれ地上に降り、転生した人間の中に宿ることになった……」

ジードは座椅子を蹴倒さんばかりに立ち上がった。かすれ声で問いかけていた。

「祖父上！　それでは、まさか……まさか、あの切符というのは」

イシュレーは、彼の孫息子をじっと見つめ、肯いた。

「六つの魂の欠片を持って生まれた人間の男。その者たちに発行さ

れる、いわば認定の証じゃな」
　オルグ・ヴィネック、オルグ・ジード、アドリオ、カシアン。――イシュレーはさらに言う。
「おそらくは六名すべてが確定したのじゃろうて。審議院が切符発行に踏み切るということはの」
　でなければ、十九年前、少なくともヴィネックには切符は渡されていたはずだ。その言葉に、ジードはさらに瞠目する。
「それは……それは、どういう……」
「そのままの意味じゃて。あれは……ヴィネックについては、すでにわかっておったのじゃ。魂の持ち主の一人であることがの」
　イシュレーは深く息を吐いた。
「卑しくも神の生まれ変わりじゃ。おそらくは不遇などに遭わせぬよう、またあらゆる権利を与えるため、免罪の意味を持たせたのだろうと……そうわしは思っておった。いや、思おうとしておったのじゃ。これまではの」
「祖父上？　では、本当はそうではないと？」
　老人は、ゆっくりと首を横に振る。
「それだけならば、なぜ男性神の存在を隠し通す必要がある？　聖典からも意図的にその箇所は除外されておる。すべては審議院の意図によるものじゃ。……わしは、ずっと訝しく思っておった。秘せられている事実はまだほかにもあるに違いないと。だがの、連綿と続くあの組織の中では、わしとて新参に過ぎん。正面から訊いたところでまともに答えてもらえるとは思えなんだ。だが……」
　白い闇にも似た双眸が、目の前の青年をまっすぐに捉える。
「切符が発行されたいまならば。六名が確定したいまならば、真実に近づく方法はあるかもしれぬ。審議院さえお呼びもつかぬやり方での」
　ごくり、とジードは渇き切った咽喉を鳴らした。祖父はいったい、なにを行おうとしているのか。
　そして、自分がかつて死んだ神の生まれ変わりであるというのは、

本当のことなのか。
ハーマッド島に、夜の帳が下りようとしていた。

ロマド行きの、三ヵ月ごとの定期便は、相変わらずの混雑ぶりを見せていた。案内された四人掛けのコンパートメントを見て、カシアンは不興を隠そうともせずに悪態をついている。
「なんという狭さだ！　しかも臭いぞ。おい、ヨナ、なぜ一等客室ではないのだ。仮にもウェス・ゴート家の次期当主を、こんな物置小屋に閉じ込めるなど――」
「わか――旦那様、失礼します、お口元に蝿が！」
ヨナは手元のバッグからショールを引っ張り出すと、それをカシアンの顔目がけて叩きつけた。思いもかけない攻撃に、さしものカシアンも目を丸くして固まっている。そんな主人の耳元に、彼女は声を殺して囁いた。
「若君！　お願いですから目立たないようにしててください。あと、一応、身分は隠して移動してるってことを忘れないでください！　ここはまだオサイオン市内なんですよ？　きっといま頃、お屋敷じゃあ若君の不在がばれて、捜索が始まってるはずです。どこから情報がいくか、わかんないんですからね」
そのためにも、家名を口にすることはいっさい禁止。少なくともロマド市に着くまでは、「若君」ではなく「旦那様」で通す。これなら、周囲の人間にも、どこぞの商家の放蕩息子と思ってもらえるかもしれない。
「ご不満がおありなのは重々承知です。……でもね、この切符を取るのだって苦労したんですよ。巡航便っていうのは利用者が決まってるから、空きがある方が奇跡的なんです。そりゃあたしだってできれば一等客室をお取りして差し上げたかったですけど、金額も張るし、足もつきやすいし……」

ショールを払い除けたカシアンは、それでもまだ渋い顔でぶつぶつ言っている。

「切符ならお前一人分で良かったのだ。私には恒久手形があるのだからな。あれさえ見せれば、どんな客室だろうが混みようだろうが」

「そんなもの使ったら、すぐウェス・ゴート家に連絡行っちゃうじゃないですか。ご自分が逃走中だって自覚、あるんですか、わ……旦那様？」

ヨナは呆れ返り、人差し指を彼の鼻先に突きつけた。ぐうの音も出ずに黙り込むカシアン。そんな二人に、前方の座席から無遠慮な声がかかった。

「お取り込みのとこ悪いけどね、煙草吸ってもいいかい？　お二人さん」

はっと顔を上げると、座っているのはいかにも柄の悪そうな二十代の若者だった。茶と金の混じったまだらの髪に、煤焼けしたような赤黒い顔、古着らしい擦り切れた労務服。ウェス・ゴート邸であれば、下男にすら採用することはまずないだろう。カシアンは露骨に顔をしかめた。

「貴様……この私の目の前で煙草を吸うだと？　それがどれほどの重罪か、わかって言ってるのだろうな、ええ？」

そのせりふは、前半部分しか口にはできなかった。ヨナの平手が素早く飛んできたからである。

「ええ、どうぞ、お兄さん！　ごめんなさい、あたしたち、こういう汽車の旅って慣れてないもんだから、あははは」

渇いた笑みを浮かべながらも恐ろしい形相でカシアンを睨みつける。ここは喫煙車両だ、その可愛らしい瞳はそう言っていた。カシアンは苦虫を噛み潰したような顔をしつつ、侍女の暴挙を咎めずにいる自分に対して、驚きを隠せずにいた。――いや、驚きというよりは戸惑いに近いかもしれない。

なぜ私はこの小娘を赦しているのだろう。我ながら奇蹟としか思

えない。

少なくとも、大学府ではあり得なかったことだ。この自分、カシアン・レグノ・ウェス・ゴートを殴りつけ、水を浴びせ、その上暴言を吐くような輩は、宿敵であるオルグ・ジードを除けば、誰一人として存在しない。

彼にしてみれば、たかだか荘園の元管理人の娘である。庶民もいいところだ。学があるわけでも、並外れて器量がいいわけでもない。ごく普通の、どこにでもいる、ありきたりの娘。それも九つも年下の。

「旦那様……申しわけありません。痛かった、ですか」

いやに殊勝な小声が聞こえた。さっきまで目を吊り上げて彼を掣肘していたヨナが、打って変わって気遣わしげにこちらを見上げているのだ。カシアンは一瞬詰まり、それから噴き出した。ひどく楽しそうに。

「旦那様？」

ヨナはきょとんとして彼の横顔を見つめている。

「お前……あれだけ好き放題人を小突いておいて、いまさらその態度はないだろう。なんの真実味もないぞ」

その言葉には険も厭味も含まれていなかった。カシアンは声を殺して笑い続けた。

大学府にかけた電話を切ったあと、あたしは途方に暮れる思いでその場に立ち尽くした。

「兄上は神殿にいるって、そう言われたのか？　取次ぎに」

アドリオ様に訊かれ、心もとなく肯く。あの事務職員みたいな男の人は、確かにそう答えた。

「キニッサの神殿って言ったら、イシオスのことだろうけど……そ

うか。なら、そっちに電話して頼むしか……」

「あたし、直接お願いに行きます」

気づくと、アドリオ様を遮るようにしてそう言っていた。相当驚いたらしく、彼は目を瞬かせてあたしを凝視している。

「直接って……イシオス神殿にか？　いや、けど……あそこには……」

なぜか気が進まないみたいで、アドリオ様の表情は冴えない。でもあたしは怯まなかった。

「やっぱりこんなこと、電話で済ますのよくないです。会って直接お願いしないと。だって――」

この世界にお別れするための協力をしてもらうのである。あたしのことを好きだと言ってくれている人相手に、そんなことを頼もうとしてるんだもの。あたしにでき得る限りの誠意を示さないと、テオの言った「見送りの儀」だってきっと成功はしないだろう。あたしは努めて笑顔で続けた。

「ロモッカさんに馬車を出してもらいます。そしたらあたし独りでも行けるし」

厩舎で馬たちの世話もしているウェス・ハーシュ家お抱えの御者のおじさんはとても気のいい人で、なんどか話をしてるうちにすっかり打ち解けることができた。彼なら、頼めばきっと引き受けてくれるだろう。

そんなあたしに、アドリオ様はふと微笑した。

「……ばかだな。お前独りでなんて、今度こそ行かせるわけないだろ。あんな思いをするのはもうごめんだ。俺も行くよ、一緒に」

「えっ……あ、でも……」

咄嗟にうろたえていた。ジード様の言葉が脳裏を過ぎる。――私以外のすべての男を、お前の意識から消してくれ。そう言われたのに、なのに、「ほかの男の人」であるアドリオ様と一緒にジード様のもとを訪れるなんて……そうだ、それに、あたし、アドリオ様に返事してないんだ。日本に帰ることができたら、結婚してほしいっ

て――。

ていうかほんとに帰れるんだろうか？　……ジード様の協力さえ得られたら、本当に？

「善は急げだ。そうと決まったら、旅支度をしないと。夕方に出立すれば、明日の午前中には着けるだろう」

アドリオ様はどことなく楽しそうな口調で言い、あたしの手を引いて伝令室を出ると、中央階段を昇って旦那様の部屋に向かった。

## 第二十話　もう一人の神（後書き）

厳密には神様って「一柱、二柱」って数えるそうですが、「もう一柱の神」だとちょっと響きが……。

# 第二十一話　続・おかしな二人旅

寝台の上に裸で横たわる、長い黒髪の娘。その可憐な口元に唇を寄せ、澄んだ瞳を見つめ、そっと囁く。

「ミハル……やっと、やっとお前に会えた……」

私の運命。私の天使。最愛の、ただ一人の恋人。

愛してる。名前を呼んでくれ――お前も同じように私を愛してくれているのなら。

未明はかすかに肯き、唇を震わせた。

「お母さん」

……なに？

カシアンの眉間に、思いきりしわが寄った。左肩が重い。未明とは明らかに違う、素朴な、野の花のような香りがした。

麦わらの帽子をかぶったまま頭を傾けているのは、彼の侍女、ヨナ・フォルスだった。

「お母さん……」

幼さの残るつぶやき。おそらくは夢でも見ているのだろう。カシアンは顔をしかめた。いささか身勝手ながらも、甘美な夢を邪魔された、そう感じたからである。だが、彼女の小柄な身体を無体に突き飛ばすことは、なぜかできなかった。彼は不機嫌そうに咳払いをした。

「……ん……あれ……って、うわっ！　わ――旦那様！」

目を醒ますなり、ヨナは狭い座席の上で飛び退った。なにしろ目の前に、不興も顕わに眉を歪めた主君の姿が迫っていたのである。

彼女は真っ赤になり、あたふたと謝った。

「も、申しわけありませんっ！　とんだご無礼を……」
が、てっきり怒号を浴びせるだろうと思われたカシアンの方は、予想に反してその表情をやわらげた。窓から差し込む陽光が眩しく、ヨナは思わず目を細めた。
「――気を張っていたのだろう。私を逃がす手はずを整えるために、色々と奔走したことぐらいはわかってる。よく眠っていたぞ、寝言まで漏らしてな」
並外れた癇性のために使用人からも恐れられるカシアンとも思えぬせりふだ。ヨナの両目がまん丸になった。知らず、惚けたように問い返していた。
「ね……寝言、ですか？　あたしが？」
カシアンは口角を上げ、鷹揚に肯いた。
「それも二回。母親を呼んでいたぞ。いまだに乳離れもできていないのか、お前は」
ヨナの頬がさらに紅潮した。必死で帽子のつばを引っ張るものの、そもそも顔を隠せるようなデザインではない。羞恥のあまりか、泣きそうになりながらも、彼女は口を開いた。消え入りそうな声が聞こえてくる。
「……夢で……十年前に死んじゃった母に会ったんです」
思いもかけない告白だった。カシアンの表情が真顔に戻る。
「死んだ？　……お前の母親も死んでいるのか」
彼はぽつりとつぶやいた。ヨナは弾かれたように顔を上げた。
「あ……そう言えば、奥様も、確か……」
「私が幼い頃に死んだ。……ばかばかしい理由でな」
それきりカシアンは口を噤む。父に不貞を咎められ、断罪され、命を落とした。母の面影を恋しがることさえ、以来ずっと彼には赦されなかった。ウェス・ゴート家では、当主の意向が絶対なのだ。カシアンの母、クリスティアの存在は、初めからいなかったものとして屋敷から抹殺され、誰もがその話題を避けた。
しかし、この純朴な侍女はどうやら例外だったようだ。

「きっとお美しい方だったんでしょうね。旦那様がこんなにきれいなんですもの」
カシアンは目を瞠った。ヨナはうっとりと続ける。
「お会いしてみたかったなぁ、奥様に。きっと白いユニスの似合う、清楚で、天使みたいな……」
「――本当に、そう思うのか？」
遮るように問われ、きょとんとするヨナ。
「ええ、もちろん。肖像画ひとつ残っていないんでしょう？　うちの母なんて、絵に描くほどの容姿じゃ全然なかったけれど、旦那様のお母様なら、絶世の美女間違いないですもん。見てみたいですよ――って、いえ、あの、すみませんっ！　失礼な言い方を……」
「見たいのなら、見せてやるぞ」
「……えっ？」
思ってもみなかった返答に、ヨナは一瞬、固まった。カシアンは、黒いローブの内側に手を潜り込ませながら言った。
「一枚だけ、写真がある。おそらくは父と母の婚儀の時のものだ。なぜそれが私の手元にあるのか、理由は憶えていないが……」
が、その顔はじきに曇った。カシアンはローブを脱ぎ去り、上着のあらゆる内ポケットを検め始めた。訝しげに見守るヨナ。やがて、彼は呻くようにつぶやいた。
「ない」
「は？」
「写真を入れていた革の護り袋が……ないのだ。写真だけではない、あれには……あれには、『天上の切符』も入れてあったのだ！　なぜ――」
二人ははっとして前方の座席を見た。
つい先刻までそこに掛けていたはずの、労務者風の若い男の姿は、影も形もなくなっていた。

夜を迎えたハーマッド島に、ひんやりとした初秋の風が吹き渡る。
祖父であるノルド神官長と対峙するジードは、先ほどの彼のせりふをゆっくりと繰り返した。
「祖父上。どうかその先をお教えください。審議院すらお呼びもつかないような方法とは、いったい……」
イシュレーは至極落ち着いた口調で答えた。
「アーシアの力を借りるのじゃよ」
「……なんですって？」
当惑も顕わにジードは問い返した。だがイシュレーの表情はまるで変わらない。
「お前も知っておろう。このノルド家が、大陸に数ある神殿の中でも、特にすぐれた巫女を生み出す血筋であることを。アーシアは稀有なる才能の持ち主じゃ。生まれついての触媒……あれならば、『神降ろしの儀』も巧くいくかもしれぬ。もっとも、試すのもこれが初めてなのじゃがの」
アーシア・レノラ・リン・ノルド――レノラが授かった洗礼名は、「伝える者」を意味する神代語である。彼女はノルド家が誇る歴代の巫女の中でも、図抜けた素質の持ち主といえた。生まれてすぐにそのことを見抜いたイシュレーが自ら与えた名だった。
いずれは審議院にも進める身。その事実は、彼女の異様なほど高いプライドの根拠のひとつでもあった。
「『神降ろしの儀』は禁じられた秘儀での。これを行ったことがわかれば、アーシアの審議院入りもなくなるのは確実じゃ。だがの……わしはむしろ、いまの状態で、あれをあの場へ渡すのはどうにも気が進まぬのじゃ」
「信じておられないのですね。祖父上は、審議院の方たちを」
ジードはまっすぐに祖父を見据え、言った。イシュレーは肯いた。その様子からは、それほどの躊躇は窺えない。
「魂の持ち主である六名が確定したであろういまならば、この儀式

も或いは成功するかもしれぬ。……なによりもジード、お前はそのうちの一人なのじゃ。男性神がお降りになるための条件としては、これ以上ないとは思わぬか」

触媒を務めるために選ばれた姫巫女と、神の生まれ変わりである男。イシュレーの言葉には説得力があった。

「だがの、問題は……」

祖父の声色が、そこで若干変化した。ジードにも、その理由はわかっていた。

「ええ。……レノラですね」

自分の顔など生涯見たくないと言い放った彼女が、果たして協力してくれるかどうか。たとえイシュレーの――ノルド神官長の命令であっても、あれほどのヒステリー状態に陥っているレノラが、おとなしく言うことを聞くとはとても思えない。ここでジードはふと眉を寄せた。

……そう言えば、ホルツェンはどうしたのだろう？　この部屋を出ていったまま、一向に戻って来ないが……。

その頃、当の二人、つまりレノラとホルツェンは、夜風を避けて屋内に引っ込み、姫巫女の控え室である「白螺の間（はくら）」へと移動していた。文字どおり、壁も床も高価な白螺石で埋め尽くされた、レノラのためだけの居室である。広くはないが調度品は一流のものばかりで、すべてが白で統一されている。白獅子（ホノマ）の革を張ったソファに、二人は向かい合わせで腰掛けた。

「それじゃあ、ジードの婚約者を葬り去ろうと画策した張本人はあなたなんですか？　姫」

シグルが運んできたユニス茶を啜りながら、ホルツェンは呆れたように声を上げた。いや、呆れたというよりは、驚愕してと言った

方が相応しいかもしれない。いかに恋敵が憎かろうと、命を奪おうとまで考え、そしてそれを実行するなんて――彼は胸中でこっそりとつぶやいた。

……女って、怖ぇ……。

言われたレノラの方は、さすがに決まり悪いのか、やや目を逸らしている。

「元はと言えば、あの娘が悪いんですわ。わたくしから許婚を奪おうとしたんですもの。ですからこれは、正当防衛ですわ。わたくしは、なにも、恥じるところなんて……」

「で、それを、あなたはジードに告白したと」

「……ええ。それでわたくしたち、決裂したんですの。婚約も、事実上、そこで破棄ですわね。……まぁ、いまから思えばあんな人、惜しくもなんともありませんけれど」

あからさまな強がりに、ホルツェンは思わず噴き出した。惜しくもなんともないような男を相手に、あそこまでの修羅場を演じる女などまずいないだろう。そこのところはレノラ自身よくわかっているらしく、その白い頬が見る間に赤く染まっていく。

ホルツェンは、そんな彼女をじっと見つめた。ひどく不思議なことだが、可愛いとさえ――これほど傲慢で、自己中で、ヒステリックで、扱いづらい女にも関わらず――感じている自分がいる。彼は嘘偽りなくつぶやいていた。

「もったいないことしたもんだな、ジードのやつ」

「えっ？　それは、どういう……」

「いえ、なんでも。それより――ジードを罵るのはあなたの勝手だし、権利でもあるとは思いますが。あいつの婚約者、ミハル嬢でしたっけ？　彼女にはきっちり詫びを、いえ、謝らなければだめですよ。ご自分がなさったことに、自覚くらいはあるでしょう？　本当に死んでいてもおかしくなかったんだ。その、片棒を担がせたって

いう神官長補佐にもね。きっとひどい後悔の念に苛まれたでしょうからね」

「……」

ぷい、と顔を背けて黙り込むレノラ。ホルツェンは肩をすくめ、ユニス茶をもう一口啜った。

数分して、沈黙を破ったのは彼女の方だった。

「……同席して、いただけますの？」

「は？」

ホルツェンはぽかんと口を開けた。レノラは真っ赤になって彼を睨んでいる。

「ですから、彼女に謝ってもいいと言ってるんですわ。けれど……その時、あなたに……あなたが、一緒にいてくれれば、きちんと謝れると思うんです。ホルツェン」

「はい」

「ばか正直に答えないでくださいませ！　どうなんですの、同席してくださいますの！？」

「――」

迫力に押され、ホルツェンは絶句した。気づくと、レノラはソファから身を乗り出し、涙目で自分に迫っている。反射的に後退しようとし、足が動いた。その時だった。

「レノラ。君に、折り入って話がある。入ってもいいだろうか」

扉がノックされ、聞こえてきたのは彼女の従兄にして元許婚、オルグ・ジードの神妙な声だった。

## 第二十一話　続・おかしな二人旅（後書き）

「アーシア」＝レノラのことです。
神官長が彼女を呼ぶ時、特に巫女としての意味合いを強めたい場合は、こちらの名前を使っています。
……わかりにくい設定ですみません（一―一；）

# 第二十二話　続々・おかしな二人旅

ヨナは弾かれたように座席から飛び降りた。そして窓の外を見る。初秋の日暮れは早く、西日さえも陰り始め、夕闇がそこまで迫ってきている。

「あと半刻（一時間）もすれば、ロマド駅に着いてしまうわ。それまでにさっきここに座っていた男の人を捜し出して、写真を取り戻さないと……」

十両編成の車両は、乗車率百パーセントを軽く越えている。乗客数が正確には何人になるのか考えもつかないが、駅に到着してしまったら間違いなくアウトだ。ヨナは青ざめ、生唾を飲み込んだ。

カシアンの方は――振り返るのも憚られるような怒りのオーラを発散し――声を震わせている。

「転寝をしている間に、あの男に……掏られたというのか。母の写真も、『天上の切符』も……あの、見るからに下劣な男に！　こんな……こんなことがあるからこそ、私は一等客室を望んだというのに！　なんということだ、ああ……」

ヨナの肩がびくりと揺れた。切符の手配をしたのは自分だ。彼女は唇を噛み、きっと顔を上げた。

「――若君はここで待っていてください。あたし、さっきの男の人を捜し出して、必ず……必ず、若君のお母様の写真、取り戻してきますから」

「なに？　おい、ヨナ――」

止める間もなく、ヨナはバッグを手にコンパートメントを飛び出していった。独り残されたカシアンは、口元に手を当て、そんな彼女の後ろ姿をぼんやりと見送った。

幸先がいい、ってのは、こういうことを言うんだな。
食堂車（サロン）の片隅で一杯引っかけながら、彼はほくそ笑んだ。よれよれの労務服に身を包んだ、赤黒い顔の若い男。そう、眠っているカシアンの懐から革袋を失敬した、先刻のスリである。
思い返してみても笑いが止まらない。予約したコンパートメントで同席したのは、どう見たって世間知らずのお坊ちゃんとその従者という、彼にしてみれば格好の二人組（えじき）だ。身なりや漏れ聞こえた会話から考えて、お忍びで旅行にでも出たってところだろう。……お生憎だったなぁ、世の中には悪いやつがいるもんなんだぜ。せめてもう少し腕の立つ、場数を踏んだ野郎でも連れてくるべきだったな。あんな乳臭い餓鬼じゃ、護衛にもならねぇって。
ま、顔立ちそのものは悪くなかったし、あと数年すりゃ、それなりに見られそうにはなるかもしれねぇが。そう独りごちると、彼はテーブルの上に「戦利品」を並べ始めた。上等の革で作られた貴重品入れに、ついでとばかりかすめ取った、侍女の財布。大した金額ではなかったが、現金が入っているのはこちらの方だ。だが、彼の視線は、もっぱら革の貴重品入れに注がれていた。
「こいつはいったい……なんなんだろうな」
訝しげに眉を寄せつつ、黒く汚れた指先で、浅葱色の紙切れをつまみ上げる。生まれてこの方見たこともない代物だ。描かれているのは双頭を持つ蛇が絡みついた、美しい樹の立ち姿。手触りからして、普通の紙とはまるで違っている。
知識はないものの、スリとしての直感が告げていた。これはきっと、大層な代物に違いない。
「お客さん、また、妙なもん持ってなさるねぇ」
バーテンの声に彼は顔を上げた。反射的にそれらの品を覆い隠そうとし、思い直して口を開いていた。
「ああ。知り合いから預かったもんなんだけどよ。なぁ、あんた、

こいつがなんなのか知らないかい。もしも価値があるもんなら、もうちょい大事に保管しといた方がいいかと思ったんだが」

「ふうん？　どれ、ちょっと拝借」

口ひげをしきりに蠢かしながら、バーテンは問題の紙切れに手を伸ばした。感触を確かめているのか、指先で表面を存分に撫で回す。やがて驚いたように言った。

「こりゃあ……多分、あれだ。草髄紙（フェノメット）ってやつだ。古文書とか、政府の契約書とか、そういった種類の書類にだけ使われるっていう。紙切れのくせにばか高くて、製造法が特殊なんで偽造も難しいそうだ。噂には聞いてたけど、本物見たのは俺も初めてだよ。なに、知り合いから預かっただって？　そんなお偉いさんとつながりがあんのかい、お客さん。若いのになぁ……人は見かけに因らないもんだね」

バーテンの表情が意味深なものに変わっている。探るような視線を受け流し、若者はなに食わぬ顔で鼻をこすると、彼の手元から紙切れを取り上げ、テーブルの上を片付けた。それからそそくさと席を立った。

その頃ヨナは、ともすれば込み上げてくる涙をどうにか堪えながら、必死の想いで訊き込みを続けていた。最後尾の車両から、手当たり次第、潰して回る。だが目撃証言は中々得られない。それでもあきらめる気は毛頭なかった。

――若君の怒りはもっともだし、それにこれは完全に自分の手落ちだ。従者として失格。そうとしか言いようがない。

ウェス・ハーシュ家に行けば、きっとその子息であるというアドリオに会えるに違いない。嬉しさと期待で舞い上がり、気が緩んで

いたのだ。ヨナは歯を喰いしばった。侍女としての矜持にかけて、絶対に自分がカシアンの写真を取り戻す。たとえこの旅が終わった時に解雇されるとわかっていてもだ。

「労務者風の若い男って、そんなやつは腐るほど乗ってるぜ、お嬢ちゃん。ロマドで一旗上げようって連中も多いからなぁ。で？　そいつに、なにを掏られたんだって」

オサイオンからロマドへ商いに出かける途中だという男は、泣きそうな顔ですがりついてきた少女を気の毒そうに眺めた。

「あたしの財布と、わ――旦那様の貴重品です。大事なものが入っていて、どうしても取り返さないといけないんです」

ヨナの頭にあるのは、カシアンの母親の写真のことだけだった。

「天上の切符」がどれほど価値のあるものだろうと、しょせんは切符だろう。最悪、再発行してもらえばいい、その程度の認識しか彼女にはなかった。というより、亡母の形見ほどに大切なものなど、ほかにあるはずがない。それはカシアンとて同様のはずだ。

クリスティアの写真が見たいと口走った自分に、彼はこちらが驚くほど穏やかな顔になり、「見せてやる」と言ってくれた。ともに過ごすにつれ、ヨナはだんだんと確信してきていた。

――カシアンは、自分の主君は、皆が恐れ避けるほど、暴力的な人間ではない。エキセントリックな言動が多いことは否定できないものの、慣れてしまえば愛嬌でさえある。そう、少なくとも自分は、彼がきらいではない。

「可哀想になぁ。気休めを言ってやりたいとこだが、この人込みじゃあ見つけるのは相当骨折りだぜ。しかもあとちょっとで駅に着いちまうし。まぁ、一応、車掌と駅舎長に届出をして、連絡が来るのを待つしか手はないかもなぁ」

「……」

ヨナはうつむいた。我慢していた涙がじわりと盛り上がる。その

時だった。

「まだらの髪の若い男なら、ついさっき見たよ。食堂車から慌てたように出てくるとこをな。捜してるやつかどうかはわからないけど」

思わぬ言葉に、ヨナは顔を上げた。通路を挟んだ座席から、こざっぱりとした格好をした、三十そこそこの小太りの男が身を乗り出してこちらを見ている。彼女は怒鳴るように確認した。

「サッ、食堂車ですね!?　ありがとうございますっ」

言うなりヨナは駆け出した。食堂車は十両編成のこの汽車の、ちょうど真ん中にある。目撃した時刻から間が空いていないのなら、いま行けば捕まえられるかもしれない。席の確保ができず、通路に立ち乗りしている乗客たちの間を縫うようにしながら、ヨナは一路、食堂車を目指した。

「ああ、いたよ。茶色にところどころ金色が混じった、変な頭の男だろ？　白麦酒を一杯だけ飲んで、すぐにどっかへ行っちまったけどね」

グラスを磨いていた食堂車のバーテンは、そう言うと声を潜めた。

「挙動不審でね。俺の直感だけど、ありゃあスリかなんかだな。どう見ても似つかわしくない上等の革袋にさ、あんな若造が持ってるはずもない草髄紙の切符みたいなもんを見せびらかして――」

「草髄紙の切符!?　おじさん、それ、本当なの!?」

ヨナは彼の胸座につかみかからんばかりのいきおいで問い返した。バーテンは目を白黒させながらも肯いてみせた。

「あ、ああ。色や手触りからすると間違いないと思うよ。……お客さん、もしかして、あいつになんか盗られたりしたのかい？　いやにおっ怖ない顔して」

年若いヨナがまさか草髄紙の持ち主とも思えなかったのか、彼はそんなことを口にした。対し、全力で首肯するヨナ。

「そ、それ、その切符、あたしの――ていうか、うちの旦那様のものなんです！　それに……」

写真も入っているはずだ。ヨナの言葉に、バーテンは目を丸くしつつも得心したようだった。

「なるほどな、そういうことか。それで俺も納得がいったよ。けどなぁ……すまん、そのあとどこへ行ったかまではちょっと。そうと知ってりゃ足止めしてやったんだがなぁ」

とはいえ、車内にいることに疑いはないのだ。ヨナは膝にこすれそうなほど頭を下げると食堂車を出、ふたたび追跡を始めた。

あのばかが。勇ましく出て行ったところで、小娘一人だけでなにができるというのだ。

その場に残されたカシアンは、じきに我に返るとコンパートメントをあとにし、足音も荒々しく他車両へと乗り込んだ。そして単独で訊き込みを開始した。異様なまでに高圧的な雰囲気をまとった彼には逆らえる者もそうおらず、おおむね素直に答えてくれたものの、結果は捗々（はかばか）しいとは言えなかった。

次の車両に移ろうとし、ふと尿意を覚えたカシアンは、食堂車の近くにあるはずのトイレへ向かうことにした。考えてみれば丸十二時間もの長旅だというのに、食事さえろくに摂っていないのだ。すべては未明に会うまでの辛抱、そういくらおのれに言い聞かせようと、生理現象だけは堪えようがない。

未明に会うまでの。そんなことを思った瞬間、切符も、母の写真さえも脳裏から消え去り、意識はすべていとしい少女の面影でいっぱいになる。

……ミハル……お前はいま、なにをしてる？　やつは、オルグ・ジードは、ウェス・ハーシュ邸にはいないはずだ。大学府に通う以

上、お前に触れることもできまい。――ほんの少しでも、私を思い出してくれてはいないのだろうか。会いたい……ミハル、お前に会いたい。ミハル。ミハル、ミハル……

どん、と強い衝撃を背中に感じ、身体が傾いだ。煙草と酒の匂い。そして、罵声。

「なにぼうっと突っ立ってんだ、このタコ！　通れねぇだろうが、ったく！」

聞き覚えのある、粗野な声。カシアンの全身に衝撃が走った。彼は弾かれたように振り向いた。茶と金の混じり合った短髪。赤黒い肌。擦り切れた労務服。

――そこには、捜していた当の張本人が立っていた。

「げっ……てめぇ……」

スリを働いた相手であることに遅まきながら気づいたのか、男は慌てふためいた。踵を返そうとするも、ここで会ったが百年目、カシアンがそれを赦すはずもない。

「貴様……やっと見つけたぞ。さっきはよくもこの私にふざけた真似をしてくれたものだな。その報いを受ける覚悟はできているのだろうな、ええ？」

地底の底の底からせり上がってくるような怒声に、だが男は居直ったのか、挑発的なせりふを投げつけた。

「ああ？　なんの話だかさっぱりわかんねぇな。俺がいったいあんたになにしたっていうんだよ。言いがかりもたいがいにしてくれよな」

「なんだと……この期に及んでシラを切る気か？　いい度胸だな、この私に向かって。ロマドに着いたらどういう地獄が待っているか、わかった上でそう言っているのだろうな」

男は唾を吐きかける仕草をし、カシアンを睨みつけた。

「だから知らねぇっつってんだよ、てめぇのことなんざ。これ以上言いがかりつけるんなら、こっちにも考えが――」

そう吼えかけた時だ。甲高い少女の声が、男を遮って響き渡った。

「その腰に下げてる袋はなんなのよ！？　言いがかりなんて、どこまで面の皮が分厚いんだか。まったく、とんでもない悪党ね！」

予期せぬ罵倒に、男は顔をしかめて振り返った。そこにいたのはまだ十四、五の子どものような娘だ。彼はすぐに、その娘がコンパートメントで同席した二人組の片割れだと気づいた。彼女は――ヨナは怒りに肩を震わせ、さらに痛罵を浴びせてくる。

「スリの上に嘘つきなんて、救いようがないろくでなしだわ。あんたみたいな極道者、うちのおじいちゃんなら即勘当してるわよ。さあ、さっさとその袋を返しなさい！　それから謝って。旦那様に失礼を働いてごめんなさいって、ちゃんと謝ってよ！」

周囲の客は皆、興味津々で成り行きを見守っている。男の頭に血が昇った。これだけの人間の前で恥をかかされた――彼は衝動的に右腕を振り上げた。娘の口から、短い悲鳴が漏れる。

が、その拳は、目的を捕らえることなく終わった。

男は背後からものすごい力で襟首を引っ張られ、身体を反転させられた。間髪を入れず、今度は胸座を荒々しく捕まれる。足が宙に浮きかけた。眼前に、彼がこれまでの人生で見たこともないような、修羅の形相が迫っている。ざぁっと血の気が引き、口を動かそうにもまともに言葉が出てこない。

「貴様、ヨナに……私の侍女になにをする！」

押し殺した怒号とともに、カシアンは男の頬を強かに殴りつけた。鈍い音がし、ヨナは思わず目を瞑った。通路の上に崩れ落ちた男の腰元から、我に返った彼女は慌てて問題の革袋を抜き取った。腰を屈めたまま、素早く中身を検める。緊張に強張っていたその頬が、ようやく緩んだ。……無事だった。恒久手形も、クリスティアの写真も。

騒ぎを聞きつけた車掌が駆けつけたのは、それからすぐのことだ。

ロマド駅に停車するため、汽車のスピードはやんわりと落ちていった。

## 第二十二話　続々・おかしな二人旅（後書き）

場面転換が多すぎて読みづらい、とのご意見を受け、今回は汽車のシーンの描写にしぼってみました。書いてみてわかりましたが、この書き方、ものすごく集中力が要るんですね……（汗）　また、いつもより1，０００字程度字数が膨らんでます。二話にわけるべき？　でしょうか？

ご意見等ありましたら、お気軽にどうぞ（＾・＾）

## ◆閑話 - お前が欲しい -

ちゃぽん、と頼りない音を立てて、泡が弾けた。黄金に縁取られた、白螺石（サイジルム）のバスタブ。

――まさか、もう一度、ここでお湯を遣うことになるなんて。

未明の頬が赤らんだ。……一年ほど前のことだ。彼と出会い、無理やりこの屋敷に連れて来られ、軟禁された挙句、愛を打ち明けられた。あの時は――混乱するばかりで、彼のことをそんな風に見るなんてとても考えられなかった。おまけに、その後再会を果たしても、どういうわけだか彼の記憶は脳裏からすっぽりと抜け落ちていて、一時はまったく思い出すこともできなかったというのに。

なのに――今日、あたしは、彼の妻になる。

婚儀の前の禊を済ませ、イグノディアスの前で彼と二人、永遠の愛を誓う。ふと笑みが込み上げた。初めて彼とまともに言葉を交わした時の印象が、まざまざと蘇ったのだ。

不登校を続けている、クラスの問題児。そして自分はさしずめ、その問題児との折衝を担任から言いつけられた、学級委員……というところか。

恋愛感情じゃない。そうはっきりと感じた。それなのに、どうしてだろう。いったいいつの間に、自分は彼のことをそういう相手として意識するようになったんだろう。

桃の花びらのような唇が揺れ、愛する夫の名がするりとこぼれ落ちる。

「……カシアン」
それは不意打ちだった。
「呼んだか」
低い、どこまでも低い、けれど未明に対してだけは限りなくやさしいその声。驚きのあまり、派手な水音とともに振り返る未明。
「かっ……」
つややかなプラチナブロンド。灰色の混じった緑の瞳。ほんの少し冷たそうな、高潔さの漂う佇まい。
浴室の入り口に現れたのは、ウェス・ゴート家現当主、カシアン・レグノ・ウェス・ゴート卿。
未明の生涯の夫となる男だった。

突然の夫の姿に、未明は慌てて身体を覆い隠そうとし、水飛沫を上げた。そのさまに、カシアンは可笑しそうに目を細めている。……どきり、と未明の胸が震えた。
「あ、あ、あのっ」
「侍女たちなら下がらせてある。気を遣わなくてもいい」
白いバスローブを無造作に羽織ったカシアンは、そう言うなり大股に浴槽へと近寄ってきた。そして腰を屈め、未明の顔を覗き込むと、間髪入れず、唇を塞いだ。
「ん……ん……っ」
甘くとろけるような口づけに、全身の力が抜けていく。顔にかかる息が荒い。未明はそれでも懸命に抵抗した。
「だっ、だめ！　そういう……そういうことは、し、式の……あとで、って……」
「以前にもそう言って、逃げられてしまったからな。……お前はもう私の妻だ。抗う理由などはない、そうだろう。拒まないでくれ、ミハル、私を」

赤く濁った瞳で迫られ、次いで熱っぽく囁かれる。鳩尾の辺りがきゅん、と疼いた。……弱いのだ。彼のこの表情、この言葉に。

母性本能を刺激されるというのか――ともかく、彼女はいまや自覚していた。この男が好きなのだと。どうしようもなく溺れていると。

ジードの不在中に突然ウェス・ハーシュ邸を訪れたカシアンは、困惑する未明にもかまわず、情熱的に彼女に迫り続けた。初めは怯えて逃げようとさえしていた未明も、折に触れて知った彼の過去や、愛に飢えているその真情を次第に理解するようになり、やがて打ち解けて話をするようになった。友情が恋情に変わるのに、そう時間はかからなかった。

――愛してる。結婚してくれ、ミハル。

ストレートに告げられたプロポーズを、恥じらいながらもその場で受け入れた。……だって、この人は、あたしを――心底必要としてる。魚が水を欲しがるみたいに、それがなきゃ生きられないっていうくらいに。

微笑みを見ていると、嬉しいのに胸が痛い。なぜだかせつない。こんな感情はもしかしたらはじめてかもしれない。いとおしくて、泣けてくる。……カシアン、あなたが好き。

そう囁いて、口づけを交わした。そして、その日のうちにウェス・ハーシュ邸を出、新居となるウェス・ゴート家へとやってきたのだった。

バスタブから身体が浮いた。はっと我に返り、未明は慌てて奇声を上げた。

「ちょ……か、カシアン！　な、なに、あの……濡れてるし、あなたも濡れちゃうし」

腕の中の愛妻に、カシアンはやさしく囁いた。

「かまわん。どうせあとで湯を浴びるのだ、二人一緒にな。だが、

まずは……」

居室の中央に置かれた巨大な寝台の上に、未明をそっと横たえる。そしてその身体に跨り、バスローブをはだける。互いに一糸まとわぬ姿になったところで、彼は押し殺していた吐息を漏らした。

それから、言った。

「……お前が欲しい」

未明の瞳が潤んだ。夜空を宿す、摩訶不思議な黒い瞳。——お前にはじめて出会った時から、私はずっとその眼差しに魅了され続けてきたのだ。頬に手を触れ、彼は囁いた。

——名前を呼んでくれないか。もう一度。

＊　＊　＊

「……様、カシアン様！」

いやに素朴な、幼い声が聞こえた。未明……にしては音圧が高すぎる。彼女の声はもっと、小鳥が囀るような、可憐で、それでいて芯を感じさせる……カシアンははっと両目を見開いた。

「重いですったら！　もう、こっちに寄りかかるのやめてくださいよ！」

ガタン、ガタン、ガタン。無機質なレール音が鳴り響く。無遠慮にも身体を押しやられ、彼は一気に現実へと引き戻された。

……そう、ここは、ロマド市へ向かう定期便の車中。愛する未明を今度こそ手に入れるための、旅の途中である。

「お疲れでしょうから、寝ててくださいとは言いましたけど……ほんとに熟睡されてましたね。なんど呼んでも全然起きないんですも

ん。おまけにぶつぶつ寝言まで言ってるし」

脱出の手引きをしてくれた侍女、ヨナは、呆れたように眉をひそめて彼を見つめている。カシアンは――これ以上ないほどの仏頂面になり、彼女を思いきり睨みつけた。甘い香りも、やわらかな肌の感触も、すべては未明を恋い焦がれるあまりの幻か。

――お前に名を呼ばれて、どうしろというのだ、ええ！？

汽車は一路、カルマ駅を目指して走り続けていた。

## ◆閑話 - お前が欲しい - （後書き）

拍手御礼小話、カシアン篇です。
毎回のことですが、小話って挿入する場所に悩みますね。本編の流れをなるべくぶった斬らないようにしたいんですが、果たしてこの位置が相応しいのか……。

# 第二十三話　神降ろしの儀

ところ変わって、こちらはハーマッド島のイシオス神殿。
「白螺（はくら）の間」に集まった三人の若者が、それぞれどこか神妙な面持ちでソファに掛けている。
やがて焦れたように口を開いたのは、紅一点の姫巫女、レノラだった。
「なんども同じことを言わせないでくださいませ。わたくしはあなたに協力する気など、これっぽっちもありませんわ」
わかったらさっさと出て行け。取りつく島もないその態度に、ジードはしかし、粘り強く食い下がった。
「君が私を憎むのは当然だし、私のしたことについては、一生かけて償おうとも思っている。……だが、今度だけは――頼むから力を貸してくれないか。さっきも説明したとおり、どうしても君の、巫女としての能力が必要なんだ」
「厭です」
にべもなく言ってのけ、冷めたユニス茶を優雅に啜り込む。その様子に、傍観していたホルツェンは苦笑した。――彼女、明らかに面白がってやってるな。ジードのやつが必死になればなるほど逆効果ってことか。まったく、ドSのお姫様もいたもんだ。
その辺が、どういうわけか、彼女との付き合いが誰よりも長いはずのジードには見抜けないらしい。ホルツェンはわざとらしく咳払いをすると、おもむろに口を開いた。
「姫。こいつをからかうのが楽しいのはわかりますが、もうそのくらいでいいでしょう」
二人は同時にホルツェンを見た。図星を言い当てられたレノラの方は、うっすらと頬を染め、決まり悪そうにそっぽを向いている。

わけがわからないのはジードだ。
「レノラ？　君……」
「からかっているつもりなんてありませんわよ。わたくしは、本心から……」
「確かに、ジード個人の頼みであれば、断ろうがどうしようがあなたの自由です。けど、いまの話を聞く限りでは、どうもそういうわけでもなさそうだ。つまり――巫女としての仕事の依頼、みたいなもんなんでしょう？　ジードではなく、ノルド神官長の命だと思えば、受ける気にもなるんじゃないですか」
　正論を諭され、レノラは黙り込んだ。ジードは怪訝そうにホルツェンを一瞥した後、ソファを降り、レノラの前に片膝をついた。思いもしない行為に、さすがのレノラも慌てたようだった。
「レノラ。ノルド家の歴史の中でも生え抜きの巫女である君に、あらためて助力を願いたい。『神降ろしの儀』のために、君のその力を貸してくれ。――このとおりだ」
　レノラは困惑してそんな従兄の姿を見下ろした。ふと視線を感じて顔を上げると、すました顔のホルツェンと目が合った。悪戯っぽく片目を瞑られ、つい彼女は苦笑していた。

　九刻（夜十時）ちょうど、中央殿舎の「主神の間」に、ジードをはじめとする一同は集められた。神官たちによる「奉献の儀」や、神官長みずからが行う祝詞の献上など、重要な祭祀以外には用いられることのない部屋である。広さはそこそこあるものの、外光を入れない造りになっているため室内は常に暗く、ちょっとした異空間の様相を呈している。
「『主神の間』って名前なのに、神像の類が置いてあるわけじゃないんだな」
「ああ。私も昔は不思議だった。偶像は置かず、天におわすはずの

本物のイグノディアス神に語りかける、という意味があるらしい。もっとも、はっきりと理由を聞いたわけじゃないが」

ホルツェンのつぶやきに、ジードが答えた。

入り口から向かって北側に設えられた丸い祭壇が、姫巫女の座。すなわち、男性神の託宣をそこで受けるのである。

「相変わらず辛気臭いというか気が滅入るというか……ああ、もう、さっさと帰っていればよかった」

禊を終えて「主神の間」に現れたレノラが、小声でぼやいた。生来華やかなものが大好きな彼女にしてみれば、そもそも、こういった儀式にまつわるすべて、気に喰わないものだらけなのだ。その色が魂魄を表しているという白衣（※袈裟に似た法衣。巫女の正装）も、身清めの名の下に全身に叩かれるヒジリギクの灰も、なにもかもが。

「レノラ、本当に君には感謝してる。審議院入りの件も……なんといって詫びればいいかわからないが……」

神との直接的な交信を試みる『神降ろしの儀』は、本来神殿間ではタブーとされている。すなわち、優秀な巫女として将来を約束されていたはずのレノラの経歴に瑕をつける行為にほかならないのである。

「勘違いなさらないで。わたくしはあなたのために動くわけじゃありませんわ。それよりさっさと始めましょう、夜更かしは美容によくありませんもの」

ジードに声をかけられ、レノラはことさら素っ気ないふりを装ってみせた。名誉欲はある方だが、審議院に取り立てられることで万一俗界の楽しみを棄てなければならないというなら、むしろ彼女には苦痛でしかない。むろんその真意をわざわざ告げてやるほど、彼女はお人好しではなかったが。

レノラが――姫巫女が祭壇に収まったところで、四方を囲む燭台に火が燈される。扉が閉められ、香のような独特な匂いが室内に漂い始めた。

「よいかな、二人とも。これからしばらくの間は、なにがあろうと一言たりと喋ってはならぬぞ。……では、アーシア。入りなさい」

イシュレーの厳かな言葉とともに、『神降ろしの儀』が始まった。

はじめは、なんの変化も現れなかった。蝋燭の火はただ静かに燃え、時折頼りなく揺らいだ。すぐそばに座るレノラの呼気のためだろう。――やがて、ホルツェンはある「異常」に気づいた。

火が……揺れなくなった。……なぜ？　あれほど近くに、彼女がいるのに……いや、そもそも、あんな至近距離に火を置かれて、彼女は熱くないのか？

思わず隣に座るジードを見やったものの、この暗闇ではろくに表情も窺えない。咄嗟に開きかけた口を押さえようとした、その時だった。

――懐かしい……ここは……ここは、人界か……よもや、ふたたび来ることがあろうとは。

この場にいる四名の誰のものでもない、低い声が聞こえてきた。男の声だ。若いとも老いているともつかない、ゆったりと落ち着いた声音。イシュレー、ジード、ホルツェンは、いっせいに祭壇を見据えた。

紫水晶の双眸が大きく開かれている。が、そこに輝きはなく、焦点も合っていない。

巫女特有の現象――トランス状態に陥ったのだ。

初めて見る、いや体験するこの出来事に、ホルツェンはごくりと咽喉を鳴らした。レノラの唇がかすかに揺れ、あの不思議な声がま

たも空間を震わせた。

――我を召喚(よ)び出したのは……ほう、魂の依子(よりご)か。灰色の髪の男……なるほど、お前が。

「直々に語りかける無礼をお赦しください。あなたは……かつて、世界樹(ラ・ミュゴン)が最初に生み落としたという男性神であられましょうか」

イシュレーが問いかけた。温まった風がどこからともなく吹き、三人の頬をじっとりと撫でていく。

――いかにも。我が名はウルディノシス。真(まこと)の統治、そして魅了の神。世界樹によって生み出された、この世で最初の生命でもある。

「声」は淡々と答えた。ウルディノシス。――まるで聞いたこともないが、それが、自分に宿っているという神の名か。ジードは心中で、なんどもその名を反芻した。

そして、三人の前で、彼は、創世(ウルディノシス)とそれにまつわる秘された真実を語り始めたのである。

＊　＊　＊

神代(かみよ)の昔、世界は混沌に覆われていた。やがて大地が形作られ、そこには一本の大木が生えた。大陸のすべてに根を這わせたこの巨木は世界樹と呼ばれ、長い時を経て、いくつもの実をつけた。

実は弾け、最初の生命である我、ウルディノシスを生み落とし、その後も次々と新たな神を生み出していった。

最後に生まれたのは女神だった。緑の髪と白い肌、黒い瞳。美しかったが、なににも増して嫉妬深い性質の持ち主。――それが、後

に我の妻となる、イグノディアスだ。

魅了の神である我は、万物すべてを愛し、またすべてに愛された。そのため、イグノディアスとの諍いはつねに絶えることがなかった。

そんなある日、我は一人の娘に出会った。見たこともない黒い髪、イグノディアスよりもよほど美しい黒い瞳を持つ、異界よりの迷子（まよいご）……一目で魂を奪われた。我はその娘に夢中になった。イグノディアスのことなど、眼中から消え去るほどに。

逢瀬を重ね、昼も夜もなく愛し合う我らを、イグノディアスが見過ごすはずもなく……あれの手にかかり、娘は呆気なく殺された。それだけでは気が治まらなかったのか、あれは、その後も罪を犯し続けた。人間の男と通じ、我にはそれを隠し、時には妻ある身の男を無理やり相手から奪った。ほかの神々と見（まみ）える場では、おのれの矜持のために見栄を張り、その一方で、我を生み落とした世界樹の存在を堂々と呪った。それでも飽き足らず、最後にはとうとう、我を殺してこの身体を六つに裂き、大陸の各地に埋めたのだ。

世界樹は、その命を終える前に我を哀れと思し召したか、いずれ時が来たなら蘇ることもできるよう、六つの肉片にそれぞれ魂を分け与えてくれた。そうして我の魂はその地に生まれた人間に宿り、転生を繰り返すことになったのだ。

＊　＊　＊

そこまで聞いていたイシュレーは、大きく息を吐き出してから、ふたたび訊ねた。

「魅了の神、ウルディノシスよ。それでは、世に伝わる『天道の六罪（りくざい）』とは、人間の男が犯した罪ではなく……」

――どのように称され、伝えられているのかは知らぬ。が、あれはすべて、我が妻、イグノディアスの犯した罪にほかならない。我とあの異界の娘に対する憎悪のあまりに。

ジードは思わず立ち上がっていた。制しようとするホルツェンの腕を振り切り、叫ぶように問いかけた。

「ウルディノシス神よ、それならば、異界から来た娘というのは……あなたとかつて愛し合ったという、黒い髪と瞳の娘とは――」

脳裏に、含羞んだような未明の微笑が浮かんだ。一言も口を利くなという戒めを、完全に忘れ去っていた。

――イグノディアスはいままた、異界より依子となるべき娘を呼び込み、六人の人間に……我の魂を宿す六人の男たちに働きかけている。

おそらくは、我と恋に落ちた娘と似た特徴を持つ娘を、同じ異郷より気まぐれに呼びつけているのだろう。

その娘と触れ合った瞬間、魂を持つ男ならばすぐに心惹かれるだろう。

「ジード！　控えよ！」

鋭い牽制が飛んだ。イシュレーだ。彼は盲(めし)いた老人とも思えぬ気迫でジードを睨みつけた。その理由はすぐにわかった。

祭壇に座するレノラの様子がおかしい。トランス状態が解けたのか、全身から力が抜け出たかのように、白衣に包まれたその身体がぐにゃりと歪んだ。彼女はそのまま床へと崩れ落ちた。

同時に蝋燭の火が消え、「主神の間」は完全な闇と化した。

# 第二十四話　苦悶の夜

夜半過ぎ、ホルツェンはふと目を醒ました。むっくりと起き上がり、辺りを見回したところで、ここがどこだったかをようやく思い出す。

イシオス神殿に設えられた客人向けの簡易な寝室。『神降ろしの儀』がジードの問いかけによって強制終了させられたあと、大学府の寮生である二人を気遣った神官長が用意してくれた部屋だった。

彼は枕元の小卓に置かれた水差しを取ると、コップに注いで一気に呷った。無性に咽喉が渇いていた。

「……ジード？」

反対側に置かれたベッドの上で、親友は上半身を起こし、肘を膝に乗せ、思案げに両の手のひらを組んでいる。ホルツェンは苦笑混じりにため息をついた。

「あんまり考え込むなって。お前の悪いクセだぞ。独りで悩んだ挙句、どんどん物事を悪い方向へ持ってっちまうんだからな」

そう言って大きく伸びをすると、ホルツェンはふたたびベッドに倒れ込んだ。――疲れた。特になにをしたわけでもないが、今日という日はなんというかともかく……色々なことがあり過ぎた。

『神降ろしの儀』は一応の成功を見せ、おそらくはこの世の誰もが――むろんノルド神官長も含めて――知るはずのなかった真実が明らかになった。悪い意味ではないものの信仰心の薄いホルツェンはともかく、神官長やその家系に連なるジードにとって衝撃が大きかっただろうことは想像に難くない。

「『聖典（キリエル）』に載ってる天道の六罪（りくざい）が嘘っぱちなんてな。餓鬼の頃は月一で地元の神殿に連れてかれて、ひとつひとつ例を挙げられちゃあ説教喰らってたっつうのに。あれみんな無駄かよ」

くっ、とホルツェンはくぐもった笑みを漏らした。天道の六罪。美を鼻にかけ、驕心（きょうしん）に陥った人間の男が、女神の裁定の前に犯してきた罪を暴かれ、身体を六つに引き裂かれて殺されるという訓話である。

――人間の男と通じ、我にはそれを隠し、時には妻ある身の男を無理やり相手から奪った。ほかの神々と見（まみ）える場では、おのれの矜持のために見栄を張り、その一方で、我を生み落とした世界樹の存在を堂々と呪った。

「姦通、嘘、強奪、見栄、不孝。……それに、旦那を殺したっていう殺人か。もっとも、殺したのは厳密には人じゃあねぇけど」

それはあまりにショッキングな内容と言えた。全知全能、あらゆる徳の集合体であるはずの女神イグノディアス。その彼女が実際には嫉妬のあまりみずからの夫を手にかけていたなど、畏敬心の強い者なら卒倒ものの真実である。ホルツェンはふと不安になった。ノルド神官長は大丈夫なのだろうか？　ここキニッサの町は、世界樹伝説の発祥の地でもあり、そこを選んで建てられたイシオス神殿の持つ宗教的な意味合いは決して小さくないはずだ。敬虔な信者として、あの高齢な老人が――正確な年齢は知らないが――こんな事実に耐えられるのか。

「なぁジード、お前はどう……」

声をかけようとして、ホルツェンは顔をしかめた。彼の親友は、今度は膝の上に顔を埋め、しきりに苦悶している様子なのが見て取れた。……ある意味、あの老獪そうな神官長より、こっちの方が問題かもな。そう独りごちるとホルツェンは肩をすくめた。

当のジードの耳には、彼を気遣う親友の声など欠片も入っては来ない。彼に聞こえるのは、『神降ろしの儀』によってはじめてその存在を知ることになった世界最初の神、ウルディノシスの独白のみ。それも、ジードにとってもっとも重要なある部分だけが、延々とオ

ートリピートを繰り返していた。

――ある日、我は一人の娘に出会った。見たこともない黒い髪、イグノディアスよりもよほど美しい黒い瞳を持つ、異界よりの迷子（まよいご）……一目で魂を奪われた。我はその娘に夢中になった。

ウルディノシスが恋い焦がれたというその娘の特徴は、未明に――あの日、どこからともなくカルマ駅に現れたあの不思議な娘に、あまりにも合致する。そしてかの神はこうも続けた。

――イグノディアスはいままた、異界より依子（よりご）となるべき娘を呼び込み、我の魂を宿す六人の男たちに働きかけている。おそらくは、我と恋に落ちた娘と似た特徴を持つ娘を、同じ異郷より気まぐれに呼びつけているのだろう。

そして、その娘と触れ合った瞬間、魂を持つ男ならばすぐに心惹かれるだろう。

「ミハル……」

しぼり出すようにつぶやいていた。未明は、自分の想い人は、女神イグノディアスがなんらかの思惑の元にこの世界に遣わした娘なのだろうか。だがそうだとして、いったいなんのために？　……それに……だとしたら、自分が抱いているこの狂おしいほどの恋慕の情は、神によってあらかじめ仕組まれた感情に過ぎないのか。

――操られているだけなのか。私の恋心というものは。恋だと……初恋だと思っていた、それすら錯覚に過ぎなかったのか。

だからといって、胸に燃え盛る熱い炎が瞬時に消え去るわけでもない。いまだって、未明の名を口にするだけで血が沸き立つほど、彼女が好きだ。会いたい。抱きしめたい。その身も心も、いますぐ

自分のものにしたい。

次に感じたのは嫉妬と焦燥だった。ウルディノシスは「魂を持つ六人の男」が存在するはず、と言った。それはおそらく、審議院より認定の切符を受けたほかの男たちを――父ヴィネック、異母弟アドリオ、それにカシアンのことを指すのだろう。この時点ですでに四名。残りの二名が確定している可能性も否定できない。そしてその男たちはみな、未明に惹かれていることになる。父はともかくアドリオとカシアンについては疑う余地もない。

――あいつは、俺の母上と同じ国から来たんだ。だから兄上には、俺以上にミハルを理解することなんて絶対にできない。……ミハルさえ俺を望んでくれるなら、俺は彼女と一緒にどこへでも行く。

アドリオは折に触れてそう宣言していた。ウェス・ゴート邸に囚われた未明をともに救出しに行った時も、行方を絶った後（のち）なぜかエンザンテに現れた彼女を捜しに行った時も、彼は一歩も引かない気概を自分に見せつけたものだ。……年が近いくらいで彼女を知った気になるな。ミハルは私のものだ。それに同郷かどうかなんていまの段階ではわかるものか。いや、仮にそうだったとして、だからなんなのだ？　いいかアドリオ、お前にだけはなにがあろうとミハルは渡さない。これだけは胆に銘じておけ。なんどとなく言い渡したせりふだった。しかし……。

「あいつだけじゃない……カシアンもか……」

「あ？　なんか言ったか、ジード」

ホルツェンが訊ねたものの、ジードの耳には届かない。

カシアン・レグノ・ウェス・ゴート。大陸の歴史にその英名を刻み込む、ウェス・ゴート家の次期当主。そして――ジードの最大の恋敵。

……これまでは敢えて考えないようにしていた。やつが自邸にミ

ハルを軟禁していた時、いったい彼女になにをしたのか。そうだ――あの時、ウェス・ゴート本邸の客室に乗り込んだ時、どうして彼女は私の手を取ってくれなかったんだ？　差し出した手をまるで拒むかのように後退って、泣きながら首を横に振って……あれは、あの仕草は、いったいなにを意味していたのだろう。まさか……。

心臓がどくん、と厭な音を立てた。彼は無意識のうちに口元を押さえていた。

「まさか、カシアンは……やつはミハルを……」

「おい……おい、ジード、大丈夫か？　おい」

ホルツェンはベッドを飛び降り、親友のもとへ駆け寄った。ぼんやりとした灯りの中でも、ジードの顔色が尋常でないことだけははっきりとわかる。彼はジードの両肩を揺さぶった。

「なんて顔してんだよ、ジード！　おい、いったいどうしちまったんだよ？　なぁ、ジード！」

額ににじみ出した脂汗が、じわりと頬を伝っていく。堂々巡りを始めてしまった思考。こうなると、もう止めようがない。

ミハル、お前は……お前はカシアンになにをされた？　あの広い客室で、いったいなにをされたんだ。ああ、それに、本当にお前はイグノディアス神によってこの世界に呼び込まれた運命の娘なのか？　だとしたら……お前は私だけを選んではくれないのか。……いや……いや、そうじゃない。

彼は力なく首を振った。いっそ、こんなことなら、知らなければよかった。

……そんな相手を――未明を想い続けることに、果たして意味が……意味などあるのだろうか。

# 第二十五話　カシアンふたたび

あたしとアドリオ様が部屋を訪れた時、旦那様は南側に置かれた長椅子にひっくり返って、昼寝中だった。だからノックをしても返事がなかったのだけど、アドリオ様はこういう事態に慣れっこなのか、まったく躊躇せずにそのまま扉を開けてずかずかと中に入っていった。そのあとに慌ててあたしも続いた。

「……なに？　ジードに会いに、大学府に行くだって？　お前がか。どういう風の吹き回しだよ」

午睡を邪魔された旦那様は、明らかに不機嫌そうに眉をしかめている。ていうか……この人、初めて会った時も思ったけれど、こっちが首を傾げたくなるくらい若い。寝起きだっていうのに顔が浮腫(むく)んでもいなくて、色気たっぷりの整った容貌は、どう見ても三十二、三ってところだ――本当はプラス十歳強って事実をピアからこっそり聞かされ、あんぐり開いた口がしばらく閉じなかったのは内緒の話である。

「大学府じゃない、イシオス神殿だよ。それに行くのは俺だけじゃなくて、ミハルも一緒にだ」

アドリオ様は訂正しつつそう答えた。それで今度は、旦那様の視線があたしに突き刺さる。

「ミハルが？　お前と一緒に？　……理由はなんだ。二ヶ月もすりゃ、あいつは卒府して戻ってくるんだぞ。それを待てないわけがあるのか」

「ある。でも、いまは……まだ言えない」

「見送りの儀」がどれほどの信憑性を持つのかはまだ判別のしようがない。だから、とりあえず例の占い師の言う条件をそろえるまでは、本当のことはほかの人間には黙っていよう。それはアドリオ様の提案だった。

「――ジードのやつは、いま、神殿に行ってるのか」
こくりと肯くアドリオ様。旦那様は意味深な表情を浮かべてそんな彼を凝視している。やがて大きな欠伸をすると、首や肩を一通り鳴らし始めた。それからようやく口を開いた。
「わかった。……だが、ひとつ条件がある」
「条件？」
訝しげに訊き返すアドリオ様に、旦那様はにやりと笑みを見せた。
「俺もついてってやる。お前らに」
「――」
アドリオ様は絶句し、目を見開いて旦那様をまじまじと見つめている。驚いたのはあたしも同様だ。だって、これだけ大きなお家を束ねている人だもの、それなりにやることって多いんじゃないかと思うんだけど（実業家なんだろうか？　その辺は正直よくわからない）あたしたちに同行するなんて……大体そんなこと、パドマさんが赦してくれるだろうか。
「なにしに行くのか理由は訊かねぇがな。一応、ジードに約束したんだよ。お前とミハルが二人きりにならないよう見張っててやるってな。だから、まぁ、言ってみりゃお目付け役だ。うぜぇのはわかるが、辛抱するんだな」
旦那様は、なんだかすごく楽しそうな顔になって、にやにや笑っている。対照的に、アドリオ様の方は、ものすごく忌々しそうに唇を噛みしめ、旦那様をほとんど睨みつけている。
けれど、結局は折れたみたいだった。
「……好きにしてくれ。ただ、夕方には出発したいんだ。そうすれば明日の昼前には余裕で着けるだろうし」
「了解だ。すぐに旅支度と馬車の用意をさせよう。お前らもとっとと身支度を済ませてこい」
アドリオ様は肯くと、さっと踵を返した。あたしも自室に――つまりジード様の部屋に戻ろうとして、彼のあとを追った。ところがその直前、右腕をぐいっと引っ張られ、動きを封じられてしまった。

振り向くと、そこには、なんとも言えない表情の旦那様がいた。彼は誰にも聞き取れないくらいの小さな声でなにごとか囁いた。

それは人の名前みたいだった。旦那様はさらにこう続けた。

「……ヴィニーと呼んでみてくれないか」

「えっ？」

「一度でいい。あいつみたいに……俺を呼んでくれ」

熱っぽく見つめられ、あたしは途方に暮れた。なんのことを言っているんだろう？　ヴィニー？　それって、もしかして、旦那様の愛称？

「ミハル、なにしてるんだ。……父上？」

駆け寄ってきたアドリオ様が、あたしに手を伸ばそうとしてはっとその足を止めた。と思ったら、ものすごい力で引き寄せられ、彼の腕の中に抱きすくめられていた。……苦しい。いきなり、どうして……。

沈黙を破ったのは、旦那様のいつもと変わらない、飄々とした声だった。

「そうおっ怖ねぇ顔で睨むなって。血迷うつもりはねぇよ、いまさらな」

あたしはアドリオ様に抱きしめられたまま、引きずられるような格好で旦那様の部屋を出た。腕の力が少し緩んだのを見計らって、そっと彼の拘束を解く。その時、こんなつぶやきが聞こえてきた。

「あの切符……三人とも、ミハルに……いや、まさか、父上まで本気なんてことは……」

「アドリオ様……？」

すぐに我に返ったらしく、「なんでもない」と短く言うと、アドリオ様はふたたびあたしの背中に腕を回した。そしてやさしく抱きしめられる。耳元に熱い息がかかった。

しばらくの間、彼はあたしのことを離してはくれなかった。

交易都市ロマド。五大陸中でもオサイオン市に次ぐ発展を見せる、商業と歓楽の中心地。往来を行き交うたくさんの人々、広小路に建ち並ぶ煉瓦造りの建築群に、そうかと思えばぐっと軒先の低い色とりどりの商店。整然さと猥雑さの融け合う、不思議な魅力を感じさせる街だ。

「ああ……っ。やっと、やっと着きましたね、若君！」

聖山と称されるカルマ山（オルド・カルマ）の麓に造られた駅舎から、麦わらの帽子をかぶった赤毛の少女が姿を見せた。ヨナ・フォルス。往路となる汽車の中ではその利発さと勇敢さを乗客たちに見せつけた、年若い侍女である。

「ここに辿り着くことが目的なのではない。いいか、私はミハルに会うために――いや、彼女を取り戻すために来たのだ。でなければこんな街になど……」

ヨナの主君であるプラチナブロンドの美青年、カシアンは、その美しい緑灰色の瞳をことさら眇めて辺りを睥睨した。ここいら一帯はヴィネックの街と呼ばれる、ウェス・ハーシュ家のいわば直轄地のはずだ。本来なら、足を踏み入れることすら汚らわしい。

ヨナの方はなにを期待しているのか、頬を紅潮させ、祈りでも捧げるみたいにして両の手のひらを組んでいる。

「でも、若君って、このロマド市にある名門の学校に通ってらっしゃったんでしょ？　なんか、オサイオンより雑然としてるっていうか、人が多い感じしません？　あたし、生まれてこの方、他所の大陸に来たことってないんですけど、ここはすごくエネルギッシュでカラフルですね！　……ああ、あの人、きっとこの街で……こんな空気の中で育ったんだわ」

後半部分はカシアンの耳には入っていなかったようで、彼はあからさまに舌打ちした。

「大学府のことは二度と口にするな！　あんなところ、頼まれても復学などするものか。それに私にはもうその必要もないのだ。すで

に最高の栄誉を手に入れたのだからな」

恒久手形を示しさえすれば、未明はもはやこの自分、ウェス・ゴート卿の名を継ぐカシアンに逆らうことなどできまい。たとえ彼女を「囲って」いるのが、政敵ウェス・ハーシュ家の人間であろうとだ。

……そうだ。彼女を連れ出したなら、その足で臨時便を用意させよう。そして今日のうちに屋敷へ戻るのだ。……いや、それよりも、いったんキニッサの別邸に移ってもいい。どちらにしても、ミハルはもう私の手に落ちたも同然だ。記憶がない？　……かまうものか。ともに過ごすうちに思い出してくれればいい。そんなことより、私がいかに彼女を愛しているか、まずはそれを伝えるのだ。――たっぷりとな。

興奮に心臓がざわめいた。全身が燃え立つように熱くなる。もうすぐそこに彼女がいる。あと、ほんのわずかの辛抱だ。ごくりと咽喉を鳴らし、大股に歩き出す。駅舎のすぐ外に客待ちしている辻馬車を拾うと、短く行き先を告げる。ひどく身なりのいい――あの黒いローブは下車するや否や文字どおり脱ぎ捨てており、その下に着ている、金糸を織り込んだクリームベージュの外出着が、御者の目を特にも惹いたらしい――乗客の姿に気を良くしたのか、馬車はいやに迅速に走り出した。

ロモッカさんと、彼の助手でもある馬丁のおじさんがウェス・ハーシュ邸の玄関前に馬車を回してくれた時には、すでに日が暮れていた。肌に触れる風も、ここ数日の間にぐんと冷え込んだ気がする。どうやらこの国の夏は、日本よりよほど潔く過ぎ去ってしまうみたいだ。

「準備はできたのか、お前ら」
四頭立ての、これまで見た中ではもっとも豪華な装飾の施された馬車の客室には、すでにダークグリーンの外套をまとった旦那様が悠然と腰掛けていた。あたしも防寒対策として、この前聖山に登った時と同じ黒のマントを持っていくことにした。いまはともかく、夜中になったらきっと相当冷えるだろうから。
「ああ。旅と言ってもすぐに戻る予定だから、一応の着替え程度しか用意はしていないが」
アドリオ様の言葉に、旦那様も肯いた。
「いざとなりゃキニッサにはうちの別邸もあることだし、そうそう不便はないからな。……さて、そんじゃ出発するか」
アドリオ様は無言で肯き、奥の座席に座るよう、あたしを促した。その時である。
正門の方から、なんだか騒がしい声が――それも複数の――聞こえてきた。なんなんだろう？　こんな時間に、お客さんかな。そう思って、目を凝らす。夕闇の中、誰かが駆け寄ってくるのが見えた。このお家の門衛さんと、それに……男の人？　その後ろには赤いエプロンドレスを着た女の子もいる。その子はともかく、あの男の人って、どこかで……どこかで見たような……。
――あたしの全身が総毛立つのと、座席から身を乗り出した旦那様が素っ頓狂な声を上げたのは、ほぼ同時だった。
「なんだ？　あいつ、ゾデューの倅の……カシアンじゃねぇか」
ウェーブのかかったプラチナブロンドに、ジード様と同じくらいの長身。きれいだけれどどこか冷たそうにも見える、灰色混じりの緑色の瞳。
それは、マージュオン港の港湾局の一室で、ヴァリーたちの身柄と引き換えに自分のものになれとあたしに迫った、カシアンという男の人に違いなかった。

# 第二十六話　交錯

ウェス・ハーシュ本邸の正門前で馬車を飛び降り、制止しようとする門衛たちを振り切って駆け出していた。――この屋敷の中に、彼女が、未明がいる。かつて自分の腕の中で、やさしく名前を呼んでくれた天使が。

「ミハル……ミハル、ミハル！」

じきに一台の馬車が見えた。カシアンの目が大きく開かれた。

……いた。

ところどころこげ茶の混じった長い黒髪。小さく整った可愛らしい横顔。今日の彼女は、腰の後ろにリボンのついた、シンプルで上品なデザインの黄色のドレスをまとっている。ふんわり膨らんだ愛らしいパフスリーブは、マージュオン港の港湾局で二人きりになった時に着ていた麻のワンピースを彷彿とさせる。……そうだ。あの時、邪魔さえ入らなければ、いま頃は自分のものになっていたに違いない可愛い未明。カシアンの心の中に渦巻く偏愛の濁流が、この時とばかりに堰を切って外へとあふれ出した。

「ミハル……！」

名を呼ばれた少女の方は、心当たりがないのか、きょとんとした面持ちでこちらを見やった。だがじきに記憶が蘇ったらしく、みるみるその顔が青ざめていく。そんな反応さえ、カシアンにとっては胸が疼くほどにいとおしい。

しかし、またも――これでいったいなんど目になるのか、彼自身憶えてはいなかったが――二人を遮るようにして、「障壁」が立ちはだかった。褐色がかった特徴的な黒い瞳に、同じくつやのあるウェービーな黒髪。やや浅黒さの混じる肌。……こいつには二度ほど会ったことがある。確か宿敵オルグ・ジードの弟とかいう男だ。彼

は未明を後ろ手に庇いながら、敵意のこもる眼差しをカシアンに向けた。

「ウェス・ゴート家のカシアン……あの時の男か。よくものこのこ、ここに顔を出せたもんだな」

その両目に、憎しみの炎が燃え盛る。彼にはいくつもの借りがあるのだ。異母兄、ジードに対する殺人未遂、そしてなにより未明への数々の陵辱的な行為。拉致監禁の挙句、彼女の意思を無視して無理やり契りを結ぼうとしたり、卑怯な手を使ってその身体を自分のものにしようと企んだり、思い返しただけでも怒りに胸が滾る。彼は――アドリオは、苛立ちも顕わに二人の門衛を怒鳴りつけた。

「門番！　なにしてる。なんでこんなやつを中に入れたんだ。とっととつまみ出せ、俺とミハルの前から早く消し去ってくれ」

門衛たちは戸惑いながらも弱弱しい反論を口にした。

「し、しかしですね若君、こちらの方は……オサイオンの宰相、ウェス・ゴート卿に所縁の方なのでしょう？　そんなやんごとないお方を、そう無碍にあしらうわけには……」

アドリオが答える前に、カシアンの勝ち誇ったような声が飛んだ。

「そのとおりだ。いいか小僧、私にはもう誰も逆らえないのだ、父上でさえも。むろん貴様もな！　さあ、さっさとミハルを渡せ。彼女は私のものだ、なんども同じことを言わせるな。……ミハル、私のミハル、おいで……こっちへ来るんだ、本当は憶えているんだろう？　お前の夫だ……二人きりで、あの寝室で、あんなに睦み合ったではないか。お前の聞かせてくれた可愛い声が、まだ耳から離れないのだぞ？　……さあ、ミハル……」

まるきり嘘というわけではないものの、未明にしてみればまったく身に憶えのない話だ。が、言葉責めにも似たカシアンの一連のせりふに羞恥心を刺激されたのか、彼女は耳まで真っ赤になった顔を懸命に逸らしている。その態度がまた、カシアンの嗜虐性を否が応にも燃え立たせ、興奮を煽る。

「出まかせだ！　それ以上好き勝手言ったらただじゃすまないぞ、

誰がお前なんかにミハルを渡すもんか！」
　憤怒のために頬を紅潮させて怒鳴るアドリオ。対するカシアンも一歩も退こうとはしない。むしろ余裕の笑みさえ浮かべている。彼はゆっくりと告げた。
「ばかが、貴様の意思などは問題ではないのだ。いいか、私はな――」
「恒久手形を発行されたってのか？　ゾデューんとこの坊主（シグノ）」
　場違いなほどのんびりと間延びした声が、二人の言い争いに突如割って入った。振り向くまでもない。馬車の客室に収まっていたはずのヴィネックが、窓から顔を覗かせてカシアンに問いかけている。さすがのカシアンも毒気を抜かれたのか、固まったようにぽかんと口を開けた。
「よう、坊主。ちょっと見ない間にでかくなったもんだなぁ。俺のこと、憶えてるか？　まぁ、最後に会ったのはかれこれ十八年も前の話だがな」
　その顔には、なぜか慈しむような微笑すら浮かんでいる。咄嗟に反応ができず、ただ睫を瞬かせるカシアン。
「き……貴様、なぜ私のことを……」
「お前さんの親父とはそこそこ付き合いがあってね。しかし冷てぇなぁ、俺は生まれたばっかのお前さんにも会ってるってのに。お袋さんに似た、えらい可愛い子で……それがこうなっちまうとはな。クリスティアもさぞ驚いてるだろうなぁ」
　感慨深げに首を振るヴィネック。母の名を出され、カシアンはうろたえた。同時に憤りを覚え、言い返そうとして口を開いた時だ。
「若君は奥様にそっくりです！　生き写しって言ってもいいわ。そりゃ小さい頃どうだったかはあたしも知らないけど、少なくともこれだけは言えますっ」
　幼いが凛とした声がその場に響いた。カシアンの、主君の窮地を救うために奔走した勇敢な侍女、ヨナである。身の程をわきまえ、これまでは彼の背後に控えていたものの、ヴィネックの軽口につい

黙っていられなくなったのだろう。
彼女の姿に、今度はヴィネックが目を丸くした。
「お嬢ちゃん、カシアンの知り合いか？　従者にしちゃずいぶんと……」
若い。その上、ウェス・ゴート家で採用されている女官服を、彼女は着ていない。まとっている赤いエプロンドレスはどう見ても私服だ。縫製はしっかりしているものの、布地は明らかに安物で、かの屋敷で雇うような出自の娘が身に着けるのに相応しいとはあまり思えない。
だが、予想はあっさりと裏切られた。
「傍仕えの侍女で、ヨナと言います。とにかく、若君は、亡くなった奥様に瓜二つなんです！　若君が女の人だったら、さぞ美人だったに間違いないわ」
ヴィネックはふと眉をひそめた。
「……亡くなった？　クリスティアのことか？」
今度はヨナが訝しがる番だ。そもそもクリスティアの話をしているのだから、そうに決まっているではないか。それともウェス・ゴート卿の奥方が死んでいるという事実は、上流の人間なら周知のことだと思っていたが、そうではなかったのだろうか。
そう訊き返そうとした彼女に、思いもかけない人物が声をかけた。
「ヨナって、お前……お前、あの時の子か？　狼森（ヴォルムハルト）で俺たちと出会って、ウェス・ゴート邸に忍び込む手助けをしてくれた……」
ヨナの全身が硬直した。憶えていてくれたんだ。たったの数刻、一緒にいただけなのに。堪えようもなく、足が震え出す。……さっき、やっと追いついたカシアンの後ろに控えながらも、その存在にはずっと気づいていた。ウェス・ハーシュ家の次男坊、黒髪の青年、アドリオ。ようやく……ようやく会えた。運命の、奇蹟の再会。
のはずだったのに――当の相手、アドリオは、栄光号（ヘレーデ）の船上で会った可憐な娘の肩を、宝物でも護ろうとするかのように、しっかりと抱いていた。

彼がその娘を好いていることは、明白だった。

馬車も旅支度も整い、いざ出立、というその時だった。

いきなり、なんの前触れもなく、その人はあたしの目の前に現れた。

二度にも渡る人違いの挙句、めちゃくちゃな要求をあたしにしてきた、名門の御曹司だという男の人。そう、カシアンって名前だったっけ。

駆け寄ってきたいきおいそのままに抱きつかれそうになり、あたしは反射的に飛び退っていた。気づいたのはアドリオ様も同時だったみたいで、その人の前に素早く立ちふさがってくれたおかげで、触られなくて済んだのである。

……正直言って、二度と会いたくない相手だ。我ながらそれって当然だと思う。あたしがこの人になにをされたか考えれば。

でも、彼の勘違いはまだ延々と続いているみたいで、そのあと語り出した身に憶えのない――しかも微妙にエッチな内容に、顔が真っ赤になるのを止めることもできず、あたしはうつむいてしまった。……なんで？　人違いだってなんども言ってるのに、どうしてわかってくれないんだろう。

「とにかく、出て行け。このウェス・ハーシュ邸の敷地から……いやロマドから、ロドア大陸からとっとと出て行け。ミハルを汚そうとするやつは、この俺が赦さない」

あたしの肩をぎゅっと強く抱きながら、アドリオ様がそう言い棄てた。けれど、彼――カシアンの表情は、暗闇の中でもはっきりとわかるほど、不敵に輝いている。

「ふん。やはり、兄弟そろって愚か者なのだな。……いいか、私にはミハルを連れ帰る権限があるのだ。なぜなら」

「やっぱそうか。『天上の切符（イグノード）』の四人目の発行対象ってのは、お

前さんだったんだな。坊主」

窓枠から顔を覗かせた旦那様が、思案げにあごを撫でながら（これってジード様と同じくせだ）カシアンのせりふを遮った。……イグノード？　なにそれ？　なんのこと？

そんなあたしとは裏腹に、言われた相手、カシアンの方は、ものすごく驚いたみたいだった。弾かれたように飛び上がって、旦那様をキッと睨みつけている。

「……なぜそれを、貴様が……」

「中央にはそれなりにパイプがあるんでな。……ふうむ。そうなると、俺らを入れて、受け取った面子は四人ってとこか」

カシアンの、宝石みたいな変わった色の瞳が、さらに大きく見開かれた。

「四人……だと？　しかも……」

旦那様はけろっとした顔で肯いた。

「ああ。俺だろ、それにそこのアドリオ。あとジードももらってるらしいな。多分、ワンジオ翁辺りからな」

あたしにはなにがなんだかさっぱりな会話だけれど、その言葉は実のところ、相当の破壊力を持っていたらしい。カシアンは額を押さえ、お芝居さながらにぐらりとよろけた。彼の侍女だという赤毛の女の子が、慌ててその細身の身体を支えている。

「そんな……そんなばかな。それでは、ミハルは……」

「『天上の切符』の威光を盾に無理やり連れ帰るって真似はできねぇってことだ。まぁ、だが……こりゃあちょいと話が複雑になってきたみたいだなぁ。……なあ、坊主。お前さんさえその気なら、ひとつ提案があるんだがよ」

「……提案？　なんの……話だ」

虚ろな声がした。その彼に向かって、旦那様はあっけらかんと、とんでもないことを言い出したのである。

# 第二十七話　旅は道連れ？

とっぷりと暮れた夜の闇の中、あたしたち五人を載せた四頭立ての馬車は、ようやくごとごとと動き出した。

――そう。五人。

向かって前席に座っているのは、アドリオ様、その隣に旦那様。そしてなぜか、さっきの男の人、カシアン。反対側の奥の席に押し込まれたあたしと、彼の侍女だという可愛らしい女の子、ヨナ。

対角線上に、つまりカシアンからもっとも遠い位置に腰掛けるあたしは、そんなことまったく関係ないくらいにこっちをガン見してくる彼の視線に閉口し、顔を背けて真っ暗な車窓をひたすら眺めようとしていた。けれども、その試みははっきり言ってまったくの逆効果だった。填め込まれたガラス窓に、あたしをじっと見つめるカシアンの顔がくっきりと映っていて、あろうことか目が合ってしまったのだ。逸らそうとした時にはもう遅かった。

愛してる。お前を、心の底から。

唇がそう動くのを、あたしは読み取ってしまった。弾かれたように顔を伏せたものの、もうどうしたらいいのかわからない。あたしはただ黙ってうつむいた。――正直、泣きたくなってきた。

「どうした？　ミハル、気分でも悪いのか」

旦那様の暢気な声が恨めしい。……大体、元はと言えば、こんな事態になってしまったのは、みんなすべてこの人のせいなのである。

旦那様の唐突な提案というのは、こういう内容だった。
自分たちはこれから十五時間かけてキニッサへ向かう予定だ。だからカシアンの相手は悪いけどしていられない。もし、緊急の話があるのなら、一緒について来い。時間はたっぷりとあるのだから、旅の間に、ミハルに対してなんでも言いたいことを言えばいい。
あたしとアドリオ様が仰天したのは言うまでもない。特にアドリオ様は、旦那様につかみかからんばかりのいきおいで噛みつき、まくし立てた。
「冗談じゃない！　父上、自分がなにを言ってるのかわかってるのか！？　こいつが……この男がミハルになにをしたのか、父上だって忘れたわけじゃないだろう。それなのに、追い出すどころか一緒に来いだって！？　そんなこと、たとえ父上が赦したって俺が赦すもんか！」
吼えかかられた旦那様の方は、まったく意にも介していない様子だった。
「もちろん憶えてるがな。このお嬢ちゃんだけを連れてわざわざロマドまで来るくらいだ、こいつにはこいつで、色々と事情があんだろ。つうか、二人っきりって状況がよくねぇんだよ。馬車なら総勢五人だ、いくらこのカシアンでもそうそう滅多なことはできねぇって。なぁ、坊主（シグノ）」
にやりと声をかけられ、カシアンは憎らしいほど鷹揚に肯いた。
「むろんだ。この私が、次期ウェス・ゴート卿ともあろう者が、そんな無作法な真似をすると思うのか？　あらためて誓うまでもないが、同乗させるというならミハルには指一本触れまい。……私はただ、純粋に、彼女と話がしたいだけだ」
「そんな無作法な真似」、したでしょうが！　思いっきり！　あたしは悔しさに唇を噛んだ。いったいこの人、どういう御曹司なんだろう？　名家の跡取りなら親がいくらでも婚約者を決めてそうなのに、なんであたしなんかにここまで執着するのか、ほんと謎だ。
……と思った時、あたしの胸に、奇妙な痛みが走った。ただ、そ

れにはっきりと気づく前に、その痛みは跡形もなく消えてしまったのだけれど。カシアンのことも忘れ、あたしは独り、首をひねった。

ともかく、こういう交渉術にかけては旦那様は玄人そのもので、あたしと同い年のアドリオ様が言い負かせるはずもなく、あたしたちはなぜか五人で南端の町、キニッサを――正確には、そこから小舟で渡った先の島にあるというイシオス神殿を目指すことになってしまったのである。

ほとんど食事らしい食事を摂っていないというカシアンたちのために追加の携帯食を用意させたあと、あたしたちは馬車に乗り込んだ。時分時でもあった。客席に落ち着いてバスケットを広げると、タイミングよく、隣の女の子のお腹が鳴るのが聞こえた。

きょとんとして見ていると、彼女の顔はどんどん真っ赤になっていく。あたしは思わず言った。

「あの、これ、クリームと果物が挟んであるんですって。あなた、えっと……」

「……ヨナです。ヨナ・フォルス」

消え入りそうな声だった。あたしは慌てて続けた。

「ヨナちゃん、酸っぱいのは食べられる？　うちの――ていうか、ウェス・ハーシュ邸の果樹園で採れたシシェルの実が入ってるの。ほら、あれってけっこう独特な味でしょ」

シシェルというのは果樹の名前で、果実の見た目はブルーベリーにそっくりだ。ただし相当酸っぱいので、ジャムやシロップ漬けにするなど、普通は手を加えて食べられる場合が多い。でも、ウェス・ハーシュ家のコック長という人は、そういう小細工（？）がきらいな性質らしく、あたしはこの果物、生食でしかいまのところ味わったことがない。

女の子――ヨナは心底驚いたみたいに目を瞠っている。そのリア

クションに、むしろあたしの方が戸惑ってしまった。
「ど、どうかした？　あ、やっぱり酸っぱいのはだめだった？　えっとね、それなら」
「あの……ミハル様」
唐突に名前を呼ばれ、あたしは逆にたじろいだ。
「ミハル様って……いえ、ごめんなさい。なんでもないです。あ、酸っぱいの、全然大丈夫です！　ええと……じゃあ、いただいても……いいですか」
そう言うと彼女はぎこちなく笑った。あたしはなぜか、心底ほっとしていた。

差し出されたサンドイッチをおずおずとつまみながら、ヨナは隣に掛ける娘の横顔をまじまじと見つめた。
白く滑らかな肌に、独特ではあるが形良く整った目鼻立ち。そう、やや鼻が低めなのだ。だが鼻梁がすっと通っているせいもあり、むしろその特徴は、彼女の持つ愛らしさをよりいっそう引き出していると言っていい。長い睫に縁取られたアーモンド形の瞳は、思わず吸い込まれそうになるほど黒い。まるで天の川みたいだ、としばし見惚れてしまう。
ところどころにこげ茶が混じる長い髪は日焼けのあともなく、ということはやはり上流の出身なのだろう。そういえばいまちらりと見た手元にも傷ひとつ、痣ひとつない。ただそれにしては、かもし出す雰囲気が妙にフレンドリーというか、親しみやすいところが不思議ではあったが。
――この人が、ミハル様。若君と、そして多分……アドリオ様の想い人。

初対面ではない。夏の航海の折、「栄光号（ヘレーデ）」で乗り合わせた奇縁の相手でもある。だから顔そのものは見知っていたのだが、いまのヨナにはそんなことはどうでもよかった。ただ、胸がどうしようもなく痛んだ。心臓に爪を立てられたような気さえした。けれど、よくよく考えてみれば、例の事件の時だってアドリオとその兄は、ウェス・ゴート家に囚われている彼女を救出するために乗り込んできたのだろう。灰色の髪の男が言っていたではないか。自分たちにはやらなければならないことがある、と。

ヨナだってあの事件では被害者の一人なのだ。だが、そのことは、正直忘れてしまっていた。大陸きっての名家であるウェス・ゴート家に取り立てられることで、偶然知り合ったアドリオに――高家の出身らしい彼にもう一度だけでも会えないか、それを願って就いた侍女の職である。

……そして、その悲願は確かに達成された。だが……。

――誰がお前なんかにミハルを渡すもんか。ミハルを汚そうとするやつは、この俺が赦さない。

耳を塞ぎたい。いや、塞いだところで徒労に終わるだろう。あの声は、あのせりふは、自分が彼を忘れられる日が来るまで、きっと心の中から消えることはない。

「ヨナちゃん？　やっぱり、酸っぱすぎだった？」

よほど冴えない顔をしていたのだろうか。心配そうな声がぼんやりと聞こえてきた。ヨナは必死でおのれを叱咤し、弱弱しい笑みを見せた。

その時、はす向かいに座るアドリオと、目が合った。……心臓が激しく高鳴った。彼はどこかぎこちない微笑を浮かべ、ヨナを見ている。そう、未明ではなく、ヨナを。あまつさえアドリオは口を開き、彼女に話しかけてきたのである。

「……久しぶりだな、ヨナ。無事でよかった。あのあとお前がどう

なったか、ずっと気になっていたんだ。……あの時は、お前のおかげで本当に助かった。ずいぶん遅くなってしまったけど、礼を言うよ。ありがとう」

ヨナの頬が、いや耳までが真っ赤に染まった。彼女はものすごいきおいで首を左右に振った。

「そ、そんなこと……とんでもありませんっ！　あ、あたしなんて、なんの力にも……」

「けど、なんだってカシアンと一緒に……さっき侍女だって言ってたけど、どうしてまた？　お前だってあの時、ひどい目に遭わされた被害者に違いないじゃないか」

ヴィネックを挟んで、それまでずっと黙っていたカシアンの眉がぴくりと動いた。

「小僧。口の利き方に気をつけるんだな。我がウェス・ゴート家を貶めるような発言はこの私が赦さん。それにだ、そのヨナは侍女になるため、自ら志願して我が屋敷にやって来たのだぞ。それ以上浅薄な勘ぐりを続けようというなら、次期ウェス・ゴート卿として、私にも考えがある」

底冷えのする、恐ろしく寒々しい声色だったが、迎え撃つアドリオも負けてはいない。

「笑わせるな。考えだって？　いくらでも言ってやるさ、いいか、ヨナは、彼女は、お前の父親が企んだ儀式とやらの生贄にされかけたんだぞ！　殺されてたっておかしくはないんだ。それなのに、いわば自分を殺そうとしたような相手の家で働くことを自ら望んだだって？　出まかせにもほどがある」

「貴様……どうやら本当に命が要らないようだな。そんなに人生の幕引きを急いでいるのなら、私が手伝ってやろう。お望みならいますぐにでもな」

火花が散り、二人は同時に腰を浮かしかけた。その時だった。

間に挟まっていたウェス・ハーシュ家現当主、オルグ・ヴィネックが、不意に怒号を轟かせたのである。

「やかましい！　いい加減にしやがれ、餓鬼ども。……いいか、これからキニッサに到着するまで、もういっぺんでも言い争いなんかしてみろ。馬車から放り出されるだけじゃ済まねぇぞ！　いいな、アドリオ。それにカシアン、てめぇもだ。わかったらおとなしく飯でも喰って、じいっと座ってろ！」

車内は一瞬で静まり返った。アドリオも、カシアンさえも、この迫力の前にはぐうの音も出ない。さすがに年の功、というべきか――二人はなおも互いを睨みつつ、渋々口を噤んだ。

そんな中、未明だけは、ひとつの「真実」をこの場から読み取り、導き出していた。アドリオとカシアンがなにを言い争っていたのか、その仔細まではつかめなかったものの、いまのヨナの表情を見ていればこれだけはわかる。

……要するに、この可愛らしい少女はアドリオが好きなのだ、ということが。

# 第二十八話　停留所の風景

五大陸と呼ばれるこのゼーレンディア合陸連邦には、数種類の交通インフラがある。その代表格が、千キロ以上にも及ぶ海上を渡る大陸間鉄道。カシアンとそのお付き侍女のヨナが乗ってきたというのも、バルネディア大陸とここロドア大陸をつなぐ汽車であり、三ヶ月ごとに「上り」と「下り」の便が運行されているらしい。その技術って、実際のところ、相当なものだと思う。

なのに、である。内陸部のインフラ整備がここまで遅れているのはなんでなんだろう？　あたしはつくづく解せない思いで首を傾げた。一般の人たちが足としているのは、タクシー代わりの辻馬車、バス代わりの乗合馬車、それに転々と置かれた停留所区間を結ぶ、なんだか頼りない馬車鉄道だけ。この事情は五大陸のどこに行っても変わらない、と以前にアドリオ様が教えてくれた。

そんなわけで、日もすっかり昇り切った朝の一刻半（午前七時）、あたしたちを乗せた四頭立ての馬車は、キニッサにほど近い田舎町に建てられた馬車鉄道の停留所に――正確には、その周辺に用意されている専用の車停めに停車した。トイレ休憩を取るためだ。

「んーっ」

馬車から降りると、あたしは思いきり伸びをした。馬にしろ馬車にしろ、日本にいた頃にはまったく馴染みのない乗り物なので、正直、長時間乗ってるのってかなりきつい。いくら最高級のサスペンションを使っているといってもそこは馬車だ。クッションの効いた自動車とは違い、相当の振動がある。身体はもうガタガタで、あちこちが悲鳴を上げていた。

「あと、一刻半（三時間）ほどの辛抱ですって。……ミハル様、お疲れなら、あたし、タオルでも冷やしてきましょうか」

麦わら帽子をかぶり直したヨナにそう言われ、あたしは慌ててその申し出を断った。

「ううん、平気！　ありがとう。あの、ヨナちゃん」

「はい」

畏まって答える彼女にたじろぎつつ、あたしは言った。

「……その、ミハル様って呼び方なんだけど……『様』なんてつけなくていいよ。あたし、別に、お嬢様ってわけじゃないから」

「えっ？　でも――」

「事情があってウェス・ハーシュ家にお世話になってるだけで、ただの庶民なの。一般人なの。ド平民なのよ。……ほら、だって、会ったよね？　『栄光号（ヘレーデ）』で――ヴァリーの船で」

彼女は戸惑い気味に肯いた。やっぱりあの時の女の子だったんだ、とあたしは胸のうちでつぶやいていた。

エンザンテの浜辺に漂着し、寄る辺ない身の上のあたしの面倒を看てくれた親切な友達、ヴァリー。彼とともに過ごした船上での日々。その航海中、あたしたちはひょんなことから彼女、ヨナやあのカシアンと知り合うことになったのだった。

「あの時は、ほとんど話もできなかったけど……だから、わかるでしょ？　あたしはゼーレンディアの人間ですらないの。そんな風に敬語使う必要、ほんとにないから」

明るく言ったつもりだったのに、ヨナはなぜか考え込むような素振りを見せた。

「……そういえば、あの男の人……ヴァリーって、ミハル様のこと、俺の女房だって言ってましたよね。あれって……でも、ミハル様はいまはウェス・ハーシュ家にいるし……」

頬が赤くなった。船の中でヴァリーに迫られたことを、いまさらのように思い出してしまったからだ。

「や、それはね、その――違うの、誤解なの。ヴァリーは恩人だけど、大事な人だけど、別にその」

「本当か？　ミハル、それは」

唐突な声に、あたしは文字どおり飛び上がった。背後に立っていたのはアドリオ様だった。ひどく真剣な――ていうか、怒ったような顔をしてる。思わず口を噤むあたしの両肩をつかむと、彼はさらに詰め寄ってきた。

「いまの……エンザンテでお前が一緒に暮らしてたって男のことだな。そいつとはなにもなかったって以前言ってたけど、じゃあ女房ってのはどういうことなんだ？　まさか……まさか、ミハル、本当は……」

「違っ、違います！　されたのはキスだけで、それ以上のことは」

口走ってから呆然としてしまった。いや、確かにそのとおりなんだけど、普通――言う？

でも、アドリオ様はまだあたしを解放してはくれなかった。

「本当に？　……信じていいんだな。お前はまだ誰のものにもなっていないって」

そのあまりにも恥ずかしすぎるせりふにあたしは絶句した。はい、なんて答えられるはずもなく、ひたすら下を向き、時間が過ぎるのを待った。そのうち身体を引き寄せられ、背中に腕が回されるのを感じた。――今度こそ、あたしは慌てた。

「……よかった。ミハル、ごめん。でも……好きなんだ。自分でもどうしようもないくらい、お前が好きなんだ」

切ない吐息みたいな声。心臓が暴れ出す。告白って事態そのものに慣れてない一般女子のあたしには、何回言われようが、どうしたって免疫なんかできっこないのだ。

――ていうか、しまった！　あたしはアドリオ様の腕の中でもがいた。だって、いま、あたしたちのそばには……。

視界の端っこに、揺れる麦わら帽子がちらりと映る。それはだんだん遠ざかっていくみたいだった。無理もない、だって、彼女は、ヨナは……アドリオ様のことが、多分間違いなく、好きなんだから。

ところが、ここでアドリオ様は予想外の行動に出た。

「――ヨナ！　待ってくれ。お前に少し、話があるんだ」

あたしを抱きしめていた腕の力を抜くと、立ち去ろうとするヨナにすかさず声をかけたのである。

彼女はゆっくりと振り向いた。その青い両目は、少しだけ潤んできらきら光っていた。

「ミハル、お前は先に馬車に戻っていてくれ。カシアンなら心配しなくていい、父上が監視してるはずだ」

手短にそれだけ言うと、彼はヨナのもとへと駆けていった。その後ろ姿になぜかほっとしている自分を、あたしはぼんやり感じていた。

停留所の一隅に置かれたベンチに、アドリオはヨナを座らせた。そして自分も隣に掛ける。ヨナの小さな胸が、張り裂けんばかりに鼓動を打ち鳴らす。

――好きなんだ。自分でもどうしようもないくらい、お前が好きなんだ。

聞きたくはなかった。よりによって自分の目の前で、決定的な言葉など。……失恋確定だ。こぼれ落ちそうになる涙を必死で堪えながらその場を去ろうとした時、どういうわけか彼は、アドリオは自分を呼び止めた。

話がしたい。二人きりで。そう告げられ、無駄だと知りつつも高鳴る胸を抑え切れない。なんてばかなんだろう、こんな状況だっていうのに、それでもときめいてしまう恋心の愚かさに、ヨナはいっそ笑いたい気分だった。

気まずい沈黙を破り、アドリオはようやく口火を切った。

「その……どうしても納得がいかなくて。あいつ――カシアンのやつは、お前が自分でウェス・ゴート家のメイドになるのを志願した

って言ってただろう？　それは……本当のことなのか？　つまり、もし、なにか――困窮の挙句とか、そういう理由があるんだったら、その……あの時の礼も兼ねて、力になれないかと思ったんだが」

まるで思いもかけない内容に、ヨナはぽかんと口を開けた。アドリオはどうやら本気のようだ。

「ヨナ？」

ヨナは忍び笑いを漏らした。……やっぱり、この人って、本当にやさしい。

「……アドリオ様。そんなこと心配されてたんですか？　もう、とことん若君を――カシアン様のこときらってるんですね」

今度はアドリオが訝しがる番だ。ヨナの言わんとするところがわからない。まるで彼女がカシアンを憎からず思っているようにすら聞こえてしまう口ぶりではないか。

「だって、そりゃ当たり前じゃないか。お前は違うのか？　カシアンというより、ウェス・ゴートの家の人間にどんな目に遭わされたか、もう忘れたっていうのか」

カシアンの父である現ウェス・ゴート卿と、その腹心とも言える副神官ラルモ・オルヌが企てた、禁じられた秘儀による国家転覆のシナリオ。成功はしなかったものの、ヨナは生贄として命を奪われかけたのだ。その経験を憶えていながら自ら因縁の屋敷でのメイドの職を望むなど、アドリオにはこれっぽっちも理由がわからない。

だが当のヨナは、苦笑いすら浮かべながらアドリオを見つめている。その表情はとても十四、五の小娘のものとは思えないほど大人びていた。アドリオの胸が、かすかにざわめいた。

「忘れたわけじゃありません。でも……あたし、ウェス・ゴート家のメイドになって、どうしても叶えたいことがあったんです」

「叶えたいこと？」

鸚鵡返しに訊ねるアドリオだったが、ヨナはそれ以上答えてくれなかった。彼女は急に口調を変えた。

「それより、アドリオ様。若君のこと……あんまりきらわないであ

げてください」
　アドリオは言葉を失くして瞠目した。なにを言われたのか、一瞬理解できなかったためだ。
「――なんだって？」
　そんな彼に、ヨナはどこか思いつめたような顔つきになってこう続けた。
「若君は確かに、ちょっと変わってます。お屋敷にも若君のこと怖がってる人はいっぱいいるし、もしかしたら……もしかしたら旦那様だって、心のどこかでそんな風に思ってるのかもしれない。若君が普通じゃないって。だから、自由を奪って、あんなこと……」
　枷を填められ、部屋に閉じ込められていたカシアンの痛々しい姿を思い出し、ヨナは眉をひそめた。どんな理由があろうと、実の父親がやっていいことではない。あれが、あのやり方が、ウェス・ゴートという英名を誇る大貴族の当たり前の教育法だとでもいうのだろうか？
　そんなはずはない。正しいはずはない。力で抑え込もうとしたところで、それは反撥しか生み出しはしない。少なくともカシアンは、屋敷への放火も、その結果出るかもしれない死人さえも顧みないほどに追い詰められていた。
「……若君のお母様って、若君がまだ五歳かそれくらいの頃に亡くなってるんです。でも、お屋敷のどこにも、奥様の――クリスティア様のことを思い出させるようなものって置かれていないんです。肖像画一枚。バージェット様が言うには、死者を恋しがるのは軟弱な人間のすることで、少なくともウェス・ゴート家を継ぐカシアン様には相応しい行いじゃないから、旦那様が一切処分してしまったって話なんですけど」
　ぴくり、とアドリオの睫が揺れた。――母親を亡くしてる？　子どもの頃に？
「あたしは……そうは思えません。だって、大事な思い出だもの。大切にすることのどこがいけないの？　どうして肖像画の一枚すら

残っていないの？　思い出そうとしてもそれすら赦されないなんて……若君が可哀想過ぎます」

その結果が、誰一人として周りの人間を信用しなくなった、いまのカシアンなのか。

感極まったのか、ヨナは目元をぐいとこすった。

「でもね、写真、なぜか一枚だけあったんです。あたし若君に汽車の中で見せてもらって……そしたら、もう、この世にこんな美人がいるのっていうくらいきれいな人なんです、若君のお母様って！　いまの若君にほんとにそっくり。見たことはないけど、きっと若君が小さい頃だって――」

「ああ、瓜二つだったぜ。クリスティアはオサイオンでも有名な美女だったからな。あの堅物、ゾデューのやつが一目で恋に落ちて、半年間彼女のもとに通い詰めたってのはいまでも語り草だな」

アドリオとヨナは同時に振り向いた。唐突に割り込んできたその声は、どう聞いてもあの人物のものだ。

「ち、父上！？」

ベンチの端に寄りかかるようにして立っていたのは、果たして彼、オルグ・ヴィネックだった。

「悪い。ちょいとばかり興味深い話だったんで、つい立ち聞きしちまった」

悪びれもせずそう言ってのけるヴィネックに、アドリオはため息をついた。ヴィネックはベンチを軽々と跨ぐと、ヨナの隣にどっかりと腰を下ろす。

「クリスティアってのは低位の神官の家系の出で、身体もあまり丈夫じゃなかった。ウェス・ゴート家の嫁には相応しくないと、ゾデューの親父……前当主には散々結婚を反対されてたもんだ。それでもやつはあきらめず、しかも驚くべきことに、ついに彼女を口説き落としたんだ。いけ好かないやつだけどな、あの粘りだけはいまでも評価してる」

犬猿の仲だった元同級生。が、幸せに続くはずだった新婚生活は、

わずか三年ほどで終わりを告げた。
「ラルモ・オルヌが……あいつがウェス・ゴート邸に出入りするようになったせいだな。ゾデューは異様に疑り深くなっちまった。オルヌにしてみりゃ、ゾデューがぞっこん惚れてる女に始終つきまとわれるのは、あいつをてめぇの都合のいいように懐柔するのに邪魔だったんだろう。屋敷から追い出せりゃそれでよかったんだろうけどな」
ゾデューは変わり果てた。クリスティアを愛するが故に、その行動のすべてを信じられなくなったのである。痛々しい真実に、ヨナは悲痛な眼差しをヴィネックに向けた。
「それで……それで、奥様は……」
「――お嬢ちゃん、写真を見たって言ってただろう？　あれはな、俺がやったんだ。カシアンのやつに」
そんな彼女にヴィネックはただ微笑した。驚いたのはむしろアドリオの方だ。
「カシアンに？　本当なのか、父上」
「ああ。婚儀には俺も義理で招ばれてよ。そりゃあきれいだったぜ、あんな絵に描いたような美女、そうそう拝めるもんじゃねぇな。それもけばけばしいんじゃなく、なんていうか、こう……清楚なんだ。妖精みたいにな」
美女に――というより女性すべてに目がないヴィネックが、彼女の写真をその後も大事に持っていたというなら、それはあまりに得心のいく話だ。アドリオはふたたび嘆息した。
「で、もういっぺんだけカシアンに会う機会があったんで、そん時にやったんだよ。あんまりあの坊主が不憫だったんでなぁ」
ヨナは思わず訊ねていた。
「会う機会って……それは、つまり、奥様の葬儀の時に……？」
ヴィネックは一瞬詰まり、それから頭を掻いた。やがて口を開けようとした時だ。アドリオはふと眉を寄せた。

待てよ。――なんで父上がここにいるんだ？　俺は、さっきミハルを先に馬車に帰そうと……カシアンは父上が……父上が監視してるから、って……！

当然、この場には、カシアンの姿など影も形も見当たらない。アドリオは弾かれたように立ち上がり、ベンチを蹴って猛然と駆け出した。

じきに見えた四頭立ての馬車の中から、未明の甲高い悲鳴がはっきりと聞こえてきた。怒りのままに吼えるアドリオ。

「あの……野郎……っ！」

俊敏な獣を思わせる素早さで扉を開けると、アドリオは客室へと飛び込んだ。

ベンチに残されたヨナは呆気に取られ、一方のヴィネックはなにがおかしいのか、くっくっと背中を震わせている。

「……若君……ああ、もう……どうしてあの人、ああなのかしら。あれじゃあミハル様、怯えて当然だわ」

「あれがあいつのいいとこなんだろ？　欲しいもんのためには手段なんか選ばねぇ。……な、お嬢ちゃん」

意味深に言葉を振られ、ヨナはふと頬を赤くした。

## ◆閑話 - はじめての夜 - （前書き）

ｗｅｂ拍手御礼用小話、ジードの回想篇です。
未明と出逢ったばかりの頃のジードの胸の内について。短くて他愛もないお話ですが、よかったらどうぞ（＾＾♪

## ◆閑話 - はじめての夜 -

剥き出しの白い素肌に、見たこともないような漆黒の瞳。
子どものように泣き伏したかと思えば不思議なほどの妖艶さを時に放つ、つかみどころのなさ。
……はじめて出会った頃の彼女、未明は、そんな、自分にとってはまさに異邦人そのものと言っていい娘だった。

カルマ駅から衝動的に未明を連れ帰ったものの、言葉も通じないままでは、まともに生活することすらできない。
だからこそ彼女には基本的な教育が必要である――少なくとも支障なく生活できるレベルになるまでは。渋面のパドマや不安顔のレンドルスに、ジードはそう言い切った。そしてこうも続けた。
ミハルに関する一切の責任は、次期当主である私が負う。口出しは赦さない、と。
夕食後の半刻（一時間）を利用した語学学習。未明のためとは言いながら、それはいまやジードにとって欠かすことのできない愉しみのひとつとなっていた。この日も、当然のように自分のもとを訪れたジードを、未明はかすかに頬を赤らめて室内へと招じ入れた。たんなる謝意の表れに過ぎない。そうわかっていても彼の胸は高鳴った。
椅子を引いて腰を掛けるや、ジードはことさら穏やかな口調で「授業」を始めた。日常的な慣用句から始まり、もう少し複雑な構文に至るまで、聞き役の未明は熱心な生徒ぶりを見せた。呑み込みも早く、教わった事柄は一度で完璧に覚える。元々賢い娘なのだろう。

「あなたのことを知っている。主語はイド、目的語はテス。オルシスは動詞で、知るとかわかるとか、そんな意味を持った言葉だ。とりあえず、言ってごらん、ミハル」

「い……いど・おるしす・てす」

たどたどしく復唱し、おずおずとジードを見上げる未明。発音の正否を気にしてか、いかにも自信のなさそうな表情だ。

が、当のジードの意識を占めていたのは、もっぱら彼女の――未明の声だった。小鳥の囀り。か細く頼りなく、なんとも不安定で、とにかく愛らしい――彼の耳にはほとんどそれは心地の良い音楽のように響いた。

そしてなにより、自分を見つめる、ふたつの黒い瞳の瞬きが、心臓を甘く震わせる。

「ジード、さま……？」

未明の顔色が曇る。反応のない相手に、不安を募らせたらしい。或いは時間を割かせてしまっていることで、いまさらながら不興を買ったのではないか。そんな心配をしている様子すら見て取れた。ジードは我に返り、慌てて咳払いをした。

「ああ、それでいい。上手だ、ミハル」

微笑を浮かべてみせると、ようやく未明は安心したように肯いた。わけもなく胸が締めつけられ、いてもたってもいられず、ジードは思わず右手を彼女へと――彼女の頬へと伸ばした。

咄嗟に、わずかにだが、避けられたのがわかった。

たったそれだけのことだ。なのに込み上げる絶望にも似た苛立ち。濁流のようないきおいで襲い来る焦燥。口を開きかけていた。喘ぐようにして。

――私に触れられるのが厭なのか？　私のことがきらいなのか？

いまの段階で訊ねても詮無いことだ。彼はかろうじてそのせりふを堪え、額を押さえた。気まずい空気がただ淡々と流れていく。

「……今夜はこのくらいにしておこう。お休み、ミハル」

未明の視線を避けるようにして席を立ち、ドアを開けた時、小さな声が聞こえた。

「お、お休みなさい。あり、ありがとう……ございます、ジード様」

彼は一瞬だけ立ち止まった。が、振り返りはせず、そのまま部屋を出た。

ドアを閉めた途端、深く息を吐き出し、もたれかかるように背中を預け、天井を仰いでいた。

……もしもさっき、振り返ってしまっていたら。彼女の顔を見てしまったなら、自分は果たして、どういう行動に出ていただろうか。

どこからやってきたのか、素性も謎に包まれた不思議な娘、未明。それでもいい。どこの誰でもかまわない。——未明が欲しい。自分のものにしたい。

はっきりとそう思った、これがはじめての夜だった。

# 第二十九話　嵐の予感

ホルツェンの心配どおり、イシュレーは体調を崩し、臥せってしまっていた。『神降ろしの儀』によって得られたあまりに衝撃的な真実の副作用。「玉璧の間」から神妙な面持ちで出てきたシグルに、思わず彼は訊ねた。

「なぁ、あんた、ノディエさんだっけ。神官長殿、具合はどうなんだ？　相当……悪いのか？」

シグルはホルツェンに向き直ると、慇懃に頭を下げた。

「どうぞシグルとお呼びください、ライゾック様。……心労が重なっておられたようですが、いまは落ち着かれております。数日お休みになれば、おそらくはご快復されるかと」

そう言われ、ほっと安堵の表情を浮かべるホルツェン。シグルは微笑した。

「ライゾック様、それにオルグ・ジード様も、ご朝食の用意をいたしますので、どうぞ広間の方へお越しください。少し遅くなってしまいましたが……なにか、召し上がれないものなどは」

すでに三刻（午前十時）を回ろうとしていた。今日は週に一度設けられている「斎戒（さいかい）の日」、いわゆる祝日に当たる。慣例に沿って大学府は休みとなっているから、焦って寮に戻る必要もない。ホルツェンは気軽に肯いたが、横に立つ彼の親友の方は、いまだに浮かぬ顔をしてどこか空をじっと睨みつけている。ジードの懊悩は、どうやら夜が明けても尽きることはなかったらしい。

「ああ、ないない。なんでも喰えるし、ありがたくいただくよ。おい、ジード、とりあえず朝飯喰ってから寮に戻ろうぜ」

「……ああ」

呻くような返事が聞こえ、ホルツェンは嘆息して頭を掻いた。知

り合って四年になるが、彼が時に曝け出すこういった「弱点」は直る気配がない。

「そう考え込むなって言っただろ。つうか、そもそも、お前はなにをそこまで悩んでんだよ。あのウルディノシスって神様の生まれ変わりの一人で、だから認定の印として切符を受けた。それだけの話だろうが」

そろって廊下を歩きながらホルツェンは言った。実際、彼にしてみればいかにショッキングな事実だろうが、要はそういうことでしかない。ジードが悩み苦しんでいるその心情が、まるで理解できないのだ。

「お前はじきに卒府する。それも首席でな。そうしたら晴れてウェス・ハーシュ家を継いで、あのミハルって子と結婚すりゃいい。考えてもみろよ、ジード。この先、楽しいことしか待ってないんだぜ？　なのになんでそう暗い顔になるんだよ」

未明と結婚する。――そのフレーズは、ジードの苦悩のまさに核心を衝く言葉と言えた。

……そのとおりだ。卒府し、禁忌から自由になったならすぐに、彼女と契りを交わす。いまの自分にとっては、それが望みのすべてのはずだ。だが……。

廊下を抜け、食堂としても使われる大広間に入ろうとした時だった。俄(にわ)かに喧騒が伝わってきた。どうやら来客があったらしい。それも、察するに予期せぬ訪問者のようだ。じきに、顔色を変えたシグルがこちらへ走ってくるのがわかった。

キニッサ湾の船着場で、あたしたちは乗ってきた馬車を降りた。ここから舟で二十分ほど渡った先の小島に、問題の神殿が――ジー

ド様のいるイシオス神殿があるらしい。
　用意された小型舟艇は、よくテレビなんかで見る屋形船ぐらいの大きさだった。あたしたち五人が乗り込むと、舟は静かに湾を離れた。海はひどく凪いでいて、波ひとつ立たない。初秋の穏やかな日差しを照り返し、水面がきらきらと白く輝いている。
「そういえば……ウェス・ゴート邸で一度消息を絶ったあと、お前がふたたび現れた場所って、あの島にあるフェロキオンだったんだっけな」
　アドリオ様がつぶやいた。聞き覚えがあるようなないような曖昧な響きに、あたしは思わず訊き返した。
「フェロキオン？」
「古代遺構の名前だよ。地下三十数トーティ（約十メートル）の位置に埋もれていたっていう謎の遺跡だ。お前はそこに倒れていたのを、神殿の関係者に発見されて介抱されたんだ。いったいなぜ、そんな場所に……」
　そう言いかけたアドリオ様は、思い直したように首を振った。
「そんなことはどうでもいいか。お前は俺と一緒に、元いた国に戻るんだからな。……そうしたら、二度と離さない……ずっと一緒だ、ミハル」
　急にその声が熱を帯びた。アドリオ様は目を細めてあたしを見ている。あたしはたじろぎ、つい目を逸らしてしまった。
「小僧！　貴様、ミハルから、私の妻から離れろ！　それ以上彼女に触れたら命はないぞ、覚悟の上なのだろうな！？」
　同時に、少し離れたところから、カシアンの怒鳴り声が聞こえてきた。旦那様に両手を押さえつけられ、身動きを封じられている。それでもあたしは安心できない。だって、トイレ休憩に立ち寄った停留所では、彼に襲われかけて散々な目に遭ったんだから。間一髪で駆けつけてくれたアドリオ様のおかげで事なきを得たわけだけど。
　アドリオ様はそんなカシアンを冷たく一瞥すると、まるで見せつけるみたいにあたしを引き寄せ、腰に手を回した。赤くなって慌て

るあたしには一切かまわず、カシアンに向かって怒鳴り返す。
「誰がお前の妻だって？　寝言は寝ながら言うもんだぞ！　……ったく、父上を信用なんてするんじゃなかったな。総勢五人なら問題ないって？　大ありじゃないか」
その意見には心底同意だった。
やがて、舟はハーマッド島の船着場に到着した。あたしは、足下の方から緊張が忍び寄ってくるのをじわじわと感じていた。

……もうすぐジード様に会える。そうしたら……そうしたら、『見送り人』の役目を引き受けてくれるよう、お願いしなきゃ。でも――どうやって切り出そう？　それに、これがいちばんの問題だけど……承知してもらえるだろうか。

十分ほど歩いた先に、文字どおり純白の偉容を誇る大きな建物が――イシオス神殿が見えた。

「父上がここに？　いったい、なぜまた？　私はそんな連絡は一切受けていないぞ」
ジードは訝しげに眉尻を上げた。応じるシグルもまた、ひどく慌てている様子である。
「ええ、私どもも連絡はいただいておりません。ですが、なにか緊急のご用事とかで」
「緊急？　まさか……」
深夜の密儀に関する情報が早速父に渡ったのだろうか。しかし、彼の思考はそこで打ち切られた。声を潜めるようにしてシグルが告げた客人についての情報が原因だった。
「実は――お一人ではないのです。ご子息のアドリオ様を含め、同行の方たちが四名ほどおられまして」

「なんだと?」
ジードの足が止まった。シグルはさらに続けた。
「私にもまったく事情はわかりかねますが、ほかに、次期ウェス・ゴート卿、それに見覚えのございません赤毛の少女が一人。それから……例の……」
フェロキオン遺跡で見つけた異国の娘が。
ジードの形相が瞬時に変わった。
「……ミハルが? 彼女が父上と……いや、アドリオや――カシアンと一緒に来たと、そう言うのか!?」
胸座につかみかからんばかりのいきおいでシグルに迫るジード。
哀れなシグルはわずかに後退りながらも、懸命に肯いた。
その瞬間、ジードの中で抑えていたものが、音を立てて弾け飛んだ。彼は激情のままにシグルを突き飛ばし、正面玄関に向かって駆け出した。
見事な装飾の施された列柱廊をかいくぐり、外へ出たジードの目に飛び込んだのは、もっとも身近な恋敵である異母弟に肩を抱かれ、強張った表情で佇んでいる最愛の娘、未明の姿だった。
ジード様に会ったら、まず、いきなり来てしまったことを謝ろう。そして、二人きりにさせてもらってから本題を切り出して、誠意を込めてお願いするんだ。あんなに親切にしてくれた人に頼むことじゃないけど、でも、わかってもらわなきゃ。あたしは日本人で、この国で暮らすべき人間じゃないんだもの。
……そう思っていたあたしの全身が、この瞬間、硬直した。
ジード様は――大学府の制服なのか、真っ白な詰め襟みたいなものをぴっちりと着こなした彼は、その身体中、ゆらゆら揺れる青白

い光で覆われていた。既視感があった。確か以前、マージュオン港の港湾局にあたしを助けに来てくれた時も、そんな風にすごいことになっていた気がする。……でも、だけど、あの時といまは事情が違う。あたしの両脚が、小刻みに震え出した。

だって、彼、多分間違いなくあたしに怒ってる。

「あ……あの、じ、じ、ジードさ」

「……アドリオ。ミハルから離れろ。カシアン、貴様もだ。この私の視界から消えろ。たったいますぐにだ」

ま、と言い終わる前に、これまで聞いた中でももっとも恐ろしい声色で彼がそう言うのが聞こえた。あまりの空気に場が凍りつき、あたしはアドリオ様の手のひらが肩から離れるのをぼんやり感じていた。

そして次の瞬間には、ものすごいいきおいで腕を引っ張られた。抜けるんじゃないかと思うほどの力だった。

「おい、ジード！　なにもそこまでテンパるこたねぇだろ。ミハルはお前に話があって……」

見かねた旦那様が、助け舟を出そうとして怒鳴ってくれた。けれど――。

「話なら私にもあります。――ミハル、来い。来るんだ」

「い、痛っ」

抵抗したいわけじゃないけど、腕の痛みに耐えかねて、あたしは思わず身をよじった。すると彼は短く舌打ちし、間髪入れずにあたしを「荷物抱き」の恰好で抱え上げたのである。思いもかけない行為に、あたしはただただ呆然とされるままになっていた。

「父上。父上にも後ほど申し上げたいことがあります。……それでは」

それだけ言い残すと、ジード様はそのまま大股で歩き出した。

# 第三十話　衝突

どこだかもよくわからない部屋のドアが、ものすごい音を立てて開いた。と思った次の瞬間には、イエローベージュのカバーがかけられたベッドらしきものの上に、あたしは荷物のように転がされていた。くらくらする頭に、ドアが閉まるけたたましい音が追い討ちをかける。

「う……」

あたしはふらつきながら上体を起こそうとし――そのまま、脊髄反射で後退（あとずさ）りしていた。

仁王立ちしてあたしを睨みつけるジード様と、目が合ったからである。

……全身の血が、一気に引いていく。あの青白い炎が、まるであたしに噛みつこうとでもしてるみたいにしゅるんと動いた。牙を剥いた蛇。そんなイメージが脳裏に浮かんだ。

「――どういうことなんだ？　いったい」

「……あ、あの……」

彼は露骨に苛ついたみたいだった。拳でドアを殴りつけると、深く息を吐き出した。あたしはもう、恐怖のあまり縮み上がってしまい、情けないけれど言葉も出てこない。

「屋敷で……大学府に戻る前にお前に言ったことを憶えているか？」

……へっ？

唐突なせりふに、あたしはわけがわからず、でも「なんの話？」なんて訊ける雰囲気ではまったくなく、ただごくりと唾を飲み込んだ。すると彼はその長い脚をぐいと伸ばし、数歩でこちらに近づくと、ベッドの上に荒々しく腰を下ろした。そして続けた。相変わらず底冷えのするような恐ろしい声色で。

「私以外のすべての男を、お前の意識から消してくれ。絶対に、貞節を護ってくれ、と。……そう言わなかったか？　私は」

……言いました。

あたしは目だけでそう答えた。確かにジード様はそう言った。あれはインパクトのあるせりふだったので、よく憶えてる。いや、でも、だけど……ていうか貞節はちゃんと護ったし！

「ならなぜあいつらと一緒にいるんだ？　屋敷からここまで、半日以上もだぞ！　お前は……わかっていてわざとそうしたのか？　アドリオやカシアンがお前のことを好きだと知っていて、不貞を犯すために故意にそうしたのか、ミハル！」

そのあんまりな言い草にあたしは絶句した。いくらなんでもひどい。不貞を犯すために故意に？　……あり得ない。あり得なすぎ。

「なぜ黙ってるんだ。本当にそうなのか、ミハル、答えろ！」

両肩をつかまれ、乱暴に揺さぶられる。じわり、と目頭が熱くなった。無性に悔しさが込み上げ、でも必死で堪えた。

「あ、アドリオ様と一緒に来たのには、わ、わけが……」

「どういう理由があるというんだ。言ってみろ」

限界だった。両目の端から涙がこぼれ落ちた。それを見たジード様が、若干怯んだようだった。

「ミハル。お前は……」

彼はつぶやいた。怒りに任せていただけのそれまでとは違う、ひどく苦しそうな声だった。追い詰められているのはあたしのはずなのに、なぜかこの時、あたしは自分が彼をこれ以上なく傷つけたに違いないことを、直感的に悟ってしまった。

ジード様は、いったんあたしから視線を外し、しなやかな手のひらで額を拭うような仕草をした。そして、あたしの方を見ようとはせず、もう一度切り出した。

「……なぜカシアンが同行を？　あいつは自宅謹慎中で、オサイオ

ンのウェス・ゴート邸にいるはずじゃなかったのか」
へ？　そ、そうだったの？
あたしは、手の甲で目元をこすりながら、途切れ途切れに答えた。
「え、えーと、その……じ、ジード様に会いにいくために、馬車の用意をしていたんです。そしたら、そこへあの人が……カシアンが、お付きの女の子といきなり一緒に現れて。それで、旦那様が……話があるなら一緒に行けばいいって……」
ぴくり、とジード様の頬が引きつるのがわかった。あたしの脇の下を、厭な汗が伝い落ちていく。
「カシアン？　――名を呼び捨てにするほど親しくなったのか、あいつと」
あたしは慌てて首を横に振りまくった。敬称をつけて呼ぶのもなんだかヘンだし、別に深い意味なんてない。なのに……。
「ちっ、違います、そういうわけじゃなくて、ただ」
「ウェス・ゴート邸に囚われていた時の記憶がないと言っていたが、それは本当か？　すべて思い出したんじゃないのか、あの屋敷で、やつに……カシアンになにをされたのか。……だとしたら、いっそ教えてくれ。ミハル、お前はやつになにをされたんだ。あの部屋で……二人きりの部屋で……」
身に憶えのない話がまたも始まった。あたしは情けない顔で訴えた。
「そんなこと知りません。前にも言ったけれど、あの人にはヴァリーの船で会ったのが最初なんです。その前に会ったことなんかないです。それは、彼の人ちが」
「人違いなんかじゃない！　確かにお前なんだ、私たち皆が焦がれているのは！　カシアンも、アドリオも、それに私もだ、いいか、ミハル！　お前はある日いきなり私の目の前に現れて、その瞬間から私を虜にしてしまったんだ。皆そうだ、お前に出会ったせいで誰もがおかしくなってしまった……なのに、肝心のお前は……っ！」
ジード様は血走った目で叫んだ。あのまるで翡翠みたいな色の瞳

が、いまは見る影もなく濁ってしまっている。あたしは口を噤み、ベッドの上に後ろ手をつき、わずかに後退しようとして――抱きしめられた。肋(あばら)が軋みそうなほどの力を込められ、あまりの苦しさに悲鳴を上げた。

「いっ……痛、やっ、放し……放してぇっ」

「私を拒むのか？　ミハル、私を見ろ！　愛してると言ってくれ、やつらよりも――アドリオやカシアンよりも、この私だけを愛してると……頼むから……っ」

そのせりふはもう、最後の方はかすれて聞き取ることができなかった。ジード様はそれきり黙ってしまった。無言のままあたしを抱きしめる彼の肩が、少しだけ震えている。……あたしは、左胸の辺りに、とてつもなく太い杭でも打ち込まれたような錯覚を感じた。

ジード様、と恐る恐る呼びかけようとした時、彼の身体がふっとあたしから離れた。

楽になったはずなのに、どうしてだかさらに苦しみが増した気がした。

彼はのろのろとベッドから降りた。聞こえるか聞こえないかぐらいの声で、こうつぶやきながら。

「……お前はやはり、神の……イグノディアス神の思惑どおりに動かされているに過ぎないのか」

「えっ……ジード様？」

なんのことを言ってるんだろう？　訊き返すあたしには一瞥もくれず、彼はそのまま静かに部屋を出て行った。

連絡もなく、いきなり現れた婚約者は、恋敵に寄り添うようにして立っていた。

それを見た途端、意識の箍が外れた。荷物かなにかのように彼女を担ぎ上げ、昨夜寝室としてあてがわれた部屋に無理やり連れ込ん

だ。彼女の上げるか細い悲鳴も父の誡(いまし)めも耳には入らない。

――未明がもし本当にイグノディアス神によって異界より遣わされた娘であるなら、自分一人だけを愛して欲しいと願うのは無駄なことかもしれない。

おのれの心を責め苛むものが結局のところなんなのか、ジードはよく理解していた。

嫉妬なのだ。

ウルディノシスの魂を持って生まれたという六人の男全員が彼女に惹かれる。それはおそらく事実なのだろう。なぜなら自分だけでなく、アドリオもカシアンもすでに彼女に恋している。そして自分は――どれだけ未明に愛情を示そうと、「好意」以上のものを返してもらったことがない。

だがその一方で、胸のうちで燃え盛る恋の炎は、どんどんその激しさを増していく。この不条理な真実を突きつけられてもなお、枯れることを知らない泉のように滾々(こんこん)と湧き続け、止まる気配を一向に見せない恋心。

正直、苦しい、と思った。

仮にカシアンに蹂躙されていたとしても、そのこと自体が問題なのではない。自分だけを見てはくれない彼女の心が、ほんの一瞬でもほかの男に――たとえそれが力ずくの暴力行為の果てであったとしても――向けられ、囚われる。それが耐えられないのだ。

そして、これらすべてが神の意向だとするなら、抗っても無駄。未明は――どんなに願ったところで、自分「だけの」ものにはならない。

そこまで導き出した時、ジードは、腕の力を抜き、彼女を解放した。ベッドから降り、無意識のうちに神への、というより未明への

恨み言を口にしながら、部屋をあとにしたのだった。
「――ジード！　いったいどうしたんだ？　彼女、ここに来たんだって？」
　中庭に面する縁台に掛け、ぼんやりと頬杖をついていたジードの姿を見つけた親友がやってきた。明らかに様子のおかしいジードに対し、なかば声を荒げて問い詰める。
「おい、なにがあったんだよ。お前の親父さん――ウェス・ハーシュ卿とさっき会ったぞ、それに弟にも。昨夜の儀式のことで、前もって実家の方に連絡でもいってたのか」
　ジードは無反応だった。虚ろな眼差しであらぬ方角を眺め、時折なにごとかぶつぶつとつぶやいている。さすがのホルツェンも、本気で親友の精神状態を疑いたくなってきた。彼は腕を組み、大きく息をついて独りごちた。
「まったく……どうなってんだ、ほんとに。あのカシアンまで一緒に来るなんて、まさに青天の霹靂ってやつだな」
　ウェス・ハーシュ家にとって筆頭の政敵と目されるウェス・ゴート家の跡取り息子を、なぜまた馬車に同乗させてまでここへ連れてきたのか、事情を知らないホルツェンにしてみれば皆目謎である。
　そんな彼の言葉はすべてジードの耳を素通りしていった。その視線の果てに陽炎さながらに浮かぶのは、どれほど葛藤にまみれようが想いを断つことのできない最愛の娘の面影。ついさっきまで会っていた未明の幻にほかならない。

　恒久手形の真実を知りたくて行ったはずの「神降ろしの儀」。
　だがそれによってジードが得たのは、自分の恋がいかに前途多難かつ不毛なものであるかという、皮肉ともいえる事実だった。

# 第三十一話　ジードの結論

自らの居室である「玉璧の間」で床に就いたままの舅（イシュレー）を、到着早々、ヴィネックは見舞っていた。聞けば昨夜遅く、ここイシオス神殿の一室ではレノラも交え、イレギュラーな神事さえ行われていたらしい。時ならぬ緊張と集中を強いられ、そのために高齢のイシュレーは参ってしまったのだろう。ヴィネックはそう理解していた。

「失礼いたします」

扉が開き、姿を見せたのは茶の載った盆を手にしたシグルと、息子であるジードだった。あの青白い炎は消えていたものの、その表情は恐ろしく冴えない。隣に腰を下ろす彼を一瞥し、ヴィネックは眉をひそめた。

「ウェス・ハーシュ卿。ご朝食の用意も整っておりますが、まだこちらに……」

小卓の上に二客の茶碗を並べながら、シグルは遠慮がちに訊ねた。

「ああ、もうちょいあとでいただくよ。つうか……神官長殿の具合はどうなんだ？　それに、昨夜の神事ってやつだが、なんでまたそんな夜中にいきなり？　密儀でもない限り、大概は昼間のうちに――」

茶碗に手を伸ばしたヴィネックの表情がにわかに変わった。その時だった。

「……ヴィネックか。すまんの、心配をかけてしまって」

穏やかな声がした。三人は弾かれたように寝台を見やった。

老人の両の瞼がしっかりと開いていた――もっとも、その瞳は相変わらず白く濁ってはいたが。

「外してくれるか、シグル」

神官長の命に、彼の補佐は無言で従った。音もなく退出するのを

見届けたあと、イシュレーはふたたび口を開いた。
「さて……なにから話せばいいのかのう」
「神官長殿、いえ、義父上。お身体の具合は？　まだ無理はされない方が……」
いつになく強張った顔つきの娘婿に、イシュレーは微笑さえ浮かべてみせた。
「いやいや、そう案ぜずともよい。……そなたにも教えておかねばならぬことじゃ。それにジード。きっとお前には、訊ねたいことが山ほどあるのじゃろうて。違うかの」
水を向けられ、ジードは思わず、掛けていた椅子から身を乗り出した。
「……いいえ。そのとおりです、祖父上。しかし、その前に――」
父、ヴィネックにも、「神降ろしの儀」で知り得た事実については一通り語っておいた方がいい。なぜなら、彼もまた「天上の切符」の発行対象であり、ということは自分と同じく、男性神（ウルディノシス）の魂を持って生まれた男であるはずだからだ。
「わかっておる。まずはヴィネック、そなたに理解してもらわねばの。審議院によって秘せられ続けた創世の真実を」
その思いはイシュレーも同様だったようだ。数度咳き込みはしたが、その口調はいたく気丈なもので、普段の彼とほぼ変わらない。
人払いをさせた部屋の中、ウルディノシスの独白をなぞる老人の声だけが静かに響いた。消された神の存在。故意に歪め、伝えられた訓話、「天道の六罪」。「天上の切符」の持つ意味。そして――異界から召喚される、依坐の娘。そこまで聞かされたヴィネックは喘ぐようにつぶやいた。
「異界からの娘？　……それじゃ――それじゃあ、あいつは……ミサキは……」
十九年前、要塞島にどこからともなく現れたあの異国の娘は、やはり神がかった存在だったのか。
「そういうことになるのう。あの時、もしもそなたのように、あの

娘に惹かれる者がそろっておったなら――切符はその当時に発行されていたのじゃろうて。しかし、現実はそうは動かなんだ」

依坐としてこの世界に呼び寄せられた美沙紀は、真っ先にヴィネックによって見出された。彼は娘に魂を抜かれ、瞬時に恋に落ち、誰にも触れさせないよう、その身柄を世間から隠した。結果、美沙紀はヴィネック以外のほとんど誰とも接触することのないまま、二年も経たないうちにいずこへともなく行方を眩ました。

「しかし、なぜ……なぜ彼女は消えてしまったんです？　俺は本気だった、本気で彼女を愛してたんだ！　アドリオすら置いて、どうして……俺の前から……」

悲痛な声でヴィネックは叫んだ。飄々とした普段の彼からは想像もつかない姿だった。

ジードはそんな父を、ひどく複雑な想いで見つめていた。アドリオの実母である異国の女には、彼自身は一度も会ったことはない。その必要もなかったし、第一、ウェス・ハーシュ邸にはジードの母親が、正妻のイレイラがいた。美貌と知性を併せ持つ、絵に描いたような賢妻で、夫の不貞を知っていながら、慈母のごとき寛容さでそれを赦した。双子の弟妹を生み落としてすぐにイレイラが亡くなるまで、二人が言い争っているところを見た記憶すらない。そして上流の家庭では、家長がすなわち法律である。もっとも、イレイラの心中が実際にはどうだったのかは、いまとなっては知る由もないが。

だが、妻がいるのにも関わらず、依坐の娘に惹かれてしまった父の気持ちは痛いほどわかる。自分も同じ身の上だからだ。一目会ったその瞬間に恋に落ち、家も名誉も婚約者すらすべて眼中から消え去ってしまう、あの熱病にも似た激しい想い。それはこうして体験した者にしか実のところわからないだろう。

手のひらで顔を覆い絶句するヴィネックに、イシュレーは告げた。

「娘を呼び込んだのがイグノディアス神であるなら、その真意はかの神にしかわかるまい。そなたには酷なことでもあったが……」

「祖父上。それでは、今回はどうなのです？　イグノディアス神は、ふたたび彼女の夫であるウルディノシス神の生まれ変わりの男を捜そうとしている。すでに恒久手形も発行されている、この事実はなにを指すのですか」

かすかに苛立った声色でジードは訊ねた。

「――お前にもわかっておろう、ジード。魂を持つ六名の男が確定したのじゃ。あのミハルという娘に惹き寄せられた男たち……ウェス・ハーシュの血を引くお前たち三名を含む、生まれ変わりがの」

「しかし、その男たちを捜し出して、いったいイグノディアス神はなにをされようというのです。私たちが――私がウルディノシスの生まれ変わりの一人だったからといって、だからなんなのですか？」

苛立ちが頂点に達しようとしていた。ジードは椅子を蹴立てるようにして立ち上がった。イシュレーを見据え、苦悩に眉を歪め、彼はさらに続ける。

「……私が望むのはミハルだ。気が触れそうなほど、彼女が恋しい……なのに、ほかの五人の男たちが皆同じように彼女に惹かれる上、彼女は……ミハルは、私を――私だけを選んではくれないのだとしたら……私は正気ではいられない。彼女のあの眼差しが私以外の誰かに注がれるなど、私には耐えられない！」

アドリオに、カシアンに、父ヴィネックに。そして、どこの誰とも知らぬ二人の男たちに、あの、ほんの少しだけ含羞んだような微笑が、夜空を模して輝く瞳が向けられる。考えただけでも狂ってしまいそうな現実だった。その上、知ってしまった事実は、それだけに止まらない。

「祖父上、教えてください。この気持ちは――私が感じているこの感情、このすべての感情は、神の……イグノディアス神の為せるわざなのですか。私は……私はただ神に操られているだけなのですか！？」

未明への愛情も、狂おしいほどの嫉妬も、すべては人外の、神の思惑によって仕組まれたものなのか。感情的になり、声を荒げた息

子を諌める余裕はしかし、ヴィネックにすらなかった。
吐き出すように言い捨てたあと、ジードは口を噤み、肩を震わせた。やがて彼は父に向き直り、こう宣言したのである。

ジード様が部屋を出て行ってからしばらくの間、あたしはどうしようもなく、ただその場に佇んでいた。無性に後味が悪いというか、ひどいことをしてしまった気がして、やたらと落ち着かない。とにかく彼を追いかけて謝った方がいい。本気で怒っていたから、聞き入れてはくれないかもしれないけれど。
そう思ってドアを開け、歩き出そうとして途方に暮れた。……だって、どこをどう通ってこの部屋に来たかもわからないのに、きっとここに来慣れているに違いないジード様を独りで捜すなんて――。
そのジード様本人の声が聞こえてきたのは、ちょうどそんな時だった。
「ミハル」
階下から現れた彼は、ひどく静かな調子であたしを呼んだ。……いままでに聞いたこともないほど、それは憔悴し切った声だった。緑色の混じったきれいな青い瞳も、まだ濁ったままだ。
「さっきはすまなかった。……話があるんだ。すぐに済むから、ここで聞いてくれ」
廊下の突き当たりの、踊り場のような空間にあたしは連れて行かれた。その間中、ジード様はあたしを一度も見ようとしなかった。
――不穏な空気を感じ、あたしはうろたえた。……話？　あれだけキレてた彼が、打って変わってこんな穏やかな――っていうより、投げやりな調子で切り出す話って、それって……。
あたしは多分この時、縋るような眼差しで彼を見ていたに違いない。
対する彼は、ジード様は、あたしから目を逸らすようにして口を

開いた。
そして、言った。
「結婚を考え直したい。婚約は……なかったことにしてくれ」

# 第三十二話　フラれたの？

婚約は――なかったことにしてくれ。

それだけを告げると、ジード様は、言葉もなくその場に立ち尽くすあたしを置き去りに、さっさと階段を降りていってしまった。……あたしは、ばかみたいに口を開けっぱなしにして、彼の後ろ姿を見送った。

――自分がものすごいショックを受けているということに、やっと気づいた。

「な……なんで？」

無意識のうちに、そんなせりふが転がり出た。否応もなく、いまさっきのシーンが頭の中で再現される。

沈痛な面持ちのジード様に、話があると切り出され……この踊り場みたいなところに連れてこられて……そうして言われたんだ。結婚を考え直したい。婚約は、なかったことにしてくれ、って。

……つまり、えーと、要するに、あたし――フラれたの？

「ミハル！」

どこか遠いところから名前を呼ばれた。ぼんやり首をねじると、反対側の廊下の端っこから、アドリオ様が駆けてくるのが見えた。近寄ってきた彼の顔色がいきなり変わった。ひどく険のある、強張った表情をしている。なにかあったんだろうか。

「ミハル、どうした？　兄上と話してるのが見えたけど、なにか言われたのか」

両肩をつかまれ、真剣な顔で迫られた。……ああ、そうか。あた

しの様子がおかしいから、心配してくれているんだ。
「もしかして、断られたのか、例の話？　なら心配するな。俺も一緒に頼んでみるつもりだ。それでもだめだったら、最悪――」
アドリオ様の言葉が途切れた。彼はあたしの顔をまじまじと覗き込み、怪訝そうにこう問いかけてきた。
「ミハル？　兄上に、いったいなにを言われたんだ？　ひどい顔色だぞ、真っ青じゃないか」
「い……いえ、別に……」
婚約破棄された。その事実を、どうしてこの時口にできなかったのか。アドリオ様に伝えることに、なんで躊躇があったんだろう。
ともかくあたしは、なにを答えることもできず、うつむいて黙り込んだ。アドリオ様は険しい顔つきのまま、でもそれ以上は訊ねてこなかった。あたしのためにいろんな協力をしてくれている彼にこんなことで心配をかけるなんて、と死ぬほど心苦しかったけれど――身動きが取れない。なにをどうしたらいいのかわからない。「見送りの儀」のことでジード様に話を……見送り人を引き受けてくれるよう頼まなきゃ。そのためにはるばるここまで来たんだから。それが頭にあるのに、それなのに思考が働かないってどういうことなんだ。
アドリオ様に促され、階下へ向かいながらも、あたしはずっと考え続けていた。

……そもそもなんであたし、こんなに衝撃を感じてるんだろう、と。

三刻半（午前十一時）になる頃ようやく、大広間では皆がそろっての食事が始まろうとしていた。朝食と昼食を兼ねたブランチのような軽食で、焼きたてのエッカ（※ロドア風の硬いパン）に黒獅子（ベヌール）

の乳から作ったヨーグルトやチーズ、併設の果樹園で収穫された新鮮な果物など、心づくしのメニューが食卓には並んでいる。

給仕役の小姓たちと、彼らを取りまとめるシグルが、各々のカップに熱いローハン茶を注いで回る。そのうち、ひとつの空席の前でシグルの手が止まった。

そこは神官長イシュレーの隣席だった。つまりレノラの姿が見えないのだ。彼は戸惑い気味にジードを見やった。

「オルグ・ジード様、レノラ姫がおいでになっていないようですが……『白螺（はくら）の間』に声をおかけした方がよろしいでしょうか」

昨夜遅く行われたらしい神事については、補佐に過ぎないシグルは詳細を知らされてはいなかった。ジードは憂鬱そうに答えた。

「……いや。多分まだ疲れが取れないんだろう。休ませておいた方がいい、無理に起こせばまた機嫌を損ねてしまうだろうし」

それだけ言うと彼はむっつりと押し黙った。どこか気まずい空気が漂う中、食事の時間は黙々と過ぎた。

一通りの給仕を終えて脇に下がったシグルは、解せない思いで食卓をぐるりと見回した。席に着いているのは総勢七人。神殿が一度に迎える客人の数としては、決して多いという人数ではない。が、問題はその面子だった。

ノルド家の縁戚、ウェス・ハーシュ家の三人の男――現当主であるオルグ・ヴィネック、その息子で次期当主のオルグ・ジード、そして彼の異母弟アドリオはまだわかる。しかし、アドリオの隣に縮こまったようにうつむいて座っている黒髪の娘はどうだろう。シグルはふと眉をひそめた。

車寄せに到着した馬車から降りてきた五人の訪問者の中に、忘れもしないあの異国の娘の姿を認めた時は、心臓が止まるかと思った。レノラの歓心を買いたいあまりに息の根を止めようと企てた当の相手に間違いない。彼女だってまさか忘れてしまったはずはないだろう。あの体験も、そして――自分を手にかけようとした男の顔も。

だが、娘の方は、あらぬ方角を一心に見つめたまま、迎えに出た

自分には一瞥すらくれなかったのである。それでシグルは声をかけそびれてしまったのだ。いつかきちんと謝りたいと思い続けていたにも関わらず。

そして、彼女の存在以上に奇妙なのは、ヴィネックと向かい合って座るジードの二席隣の男と、そいつの連れらしい小柄な少女だ。男についての見識ぐらいはあった。だからこそ得心がいかなかったのだ。

――なぜここに、このイシオス神殿に、ウェス・ハーシュ家の筆頭の政敵とも言われるウェス・ゴート家の人間が？　しかも……この男は確か、ウェス・ゴート家の次期頭領。あの家の跡取り息子じゃないか。

円満と言い切るには難のある両家の関係者が、なぜ顔をつき合わせてキニッサくんだりまでやってきたのか。お下げ髪に麦藁帽子、赤いエプロンドレスという、およそこの場に似つかわしいとは思われない様子の年若い女の子まで連れて。

長大なテーブルから少し離れた場所に控えつつ、彼はさらに観察を続けた。どうやら全員、食欲旺盛とは言いがたい状態なのか、カゴに盛ったパンもフルーツもほとんど減らない。例の娘にいたっては、ローハン茶の入ったカップの取っ手を弄るばかりで、口に運ぼうともしないのだ。出迎えた時に比べても、明らかに顔色が悪い。体調がすぐれないのだろうか、そう思っていると、隣席のアドリオが彼女に声をかけるのが聞こえてきた。

「ミハル、どうした？　なにも食べてないじゃないか。どこか具合でも悪いのか」

娘は弱々しげに微笑しつつ、首を横に振っている。アドリオは心配そうにそんな彼女の顔を覗き込み、続けた。

「果物なら入るだろう。俺が剥いてやるから、ちょっと待ってろ」

銀色のフルーツ皿に手を伸ばそうとする彼を、娘は慌てたように

押し止める仕草をした。ところが彼女がなにか言うより早く、椅子を蹴立てる派手な音が部屋中に響き渡った。

プラチナブロンドの長髪に、整ってはいるが酷薄そうな顔立ちのあの男、次期ウェス・ゴート卿、カシアンだ。そして、もう一人。

「おい、ジード。どうしたんだよ、いきなり」

咎めるような学友の声を振り払い、席を離れたのは誰あろうオルグ・ジードだった。彼は射抜くような眼差しで誰かを――いや、異母弟であるアドリオを睨みつけている。それはカシアンも同様で、その形の良い額には、怒りのあまりかくっきりと青筋が浮かび上がっていた。鬼気迫る表情に、見ているシグルも小姓たちも、いっせいに身を縮めた。

「小僧……それ以上ミハルに、私の妻に近づいたらどうなるかわかっているのだろうな？　さっさと彼女から離れろ！　ミハル、おいで。私のそばに来るんだ、さあ」

迎え撃つアドリオの方も、爛々と燃える瞳で、負けじとカシアンをまっすぐに見据えた。

「お前の方こそ、今度ミハルを妻だなんて呼んでみろ。この俺が赦さないからな、よく憶えておけよ」

そのせりふを聞くなり、カシアンは激昂も露わに大股に歩き出した。二人を仲裁しようとしてか、ジードの父であるオルグ・ヴィネックが、いかにも面倒そうに顔をしかめながらも立ち上がる。不穏な空気がその場を満たしていく。

そんな中、なにを思ったのか、娘は椅子を降りると小走りに駆け出した。ひどく焦ったような表情がその小さな顔には浮かんでいる。彼女は近づいてくるカシアンを目がけて――ではなく、そのそばをするりとすり抜け、入り口の扉に向かって走った。いままさに部屋を退出しようとしているジードに向かって。

「ジード様っ」

すがるような声が聞こえてきた。……だが、当のジードの方は、なぜか歩みを止めようとはしない。彼は両開きになっている扉の、

片側の取っ手を軽くつかむと、そのまま大広間から出ていった。一度たりと娘を振り返ることもなく。

娘はそれでもあきらめず、彼を追おうとして自分も取っ手をつかんだ。扉を押しやり、そして立ちすくんだ。

開け放った扉の向こう側には、ジードの元許婚、レノラが立っていた。

# 第三十三話　混迷

どうしてあたしはこの時、彼を追いかけていたんだろう。
捕まえて、いったいなにを言うつもりだったんだろう。
不機嫌そうに大広間を出ていくジード様を見た瞬間、あたしは真っ白な頭のまま駆け出していた。あたしをしきりに気遣ってくれるアドリオ様と、あの怖い男の人――カシアンが、いまにもつかみ合いの喧嘩を始めようかっていう不穏な空気の中で。
ジード様、と呼びかけても、振り向いてすらくれない。くるぶしにまとわりつくスカートの裾が邪魔で、こけそうになりながらもあたしは必死で追いすがった。目の前で冷たく閉まった扉を、躊躇なく開けた。

そこで、あたしの足は止まってしまった。

腰まで流れる、純金みたいな髪。白磁めいた肌。そして……一度見たら忘れられない、紫水晶にそっくりの大きな瞳。
あの人だ。
なんとかっていう遺跡の近くで会った、あのお姫様。――そうだ。名前は、確か……。
「レノラ。体調がすぐれないのかと思っていたが、もういいのか」
ジード様の穏やかな声がした。彼はその女の人、そう、レノラ姫ってあの時名乗った――その人の腰に手を回し、気遣わしげに問いかけている。すぐそばに佇むあたしのことなんて、まるで目にも入っていないと言わんばかりに。
「まぁ、ジード。白々しい態度ですことね。あなたの口からいまさらそんなせりふを聞くなんて、思ってもみませんでしたわ」

彼女はその美貌を裏切らないたおやかな声音でそう言うと、あたしをちらりと見やった。びくり、と身体がすくんだ。でも、ジード様の方は、相変わらずあたしを見ようとはしない。その代わりに苦笑いを浮かべている。

「私のために無理をさせてしまってすまない。君が望むことがあれば、なんでもするつもりだ。遠慮なく言ってくれ」

親しみに満ちた笑顔だった。……あたしは、ここに着いてから、一度だってジード様のそんな表情を見たことがない。

女の人、レノラ姫は、つん、と細いあごを突き出してみせた。

「もちろん、あなたにはこれから、厭と言うほど償いをしていただくつもりですけれど。……とりあえず、わたくしこの方にお話がありますの。外していただけますかしら」

そう言われ、ジード様ははじめてあたしに視線を向けた。ただ、それはほんの一瞬のことだった。彼は短く肯くなり、そのままレノラ姫のそばから離れた。……もちろん、あたしからも。

「じ、ジード様」

消え入るような情けない声。咽喉の奥になにかがつかえてるみたいだ。どんどん小さくなっていく彼の後ろ姿を、あたしは結局追えないまま、その場に取り残された。

そして、レノラ姫の信じられない一言が、次の瞬間、あたしを現実に引き戻した。

「あなた、生きてらしたんですのね。悪運の強い方ですこと」

ジードの気配がなくなるなり、レノラは目の前の小柄な娘に向き直り、そう言い放った。口を閉じたあと、しまった、とは思ったものの、覆水が盆に返ることはない。娘が硬直するのがありありと感じられた。

停滞する空気を打ち破ったのは、思わぬ救いの主だった。

「姫。そういう言い方がトラブルの元だって、ご自分でわかってんでしょう」

いつの間にか開いていた大広間の扉。その入り口には、呆れたように腕を組んだあの青年、ホルツェンが、軽いため息をつきながら立っている。レノラの頬がさっと赤らんだ。

「し、失礼な！　わたくしは、ただ」

「きちんと彼女に謝る。筋をとおしてね。そう約束したはずですが」

諭すような口調に、レノラは黙り込んだ。ホルツェンはふたたび嘆息し、次いで苦笑した。まったく、手のかかるお姫様だ。

「お嬢さん（フロンジーネ）。俺のことは憶えておいでですか？　ウェス・ハーシュ邸と、それに大学府でもお会いしているんですが」

腰を屈めて娘に挨拶するホルツェン。そうしながらも、彼はまじまじとこの変わった毛色の少女を観察した。

カシアンに危うく陵辱されそうになっていた現場に踏み込んだ時に会ったきりだが、可憐さは当時とまるで同じだ。細い線、どこか頼りなげな表情、幼くも愛らしい顔立ち。連邦ではめずらしい、ところどころこげ茶の混じった黒檀のような髪。同じく漆黒の夜空を思わせる、大きな瞳。ホルツェン自身の好みのタイプではないものの、魅力的な娘であることには違いない。

――そういや、ミハルって名前（ファーストネーム）は聞いてるけど、どういう出自なんだ？　どこかの有力貴族に所縁の娘なのか？　ジードのやつ、この子のことはほとんどなにも教えてくれないからな。

不躾とも言える視線に相手はいささか怯んだようで、おどおどと首を横に振っている。

「ご……ごめんなさい、あの……」

警戒させてしまったことに気づき、ホルツェンはそつなく笑ってみせた。

「憶えてない？　いや、いいんです。俺はジードの友人で、名前は」

「ミハル！　あなた、まさかわたくしのことは忘れたわけじゃないですわよね？　フェロキオン遺跡に倒れていたところを介抱したシグルの家で会った、レノラですわ。アーシア・レノラ・リン・ノルド！　憶えてらっしゃるでしょ」

ホルツェンを突き飛ばすようにして強引に割って入るレノラ。彼がこの娘に、未明に笑いかけているさまが、なぜだか無性に腹立たしく感じられたのだ。が、そのせりふに、未明の顔がさっと強張った。

「……シグル、さんって――あ、あたしを……舟に乗せて……」

殺されかけた恐怖が蘇ったのか、彼女の小さな肩が小刻みに震え出した。さすがのレノラも我に返り、口を噤んでしまう。ここにいたって、ようやく自分の仕出かした事柄の大きさが実感できたのである。

だが、そばに立つホルツェンがすかさず抱いてくれたのは、未明のではなくレノラの肩だった。場違いにも胸が高鳴るのがわかり、レノラは思わず息を呑んだ。

「話は聞いてます。――フロンジーネ・ミハル、いや、ミハルと呼んでもかまいませんか」

未明はかすかに肯いた。ホルツェンは微笑を絶やさずに続けた。

「ここにいるレノラ姫が、あなたをそういう危険な目に遭わせるよう仕組んだ張本人です。ただ――彼女にものっぴきならない事情はあったんですがね。ですが、そんなのは言い訳に過ぎない。あなたにしてみりゃ、同じように島流しにでもしてやりたいところでしょう。ま、俺はそこまでは関知しませんが……」

咳払いをしてから、彼は言った。

「本人が、あなたに謝りたいそうなんです。せめて謝罪だけでも聞いてやってもらえませんか？　赦すか赦さないかはあなたの自由ですから」

「……」

未明の表情は晴れない。それはそうだろう、自分を殺そうという

姦計を仕掛けた当の相手を目の前にして、笑みを浮かべられる方がどうかしている。謝辞など聞きたくもない、そう言い出すことだって充分に考えられる。実際、彼女は、ホルツェンからもレノラからも視線を外したまま、ずっと黙りこくっている。……こりゃあ時期尚早だったか、とホルツェンが思い始めた時だった。

「ミハル！　私の妻、私の天使！　こんな汚らわしい場所になど誰がいてやるものか。さあ、オサイオンに、ウェス・ゴート邸に戻るぞ、来い！」

荒々しい足音ともに現れたのは、ホルツェンもよく知るかの男、カシアンだった。この場の空気などまるで無視して乗り込んできたその図太さに、ホルツェンはいっそ感嘆していた。……実際、こいつくらい神経が頑丈にできてりゃ、ジードのやつももう少しラクに生きれそうなのにな。

カシアンはそのいきおいのまま、未明の細い手首をつかんだ。未明はみるみる青ざめ、彼の手を振りほどこうと必死でもがいている。

「や、やめて、離して、やだっ」

「来いと言ってるんだ、お前は私の妻だぞ！　屋敷で契りを交わしたことを思い出させてやる、さあ、来るんだ、ミハル！」

ホルツェンは面喰らった。カシアンが未明を大学府から拉致した一連の事件については聞き及んではいるものの、彼の行為はジードに対するあてつけに過ぎなかったのではないのか？　だが、逆上して未明を連れ去ろうとするカシアンの態度からは、彼が心底この少女に惚れているとしか考えられないが……。

そこへ、さらに別の人物が駆けつけてきた。母親違いのジードの弟、アドリオと――カシアンの従者らしき赤毛の少女が。アドリオは、その端正な顔を強張らせ、怒りに震える声で怒鳴った。

「やめろ、カシアン！　ミハルはお前の妻なんかじゃない、その手を離せ！」

「貴様は黙っていろ！　ミハルは……ミハルは私の妻、私の生命、私の天使だ！　貴様らウェス・ハーシュの人間になど二度と触れさ

せるものか、汚らわしい貴様らになど――」

　未明をめぐって揉み合う二人に、凛とした一喝が飛んだ。

「お黙りなさい、この礼儀知らず！　汚らわしいのはどちらですの！？　わたくしの聖域でこれ以上騒ぎを起こすことは赦しません。あなたお一人で、とっとと出てお行きなさい！」

　それはレノラの一声にほかならなかった。場は一瞬にして静まり返り、誰もが彼女を見た。二つの紫水晶が睨みつけているのは、ノルド家にとっても邪魔な存在であるウェス・ゴート家の跡取り息子、カシアンだった。フェロキオン遺跡で行われる祭祀など、重要な神事には連邦中の名家が集まる。その関係でお互い、顔くらいは知っていた。というより、言葉を交わしたことも数回程度ならある。カシアンもまた、憎々しげにこの姫巫女を睨み返した。

「礼儀知らずだと？　汚らわしいだと？　……さすがにあのオルグ・ジードの許婚だけある愚物だな。昔から目障りな女だったが、成長してなお魯鈍（ろどん）ぶりに拍車がかかったと見える」

　これだけの悪口雑言を浴びせられても、レノラは退くどころかいっそう声高に応じる。

「それはこちらのせりふですわ。子どもの頃から気に喰わなかったけれど、三つ子の魂百までとはよく言ったものですわね。あなたが大学府に入れるなんて、いったいなんの冗談ですかしら。大方実家のご威光を最大限活用して、なんとか潜り込んだんでしょうけれど。大学府の入学審査も、ずいぶんと甘くなったものですわよねぇ」

　カシアンの顔が凶悪なまでに歪んだ。が、レノラの攻撃はいっこうに緩む気配がない。

「それにしてもお気の毒ですわね。お聞きしましたわ、ソフォモンドの決勝戦の一件で停学処分をお受けになったんですって？　追放されずに済んだのはひとえにご実家のお力添えがあったからだとか。……でも、例の醜聞のせいで、そのご威光にも翳りが見えてますものねぇ……同情いたしますわ、零落した貴族ほど哀しいものはありませんもの」

ほほほ、と優雅に微笑むレノラ。カシアンの手が未明から離れた。間髪入れず、彼の右手は空を切り、レノラに向かって振り上げられようとした。

が、その腕が標的に届くことはなかった。

「若君、だめですっ！」

金切り声とともに全身でカシアンにむしゃぶりついたのは、彼の背後に控えていた侍女、ヨナだ。彼女は先ほどからずっと、はらはらしながら一部始終を見守っていたのだが、カシアンの忍耐が臨界点に達しようとしているのをいち早く察知し、その暴走を防ごうとして飛び出したのである。

「な……なにをする、ヨナ！　お前の主君がこれだけ愚弄されたのだぞ。それなのに報復を邪魔するとはなにごとだ！　離せ、離さないか！」

ヨナは、カシアンの右腕にぶら下がるようにしがみつきながら叫んだ。

「それでもだめ、絶対だめですっ。女の人に手を挙げるなんて男のすることじゃないって、うちのおじいちゃんがいつも言ってるんです！　そりゃあこの人、いけ好かないし傲慢そうだし、あたしだって好きじゃないです、でも、殴るのだけは――」

「誰が傲慢ですって！？　あなたみたいな小娘にそんなこと言われるような筋合い、こちらにもありませんわよっ」

「傲慢じゃない！　うちの若君はね、確かにちょっとヘンだけど、でも、ちゃんと努力する人よ！　お家の威光を笠に着て、ただぬくぬく育ったようなそこらの甘ったれと一緒にしないでっ。なんにも知りもしないくせに！」

互いに一歩も退かず、言い争うレノラとヨナ。ホルツェンはレノラの肩を押さえながらも、だんだん混乱してきた。そもそも、なにをしようとしていたのかを思い出そうとした時、今度は拍子抜けするような屈託ない笑い声がその場に響き渡った。

おかしくてたまらないという風に背中を震わせているのは、ジー

ドとアドリオ兄弟の父、現ウェス・ハーシュ卿、オルグ・ヴィネックだった。いつの間にそばに来ていたのか、彼は開き切った扉にもたれかかるようにして笑い続けている。

「お前らなぁ……熱くなるのもいいがな、とりあえず落ち着け。カシアン、お前は少し頭を冷やすんだな。そこのお嬢ちゃんの言うとおりだ、女に手を挙げるのは男のやるこったねぇぞ。ミハルのためにも、器のでかいとこを見せてやれ。――それとアドリオ、お前にはちょいとばかり話がある。飯が済んだんなら俺につきあえ、いいな」

アドリオは怪訝そうに父を見た。

「話？」

「ああ。……あとはレノラ。お前さん、ミハルになんか言いたいことでもあるのか？　なら女同士、湯殿にでも行ってきたらどうだ。腹を割って話せるだろう。……そうだな、なんならこのお嬢ちゃんも一緒に」

思いもかけない提案に、レノラは眉をひそめた。だが同時に、未明にきっちり謝辞を伝えるための、それは願ってもないシチュエーションにもなり得る。なにしろ湯殿という場所柄、カシアンのような邪魔者も立ち入ることはまずできないのだから。

そう考えたレノラは、それまでとは一転、世にも麗しげな微笑みを浮かべて未明の両手を取った。

「そうですわね。ミハル、あなた、ウェス・ハーシュ邸から半日以上も馬車に揺られてきたんですもの、きっと相当お疲れでしょう？　お湯を遣うといいですわ。わたくしもご一緒しますから、ぜひこちらにいらして」

しかし当の未明の反応は芳しくない。彼女はわずかに後退りした。なにしろ自分を海に沈めようと画策した、因縁の相手である。気安く同行できると考える方がどうかしている。が、焦れつつもレノラはあきらめない。彼女はヴィネックに言われたとおり、今度はヨナに矛先を向けた。

「さっきは申しわけありませんでしたわ。つい、わたくしとしたことが、かっとなってしまって……ね、あなたもぜひご一緒なさって。泉質のいい出湯（いでゆ）ですの。きっと気に入っていただけると思いますわ」

二人きりでないとわかれば、未明も受け入れざるを得ないだろう。彼女の目論みは当たった。

未明とヨナは、なんとなく顔を見合わせつつも、渋々肯いたのだった。

# 第三十四話　シークレット・トーク

伯父であるオルグ・ヴィネックの勧めに従い、レノラは未明とヨナを神殿内に設えられた湯殿へと誘った。神事の前後など、身清めのために利用される、巫女専用の浴場である。白螺石をふんだんに使い、そこかしこに花や乙女などの煌びやかな彫刻を施した、見るからに贅沢な空間だ。

躊躇い気味に脱衣場で服を脱ぎ、髪をまとめ、レノラに続いておずおずと中へ入った未明は、途端に歓声を上げた。白い浴槽に張られた湯は見事なコバルトブルーで、その上ほんのりと甘い香りさえ漂っているのだ。

「このハーマッド島に、昔から湧き出ている名泉ですわ。なんでも、地層に含まれている植物成分が溶け出して、こんな色合いになっているんだとか」

未明は感心したように湯をすくっている。そんな彼女を、ヨナは少し離れたところからまじまじと観察した。

正確な年齢は知らない。だが、おそらくは――十八、九。そう、彼女の想い人、アドリオと変わらないくらいなのだろう。それは、一糸まとわぬ未明の裸身を見ていれば想像がつく。

……だって……この人、きれいだもの。こうして裸になったところって当然はじめて見るけれど、すごく……大人っぽい。

か細くくびれた腰、対照的に豊かな胸元。人形のように華奢で長い手足。どこかあどけないその顔立ちに比べるとアンバランスとさえ言える、美しくも煽情的な身体つきである。くすみのないなめらかな肌といい、本人が言うように平民の出身とはやはり思えない。

ヨナはふとうつむいた。自分の裸体など、彼女とは比べものにもならない。華奢というよりただ貧弱で、発育不良。男性の気を惹くプロポーションとはお世辞にも言えないだろう。

「ヨナちゃん？」

声をかけられ、はっと我に返った。レノラも未明も、すでに湯に浸かっている。ヨナは慌てたようにひしゃくをつかむとやみくもに掛け湯をし、湯船にそおっと足を入れた。

三人の間に、しばらく、無言の時間が流れた。

考えてみればおかしな組み合わせだ。ジードの元婚約者、現婚約者、そして彼の政敵にして恋敵である男の従者。接点があるようなないような、本来は親しくなどなるはずもない、複雑な関係の女たち。

そんな中、ヨナは思いつめたように顔を上げ、未明を見据えた。

そして、言った。

「あ――アドリオ様の……」

「え？」

だが、結局ヨナはその先のせりふを呑み込んだ。彼のことをどう思っているのか。問いただしたところでどうなるというのだ。彼女はいきおいよく頭を振ってから、取り繕うようにこう続けた。

「アドリオ様のお兄様と、なにかあったんですか」

レノラ姫があたしたちを案内した先にあったのは、まるで日本の名湯百選にでも出てきそうな、不思議な色の温泉だった。植物成分が溶け出しているというこのお湯は肌触りもやわらかく、おまけにうっすら甘い香りまで漂っている。嗅いでいるだけで心がほどけていきそうな、不思議な感覚にあたしは包まれた。

湯船に浸かり、無言で深呼吸する。ぼろぼろにほつれていた気持ちが、ほんの少しだけ慰められるような気がした。

でも、それは一瞬の錯覚に過ぎなかった。

婚約はなかったことにしてくれ。ジード様の冷たい言葉が、眼差しが、またも脳裏に蘇った。どうしてなんだろう――なんで忘れることができないんだろう。いや、そりゃ事実まだたった数時間前の出来事なんだけど、それにしたってどうしてあたしはここまで……。

そんなことをぐるぐると思い巡らせていた時だった。

アドリオ様のお兄様と……ジード様と、なにかあったのか。

ヨナの問いかけに、あたしの心臓は大きく跳ねた。

透き通った、ブルートパーズを連想させる二つの青い瞳が、あたしをじぃっと見つめている。

「……な、なにかって、別に……」

もごもごと口を開きかけた。でも、言葉は泡みたいに頼りなく消えてしまった。

口ごもったままのあたしに、レノラ姫までが声をかけてきた。

「なんの話ですの？　ミハル、あなた、ジードと……」

彼女のせりふはそこでいったん途切れた。あたしは――なぜか身体が強張るのを抑え切れず、湯船の中で、自分の両の二の腕をぎゅっと抱きしめていた。

……ついさっき、カシアンとこの人が言い争っていたその内容が、頭の中にフラッシュバックする。

――さすがにあのオルグ・ジードの許婚だけある愚物だな。

彼は激昂しながらそう言い放った。このきれいな女の人に向かって。

許婚。親が決めた婚約者同士。そんな相手が、ジード様にはいたんだ。ああ、そう言えば、いつだったかお屋敷でもアウラ様がこんなことを言っていたっけ――ノルド家の姫を差し置いてまで、なぜ

あたしみたいな不審な女に肩入れするのかって。
そのとおりだ。普通はあり得ない。彼があたしを好きだと言ってくれてる根拠なんて、なんにもなかったのかもしれない。
「ちょっと、ミハル？　あなた、どうなさったの、いったい」
「ミハル様？　だ、大丈夫ですか、気分でも……」
慌てたような声が代わる代わる聞こえた。二人してなにを焦っているんだろう、そう思って「なんでもない」と伝えようとした時、咽喉の奥に熱い塊みたいな違和感を覚えた。――言葉がつかえて、うまく喋れない。

……あ、あたし、泣いてるんだ。

自分で驚いていた。なにがそこまで悲しいっていうんだろう。ジード様にフラれたこと？　そんなのヘンだ。だってあたしはそもそも、日本に帰るための手助けを彼にしてほしくてここまで来たんだから。いまさら婚約解消されたことぐらい、どうだっていうんだ。レノラ姫っていう許婚がいたことが、どれだけショックだっていうつもりなのか。
「ミハル……」
そのレノラ姫は、これまでに見たこともないほど（と言ってもほとんど会ったことなんてないに等しいけど）神妙な顔つきになって、あたしをじっと見つめている。やがて彼女はキッと唇を引き結び、言った。
「――赦していただけなくてもいいわ。でも、とにかく、わたくしは――後悔してます。あなたにあんな仕打ちをしたことを。だから……」
息を吸い込んでから、こう続けた。
「……申し訳、ありませんでしたわ」
彼女は深々と頭を下げた。うなじにこぼれる金色の後れ毛が、水面にゆらゆらと漂っている。

「罵りたいなら、いくらでもそうなさって。殴ってくださってもけっこうよ。それくらいの覚悟はできてますから」

そう言うと、レノラ姫は顔を上げた。ほとんど睨みつけるような眼差しが、真っ直ぐにあたしを捉えている。……あたしは思わず、苦笑していた。途端に、訝しげな視線とぶつかった。

「――いいんです、もう。そりゃあの時はほんとに死ぬかと思ったけど……こうして助かったんだし。それに……」

気持ちは嬉しい。でも、そんなことといまは、正直どうでもいい。

このきれいな「お姫様」がジード様の許婚で、だからあんなにやさしげな態度を取っていたんだ。その思いで胸の中はいっぱいだった。きっと、あたしのはっきりしない態度に厭気が差したんだ。それとも、あたしのことははじめっから遊びだったのかもしれない――だって、愛される理由なんか、あたしにはそもそもなんにもないもの。

「ミハル様、あの……アドリオ様のお兄様と、喧嘩でも……？」

労わるようなヨナの声がした。彼女はやや遠慮がちにあたしを見つめ、それからさらに付け足した。

「差し出がましいことを言ったりして、すみません。でも――広間での食事の時から、なんだか空気が微妙だなって思って……うちのお屋敷でちらっと小耳に挟んだんですけど、確か、次期ウェス・ハーシュ卿と婚約されてるんですよね？　若君もそんなようなことを言ってたし。もちろん認めてなんかいないっていつも……あ、いえ、それはいいんですけど」

「……」

「だから、あの……もし、なにかあったんなら、話してみてください。あたしじゃ役には立たないかもしれないけど、でも、聞くぐらいはできますから」

あたしは鼻をすすり上げ、なんとか微笑を浮かべてみせた。やさしい言葉が無性に沁みた。

「ありがと、ヨナちゃん。大丈夫、別に、そういうことじゃないの。

ただちょっと、疲れが出ただけ」
「ミハル様」
「ごめんね、心配かけちゃって。……そろそろ上がろうかな、なんか湯中(ゆあた)りしちゃいそう」
あたしは、ヨナの純粋な瞳から目を逸らし、腰を上げかけた。その時だった。
「わたくしに遠慮しているのなら、不要な気遣いですわよ。ジードとの婚約はとっくに破綻してますもの。ああ、もちろん、わたくしから破談にさせていただいたんですけれど」
毅然としたせりふに、あたしは目を瞠った。そう言ったのは当のレノラ姫に違いなかった。
「ですから、ミハル。――ジードと、あの人となにかあったのなら、聞かせていただけないかしら。これでも従妹ですもの、少しは彼のこともわかっているつもりですわ」
彼女は、どこか決まり悪そうに頬を赤らめつつも、あたしにそう申し出てくれた。
……あたしは、自分の両目に、じんわりと新しい涙が盛り上がるのを感じた。

# 第三十五話　未明の涙

姫巫女専用の禊場（みそぎば）は、イシオス神殿の主棟ではなく、離れともいえる西の殿舎に設えられている。普段なら控えているはずの世話係の小姓たちも、この日は予期せぬ客人の応対に忙しく、持ち場を外れていた。……カシアンにとって、それはまさに好機そのものだった。

湯殿へ行けば、未明がいる。未明に会えるのだ。自分と睦み合うため、身を清めているあの天使に。

その想いが頭に浮かんだ瞬間、彼の足は宙に浮いたようになって彼女らのあとを――レノラに連れられて西の殿舎へ向かう未明のあとを追っていた。幸い、あの邪魔なオルグ・ジードの姿もいまはない。攫うならこの機とばかり、カシアンは勇み立った。未明の肌にふたたび触れられる――そう考えただけで胸が震え、否応もなく鼓動が速まっていく。

色とりどりのユニスが描かれた細い渡り廊下を抜け、禊場に辿り着いたカシアンは、なんの躊躇もなく、両開きの扉に手をかけた。

――その時だ。

「そうは問屋が卸さねぇっての」

揶揄するような小声とともに、恐るべき力で首根っこをつかまれ、後方へと思いきり引っ張られた。反射的に振り向き、飛び退る。そこには、予想どおりの人物が立っていた。

「き……貴様、この期に及んで邪魔をする気か！？」

血走った目で相手を睨みつけるカシアン。言われた当の本人、オルグ・ヴィネックの方は、彼の剣幕などどこ吹く風で、心なしか楽

しげにすら見える表情を浮かべている。
「すまねぇな、坊主（シグノ）。俺もあんまり引っ掻き回したくはねぇんだけどよ。女湯を覗くなんてのは穏やかな話じゃねぇだろ、やっぱ」
「覗くのではない！　この私が、次期ウェス・ゴート家当主ともあろう者が、そんな品性下劣な真似をするはずがなかろう！？　私はただ純粋に、ミハルに会いに来ただけだ。私の妻、私の天使であるミハルに！」
カシアンは堂々とそう言い放った。その態度には後ろめたさなど微塵も含まれてはいない。
「ふざけるな！　ミハルを妻呼ばわりするのに飽き足らず、よくもこんなことまで――」
ヴィネックの背後から飛び出してきたのは、ようやくその場に駆けつけたアドリオだ。先ほど、話があると言ったまま姿を消した父と、同じくいつの間にやらいなくなっていたカシアンに不安を煽られ、神殿中を走り回っていたのである。が、カシアンは額に青筋を浮かび上がらせ、アドリオに負けじと吼え返した。
「ミハルは私の正妻だ。父上もそれは承認済みだ、彼女を妻と呼ぶのに、なにを厭う理由もないわ！」
衝動的に右腕を振り上げるアドリオ。そんな二人の襟首を、ヴィネックはそれぞれの手で軽々と押さえつけた。
「じゃれ合うのはまたにしろ。そんなことより、とっとと主殿に戻るぞ。……お前らにまとめて話しておきたいことがあるんだよ」
彼らしくもない、妙に真面目くさった口調に、アドリオとカシアンは、期せずして顔を見合わせた。

マージュオン港で再会――ジード様に言わせればそういうことになる――を果たしてから、ウェス・ハーシュ邸に連れて来られ、どういうわけか婚約宣言されたこと。そして、ついさっき同じぐらい

あっさりと婚約破棄されたことを、あたしはぽつぽつと話した。なにしろほとんどが身に憶えのない出来事だ。さぞ要領を得ない内容になっていたんじゃないかと思う。

「……気の迷い、ってことだったんだと思うんです。あたし自身ずぅっと言っていたけれど、きっとあたしを誰かと間違えていて……それで、そのことに思い当たったんじゃないかなって」

あたしは淋しく笑った。結論を言ってしまえばそうなるんだろう。そう、ジード様はやっとわかったんだ。自分の想いが、勘違いに過ぎなかったって。

ところが、なぜか、目の前の二人は激しくそれを（しかも同時に）否定した。

「気の迷いですって？　ミハル、あなた、本気でおっしゃってるの!?」

「あり得ません！　そんなの絶対ヘンですっ」

レノラ姫のきれいな眉尻が、ものすごい急角度に吊り上っている。さすがにジード様の従妹だけあってかなりの迫力だ。そのいきおいに、あたしは湯船の中でたじたじと後ずさりそうになった。

「で、でも、あの……」

「――じゃあ、なにかしら。あなた、わたくしが、そんな一時（いっとき）の感情の迷いに負けたとでもおっしゃる気？」

ひんやりと押し殺した声に迫られ、あたしは縮み上がった。思わずぶんぶんと首を横に振りまくる。

「いえっ、べ、別にそういうわけじゃ」

「そうですよ。それにミハル様はご存じないでしょうけど、あたし、以前に一度、ジード様やアドリオ様と会ってるんです。ウェス・ゴート家所有の荘園で。ほら、ミハル様がうちの若君に攫われた時に」

レノラ姫に続き、今度はヨナが熱弁を奮い始めた。でも、あたしは肯くことができない。だって、その話、いろんな人になんども聞かされたけれど、全然記憶がないんだもの。

「あの時のジード様、そりゃもう凄かったですよ。ミハル様を助け

出すためならどんなことでもするって感じで。――ミハル様以外、眼中にないのが、痛いほど伝わってきましたもん。……だから、気の迷いなんてあり得ないです」

どきん――と、胸が鳴った。

身に憶えのないこととはいえ、いや、知らないところでそれほどまで彼が懸命になってくれていたのかと思った瞬間、全身が熱くなった。

そして、同時に、言いようのない切なさに襲われた。

「……あたしじゃないのかもしれない」

「えっ？」

レノラ姫とヨナが、怪訝そうにあたしを見返している。そんな二人の前で、あたしは、言葉がこぼれるままにつぶやいていた。

「あたしじゃないのかもしれない。ジード様がそこまでして護ろうとした相手って。……だって、あたし、憶えがないんだもん。この国の人間じゃないし、それに記憶がないってどう考えてもおかしいじゃない！　あたしに似てる誰かが本当はどこかにいて、だからジード様、本当はその子のことが好きなのかもしれない。だから……だから、あたしのことは、もう……」

婚約はなかったことにしてくれ。その一言で片付けたいくらい、どうでもよくなっちゃったんだ。

「ミハル……」

そっと頭を撫でられた。レノラ姫だった。彼女はなんともいえない表情で、あたしをじっと見つめている。

「ご、ごめ……なさい、こんな……」

声が詰まった。情けなくていたたまれない。あたしはなにをここまでテンパってるんだろう。自分で自分がわからない。自分がどうしたいのか、それすらわからない。

その時、不意に、聖山の庵で出会ったあの人の――テオのせりふが耳に蘇った。

お前を心から愛する男を二人、連れて来い。そうすれば元の世界に帰るための「見送りの儀」が行える。

……あたしを愛してくれている人。そう、アドリオ様は、自分とジード様がいれば条件を満たせるはずだって言っていた。あたしは卑怯にも、そのアイデアに乗るつもりだったんだ。自分のことしか考えていなかったから。

ジード様を傷つけるぐらいなら、日本に帰れなくてもいい。皮肉なことに、彼にフラレたいまになって、あたしはそう思ってる自分に気づいた。――そんな感情、もう無駄でしかないのに。

涙がこぼれ落ち、コバルトブルーのお湯の中に沈んでいった。ジード様に謝りたい。いろんなことを、ただ、会って謝りたい。

そんなあたしに、ずっと黙っていたヨナはこう言った。

「ミハル様は……ミハル様は、ジード様がお好きなんですね」

西の殿舎から戻るなり、ヴィネックは彼の次男坊とカシアンを、空いている客間に押し込んだ。いささか手荒いやり方ではあったものの、いまやカシアンも彼に逆らおうとはしなかった。現ウェス・ハーシュ卿の流儀について、厭でも呑みこめてきたからである。父がこの男をして山師と称する理由がよくわかる、と、彼は胸中で独りごちていた。

「さてと。手短にいくとするか。――まずは、お前らに配られた恒久手形……『天上の切符』についてだな。どうせ興味もないんだろうが、ミハルにも関係することだ。とりあえず聞け」

仏頂面で椅子に収まっていた二人は、未明と聞いて顔色を変えた。ヴィネックは端的に説明を始めた――故意に秘匿された神の存在（ウルディノシス）、六つに分かれたその魂の持ち主が、とりもなおさず切符の付与対象者であること。そして、ウルディノシスが妻たる女神、イグノディ

アスの怒りを買うことになったそもそもの原因、異界からの迷い子のことを。

「それは……本当のことなのか、父上？　じゃあ、ミハルも母上も、同じ国から、イグノディアスの思惑によって連れてこられたっていうのか」

椅子を蹴立てて腰を浮かせたのはアドリオだ。美沙紀の名を出され、ヴィネックの顔がわずかに歪んだ。

「……ああ、そうだ。ただその真意は不明だがな。なぜそうまでして、イグノディアスは六人の男たちを捜し出そうとしてるのか。そろったところでどうしようっていうのか、そこまではまだわからん」

「……」

思いもかけない真実にアドリオは言葉を失くし、ふたたびふらりと座り込んだ。ところが、その隣に掛けるカシアンの反応は、まるで正反対だった。……そう、アドリオとも、その異母兄であるジードとも。

「神の意思だと？　そんなもの知ったことか！　ミハルがイグノディアスによって連れてこられた娘だからどうだと言うのだ？　彼女が私の運命の恋人だという事実には、なんの変わりもないわ。むろん、ほかの五人の馬の骨どもと彼女を争うつもりも毛頭ないがな。ばかげた争いなどするまでもない、ミハルは誰がなにを言おうが私のものなのだから」

カシアンはそう言い切ると、ヴィネックを真正面から睨みつけた。その清清しいまでの態度に、ヴィネックは思わず、かつての自分の姿を思い浮かべていた。美沙紀が世界のすべてだった、あの頃を。

「お前さん――本当に本気で、ミハルが好きなんだな」

微笑ましさとともに、不思議なほろ苦さが胸に込み上げ、彼はなぜかそんなことをつぶやいた。

# 第三十六話　真実の余波

ミハル様は、ジード様のこと、お好きなんですね。

ヨナの唐突な一言に、あたしは目を見開いた。

思わず、反芻していた。――好き？　あたしが？　ジード様を？

「あたし……実をいうと、お二人がうまくいかなければいいって、ほんのちょっとだけ思ってたんです」

薄水色のお湯を手のひらで弄びながら、ヨナはしんみりと続けた。

「だって、もし……もしミハル様がフリーになっちゃえば、うちの若君にもチャンスがめぐってくるわけだから。あ、もちろんミハル様が若君をきら……怖がってることは知ってますけど、あたしには……あたしにはそれでもやっぱり、大事な主君ですから。できればミハル様と幸せになってほしいなって……」

彼女はいったん言葉を切った。そして、年下とはとても思えないほど（正確な年齢を訊いたわけじゃないけど、あたしよりは下なんだろう。多分）慈しみにあふれた笑顔を浮かべた。

「でも、こうしてあらためてミハル様にお会いして、よくわかりました。ジード様のことが本当に好きなんだなって。……若君の気持ちも、入る隙もないくらいに」

あたしは真っ赤になった。裏返った声で必死に言い返していた。

「ちょ、ちょっと待って！　べ、別にあたし、じ、ジード様のことが好きって……そんなつもりじゃ。ただ――」

「いまさら照れなくてもいいですよ。あんな風に泣くなんて、本気で好きな相手じゃなきゃあり得ないですもん」

したり顔で肯くヨナ。さらには、またしても不穏なオーラに包まれつつあるレノラ姫の気配が漂って来、あたしは二重の意味で慌て

た。……この人、見た目は天使か妖精かっていうくらいのたおやかな美人なのに、怒らせるとジード様以上に怖い気が……する。

「ミハル。――そんなつもりじゃないって、じゃあどういうつもりでいらっしゃるの？　……この際ですわ。ジードの元許婚として、あなたのお気持ち、きっちりと伺わせていただきたいわ。お答えになって。さぁ、いったい、あの人のこと、どう思っていらっしゃるの！？」

水飛沫が立った。レノラ姫がいきおいよくあたしへと迫ってきたためだ。ハンドモデルもかくやと思わせるような、整った白い手のひらが、その華奢なイメージを思いっきり裏切る力強さでもってあたしの両肩をがっちりとつかんだ。

「あ、あの、そ、その……」

しどろもどろでうろたえるあたし。眼前にはあのきれいな紫水晶が二つ、爛々と輝いている。

「ミハル！　どうなんですのっ！？　はっきり答えてくださいませっ！」

肩に喰い込む爪が痛い。身をよじって彼女から逃れようとした、その時だった。

……若い男の人だった。悪い人じゃなさそうだけど、信用できるのかどうかなんていまの段階じゃまだわからない。

あの人のことはもう思い出したくもないのに！　信用できるなんて思ってた自分がほんとにばかだった。

あたしの名前を呼ぶ声。……少し懐かしい、あの低くて、甘い声。

――あたしって、この人のこと、好きになっちゃったの？　いつの間に？

あたしがあげられるものならなんだってあげる。それに、どんなことでもするから。

だから……。

頭の中に、耳の奥に、知らない場面が、言葉が不意に響き渡った。な――なにこれ？　見たこともない景色が――質素な造りの学生寮のような部屋、どこか知らないお屋敷の客室や浴室、そして、金色の靄がかかった空間が、荒々しくうねりながら目の前をざあっと流れていった。

次の瞬間、あたしの瞳に映ったのは、当然――。

「ミ……ミハル？　どうかなさって、あなた」

レノラ姫の手が、ほんの少しだけ緩んだ。あたしの様子がおかしいのを察したんだろう。

「……いえ、あの、大丈夫……です」

あたしはぼんやりと気の抜けた声でそう答えた。いまのはいったいなんだったのか。デジャヴでもなければ、見覚えのある光景ではもっとない。考えようとして、やめた。答えが出る気がしなかったからだ。

その代わり、というわけじゃないけれど、あたしはあらためて自問した。

あたしは、彼を――ジード様のことを、どう思ってるんだろう。

これ以上、あたしだって誤魔化したくはない。はっきりさせなきゃいけないって、ずっと思ってはいたんだ。それなのにそのことを先延ばしにしていたせいで、この土壇場に来て、こんなに混乱してる。「見送り人」の件が白紙に戻ろうが、お屋敷を追い出されようが（婚約破棄された以上、のうのうとウェス・ハーシュ邸に厄介になってるわけにもいかないだろう）、最後にこのことだけははっきりさせておきたい。どんな結論が出ようが、もう無駄だとわかっていてもだ。

「……記憶が、ないんです」

あたしは頼りなげにつぶやいた。きょとんとしてあたしを見るヨ

ナ。彼女とは対照的に、レノラ姫の方は、それほど意外そうではなかった。

「存じてますわ。わたくしがシグルの家であなたに再会した時、あなた、わたくしのことはまったく憶えていらっしゃらなかったようですもの。――その半年以上前、大学府（エコルガルト）でお会いしているっていうのに」

そうだ。蓼科の怪しげな廃隧道の出口にあった、不思議な崖。あそこから落っこちたあと意識を失ったあたしは、どういうわけか傷ひとつない状態で、シグルさんという見知らぬ若い男の人に介抱されたんだった。そして、その直後に、この人に――レノラ姫に引き合わされた。でも、それ以前に彼女に会った憶えなんてない。

「言っておきますけれど、人違いなんかじゃありませんわ。わたくしが大学府で――ソフォモンドの試合をご一緒に観戦したのは、間違いなくあなたですわ、ミハル」

レノラ姫の手はいつの間にかあたしから離れていた。彼女は力強く断言し、さらに続ける。

「あの人も……ジードもきっと、同じように思っているはずですわ。わたくしが言うのもなんですけれど、器用な人ではありませんもの。人違いだと思って婚約破棄ですって？　そんなに小回りの利く男なものですか！」

ミハル、あなたは間違いなく、わたくしたちの存じ上げているあのミハルですわ。ですから……」

レノラ姫の眉が、ほんの少し翳った。と思う間もなく、あたしは彼女のやわらかな腕に引き寄せられていた。

「……そんな風に、泣かないでくださいませ」

やさしく抱き寄せられ、頭をそっと撫でられた。女の子にこんなことされたのって初めてだ。甘い香りがした――温泉のためじゃない、きっと彼女が普段つけている香水（フレグランス）の残り香なんだろう。

鼻の奥がつんとした。湯気のせいじゃなく、視界がぼやける。どうして泣きたいのかもわからないまま、あたしはしゃくり上げた。

レノラ姫はその間中ただ黙って、髪を撫でてくれていた。

思いもかけず、神殿で再会することになった恋敵は、どういうわけか傷心のただ中にいた。訊けばジードに――自分の元許婚に婚約破棄されたのだという。レノラは純粋に面喰らった。

ノルド家というこれ以上ない後ろ盾を持つ自分を振ってまで手に入れようとした相手と、いったいどんな理由があればあっさり破局するというのか。

話をするうち、彼女の胸のうちには、さらなる戸惑いが拡がっていった。ジードの不可解な行いもさることながら、かつてあれほどの殺意を覚えたはずの恋敵、未明に対して自分が抱きつつあるおかしな感情のため。それがなにより大きい。

厭味のひとつも言ってやれる立場なのだ、本来は。なにしろこの自分は、本当ならジードの正当な婚約者。それも生まれた時からの付き合いがある間柄なのだから。

――だが、彼女を貶めたいという衝動は、まるで湧いてこなかった。

どころか、ショックを堪え切れずに泣く姿に、思わず手を伸ばしていた。大切な家族にでもするみたいに、ごく自然に。

「ミハル……ミハル、泣かないで。わたくしがついてますわ、だから……」

つややかな黒い髪をただ、撫でた。自分の中に生まれた見知らぬ気持ち。彼女を慰めたい。その傷心を少しでもやわらげてやりたい。

ひたすら混乱しながら、それでもレノラはそう繰り返した。

創世にまつわる秘せられた真実を、そして、自分がかつて女神に

よって屠られた男性神の生まれ変わりの一人であると告げられても、カシアンの態度は一片たりと変わることはなかった。彼は椅子から立ち上がると、ヴィネックをふたたび睨みつけた。

「神の思惑など私には関わりのないことだ。くだらん……まったくもってくだらん！　そんな話を私に聞かせて、いったいどうしようというのだ貴様は」

不遜きわまりないカシアンの言動に、応じるヴィネックはただおかしそうに笑みを漏らしている。

「……いや。ま、お前さんなら確かにそう言うかもしれねぇな。どうしようってわけでもねぇけどよ、一応、教えといてやろうと思っただけだ」

「ふん。無駄な気遣いをしたものだな」

そう言い捨てるなり、彼は足音も荒々しく部屋を出て行った。隣席のアドリオの方は、対照的に先ほどからずっと黙りこくったままだ。――ヴィネックの表情が、心なしか引き締まった。

「……父上は……いつから知っていたんだ。そのことを」

顔を伏せたまま、アドリオは低い声でそう訊ねた。自身も椅子にまたがるように掛け、ヴィネックは答える。

「ついさっきだ。俺だって正直、寝耳に水だ。……まぁ、俺が本当に知りたいのは、その先なんだがな」

「その先？」

アドリオはようやく顔を上げ、視線を彼の父に向けた。だが、なぜかヴィネックは黙ったままだった。

「なぁ。――お前らが神殿に……いや、ジードに会いに来た理由ってやつだが……そろそろ、教えてくれないか」

二人はしばらくの間、無言で対峙した。やがてアドリオは小さく息を吐き出すと、口を開き、「経緯」について語り出した。市井の女占い師に情報を得、聖山にいるという隠者を訪ねたこと。彼の庵を偶然見つけ、そしてひとつの助言を聞き出したこと。――すべては未明のため、そして自分のために。

「元の世界に戻るための儀式だと？　あいつが、ミハルがか？」
ヴィネックはその緑碧の瞳を眇め、彼の息子を見つめた。アドリオはわずかに肯き、話を続ける。
「信憑性があるかどうかなんて、俺にだってわかってるわけじゃない。けど、可能性があるなら、試してみてもいいだろう？　その隠者の言う条件も、簡単にそろうんだしな」
「条件？」
アドリオはいったん言葉を切り、かすかに息を吸い込んだ。それから言った。
「――ミハルを心から愛する男を、二人。その男たちを連れて来さえすれば、儀式を行えるらしい。一人はむろん、俺だ。それに、もう一人は……」
「ジードか。そいつを頼むために、キニッサくんだりまでわざわざやってきたってことか」
ヴィネックはアドリオのせりふを引き取った。一方のアドリオは、彼から目線を外し、どこか後ろめたそうにこう続ける。
「……電話でも済む話だったんだ。それを本人に直接、っていうのは、あいつが……ミハルが言い出したことだ。あいつなりの誠意なんだと思う。もちろん、兄上にこの話を切り出す時は、俺も付き添ってやるつもりだけど」
アドリオはそこで口ごもった。神殿へ着いた時から感じていたことだが、肝心のジードの様子がどこか変なのだ。未明のなにが気に入らないのか、彼女に対する兄（ジード）の態度はそれまでとはまったく違い、ひどく険のある、刺々しいものに変わっていた。あの状態では、元の世界に帰る手助けをして欲しいなどと未明が言い出そうものなら、どういう暴挙に出るかわからない。――いや、事態はそもそも、それに飽き足らない。
隠者テオルーグの提示した「条件」によれば、「見送り人（びと）」は少なくとも二人。それも、未明を心から愛する男、という但し書きがつくのである。その要素を満たせなければ「見送りの儀」は行えな

い。アドリオは思わずつぶやいた。――兄上がもし、この役目を引き受けてくれなかったとしたら。というより、「見送り人」としての資格を、知らぬうちに失していたのだとしたら……。

神の意思など知ったことか！　ミハルは誰がなにを言おうが私のものだ。

「あいつか……」

自分たち兄弟以外にも、思い当たる人物はいる。皮肉なほどすぐそばに。だが――アドリオの眉間に、深いしわが寄った。

客間を抜け出したカシアンは、その足でふたたび西の殿舎に向かった。目的はもちろん未明だ。先ほどはオルグ・ヴィネックに邪魔されてしまったが、今度こそ本懐を――いや、ともかく、彼女に想いの丈を伝えたい。自分の純粋な気持ちを知って欲しい。オルグ・ジードよりもその弟よりも、誰よりもこの自分こそが、彼女を愛しているのだと。

性急な足取りで主棟を出る。湯殿から続く渡り廊下に差し掛かろうという時、三人の娘たちの話し声が聞こえてきた。どうやらつい先ほど湯から上がったところらしい。

「あれっ、ミハル様？　確か、臙脂のリボン、髪につけてませんでしたっけ」

あどけなくも訝しげな声。あれはそう、彼の侍女、ヨナだ。

「あ、やだ、さっきいったん外して、そのまま忘れちゃったんだ。取りに行ってくるね、先に戻ってて」

続く未明の声に、カシアンの胸が疼いた。こんなになにげないせりふであるにも関わらず、である。

「大広間に行ってますわ。あとで追いついてらして」

じきに、連れである二人の女が姿を見せた。カシアンは咄嗟に隠れていた。彼女たちからは死角になる場所で――少し離れた位置で、壁際に身を貼り付け、息を殺す。いつの間に仲良くなったのか、レノラとヨナは意外なほど打ち解けた様子だった。カシアンの存在になど微塵も気づいていないらしく、他愛もないことを囀りながらのんびりと廊下を歩いていく。

カシアンは弾かれたように身を起こし、湯殿へと走った。ほんのわずかな距離だというのに、息さえ切れる気がした。細い渡り廊下を跳ぶように駆け、やがて見えた両開きの扉をいきおいよく開け放った。

「……えっ……」

呆気に取られたように目を見開いて立っている未明がそこにいた。臙脂色のリボンをその手に握りながら。

# 第三十七話　カシアン最大の告白・前編

興奮のあまり弾け飛びそうになる意識の箍を、カシアンはどうにかつなぎ止めた。両開きの扉を後ろ手に閉め、ゆっくりと目の前の獲物に――もとい、最愛の少女、未明に歩み寄る。ごくり、と咽喉を鳴らしながら。

天使？　妖精？　そんなものじゃない。そんなレベルなものか、この愛らしさは……彼女は、ミハルは――女神だ。

湯浴みの直後のためか、そのつややかな肌はほんのりと紅に染まり、甘い香りまでが仄かに漂っている。ところどころ濡れた髪、朱を差したようにすら見えるふっくらとした唇。ただでさえ危うげなカシアンの理性を破壊するのには十分すぎるほど扇情的な出で立ちといえた。

「ミハル……お前の夫だ。次期ウェス・ゴート卿だ。話がしたい……そばに来てくれ」

「や……あ、あの、ここ、おん――」

「二人きりだ……ミハル……おいで……」

突然の侵入者とは対照的に、未明の顔からはみるみる血の気が引いていく。臙脂のリボンを手にしたまま、彼女は後ずさった。だが、逃げる方向がよくなかった。

脱衣場はそれほど広い間取りにはそもそもなっていない。文字どおり、衣服の着脱という簡潔な用が足せるだけの、質素と言ってもいいスペースである。室内にあるのは脱衣籠、化粧台、それに長椅子ぐらいのものだ。その一隅、大きな姿見が貼られた壁際に、彼女は追いつめられた。よほどカシアンを怖がっているらしく、唇や瞼

がかすかに戦慄(わなな)いている。
だが、なにかを決意したのか、その口元が突如きりりと引き結ばれた。未明は後退する足を止め、カシアンを真っ直ぐ見据えた。

入浴のためにアップにしておいた髪を下ろしたあと、もう一度結び直すのをうっかり忘れていた。ヨナに違和感を指摘され、あたしは慌てて湯殿に――ていうか脱衣場に戻った。あの臙脂のリボンは、決して安物じゃない。ウェス・ハーシュ邸を出て行くのなら、その前にちゃんと返さなきゃ。だから失くすわけにはいかないのだ。
そう考えて引き返したことを、あたしは心底後悔した。
「ミハル……ようやく二人きりになれたな。お前とずっと話がしたかったのだ。さぁ、ここへ……私のそばへ来てくれ」
唐突に開いたドアから入ってきたのは、あろうことか男の人だった。それも――。
「あ、あの、ここ、おん……女風呂……なんですけど」
「おいで、ミハル。私のそばに。さぁ」
あたしのせりふはあっさりかき消された。ていうか、そもそも、耳に入ってないらしい。眩暈がしてきた――彼、カシアンにはいったいどう言えばわかってもらえるんだろう。彼の言う「ミハル」と、未明(あたし)が、他人の空似……じゃないのかもしれないけれど、それにしたって彼はあたしにとってそういう存在じゃないんだって。絶対に、なにか、誤解があるんだってことを。
そう思ってる間にも、彼はじりじりと間合いを詰めてきた。金と銀の縁取りがされた優美な姿見に張りつきながらも、あたしは考えをめぐらせ、そして決意した。
「わ、わかりました。話を……話をしましょう」
だから場所を変えよう。そう提案するつもりだった。
でも、あたしはどうやら彼(カシアン)を甘く見すぎていたらしい。

「ああ……ようやくわかってくれたか、ミハル！　お前はやはり私の妻だ。この私だけのものだ！　嬉しいぞ、ミハル、さぁ――」
破顔するなりあたしに抱きつこうとしてきたカシアン。あたしは無我夢中で怒鳴っていた。
「カシアン！　話をするんでしょう。なら、あたしの言うことも聞いて！　お願いだから」
彼の動きが止まった。大きな声を出したのが効いたのかと思い、恐る恐るその整った顔を覗き見る。
「……やっと名前を呼んでくれたな。ミハル……もう一度、呼んでくれないか。カシアンと」
怖いくらい真顔で、彼はそう言った。あたしは戸惑った。

――同情でも憐れみでもかまわない、お前が私を見てさえくれるのなら。
名前を呼んでくれ。もう一度だ。もう一度。もう一度……

くらっと立ち眩みがし、あたしは額を押さえた。見たことのない（はずの）お屋敷が、大きな寝台が見えた。一瞬だったけれど。
「か、カシアン、話をするのなら、ここじゃなくて――」
「ミハル……ミハル！　愛してる、私のミハル！」
「ちょっ」
カシアンは絶叫し（実際、そのくらいの声量だった）、あたしに突進してきた。避ける間もなく、あたしは彼の長い腕にがっちり絡め取られ、身動きを封じられてしまった。鉄のロープみたいな――そんなものがあるなら、だけど――頑強さ。露骨に荒い息遣い。――ぶわっ、と瞬時に鳥肌が立った。
そして同時に、ジード様があたしに言い含めたあの戒めが耳の奥に蘇った。

――私以外のすべての男を、お前の意識から消してくれ。

「厭ァッ！」

咽喉も裂けよとばかり、あたしは叫んだ。そして渾身の力を込めてカシアンを突き飛ばした。ほとんど無意識だった。ここまでの抵抗を喰らうとは思ってなかったのか、突き飛ばされた方のカシアンは、数歩よろけて踏み止まるも、呆然とした顔であたしを見つめている。あたしは肩で息をしながら彼を睨みつけ、続けて言い放った。

「そういうことをしないでって、何回言ったらわかるのっ！？　あの時だって――」

威勢よく飛び出したあたしのせりふは、そこで頼りなげに途切れた。……あの時？　あの時、って……？

「そうだ。きちんと式を挙げるまでは、肌に触れるなと……お前は恥じらいながらそう言ったな。そうか……思い出してくれたのか、私のことを。ウェス・ゴート邸で過ごした私との時間のことを」

どういうわけだか、あたしの態度は、さらなる誤解を生んだらしかった。カシアンは感極まったみたいに、その緑灰色の瞳を潤ませている。

「いえっ、あの、いまのは……」

あたし自身、混乱していた。いまあたし、なんて言ったの？　「あの時だって」――それいったい、いつのこと？　ヘレーデ号の甲板で会った時のこと？　ううん……違う。そんなんじゃない。ただ抱きしめられるとか、そういう行為じゃない……もっと、もっとずっと信じられないような……。

あたし、確かに以前どこかでこの人に会ってるんだ。それも多分、ろくでもない状況で。

山吹色のカバーが掛けられたベッドの上に、ジードは独り、ぼんやりと座っていた。この部屋で、つい一刻（二時間）ほど前、自分

は未明になにをしたのか――不条理な責め句を一方的に投げつけ、泣かせた挙句、彼女を置き去りにした。それに飽き足らず、直後には婚約破棄まで言い渡したのだ。

……違う。破棄など、誰が望むものか！　ミハルを手放すことなど、私にはできない。だというのに……それなのに――。

深いため息が漏れ、胸を掻き毟っていた。この気持ち、気が触れずにいるのが不思議なほどの、いま自分が確かに感じているこの感情。この焦燥すら神によってあらかじめ用意されたサンプルに過ぎないのだろうか。オルグ・ジードという容器（いれもの）に入れられているだけの――自分という人間は、そのためだけに作られた張りぼてだと、それが真実だというのか。

「ミハル……」

逢いたい。未明に触れたい。そしてすべて嘘だと告げたい。なにを知らされようと、彼女への恋慕は消える気配がない。たとえ彼女が、その負わされた宿命のために自分だけを選んではくれないのだとしても、それでもそばにいてほしい。

そう思う一方で、むらむらと嫉妬心が湧き起こる。それはジード本人にさえ手がつけられないほど激しいものだった。未明がほかの男を、一瞬でもその視界に映すことすら厭わしい。激情のままに彼女の四肢の自由を奪い、あの黒い瞳を潰し、ウェス・ハーシュ邸の自室に閉じ込めておきたいとさえ願っている自分がいる。その想像の空恐ろしさに、ジードは力なく首を振った。

ノックもされず開いたドアに、彼は気づかなかった。顔を上げると、そこには強張った顔つきの異母弟がいた。なにも言わずにドアを閉め、フォモック製（※樫に似た高級材木）のライティングデスクに寄りかかるようにして立っている。

沈黙を破ったのは、来訪者であるアドリオの方だった。

「さっき……父上から聞いた。『神降ろしの儀』のことも、恒久手

形の意味も」
「……」
ジードはのろのろと視線を上げ、彼の弟を見やった。アドリオは身じろぎもせずこちらを見つめている。
「兄上の態度が――ミハルに対する態度がおかしいのは、その話を聞いたせいなのか？」
「……そうだ」
あっさりと肯定され、アドリオの表情がますます険しくなる。
「なぜだ。あんた、あいつが好きだと言ってただろう？　それがなんでいきなり、手のひらを返したみたいな態度になるんだよ。俺が見てたって痛々しいほどだぞ！　ミハルはあんたに誠意を示すために、わざわざこうして……」
ジードになにを言われたのか、未明の消沈ぶりは傍で見ていても厭というほどはっきりと伝わってきた。それがわかるだけに、アドリオはつらかった。愛する女の意識は、自覚があるにせよないにせよ、間違いなくほかの男に――ジードに向けられている。自分なら彼女にあんな顔をさせたりはしない。あらゆる災厄を祓い除け、一生大切に護りとおす。その覚悟が、自分にならあるというのに。
「誠意？　どういう意味だ」
訝しげに眉尻を上げるジード。アドリオははっと口元を押さえた。
「見送り人」の件を話してしまおうかとも思ったが、いまの彼にはもう無駄だろう。
「こっちの話だ。兄上には関係ない。それにしても……正直、がっかりだな。あんたのミハルへの愛情は、どうせ口だけだ。憶えてるか、エンザンテで俺が言ったせりふだよ。結局、そのとおりだったわけだ」
ジードは立ち上がった。彼の中には、兄弟間といえど守られてしかるべき序列というものがある。侮辱は赦さない。とくに未明に関することならなおさらだ。
だが、アドリオは退く様子を見せなかった。彼は真正面から兄を

迎え撃った。

「俺たちがここを出る前に、ミハルに謝ってほしいところだけどな。もうそんな必要もないか」

「アドリオ……口の利き方に気をつけろ。弟だろうと次は容赦しない。――私もあの時告げたはずだぞ」

ゆらり、と立ち昇る、見覚えのある青い陽炎。周囲の空気が冬季のごとく冷え冷えと凍りつく。

「あんたにそんなことを言う資格があるのか？　ミハルをあんな風に傷つけておいて、よくも偉そうに！」

「お前だって同じなんだ、アドリオ！」

ジードは怒鳴った。その剣幕に負けじとアドリオも怒鳴り返す。

「同じ？　なにが同じだっていうんだ。少なくとも俺は彼女をあきらめたりはしない。たとえほかに何人のライバルがいようが、そんなことぐらいで思い悩んだりするもんか」

「きれいごとを言うな！　いいか、アドリオ。彼女は……ミハルは、イグノディアス神によって、ウルディノシス神の生まれ変わりを探し出すためだけに連れてこられた娘なんだぞ。偶然でもなんでもない、神の思惑によってだ！

これがなにを示しているか、わかるか？　彼女も私たちも、神の意思のもとに動かされている。ウルディノシス神はこう宣(のたま)っていた……異界から現れた依り子の娘に、生まれ変わりの男は必ず恋心を抱く。決められていたことだから――かつてウルディノシス神自身がそうやって異界の娘と恋に落ちたからだ。……つまり、私もお前も、神のシナリオどおりに動かされているに過ぎないんだ。それでもミハルが好きだと、その想いが本物だと、お前には言い切れるのか！？」

陽炎の先端が牙を剥き、アドリオの服を焦がそうとでもするつもりか、その触手をしゅるりと伸ばす。が、アドリオは怯まなかった。

「だからなんだ。あいつがイグノディアスに連れてこられた娘だからって、俺たちがウルディノシスの生まれ変わりだからって、それ

がなんだって言うんだ！　俺は一生だって錯覚してるさ、あいつが俺の運命の相手だってな！」

真っ直ぐにジードを見据え、アドリオはそう言い切った。黒褐色の双眸は爛々と輝き、一歩も退かない決意をその奥底に湛えている。

――ジードでさえも、一瞬たじろぐほどに。

# 第三十八話　カシアン最大の告白・後編

あたしはため息をつき、それからなぜか苦笑していた。このカシアンという男の人は、もう――なんていうか、どうにも苦手なんだけど……放っておけない感じがする。あまりに直情的で、危なっかしすぎて。ヘンなイメージだけど、まるでクラスに一人はいる問題児みたいな感じ。

あたしだって、マージュオン港でこの人にされたことを忘れたわけじゃない。……でも、それでもなんとなく、心底から悪い人ってわけじゃないんだろうな、と思った。我ながら、ずいぶんなお人好しって気もしたけれど。

「……あの……場所を変えませんか。話をするにしても、ここってあんまり……」

女湯の脱衣場。まともな会話をするには不適切な気がしないでもない。ていうか、本来はカシアンが入って来れないはずの場所なんだから。

「――だめだ。ここを出たところで、お前と二人きりには、どうせなれない。ウェス・ハーシュ家の者どもが邪魔しに来るに決まっている」

苦々しげに言われ、じゃあ仕方ない、とあたしは周囲を見回した。緑青色のびろうどが貼られた長椅子が目に付き、そこにさっさと腰掛ける。

「座ってください。……真隣じゃなくて！　そっちの、端っこに」

二メートルぐらいの幅がある長椅子の反対側を、あたしは指差した。やたらに不満そうな顔をしつつも、彼は渋々従ってくれた。

あたしは身体を縮め、できる限り距離を離そうと試みつつ、口を開いた。……いや、開こうとして結局閉じた。だって、なにを話せ

ばいいのかわからない。そんな時だった。
「……幼い頃、不思議な夢を見た」
「え？」
唐突な言葉に、あたしは戸惑った。カシアンは、独り言でもつぶやくような調子で語り続ける。
「最近まで、自分自身忘れていた。ずいぶん昔のことだ。まだ母が生きていた時分の……。母は美しかったが病弱で、物心つく頃にはいつも臥せっていた。部屋を訪れることすら、私には赦されなかった。栄誉あるウェス・ゴート家の嫡男は、誰よりも誇り高く、剛直な心の持ち主でなければならない。……だから、私はいつも独りで過ごしていた」
きっと広大なんだろうお屋敷の中で、たった独り、自分だけを遊び相手に暮らす小さな男の子。その淋し過ぎる図を想像し、あたしの胸はかすかに軋んだ。
「あの夢を見たのは、ちょうどそんな頃だった」
「夢？」
カシアンは肯いた。
「不思議な夢だ。私は白いユニスが一面に咲き誇る、広い花園の中にいた。脈絡もなくな。美しい光景を母に見せてやりたくて、屋敷への道を探した。その時……女に出会ったんだ」
彼はそこでいったん言葉を切り、息を吐き出した。それからふたたび話し始めた。
「十七、八……当時の私よりずっと年上の女だ。風になびく長い黒髪と、見たこともないほど澄んだ黒い瞳をした、愛らしい女だった。私は女に話しかけた。だが……返ってきたのは、聞いたこともない、不思議な響きの言葉だった。そう……初めて逢った頃、お前が時折使っていたような言葉だ。
夢は結局、そこで途切れた。それきりいまに至るまで、一度も見たことはない」
語り終えると、彼はじっとあたしを見つめた。その真っ直ぐな視

線を受け止めきれず、あたしは思わず目を逸らしてしまった。
「どうしてだろうな。お前を見ていると、無性にその記憶が思い出されて仕方ない。……もしかして、あの夢の女は、お前だったんじゃないかとすら思えてしまう。予知夢の一種――そうは思わないか、ミハル」
どうにも答えようがなく、あたしは曖昧に微笑した。
「お母さんて……きれいな人だったんですね」
取ってつけたみたいな相槌だ。我ながら気が利かないなぁと呆れてしまう。よほど予想外の反応だったのか、カシアンはほんの少しだけ目を瞠っている。
「あの、えーと、ここに来る前、旦那様やヨナちゃんが確かそんなこと言ってたなと思って――」
息子である彼がこれほどの美形なら、生き写しだったっていうお母さんはそりゃ相当の美人だったんだろう。ただ、彼は、「生きていた時分の」という表現をした。つまり、すでに亡くなってしまっているってことだ。突(つっ)いていい話題じゃなかったかもしれない。
でも、その心配は杞憂だったようで、彼はすごく嬉しそうに微笑んだ。
「――写真がある。ずいぶん昔の、父と結婚した当時のものだ。見るか」
邪気のない笑顔だった。子どもというか、少年みたいな。あたしは迷わず肯いていた。
カシアンは、クリームベージュの上着の内ポケットから、小さな革袋を取り出した。白く長い指でその中を弄り、やがて一葉の写真を取り出すと、あたしを見た。目で手招きしているのがわかった。
あたしは、まるで友達の携帯の写真でも見るみたいな気軽な感覚で、彼のもとに近寄った。それはごく小さなサイズの――証明写真よりいくらか大きいっていう程度の――白黒の写真で、中央に写っている若い女の人を見た途端、自然に嘆声が漏れていた。
妖精って、きっとこんな容姿をしてるに違いない。そう思ってし

まうぐらいの美女が、そこにはいた。
二十歳前後だろうか。細面の輪郭に、小さく形の良いあご。ものすごく大きくて、でも品のある、きれいな瞳。整った鼻梁。やや薄い唇。それらすべてが、完璧な計算のもとに配置良く並べられている。その上派手じゃない――そう、清楚なんだ。ハイネックの白いドレスや、ふんわりとアップにまとめられた髪に散る花飾りが、そんな繊細な雰囲気のこの女の人にはすごく似合ってる。あたしはふたたび、ため息をついた。
「すごい。ほんとにきれい。……羨ましいなぁ、同じ女として」
写真から顔を上げ、なにげなくカシアンを見たあたしは、思わず後ずさりそうになった。
「――母は確かに美しいが、私には……」
彼の頬が、耳朶が、赤く染まっている。両目に至ってははっきりと充血していた。呼吸までが荒い。反射的に跳び退こうとした瞬間、左腕をつかまれた。
「か……」
抵抗する閑なんてなかった。あたしは、濁流のように圧倒的な力で、長椅子の上に押し倒された。
そして――唇に、強い圧迫感を感じた。
一瞬だった。いつの間に、と思う間もなく、あたしのものじゃない温かい舌が口の中に押し入ってきた。それは知恵のある生き物みたいな狡猾さで、あたしを蹂躙した。舌に絡まり、舐り尽くし、散々吸い上げてから、ようやく離れる。その間中、熱く湿った鼻息が、ずうっとあたしの顔にかかっていた。あたしは、動転のあまり裏返った声をなんとかしぼり出した。
「カシアン……やめ、やめて。お願いだから、どいて」
彼はあたしの上に馬乗りになっている状態だ。そして――あろうことか、ズボンに巻かれた革のベルトを外しにかかっている。それがなにを指しているのか、恐ろし過ぎて考えることもできない。
「お前は私の妻だ。いいか、ミハル、お前は私の妻なんだぞ。すで

に契りも済ませた仲だ。恥じらうことはない……私はお前のすべてを知っているのだからな」

押し殺した、それでいて熱に浮かされたような不穏な声。いつか散々聞かされた気さえする。こんな風に……無理やり……無理やり、あたしを……。

「やめて、やめて……お願い、お願いだからやめて。そこをどいて、お願い、カシアン」

全身の血が引いていく。どんなに懇願しても無駄だというのが伝わってきた。彼はあたしに跨ったままベルトを放り捨てた。その長い指先が、今度はズボンのボタンにかけられた。

――自分でも知らぬ間に、あたしは涙声で叫んでいた。

「助けて……助けて、ジード様！」

アドリオは兄を真正面から睨みつけ、はっきりと言い放った。

「俺は一生だって錯覚してるさ。ミハルが、あいつが俺の運命の相手だってな」

その言葉にジードは絶句した。きれいごとだ。いくらそう思っても、言い返すことができない。アドリオに対する激しい嫉妬が湧き起こる。わかってはいたことだが……カシアンのみならず、こいつまでがミハルを本気で――。

「兄上の気持ちはよくわかった。これ以上、なにも言うことはない」

そう吐き捨てると、アドリオは踵を返してドアへと向かった。黙ったままその後姿を見送るジード。

が、アドリオがドアノブに手をかけようとした時だった。不思議な声がジードの鼓膜を震わせた。

助けて……助けて。

「アドリオ？」
弾かれたように訊ねていた。か細く消え入りそうなその声は、どう聞いても異母弟の――男のものとは思われない。だが、この場にいるのはとりもなおさず彼だけである。
アドリオは足を止め、訝しげに振り向いた。「なんだ。まだなにか言い足りないっていうのか」
「いまなにか言わなかったか。助けて……とか」
ジードの問いに、アドリオは眉をひそめつつ首を横に振る。口を開こうとした時、今度はもっとはっきりと頭の奥に響いた。それはジードにとっては忘れ得ぬ、彼女の――あのいとしい少女の声に違いなかった。

ジード様……助けて……！

「ミハル……ミハルなのか？」
ジードは喘ぐようにつぶやいた。間違いない。あれは未明の声だ。状況はまるでつかめないが、彼女が自分に助けを求めている。……自分の名を呼んでいる。この神殿のどこかで。
なにを考えるよりも先に、ジードは駆け出していた。アドリオの身体を突き飛ばし、荒々しい足音を響かせて。

「厭っ、厭ぁっ！」
あたしは泣きわめいた。カシアンの手が、唇が、身体中を這い回る。黄色のドレスの胸元は無残にも引き裂かれ、片方の胸が露出していた。彼は容赦なくそこを攻めた。
「くぅんっ」
自分の意思に反し、背中が仰け反った。悔しさと恥ずかしさで顔が真っ赤になる。カシアンの興奮し切った声が降ってくる。

「ああ、ミハル、お前という女はなんて……どうしてこんなに、私を狂わせるんだ！」

あたしは両手をめちゃくちゃに振り回し、脚をばたつかせた。カシアンがバランスを崩して、長椅子から転げ落ちればいい。そんなあたしの目論見は、呆気ないほどあっさり封じ込められた。片手で軽々と腕を押さえ込み、一方の手で胸を弄る。乳首をくわえられた瞬間、ぴくんと肩が跳ねた。これ以上は無理というぐらい、鳥肌が全身を覆い尽くしてるっていうのに。

「やっ、やめ、やだっ！　どいて、お願い、触んないで……厭……っ」

抵抗する声がかすれ、頼りなげに消えていく。どれだけ叫んでも、懇願しても、カシアンには届かない。彼は胸から顔をずらすと、鎖骨や首筋に舌を這わせた。餓えた獣を思わせる吐息がひっきりなしに漏らされる。さらにはあたしを睨むように見据え、こんなことまで言い出したのである。

「ミハル……お前がどうあっても私を受け入れてくれないのなら、私は命を絶つ。生など惜しくはない。……本気だ」

「――」

常軌を逸したせりふに、あたしは言う言葉を失くした。

「いまここで聞きたい。……お前は私を殺したいか？　それでも、それでもなお、私を拒めるか……？」

そんな言い方ってあんまり卑怯だ。それじゃまるで脅迫じゃないか。そう、マージュオン港で、ヴァリーたちの身柄を保証する代わりに身体を寄越せって迫ってきたあの時とおんなじだ。

でも、どう言ったってこの人にはきっと伝わらない。あたしがいま、首を横に振ったら、きっと化粧台に置かれた剃刀でも使って迷わず自決するつもりなんだろう。

「愛してるんだ、ミハル。大学府で初めてお前に出会った時から、ずっと。頼む……私を、私を――救ってくれ」

彼は悲痛な声で囁いた。その「告白」は、あたしの心臓に、キリ

キリと厭な音を立てながら深く突き刺さった。

## 第三十九話　ジードの決意（前書き）

一部、暴力的なシーンがあります。苦手な方はご注意を。

# 第三十九話　ジードの決意

「ミハル！　どこにいるんだ、ミハル！」
ジードは廊下に出るや、四方を見渡して叫んだ。だが、未明の返事はない。どんなに耳を澄ましても、あの声がふたたび聞こえてくることはなかった。
「兄上、いったいどうしたっていうんだ。ミハルがどう――」
「お前には聞こえなかったのか、アドリオ！？　ミハルが……彼女が助けを求めている声が！」
思いもかけない言葉に、アドリオの顔色が変わる。ジードはそれ以上なにも言わず、そのまま踊り場へと走った。階段を駆け下り、未明の名を呼ぼうとして口を開きかけた時だ。
「じ、ジード様？　どうなさったんです、いったい……なにかあったんですか」
赤毛の小柄な娘が、青い目をぱちくりさせて立っている。どうやら大広間から出てきたところらしい。ジードにも見覚えのある少女だった。そう――忘れもしない、あれは、狼森（ヴォルムハルト）での……。
「……ヨナ？　お前……あの時の娘か。ウェス・ゴート家の荘園の……」
どこかで見たという記憶はあったのだが、それがはっきりと意識の中で合致しなかったのである。相手の娘は気圧されたようにこくこくと肯いた。ジードははっとし、ヨナの両肩をつかんだ。
「ヨナ、彼女を――ミハルを知らないか？」
あまりの剣幕に、さしものヨナの身もすくんだ。彼女は戸惑いながらもどうにか答えた。
「あ、あの……さっき、湯殿にご一緒したんですけど、忘れ物をされたって言って、お一人で脱衣場に戻られて……でもあんまり遅い

んで、あたし……」

様子を見に行こうと思って。そう続けるより先に、ジードは駆け出していた。その後ろ姿を見つめるヨナの胸に、にわかに黒雲が広がった。

「もしかして……ミハル様――」

独りごちるなり、彼女もまた走り出した。西の殿舎とは反対方向の渡り廊下に向かって。

その頃、現ウェス・ハーシュ卿ことオルグ・ヴィネックは、東の殿舎に設えられた図書室に独り籠っていた。ここは、数多の歴史書や古文書などが集められたいわば資料庫で、その重要性から、神殿の関係者以外は入室を禁じられている。もっとも、生粋の享楽家であるヴィネックにしてみれば、進んで足を運びたい場所では本来なかったのだが。

彼は広大な室内をとりあえず一巡し、目星をつけた箇所で――すなわち、イグノディアスに関する伝承が書かれていそうな文献の前で歩みを止めた。そのうちの一冊、赤茶に変色した大判の画集を引っ張り出すと、ぱらぱらとページを繰る。ふわりと漂うかび臭さに思いきり眉をしかめた。

違うな。これは伝承上の女神イグノディアスの姿に過ぎない。――やはり、依坐の娘について描かれた絵など、存在するはずもないか。

浅葱色の長い髪、透き通るような白い肌に漆黒の瞳。薄い眉。微笑んでいるのか、それとも睨んでいるのか――神々しさと淫靡さを同時に連想させる不思議な表情。古い時代の絵師によって描かれたそれは、あくまで世界樹（ラ・ミュゴン）のイメージから呼び起こされる女神の立ち姿であり、子どもでも見知っているありふれた図絵のひとつでしか

ない。

画集を閉じ、書棚に戻すと、ヴィネックは自嘲混じりのため息を吐き出した。人並みの畏敬心すら持ち合わせているとは言いがたい自分が、らしくもなくなぜこんな場所にいるのか。答えはわかり切っていた。

美沙紀（ミサキ）のためだ。

十九年前の彼女との出会い。それが仕組まれたものだったと知らされてからずっと、彼の心は揺れていた。ウルディノシスという神を、いや、その生まれ変わりの男たちを捜し出すための撒き餌。美沙紀にはそんな役目が課せられていたのだという。姿を消したのは、とにかくも一人目たる自分、オルグ・ヴィネックと接触したからなのだろうか。しかし、それでは残りの五人はどうなる？　なぜ彼女は夫と子どもを残して行方を眩ましたのだ？　それすらも神の思惑どおりだったというのか？

……もう一度――もう一度、彼女に逢うことはできないのか？

真実は、足りないピースのように、どこか欠けたままだ。「神降ろしの儀」で知り得た以上のなにかが、まだ靄（もや）の向こうに漠として蠢いている。ヴィネックは直感でそれを悟っていた。

だからここに来たのだ。神代（かみよ）の昔から伝わるあらゆる文献を総ざらいすることで、或いは手がかりを得られるのではないか。藁にもすがる思いで、彼は一冊一冊、資料を手に取っては書棚に戻すという地道な作業を続けた。

ようやく一架を洗い終え、次の列に移ろうという頃だった。けたたましいノックの音が、静かな空間に突如響き渡った。

私を救ってくれ。

悲痛な声でそう言い放ったカシアンは、ふたたびあたしに迫ってきた。

「ミハル、答えろ。いまこの場でだ。私を生かすのか殺すのか、すべてはお前次第だ。……答えてくれ」

滅茶苦茶だ。そんなこと、なんであたしに決められると思うんだろう。あたしは泣きながら首を横に振った。

「カシアン……カシアン、お願い、聞いて……わかって。こんなやり方じゃ、あなたはきっと満たされない。あなたが本当に欲しいのは、望んでるのは、もっと……もっと別のものなんでしょう？」

ぴくり、と彼の眉が動いた。あたしは必死で語りかけた。

「話し相手にならなれるよ。友達にならきっとなれる。ねぇ、そうなんでしょう？　あなたに足りてないものって、あなたが欲しがってるものって、本当はあたしなんかじゃなくて……」

あたしの言葉はそこで呆気なく遮られた。カシアンの唇に封じられたためだ。ややあって顔が離れ、耳元で低く囁くのが聞こえた。

「――どうしてわかってくれない？　私が本当に欲しているものがお前ではないだと？　お前は……それがお前の答えなのか、ミハル」

憎しみに近いほどの感情が、ひしひしと伝わってきた。

「カシア……」

「お前が好きだ。神の思惑など関係あるものか。お前を愛してる……ほかの男に触れさせるぐらいなら、いっそ……いっそお前を――」

首筋に、強い圧迫を感じた。カシアンの細い指が、その繊細さには似つかわしくないぐらいの力で、あたしの首を絞めようとしていた。みるみる意識が霞んでいく。あたしはいつしか目を閉じていた。

せめて最後に、ジード様に謝りたかったな。それだけをちらりと思った。

西の殿舎に設けられた、姫巫女専用の湯殿。棟そのものが男子禁制になっており、ジードでさえこれまで近寄ったこともない場所だ。

が、彼（ジード）は、なんの迷いもなく両開きの扉を押し開けた。――とい

うより、全身で体当たりしていた。
室内になだれ込んだジードの双眸が真っ先に捉えたもの。
それは、長椅子に仰向けに寝かされ、いままさにカシアンに陵辱されようとしている、未明の痛々しい姿だった。
哀れにも羽を毟られた小鳥さながらに、その衣服はところどころ引き裂かれ、白い素肌が覗き見えている。細い両脚はあられもなく割られ、その間に収まるようにして、男の――カシアンの下半身が押しつけられていた。もっとも、互いにかろうじて下穿きだけは身に着けたままではあったのだが。
ジードの思考回路はそこで完全に途切れた。
怒りが、ただ怒りだけが、脳髄から髪の一本一本に至るまで、文字どおり身体中を支配した。呼応し天井にまで燃え上がる、青白い焔。緑碧の瞳は、あまりに強い感情のために、赤みを帯びて輝いてさえいる。
ジードは一足飛びにカシアンの背後に迫った。相手が顔をこちらに向けるより早く、そのプラチナブロンドの長髪を右手でぐいとつかんだ。そのまま首をねじ切らなかったのは奇蹟と言っていい。標的は奇妙な声を漏らし、咄嗟のことに抵抗もできないでいる。
「貴様……よくも、よくもミハルを……！」
そんなせりふとともに、ジードは左手でカシアンの胸座を締め上げた。そして間髪入れず、渾身の力を込めた一撃を喰らわせる。鈍い衝撃音と、苦しげな呻き声が立て続けに聞こえた。だがジードの攻撃はこんなものでは終わらない。臙脂の絨毯の上にカシアンを押し倒すと、すかさず胸の上に跨り、拳を炸裂させる。固めた右手が徐々に赤く染まっていく。それでもジードは止まらなかった。
未明に近づくいかなる災厄も、彼女を自分から奪おうとするどんな男も、その存在を赦すことはできない。

呪いにも似た圧倒的なその想いに突き動かされ、ジードはカシアンを殴り続けた。このまま邪魔さえ入らなければ、おそらくは息の根を止めていたに違いない。しかし、「本懐」を遂げることは叶わなかった。

「ジード！　やめろ！」

唐突な制止の声――それは聞き慣れた父の、オルグ・ヴィネックのものだった。恐るべき力で背後からはがいじめにされ、動きを封じられる。幼い少女の悲鳴が続けて起こった。カシアンから引き離された自分と入れ替わるようにして彼のもとに駆け寄ったのは、先ほどどこかへと消えたはずのヨナだ。彼女は顔色を失くし、横たわる主君の血まみれの顔面を、自らのエプロンで必死で拭おうとしている。その様子をジードはしびれた頭のまま、ぼんやりと見つめていた。彼以外には誰も聞き取れないようなかすかな声が、知らぬ間に唇から漏れた。

――ミハル。ミハル、すまない……大丈夫だったか？

だが彼は、当の本人にその言葉を伝えようとはせず、静かに踵を返した。

どこか遠くの方で、花火が弾けたみたいな大きな音がした。

次の瞬間には、身体が軽くなっていた。首元を押さえつけていたカシアンの手が――というより、彼の気配がふっと消えたせいだ。あたしはぼんやり目を開けた。――それから飛び起きた。

「が……っ」

鈍い呻き声とともに、よろけて床に膝をつくカシアンの姿が見えた。すかさず彼の上に馬乗りになった誰かが、躊躇なく右腕を振り

上げ、そして振り下ろしている。青白い鬼火。灰色の髪。……あたしは、かすれた声をしぼり出していた。

「ジード……様……？」

そこにいたのは――カシアンの上半身を跨ぐようにして床に押しつけ、鬼気迫るいきおいで拳を振るい続けているのは、間違いなく彼、ジード様だった。

「貴様、よくも……よくもミハルを……！」

押し殺した、低い怒声。いったい誰が知らせてくれたのか、じきにこの場へ乗り込んできた旦那様がジード様をどうにか止めるまで、彼は息も接がずにカシアンを殴り続けた。あたしはなにもできず、ただその光景を見守っていた。

「若君！　しっかりしてください、若君っ！」

ヨナの取り乱した声が聞こえてきた。カシアンは床に倒れたまま、ぴくりとも動かない。そんな彼の様子に、ヨナは気丈にも自分のエプロンを引き裂くと、血にまみれたその顔を恐る恐る拭い始めた。痛みが意識を呼び戻したのか、カシアンの肩がびくんと跳ねたみたいだった。

――でも、あたしは正直、それどころじゃなかった。

ジード様は、旦那様の腕を振り払うようにして拘束を解くと、あたしたちにくるりと背を向けた。このまま出て行くつもりなんだ、そう思った瞬間、あたしは弾かれたように長椅子から飛び降り、一心不乱に駆けた。

「ジード様……ジード様！」

そして、ジード様の背中に抱きついた。ぼろきれみたいなドレスがまとわりついた、みっともない姿のまま。

婚約を解消した相手にこんなことされたって迷惑に決まってる。彼が助けにきてくれたのは、きっと、それでも、危なっかしいあたしを放っておけなかったから。ジード様はやさしい人だもの。……好きじゃなくたって、他意がなくたって、見殺しにはしないぐらい。だからせめて、最後に謝って、お礼を言って、そうしてお別れし

よう。この神殿から……ウェス・ハーシュ邸から出て行こう。
あたしは、本当にこの瞬間までは、そう思っていたんだ。
……でも、ジード様の反応は、思いがけないものだった。
「ミハル……」
それはあまりにも切ない声だった。顔は見えなかったけれど、泣いてるんじゃないかと思うほどの。――あたしの心臓は、一瞬でわしづかみにされた。どうしようもないぐらい、胸が震えた。
「……無事だったか。やつに……やつになにも、されなかったか」
はい、と答えようとした時だ。
あたしの耳の奥に、その先の言葉が不意に響き渡った。

ミハル、好きだ。お前を愛してる。私のそばにいてくれ。……頼む。

どうしてだろう。そんなはずもないのに、あたしはこの時確かに確信していた。以前にもあたしはこうしてジード様に助けられ、抱きしめられ、愛してると告げられた。既視感にしては鮮烈過ぎる、説明のしようがない、不思議な感覚。
「――ミハル……本当はいますぐに、いますぐにでもお前を……お前を抱きしめたい。その気持ちは嘘なんかじゃない。私は心の底からお前を……だが……」
あたしに背を向けたまま、ジード様はそうつぶやいた。なにかを必死で堪えてるみたいな、ひどくつらそうな声だった。
「ジード様……？」
「だが、その気持ちが本当に自分のものなのか、それがいまの私にはわからないんだ。すべてが神の意図なのだとしたら、私は……」
彼は絶句し、頭(かぶり)を振った。――すべてが神の意図？　それっていったい、なんの話なの？
「だから、ミハル。……待っていてくれないか。私は……私は、確かめなければならないんだ。真実を」

# 第四十話　約束

「真実……？」

ジード様の背中にしがみついたまま、あたしはぼんやりそう繰り返した。彼がなにを言いたいのか、正直、さっぱりわからなかった。

――そう、この時は、まだ。

どやどやと足音がし、にわかに室内が騒がしくなった。誰かに名前を呼ばれ、気づくと、身体がバスローブで覆われていた。ジード様はそれきりあたしから離れ、脱衣場を出て行ってしまった。あたしの伸ばした指先は、虚しく空をつかむばかりだった。

それはそのまま、あたしとジード様との間に広がった溝を表しているような気がしてならなかった。

未明を振り切るようにして脱衣場を出、中央殿舎に戻るまでの間、ジードは考え続けていた。

あんな姿で必死にすがってきてくれた彼女を、なぜ抱きしめてやることすらできなかったのか。彼は苛々と頭を振った。そして自答した。

――抱きしめたくないはずなどあるものか。だが……いまの私には、彼女を受け入れることは……。

未明の確かな温もりをその背に感じた時、全身の血が沸騰したのは錯覚などではない。愛している。振り返り、あの華奢な身体を掻

き抱き、唇を寄せ、そう告げようとして――できなかった。これほどに昂ぶる胸の内を、相手にぶつけることのできないつらさ。もどかしさ。葛藤に打ち克つことは叶わず、彼は結局、一度も未明を顧みることなくその場を立ち去ったのだった。

「ジード！」

友人の声が聞こえた。駆け寄ってきたホルツェンは、一見して様子のおかしい親友の姿に、またしても眉をひそめる。

「おい、いったいなにがあった？　ひどい顔色だぞ。どっかの部屋借りて、少し休んだ方が……」

「いや。そんな必要はない。祖父上に会わなければならないんだ。気遣いはありがたいが」

ホルツェンは訝しげに目を眇めた。「神官長殿にか？　話なら着いて早々してたじゃねぇか。なんでまた――」

「これ以上の真実を知りたいなら、義父上に訊いても無駄だぞ」

二人は同時に振り返った。聞き慣れた、少しばかり冷ややかな声――ジードの父、オルグ・ヴィネックがそこには立っていた。

「義父上は、彼が知っていることはすべて俺たちに教えてくれた。問い詰めたところでお前の欲しがってる答えなんぞ、くれやしねぇだろうな」

「……」

ジードは黙り込んだ。父の言葉が事実であることを、なんとなく感じ取っていたためだ。

「――それなら、どうしたらいいんです。このままでは私は前にも後ろにも進めない。私のこの気持ちが、すべて神の思惑によるものなのか……そのことを確かめない限り、私には身動きが取れない。ミハルを……ミハルを護ってやることが、いまの状態ではできないというのに！」

端正な顔が苦しげに歪んだ。アドリオと対峙していたあの時、耳に飛び込んできたのは、自分に助けを乞う、最愛の娘の声だった。カシアンに陵辱されかけ、恐怖に怯えて発せられたに違いない、悲

痛な叫び。そもそも、なぜあんな事態を招いてしまったのか？　決まっている――すべては自分のせいだ。自分が隙を作ったせいで、誰よりも大切なはずの未明を、あんな目に遭わせてしまったのだ。

三人の間に、沈鬱な空気が流れる。その時だった。

「お前には覚悟があるのかの。――ジードや」

錫杖（ブーレ）の音とともに現れたのは、イシオス神殿の長、イシュレー神官長だった。いまだ体調は思わしくないに違いない。背後にはまだ年若い二人の小姓が、気遣わしげに付き従っている。ジードは瞠目し、祖父の言を繰り返した。

「覚悟？　それはどういう意味です、祖父上」

「真実を知る覚悟じゃ。あの娘についても、お前たちの宿命についても、一点の曇りなき、動かしようのない真実をの。それがあるというのなら、審議院に出向くがよい。或いは道が開けるかもしれんからの」

「審議院に？」

ジードとヴィネックは異口同音にそう返した。イシュレーはかすかに肯いたようだった。

「すべての核心は、審議院によって秘せられておる。そのことに感づいてはおったが、いかんせんわしはこの神殿を護らねばならぬ身じゃ。おいそれとここを離れるわけにもいかぬ。……じゃが、ジード。お前にもしも、真実を受け入れる覚悟があるというのなら、旅立つのも悪くはなかろうて。審議院を擁する、要塞島にの」

未明と自分に未来への標（しるべ）を教える、たったひとつの、動かしようのない真実。

――考える間もなく、ジードは即答していた。

客間を借り、着替えとして持参していた簡素なドレスに着替えた

未明を、アドリオはやるせない想いで見つめていた。
カシアンによって蹂躙されようとしていた彼女を救ったのは、ほかでもない彼の異母兄、ジードだ。さらに彼はこんなことまで言っていた――そう、未明が助けを求めていると。なのに自分には察知することができなかったのだ。未明の身に迫る危険も、彼女の心の叫びさえ。
そうして助け出された未明は、当然のようにジードの背にすがりついた。彼に続いて現場に駆けつけた自分の存在など、目にも入っていないとでも言わんばかりに。
「ミハル、気分は悪くないか？　休んでいなくて平気か」
それでも彼は努めて明るく声をかけた。長椅子に彼女を座らせ、その隣に自分も掛ける。だが、肩に腕を回そうとしたところ、やんわりと拒否された。――胸に亀裂が入ったような痛みに襲われた。
「ありがとう、大丈夫です。あたし……あの、アドリオ様、『見送り人』のことですけど……」
未明はひどく申し訳なさそうな顔で自分を見ている。アドリオの鼓動がどんどん速まっていく。
「あの方法……あきらめようと思うんです」
それは、心のどこかで予想していた答えでもあった。だがアドリオは喘ぐように問い返していた。
「あきらめる？　あの男が言っていた、『見送りの儀』をか？　なんで……どうしてだよ。条件ならそろうじゃないか、俺と――兄上が無理だとしても、ほかにだって……」
未明は微苦笑し、首を横に振ってみせた。
「あたしを好きだと思ってくれてる人を利用するなんて、やっぱりよくないです。――ごめんなさい、アドリオ様。そもそもそのためにここに来たっていうのに。……それに、あの……あの時の返事ですけど、あたし……」
どくん、とアドリオの心臓が、厭な音を立てた。なんとか話題を逸らそうとし、やみくもに口を開きかけた時だった。唐突にドアが

開き、レノラが入ってきたのである。
「ミハル！　こんなところにいたんですの、さぁ、早くこっちにいらして！　急がないと間に合いませんわ」
彼女はひどく慌てているようで、真隣のアドリオには見向きもせず、未明の腕を忙(せわ)しく引っ張った。
「れ、レノラさん？　どうかしたんですか、いったい……間に合わないって、なにに」
レノラは苛々と告げた。
「ジードが、あの人が、すぐにここを出るっていうんですわ。なんでも要塞島に向かうとか……あなた、まだ彼とまともに話もできていないんでしょう？　出立前に一言でも、おっしゃりたいことを言ってやるべきですわ！　さ、とにかく一緒にいらして！」
「えっ――」
未明は弾かれたように立ち上がっていた。そしてレノラに手を引かれるまま、客間を飛び出した。
一人残されたアドリオは、彼女を追う気概すら湧かず、ただ深いため息をつき、額に拳をついた。

旅支度を終え、マントをまとい、神殿所有の駿馬に跨ったジードは、いままさに第一歩を踏み出そうとして、名残惜しげに唇を噛んだ。
痛烈に後ろ髪を惹かれていた。……せめてもう一度、未明に会いたい。あの微笑みを胸に刻み込んでいきたい。たとえどんな真実が知れようと、彼女を忘れることなど自分にはできないだろう。
わずかに頭を振り、手綱を引き絞ったその時。
名前を呼ぶ声が聞こえた。
ジードは振り返った。堪えることはできなかった。
「……ジード様っ！」

駆け寄ってくる少女が見えた。ドレスの裾にもつれそうになりながら、頬を紅く染めて神殿入り口の階段を駆け下りてくる少女が。

「……ミハル……」

着替えにと用意してきたのだろう。剥ぎ取られた黄色いドレスの替わりに着ているのは、模様のないシンプルな白いワンピースだ。だが、そんな飾り気のない恰好だろうと、ジードの目には、どんな華やかな美女よりも愛らしく映る。彼は唾を呑み込み、ようやく口を開いた。

「――怪我がなくてなによりだった。もう少し休んでいた方がいい。気兼ねする必要はないから」

馬上からの言葉に、未明はこくんと肯いた。それから言った。

「さっき……ありがとうございました。お礼を言いたくて……」

「……」

返事をしてやりたいのに、相応しいせりふが出てこない。言いたいこと、話したいことなら本当は山ほどある。なのに告げられない。あふれそうになる気持ちを、うまくまとめることができないのだ。

未明はそれ以上言いよどみ、顔を伏せた。二人の間に、またしても気まずい沈黙が流れた。

「あの、えーと、き、気をつけて行ってきてくださいね。……それじゃあ」

ぎこちない笑顔を浮かべると、彼女は踵を返そうとした。ジードは――自分でも知らぬ間に――叫んでいた。

「ミハル！」

びくん、と未明の肩が跳ねた。足が止まり、恐る恐る、彼女はジードを見上げた。ジードは大きく息を吸い込んだ。

「――私はこれから、審議院に発つ。戻るのは数日後になると思う。その間……ここで待っていてくれないか」

未明の頬が、みるみる紅潮していく。

「必ず戻ってくる。そして……戻ってきたら、真っ先にお前と話がしたい。だから、ここで……ここで私を待っていてくれ。ミハル」

ありったけの誠意を込めて、ジードは愛する娘の瞳を見つめた。いまの自分に表せるだけの愛情のすべてをぶつけたつもりだった。果たして、未明は肯いてくれた。嬉しそうに微笑みながら。

「待ってます。ずっと、ここで。あたし、ずぅっと……待ってますから」

いとおしさが込み上げた。ジードは右手を伸ばしていた。差し出したその手を、おずおずと未明は取った。手のひらの、指と指だけの抱擁。

それはまるで、抱きしめ合って交わす、激しい口づけのようだった。

聖山、オルド・カルマ。ロマド駅舎を麓に抱える、五大陸でも霊峰の聞こえ高い神山である。

早暁、不吉なほどの朝焼けが、カルマ山の隅々までを紅く染め上げた。――その一隅にひっそりと建つ、小さな庵を除いて。

「なんとも不気味な光景であることよ。ここいら一帯だけを、日の光までが避けるようにして……あの男、やはり、ただの隠者ではないのだな。供物であったというだけでなく」

人気のないはずの界隈に佇む唯一の人影があった。ツギを当てた黒い装束に身を包み、伸ばし放題の蓬髪を無造作に後ろでくくっているそのさまは、どこか破戒僧を思わせる。――いや、事実、彼は神殿に叛旗を翻した身の上だった。

「オルヌ。勝手に周辺をうろつくな。お前の気は、辺りの空気を濁らせる」

低く鋭い声が不意に響き渡った。さしもの元副神官、ラルモ・オルヌすら、咄嗟に狼狽を禁じ得ないほどの、それは威圧感に満ちた声だった。が、彼はすぐに常の様子に戻り、くすんだ青銅色の双眸に不敵な笑みを浮かべてみせる。

「これはテオルーグ殿。なに、こうして隠遁の日々を送るのにも、少々飽きがきましたもので。……例の娘、あれきりここへは姿を見せませんな。条件をそろえるのに苦心しているのか、それとも……」

もったいぶったように言葉を切り、続けるオルヌ。

「あなたのことを、よもや疑っている……ということも、或いは考えられますな」

「……」

現れた男の表情は一片も変わらない。十二年前、ここオルド・カルマに庵を結び、隠者として独り蟄居の日々を過ごしてきた、テオルーグ・シス・イグニオスである。オルヌはさらに言い募った。

「儀式を行うのなら早い方がいい。そう言われたのは、あなたではありませぬか。テオルーグ殿」

「いかにもそうだ。だが、一両日中というわけにもいくまい。おそらくあの娘、条件を備えた男を探すため、奔走している最中なのだろう。自分のことを心から愛している人間など、親きょうだいを除けばそうそういるものではない」

あの娘――あの未明という、奇異な運命を背負った娘がこの庵を訪れたのは、一週間ほど前のことだ。

彼女が来たことに、テオルーグはすぐ気づいた。気配を感じたからだ。フェロキオン遺跡の地下に、その名のとおり「神への供物」として監禁されていた頃に培われたのか、彼には確かに不思議な力があった。ある種の予知能力とでも言おうか、近未来に起こり得る出来事を、前もって知ることができるのである。

なにがおかしいのか、オルヌはくぐもった笑い声を上げた。痰が絡まってでもいるように聞こえるその笑い方は、テオルーグにしてみれば心底耳障りだった。

「しかもそうやって連れてこられた男が、まさか贄として使われるとは、あの娘、毛の先ほどにも思ってはいないでしょうな。いや、哀れなことだ……なにも知らずに、娘のために命を奪われるとは……実に哀れだ」

日本という、娘が元いた国へ帰るための方法としてテオルーグが授けてやった「見送りの儀」――それは餌に過ぎなかった。そんな国がどこにあるのかも、帰る手段があるのかどうかも彼にはわからない。要するに、真っ赤な嘘なのである。

重要なのは、娘を心から愛するという二人の男。二人でなくてもいいが、ともかく複数であることが肝要だった。そう、女神イグノディアスを意のままに操る「色付けの儀」を、今度こそ成功させるためには。

半年以上前、『黒の経典（ザモド）』を頼りにオルヌが独断で行った同名の儀式は、あえなく失敗している。その理由を問う彼に、テオルーグはこう説明してやったものだ。

「お前が手に入れたというその経典は、しょせん原本の不完全な写本に過ぎん。私の持っている『暁の経典（エリグザード）』のな。……それによると、女神を完全に『色付ける』ためには、正しい供儀が必要なのだ。その辺の小娘の首を掻き切ればすむというものではない」

「しかし……しかし、あの娘にはあの時、確かに女神が……イグノディアスが憑依していたはずです。私だけではない、ウェス・ゴート卿も、それにあの屋敷の執事も見ているんだ、あの娘が……あの依坐（よりまし）の娘が半透明に薄らいで、宙に浮いているところを！」

顔色を変えて反駁するオルヌの言を、だがテオルーグはあっさりと封じ込めた。

「その男一人では用が足せなかったのだな。――単純なことだ。贄は単独ではだめなのだ。それでも奇蹟が起きたのは、おそらく、その男が……条件を満たしていたからなのだろう。依坐の娘に心酔しているという必須条件を」

ウェス・ゴート邸の礼拝室で行われた秘儀の際、たまたま手に入れたに過ぎないオルグ・ジードという贄は、偶然にも、真の「色付けの儀」には欠かせない条件を備えていたのだという。だから不完全ながら、娘は依坐としての力を取り込み、いずこへともなく消えた。神力の影響か、死んだはずの贄たちを生き返らせるという離れ

業まで見せつけて。

「では、あの時、もしも娘に惚れている男がもう一人いたなら――そしてそいつを殺してさえいれば、私の悲願は達成されていたと？　そういうことなのですか、テオルーグ殿」

オルヌは、この年若き隠者の胸座にすがりつかんばかりにして問いかけた。テオルーグはかすかに嫌悪を示しつつ、黙って肯いたのだった。

「……ともかく、中に入れ。気が乱れることで、やつらにこの場所を知られないとも限らんからな」

肩をすくめると、オルヌはあえて逆らおうともせず、のっそりと庵に消えた。その後ろ姿を眺めるテオルーグの表情には、あきらかな侮蔑の色があった。

イシオス神殿の元副神官を名乗る彼を――ラルモ・オルヌという人物を気に入ったわけでは、間違ってもない。

それならなぜ、この胡乱な男に協力してやっているのか。それはひとえに、テオルーグ自身が抱く、神殿や審議院に対する根深い怨恨に端を発していた。

彼はかつて、神殿の関係者と名乗る男たちによって拉致され、わけもわからないまま見知らぬ土地に連れて行かれ、挙句、七年間も幽閉されたという過去を持つ。そこで彼は自分がどういう星の下に生まれついたかを知った。――ウルディノシスという男性神の魂を分かつ、六人の男の一人であるということを。

だが、真実を知らされたところで、彼の中には神に対する畏敬も、神殿や審議院についての敬慕も湧いてはこなかった。彼らはあくまで高圧的で近寄りがたく、心を赦すにはほど遠い存在であり続けた。ほかの五名の居所が確定次第、「次の処置」に移ろうとしていることに薄々感づいていたテオルーグは、隙を突いてフェロキオンから脱走。聖山に逃れて庵を結んで以来、一切を忘れて独りひっそりと生活していたのである。

しかし、忘れたはずの恨みは、消えてはいなかった。オルヌに野

望を打ち明けられた時、彼はそのことを自覚した。

だから、手を貸してやってもいいと思ったのだ。「色付けの儀」を、邪な信望に駆られた教徒によって伝えられてきたあの秘儀を成功させることで、自分を貶めた審議院の連中を出し抜くことができるのなら、と。

その彼の手元に、なぜ聖典の原本ともいえる『暁の経典（エリグザード）』があるのか。そこには不思議な因縁めいた経緯があった。

着の身着のままで遺跡を抜け出し、キニッサの船着場に潜り込み、なに喰わぬ顔で船を降りようとした時だった。背後からテオルーグ少年に声をかける者がいた。あからさまにうろたえ、振り向いた彼の前に差し出されていたのは、幽閉生活の中でなんどか目にした憶えのあるあの聖典だった。薄汚れた濃緑の表紙、黄ばんだ草髄紙（フェノメット）でつづられたページ。忘れ物だよ、坊主。――観光客らしい、暢気そうな中年男の声が、いまだに耳の奥にこびりついている。

少年は、テオルーグは、操られたようにその本を受け取った。だがすぐ我に返り、直後、道端に棄てた。それなのに、気づくとそれは自分のそばに戻ってきていた。そういうことが数回あり、結局、彼はあきらめたのだ。好きにするがいい。そんな心境だった。

自らも庵に戻り、愛用のロッキングチェアに浅く身体を預け、目を閉じる。たちまち瞼の裏に、あの新しい依坐の娘が――未明という名の娘の面影が蘇った。焦げ茶混じりの長い髪、愛らしくも神秘的な瞳、親しげな微笑。温かな肌。自分を呼ぶ、どこか頼りなげな声。……血が熱くなる。手のひらが汗ばみ、いてもたってもいられない。会いたい。あの娘にもう一度。もう一度会って、あのやわらかな肌に触れて、そして――。

それが、おのれの持つ宿命の故だとわかっていても、逆らうことなどできないのだ。

「……『見送りの儀』がでっちあげだったと知ったら、お前はどうするだろうな。ミハル」

彼は自嘲気味につぶやいた。

## ◆閑話 - ヨナ・フォルス嬢の独白 -

カシアンはウェス・ゴート家を出るにあたり、折に触れてこぼしていたものだ。

――自分の正妻となるべきミハルは、あの憎き（にっく）オルグ・ジードに囲われ、自由を奪われてしまっている。婚約？　あの男が便宜的にそう表現しているだけだ。そもそもやつには生まれた時からの許婚がいるのだからな。そんな身分でミハルを誑（たぶら）かそうとは、勘違いにもほどがある。だからこそ猶予はならないのだ、一刻も早くこの私が、彼女を……ミハルを助け出してやらねば。

ヨナは彼の熱弁を、話半分で流すのが常だった。執事のバージェットの弁ではないが、カシアンは確かにいま、恋に狂っている。相手の娘の意向など、聞く気があるのかどうかも疑わしい。しかしそれでも、できるなら彼の悲願を叶えてやりたい――片想いの相手である未明という娘と、どうにかして添い遂げさせてやりたいとも、ヨナは思ってはいたが。

だが……ヨナははす向かいに憮然として腰掛ける主君の顔をちらりと見、深く嘆息した。その白い左頬には、つい先ほどアドリオに見舞われた拳のあとが、赤い痣となってくっきり浮かんでいる。制裁の理由は言うまでもない。

……ミハル様をお好きなのは、もう、厭というほどわかりました。あたしもできる限り若君に協力するつもりです。ですから、若君、もう少し――もう少しだけ、ご自分を抑えてくださいっ！

ヨナはその小さな胸を痛め、祈るように目を閉じた。
果たしてその祈りが天には通じなかったことを、彼女はこの数刻後、残酷にも思い知ることになる。

「お具合はいかがです、フロンジーネ（お嬢さん）」
氷の入った盥（たらい）と下ろしたてのタオルを手に入室してきたのは、神官長補佐、シグルだった。慇懃かつ物静かな青年で、使役人に過ぎないヨナにもすこぶる礼儀正しい。ヨナは慌てて立ち上がり、頭を下げた。
「も、申し訳ありません、ご面倒をおかけして」
年若いヨナも、このイシオス神殿がどれほどの権威を誇る場所であるか、多少は心得ている。そんなところで起こしてしまった騒動――自分さえしっかりしていれば止められたかもしれないのに。その想いに、彼女は先刻からずっと囚われていた。
が、しきりに恐縮する彼女を、シグルはどこか気の毒そうに制した。
「そうお気遣いなさらず。こちらとしては、カシアン殿が回復されるまで、いくらでも滞在してくださってかまいませんから。……ウェス・ハーシュ卿じきじきに仰せつかってもおりますので」
「え……はぁ……」
一礼し、部屋を出て行くシグルを見送るヨナの脳裏に、あの風変わりな同行者の顔が浮かび上がった。カシアンの父、ウェス・ゴート卿と同い年とはとても思えない、あまりに若いその容貌。そしてあけすけで気取らない性格。どこか遊び人めいた、ざっくばらんな物言い。
……あれがあいつのいいとこなんだろ。欲しいもんのためには手段なんか選ばねぇ。な、お嬢ちゃん。

来る途中の停留所では、そう言って意味深に片目を瞑られたっけ。……そうだ、あの時は確か、なにか大事な話をしてたんだ。アドリオ様と三人で。でも――なんの話だったかしら……？　記憶を手繰り寄せようとして、眉根を寄せた時だった。

「……さま……」

眠り続けるカシアンの頬が、引き攣れたようにぴくりと動いた。或いは傷が痛むのか、整った眉が苦しげに歪んでいる。ところどころガーゼに覆われてはいるものの、唇はどうにか動くようだ。ヨナは咄嗟に目を瞠り、その口元に耳を寄せた。

それはひどく小さな声だった。だが、ヨナにははっきりと聞き取れた。

母様、ごめんなさい。護ってあげられなくて。――彼はそうつぶやいていたのである。

「若君……」

ヨナはそれきり絶句した。言葉が出てこなかった。おそらくカシアンは、幼少時の夢を見ているのだろう。それも彼にとってはもっともつらい時期に違いない、母親を亡くした頃の。

「若君――」

ヨナの手が、自然に伸びていた。そしてガーゼ越しに、カシアンの頬に触れていた。温かな人肌に安心したのだろうか。カシアンの表情は、ほんのわずかに安らいだようだった。ヨナの胸の内は、しかし、猛烈に痛んだ。

ミハル様が欲しいんだと思ってた。でも――そうじゃないんだろうか。もしかして……この人が欲しがっているのは、もっと、根本的な……。だとしたら――。

ウェス・ゴート邸に戻り次第、ヨナは職を辞するつもりでいた。というより、すでに解雇されているに違いないとも思っていた。だが、それでもかまわない。あとどれだけともに過ごせるのかはわからないが、少なくともいまだけは見守っていてやりたい。この、九つも年上とはとても思えない、危なっかしい主君のことを。

ヨナはカシアンの手を取り、しっかりと握った。目を覚ましたらさぞ怒鳴りつけられるだろう。その場面を想像し、なぜだか失笑していた。

## ◆閑話 - 幸福の花 -

お茶の時間もそこそこに、ジードは自邸の持つ広大な庭園に出た。七日前に夕暮れのカルマ駅から連れ帰った娘を捜すためだった。

彼女に関する責任は、次期当主たるこの自分がすべて負う。そう家人に宣言した手前もある。女官長のパドマに面倒を押しつけたままというのもよくはないだろう。一般常識を含め、教えられることがあれば、自分が導いてやらなければ。そんな風に、彼はおのれに向かって言い聞かせていた。

あの娘、未明は、メイド見習いとして屋敷に住み込み、いまは簡単な手伝いを覚えることから教育が始められている。パドマに彼女の所在を訊ねると、こんな答えが返ってきた。――今日は、午後からお庭の手入れを見学してもらおうかと思っておりますけれど。そうご心配なさらなくても……力仕事というわけじゃございませんからね。

部屋を抜け出し、庭を歩き回る。トピアリーの一群を抜けた先に、捜している娘の後姿を見つけ、ジードは思わず駆け出していた。

未明の左腕には、すでに大きな白百合の束があった。ジードの亡き母、イレイラのために設けられた花園で摘んだのだろう。具合のいいことに、周囲には庭師の姿もなければ、ほかのメイドたちもいない。そう考えている自分に気づき、ジードは慌てて頭を振っていた。

「ミハル」

声をかけると、彼女は弾かれたように顔を上げた。その頬がわずかに紅潮する。ジードは大股に近づくと、未明の腕に収まっている

花束に目をやった。その中には、大陸の固有種である、有名なあの花がなかった。

「そうか。それを摘むためにこっちの庭園に来たんだな」

ジードは肯き、目の前に広がる花の群れを見やった。そこには一面、どこか素朴な美しさの漂う小ぶりの花が咲いている。晩秋の緩やかな風を受けて揺れる、愛らしい花々。

学名をユニシオス・フューレ。「無償の愛」を意味する、ユニスの花だ。

原種の花は黒で、元々は低地には咲かない高山植物であったらしい。霊山として知られるカルマ山（オルド・カルマ）に自生していた野生種を、キニッサのとある神官が神殿に持ち帰り、栽培を試みたのが現今の始まりとされている。星の形に開いた花弁は五枚であることがほとんどだが、まれに、六枚のものも存在する。

「それを見つけた者には幸運が訪れるそうだ。白のユニスならなおさら希少性が高く、『ご利益』があると聞くな」

白いユニスは愛の象徴として聖書にも記されている。人工交配から生まれた紫種ほどめずらしいわけではないが、その清楚な色は広く一般に好まれ、親しまれている。ジード自身、もっとも好きなのはやはり白色種（はくしょく）だった。

話の内容はほとんど理解できていないのだろう。未明の顔には曖昧な微笑みが浮かんでいる。ジードは苦笑した。

「花を愛でるのに理屈などは不要だな。――こうすればいい」

ジードは未明の腕の中から一輪のユニスを抜き取ると、茎の部分を適当に手折ってから彼女の髪に挿した。思わぬ行為に驚いたのか、未明の大きな瞳がさらにまん丸になった。

「……、……」

うろたえたようになにかを口走るのが聞こえた。元より聴き取れるはずもないそれらの言葉は、ジードの耳をただやさしく撫でた。小鳥の囀り。歌うような声。

可愛い、と心底思った。

「ジードさま」

たどたどしく名前を呼ばれた瞬間、彼ははっと我に返った。慌てて未明の髪から手を離し、やみくもに咳払いをする。その時だった。

「あ、ありがと、ございます」

大陸共通語（イーザリア）での謝辞。確かに未明はいま、そう言った。ジードは目を見開き、思わず口元に手をやった。当の未明は、照れからか、視線を逸らせてその場に屈み込んだ。と、ふいにその瞳が輝いた。

「あ――」

歓声を上げながら手を伸ばした先には、一輪の花房があった。ところが、次の瞬間。

小さな悲鳴とともに、未明は顔を歪ませた。茎の辺りに触れた指先を見ると、ぽつんと血がにじんでいる。

棘にやられたのだ、そう理解するより先に、ジードの腕は素早く動いていた。彼は未明の右手をつかむと、その細い人差し指を、なんの躊躇もなく口に含んだ。

「――」

絶句し、硬直する未明。顔のみならず首筋も耳たぶも見事に赤く染まっていく。けれどジードはその行為をやめようとはしない。くわえた指先を、その傷口を、丹念に舌で舐め、労わるようにやさしく吸う。

しばらくそうしたあと、ジードはそっと口元から未明の指を離した。それから、照れたように笑って言った。

「……母が昔、よくこんな風に傷の手当てをしてくれたんだ。私もそうだが、弟のアドリオもやんちゃで、庭で遊んではどこかしら怪我をして……そのたびにこうして――」

そこまで語ったところで、ジードはふと気づいた。未明の指を傷

つけた花の、その特徴に。
「ミハル、それは……その花は」
あらためて手を伸ばし、茎に用心しながら花弁を検める。びろうどのようにやわらかな、白い花びらが六枚。
幸運の白いユニスが、風に揺れていた。

思わず顔をほころばせて未明を見る。真っ赤な頬を隠すようにしてうつむく彼女に、ジードの胸がどうしようもないほど強く疼いた。彼はなにも言わずにその花を手折り、未明の抱えている花束の上にそうっと乗せた。
それから、小さな声でつぶやいた。
「傷口の手当てを、きちんとしておいた方がいい」
それだけ言うと、ジードは静かにその場を立ち去った。いま、いったい自分はどんな顔をしていることだろう。足早に邸内に戻り、自室のベッドにその身体を投げ出す。唇に触れると、あまりにやわらかい肌の感触が、あのふんわりと甘い香りが、鮮やかに蘇り、彼をやさしく包み込んだ。

――六枚の花びらを持つユニスは、幸運の使者。

「見つけたのは私もはじめてだが……言い伝えも、あながち間違ってはいなかったんだな」
ぼうっと熱を帯びた眼差しのまま、ジードは独りごちていた。

# ◆人物紹介

## ■主要登場人物■

□久世（くぜ）　未明（みはる）
主人公。大学一年の夏休み、電車での帰省中に異界へ飛ばされる。
語学に強い。

□オルグ・ジード・レア・ウェス・ハーシュ
連邦有数の名家、ウェス・ハーシュ家の跡取り息子。灰色の髪と緑
混じりの碧眼の持ち主。生真面目な性格。

□アドリオ・マレストゥス・ミトラ・ウェス・ハーシュ
ジードの異母弟。母親似の黒髪、黒褐色の瞳、やや浅黒い肌を持つ。
一匹狼的な性格。

□オルグ・ヴィネック・シオン・ウェス・ハーシュ
ウェス・ハーシュ家現当主。酒と賭け事、美女をこよなく愛する生
粋の享楽家。

□カシアン・レグノ・ウェス・ゴート
ウェス・ハーシュ家の筆頭の政敵、ウェス・ゴート一族の次期頭領。
プラチナブロンドに長身痩躯の美青年。ジードとはなにかと反目し
合う間柄。

□ヨナ・フォルス
カシアンの側仕えとしてウェス・ゴート家に勤める、赤毛に青い目
の純朴な少女。

□ヴァリー（ヴァルシリー・イェセニック・ウィドラー）
都市国家エンザンテに暮らす豪放な青年。地下組織「インヴォルタン」を率いるリーダー。連邦の貴族の血を引いている。

□瀬川（せがわ）　美沙紀（みさき）
蓼科でペンションを経営する日本人女性。十七の時、未明と同じように異界へ呼び込まれた経験を持つ。アドリオの実母。

□テオルーグ・シス・イグニオス
ロマドの聖山、オルド・カルマで隠遁生活を送る世捨て人。神通力を操る。浅黒い肌、白い髪、群青の瞳を持つ。
「シス・イグニオス」は神代語で「神への供物」を意味する。

□ラルモ・オルヌ
謎多き怪僧。元はイシオス神殿に仕えていたが、野望の実現のため反旗を翻し、テオルーグに接近する。

□イシュレー・チェンマ・リン・ノルド
連邦きっての大神殿、イシオス神殿の長。ジードとアドリオ兄弟の祖父。

■ウェス・ハーシュ家関係者■

□イレイラ・アンシニー・マディア・ウェス・ハーシュ
ヴィネックの従姉にして亡妻。ジードの実母。美貌と知性を併せ持ち、「高貴なる百合」と呼ばれた。

□アーシア・レノラ・リン・ノルド

高位の神官一族であるノルド家の娘。ジードの従妹にして元許婚。連邦でも名高い美女だが、性格はやや高慢。「レノラ姫」と呼ばれている。

□ユ・テラ・セリー・ウェス・ハーシュ
双子の姉。「ユ・テラ」は神代語で「永遠」の意味。

□ユ・ゼル・ティフォン・ウェス・ハーシュ
双子の弟。「ユ・ゼル」は神代語で「真理」の意味。

□パドマ・ルジナ・イルト
ウェス・ハーシュ家の女官長。家庭的で面倒見がよい。が、教育にはうるさく、時に厳格。

□ピア・シューリエル・エフェナー
ウェス・ハーシュ家に勤めて二年目のメイド。好奇心旺盛で未明と仲良し。

□ヴェルマー・ヘッケル・レンドルス
ウェス・ハーシュ家執事。融通の利かない、神経質な性格。

□ノラン・パエロ・ロモッカ
ウェス・ハーシュ家の馬丁。暢気で人当たりがよい。

■大学府関係者

□ワンジオ翁
学府長とロマド市長を兼任する、年齢不詳の老人。極端な矮躯（きょうく）の持ち主。

□ホルツェン・オルレアド・シモン・ライゾック
大学府の学生で、ジードの親友。回漕問屋の息子。明るく快活な性格。

□レミット・ウォーザロワ・キッファン
大学府の学生で、ジードの親友。大農園の息子。言動はやや幼く、無邪気。

■ウェス・ゴート家関係者

□ゾデュー・エリアック・ウェス・ゴート
ウェス・ゴート家現当主。カシアンの父。非常にプライドが高く、やや頑迷。「オサイオンの宰相」「公主様」とも称される。

□クリスティア・シュリーナ・ツェザリアン
カシアンの母。低位の神官の家系の出で、病弱。「オサイオンの聖なる乙女」と謳われるほどの美貌の持ち主。

□ユイル・ジェンセン・バージェット
ウェス・ゴート家の執事。ヨナに一目置いている。

■その他

□シグル・ノディエ
イシオス神殿に勤める寡黙な青年。身分は神官長補佐。レノラを密かに想っており、そのため、彼女の企みに加担することになる。

□ゼノン
弟分としてヴァリーの家で暮らす、九歳の少年。はしっこく快活な

性格。

□ロナジア・リータ
「春の街（ウェイ・モルド）」の酒場、「銀鼠」のマダム。昼間は占いを生業としている。ヴィネックの目下の愛人だが、彼の正体は知らない。

□久世（くぜ）　榛名（はるな）
未明の妹。高校二年生。

□瀬川（せがわ）　淳（じゅん）
未明の友人。同じ大学に通っている。美沙紀の息子で、顔立ちがどことなくアドリオに似ている。

## ◆これまでのお話

■第一部

大学一年の夏休み。帰省のために電車に乗った未明は、あるトンネルを抜けた先で、見知らぬ異国のような町に迷い込む。言葉も通じない状況に途方に暮れる中、「身元引受人」として現れたのは、名門の御曹司である美貌の青年、オルグ・ジードだった。メイドとして彼の家で働くことになった未明は、仕事のかたわら、言葉やしきたりについてジードやその異母弟アドリオから学び、日本に帰るための方法を模索する。一方、そんな彼女にジードはだんだんと惹かれていき、初めての恋を自覚するも、言語的な齟齬や、通っている大学府の「禁忌」のせいもあって想い合うにはいたらなかった。

屋敷勤めを始めて二ヶ月が過ぎる頃、未明は、女官長のパドマに頼まれ、ジードの通う大学府までお使いとして赴くことに。ところが、辿り着いた大学府の構内で、思わぬトラブルに巻き込まれ、誘拐されてしまう。彼女を攫ったのは、ジードの同期生の一人であり、名家として知られるウェス・ゴート家の跡継ぎでもあるカシアンだった。特異な環境で育てられた彼は人一倍他人からの愛情に飢えており、やがて未明に異常ともいえるほどの妄執を抱くようになる。彼女を妻に迎える意思を父、ゾデューに告げるカシアン。だがゾデューには息子とはまったく別の思惑があった。

ウェス・ゴート邸に以前から出入りしていたラルモ・オルヌ――連邦きっての大神殿、イシオス神殿に仕える副神官を名乗る男に懐柔されたゾデューは、政教一体という基本方針を採る国家における自家の地位を高めるため、彼に協力することを思い決める。この世を支配する女神イグノディアスを意のままに操る「色付けの儀」を

成功させるには、「依坐（ヨリマシ）」と呼ばれる触媒の娘が必要不可欠だった。未明こそがその娘である可能性が高いと踏んだ二人は、彼女を捕らえ、儀式を断行する。一方、未明救出のためにウェス・ゴート邸に乗り込んだジードとアドリオだったが、ジードはカシアンに刺殺され、アドリオは牢に囚われてしまう。そして儀式が始まるも、未明に語りかける「神の声」は、ジードの命と引き換えに、ある提案をするのだった――。

■第二部

儀式の最中に意識を失くした未明は、なぜか現代日本に戻っていた。異界での記憶はそのほとんどが抜け落ちていたが、冬休みに訪れた蓼科で、地元のとある廃随道に赴いた際、ふたたび異界へと迷い込んでしまう。

フェロキオンと呼ばれる古代遺跡前に倒れていた未明を介抱したのは、イシオス神殿の神官長補佐、シグルだった。彼から未明の話を聞き出したジードの従妹、レノラは、許婚でもあるジードが心変わりしてしまったのは彼女のせいだと悟り、彼を取り戻すために未明を亡き者にしようと画策する。計画は実行され、未明は薬を盛られた挙句小舟に乗せられ、大海へと流される。

一方、未明の行方を捜し続けていたジードは、レノラとの婚約も破棄し、わずかな手がかりを元に船での探索に出る。その頃、未明は海を隔てた隣国エンザンテに漂着し、ヴァリーと名乗る気のいい青年のもとで世話になっていた。反政府組織「インヴォルタン」を統率するリーダーであることを打ち明けても態度の変わらなかった未明に、ヴァリーはやがて心を寄せるようになっていく。密貿易を目的とした船旅に未明を同行させ、愛を打ち明けるものの、その気のない未明は彼を退ける。また、航海の途中で、気慰めのための船

旅に出ていたカシアンと偶然鉢合わせるも、未明には彼に関する記憶がないため、身に覚えのないカシアンの態度にただ困惑する。その事態に業を煮やしたカシアンは、未明を確実に自分のものにするため、一人策をめぐらせる。

エンザンテにやってきたジードとアドリオは、偶然から未明の足跡をつかみ、あとを追って連邦の要衝港湾、マージュオン港に向かう。そして、港湾局の一室で、いままさにカシアンの手に落ちようとしていた未明とようやく再会を果たすも、自分たちに関する記憶が彼女にないことを知り、大きな衝撃を受けるのだった。

## ■第三部

ウェス・ハーシュ邸に未明を連れ帰ったジードは、未明との結婚をなかば強引に取り決め、準備を進める。しかし肝心の未明の記憶は相変わらず戻らないままだった。夏季休暇を終えたジードが大学府へ戻るのを見計らい、未明をあきらめ切れないアドリオは行動に出る。異界（日本）からやってきたという未明の話を信じ、彼女が元いた世界へ帰る方法を一緒に探そうともちかけたのである。町へ出た二人は市井の占い師から情報を得、聖山（オルド・カルマ）に棲むという仙人めいた男、テオルーグのもとを訪ねる。彼によると、「見送りの儀」と呼ばれる儀式を行えば未明を日本に帰すことはできるものの、そのための条件として、未明を心から愛する男が二人必要だということだった。自分と兄（ジード）ならその条件を満たすというアドリオに、未明は後ろめたさを覚えながらも同意してしまう。ところが、協力してもらうために大学府のジードへ電話をかけると、彼はなぜか不在だった。

その頃ジードは学友であるホルツェンとともに、祖父イシュレーが神官長を務めるイシオス神殿へ向かっていた。時を前後して自分

と父ヴィネック、異母弟アドリオ、それにカシアンに対し発行された「天上の切符」の意味を確かめるためだった。だが彼はそこで、思いも寄らない真実を知ってしまうことになる。

未明が異界からやってきた娘であることとその理由――世界を統べる女神イグノディアスによって、彼女の夫でもある死んだはずの神ウルディノシスの生まれ変わりを捜し出すための撒き餌として「呼び込まれた」のだということ、そして、「天上の切符」とは、ウルディノシスの生まれ変わりとされる六人の人間の男に対し、その認定として発行される手形であるということ。その事実にジードはショックを隠せない。未明への恋心は自分の純粋な想いではなく、神によって操られた結果生まれたものに過ぎないのではないかという疑念に、ジードはこれ以降悩まされ続けることになる。そして、「見送りの儀」に協力してもらうため神殿を訪れた未明が、カシアンやアドリオなど彼女に想いを寄せるほかの男たちと一緒にいるところを目撃したジードは、苛立ちを抑え切れず一方的に婚約解消を告げてしまう。未明は未明でジードの態度が変貌してしまった理由がわからず、深い傷心を負う。

ジードとの距離が広がる中、レノラやヨナとの会話を通じて自分の気持ちを少しずつ確かめていく未明。そんな彼女に、カシアンはこの機とばかりに迫り、想いを遂げようとする。あわやの瀬戸際で駆けつけたジードは、それでも未明にいままでどおりの態度で接することができないでいた。自分を悩ませる「神の真意」を知るために、彼は単身、連邦最高の執政機関である審議院へ向かうことを決めたのだが……。

## ◆用語解説（前書き）

索引形式をとっています。これ以上もうまとめようが……（泣

# ◆用語解説

## 【い】

「イグノディアス」
世界樹の精霊。世界を統べる全能の女神として信仰を集める。浅葱色の髪に白い肌、漆黒の瞳を持つ。

「天上の切符（イグノード）」
「恒久手形」とも呼ばれる、世界共通の免罪符。亡神ウルディノシスの生まれ変わりである人間に対し、認定の証として発行する（その事実は国民には秘匿されている）。

「イシオス神殿」
キニッサの離れ小島、ハーマッド島に建つ連邦きっての大神殿。「イシオス」は神代語で「光」の意。ジードの祖父である神官長のイシュレーを筆頭に、七人の神官、補佐役、小姓たちが暮らしている。

「色付けの儀」
気性の激しい女神イグノディアスを手なずけ、その力を手に入れるための儀式。異端の教徒たちによって考え出され、『黒の経典（ザモド）』に収められている。
触媒としての「依坐の娘」と、供犠として彼女に恋する複数の男の命を必要とする。

「インヴォルタン」
辺境の都市国家、エンザンテの港町カジュヌを根城とする反政府組織。首領はヴァリー。
「インヴォルタン」はエンザンテの古語で「夜明け」を意味する。

## 【う】

「春の街（ウェイ・モルド）」
ヴィネック街区一の歓楽街の別称。酒場や賭場を中心に、娼館も存在する。

「ウルディノシス」
世界樹が最初に産み落としたとされる神。「魅了と統治」の力を持ち、かつてはイグノディアスの夫として全世界を統べていたが、異界から迷い込んだ娘と恋に落ち、娘ともどもイグノディアスに殺された。

## 【え】

「大学府（エコルガルト）」
ロマド市南端の町、キニッサに建つ歴史ある連邦最高学府。全寮制の男子校で、満十九歳から入学可。在学期間は四年で、その間は異性との性交を禁ずるという「鉄の戒律」が存在する。

「暁の経典（エリグザード）」
イグノディアスの真言が書かれているという伝説の聖典。テオルーグが所有している。

「エンザンテ」
ロドア大陸の南方に位置する、人口十万の都市国家。内政に問題を抱えている。ヴァリーの暮らす国。

【お】

「オサイオン市」
中央大陸バルネディア随一の都市。中央議事堂を擁し、定期的なサミットはほぼここで開催される。
ウェス・ゴート家が牛耳るも、財政的な後押しはホルツェンの実家であるライゾック家によるところが大きい。

「聖山（オルド・カルマ）」
ヴィネック街区に位置する霊峰。麓にカルマ駅を抱えている。

【き】

「キューズァロ」
絵と数字の入った十二枚のカード。元々は布教のために神殿が考案したものだが、現在では占いや遊興に用いられることがほとんど。
このカードを利用した代表的なゲームに、東大陸の放浪民から広まったとされる「キューズァロ」がある。

「聖典（キリエル）」
イグノディアス信仰の拠り所となる聖書。「創世神話」「天道の六罪」など、さまざまな逸話が収められている。

【さ】

「黒の経典（ザモド）」
異端の教徒によってまとめられた裏の聖典。「色付けの儀」につい

て所収するも、内容は不完全だった。

## 【し】

「審議院」
元老院とも呼ばれる上院組織。政府の方針を管轄する。十二名の議官から構成される。選出される議官はその素性が一切謎に包まれており、顔が見えないよう、白い仮面をかぶるのが慣わし。活動拠点は要塞島に建つ「議会所」。

## 【せ】

「ゼーレンディア合陸連邦」
東のレピュラス、西のゼドス、南のロドア、北のツェノワ、そして中央のバルネディアからなる大陸国家。
大陸共通語（イーザリア）を公用語とする。

## 【そ】

「ソフォモンド」
連邦に古くから伝わる、フェンシングに似た剣技。一対一で行い、相手の剣を落とすか、ドックと呼ばれる演台上に手をつかせた方が勝ち。
大学府では重要な履修科目のひとつ。

## 【ち】

「中央政府」
連邦の政務機関の集合体。数省で構成され、審議院の下に位置づけられている。

「勅使警吏官」
勅警という略称で呼ばれる、審議院の警備官。

## 【つ】

「放浪民（ツィゼット）」
五大陸及びその周辺離島を放浪する、定住地を持たない流浪の民。出自不明であることが多い。

## 【て】

「天道の六罪（りくざい）」
「聖典」で説かれるエピソードのひとつ。六罪とは姦通、強奪、殺人、嘘、見栄、不孝を示す。一般には道徳譚として知られているが、実際にはイグノディアスの過去の悪行を指していた。
これに相対する語として「六徳（りっとく）」が存在する。内容は、愛、孝行、信頼、優美、叡智、滅私。

## 【ふ】

「フェロキオン遺跡」
キニッサの離れ小島に存在する古代遺構。地下約十メートルの位置

に埋もれているのを発見された。
テオルーグがかつて幽閉され、ふたたび異界に迷い込んだ未明が救出された場所でもある。「闇」を意味する神代語がその名の由来。

【ま】

「マージュオン港」
オサイオン市が直轄する連邦の要衝港湾。寄港量、規模ともに連邦有数。

【み】

「見送りの儀」
テオルーグが未明に授けた、元の世界に戻るための儀式。未明を愛する男を二人連れてくれば成立するというもの。

【よ】

「要塞島」
バルネディア大陸の西南に位置する島。正式名は不明。特異な地形をしており、中央政府をはじめ、国家の最高機関である審議院を擁している。

「依坐（ヨリマシ）の娘」
イグノディアスを宿らせるための触媒であると同時に、亡神ウルディノシスの生まれ変わりの男たちを探し出すための撒き餌的存在。

【ら】

「世界樹（ラ・ミュゴン）」
その昔キニッサ地方に生えていたと言われる伝説上の神木。世界開闢の折、この樹から生命が産み落とされたとされている。

【ろ】

「ロマド市」
ウェス・ハーシュ家直轄の地。ロドア大陸のほぼ全域に広がっており、中心市街はヴィネック街区と呼ばれる。商業の町として栄えている。
ヨナいわく「エネルギッシュでカラフルな町」。

## ◇番外編 - オルグ・ヴィネック卿の優雅な冒険　巻之一 - （前書き）

若きヴィネックを主人公にした番外編です。全八話の構成です。
亡妻イレイラとのエピソード、カシアン父との因縁、凄腕ギャンブラーとの一騎打ち、そして運命の恋人である美沙紀との出逢いなど、そこそこ盛りだくさんな内容になるかと。おつき合いいただければ幸いです（＾＾♪

## ◇番外編 - オルグ・ヴィネック卿の優雅な冒険　巻之一 -

年に二回、夏至と冬至の祝日期間に、ここキニッサのハーマッド島では、「清浄の儀」と呼ばれる宗教行事が粛々と執り行われる。古代遺跡フェロキオンの前庭に台座を作り、聖典で伝えられる「天道の六罪（りくざい）」に擬（なぞら）えて集められた六種類の動物たちを、ヒジリギクの灰で清めるのだ。そうしてから当代の姫巫女によって祝詞が捧げられ、最後は、六罪を打ち消す存在とされる「六徳（りっとく）」を表す動物に見立てた舞が披露される。舞うのは町民によって選ばれたキニッサの町娘、中央政府所縁の名家の令嬢、そして当然、イシオス神殿の顔ともいえるノルド家の姫巫女である。

この日も例年どおり、つつがなく祝典は行われた。穏やかに晴れ渡った初夏の一日。天候に恵まれたためか、いつにない人出が、辺鄙な田舎町に過ぎないキニッサを潤していた。数少ない宿や飲み屋は観光客であふれ返り、彼らは皆、大盤振る舞いで金を落としていく。「清浄の儀」は国家によって定められた祝祭である。重罪人に恩赦が施されることすらめずらしくはないほどの。

「そういうわけだからよ。説教はこのくらいにしねぇか、イレイラ。お茶の時間ってやつも、そろそろ迫ってるんだろ」

キニッサ一の大邸宅、ノルド邸の一室に、世にも情けない声が響いた。無造作にくくった灰色の長髪、とがったあご。深い輝きを放つ緑碧の双眸――連邦有数の名門、ウェス・ハーシュ一族の御曹司、オルグ・ヴィネックである。

彼はその長い脚の片方を、精緻な蔦の装飾が掘り込まれた出窓に掛けたまま、気だるげにライティングチェアを――いや、正確にはそこに座っているうら若き娘を見やった。イレイラ・アンシニー・マディア・リン・ノルド。豊かな金髪に、磨き上げられた白磁のような肌。菫色の瞳は愛嬌というより知性にあふれており、そのため

か、彼女にはどこか騎士然とした凛々しい雰囲気があった。また、それは内面においても同様だった。

イレイラは目つきも鋭く、この破天荒な従弟を睨みつけ、ふたたび口を開いた。

「話を逸らすな。まったく……叔父上を嘆かせる行為はいい加減に慎まないか、ヴィネック。いったいなんど反省文を書けば気がすむんだ？　ワンジオ翁も因果なことだな。こんな問題児の面倒を四年も看なければならないとは」

「お前なぁ、イレイラ。昔っから思っちゃいたが、その、可愛げの欠片もねぇ喋りはどうにかしてくれ。許婚との久々の再会なんだぜ？　どうしてそう堅苦しい話し方しかできねぇかなぁ」

微妙に噛み合わない会話のやり取り。わざとらしくため息をつきつつも、ヴィネックは軽口を止めようとしない。

「儀式の間なんかずぅっと、いかにも姫巫女って感じのしおらしげな微笑み浮かべてよ。それが二人っきりになった途端、これだもんなぁ」

そう言うと、ヴィネックは大げさに両手を広げてみせた。が、そんな不遜な態度にもイレイラはまるで動じない。

「ヴィニー」

その口調が若干、変わる。なだめるような賺すような、幼児を相手にしていると言わんばかりのたしなめ声だ。――こうなると、さしものヴィネックにも反論ができない。

「あなたもわかっているはずだ。卒府次第、叔父上から正式にウェス・ハーシュ当主の名を移譲される……それがなにを示しているかを。むろん、受け継ぐものの大きさにプレッシャーを感じるその気持ちは私にもわかる。だが、あなたにはそれだけの力が――価値があるんだ。ヴィニー、頼むから、聞き分けてくれ」

「……」

ヴィネックは両耳を押さえ、黙り込んだ。一つ年上のイレイラは――従姉で、幼なじみで、そして恐ろしいことに生まれた時からの

彼の許婚でもあるこの娘は、とにかく生真面目かつ謹厳、廉直な性格の持ち主で、一輪の百合のように麗しいその容姿とは裏腹な説教癖でもって、会うたびにヴィネックをやり込めるのである。とはいえ二人の相性は決して悪くはなく、女性としては特異なそのキャラクターさえ、ヴィネックはどちらかというと気に入っていた。――もっともそれは、恋愛感情というよりはむしろ友情に近かったのかもしれないが。

「とにかく……叔父上に変わり、我が家に滞在中のあなたの監督はこの私がする。祝日の間、夜の外出は一切禁止だ。いいな、ヴィネック」

「鉄の規律」を言い渡されたヴィネックは、顔色を変えて出窓から身を起こした。

「そりゃなんの冗談だ？　国民の誰もが浮かれる、祝祭の休日だぞ！　なのに外出禁止って、いくらなんでも有り得ねぇだろ、おい、イレイラ！」

焦りも露わに詰め寄るものの、イレイラの表情はぴくりとも変わらない。

「昼間の外出は私も禁じてはいないさ。どこへ行こうが、それはあなたの自由だ。だが――日没には必ず帰ってくるんだな。晩餐には叔母上もみえるんだろう？　その席にあなたの姿がなかったら、さぞやお嘆きになるだろうな」

現当主の妻であるアウラ・エルリーネ・ウェス・ハーシュは、臈長けた美貌とともに、ひどい癇性の持ち主としても知られている。彼女のヒステリーにはヴィネック自身手を焼いており、またそれは、彼の実父であるオルグ・グロウラス・フェルドラ・ウェス・ハーシュ卿も同様だった。息子とは対照的に物静かな男で、大学在学中もひたすら神話研究に打ち込んだと聞いている。気弱とは言わないが争いを好まないその性格は、どう見てもアウラとつり合っているとは言いがたい。だが同じく学究肌である姪とは気が合うのか、イレイラと彼は実の親子のように打ち解けていた。

要するに、この一族では、俺だけが異端児なんだな。――それがヴィネックの抱く、偽らざる真情だった。

「ともかく」と、一方的にイレイラは話を切り上げる。「ここに、このノルド家にいる間は、私の采配に従ってもらうぞ。次期ウェス・ハーシュ卿として、あなたにもそろそろ、自覚を持ってもらいたい。心得てくれ、ヴィネック」

素っ気なく言い捨てるなり、許婚を顧みることもなく部屋を出て行くイレイラ。独り残されたヴィネックは、閉じられたドアを味気ない想いでじろりとねめつけた。

気だるく流れるコルテニッド（※オーケストリオンに似た自動演奏器）の音色、漂う紫煙と酒の匂い。時折巻き起こる笑い声、女たちのドレスが立てる衣擦れの音。――ここ「赤馬亭」はキニッサでも数少ない酒場であり、庶民が気兼ねなく訪れる夜の社交場だ。

「軍の上官？　あのイレイラ嬢がか？　お前、ヴィネック、ふかすのも大概にしとけよ」

そう言ってゴブレットをいきおいよく呷ったのは、大学府に入寮して以来の悪友、ゼスターだ。政府高官の末息子だが、厳格な家風への反発が強く、同じく破天荒なヴィネックとともに、なにかと悪ふざけを働いては学府長室に呼び出される常連である。

やわらかな赤毛に柔和な瞳と、一見優男風のその外見は、ヴィネックと並んで女たちの受けがいい。本人もそのことはよく心得ており、こうした場所でまとわりついてくる若い娘らを体よくあしらうのが趣味のひとつだと、常から嘯（うそぶ）いている。要するに「類友」というやつである。

「ノルド家のイレイラ姫って言ったら、当代随一の美神の名を、あのオサイオンのクリスティア嬢と争ってるってほどの美女だろう。そんな女をつかまえて言うことか？　……はは、久しぶりに会っ

たってのに、よっぽどつれなくされたんだな、お前」
「――まぁ、つれなくされたってのは間違いじゃねぇけどな」
ぼそりとつぶやくと、ヴィネックは手元のグラスを口に運んだ。
その様子に興味をそそられたのか、それとも酒が進んでのことか、ゼスターはずいと身を乗り出して声を潜めた。
「お前……もしかして、彼女の寝所にでも潜り込んだのか？　で、卒府前を理由にすげなく断られたとか」
きわどいせりふを聞かされ、ヴィネックは噴き出した。
「イレイラに夜這い？　この俺がか？　中々できた冗談だな。ゼスター、お前、あいつにそんなこと聞かれてみろよ。ただじゃすまねぇぞ」
「ああ、望むところだねぇ。あれほどの美人と近づきになんて、そうそうなれるもんじゃねぇからな」
「知らないってのは幸せなことだな。いいか、言っとくけど、あいつはな――」
こちらも負けじと人差し指を突き出し、勇ましくまくし立ててやろうとした時だった。
「まったく、知らないというのは幸せに違いないな。――貴様の命運も今夜限りだ、オルグ・ヴィネック」
唐突に、やたらと高圧的な声が頭上から降ってきた。反射的に顔を上げるヴィネックとゼスター。そこにいたのは、二人にとってみればいささか意外な人物だった。
やや広めの額に、きっちりと撫でつけた黒髪。鋭く光る緑灰色の瞳。一分の乱れもない白い詰襟姿。その背後には、衛兵さながらにつき従う二人の取り巻きたち。
「ゾデューじゃねぇか。なんだよ、お前も飲みに来たのか？」
座る？　と椅子を勧めるゼスターに、彼、ゾデュー・エリアック・ウェス・ゴートの薄い眉が、ぴくりと引き攣った。
「……この私がこんな下賤な場になど、好きで赴くと思うのか。そもそも、こういった店への出入りは、校則で禁じられているはずだ。

よもや知らないなど、言い逃れにもならんぞ、貴様ら」
勝ち誇ったように言い放つゾデュー。だが、ヴィネックはゼスターと顔を見合わせ、おっとりと言い返した。
「ってことは、それを知ってて来るお前さんってのは、相当の確信犯だなぁ。いや、恐れ入ったよ」
ゾデューの額に青筋が走った。
「ばかを言うな！　私は……私は、責任ある大学府の学生として、貴様らの恥知らずな行為を注意しに来ただけだ！　貴様らとは立場が違うんだ！」
「とはいってもなぁ。お前さん、そんな目立つ恰好じゃ、かえって周囲の連中に喧伝してるようなもんだぞ。大学府の学生は、夜の酒場にも制服姿で平気で出入りするんだってな。責任ある立場の人間にしちゃ、そりゃあちょっといただけないんじゃないのか」
わざとらしく首を振るヴィネック。怒りのあまり、ゾデューの全身がぶるぶると震え出す。
「貴様……この私を、そこまで愚弄するとは……よかろう。今夜ここで、決着をつけてやる！　外へ出ろ！」
いまにも手袋を投げつけそうな剣幕でゾデューは怒鳴った。あまりの興奮に、声が裏返っている。
だが、応じるヴィネックはあくまで穏やかな態度を崩さない。彼はゾデューを真っ直ぐに見据え、にやりと笑みを浮かべてみせた。
「そうテンパるなって。ここはひとつ、紳士らしく、テーブルで勝負（ケリ）をつけるってのはどうだ？　ゾデュー」

「赤馬亭」の一角には、簡素な扉で遮られた賭場が設けられている。
「聖なる地」という土地柄、認可された博打場は、キニッサ中でもここだけしかない。
周囲を暗赤色の薄いカーテンで覆われた丸いテーブルに、ヴィネ

ックとゾデューは向かい合って着いた。そのそばに立つのは、二人とは面識のない、通りすがりの男。この辺りを根城にしているという博打打ちらしい。

「ルールの説明は、いまさらするまでもないと思うが……一応、確認しておくかね？」

男の言葉に、ヴィネックはちらりとゾデューを見た。彼は鷹揚に肯いた。

「キューズァロのやり方など、幼児でも知っていることだが――どんなイカサマを使われるかわからんからな」

「いいだろう。勝負は全五戦。点数は通常どおりの配点だ。カードを開けるのは、順番でもいいし、同時でもかまわん。お前さんたちの好きにしな」

そう言うと、男はポケットから一組のカードを取り出し、なんの細工もないことを示すため、二人に見せた。

キューズァロ――それは、数字と絵柄の組み合わせが描かれた十二枚のカードの名称である。描かれているのは、聖典の訓話として知られる「天道の六罪」と、それに相対する「六徳」を象徴する十二種の動物の絵柄。そして、その動物たちに与えられた、一から十二までの数字だ。

六罪とはすなわち、姦通（蛇）、殺人（蜘蛛）、強奪（山羊）、嘘（梟）、見栄（白獅子（ホノマ））、不孝（火蠍（サルドマント））。これを表す「悪」のカードが、一、二、三、五、七、十一――素数の一群である。

六徳とはすなわち、愛（白のユニス）、孝行（黒獅子（ベヌール））、信頼（一角獣（オーディンゲ））、優美（蛇）、叡智（人魚（メルヴァ））、滅私（蝶）。同じくこれを表す「善」のカードが、四、六、八、九、十、十二。「悪」の逆で、こちらは素数以外の数字となる。

元々は布教のために神殿が考案したものだが、いまではおもに占いや遊興に用いられることが多い。

そして、このカードを利用した代表的なゲームが、その名と同名の呼び名を持つ「キューズァロ」。ヴィネックが「決闘」の方法としてゾデューに提案したのが、これである。もっとも普及している対戦ルールは、次のような内容となっている。

一、十二枚のカードをディーラーが丁寧に繰り、扇状に広げる。
　プレイヤーはそれぞれ交代で一枚づつ、計五枚引く。このカードが手札となる。

二、残った二枚をテーブルに置く。
　一枚は伏せて置く。これを「谷」と呼ぶ。もう一枚は表返して置く。これを「山」と呼ぶ。

三、プレイヤーは手札を一枚選び、伏せて置く。これを勝負札と呼ぶ。
　これは同時に行うが、開く前なら何回でも変更を申し出てよい。

四、互いの勝負札を開き、勝敗を決める。勝利条件は以下の通り。
　ａ　相手カードの約数である。
　ｂ　相手カードの倍数でなく、より数が大きい。
　ｃ　「一」はすべての素数（二、三、五、七、十一）に勝つ。
つまり、「基本的には数が大きい方が勝つ」が、「約数の場合のみ、数が小さい方が勝つ」ということになる。

五、ここまでの手順を、手札がなくなるまで（つまり第一戦から第五戦まで）繰り返す。

なお五回勝負にはそれぞれ、勝利点が決められている。
第一戦、第二戦は一点。

第三戦、第四戦は二点。
そして第五戦は三点。
勝利した回の点数を合計し、より多く点を取った者が勝者となる。
最大点数は九点なので、最低五点取れば勝利となる。
つまり、配札によっては、一戦～三戦をあえて落とし、四戦と五戦で逆転するという手もあるわけだ。

五枚のカードを各々が引き終わったのを見計らい、ディーラーを務める男は、残った二枚のカードのうち、一枚を表返した。――四。
そしてもう一枚のカードをそのそばに伏せて置く。

ヴィネック側の手札は、一、三、七、十、十二。
対するゾデュー側の手札は、二、六、八、九、十一。

二人は、手持ちのカードの中から一枚ずつ引き抜くと、それを隣り合わせに伏せた。変更の申し出はない。
「それじゃ、勝負開始といこうか」
男の合図に、それぞれのカードを自らひっくり返す。――ゾデューの眉が歪む。
「一戦目は、あんたの勝ちだな」
ディーラーのせりふはヴィネックに向けられていた。その言葉どおり、ヴィネックの七に対し、ゾデューは六。七に勝てるのは一か、八以上の札だけだ。「優美なる蛇」が、「火蠍の光明」に燃やし尽くされたわけである。ヴィネックは言った。
「お前さんは必ず、一回戦で最弱のカードを切る。初戦の配点は一点だから、ここで不要のカードを切るというセオリーは正しい。だが、読みやすい。――セオリーを破って冒険する勇気がないんだな、お前さんには」
また同時に、ここで谷のカードが読み取れる。自分の手札から逆算して、最弱のカードは五。五は三と十、六は一と十二にしか勝て

ず、ともに最弱である。しかし一と十二はジョーカー的な仕込みのできる強いカードなので、それを倒せる六の方がより有用と言える。その五のカードが初回で出てこないということは、伏せられている谷は間違いなく五と踏める。

「相手の出す手札の順序から谷を読み取るのは、キューズァロの基本だぜ」

続く第二戦も、ヴィネックの勝利だった。

ゾデューの九に対し、ヴィネックはその約数である三を出したのだ。彼はまたも解説を始めた。

「これも同じだな。弱い順で出してるんだ。『梟なき昼に、一角獣踊る』……一角獣を使うなら、梟に警戒しろってこった。定石どおりだろ。懲りねぇな、お前も」

ゾデューの持ち札であるカードのうち、一と七にしか勝てない九は、ヴィネックの持ち札に含まれる一、三、七すべてに勝てる八に価値では劣る。

そして第三戦。騎士の長靴（ちょうか）に仕込まれた蜘蛛が、足裏に向けてその毒牙を刺そうという不穏な絵柄が、卓上で暴かれる。――ヴィネックの一に対し、ゾデューは二。従って、すべての素数に勝てる一を出したヴィネックの勝利である。

「二連敗したせいで焦りが出たな。俺が持ってる上位カードを仕留めようと二を出してきたところで、それをさらに下から刺す『蜘蛛の一』ってわけだ。十一を温存してる辺りが小心者なんだよな」

ここまでで、ヴィネックの獲得点数は四点。第四戦を彼が獲れば、その時点で勝ちは決まる。だが――。

「勝負は着いたな」

ヴィネックはそう言い、ディーラーを見やった。彼もまた、まるで示し合わせたかのようにはっきりと首肯する。いきり立ったゾデューは、テーブルを蹴倒さんばかりのいきおいで怒鳴った。

「なっ、なにを！　貴様、貴様ら、この私に向かって……まだ二戦残っているだろう！　配点から言えば、第四戦と第五戦さえ連勝す

れば逆転も可能なのだぞ、それを……」
「わかんねぇやつだな。残りの手札を見てみろって」
ヴィネックは面倒そうにすべてのカードを表に返した。――ヴィネックの持ち札、十と十二。対して、ゾデューの持ち札は八と十一。穴の開くほどじっくりとそれらを見つめていたゾデューの顔が、驚愕に歪んだ。
「な。お前がどういう順で残りのカードを出そうが、どう組み合わせても俺の勝ちだ。袋小路にはまらないように計算してカードを選ぶのもテクニックだぜ。……ま、俺はどの道、その先を見越して罠を張ってやるけどな」
ゾデューはふらふらと椅子の背にもたれかかった。負けたのだ。ゲームとはいえ、政敵、ウェス・ハーシュ家次期当主との一騎打ちに。あまつさえ、自分を打ち負かした当の相手は、にやにやと我慢のならない笑みすら浮かべているのである。
「あんまり言いたかねぇが、お前さん、ギャンブルには向いてねぇよ。忠告しとくけど、こういう場所にのこのこやってくるのは金輪際止めといた方がいいぜ。しかもそんななりで来てみろ、いいようにカモられるのがオチだ。博打打ちってのは、俺みたいにやさしいやつばっかりとは限らねぇからなぁ」
ここでゾデューはついに切れた。彼は立ち上がると、世にも恐ろしい眼差しでヴィネックを睨みつけた。
「……貴様……赦さん。もう勘弁ならん！　こんなゲームなどで決着だと？　ふざけるな！　いますぐ息の根を止めてやる！」
「あのな、だからそうテンパるなって。お前の言うとおり、これはしょせんお遊びなんだからよ」
「やかましいっ！　この山師め、外へ出ろ！」
不穏な成り行きに、カーテンの外から友人、ゼスターが顔を出した。ゾデューの取り巻きたちもだ。その上、大学府の制服が人目を惹いたのか、賭場の外からも物見高い酒場の客たちがなにごとかとこちらを覗き込んでいる。

「おい、やめとけってゾデュー！　こんなとこでこれ以上騒ぎを起こしてみろ、下手したら退学だぞ！」
「これほどの侮辱を、このままにできると思うのか！？　いいか、私は、ウェス・ゴート当主の名を継ぐ人間なのだぞ、それをこの男は――」
　その時だった。開かれた扉の向こう側から、ざわめきとともに、こんな会話が飛び込んできたのは。
「ああ、見たね。間違いない、あんなべっぴん、生まれてこの方俺ぁ見たことねぇ。噂には聞いてたけど、確かに大した上玉だ。『オサイオンの聖なる乙女』か……ありゃあイレイラ姫よりも美人かもしれねぇぞ」
「『高貴なる百合』、イレイラ姫よりもかよ。俺も一目でいいから拝んでみてぇなぁ」
　ゾデューの動きが瞬時に止まった。操り手を失った糸人形のごとく、彼はぴたりと動きやめた。その様子を怪訝そうに見守る取り巻きたち。ゼスターまでが訝しげに目を眇めている。
「おい。……おい、ゾデュー？　聞こえてるか、おい」
「……聖なる乙女……クリスティア……」
「は？」
　眉を顰めるゼスター。かすかに漏らされたつぶやきを、しかしヴィネックの耳は聞き逃さなかった。彼は感心したように二、三度肯くと、こう言った。
「なるほどな。――おい、ゾデュー。仕切り直しだ。お前のいう決闘、受けてやるよ」
「……なんだと？　ほう……ようやく命を棄てる決意が固まったようだな。では、早速――」
　ヴィネックの声に、ゾデューはやっと反応を示した。彼はゆっくりと頭をもたげ、宿敵をねめつけた。
　が、ヴィネックの思惑は、ゾデューとはまるで別のところにあったのである。

「そう焦るな。ただの勝負じゃ面白くもねぇ。……どうだ？　勝った方が、あの『オサイオンの聖なる乙女』をいただく、ってのは」
不遜な笑みを湛えながら、ヴィネックは言い放った。
「な……なん……だと……？」
思いもかけない提案に、ゾデューはあんぐりと口を開け、ヴィネックをただ見つめるしかなかったのである。

## ◇番外編－オルグ・ヴィネック卿の優雅な冒険　巻之二－

交易の中心地であるロマド市と、政治を司るオサイオン市。この両市をそれぞれ実質治めているのが、ロドアの君主ことウェス・ハーシュ家、そしていまでも領民からは「公主様」と称されるウェス・ゴート家である。

政教一体が基本方針であるゼーレンディア合陸連邦では、政治屋や豪商よりも、神官の方が重用（ちょうよう）される傾向がある。名家ほど権威ある神殿とのコネクション作りにやっきになるのには、そういう事情が潜んでいた。

それはゾデューの実家であるウェス・ゴート家とて例外ではない。筆頭の政敵、ウェス・ハーシュ家が抱えるイシオス神殿は、規模も歴史も国家随一と呼び声高い。ところがウェス・ゴート家には、そこまでのクラスの神殿とは、実はつながりがなかった。家格のせい云々というよりは、単純にイシオス神殿の地位が図抜けているためなのだが。

クリスティア・シュリーナ・ツェザリアン――「オサイオンの聖なる乙女」と謳われるほどの美貌を持つこの十八歳の娘もまた、大陸に転々と存在する無名の神殿の巫女だった。木々の間を通り抜ける日の光にも似た白金の髪、透き通るような比喩がぴったりの肌、やや憂いを含んだ空色の瞳。散りゆく花びらを思わせる、儚げな表情。その二つ名に違（たが）いのない極上の美女――それがクリスティアという娘である。

が、名門の出とは言いがたく、当然、いかに美しかろうと、ウェス・ゴート総帥が一人息子の嫁として彼女を認めることは、まぁ常識的に考えられない。それは当のゾデューも承知の上だった。

だが彼は、クリスティアをあきらめ切れなかった。父にどれほど反対され、なじられ、なだめ賺されようが。

「小耳に挟んだんだけどな。……花や贈り物を、どれほど断っても懲りずに貢ぎ続けてんだって？　いやぁ、そんな堅物な顔して、やるねぇ。お前さん」

「……」

机に頬杖をつきながら、ヴィネックは口笛を吹いてみせた。羞恥と屈辱にゾデューの顔色はめまぐるしく変化する。赤くなったり青くなったり、やたらと忙しい。彼はぱくぱくと口を開け、震える指先をヴィネックに突きつけた。

「な、な、な、な……き、き……」

なぜ、貴様が、そんなことを知っているのだ。おそらくそう言いたいのだろうが、言語野がまともに働かないのか、それ以上の言葉が出てこないらしい。ヴィネックはかまわずに口撃を続ける。

「クリスティアになら俺も、ノルド家つながりで数度会ったことがある。噂に違わぬ見事な女だった。――ぶっちゃけ、興味持ったんだよな。あの清楚さ……イレイラとは全然魅力が違って、こう、護ってやりたいっていうのか……色々と教え込んでやりたい、って思わされるような――」

半分は本当だが、多分に嘘も交じっている。会ったといっても、それは神事をとおしての儀礼的な邂逅に過ぎない。イレイラとクリスティアはそれなりに会話を交わす仲らしいが、その場に自分が居合わせたこともなく、せいぜい「顔を見知っている」程度だった。

しかし、頭に血の上り切っているゾデューを翻弄するには十分なハッタリだったようだ。

「だ、だ、だ黙れっ！　下劣な……貴様のような不埒な輩を、あの穢れなき妖精に近づけてなるものか！　決闘だ、いますぐその口を利けぬようにしてくれる！　外へ出ろ、出ないかっ！」

「――勝負は受けてやる。ただし、方法は……これだ」

ヴィネックは不敵に微笑んだ。そして、テーブルの下に払い落とされた十二枚のカードを、その長い指で示してみせた。拍子抜けしたのか、ゾデューは呆気に取られ、一瞬置いて反駁した。

「なにを言うかと思えば……こんなゲームなどで決着だと？　クリスティアを賭けるのに相応なやり方とは断じて思えん。……ははぁ、貴様、さてはこの私と剣を交えるのが怖いのだな？　だからそうやって……」

「剣（ソフォモンド）を使った私闘は禁じられてるんだろ？　校則とやらによれば。けど、キュー（これ）ズァロなら誰かに知れたところで外聞にも響かねぇ。――お互い、条件としちゃ悪くないはずだ」

「――」

ゾデューは黙り込んだ。確かにそのとおりだった。一分ほど黙考したあと、彼は言った。

「……いいだろう。その勝負、受けよう」

答えを聞くなり、ヴィネックは満足そうに口の端を上げた。踵を返して賭場から出ていくゾデューと取り巻きたち。無言で彼らを見送っていたゼスターだったが、じきに解せないと言わんばかりの表情を浮かべ、友人に向かってまくし立てた。

「お前、なんだってまたキューズァロにこだわったんだ？　キューズァロなら外聞に響かねぇだぁ？　どの口でそんなしおらしげなこと言ってんだよ。だいたい、剣ならすぐに決着も着くし、まさかゾデューに勝つ自信がないからなんて言わねぇだろうな」

ヴィネックは答えなかった。椅子の上で伸びをひとつすると、やおら立ち上がり、店外へ向かう。そろそろ帰らないと、屋敷をこっそり抜け出したことがばれそうだ。そんな風にぶつぶつと独りごちながら。

翌日の八刻半（午後九時）、ここ「赤馬亭」の狭い賭場には、人

だかりができていた。昨夜の騒動の噂を聞いて集まってきた見物人たちである。女を賭けての一騎打ち、そのセンセーショナルな煽り文句が誰からともなく喧伝されたのか、彼らはすっかり物見気分で、中にはどちらが勝つか賭けをしている者まで出てくる始末だ。

だが、約束どおり姿を現したゾデューの隣には、見知らぬ人物が立っていた。若くもなく、といって目立つほど老いてもいない。白髪交じりの黒髪をオールバックにした、どことなく貧相な顔立ちの男である。

「こちらさんは？」

あごをしゃくってみせるヴィネックに、ゾデューはぴくりとも顔色を変えず答えた。

「私の代わりに、彼が貴様の相手をする。文句はないだろうな」

平然と言い切るゾデューに、たちまちブーイングが巻き起こる。それはゼスターも同様だった。

「文句ないわけねぇだろ！　決闘を別の人間にやらせるなんて、それでもお前男かよ！？」

「その兄ちゃんの言うとおりだ、おい、若造、潔くてめぇ自身で勝負しやがれ！」

容赦なく浴びせられる罵声。ところが、場を制したのは、意外にもゾデュー本人ではなかった。

「ＯＫ。了解だ。……あんた、キューズァロのプロ……賭けカード師ってやつだろ？　なら文句はないぜ。俺も常々、本物のプロってやつといちど勝負してみたいと思ってたからな」

男の小さな目が、きらりと光った。彼は慇懃に頭を下げた。

「――ザイフィスです。どうぞ、お手柔らかに」

「そりゃあこっちのせりふだって。よろしく――オルグ・ヴィネックだ」

二人は握手を交わし、席に着いた。と同時にヴィネックが声を上げる。

「おっと。……ディーラーを頼まねぇとゲームが始められねぇ。え

えと……誰か、心得のあるやつはいるかい」
彼は薄いカーテンから顔を覗かせ、辺りを見回した。すぐに、青いサロペットを着た暢気そうな太っちょと目が合った。
「俺(おい)らでよかったら引き受けるぜ。ディーラーったって、キューズァロなんざ、カードを切ってこう並べるだけだろ？　四つの子どもにでも務まるさ」
ヴィネックは肯き、彼をカーテンの内側に招き入れた。オイゲルと名乗ったその男は、丸まった指先を不器用そうに動かしながら、カードを扇状に並べた。そして顔を上げ、二人を促す。
ゲームの始まりだ。

三回勝負の二本先取。それが、今回新たに取り決められた唯一のルールである。
初戦、第二戦と一回戦を進めるうち、ヴィネックにはあることがつかめてきた。――すなわち、目の前の敵の傾向だ。
そもそもキューズァロには、「刺し手」と「踏み手」という概念が存在する。
「刺し手」とは、二や三などの下位のカードで、数字の大きい上位のカードを仕留めるやり方を好むプレイヤーのことである。
そして「踏み手」とは、「刺し手」とは逆に、上位のカードで刺されることなく下位のカードを「踏み潰す」プレイを得意とする者を指す。
カードの配分にもよるが、得意手によって、序盤戦や温存するカードは異なってくる。また刺し手は基本的に攻めのスタイルであり、踏み手は守りとも言える。
ヴィネックは典型的な刺し手であり、ザイフィスと名乗ったこの賭けカード師は、対極的な踏み手だった。それを見抜いたヴィネックの采配が的中し、一回戦は彼の快勝で終わった。ゼスターはじめ

ギャラリーから、どよめきと喝采が巻き起こる。
だが、素人にしてやられたはずのザイフィスの表情は、ここにきても見事なほど変わらなかった。彼はただ、一言こうつぶやいた。
「……なるほど」
ヴィネックの眉がぴくりと動く。「なにがなるほどなんだ?」
「いえ。お気になさらず」
「――あんたもプロなんだろ。遠慮せず、本気出していいんだぜ」
ヴィネックの挑発にもザイフィスの表情は不動だった。
「一戦目は様子見。キューズァロの定石と一緒ですよ」
「へぇ……。だが、常と違って、こいつは三回勝負だ。うかうかしてると次で勝負が決まるぜ?」
ザイフィスは即答した。
「それはないですね」
「なに?」
テーブル上の空気がにわかに緊張を帯びる。ザイフィスはさらに続けた。
「あなたの切り筋は読めましたので」
それが果たして真実なのかどうか、彼のポーカーフェイスから読み取ることはできない。
「ふん。だから『なるほど』ってか」
ヴィネックはねまわすようにザイフィスを見やった。彼は口を閉ざし、感情のない煉瓦色の目で相手を見つめている。
「――面白い。それぐらいやってもらわなきゃ張り合いがねぇ」
そう言うと、ヴィネックはゆっくりと唇を舐めた。

切り筋は読めた。
プロの賭けカード師であるザイフィスの言葉は、ただのハッタリではなかった。

二回戦、彼は初戦こそ落としたものの、ほかはすべて勝利。手堅い勝負勘と相手の刺突を見事にかわしての「踏み潰し」で、ヴィネックをまったく寄せつけない。

「……」

ヴィネックは腕を組み、あごを撫でた。黙思を始める時の、昔からのくせだ。

――かすかな違和感があった。

相手がプロである以上、手ごわいのは承知の上だ。しかし、こちらもその辺の素人というわけではない。嗅覚には自信がある。

その鼻が、いまの敗北には実力差とは異質のなにかがあると告げている。

カードは確かに悪かった。下位カードが少なく、刺し切れなかった。

だが、それだけではない。

地力の違い以上のなにか……厭な感じがする……。

その正体は、三回戦目にして明らかになった。

ディーラーを買って出たオイゲルが扇形に伏せて広げたカードを、交代で抜いていく二人。

一枚ごとに確認すると、表情から数字を読み取られるため、通常、抜いたカードは机上に並べ、すべて引き終えてから手札とするのがセオリーである。が、虫の知らせを受けたヴィネックは、三枚目でカードを開き、思わぬ事態に血相を変えた。

そこには、四、五、六という中位カードが、悪意ある冗談のように並んでいたのだ。

中位カードは、刺しにも踏みにも使いづらい。キューズァロでも

っとも弱い一群である。ヴィネックは、苦虫を噛み潰す思いでつぶやいた。

「ゾデューの野郎……雇ったプロは、一人じゃなかったわけか」

そう、あの人畜無害そうなオイゲルという男は、ただの見物人でもなんでもなかったのだ。彼もまた、ゾデューが雇ったプロのうちの一人――つまり、この賭場に、ゾデューは掻き集められる限りのプロディーラーをあらかじめ用意しておいたのである。

扇形に広げるだけのキューズァロのディーラーに、イカサマをする自由度は少ない。

だが、カードの引き方にもくせはあるものだ。その道に長けたプロならば、扇形に並べる段階でヴィネックの好む並びに弱小カードを配置するくらいのことはやってのける。きれいに並んだヴィネックの手札はそのなによりの証明だ。眼前の相手に気を取られ、伏兵の存在を忘れていた、ヴィネックの油断だった。

気を引き締め、最後は用心してカードを引いていく。――一枚、二枚。

プロもなに喰わぬ顔でカードを引く。その表情を、ヴィネックは穴の開くほど凝視した。

そして、表返された山は十二。ゾデューの嘲りの声が聞こえてきた。

「いまさら足掻いたところで無駄だ。……貴様の負けだ、ヴィネック。そんな手札でプロに勝てるやつなどいるものか」

彼はゼスターの制止も振り切ってカーテンの外から首を突っ込み、高らかに野次を飛ばしている。追い詰められたヴィネックの姿が痛快でならないらしい。しかし、ヴィネックの顔色は、こんな状況になってもさほど変わらなかった。なにも言い返すことなく沈黙したまま、手の中のカードをじっと睨み続ける。……やがて彼は一言、眼前の敵、ザイフィスに問うた。

「お前さんもそう思うか？」

「お答えしかねますな」

殷懃な返答を受け、ヴィネックはにやりと笑った。
「……なるほどな」
「私に挑発は通じませんよ」
「挑発じゃない。俺もあんたの切り筋を見切った――それだけの話さ」
ヴィネックは、手札のうちの一枚を抜き出し、伏せ、勝負札とは別にテーブルの上に置いた。
「なんのつもりで？」
ザイフィスは相変わらず感情のない声で問いかける。ヴィネックもまた、平然とそれに応じた。
「こいつは俺の切り札だ。最後の時が来るまで、ここに眠らせとこうと思ってな」
「……つまり、五戦目まで使用しない、と……？」
「そういうことだ」
プロのポーカーフェイスに、初めて、かすかな表情が横切る。
「それになんの意味が？　よしんばそのカードが『蜘蛛の一』だとしても、私が最後に『山羊の十一』を使うとは限りませんよ。その宣言は、あなたを不利にするだけです」
「言ったろ？　切り筋は見切ったってな。
――あんたは最後に必ず、こいつに敗北するだろうよ。おっと、信じられないんなら無理に信じなくてもいいぜ？　このカードが『蜘蛛』じゃない、まるで嘘っぱちって可能性もあるからな」
ヴィネックはそう言い切ると、いつもの彼となんら変わらない、どこか不遜な笑みをその瞳に浮かべてみせた。

こいつは俺の切り札だ。あんたは最後に必ず、このカードに敗北する。

大陸きっての名家、ウェス・ハーシュ家の御曹司が、稀代の放蕩息子として知られていることは、流れ者のザイフィスでさえ聞き及んでいる周知の事実だった。規律厳しい大学府の学生寮を夜な夜な抜け出しては、悪友たちと飲み歩き、時には堂々と賭博に興じる。実家の威光と彼自身の見た目の良さに胡坐をかいて好き放題している、世間知らずの坊や。――実際にこうして会っていなければ、ザイフィスはおそらくずっとそう思っていただろう。

彼は、自分を見つめる緑碧の瞳から目を逸らし、おのれの手札を確認した。

そこに並んでいるのは、七、八、九、十、十一。「蜘蛛の一」が勝てるとすれば、素数である七と十一……ということになる。ディーラーの男は、凡庸そうな外見からは思いもよらない、いい仕事をしている。これは「踏み手」としては申し分ない手札だ。加えて、山は十二。

ヴィネックの手元に、「踏み手」カードは――つまり自分より上位となる数字のカードは一枚もない。

ザイフィスと、このオイゲルと名乗るディーラーは、実は面識がない。雇い主であるゾデューは別々に仕事を依頼したのだった。だから当然、彼はディーラーが味方であることを知らず、事前の打ち合わせもしていない。イカサマ用のサインもない。これにはザイフィスもいささか驚いたが、これはこれで正解だったといえる。

なぜなら、この男、ヴィネックは驚くほど勘が働く。付け焼刃のサインを怪しまれれば、かえって厄介なことになっただろう。敵を欺くにはまず味方から――自分までが騙されたのは少々気に食わないが、プロである自分の抜きグセを見抜いた上で、意図的にこの手札を「選ばせた」手腕には、舌を巻かざるを得ない。

そして、その腕前から考察すれば、山がヴィネックにとって不利な十二である以上、谷にも同様の仕事がされていると踏んでしかるべきだろう。薄暗い灯りの中、ザイフィスの目が光った。

おそらく、谷は「一」――つまり、ヴィネックのあの切り札とやらはハッタリだ。

仮定から読み取れば、ヴィネックの手札は二、三、四、五、六。山が十二、谷が一であれば、自分の持つ七と十一に勝てる札は存在しないことになる。

キューズァロは、点数計算上、第四、第五戦を取れば勝てるゲームだ。つまり、自分の勝ちはまず揺るがない。先刻はあえて曖昧に答えたが、簡単すぎて拍子抜けするぐらいだ。彼はそこで、敵の心中に思いを馳せた。

予想はつく。――自分の苦境はヴィネックも痛感しているのだろう。だからこそ状況を打破するべく奇妙な策を持ってきたようだが、それも無駄だ。

もっとも、敗北必至の手札を見せつけられたいまでさえ、まだ笑みを浮かべている辺りは、素人離れしていると認めざるを得ない。大学府の学生だというなら、二十二、三……そんな年齢でこの胆力は相当のものだ。ギャンブラーとしての素質は申し分ない。政治もまた国民の命を賭したギャンブルだとすれば、未来の名君たる素養も十分なのかもしれない。

異常な緊張感が張り詰める中、運命の最終戦が始まった。

## ◇番外編 - オルグ・ヴィネック卿の優雅な冒険　巻之三 -

蜘蛛は闇に君臨し、転じては陽光（ひかり）を厭う。

これは、素数に対して絶対的な威力を発揮する「蜘蛛の一」を表した、キューズァロ独特の言い回しである。

ゾデューに雇われたプロの賭けカード師、ザイフィスは、目の前に悠然と構える年若い敵をじっとりと見つめた。

――あんたは最後に必ず、こいつに敗北する。俺の切り札である、このカードに。

彼は――今回の勝負の相手であるオルグ・ヴィネックは、大胆にもつい先刻、自分を前にそう言ってのけたのだ。

ザイフィスは手元に視線を落とし、自らの手札をあらためて眺めた。七、八、九、十、十一。「蜘蛛の一」がその力を示すことができるのは、素数である七と十一に対してのみ。……だが、可能性は限りなく低い。まずハッタリに間違いないと踏んでいいだろう。あのオイゲルとかいう、同じくプロのディーラーらしい男が一枚噛んでいる以上は。

一回戦。二人はほぼ同時に互いの勝負札を表返した。

ヴィネック、四。対するザイフィス、八。勝ったのはヴィネックだ。

ゼスター以下、成り行きを見守っていたギャラリーの間から、張り詰めた空気を破るように、いくつものため息が漏れる。

続く二回戦の勝者も、やはりヴィネックだった。彼の出した五が、その倍数であるザイフィスの十を見事、打ち破ったのである。鮮やかな手管と泰然とした態度に、今度はため息というより感嘆の声が

辺りに広まった。
「すげぇな、あの若造。相手はその道のプロなんだろ？　見ろよ、顔色ひとつ変えやしねぇぞ」
「ああ、俺もいろんな博打打ちを見てきたけどよ、あそこまで胆の据わったやつってのは中々いるもんじゃねぇな」
確かにここまでは両者とも、これといって緊張感なく手札を選んでいたように見える。――が、実際にはそうではなかった。
ヴィネックはすべての神経を研ぎ澄まし、その勘を限界まで働かせていた。切り札を生かすために、最初の二戦はなにがあっても落とすわけにはいかなかったからだ。
その真意が伝わったわけではないものの、二連敗を喫したことで、余裕を持っていたはずのザイフィスはわずかに驚いた。四、五ともに、ここで出すしかないという見事な「刺し」である。とはいえ配点は常と同じく一点ずつなので、ヴィネックの得点はこの段階で二点。最終二戦を獲れば勝利という方程式は依然として崩れない。
そして三戦目に移ろうという時だった。
ヴィネックは新たな提案をザイフィスに持ちかけたのである。
それはあまりにも奇想天外な、彼の口ぐせで言うならば「有り得ない」内容だった――。

「本気ですか」
ヴィネックの提示してきた追加案。その内容にはポーカーフェイスの達人、ザイフィスさえも瞠目を禁じ得なかった。彼は思わず、そう問い返した。
「本気だとも」
ヴィネックは尊大なまでにふんぞり返り、一言肯くのみだ。ギャラリーのざわめきがたちまち大きくなっていく。堪えかねたのか、彼の悪友、ゼスターまでがカーテンを破らんばかりにしてこう怒鳴

った。
「おい、ヴィネック！　お前いったいなにを考えてんだ!?　この勝負に――」
「我がウェス・ハーシュ家の全権を賭ける。中々おもしろい趣向だろ」
　こともなげに言ってのけるヴィネック。追い詰められた焦りのあまり、ついに友人はおかしくなったのか、とゼスターは一瞬、天を仰ぎそうになった。
「お前……わかってんのか？　負けたらどういうことになるのか」
　唾を飲み込みつつ、あらためて訊ねる。いったいどういうつもりなのか、ヴィネック本人はいやに楽しげだ。
「次期当主がプロギャンブラーってのも悪くないんじゃねぇか？――なぁ、ザイフィス」
　彼はそこで、カーテンの向こうに佇む「仇敵」を一瞥した。
「むろん、あいつに……ゾデューのやつにくれてやってもいいけどな。その代わりにあんた自身は好きなだけの報酬をやつから毟り取れば、互いに禍根も残らねぇだろ」
「……」
　ザイフィスは沈黙した。彼は――この若き貴公子は正気なのだろうか。ヴィネックはさらに続ける。
「ただし、俺が勝った場合は、ゾデューにもう一度、きっちり俺と勝負してもらう。キューズァロでな」
　言い放ち、手元のカードを指先で示してみせるヴィネックに、さしものゾデューもあんぐりと口を開けた。カーテンに力なく手を添えながら、しぼり出すように彼はつぶやいた。
「……貴様、よもや、気でも……気でも触れたのではあるまいな」
　ヴィネックは答えない。首だけをこちらに向け、目を眇めている。その表情に、なぜかゾデューの全身がびくりと震えた。
「受けるよな？　ゾデュー。卑しくもウェス・ゴート家の御曹司ともあろう者が、ここに来て尻まくって逃げるなんて真似はしねぇと

は思うが――」

「だ……だ、誰が、誰がそんな！　……いいだろう。どの道、貴様が勝つことなど万にひとつもありはしないのだからな」

ヴィネックは満足げににやりと笑った。「賭けは成立だな。――じゃあ、勝負再開といこうか」

ザイフィスは眼前に悠然と構える敵を、その表情を、用心深く観察した。彼がたったいま提案した、あのとんでもない賭けの意図するところを読み取るためだ。

――ザイフィスが勝利した場合、ウェス・ハーシュ家の家督を彼に譲る。そしてヴィネックが勝ったら、ゾデューはキューズァロでの再戦に今度こそ応じること。ヴィネックの突拍子もない提案の、それが全容だ。

どう考えても腑に落ちない。賭けとはいうが、こんなバランスの悪い話があるだろうか？　誰が聞いたって釣り合う条件ではないだろうに。「直接ゾデューを叩きのめしてやらなければ気が済まない」、ヴィネック本人はとってつけたようにそう言っていたが――。

だが、どれだけ眺め回そうが、彼の顔からはその真意は推し量れなかった。飄々とした、人を喰ったような顔つき。とても領土と領民を天秤に載せた男のものとは思えない。この勝負が絶対的不利であることは、ヴィネック自身、承知しているはずなのに。

ザイフィスの細い眉が、ほんのわずかに動いた。

絶対的不利。……そうでないとしたら？

ブラフを押し切るための提案ならば、なぜこのタイミングで言う

のか。勝負を始める前に提示した方が確実に効果的なはずだ。
それを敢えて、三戦目直前というこの頃合を見計らって口にするその意図。——つまり、ここにきて勝機が生まれたということか？
ザイフィスはあらためて自分の持ち札を確認する。残りは三枚。七、九、十一である。
対するヴィネックの手札は、未確定分を含んで、一、二、三、六。だから当然、次は九を切り、七と十一で四、五戦を制して終わるつもりだった。

……いや……待て。

彼はそこで、戦慄すべき予想に気づいた。
もし——もしも、ヴィネックの手元に、本当に一があったなら、どうなる……？
最後のために伏せ置かれた切り札が、真実、一だとしたら。
ヴィネックはすでに二点を獲得している。もし三戦目で自分が九を出せば、最終戦で出すのは七か十一になるが、そのどちらでも、自分は敗北する……ヴィネックに三点が加わり、五点を得るからだ。

頭を殴られたような衝撃を覚えるザイフィス。
この仮定が正しければ、一を最後に限定する意味も自ずと見えてくる。ヴィネックが導き出したのは、七と十一、どちらを出そうとも勝てる算段だからだ。
プロを虚仮（コケ）にするような「三戦目勝利」。いかにもヴィネックが企みそうなことだ。
「蜘蛛の一」——あれはブラフだと決めてかかっていたが、そうではないのか。いや、そもそも、ブラフに自分が将来受け継ぐはずの全権限を賭ける者など存在するか？
ザイフィスの額を、一筋の汗が滑り落ちる。
ヴィネックの思考が見えない……その伏せ札のように……！

時間は刻々と、まるでザイフィスを責め立てるような速さで過ぎてゆく。固唾を呑んで動向を見守る見物人たち。そんな彼らとは対照的に、腕を頭の後ろで組み、椅子の上でのびのびと身体を反らせているヴィネック。

ザイフィスはようやく結論を出した。悩みに悩んだ末、予定を変更し、九ではなく七を切った。

その理由を問われれば、三戦目にして「敗北確定」になるのを避ける心理が大きかったから、と答えざるを得ないだろう。

対して、ヴィネックの勝負札は六。からくも勝利はしたものの、ダメージを受けたのはザイフィスの方だった。

十二が関与しないこの勝負において、六はほかのどれよりも使いどころのないカードだ。それを、勝利カードのほぼ存在しない七にぶつけたのだから、ヴィネックにすれば、もっとも効率の良い組み合わせだったと言える。

ザイフィスは一瞬でそこまで読み取り、おのれの手筋を読み切られていることに激しく恐怖した。

そして――四戦目。勝敗は実質、ここで決まってしまう。

最初のクールさはすでになく、ザイフィスは息を荒げながら、手元に残った二枚のカードを睨み続ける。

谷が一であるだろう可能性は濃厚だ。が、そうでない可能性もある。

対するヴィネックは、実質一枚である残り札を出し、苦悶する相手を楽しそうに見ている。

そう――選択権はザイフィスに委ねられており、勝負を決めるのは彼の判断なのだ。

恐ろしいほどの沈黙が賭場を覆う中、ザイフィスは、勝利への根拠を一心不乱に求め続けた。自分の手札と、想像可能な限りのヴィネック側の組み合わせを、これまでの勝負の流れから考察し、推理する。

言うまでもないことだが、彼はキューズァロの専門家だ。この手の推理は飽きるほど、それこそやり尽くすほどやってきた。さながら水が低きに流れるがごとく、手札の順を見れば相手の心理が読み取れたものだ。

――だが、いまはその回路がまるで働かない。なぜか？

「第五戦を決め打ち」などという、常識外の作戦をヴィネックが取ったからだ。

ここまで計算しての行動だったとでもいうのだろうか？　まさか、それは……。

思考が袋小路に嵌り、ザイフィスは内心でカードを並べたディーラーのミスを責め始めた。そもそも、自分の手に一を回してくれていれば、こんなことにはならなかったのだ、と。おそらくカード配分の最後、ヴィネックが気づいたところで、仕込みが狂ったのだろう。調子に乗って数字をそろえなどするから、悟られたのだ――。

……いや、待て。ザイフィスはそこで、はたと気がついた。

本当にあの男は、あのオイゲルというディーラーは失敗していたのだろうか？

そうではない、としたら？

自分は当初、谷に一を隠していると考えていた。七と十一を「絶対勝利札」として残したのはそのためだ。

ところが、ヴィネックの手札には一があり、それを逆手に取られた。

だが、もし。もしも自分が、ディーラーの意図を読み損ねていたとしたら……？

たとえばそう、谷が三だったとすれば。

九はヴィネックにとって、「絶対敗北札」ではないか。なにしろ彼の手元には、九を打ち負かせる札は一枚もないのだから。

ザイフィスの両眼が見開かれる。……これだ。これに違いない。

ディーラーはミスを犯しておらず、なおかつヴィネックの手札に一が存在する理由は、これだったのだ。

つまり、五戦目の勝負に九を出せば、勝てる。歓喜と興奮に、彼の血色の悪い唇がぶるぶると戦(わなな)いた。

――迷うことは、もはやない。

「勝負！」

二人は、互いのカードを同時にめくる。

ザイフィスは十一。ヴィネックは――二。

その瞬間、けたたましい音が賭場に響き渡った。興奮のあまり立ち上がったザイフィスの椅子が、いきおいよく後ろへひっくり返ったのだ。彼は頬を紅潮させ、狂ったように叫んだ。

「勝った……勝った！　勝ったぞ、私の勝ちだ！」

だが、その直後。

ヴィネックは片目を閉じ、静かにこう言った。

「いいや――勝ったのは俺だ。

あんたが自分で、『山羊の角』を折ってくれたおかげでな」

そうして、ぱらりとあの「切り札」を表返してみせるヴィネック。

それは一ではなく、三のカードだった。

一瞬置いて、カーテンの一部を引きちぎり、飛び込んできたゼスターが絶叫する。

「それが……それが三なら、五戦目はヴィネックの勝ちだ！　三と九――一角獣が梟に負けたんだ！」

梟なき昼に、一角獣踊る。すなわち、九はその約数である三には勝てない。それをプレイヤーに注意させるための戒言である。

そのせりふを合図のようにして、賭場が喧騒に包まれた。二人を肴に賭けをしていた者たちは、それぞれ対照的な表情を浮かべている。興奮が最高潮に達するそんな中、ザイフィスはふらふらとよろけ、テーブルに手をついた。穴の開くほどカードを見つめ、そして喘ぐようにつぶやいた。

「ばかな……『蜘蛛の一』じゃない……だと……？」

間髪入れずに答えたのは、当の相手であるヴィネックだ。彼は皮肉っぽく鼻を鳴らしてみせた。

「一なら、そこの谷底に眠ってるんだろ。ディーラーの野郎、まったく結構な腕だったぜ」

ヴィネックの持ち札がすべて明らかになった。二、三、四、五、六。初めに推測したとおりの、有り得ないほど最弱な並びだ。

「なぜだ……この配札でなぜ、負けた……？」

愕然としたままつぶやき続けるザイフィスに、ヴィネックはこう言った。

「違うな。この配札だからこそ、あんたは負けたのさ。……一が谷にあると最初、あんたは確信してた。それは俺も同じだった。あんたの手札に一があったら、どう足掻いても勝てなかったからな。だが開始前のあんたの反応を見て、一が谷ってのは確信できた」

完璧なポーカーフェイスを装っていたはずのザイフィスだったが、そのほんのわずかな言動の隙を、ヴィネックは逃さなかったのである。

「初めの二戦を刺せたのは、あんたが油断しきっていたからだ。四、

五戦で必ず勝てると思っていたあんたは、初戦と二戦目には興味を持っていなかった。出したカードを見てみろ。ゾデューと同じレベルの、『弱い順』だ。手札がもう少し悪ければ、あんたの腕だ、こううまくはいかなかったろうよ」

ヴィネックの言うとおり、初戦でザイフィスが切ったのは八。次は十。どちらも配札の中ではもっとも使い道のないカードだった。

「三戦目のあのブラフは、あんたのプライドを刺激するための策だ。素人相手に『三戦目敗北』だけはしたくない、その可能性があるってだけで、安全策に逃げる……それが、典型的な『踏み手』であるあんたの本質だよ。ま、賭け金がデカくなりすぎたのも、冷静さを欠いた理由だろうけどな」

それは真実だった。さしものプロギャンブラーと言えど、あれほどの報酬を賭けての勝負など、これまでしたことは一度としてない。しかもそれを提示してきた当の本人は、なにを考えているのか余裕きわまりない不気味な態度で自分を翻弄し、弄んでさえいた。あの辺りから、ザイフィスのペースは完全に狂い始めたのだ。

「そして最後、四戦目の選択にしても同じだ。俺の仕込んだ『幻の蜘蛛』を――ないに決まってる一を踏み潰す勇気が、あんたにはなかった。

……なぜ、自分が不利になるとわかっていて、俺が敢えて切り札宣言をしたか教えてやろうか？

最後の選択を、あんたにさせるためさ。

自らの手で勝負を決めるのは『刺し手』の性分だ。だが、それをはぐらかし、数の優位で戦ってきたあんたは、最後の最後に必要となる決断力も、判断力も、培ってこなかった。

経験の外で戦うことをしてこなかった――だから、あんたは負けたのさ」

そこまで言い切ると、ヴィネックは喋りやめた。そうして対戦相手であるプロギャンブラー、ザイフィスを黙って見つめる。

やがて、ザイフィスは視線を上げた。そこにはどこか清清しささ

え感じさせる表情が宿っていた。彼は苦笑しながら右手を差し出した。今度はヴィネックが瞠目する番だ。

「……私の完敗だ。まさかここまで見事に負けを喫することになるとは、勝負を始める前はまるで思いもしていなかったよ。ウェス・ハーシュ一族の次期当主……いずれ国政にも参加する身なんだろうが、君がいるのなら、この連邦の未来もきっと安泰だろうな。将来の活躍、楽しみにしてるよ」

賭けカード師としてかぶり続けなければならないポーカーフェイスを脱ぎ去った、親しみやすい笑顔がそこにはあった。ヴィネックもまた右手を差し出し、握手を交わす。

「将来なんてまだ決まっちゃいねぇが、それは褒め言葉としてありがたく受け取っておくよ。――楽しい勝負だった。機会があれば、また、お手合わせ願いたいね」

そう言うとヴィネックはふたたび片目を瞑ってみせた。ザイフィスは軽くあごを引き、恭しく一礼した。そして静かに賭場から出て行った。潔さ漂う後ろ姿を見送ったあと、ヴィネックはテーブルを囲うカーテンを全開にした。顔色を失くして突っ立ったままの同級生を見つけ、おもむろに言い放つ。

「さぁて。――次はお前さんの番だぜ、ゾデュー」

## ◇番外編‐オルグ・ヴィネック卿の優雅な冒険　巻之四‐

九刻半（午後十一時）を回る頃、就寝着の上に薄いガウンを羽織り、ライティングデスクに向かって書きものをしていたイレイラは、唐突なノックの音を聞きつけ、ふと顔を上げた。こんな時間に部屋を訪ねてくるような相手には、一人しか心当たりがない。

「どうぞ」

彼女は素っ気なく言い捨てた。すぐにドアが開き、思っていたとおりの人物が姿を見せる。

「悪いな。就寝時刻とやらを過ぎてるのはわかってたんだが」

どことなくばつの悪そうな表情を浮かべ、イレイラの従弟にして許婚である彼、オルグ・ヴィネックはそう言った。イレイラは菫色の瞳を眇めて一瞥をくれただけで、それきり視線を机上に戻してしまう。――相当、お冠のようだ。「夜間外出禁止令」を二日続けて破ったためなのだろうが。

ヴィネックはそれでも引き返さない。ドアを閉め、ゆっくりとイレイラのそばに近づく。そして、自分の方を見ようともしない婚約者の背後に立つと、両腕を伸ばして椅子越しに彼女を抱きしめた。常ならぬその様子が効果を奏したのか、イレイラの手元からペンが離れた。彼女はため息をつき、それからようやく口を開いた。

「――どうした。ボロ負けして、自棄酒でも喰らってきたのか」

辛辣な上に、すべてお見通しだと言わんばかりのイレイラのせりふに、ヴィネックは思わず苦笑した。

「この俺がボロ負け？　有り得ねぇだろ。……イレイラ、お前の未来の亭主だぞ、俺は」

「……」

返事はなかった。答える代わりに、イレイラは右手をヴィネック

の腕に這わせた。なにがあったのかは知らないが、これほどおとなしい彼を見るのは初めてだった。いつでも自信に満ちあふれ、周囲の人間を振り回したいだけ振り回す、破天荒を絵に描いたような風雲児――それがオルグ・ヴィネック・シオン・ウェス・ハーシュという男である。少なくとも、こんな風に消沈した姿を他人の前に晒すことなどは考えられない。

イレイラは、ただ黙って彼の腕をさすってやった。首筋にかかるヴィネックの息遣いが、やや荒くなる。腕に力がこもり、はっきりと吐息が聞こえた。ヴィネックはいったんイレイラから離れると、彼女の横に移動し、腰を屈めた。右手を彼女の形の良いあごに添え、自分の顔を近づける。イレイラはされるまま、逃げようとはしなかった。肉感的な舌が忍び込んできた時でさえ、抗う素振りは見せなかった。

やがて唇が離され、互いの目を見つめ合う。先に口を利いたのはイレイラの方だった。

「……同衾はしないぞ。そういう『契約』だからな」

「マジでかよ。こんだけ雰囲気盛り上がってんのにか」

世にも情けない顔で嘆息するヴィネック。だが、その表情はどういうわけか、安堵しているようにさえ見えた。イレイラはあらためて訊ねた。

「それで？　……なにがあったんだ。あなたのことだから、喧嘩にしろ博打にしろ、負けたってことはないんだろうが」

「――せめて、膝枕くらいしてくれないか？　それなら問題ないだろう」

自分の問いをはぐらかすようなヴィネックの態度にも、イレイラは慣れた様子で応じる。ライティングチェアから腰を上げ、そばにある、浅葱色のびろうど地に金糸の縫い取りが施された長椅子に移った。ヴィネックの頭を膝の上に載せ、指先でやさしく髪を梳く。子どもの頃、よくそうしていたように。彼は満足そうに微笑んだ。

「……悪かったな。母上の愚痴、お前が毎晩相手してくれたんだろ

？　父上はそれでなくても無口だからな。話をまともに聞いてくれるのがお前だけなんで、甘えてるんだよ。母上も」

イレイラはかすかに苦笑を浮かべる。

「そういうあなたも、甘えたがりなところは叔母上に似たんじゃないのか」

「……ああ……意外に当たってんのかもしれねぇな」

ヴィネックは反駁もせず目を閉じた。そのまま眠るつもりなのかと思っていると、不意にぽつりと言うのが聞こえてきた。

「『赤馬亭』で、キューズァロの勝負をしたんだ。相手はゾデューのやつが連れてきたプロの博打打ちで……一回戦は俺が勝った。二回戦はそいつだ。で、最終戦が始まって、その途中で……俺はそいつに賭けを持ちかけたんだ」

「賭け？」

「ああ。――最終戦でそいつが勝ったら、ウェス・ハーシュ家の全権をくれてやるってな」

さしものイレイラも、これには耳を疑った。いくらなんでも、酔狂にもほどがある。そもそもそんな場所で、堂々と身分を明かして遊んでいることもだ。そう言おうとした時だった。

「勝負を制したのは俺だ。だから誰もいまさら不思議には思わなかったんだろう。なぜ俺が、そんなめちゃくちゃな賭けを提示したのか――負ける気はむろんなかったが、それだけじゃない」

ヴィネックはそこで言葉を切ると、うっすら目を開けた。宝石のように輝いているはずの双眸からは、いつもの光が消えていた。

「イレイラ、お前、昨日の昼、俺にこう言っただろ。俺にはこの家を継ぐだけの価値がある、って。……俺にはそうは思えないんだ。だからつい、そんな賭けを思いつき、口にしちまった。本気で思ったんだな――負けたら一切合切、手放してもいいって。……元々、俺には過ぎた荷物だからな」

「ヴィニー……」

イレイラは絶句した。かけるべきせりふが思い浮かばない。ヴィ

ネックもまた、黙った。重苦しい空気の中、彼はあのあとの出来事を、知らぬ間に脳裏で反芻していた。

＊　＊　＊

プロギャンブラー、ザイフィスが店を去ったあと、暗赤色の薄いカーテンの内側で、次なる勝負が始まろうとしていた。――すなわち、ヴィネックとその「仇敵」、ゾデューとの再戦である。

ゾデューの顔色はすこぶる悪かった。それも当然だろう。なにしろ、この直前、相手はその道でも高名なプロの賭けカード師を、苦戦の末とはいえ破っているのだから。

だが、逃げるわけにはいかなかった。ヴィネックの挑発に乗ったせいもあるが、そうでなくとも、自分はあのウェス・ゴート家を継ぐ人間である。政敵を目の前に、勝負を断ることなどできるはずもない。彼は額ににじみ出る汗をなんども拭いつつテーブルに着いた。

物見客の一人にディーラーを頼み、それぞれカードを引く。表返された「山」は三。そして「谷」は六。

ヴィネック側の手札は、二、五、四、八、十一。

対するゾデュー側の手札は、一、七、九、十、十二。

ディーラー役の男が席を外すと同時に、ゲームが開始された。

ゾデューは、かつてない真剣さで五枚の手札を睨みつけた。

自分にない手札で、もっとも警戒すべきカードは十一。だが、手元には十一の天敵である一と十二がそろっている。後半まで二枚を温存して十一を殺せば、三点、悪くても二点は確実に取れる。そこ

から逆算すれば、序盤で二点、出来れば三点欲しい。
ここで彼は、つい先日、ヴィネックから受けたばかりの指摘を思い返した。

――初戦で最弱のカードを切る手法は、セオリーどおりではあるものの、同時に読まれやすい。

唾を呑み込み、決断する。「弱い順に出す」ことを避け、強いカードから叩き込む。

結果、ヴィネックの五に対し、ゾデューの九が勝利した。「梟の三」が山にある以上、敵の手元にあると仮定して自分に勝てる手は十一しかない。予想外だったのか、ヴィネックが「ほう」と軽くつぶやくのが聞こえた。

順当な勝利に、ゾデューは高揚を隠し切れず、思わず笑みを漏らした。

続く二戦目。

ゾデューは十を選んだ。ヴィネックは八だ。先般、五を消費したその隙を狙い済まして切られた十が、ヴィネックの八を叩き落とす。

思わぬ展開に、成り行きを見守っていた観衆のそこここからどよめきが沸き起こる。

しかし、当のヴィネックは相変わらず、いつものあの不敵な笑みを絶やさない。

二連勝し、勝利への道を順調に進んでいるはずの自分が、ひどく危険な場所へ誘導されているような不安を、ゾデューは覚えずにはいられなかった。

――その不安は、じきに的中することになる。

三戦目。

ゾデューの勝負札、七。対してヴィネックの勝負札――十一。

「な……」

ゾデューの顔が、みるみる青ざめていく。四、五戦で十一を待ち伏せし、二点――あわよくば三点を獲得しようと思っていた彼の企みは、完全に読まれていたのだ。いや、それればかりではない。

「さて……まだ勝負を続けるかい？」

余裕たっぷりに脚を組み替えながら、ヴィネックは意味深なせりふを口にする。釣られて手元の札を見やったゾデューは、緑灰色の両眼を見開き、絶句した。

彼の手札として残っているのは、一と十二。

十一に対する切り札として残した最強の二枚は、倒すべき敵を失ったいま、主人を嘲笑うかのように、その弱みを露呈していた。

ヴィネックの手札として考えられる残り札は、二、四、六。

そのどれもが、自分の手札のいずれにも勝てる札ではないか？

「貴様……あれは、あれはわざと……」

彼は血走った目で相手を睨みつけ、呻き声を上げた。序盤、ヴィネックが意図的に敗北したことを悟ったためだ。最初に調子づかせることで、十一さえ押さえ込めれば勝利だと自分を錯覚させたのである。

ところが、十一は中盤でそうそうに使われ、ゾデューの手札は抜け殻となった。

そう、すべてはヴィネックの思惑通り。自分が彼の手のひらの上で踊らされていることを、ゾデューは厭というほど痛感したのだった。

「で、どうするんだ？　この上に恥をかきたいってんなら、俺は続けてもいいがな」

にやにやと笑いながら、尊大に問うヴィネック。ギャラリーの誰もが、同情と嘲りのこもった眼差しをゾデューに向ける。だが、いまのゾデューには、そういった空気を感じ取ることはできなかった。

彼はただ、あの「オサイオンの聖なる乙女」の姿を、クリスティアへの想いだけをその胸に蘇らせていた。

半年以上も前、神殿合議の場に赴き、初めて彼女に会った時のこと。そのあまりの美しさ、清楚さに眩暈さえ覚えたこと。恋を自覚し、幾夜も眠れず、ひたすら贈り物を届け続けたあの日々。

――愛しているとカードにしたため、丁重な断りの返事を受け取ってからも、熱情が醒めることはなかった。どんな仕打ちを受けようが、自分のこの気持ちが消える日などは永遠に来ないだろう。

ゾデューは真っ直ぐにヴィネックを見た。知らぬ間に唇が動いた。

「降りるものか。……勝負再開だ」

自分はきっと、無様に敗北するだろう。それでも、あきらめられるわけがない。

それは、ゾデューの情熱が面子を乗り越えた瞬間だった。

四戦目、ヴィネックの四に対し、ゾデューは十二。

その場の全員の予想と同じく、第四戦はヴィネックの勝利となった。

そして、第五戦の勝敗もまた、ゾデューを含む全員の予想するところだったが――。

伏せられた勝負札を、二人は同時に表返した。

ヴィネックは二。そして、ゾデューは――一。

「なんだって!?　おい、これ……」

「それじゃ勝ったのは、こっちの――」

観衆のざわめきに、ゾデューはぽかんと口を開けた。一瞬のち、彼は弾かれたように立ち上がった。

「二、二は、二は……」

それ以上言葉が出てこない。そんなゾデューの肩を、見知らぬ見物人の誰かが思いきり叩いた。

「二は素数だから、一を出したこっちの兄ちゃんの勝ちだ！　なんてこった、おい、やったなぁあんた！」

そのとおりだった。「蜘蛛の一」は、すべての素数に勝てる、ジョーカー的なカードである。よって、第五戦はゾデューの勝利。三点が加わり、五点を得たゾデューが、この勝負を制したのである。

まったく思いもしていなかった展開に、緊張の糸が切れたようで、ゾデューはふらふらと席に倒れ込んだ。同時にカーテンの外から、ヴィネックの悪友であるゼスターが現れ、呆れたように二人を眺め回している。

「つうか、お前……なんだってそんな手順でカードを切ったんだ？　どう考えたって……」

二と四を逆に出してさえいれば、ヴィネックは楽に勝てたのだ。

「蜘蛛の一」は素数以外には効力を発揮できないのだから。プロギャンブラーのザイフィスをさえ倒した彼に、よもやそれが読めなかったとでもいうつもりなのか。

問われた方のヴィネックは、首を鳴らし、大きく伸びをしてみせた。そしてこう答えた。

「別に、わざと負けたわけじゃねぇよ。俺は、こいつの……ゾデューの性格を読み切ったつもりでいた。俺の予定じゃ、勝負は三戦目、こいつの棄権で終わってたんだ。

まさかこいつがここまで本気だとは思わなかった。たかが女一人にだぜ？　……敗因はそんなとこだろうな」

放心状態のゾデューだったが、ヴィネックの不遜なせりふが耳に飛び込んだのか、いきなり我に返ったらしい。たちまちいつもの調子を取り戻し、青筋を浮かび上がらせて怒鳴った。

「貴様！　たかが女一人だと！？　クリスティアを、あの聖女を、たかがだと！？　赦せん……赦せん！　勝負だ、勝負しろ！　お遊

びなどで済ませるものか、正々堂々剣で決着を着けてやるっ！」
「さぁてと。そろそろ帰るな、俺。ゼスター、お前も、きりのいいとこで引き上げろよ」
得心のいかない様子で腕を組む友人に、ヴィネックはそう言い、席を立った。ゾデューの金切り声が延々背中を追いかけてくる。堪え切れず、噴き出した。そうしてひとしきり笑ったあと、彼はふと真顔になった。
――たかが女一人。けど、あいつは、その女のためにプライドを棄てた。
とっぷりと暮れた夜の街を、ノルド邸に向かって歩き出す。甚だ一方的だったとはいえ、協定を反故にされたイレイラはさぞ怒っているだろう。ヴィネックは知らず、つぶやいた。
「恋ねぇ……」
自分には、あれほど本気で恋した相手がいるだろうか。
そんな相手が、この先現れることがあるのだろうか？　そんなことを自問する――。

＊　＊　＊

「ヴィニー？　……ヴィニー、眠ったのか？」
イレイラは小声で反応を窺った。かすかな寝息が聞こえてくる。
どうやらヴィネックは本格的に眠り込んでしまったらしい。
「まったく……どこまで面倒をかけるんだ、あなたは」
そう言いながらも、イレイラの表情に嫌悪の色はない。彼女にとってヴィネックは、婚約者というよりも先に、世話の焼けるやんちゃな弟であり、年の近い尊敬すべき友人であった。互いに抱いてい

る親愛の情に、いったいどれほどの恋愛感情が含まれているのか。
彼女は自嘲した。

――それでも、一年後、私たちは夫婦になる。そして子を生し、ウェス・ハーシュ家という家名を引き継がなければならない。それが、私と彼に課せられた役目なのだから。

眠り続けるヴィネックの唇に、イレイラは指先でそっと触れた。起きている時には憎まれ口ばかり叩く彼のそこは、信じられないほどやわらかく温かく、まるであどけない子どもの頬のようだった。

＞i17763―1720＜

## ◇番外編 - オルグ・ヴィネック卿の優雅な冒険　巻之四 -（後書き）

「なろう」「みてみん」でご活躍されている汀雲様から、麗しいイラストをいただきました！　いやー、作者のもっとも苦手とする人物の外見描写を見事なまでに補完してくださっていて、感服ですっ！！　汀雲様、重ねてありがとうございます♪♪

## ◇番外編・オルグ・ヴィネック卿の優雅な冒険　巻之五・

東京を出たのは、いったい何時だったんだろう。

女はぼんやりと思考をめぐらせた。このひと月というもの、頭の中にはいつでもかすかな靄が漂っていて、現実がうまく見えない。視力が急激に落ちたのかと、少し前まではそんなことすら思ったものだ。

――雅臣（まさおみ）さんのいないこの世界を、正視したくないんだ。

ふと天を仰いだ。真っ黒な宇宙に散らばる、いくつもの硬質な輝き――満天の星空がそこにあった。十六の年に家出したまま、顧みることもなかった故郷。そもそも、いい想い出があるわけでもない。最愛の叔父である雅臣と過ごしたわずかな時間を除けば。

女の手が、Ｔシャツの上から、自らの腹をそっと撫でる。温かい、と感じた。

なのに、この温もりをくれた肝心の彼は、もうこの世にいない。どこを探しても、二度と逢えないんだ。そう思った瞬間、心臓が切り刻まれ、新たな血を噴き始める。数日前にこっぴどく殴られてできた頬の痣より、それはよほど治る見込みのない傷口のようだった。

地元の駅で電車を降り、行くあてもなくふらふらと国道沿いに歩道を歩き続け、一時間も経った頃だろうか。

唐突に、「それ」は姿を現した。

女は足を止めた。真夏ではあったが、ここいらは山中という土地柄か、日没後は気温がずいぶんと落ちる。しかし、そのことを差し引いても、辺り一帯の空気は異様なほど冷え込んでいた。――そう、国道からほんの少し脇に逸れたところにある、煉瓦造りの小さなト

ンネルを中心にして。
　周囲には、街灯はおろか道路灯すらほとんど設けられていない。文字どおりの暗闇だ。だがこの夜、空は恐ろしいほど晴れ渡っていた。そのため、冴え冴えと白く輝く月の光だけでも、その「遺構」がなんなのかは一目で判別がついた。草に覆われ、とっくに使われることのなくなった、いわゆる廃随道というやつだ。
　昼間であっても不気味なその空間に、なぜ彼女は近づけたのだろう。恐怖はなかった。強いていうなら、誰かに呼ばれたような気がしたから――そう、いまは亡き恋人の、自分を呼ぶ声が聞こえたような気がしたからかもしれない。

……ここを抜ければ、向こう側に渡れば、雅臣さんに逢える。もう一度――もう一度、抱きしめてもらえる。

　気づくと走り出していた。伸び放題の雑草や、ごろごろと転がる大小さまざまな石に足を取られそうになりながらも、女は我を忘れて走った。愛する男の笑顔を、その腕の中を目指して。
　女の姿が、闇に呑み込まれ、消えた。

　夕刻、オサイオン中央議事堂に併設された宿舎には、錚々たる顔ぶれがそろい、思い思いに休息の時を過ごしていた。晩餐にはまだ時間があり、といって、官庁街ともいえるこのブローデンスの街周辺には、遊べるような場所はほとんどない。――そうなると、悪い虫が騒ぎ出すのはもはやヴィネックの性癖である。
「一勝負五百マルナでどうだい？　高すぎるって額じゃあねぇだろ」
　慰安室に集まった面々を前に、彼は上着のポケットからキューズァロを取り出してみせ、にやりと笑った。外交の場に臨むようになってやっと四年目。だというのに、新参の若造とも思えぬその不遜

な態度は、学生時代からまるで変わっていない。
苦笑交じりに応じるのは、いまでも付き合いのある政府高官の三男坊、ゼスターだ。
「お前なぁ、ヴィネック。仮にも『七日間会議』の最中に賭け事ってのはまずいだろ。だいたい、お前確か、あの麗しい奥方にギャンブル一切禁じられてたんじゃなかったのか？　子どもの教育にもよくないからって」
かつて、神族と人間がこの世の覇権をめぐって合議したという故事に由来する「七日間会議」。実態は、国政の方針を確認するための定例会議のひとつに過ぎず、三週間以上にも渡る会合期間は無駄に長すぎだとの声も、多方面から上がっている。ヴィネックもむろんその一人だ。彼はまことしやかに嘯いた。
「ジードには俺自ら仕込んでやるつもりだぜ？　キューズァロは知育玩具でもあるんだろ。そう言えば、イレイラだって反対はしねぇさ」
イレイラとの間に、長男となる初子が生まれたのは、三年前の夏の終わりだ。灰色の髪も緑碧の瞳も父親にそっくりだったが、どうやら性格は母親に似たらしく、なにかとイレイラの真似をしては放蕩癖のある父をいなそうとする。そのたびにヴィネックは苦笑するしかなかった。
「イレイラが二人になったようなもんだ。なんで俺に似ねぇかなぁ、ジードのやつ。……だから、家じゃ息が抜けないんだよ。わかるだろ、このつらさ」
とぼけたせりふに場が沸いた。数人が賭けに応じ、勝負が始まる。やがて晩餐の時刻になり、彼らは全員、食堂に移動した。
そこで聞いたある奇妙な話が、今後のヴィネックの運命を大きく変えることになる。

「女ァ？」

晩餐の席で、ヴィネックは思わず素っ頓狂な声を上げた。隣席に座る書記役のオーラント候が耳打ちした、怪しげな噂話のためだ。

「要塞島への直通便にか？　有り得ねぇだろ。潜り込む隙なんか、あの便に限ってはまったくないんだから」

ヴィネックはそう言い、金のゴブレットを豪快に呷った。だが、相手はしごく大真面目な様子でさらに続ける。

「そりゃ私だってそう思うがね。しかし、逆を言えばそんな有り得ない噂が、脈絡もなく立つってのもおかしな話だろう？　……どうも本当らしい。発見したのは昨日の夕方だそうだ。オサイオンからのいつもの直通便の、聞いた限りじゃ最後尾の席に、倒れ込むようにして座ってるのを、勅警（※「勅使警吏官」の略。中央政府及び審議院の警護がその役目）の男が見つけたんだとか……それも、その女の様子だがね、どうにもおかしいというか……まともじゃないらしいんだよ」

オーラントの声が一段と低くなる。ヴィネックは黙ったまま、先を促した。

「十五、六ってくらいの、やたらと若い娘なんだが、髪も瞳も墨みたいに真っ黒で、見たこともないような変わった恰好をしてるって話だ。おまけに話す言葉もまるでわからないときた。おそらくはどこか離島の放浪民なんだろうが、それにしてもなぁ……密航するにしたって、行き先が要塞島じゃ仕方がないじゃないか？　あそこにあるのは元老院……審議院の議会所だけなんだからな」

「ゼーレンディアの人間じゃないなら、その辺の事情がわからなかったってことも考えられなくはないが……確かに妙な話だな。ふん……若い女、ねぇ」

ヴィネックは腕を組み、興味ありげにつぶやいた。要塞島への直通列車は、文字どおり、選び抜かれたＶＩＰしか乗車が赦されない。その警備は大仰なほど神経質なもので、それを知っているだけに、なおさら不可解な事態といえた。

話題はじきに変わり、話を振ったオーラントすら、二度とその噂に触れることはなかった。だが、晩餐がつつがなく終了し、それぞれが用意された個室へ引き上げる段になってからも、ヴィネックの頭には、その不思議な女のイメージが消えることなくまとわりついていた。

会ってみたい。はっきりとそう思ったのは夜半を回った頃だった。

思い立ったが吉日とばかり、ヴィネックは翌日の会議日程をすべてサボタージュすることに決め込み、朝食後早々に中央議事堂を抜け出した。もっとも、どの道要塞島へは直通便を都合しなければ渡ることはできない。三年前、家督を継ぐと同時に父、オルグ・グロウラスが海難事故で急逝してからは、名実ともに彼がウェス・ハーシュ家の当主である。そんなわけで、ヴィネックはバルネディア大陸南端にある専用港（ポート）に連絡を入れ、かなり強引に汽車の用意をさせた。乗客は彼一人。頭抜けた家名の為せる、いわば「超法規的手段」である。

ポートではすでに一両編成の列車が待っていた。鈍色に輝く流線型の車体には装飾もなければ凹凸すらほとんどない、恐ろしく殺風景な佇まいである。風流華美を好むとはお世辞にも言えないヴィネックでさえ、この愛想のない見てくれには、毎度眉をひそめずにはいられない。

「悪いな、突然。どうしてもすぐにあの島に行く必要があるんでな」

ヴィネックが声をかけた相手は、ポートの責任者である初老の男だ。先代のウェス・ハーシュ卿とも懇意で、その実直な性格が、額に刻まれた幾本ものしわににじみ出ている。彼は慇懃に頭を下げた。

「とんでもございません。お役に立てますのであれば、いつでもご連絡を。本日は海も凪いでおります。海上での運行にも、不安はありませんかと」

ヴィネックは肯き、開けられた扉から車内に乗り込んだ。――海上運行という言葉のとおり、この列車は海の上に浮き上がった線路を利用して走る。通常時は橋梁ごと海底に沈下するシステムになっており、こうすることで線路伝いに不穏な輩が島に入り込むのを防いでいる。強力な防錆剤が塗料としてふんだんに使われるなど、連邦でもここにしかない、非常に特殊な鉄道である。

汽車は滑るようにポートを出た。ここから審議院のある要塞島までは一刻（二時間）弱。外観とは反対に車内の装飾は存外豪華で、座席に貼られたクッションの効き具合も手触りも悪くはない。人心地つき、大きく欠伸をすると、ヴィネックは窓辺に頬杖をついた。

――父上、どうぞ、お気をつけて。ご無事のお帰り、心よりお待ちし……して、おります。

二週間前の出立の日、回り切らない口で懸命に口上を述べ、しゃちほこばって直立する愛息子の頭を、ヴィネックは乱暴に撫でた。そして苦笑した。……坊主（シグノ）、お前、なんで実の父親相手にそこまでテンパるんだよ？　イレイラやパドマの言うことなんざ、適当に流しとけって。そう耳打ちしようとして、思いきり当のイレイラに睨みつけられたことを思い出した。彼はふと真顔になった。

イレイラとは思った以上にうまくやれている。元々憎からず思っていた相手だ。友情に近いとはいっても、それは彼女への欲情を阻むほどではなかったし、現実に、同じ寝室で過ごす夜の時間を苦痛に思ったことなど一度もない。むしろ、昼間とはまるで違う彼女のあえかな仕草や反応は、ヴィネックにある種の倒錯感をすらもたらした。今年三歳になる一人息子、オルグ・ジードの存在が、安定した夫婦関係を裏づけるなによりの証左ともいえる。

だが、こうして独りになった時、なぜか無性に思い出されるのは、

学生時代にゾデューと交えたキューズァロでの一戦だった。――いや、より正確に言うなら、あの時のゾデューの眼差し――負けるとわかっている勝負に敢えて挑んだ、彼のあの熱意と気迫だ。クリスティアという想い人のために、彼はその頑なプライドを棄てた。それは有り体に言って、ヴィネックには理解できない感情だった。

恋。……きっと自分には生涯縁のないものなのだろう。ヴィネックはやがてそんな結論を出した。初めのうち感じていたかすかな虚しさは、イレイラとの間に一粒種を授かると同時に消えた。ジードは目の中に入れても痛くないほど可愛いし、彼のためなら嘘偽りなくなんだってできる。それで十分だ。

自分の人生は、十分に満たされている。

「……ああ、着いたか」

擦過音とともに車体が停止した。のそりと身体を起こし、汽車を降りる。一刻前にはすっきり晴れていたはずの空を、怪しげな黒雲が覆っている。雨か嵐でも来るのかもしれない。

要塞島側の専用港（ポート）に待ち構えていた黒い制服姿の勅警とともに、目的地へと向かう。用意された馬車に乗り込み、十五分ほども走った頃、島の中央に佇む石造りの堅牢な城塞――審議院の議会所が見えた。六つの角が外側へと突き出た、言ってみれば六稜郭の中心部に、同じく石でできた殺風景な塔が建っている。イグノディアス信仰の下では神聖な数字たる「六」を基本理念として建てられたという所以は知っているが、なんど見ても珍奇な様式であることに変わりはない。

やがて馬車は正門前に到着した。観音開きの大扉の閂を、いかつい体つきの門衛が二人がかりで外し、ふたたびかけ直す。外部からの訪問者は、おいそれと中には入れない。……となると、やはり妙な気がした。

いくら毛色が変わっているとはいえ、身元不審な人間を、よりによってここに隔離するだろうか？

大陸共通語（イーザリア）すら解せない怪しい女だ。そもそも、神殿は穢れを忌みきらう。異教徒であればなおさらである。それなのに、神殿の総括役ともいえる審議院が、なぜわざわざそんな存在をこの場所に連れ込み、保護する必要があるのか。

「ま、元老院のジジィどもの考えは、昔っからたいがい意味不明だったけどな」

付き従って歩く勅警には聞こえないよう、ヴィネックは小声で独りごちた。冷え冷えとした回廊に、革靴の音が硬質なこだまを響かせる。オーラントの話では、その娘がいるのは六陵郭の中心、塔の根元にあたる場所の一室らしい。

「さっきから審議院のお偉方を一人もお見かけしないが、例によって会議でもしてるのか」

ヴィネックは後方を振り向き、そう訊ねた。

「皆様方は、各々の御所（※六角に飛び出た部分の通称。善悪両面の性格を持つ神殿が設けられている）を護っておられます。ウェス・ハーシュ卿のご来訪につきましては、ご本人様の指示に全面的に従うよう、言いつかっておりますので。――そちらの客間でございます」

慇懃な答えとともに、勅警の足が止まる。彼は手に持った鍵束から一本の鍵を躊躇なく抜き出すと、鍵穴に差し込んだ。ヴィネックはいよいよ眉を寄せた。この部屋は確か、連邦でも地位ある人間に対してのみ使われている、最上級の客室のはずだ。彼は口を開きかけ、思い直し、右手を金でメッキされたノブに添え、ゆっくりと回した。

ドアを開け、中に入ろうとした瞬間だった。

「――ぶっ」

奇声とともに、ヴィネックは大きく仰け反った。なにかがドアに……体当たりしたらしく、鼻面をしこたま打ったのである。鈍い痛みに火花が散り、思いきり顔をしかめる。さしもの無表情な勅警もこれ

には驚いたのか、慌てて彼の身体を支えようとしたが、ヴィネックはその手を乱暴に振り払っていた。咄嗟のことで、頭に血が上っていたのだ。

「なんのつもりだ、ええ！？」

いきおいよくドアを開けると、ヴィネックは怒鳴った。

そして彼は言葉を失った。

腰にも届きそうな、真っ黒の髪。小さな顔。血の気のない唇。枯れ枝のように細いその身体にまとっているのは、確かにこれまで見たこともないデザインの、ひどく簡素な服だった。背丈は低めで、聞いていたとおり、十五になるかならないか。そんなところだろう。

だが、なによりヴィネックの目を惹きつけたのは、彼の眼前に佇む娘の両の瞳だった。

黒い宇宙がそこにはあった。涙に濡れ、うっすら赤く濁ってはいるものの、まごうことなきそれは一個の宇宙だった。吸い込まれる——恐ろしさすら感じ、ヴィネックは身震いしていた。だというのに、視線を外すことができない。足が動かない。鼻にしたたかな一撃を喰らった、その痛みすら瞬時に消し飛んだ。

「……お前は……誰だ？」

咽喉元から、かすれ声が漏れた。娘の肩がびくりと揺れる。彼女はなにごとかを短くつぶやいたものの、名前のようには聞こえなかった。

これが、オルグ・ヴィネックとのちに美沙紀と名乗るその娘の、初めての出逢いだった。

## ◇番外編・オルグ・ヴィネック卿の優雅な冒険　巻之五・（後書き）

よく考えたら、五稜郭にしろ六稜郭にしろ、上から見なければああいう形だってわかりませんよね（汗）　フォローを考えないと……。

## ◇番外編 - オルグ・ヴィネック卿の優雅な冒険　巻之六 -

廃随道を抜けた途端、異変に気づいた。そこに広がっているのはありふれた国道の風景ではなく、見たこともないような――いや、正確には、テレビや映画でしか見たことのないような――美しく華やかな内装の施された客車の一室だったのである。深みのある藍色の生地が貼られた座席はゆったりと広く、床には赤い絨毯が敷き詰められている。そして天井に取り付けられた小型のシャンデリアが、窓から差し込む茜色の光をきらきらと誇らしげに反射していた。

……お、落ち着いて。落ち着かなきゃ。ええと……あ――あたしは瀬川美沙紀、あと二ヶ月で十八歳、出身は蓼科で、二年前に家出して東京に出てきて……ついさっき、電車に乗って、地元に戻ってきたところで……。

女――美沙紀は頭を両手で押さえ、混乱を鎮めようと試みた。意識はしっかりしている。気が触れたわけでも、記憶障害の類でもなさそうだ。足取りも辿れる――平手を喰らった左頬はまだじんわりと痛むし、Tシャツにデニム地のショートパンツという服装も、東京を出た時と同じだったからである。

その車両はどういうわけか空っぽだった。ふらふらと座席に座り込み、あらためて状況を整理しようとするものの、それ以上の情報など得られるはずもなく、彼女はただ必死で自らの身体を抱きしめた。そうこうする間にどこかの駅にでも到着したらしく、車体がゆっくりと停止する。やがて、役人のような形（なり）をした外国人の男が現れるや、美沙紀の姿に顔色を変え、その腕を乱暴に引っ張り上げた。抗うことすらできず、美沙紀はまるで罪人のようになすすべもなく連行された。

だが、そうして連れて行かれた先は、およそ牢獄には似つかわしくない場所だった。二十畳はありそうな客間――絨毯や壁紙、高価そうな調度品は赤みの強い山吹色で統一されており、ちょうど先ほど乗っていた列車を彷彿とさせる内装でまとめられている。窓はない。一渡り室内を見回したあと、美沙紀ははっと我に返った。

――どこ、ここ？　なんで？　……どういうこと？

不安と混乱に気が触れそうだった。あの役人らしき男になにを言っても通じず、雰囲気から外国のどこかだということだけはわかる。だが、蓼科にいたはずの自分が、なぜこんな、見たことも聞いたこともないような場所に来てしまったのだろう。それもたった一瞬で。美沙紀は完全にパニックに陥った。とにかくここを出なければ。そう思い、ドアに取りつくも、施錠されているようでノブはびくとも動かない。なんど試しても同じだった。ようやくあきらめ、ドアから離れた彼女は、そのまま力を失って床の上に座り込んだ。差し入れられた食事にも手などつけられるはずはなく、美沙紀はそれから一睡もせずに夜を明かした。

やがてどうやら日が昇り、さらに夕刻近くなった頃、部屋の外で話し声がした。彼女は弾かれたように立ち上がった。そしてドアが開くと同時に駆け出し、身体ごとぶつかっていった。脱出するのなら、隙をつくしかない。万にひとつのチャンスであるなら、なおさら見逃したくはない。

ドアは、その向こうにいた人物をしたたかに殴りつけたらしく、男の呻き声が聞こえた。どうせあの無表情な「警備員」だろう。怪我をしようがかまうものか。彼女は必死で身をよじり、室外へ逃れようとしたのだが――。

怒号が響き渡った。そのあまりの迫力に、美沙紀の足はすくんだ。

間髪を入れず、全開になったドアから現れたのは、自分よりもいくらか年上らしい、若い外国人の男だった。灰色の髪に、息を呑むほど美しい、翡翠のような瞳。コスチュームプレイ風の時代がかった衣装。映画俳優を思わせる秀麗な顔立ちだったが、鼻の頭がやや赤く腫れているように見えるのは、美沙紀の「攻撃」をまともに喰らったためだろう。彼女は思わず後退っていた。

美沙紀の姿がよほど意外だったのか、男はぽかんとして彼女を見ている。どうしていいかわからず、思わず一言、謝っていた。通じないことは承知の上で。

彼は視線を外そうとしない。文字どおり、穴の開くほど自分を凝視し、ふらふらと室内に入ってくると、右手を伸ばしてきた。――美沙紀は飛び退った。先刻の報復とばかり、殴り返されると思ったからだ。

男は足を止め、なにごとかを短くつぶやいた。直後にドアが閉まり、施錠されるのがわかった。美沙紀の全身が硬直する。彼女は男を正面に見据えたまま、じりじりと後退を始めた。だが、相手は大股に距離を詰めてくる。短い悲鳴とともに、美沙紀は部屋の隅に向かって逃げた。

その態度が或いは功を奏したのか、男の表情が変わった。腰に手を当て、わずかに苦笑を浮かべて自分を見ている彼の眼差しに、美沙紀の心臓が一瞬、きしんだ。

この人……笑ったところが、ほんのちょっとだけ、雅臣さんに似てる……。

そばにあった長椅子に腰掛けるなり、男はふたたび、口を開いた。自分の顔を指差しながら、一語一語、丁寧に発音する。滑舌のよい美声だった。そのおかげもあり、言葉のわからない美沙紀にも、それが彼の名前だということがなんとなくわかった。「ヴィネック」

――やはり、ここは外国なのだろう。戸惑いつつも、彼女は同じように自分の名を名乗った。

怒りに任せて室内へと乗り込んだヴィネックだったが、そのいきおいは瞬時に失われた。

頼りなげに突っ立っている小柄な娘の姿に、毒気を抜かれたためである。――いや、毒気を抜かれたというよりも、ただ惹きつけられたのだ。いままでに味わったこともない、強烈な感情だった。

人払いをさせ、二人きりになったところで、彼はとりあえず自分の名を伝えた。どうやら理解したようで、壁に貼りつきながらではあったものの、娘も同じように名前を教えてくれた。

「ミサキ？　聞いたこともねぇ、変わった名前だな。近在の離島ですらないのか……どこから来たのか、どうやってあの直通便に乗り込んだのか、訊ねたところで答えられるはずもねぇしなぁ」

ヴィネックは豪快に足を組み替え、そう言った。そうして、あらためてこのおかしな娘を、頭の天辺からつま先にいたるまでまじまじと見つめた。

黒い瞳といい、少し低めの鼻筋といい、見慣れない顔立ちだが、決して悪くはない。日焼けなのかそれとも地の色なのか、肌はいわゆる小麦色で、健康そうにつやめいている。……が、その左頬には、うっすら赤い痣があった。もしやここに連行される途中、狼藉を受けでもしたのだろうか。ヴィネックは眉をひそめた。

「お前、それは誰にやられたんだ？　まさか勅警の野郎、こんな餓鬼みたいな娘相手に手を上げやがったんじゃねぇだろうな」

「……」

娘は困惑気味に黙り込んでいる。彼の言葉に険が含まれたのを察したためだろう。それに気づき、ヴィネックはまたしても苦笑いを見せた。

「ああ、悪い。……心配するな。ここに――ゼーレンディアに、仕事でも探しに来たんだろう？　口減らしに『外』に出されたくちかもしれねぇな。言葉もわからねぇんじゃ厄介だが、収監なんてことにはならないよう手を回してやるから、安心しな」

密航は重罪だが、危険を承知で罪を犯す輩には、それなりの事情があるものだ。この娘も、おそらくはそうした放浪民の一人なのだろう。ウェス・ハーシュ家の領地、ロマドの都は、交易都市として知られる連邦随一の商業の町である。連れて帰り、職を与えてやれば、こんな無茶もしなくなるに違いない。

親しみやすい口調に緊張がほぐれたのか、娘の顔つきが若干やわらかくなったようだ。ヴィネックは立ち上がると、彼女を手招きした。

娘は壁から離れると、おずおずとそばに寄ってきた。そして彼女の母語でなにかをつぶやいた。耳なじみはないものの、まるで小鳥が囀ってでもいるような、温かく可愛らしい響きの言葉だ。もっと聞いていたい。意味などわからなくていいから、聞かせてほしい――その一心に取りつかれ、ヴィネックは夢中で彼女に話しかけた。

家名の威力を最大限に活用し、ヴィネックは美沙紀を要塞島から連れ出すことを独断で決めた。もっとも、こんなことがイレイラの耳にでも入ったら、なにを言われるかわからない。気の毒な身の上に同情は示すかもしれないが、それとこれとは話が別だ。――大事な会議を抜け出してまで、いったいなにをやっているんだ。その娘にしたって、野良犬に餌付けするのとはわけが違うんだぞ、わかってるのか？　そんな説教が聞こえてくる気さえしたものの、思い直すつもりなどはさらさらなかった。

「根っこはやさしいやつなんだけどなぁ。俺の顔見ると文句が出てくるらしくて、とにかく毎日、なにかしら小言言いやがるんだよな。

かと思うと最後には泣き落としで、『ヴィニー、頼むから』だ。あいつがベッド以外で俺を愛称で呼ぶ時は、たいがいろくな用件じゃねぇんだから」

翌日、バルネディア大陸に戻り、ブローデンスの街に向かう途中の馬車の中で、ヴィネックはひたすら喋り続けた。内容はわからずとも、敵意のない肉声そのものに或いは落ちつくのか、審議院の議会所に囚われていた時よりも美沙紀の表情はよほど明るいものになっている。延々続くヴィネックの「愚痴」を聞いていた彼女は、そのうち聞きとがめるようにこう問い返した。

「ヴィニー？」

「ああ――俺のことだよ。親しいやつは時々そう呼ぶんだ、だからイレイラも……」

「ヴィニー……ヴィニー」

美沙紀はヴィネックを見据え、はっきりとそう繰り返した。意味のわかる言葉が嬉しかったのかもしれない。間違いなく、他意はなかっただろう。

しかし、当のヴィネックは、なぜか固まっていた。口を開け、美沙紀を見返すうち、どういうわけか耳まで真っ赤になっていた。美沙紀の方はきょとんとして彼を見守っている。なにかおかしなことを言ったのか、という風情である。

「……」

ヴィネックは咄嗟に顔を逸らした。自分でもわけがわからない。愛称で呼ばれたというただそれだけのことで、いったいどうしてここまで赤面しなければならないのか。そういう自覚は厭というほどあるのに、赤く火照った顔色は、中々元には戻らない。美沙紀は心配そうに彼の横顔を覗き込んだ。

「ヴィニー？　……」

どうしたの？　具合悪いの？　おそらくはそんな意味の疑問文。

ヴィネックはいたたまれず、手のひらで顔を覆っていた。

ブローデンスの街に着いたのは、日もとっぷり暮れた八刻（午後八時）過ぎのことだ。ここいら一帯は官庁街であるため、商売人の多く集まるロマドのヴィネック街区に比べると、宿屋の数は格段に少ない。美沙紀を連れてはきたものの、まさか中央議事堂併設の宿舎に泊まらせるわけにはさすがにいかず（彼にもその程度の認識はあった）、といってオサイオン市内に所有するウェス・ハーシュ別邸を使うのも気が進まない。そんなわけで適当な宿を見つける頃には八刻半を回ろうとしていた。

赤茶けた髪を無造作にひっつめた女将（おかみ）は、身なりのいい若者と珍妙な服装の娘という取り合わせに目を瞠りはしたが、そういう用途の客であると勝手に納得したようで、愛想よく部屋の鍵を手渡してくれた。ヴィネックは苦笑したものの、美沙紀の視線に目を合わせることはいまだにできず、素っ気ない態度で彼女の手を引くと、あてがわれた部屋に向かった。――絡めた指先から胸の鼓動が伝わるのじゃないかと思うほど、心臓が煩く鳴り続けるのを無視して。

部屋には、ヘッドボードすらない質素なベッドが一台と、机に椅子、それしかなかった。トイレと浴室が一応ついているとはいえ、味も素っ気もない佇まいである。だが、まぁこの際、宿のランクなどはどうでもいい。ヴィネックはわざとらしく咳払いをした。

「とりあえず、今夜はここに泊まっとけ。俺は宿舎に戻らなきゃならないから、あー……そうだな。明日の夜、また来る。……じゃあな、ミサキ」

踵を返し、そそくさとその場を去ろうとしたヴィネックだったが、ドアを開けようとした手が硬直した。

上着の裾を、美沙紀がつかんでいるのだ。

涙声が聞こえてきた。慌てて振り向くと、美沙紀は泣きながらなにかを繰り返しつぶやいている。聞き取ることはできなかったものの、その状態の彼女を放っぽり出して帰るわけにもいかず、ヴィネ

ックは悩んだ末、彼女をそっと抱き寄せた。背中を撫でてやると、じきに泣き声は止んだ。だが、宿舎に帰る気は、彼の中からはすっかり失せてしまっていた。

翌朝、狭いベッドの中で目を覚ましたヴィネックは、左肩の痺れに違和感を覚え、眉を寄せた。……イレイラにしちゃ軽い。つうか、なんであいつがここにいるんだ？　会期はまだ終わってなかったはずで……。

「――！」

子どもみたいな寝息が聞こえ、彼は瞬時に事態を把握した――というより、昨夜の出来事をすべて思い出した。

要塞島で出会った身元不明の娘を独断でそこから連れ出し、ブローデンスの街で宿を取ったはいいものの、心細がる彼女を放っておけず、結局、一晩一緒に過ごすことにしたのだった。もっとも、手は出していない。当たり前だ。そういうつもりで連れてきたんじゃない、とヴィネックは頭を強く振った。その時だった。

「……まさおみ、さん……」

今度ははっきり聞き取れた。誰か知り合いの名前なのかもしれない。見ると、美沙紀の薄い瞼はカゲロウの羽のように震え、目尻にはかすかに涙がにじんでいる。つらい夢でも見ているのだろうか――ヴィネックは思わず彼女の名を呼んでいた。

「ミサキ。……ミサキ」

睫が揺れる。ゆっくりと目が開く。あの漆黒の宇宙がヴィネックを捕えた。彼女はなにか言いたそうに口元を動かしている。

「ミサキ？」

温かな頬に手を寄せる。美沙紀は心の底から嬉しそうに笑った。初めて見る、なんの曇りもない、満面の笑顔だった。そして、次の瞬間。

彼女は細い腕を伸ばし、自らヴィネックの頭を引き寄せると、唇を重ねたのである。

雷鎚が、全身を駆け抜けた。

ヴィネックの中で、なにかが焼き切れた。彼は美沙紀の身体を掻き抱き、口づけを繰り返した。互いの息遣いがひどく荒い。欲しているものは明白で、そして拒むことは不可能だった。中央議事堂で行われる会議も、イレイラやジードの存在すら、脳裏から消えた。細波（さざなみ）のように、燃え立つ炎のように、彼の意識を、そして肉体を、その隅々まで美沙紀が満たしていった。

だが、抱かれている間、美沙紀は一度たりと、ヴィネックの名を口にすることはなかった。

最後に母の姿を見たのは、確か中学二年の夏だった。

母は若い頃から奔放で、狭いアパートにはいつも、誰かしら男が上がり込んでいた。そういう女だったから、自分の父親が実のところ誰なのかも、美沙紀はいまだにはっきりとは知らない。

もっとも、彼女が幼いながらに漠然と感じていたのは淋しさではなく、心細さだった。

母はこれといって定まった職を持たず、年齢も社会的立場も様々な周囲の男たちにぶらさがるようにして暮らしていた。学校にはかろうじて通っていたものの、そんな境遇の美沙紀には友達もろくにできず、彼女はいつも独りだった。

その母が、中学二年の一学期の終業日に、アパートを出て行ったきり行方知れずになってから二週間後。どこで噂を聞きつけたのか、唯一の親族だという叔父が美沙紀のもとを訪れたのである。

瀬川雅臣。当時三十になったばかりの、大学生にすら見えるよう

な童顔の青年だった。

昔から姉とは――つまり美沙紀の母とは折り合いが悪く、事実、肉親といってもこういう事態になるまでいちどとして会ったことすらない。だから美沙紀も、初めはなにも期待してはいなかった。むしろ、お荷物でしかないはずの姪に近づく理由はなんだろうと、なかば訝しくさえ思っていた。

だが、その警戒心も、ひと夏が過ぎる頃には氷解した。

雅臣には邪気がない。勘当され、実の親にも見放された姉に娘がいると知り、絶縁状態だったことを悔やみ、ただ純粋に姪の――美沙紀の面倒を看るためだけに訪ねてきてくれたのだ。なにくれとなく世話を焼く雅臣に美沙紀は懐き、そしてほのかな恋心を抱くようになった。血のつながりも、彼が妻帯者であることも承知の上で。

十五歳になり、中学の卒業式を迎えたある日、美沙紀は雅臣に想いのたけを打ち明けた。受け入れてくれるなどと思ったわけではない。ただ、それ以上気持ちを抑えることができなかっただけだ。

しかし、雅臣は彼女を拒まなかった。彼もまた、姪であるはずの美沙紀を女として愛し始めていたからである。

二人は結ばれ、束の間の幸福な時間を過ごした。とはいえ、妻ある身の雅臣に苦悩がなかったはずもなく、また、そうでなくとも叔父と姪ではこの先世間的に認められようもない。やがて東京への栄転が決まったためもあり、雅臣は妻とともに長野を離れた。美沙紀は彼を忘れられず、結局、あとを追う形で上京し、いくつものアルバイトをして生計を立てながら雅臣を捜し続けた。

ようやく再会したのは三ヶ月ほど前の話だ。将来のない関係を悲観して別れを決意した雅臣の中に、忘れ得ぬ恋情が呆気なくよみがえる。彼は妻に離婚を切り出し、お決まりの修羅場が始まった。

が、そんな泥沼も、つい先日、唐突に終幕を迎えた。通勤途中、ホームから線路上に誤って落ちた老女を助けようとして、雅臣はまるで彼女の身代わりのように轢死してしまったのである。

バイト先の居酒屋でたまたま事故を報じるニュースを見た美沙紀

は、そのまま店を飛び出し、雅臣のアパートに向かっていた。そうして、半狂乱になった彼の妻に厭というほど頬を張り飛ばされたのだ。周囲の人間が止めに入らなければ、殺されていてもおかしくないほどの剣幕だった。罵られ、唾を吐きかけられ、その場から追い出された。

美沙紀のお腹の中には、すでに雅臣の子どもが宿っていた。二ヶ月目――彼はそれを知らずに逝った。

長くつらい夢から覚めた時、目の前にいたのは、まぎれもなく最愛の叔父である雅臣だった。あの慈愛に満ちた声も、温かな手のひらも、そこにはなにひとつ違いなどなかったからだ。

だから美沙紀は自らキスをし、彼を求めた。雅臣もまた、彼女に応えてくれた。激しい交わりは数時間にも渡って続き、その間中、かつてないほど全身を満たす幸福感に彼女は酔いしれた。

――だが、夢はやはり、とうに終わっていたのである。

行為のあとでふたたび眠り込んでしまった美沙紀は、自分がなにをしでかしたのか、目覚めとともに知った。

汗ばんだ肌の香り、欲情の残り火がうっすら灯る瞳、耳になじまぬ異国の言葉。そのどれもが雅臣とは異質なものだ。――彼を裏切り、ほかの男に抱かれてしまったのだと、瞬時に理解できた。

血の気が引き、目の前が真っ暗になる。確かに昨夜、いちどは部屋を出て行こうとしていたこの青年を引きとめたのは自分の方だ。だがそれは、なにも他意があってのことではない。彼の後ろ姿に、愛する叔父の背中がなぜか重なって見えたから――そういう理由に過ぎない。美沙紀は弾かれたように上体を起こすとベッドから飛び降りた。相手の男はその様子に顔色を変え、自分をつかまえようと

手を伸ばしてくる。彼女は遮二無二身をよじって逃れ、裸のままドアへと走った。

男は大声を上げ、そんな美沙紀を追いかけた。そしてあっさりと彼女をつかまえてしまう。覆いかぶさるようにして背後から抱きつくと、彼は震える声でその耳元に囁いた。

「ミサキ！　おい、どうしたっていうんだ、待て！」

ヴィネックは血相を変えて怒鳴った。たったいま愛を交わしたばかりの相手、美沙紀の態度が明らかにおかしい。いきなり真っ青になったかと思うと、転がるようにしてベッドを飛び出し、室外にでも逃れるつもりかドアノブに必死で取りついている。だが、立てつけの悪いドアがどうにか開くより、ヴィネックが彼女を「捕獲」する方が一瞬、早かった。

「ミサキ……心配しなくていいと言っただろう。俺はお前を無碍にしたりはしない。だから……そばにいてくれ。俺のそばに……ずっと、こうして……」

美沙紀は泣きじゃくった。なにもかもが悪夢だった。なぜ、どうして自分だけがこんな目に遭わなければならないのだろう？　あと、ほんの少しで手に入るはずだった幸せはいとも簡単に壊れ、挙句こんな、見たことも聞いたこともない場所に無理やり連れてこられてしまった。いつでもそうだ――運命は、自分の意思などまったく無視したまま、残酷に歯車を研ぎ、いつまででも回り続ける。

雅臣の名をひたすら呼びながらしゃくり上げる美沙紀を、ヴィネックは強く抱きしめた。彼女を手放したくない。なにがあっても――その想いは、いまや抗いようもないほど堅固なものに変わり、彼の中に根を下ろしていた。

## ◇番外編‐オルグ・ヴィネック卿の優雅な冒険　巻之七‐

それから会期が明けるまでの一週間を、ヴィネックは美沙紀とともに過ごした。夕刻を過ぎると決まって議事堂から姿を消す友人に、ゼスターなどは意味深に声を潜めて耳打ちしてきたものだ。――息抜きもほどほどにしとかないと、あとあと厄介だぞ、と。

忠告の真意はストレートに伝わってきた。だが、わかっていても、どうしようもないのだ。あの黒い瞳が、頼りなく揺れる眼差しが、心に絡みつき、離れてくれない。最終日を迎える頃には、決意を固めていた。すなわち、彼女を――美沙紀をロマドの都に連れて帰り、愛人として家を与え、生活の一切の面倒を看てやることを。

その美沙紀は、自分の置かれている状況をどう理解しているのか、宿を訪ねてくるヴィネックにすがるでもなく、むしろ常に距離を保とうとしているのがわかった。事実、あの夜からこっち、ヴィネックは一度も彼女に触れていない。あふれそうになる焦燥を堪え、彼は表面だけは紳士的に振舞った。そうしなければ、もしも無理強いしてしまったら、昼のうちに彼女は姿を消してしまうだろう。抱きたい気持ちは山々だったものの、美沙紀を失うかもしれない恐怖には変えられなかった。……初めての感情だった。

「ロマドは隣の大陸にあるでかい町だ。しけたオサイオンなんかとは違って、遊ぶとこには困らないぞ。落ち着いたら俺がいろいろ、案内してやる。ああ、まずは買い物だな。服も要るだろう？　いつまでもその恰好じゃあな」

最後の夜、部屋に設えられた数少ない備品のひとつである椅子に跨り、背もたれの上にあごを乗せながら、ヴィネックは努めて明るい口調で喋り続けた。美沙紀はベッドの端に浅く腰を下ろし、どことなくぎこちない微笑を浮かべている。ほんの少し手を伸ばせば届くはずの距離だ。なのにそうは思えなかった。まるで、夜空に輝く

名も知らぬ星を見上げているような、狂おしいほどの遠さをヴィネックは感じていた。

「ヴィニー、……」

美沙紀が、ジェスチャーを交えつつ、なにかを訴えている。ヴィネックの眉が歪む。ここから出る。でも、あなたと一緒には行けない。親切にしてくれてありがとう、感謝してる――そんな意思が伝わってきたからだ。ヴィネックは立ち上がっていた。強張った顔で美沙紀に近づき、その細い腕を乱暴につかんだ。こんなやり方では心を開いてはもらえないとわかっているのに。案の定、美沙紀は彼から目を逸らしてしまった。怯えているに違いない。

「出てくっていうのか？　お前独りで？　だめだ――絶対にだめだ。どこにも行かせるもんか、お前は……お前は俺のものだ、ミサキ、頼むから俺と一緒に来てくれ。悪いようにはしない、約束する。ミサキ、俺は――」

手首を握る手のひらに、ぐっと力が入った。ヴィネックは唾を飲み込んだ。そしてついに言っていた。

「……お前が好きだ」

恋。縁のないものと高をくくっていたはずの、未知の感情。イレイラという正妻を、ジードという嫡男を得たあとになって、彼は皮肉もその正体を知ってしまったのである。

ヴィネックと「誤って」結ばれてしまってから、美沙紀は昼夜、激しい自己嫌悪に襲われ続けた。

雅臣とは似ても似つかないはずの――笑顔だけは、ほんのわずかに彼の面影を彷彿とさせてくれるのだが――外国人と、いくら寝惚けていたからとはいえ、肉体の関係を持ってしまったのである。生涯、身体を赦す相手は、愛した叔父だけと心に誓っていたのに。

ヴィネックは宣言どおり美沙紀を地元に連れて帰ると、町外れの

小さな家を与え、そこに住まわせた。自分のような、取り立てて美しくもない平凡な女のどこを彼はそこまで気に入ったのだろうと、美沙紀は不思議に思った。身なりの良さやそこはかとなく漂う気品からして、おそらく名家の跡取り息子かなにかなのだろうが、そういった身分の人間にありがちな気まぐれの寵愛とも考えにくい。なぜなら、折に触れヴィネックは、ひどく切なそうな眼差しを美沙紀に向けていたからだ。

――だからといって、受け入れるわけにはいかなかった。美沙紀はおのれに言い聞かせるようにして、腹をそっと撫でた。ここには、雅臣が授けてくれた大切な命が宿っている。たとえ独りでも、そしてどんな環境だろうと、必ず生んで育ててみせる。

だが、ロマドにやってきて数日が過ぎる頃だった。またも予期せぬ事態が彼女を襲ったのである。

明け方、美沙紀は、下腹部に鈍痛を覚えて目を覚ました。普段であればどうということもない、ありふれた、懐かしい痛みだった。不吉な予感に飛び起き、下着を見ると、ぽつりと赤い染みができていた。――彼女は我を忘れ、絶叫した。

隣のベッドで寝ていたヴィネックは、その悲鳴に眠りを破られ、なにごとかと美沙紀に駆け寄った。しかし、当の美沙紀の視界には、彼の姿は入っていなかった。彼女はひたすら腹を押さえ、叫び続けた。

「厭、厭ぁっ、行かないで、消えないで！　お願い、お願い……」

号泣する彼女を、ヴィネックは動揺しつつも抱きしめ、その背をさすった。ふとシーツを見ると、鮮紅色の汚れが小さく浮き上がっている。彼はますます戸惑った。

「月のものが来たのか？　どうしてそれくらいのことで、そんなに……」

生理が訪れたというただそれだけの現象に、なぜ美沙紀はここまで狼狽するのか。いまだに言葉もろくに交わせない関係を、この時ばかりは呪わしく思わずにいられなかった。

泣き喚いていた美沙紀は、やがて糸が切れたように気を失った。強張っていた身体が一気に弛緩する。血の気のないその顔を、ヴィネックはじっと見つめた。……彼女の心には、おそらく自分はいないのだろう。脈絡もないそんな想いが、なぜか胸のうちに苦く広がっていった。

出血はそれから一週間続き、やがて途絶えた。それはごく当たり前の月経となんら変わらないものだった。混乱と絶望が美沙紀をこっぴどく殴りつける。……まさか、あれは想像妊娠だったのだろうか？　いや、そんなはずはない。産婦人科で確認もしている。それなのに、いったいどうして――。

いずれにせよ、雅臣の忘れ形見が消えてしまったという事実に変わりはないのだろう。なにをする気力も湧かず、カーテンを閉めた部屋の中で、美沙紀はただぼんやりと過ごす日々を送った。

その間、ヴィネックは屋敷に帰ることはせず、ずっと彼女のそばについていた。メイドが二人いるものの、言葉が通じない以上、美沙紀の気鬱を晴らす手助けにもあまりならないだろう。そうして十日が経った。

ある新月の真夜中のことだ。いつの間に出て行ったのか、美沙紀の姿が家から消えた。

「父上？　お疲れ、ですか？」

心配そうな愛息子の声に、ヴィネックははっと顔を上げた。そして、自分がどこにいるのかを、あらためて思い出した。――帰ってきたのだ。ロマド市街の一等地に建つ自邸に――ウェス・ハーシュ邸に。

食堂には、母と妻、そして一人息子がそろって席に着いていた。中央での会議を終えて帰宅した当主は、だが夕食が始まってからというもの、一言たりと口を開かず、むっつりと押し黙ったままだった。その様子をいちばん気にしているのは、彼の帰りを心待ちにしていたジードのようで、愛くるしい大きな瞳をやや翳らせ、じっと父を見つめている。

「ああ……いや。そういうわけじゃない。坊主（シグノ）、ほら、来い」

ヴィネックはぎこちなくも笑顔を浮かべ、息子に向かって両手を広げてみせた。ジードは顔を輝かせて椅子から飛び降りると、無作法を咎める祖母の言葉も無視し、父の膝に飛び込んだ。絹にも似たやわらかな髪を梳いてやり、小突くように頬を撫でる。

――ジードも、イレイラも、俺の最愛の家族だ。こいつらのためなら、俺はなんだってできる。この気持ちは偽りでもなんでもない。……そうだ、血迷ってたんだな。俺ともあろう者が、あんな餓鬼みたいな小娘に――。

「ジード！　席に戻りなさい。お前はいずれ、このウェス・ハーシュ家を継ぐ身なのですよ。わがままは赦しません、席に着きなさい、ジード！」

厳格な声が飛んだ。女主人としての権限をいまだに手放そうとしないアウラ・エルリーネは、跡取りである孫息子の教育に異様なほどの執心ぶりを見せ、あれやこれやと口出しを欠かさない。

「いいじゃないですか、母上。こいつはまだほんの餓鬼なんだ。甘えたい盛りなんだろうし、少しくらい――」

ヴィネックの反論に、アウラの眉が釣り上がる。

「よくはありませんよ。子どもだろうと、けじめはきっちりしておかなければ。そういうところまでお前に似てしまったりしないようにね」

険のあるせりふに、食卓の空気が濁りを帯びたようだった。アウ

ラはさらに声を張り上げた。
「そもそも、会期が明けてすぐに戻って来さえすれば、ジードだってここまで淋しがったりはしなかったでしょうに。どうせオサイオンで、感心しない遊びにでも耽っていたのでしょう、お前は。ウェス・ハーシュ家の家長であるという立場を、いったいどう考えているのやら」
「義母上――申し訳ありません。彼の素行については、私にも責任の一端があります。私が至らぬばかりに……」
そう言ったのはイレイラだ。菫色の瞳が曇り、磨き抜かれた美貌もどこかくすんで見える。だが、その謙虚なはずの態度は、なぜかヴィネックの気をこれ以上ないほど苛立たせた。
「余計なことを言うな、イレイラ！　お前は俺の女房で、母親じゃあねぇだろ。俺がどこでなにをしようが、お前の知ったことじゃねぇ。母上、あなたもだ。この家の頭領が俺だというなら、いい加減、口を慎んでくれ。久しぶりに帰ってきて、なんだってこんな妙な雰囲気の中で飯を喰わなきゃならないんだ？　もうたくさんだ、俺は――」
ヴィネックは口元を押さえた。そして乱暴にナプキンを外すと、テーブルの上に叩きつけた。先ほど想いを断ったばかりの美沙紀の顔が浮かんだ。彼はジードを膝から下ろすと、足音も荒々しく食堂を出て行った。

その夜、ヴィネックは、かつてないほどのいきおいでイレイラを抱いた。激情の底に潜んでいるものが純粋な愛情なのか、それとも単なる苛立ちに過ぎないのか、自分でもわからないまま、ただ言葉もなく相手を貪った。最初から最後までイレイラは従順で、いちどたりと夫に抗う素振りは見せなかった。――それがまた、彼の気に障った。

あいつは……ミサキはこうじゃなかった。俺に逆らうわけじゃないが、俺よりも貪欲なくらいで……いや、そうじゃない。そうじゃなくて、ひたすら熱っぽく気持ちをぶつけてくるみたいな――。

……けど、それなのに、呼んではくれなかったな。抱かれてる間は、俺の名前を、一遍だって。

気づけば美沙紀のことを考えていた。たった一晩愛し合っただけの彼女の顔が、瞼の裏にちらつき、自分を離してくれない。それはもはや呪いのようですらあった。

「……さっきは、悪かったな。言いがかりだった」

二度目を終え、軽い疲労とともにベッドに沈み込みながら、ぼそりとつぶやく。イレイラは髪をかき上げ、かすかに微苦笑した。

「疲れているんだろう。今日は早く就寝んだ方がいい。お休み、ヴィニー」

彼女はさっさとベッドを下り、浴室へ向かった。やがて聞こえてきた、湯を使う単調な音が、ヴィネックを眠りへと誘った。

ロマド郊外の別邸から消えた美沙紀の行方が知れたのは、この翌日のことだった。情報源はゼスターで、彼からの電話を受けるなり、ヴィネックはなにも考えずに屋敷を飛び出していた。

馬車を用意させて向かった先は、海沿いの鄙びた町、ソンクヒルだった。場所柄漁業が盛んなこの一帯には、なかば自治区めいた結束感が漂っており、従って余所者を受け入れたりなど滅多にしない。そのことは、ロドアという大陸全体を取り仕切る若き領主として、ヴィネックも聞き及んでいた。だからこそ、最初は得心がいかなかった。

――ソンクヒルに、ミサキが……あいつがいるだって？　本当なのか、そいつは。

ウェス・ハーシュ家の伝令室にかかってきた一本の電話に、ヴィネックは顔色を変えた。かけてきたのは、先日の会議の折にも同席していた旧友、ゼスターだ。彼はこう続けた。

『ブローデンスの街にいる間中、お前が変わった風体の小娘のもとに通いつめてたってのはちょっとした噂話になってるんだぞ。黒い髪で黒い瞳の、十五になるかならないかってくらいの女なんだろ？　時期も合うし、多分、間違いない。うちに出入りの商人から聞いたってだけだがな』

ヴィネックの唇が震えた。市街地を捜し尽くしたものの、結局彼女を見つけ出すことは叶わず、あきらめた――つもりだった。なのに、いまこうして美沙紀の居場所を聞かされ、興奮に叫び出したいほど胸が熱く疼いている自分を、彼はふたたび、厭というほど自覚した。

『ただな、ソンクヒルってのは港町だけあってガラの悪さで有名な場所なんだろ。人口の七割近くが男だっていうしな、もしかして……好からぬ境遇に置かれてるってことも考えられるかと思ってさ。お節介だったら、忘れてくれていいが』

お前には、あの「高貴なる百合」がちゃんといるんだしな。そう付け足すと、ゼスターは電話を切った。心の中で友人への謝意を短く告げたあと、ヴィネックは祖父の代から仕えてくれている老馬丁を直ちに呼びつけた。

港町に猫が多いっていうのは、どこの国も変わらないんだな。

美沙紀は微笑を浮かべながら、足元にじゃれつく数匹の仔猫たちに餌を投げてやった。カタクチイワシによく似た銀色の小魚で、不

漁の日でもこれだけは一定量が揚がってくるらしい。

――あの美しい、気さくな青年のもとを離れようと思った理由は実のところなんだったのか。

ぼんやりと思いをめぐらしつつ、吹きつける潮風に乱された髪を、彼女は気だるげに押さえた。そういえば、この真っ黒な髪の毛――よほどめずらしいのかそれとも不吉の象徴なのか、辿り着いたこのソンクヒルの町で最初に出会った老人は、納屋で眠り込んでいた自分の姿に、初めは怯えたような表情すら見せたものだ。

彼は独り暮らしで、身内もいない。そうした気楽さもあってか、見るからに事情のありそうなこの異国の娘を敢えて追い出そうとはしなかった。いたいのなら好きなだけいればいい。むろん言葉はわからなかったが、気持ちは伝わってきた。美沙紀は好意に甘え、この小屋に居ついた。やがて簡単な家事を手伝うようになり、穏やかな日々が淡々と過ぎていった。

「ミサキ！」

しわがれた声が聞こえた。小屋の外に出ていた美沙紀に、老人は眉をしかめて近づいてきた。

「日のあるうちは外に出るなと言っただろう。お前のなりはそれでなくても人目を惹くんだ。この町には若い女が少ないからな、悪い連中に目をつけられたらどうする」

老人は、その小柄な身体で美沙紀を庇うようにし、彼女を連れて家の中へと引っ込んだ。美沙紀はおとなしく彼に従った。

だが、老人の抱く不安は、この数日後に現実のものとなったのである。

いつになく海の凪いだ、晴れた日の夕暮れだった。老人は、用足しのために午後から家を空けており、小屋にいるのは美沙紀ただ一人。その隙を、「彼ら」は見逃さなかった。

「へぇ……噂どおり、まるでイカ墨みてぇに真っ黒な目ん玉してやがる。黒い髪ってのはたまにいるが、こりゃあ相当めずらしいぞ。おい、お前、いったいどっから来やがったんだ」

押しかけてきたのは総勢五人。中にはまだ十四、五ぐらいの少年も交じっている。このソンクヒルを根城にする、地元の愚連隊の連中だ。

リーダー格らしい、ひときわ体格のいい二十歳前後の男が、怯えて納屋に逃れようとした美沙紀の髪を乱暴につかみ、じろじろと全身を見回した。その無遠慮で、執拗で、棘のある視線に、美沙紀はこれ以上ないほど身体を強張らせ、ありったけの勇気をふりしぼって相手を睨みつけた。

「ははっ、威嚇してやがる！　おい、こいつ、唖なんだっけか？　口が利けねぇらしいな」

「喋れねぇんじゃなくて、大陸共通語を知らねぇとかって聞いたぜ。なんにしてもまともじゃねぇんだろ。この髪といい目の色といい、ひょっとして片端なのかもしれねぇな。どっから来たにしても、どうせ身内なんざいねぇさ。あのお人好しのジジィぐらいだろ」

男たちは下卑た笑い声を上げた。そのうちの一人が、美沙紀の胸元に手を伸ばし、服の上から小ぶりの乳房を荒々しく捏ね回す。嫌悪のあまり、美沙紀の口元からかすれた悲鳴が漏れた。

「い、厭ぁっ！　離して、やめてぇ……っ」

耳なじみのない言葉に、彼らの嗜虐性がいっそう刺激される。手の中の玩具。文字どおり、玩ぶだけ玩んで、飽きたら棄ててしまえばいい、女という名の人形。俺が先だ、そんな獣じみたせりふを吐きながら、数人がかりで美沙紀の身体を床の上に押し倒し、服を剥いでいく。じきに、生唾を飲み込むいくつもの露骨な音が聞こえてきた。

「早く済ませろよ、あとが支えてんだからな」

「手でも口でも使わせりゃいいだろ。……俺は十日ぶりなんだよ、悪いけどな、たっぷり味わわせてもらう――」

美沙紀を組み敷いたままズボンを脱ごうとしていた男の動きが、唐突に止まった。

小屋の入り口である粗末なドアが、恐ろしい音とともに突如、破られたからだった。

ソンクヒルに着くなり、ヴィネックは片っ端から村民を捕まえ、美沙紀らしき娘を知らないか訊ねて回った。身分を明かすまでもなく、問われた誰もが彼の質問にあっさりと答えてくれた。鬼気迫るその表情に気圧されたせいもあるだろう。おかげで、ほんの半刻（一時間）足らずのうちに、最近異国の娘が住みついたと噂の、独り暮らしの老人の家に辿り着くことができた。

教えられた小屋に赴くと、そこにはちょうど外出から戻ってきたらしい老人の姿があった。逸る心を押さえつけ、美沙紀について切り出そうとした時だった。家の中から、絹を裂くような女の悲鳴が聞こえてきたのである。

ヴィネックは我を忘れた。間違いない――あれは美沙紀だ。さらには、不穏な物音、若い男たちの声までがはっきりと聞き取れた。中でなにが行われようとしているか、考えなくともすぐにわかった。

彼はドアを蹴り飛ばし、室内になだれ込んだ。……そして、そこから、記憶がない。

気づくと、周囲には、顔面を血まみれにし、低く呻き続ける複数の男たちが倒れていた。かろうじて殺しはしなかったらしい。もっとも、そいつらが死のうが生きようが、そんなことはどうでもよかった。ヴィネックは、真っ青な顔で震えている美沙紀を引き寄せ、力の限り抱きしめた。ヴィニー――耳元で名を呼ぶ、小さな声。知らぬ間に、涙がこぼれていた。

「……無事か？　すまなかったな、もう少し早く着いていれば……」

ヴィネックの眉間に深いしわが寄る。ことが起きる前だったとは

いえ、こうして無残にも服を奪われたその恐怖がどれほどのものか、男である自分にも想像に難くない。が、美沙紀は健気に微笑を見せ、首を横に振っている。

「ヴィニー、あ、あり……がとう」

ヴィネックは瞠目した。いつの間に覚えたのか、それはまぎれもなく大陸共通語での謝辞だった。彼は絶句し、もういちど、美沙紀の身体を掻き抱いた。そしてつぶやいた――独り言のように。

「……礼を言うのは……俺の方だ」

離れることなどできない。彼はあらためてそう思った。反論する暇も与えず美沙紀を馬車に乗せ、その日のうちにソンクヒルを発った。そうしてロマド市内へと――少し前まで彼女と暮らしていた別邸へと戻った。

美沙紀は日に日にヴィネックに対し、心を開いていった。言葉はあまり上達しなかったものの、ヴィネックにしてみればそれは大した問題ではなかった。彼女がどこからやって来た娘だろうと、こうして自分のそばにいてくれるのなら、ほかにはなにも望まない。

身ごもったことがわかったのは、それから二ヵ月後のことだった。

その日、手早く朝食を済ませたあと、自室にイレイラが戻ってくるのを待って、ヴィネックは話を切り出した。

「所用があってな。しばらく家を空ける。その間、ジードを頼む」

美沙紀が臨月を迎え、いつ生まれてもおかしくない状態になっていたのだ。子どもは間違いなく自分の子だろう。イレイラという正妻を前にし、それでもヴィネックは、誤魔化しようのない喜びが胸に込み上げるのを、罪悪感とともにひしひしと感じていた。

「わかった。すぐに出かけるのか」

イレイラはライティングデスクにもたれかかり、いつもと変わらぬ理性的な眼差しをこちらに向けている。――と、少なくともヴィ

ネックは思った。この時までは。
「ああ、すまん。急ぐんだ」
とくに手荷物も持たず部屋を出ようとするヴィネックの背に、イレイラの静かな一言が、鋭く投げつけられた。
「――要塞島で拾った仔犬に、ずいぶん懐かれたらしいな。所用というのは、その雌犬絡みなのか」
ヴィネックは足を止め、振り返った。口を開きかけたものの、相応しい言葉など出てくるはずもなく、彼はただ黙っておのれの妻を、「高貴なる百合」とも讃えられるイレイラという女性を見つめた。
彼女は眉ひとつ動かさず、書簡をめくり続けている。そして夫を見ようともせず、こう言い放った。
「そこに立っていられると気が散る。行くのならさっさと行ってくれ」
「……」
絶句したまま、ヴィネックは部屋を出、扉を閉めた。

この数日後、美沙紀は黒髪の男児を産み落とした。女の子のようにも見える、繊細な顔立ちの、美しい赤ん坊。ヴィネックが与えた名は「アドリオ」――「橋」という意味を持つ古い大陸の言葉である。異国からやってきた母と、ヴィネックの生まれ育ったこの国を結ぶ絆になればいい。そんな願いを込めてつけた名前だった。
願いの成就を、ヴィネックは信じて疑わなかった。一年後、美沙紀が自分と息子を置いて、忽然と姿を消すまでは。

## ◇番外編 - オルグ・ヴィネック卿の優雅な冒険　終幕 -

数刻前からちらついていた雪が、気づくと本降りになっていた。美沙紀はストールを幾重にもかぶり、暖炉の前に丸まったまま動こうとしない。その様子にヴィネックは噴き出した。

「まるで猫だな。お前、生まれた土地は雪国みたいなとこだったんだろ？　なんだってそんなに寒さに弱いんだろうな、なぁ、アドリオ」

彼は、一歳の誕生日を迎えたばかりの息子を膝の上に抱き上げると、おどけた口調でそう話しかけた。むろんまだまだ口が利けるはずもないアドリオは、それでも父の言葉に嬉しそうに笑い声を上げる。

「雪……きらい。冷たい、寒い……あそこ、好きじゃない」

美沙紀は鬱々と返した。季節のせいで気が滅入るのだろう、ヴィネックはその程度のことだと捉え、あまり深く考えようとはしなかった。

「あそこってのは、お前が育ったって町か。まぁ……いい想い出ばっかとはそりゃ限らないだろうけどな。でも、俺はいつか、そこへ行ってみたいもんだな。こいつと一緒に」

腕の中の宝物をやさしく揺すぶりながら、ヴィネックはなかば独り言のようにつぶやいた。それは本心だった。

あの日、要塞島で美沙紀と初めて出逢ってから、二年という時が経とうとしていた。だが、彼女の出自は相変わらず謎のままだ。ゼーレンディア合陸連邦を中心とした世界地図を見せても、反応は芳しくない。ヴィネックにしたところで、すべての離島についての知識があるわけではない――その上、美沙紀が、連邦周辺の離島からやってきた放浪民（ツィゼット）でないという可能性も、そもそも棄て切れないの

だから。

「そうだな……アドリオがもう少し大きくなったら、旅行にでも行こう。寒いのが厭なら、雪の降らない、暖かい地方に――西のゼドスなんかどうだ？　あそこなら、海で泳ぐこともできるぞ」

そう言いながら、ヴィネックはアドリオの小さな手を取り、そのまま母親の方へと伸ばさせた。

ところが、この時美沙紀が示した態度は、ヴィネックの理解を大きく超えるものだった。

「――やっ、厭っ」

聞き違いなどではない。彼女は――美沙紀は、確かにそう言った。あくまで小声ではあったものの、まるで厭わしい害虫でも払い除けるような仕草と表情で、アドリオの手から逃れようとしたのである。あまりの衝撃に、ヴィネックの全身が固まった。彼はぼんやりと、自分が美沙紀の名を呼ぶ声を聞いていた。

「ミサキ……？　どうしたんだ、いったい――」

「あ……」

美沙紀の顔は蒼白だった。自分がいまなにをしたのか、認められずにいるような、絶望にも似た感情がそこには浮き上がっていた。彼女は膝の上に突っ伏し、すすり泣き始めた。

「……めんなさ……ごめんなさい……っ」

ひどい混乱がヴィネックを襲った。美沙紀の様子が尋常でなくおかしい。アドリオを膝から下ろし、床の上にそっと座らせてから、彼女を抱き寄せ、その背をやさしく撫でさする。あきらかに情緒不安定だ。

「ミサキ、今日はもう就寝んだ方がいいな。寝室へ行こう。大丈夫だ、暖かくなれば、気分も良くなるから」

美沙紀の身体を抱き起こし、抱えるようにして部屋を出る。こじんまりとしたこの別宅には、大して部屋数の用意もない。すぐ真隣

に設えられた寝室に入ると、ヴィネックはやや強引に美沙紀をベッドに腰掛けさせ、努めて明るくこう言った。

「アドリオは俺が看ててやるから、お前はなにも心配しないで、ゆっくり眠るんだ。いいな？　それじゃお休み、ミサキ」

微笑し、唇に軽くキスをしてから、寝室をあとにする。独り残された美沙紀の頬を、滝のような涙が流れ落ちていく。背中を震わせて嗚咽しながら、彼女は繰り返した。それは彼女の母語である「日本語」だった。

「ごめんなさい……愛してる、ヴィニー、本当に愛してるの……！」

その脳裏に浮かぶのは、二人の家族の顔。九つ年上の夫と、そして、生まれて一年にしかならない最愛の息子のあどけない笑顔だった。夜空を思わせる黒髪を母から、凛々しく整った目鼻立ちを父から譲り受けた、誰の目にも美しい、天使のようなアドリオ。

……あたしのアドリオ、あたしの宝物、でも……でも、あなたは――。

やがて美沙紀はゆっくりと顔を上げた。涙に曇った視界には、見慣れたクリーム色の壁紙も、シンプルながら上品なデザインのシャンデリアも映ってはいない。彼女は悟った。

これが、「この世界で」自分が過ごす、最後の夜なのだと。

お前の弟だ。そんな簡単な一言で、彼、オルグ・ジードにはある日突然、四つ違いの兄弟ができた。

「弟……？　でも、母上、この子は……」

母上には全然似ていない。そのせりふを、なぜかジードは口にする寸前、思い止まっていた。

母は――イレイラの表情は、哀しいほど美しかった。幼いジード

ですら、思わず息を呑むほどに。
「名はアドリオ。賢そうな、いい子だな。……良くしてやってくれるか、兄として」
イレイラの腕に抱かれたその幼子は、確かに父の面影を感じさせはしたものの、黒い髪といい褐色の混じった瞳といい、母の容姿と共通するものはなにもない。――まるで、絵本でしか見たことのない、外国人みたいだ。誰にも聞こえないよう、ジードはこっそりつぶやいた。
「それより、母上、父上はどうなさったんです？　ぼく、帰られてからまだ挨拶だってしてないのに……」
不服そうに頬を膨らませるジードの頭を、イレイラはそっと撫でた。
「臥せっているんだ。いろいろあって、疲れたんだろう。父上の邪魔をしてはだめだぞ、淋しくても、当分は我慢することだ。――できるな？　ジード」
そう言われてしまっては、反論もできない。ジードはおとなしく肯いた。
そして、いきなり降って湧いたように現れた「弟」を、あらためてまじまじと眺める。どういうわけか、父に会えないのも、母が常と違う様子なのも、この風変わりな赤ん坊が原因のように思えて仕方なかった。

夏の訪れの前にやってくる、短い雨季。毎年、ウェス・ハーシュ邸の自室で見飽きるほど見てきた雨だれも、ひょっとしたら今年が見納めになるかもしれない。
そんな感慨が湧く一方、イレイラはなぜか、自分の心が不思議なほど落ち着いているのを感じていた。後悔はない。ほんの一片たりと、選んだ道を悔いたことなどはない。

「ああ、起きてたのか。具合はどうだ」
ノックの音とともに、夫、オルグ・ヴィネックが顔を覗かせた。その手には、たったいま摘んだばかりらしい白い百合の束があった。
イレイラは瞠目した。
「いやに不ぞろいだが……もしかして、あなたが自分で？」
ヴィネックは決まり悪そうに頭を掻いている。悪戯を仕掛けそこなった少年みたいなその表情に、イレイラは噴き出さずにはいられない。
「そんなに笑うこたねぇだろ。だいたいな、俺だって、花を愛でる神経ぐらいはあるんだぞ。イレイラ、お前、これだけ長く連れ添った亭主の趣味も知らなかったのかよ」
憮然として口を尖らせるヴィネック。イレイラは、その菫色の美しい瞳に涙を浮かべて笑い続けている。
「……こんなに長く一緒にいても、いまだに知らない面があるものなんだな。本当に……飽きない人だ、あなたは」
できるのなら、もっとずっとそばにいて、見守っていたかった。
イレイラの言葉に隠されたその心情に、ヴィネックは敢えて気づかないふりをした。だが、軽口を続けられるほどの余裕もさすがになかった。彼はイレイラの視線を避けるようにして窓辺に近づくと、適当な花瓶を取り上げ、わざと無造作に百合を突っ込んだ。
――あの日、美沙紀が謎の失踪を遂げてから、早十二年が経とうとしている。絶望がヴィネックにもたらした傷跡は深く、かろうじてアドリオを屋敷に連れてはきたものの、彼はそれからの数ヶ月を、ほとんど廃人のようになって過ごした。美沙紀という愛人の存在についても、イレイラにすらまともに話そうとはしなかった。より正確にいうなら、話せる状態ではなかったということになるのだが。
そんな理不尽きわまりない夫の仕打ちにも、イレイラは不平ひとつこぼすことなく、献身的に――文字どおり私を滅して尽くした。

愛妾との子であるアドリオをジードの弟と認め、激昂する義母を説得し、二人の息子に分け隔てない愛情を注いだ。そうして一年が過ぎる頃だった。

俺は、ジードにきらわれたんだな。シニカルに笑うでもなく、ただ淡々とそんな風にヴィネックはつぶやいた。

それはある意味、真実だった。父が戻って来、新しい弟ができてからというもの、ジードの態度は微妙に変化した。それまでのように無邪気に甘えることはせず、どこか一線を引いたような——妙に醒めた雰囲気が、父と接する時の彼にはつきまとうようになったのである。

十にも満たない幼いジードに、当主とその妻との間に生じた確執の原因をあれこれ吹き込むような輩は、このウェス・ハーシュ邸には幸か不幸か、いなかった。しかし、それでも、彼にはわかったのかもしれない。母の瞳に宿る、哀切に満ちた諦観の念も、それをもたらした父の不行跡についても。

そのせりふは、イレイラの心の中にあったなにかを温め、少しずつ融かしていった。寝台の端っこに腰掛け、叱られた子どもよろしく頼りなげに背を丸めるヴィネックを、彼女は自分から抱いた。ずいぶん昔にそうしたように、二人は数年ぶりに肌を寄せ合って眠った。

だが、運命はあくまで残酷にヴィネックを翻弄し続けた——イレイラの身体を、病魔が蝕み始めたのである。

軽い風邪にも似た症状から始まって、いつまでも微熱が引かず、そのうちベッドから起き上がれないようになった。日に日に体重が落ちてゆき、数ヶ月が経つ頃には、別人と見まごうほどに痩せ衰えてしまった。連邦中の名医が、謎の病状に匙を投げた。このまま命のともし火が消えるか、それとも首の皮一枚で生きながらえるのか、それすら答えられる医者は一人としていなかった。

妊娠がわかったのは半年前の冬の最中（さなか）だ。もちろん、侍医をはじめ、屋敷中の人間が出産に反対した。こんな状態で産むなど自殺行為だ、いや、間違いなく赤ん坊と引き換えに命を棄てることになる。こぞってそう言われ、にもかかわらず、イレイラは堕胎を拒んだ。自分を説得しようと涙目で迫る夫に、彼女は言った。

――棄てるのじゃない。この子たちの中に、私の命が引き継がれるんだ。……犬死になんかにはならない。そうだろう、ヴィニー。

イレイラは穏やかに微笑み、夫を真っ直ぐに見つめた。その表情に、ヴィネックは言葉を失った。

彼は結局、折れた。イレイラの望むようにしてやりたい。一生かけても償いきれない罪を犯した自分だからこそ、彼女の背負う苦しみも希望も、ともに分かち合いたい――もしも赦されるのならば。そう思ったからだった。

そして、一秒でも長く、彼女のそばにいる。それはヴィネックの心からの願いであり、同時に誓いでもあった。

「ああ、また動いたぞ。まったく……この子はきっと父親似だな。情動不安な性格にならなければいいが」

いとおしそうにつぶやきながら、臨月も近づいた腹をそっと撫でるイレイラに、ヴィネックはふと訊ねた。

「なぁ。……どうして、今度の子は双子だってわかったんだ？　それも、二ヶ月かそこらで……医者も不思議がってたぞ」

血筋正しきノルド家の姫巫女。或いはその神秘なる力のなせる芸当なのか。

夫の疑問に対するイレイラの答えは、こうだった。

「双子が欲しかったからさ。……いや、多ければ多いほどいいと思ったんだ。一人よりは二人の方が、あなたが――」

淋しがらなくて済むだろう。そのせりふを、彼女は口にはせず、ただ静かに笑った。

二週間後、早暁のやわらかな光の中、イレイラは自らの予言どおりに双子の姉弟を産んだ。五体満足で、二人とも元気そのものの赤ん坊だった。姉は「ユ・テラ」、弟は「ユ・ゼル」と名づけられた。神代語で「永遠」と「真理」をそれぞれ意味する名前だ。

「務め」を終えるとほぼ同時に、彼女は逝った。――すまなかったな、ヴィニー――最期の最期に聞いたその言葉を、ヴィネックはいまでも独りになると思い出す。そしてそのたび自問し続けるのだ。

果たしてイレイラは、一瞬でも、自分といて幸せだと思ってくれたことがあったんだろうか？　と。

# 第四十一話　奇遇

都市国家エンザンテの東岸に位置する、港町カジュヌ。鄙びた雰囲気漂う、ごくありふれたこの漁師町を、ここいらには似つかわしくない風体の二人組が訪れたのは、いまから十日ほど前のことになる。

一人は、エンザンテ副宰相を務める老翁、エッタイヤ。そして彼の連れであるもう一人というのが、ゼーレンディア合陸連邦からやってきた、まだ年若い使者だった。初冬をすら思わせる黒いマントに全身を包んだその男は、懐から取り出した「あるもの」を恭しく差し出すと、慇懃に頭を下げ、こう言った――どうぞお受け取りを。ヴァルシリー・イェセニック・ウィドラー殿、と。

後日、カジュヌ港の外れに建つ古びた倉庫の地下には、老若取り混ぜて数人の男たちの姿があった。そう、反政府組織・インヴォルタンの主幹メンバーである。

「なるほどなぁ、大変な名誉ってのも、これなら肯けるぜ。なあ、シドン」

右手の指でそいつを――使者から受け取ったという浅葱色の切符を弄びながらそう言ったのは、古参の一人である博打打ちのヘルだ。が、それに答えたのは、声をかけられた老漁師ではなかった。

「大変な名誉？　……さてはゼノンのやつ、喋りやがったな。口止めしといたってのに」

中央の椅子にどっかりと腰掛けた茶髪の若者が、不機嫌そうに眉をしかめながらぶつくさつぶやいた。日に焼けた精悍な顔立ち、琥珀色の輝きを放つ大きな瞳。漁師仲間の中にあってひときわ目立つ、長身かつ逞しい体躯。

インヴォルタンの若き首領、ヴァリーである。

副宰相と使者が辞去したあと、弟分として面倒を看ているゼノンは、両目をぱちくりさせながらこう訊ねてきたものだ。

――ヴァルシリー・イェセニック？　それ誰のこと？

彼の質問をなんと言って受け流したのかは、もう覚えていない。ヴァリー自身、この舌を噛みそうな大陸風の名前はまったく気に入っておらず、親しい仲間内ですら明かしたことはないのだ――なにしろ、父親であるランセルロすら、息子の「本名」については古いなじみにも敢えて語ろうとしなかったのだから。

俺はヴァリー。ただのヴァリーだ。お袋の実家で勝手につけられた名前なんか、生涯名乗ったりするもんか。

「それで、どうするんだ、頭領（ヘッド）？　こいつをもらったってことは、もうインヴォルタンとしてこそこそ地下活動する必要もなくなったってことだよな」

ヘルのせりふに、今度こそシドンが相槌を打つ。

「そりゃあそうだろう。なにしろ『天上の切符』だぞ。俺たちもこれでやっと、堂々と商いができるってこった。……ランセルロのやつにも報告してだな、インヴォルタンはこの機に解散、ってことにしてもいいかもしれねぇなぁ」

彼らはどこか浮き足立った様子で楽しそうに語らい合っている。一方で、黙ったままの首領の態度に、ふと別の仲間が訝しそうな表情を浮かべ、声をかけた。

「頭領？　どうしたんだ、なんかまずいことでも？」

ヴァリーは椅子から立ち上がると、テーブルの上に置かれた酒瓶を直接ぐいと呷った。そして、一同をぐるりと見渡してから、おもむろに口を開いた。

「……妙な胸騒ぎがしやがる。やつらが家を訪ねてきた時にもそう

感じたんだが……」

穏やかならぬ語調に、ヘルは思わずシドンと顔を見合わせた。

「胸騒ぎ？　どういうことだよ、頭領。不吉なことなんかなんもねぇじゃねぇか、永劫の自由を約束されたも同然だっていうのによ」

「よく考えてみろ。俺たちはそもそも、政府にしてみりゃただのごろつきの集団なんだぞ？　あの狸みてぇな副宰相も、どうせこのカジュヌにアジトがあるってことは――俺がインヴォルタンを率いてる首領だってことぐらいは見抜いてるはずだ。この前の、マージュオン港での一件で、ゼーレンディアから連絡もいってるだろうしな。なのに、それについちゃなんのお咎めもない上に、世界最強のジョーカーとも言われる恒久手形をこの俺に発行するだと？　お上の態度としちゃあ、どう考えたって不自然だろうが」

「……」

場は静まり返った。ヴァリーはいささか乱暴な仕草で酒瓶を卓上に戻すと、今度は腕を組み、黙考を始めた。

……あの時、自分たちが不問に処され、すぐに獄舎を出られたのは、彼のおかげだ。ゼーレンディア有数の大貴族、ウェス・ハーシュ一族の御曹司である灰色の髪の青年――オルグ・ジード卿が、おそらくは未明の懇願を聞き入れる形で特例措置に踏み切ってくれたからに違いない。

そう、こんな事態にさえならなければ、自分の妻としてエンザンテに連れ帰るはずだった、未明。実際にどういうやり取りがあったのかは知る由もないが、それでも、彼女が自分たちインヴォルタンを救おうとして尽力してくれたことに、疑う余地はないだろう。

その未明は、いま、ゼーレンディアにいるはずだ。あの美しい青年のもとに――そこまで考えたヴァリーの眉間に、ふとしわが寄った。

彼は、オルグ・ジードというあの男は、いったい未明をどういう

存在としてそばに置いているのだろうか。彼女を憎からず思っている様子なのは確かに伝わってきたものの、それほどの出自の人間なら、すでに正妻がいたっておかしくはないはずだ。ヴァリーは愕然とし、衝動的に壁を殴りつけていた。

「畜生！　俺ともあろう者が、なんだってそんな基本的なとこに気づかなかったんだ。くそっ、まさかあの野郎、ミハルを日陰者扱いしてやがるんじゃないだろうな？　俺のミハルを……もしもそうだとしたら、あいつ、ただじゃおかねぇぞ！　大貴族なんざくそ喰らえだ！」

唐突に吼え始めた首領を、ヘルら仲間たちは遠巻きに見守っている。切符について話し合っていたはずなのに、ヴァリーの頭を占めるのはいまや、かつての恋人の面影以外にないらしい。

「アーマンドラのことはあきらめたとばっか思ってたが、どうやら忘れられなかったんだな、頭領」

「まぁ、若いからなぁ。船旅の間も、結局はお預け喰らいっぱなしだったみてぇだしな」

「好きな女と同室でかよ。その挙句ふられるとは……ご愁傷様ってやつだな、なんとも」

こそこそと耳打ちし合う仲間を尻目に、ヴァリーは雄叫びを上げた。

「いいか、お前ら、よく聴け！　俺はこれからゼーレンディアへ発つ。ミハルを救いに……じゃねぇ、この手形を発行したっていう連邦最高の執務機関に、直々に乗り込んでやる。発行理由を質すためにな」

突然の殴り込み宣言に、さしもの荒くれ漁師たちも胆を潰したのか、あんぐりと口を開けて自分たちの若き首領を眺め回した。そんな視線を意にも介すことなく、ヴァリーは間髪入れず倉庫を飛び出した。片恋の相手である未明の微笑を、脳裏にくっきりと思い描きながら。

未明がジードとしばしの間の別れの挨拶を交わしていたその頃、アドリオもまた、ひとつの決意を固めていた。

「先に帰る？　お前独りでか」

中庭に立ち、（不敬にも）葉巻を燻らせていた父、オルグ・ヴィネックをつかまえると、アドリオは話を切り出した。

「ウェス・ハーシュ邸に帰るわけじゃない。俺は――例の、聖山にいる占い師を訪ねようと思ってるんだ。もういちど」

オルド・カルマに庵を構える隠者、テオルーグ。未明という異郷の娘を、その元いた世界に返すための知恵を授けてくれたあの男に、単独で会いに行こうというのである。

「そりゃあかまわねぇが、ミハルには話したのか？　自分の問題なんだし、お前が行くって言えば、あいつも同行したがるんじゃないのか」

もっともなせりふではあったが、アドリオの表情はそこで曇った。彼は渋々答えた。

「……今回は、俺だけで行こうと思う。ロマドとキニッサを行ったり来たりするんじゃ、あいつだってきついだろうし。それに……」

未明はきっと、自分の誘いには乗ってこないだろう。そんな気がしていた。

彼女が異母兄とどんな会話を最後にしたのかはわからない。だが、おそらくいまの彼女は、ジードを差し置いて自分と行動をともにしてくれるとは思えなかった。アドリオの胸の内に、苦い想いがふたたび広がっていく。あの時、客間を借りて着替え終えた未明と二人きりになった時に、重大なななにかを自分に伝えようとしていた彼女の顔を、まざまざと思い出してしまったためである。

――アドリオ様、あの時の返事ですけど……あたし……。

言いよどみながらも、止めようとはしていなかった。「あの時」、つまり、深夜の山中で告げたプロポーズに対する返事。未明の中ではすでに「結論」が出ているに違いない。――それでもだ。それでも、あきらめることなどできない。アドリオは口元を引き結び、こう続けた。

「とにかく、ほかにも帰る方法はあるかもしれない。俺はそれをあの男に訊きにいってくる。話を聞いたらすぐに戻るつもりだから、出立の準備もとくには要らない。――それじゃあ父上、俺がいない間、あいつを頼む」

「……ああ。わかった。気をつけて行ってこい」

息子の顔つきから、彼らの関係に生じた微妙な変化を鋭く捉えたのか、ヴィネックはそれ以上、なにも訊こうとはしなかった。

アドリオは軽く頭を下げると、その場を辞した。馬車は使わず、単騎で往復するつもりだ。旅装の中から、愛用のマントと革袋だけを選び取り、忙しなく殿舎をあとにする。借り受けた馬に跨りながら、彼は思いをめぐらせた。

……たとえ、たとえ本当に未明がジードを選んだのだとしても、元いた国に帰りたいという願いはまだ棄ててはいないはずだ。そうだとすれば、自分にもチャンスはある。「見送りの儀」のように、彼女に心惹かれる男を必要としないやり方であるなら、良心の呵責に責められることもないだろう。

果たして別の方法など存在するのか、オルド・カルマに着くまでの間は、努めて考えないようにしよう――アドリオはそう思い、あらためて手綱を引き絞った。

審議院の本拠地である要塞島までは、直通便で一刻（二時間）足

らず。あらかじめ専用港（ポート）には連絡を入れてある。キニッサの船着場からロドアに戻り、そこから隣の大陸であるバルネディアに渡ったあと、真っ直ぐに南下したジードを待っていたのは、思いもよらない人物だった。

「同乗？　この直通便にか。ああ、私は別にかまわないが……」

ポートに到着した彼を出迎えた責任者の男は、どこか浮かない顔つきでちらちらと汽車を見やっている。その態度に、ジードは眉根を寄せた。

「なにか問題でも？」

「……いえ、そういうわけではないのですが……まぁ、あの切符がある以上、身元不詳ということもないでしょうしな。失礼いたしました、どうぞ、車輌内へお入りください」

どうにもはっきりしない口調ではあったものの、ジードは敢えて訊ねることはせず、銀色の乗降扉へと足を向けた。――その時である。

「おい！　いったい、いつになったら出るんだよ、この列車は！　早くしやがれ、こっちも色々と忙しいんだからな」

威勢の良い怒鳴り声が、辺り一帯に響き渡った。と同時に、車輌の中から、見覚えのある若い男が足音も荒々しく姿を現した。明るい栗色の髪、日焼けした肌、ジードよりもさらに背丈のある、威丈夫ともいえる巨躯。……ジードの緑碧の双眸が、これ以上ないほど大きく見開かれた。そして、それは相手も――つまり、エンザンテから遥々このゼーレンディアにやってきた二十三歳の青年、ヴァリーも同様だった。

「あ――あんた……あ、あの時の……」

「お前は……インヴォルタンの――」

二人は互いを指差し、驚愕も露わにそうつぶやき合ったのだった。

# 第四十二話　五人目の男

「お前は……お前は、インヴォルタンの首領の……」

そう言ったきり、ジードは絶句した。そして、穴の開くほど、相手の顔を――自分と年齢も変わらない、この逞しい異国の青年を眺め回した。

彼、ヴァリーは、最後に会った時とまるで同じ恰好をしていた。簡素な麻の上着に、ふくらはぎの辺りまでしかないベージュのズボン。エンザンテの民族衣装的なものなのか、手首には何色もの飾り紐が巻かれている。ジードの脳裏に、いまのいままで忘れていたはずの記憶が、素早く蘇った。

――ミハル。俺はお前が好きだった。心底本気でな。……さよなら、俺のアーマンドラ（女神）。

そんなせりふとともに、ヴァリーは未明の額に唇を寄せたのだ。思えば、ジードはよくその行為を赦したものである。

「あんた――確か、あの時の……ウェス・ハーシュとかいう貴族のお坊ちゃんだったな。なんだってこんなとこにいるんだよ？　出逢い頭もいいとこだな、まったく」

明るいトパーズ色の瞳が、忌々しげに歪んだ。だが、ジードの受けた衝撃は、そもそも彼の比ではない。

なぜここに、この男がいるのだ？　要塞島への直通便の専用港（ポート）であるこの場所に……他国民の彼が、なぜ……！

ジードの両眼がかっと見開かれた。彼は怒鳴るように叫んでいた。

「お前、まさか、あの切符を――『天上の切符』を授与されたんじゃあるまいな!?」

それは実のところ問いかけというより、ほぼ確信に近かった。果たしてヴァリーは、尋常ならざる迫力で目前に詰め寄るジードに若干たじろぎながらも、はっきりと肯いたのである。

「あ、ああ。こいつのことだろ？　噂には聞いてたが、大した威力だな。エンザンテから出国するのに大手を振って船に乗れるとは、生まれてこの方……」

ジードの耳に、その言葉は半分も入っていなかった。彼はヴァリーがズボンのポケットから無造作に取り出した浅葱色の紙切れを毟り取ると、その内容を瞬時に検める。……時を置かず、口元から、かすれ声が漏れていた。

「……お前……お前が……五人目の男だったのか……」

言われたヴァリーの方はわけがわからない。謎めいた言葉の意味も、そしてジードの横柄ともいえる態度の真意もだ。だが、元々、敵意を持って乗り込んできた矢先である。喧嘩っ早い海育ちの男らしく、ヴァリーの顔がみるみる紅潮していく。

「おい、てめぇ、さっきからいったいなんなんだよ？　俺になんか文句でもあんのか？　……そりゃああの時助けてくれたことには感謝してるけどな、それとこれとは話が別だ。ゼーレンディアの大貴族だかなんだか知らねぇが、これ以上ふざけた真似しやがったらただじゃおかねぇぞ！　って、聞いてんのかよ、おい！」

切符を握り締めたまま自分の方を見ようともしないジードの胸座を、ヴァリーは乱暴につかんだ。思いもよらない事態に、顔色を変えたポートの管轄長が慌てて飛んできた。

「お止めください、ウィドラー殿！　此方（こなた）様をどなただと思っておいでなのです!?　いかにその切符があろうと、それ以上のお振る舞いは、ここゼーレンディアでは国辱行為にも匹敵するのですぞ！」

「連邦の事情なんか知ったことか！　いいか、俺はそもそも、この国全体が気に喰わねぇんだよ！　エンザンテもたいがいろくなとこ

じゃねぇが、この大国はそれにも増していけ好かねぇ……俺のお袋だってそうだ、こいつらみてぇな貴族の流儀ってやつの犠牲にされちまったんだ。けどな、ミハルだけはそうはさせねぇぞ！　あいつは俺がエンザンテに連れて帰る、なにがあってもだ。こんな国で――こいつの元で囲われてたって幸せになんかなれるもんか！」

自分で自分のせりふに興奮したらしく、ヴァリーの暴言は止まるところを知らず、エスカレートする。が、管轄長と揉み合う彼の動きが、やにわに止まった。

当の相手であるジードの様子が、あきらかにおかしいのが見て取れたからだ。

「……ミハルを連れて帰るだと？　私に囲われているだと？　貴様……よくも、この私を前にして……！」

短い悲鳴が上がった。ジードの全身を包む青白い光に胆を潰した管轄長が、咄嗟に彼らのそばから飛び退いたのだ。しかし、驚きはヴァリーも同様だった。見たこともないこの現象に、先ほどまでのいきおいはどこへやら、ヴァリーは唾を呑み込み、我知らず後退していた。

「お……おい。落ち着けって。お――俺も言い過ぎた、だから……その……」

「お、オルグ・ジード卿、どうか、どうかお静まりください。ほ、本日は午後になりますと、う、海がやや荒れるかもしれませんので……いまのうちに出港してしまった方が得策です。ですから、ど、どうか……」

代わる代わる宥められ、ようやくジードの身体から、あの不可思議な燐光が消えた。ほっと息をつきつつも、ヴァリーの混乱は収まるどころかよりいっそう膨れ上がった。

――ミハルのやつ……こんな人間離れした野郎と一緒に暮らしてて、本当に大丈夫なのか？

この数分後、二人を乗せた列車は、要塞島を目指してつつがなく発車した。

穏やかな陽光を反射して煌く水面。飛び交う海鳥の鳴き声。遠くの海上には、おそらくは連邦に属する身分の交易船が、木の葉のように揺らめきながらのんびりと海路を進んでいく。

だが、そういった風景はどれひとつとして例外なく、ジードの視界を虚しく素通りしていった。適当な座席に掛け、窓枠に肘をつきながらも、ジードの思考を占めるのはやはり未明のことだった。いや、より正確にいうなら、彼女を取り巻く謎のすべてだ。

ある日突然、イグノディアスによって異界より召喚された少女、未明。その役割は、亡神ウルディノシスの魂を持って生まれた六人の男たちを捜し出すための撒き餌であり、あの恒久手形、「天上の切符」は、その男たちの居所が知れたために発行され、それぞれに手渡されたのだという。神の生まれ変わりである証として。

だが、まだ謎は残る。生まれ変わりの男たちを捜し出したあと、イグノディアスはなにをしようというのか。そしてなぜ、審議院はこれらの事実を世に秘すのか。「天上の切符」にしてもそうだ――これまで、あの手形については、免罪符としての権限が与えられているということぐらいしか、せいぜい世間には知られていなかった。それに、発行歴だって寡聞とはいえ皆無なわけではない。或いは過去にも似たようなケースがあったのだろうか？　いや。同時代に六名もの人間が発行対象になった記録など、これまでには存在しないはずだ。

そしてなによりもジードが知りたいのは、撒き餌として呼び込まれた娘の「その後」。役目を終えたあと、娘はいったいどうなるの

か――この世界に留まるのか、それともまたもや強制的に元の世界へと帰されてしまうのか。

前者だとしたら、果たして彼女は、自分に惚れる宿命を負った六人の男たちの中から、最終的に誰を選ぶのか？　もしくは、誰のことも選びはしないのか、という問題である。

ジードは目を瞑り、イシオス神殿でのあの別離のシーンを回想した。数日で戻る。だからそれまで、ここで待っていてほしい――そう告げた自分を、未明は拒否しなかった。彼女は笑ってくれた。そしてこう言ったのだ。

待ってます。あたし、ここで、ずっと……待ってますから。

あの返事は、自分の気持ちに対する答えだと思っていいのだろうか。彼女も自分のことを好いてくれていると、そう受け取っていいのか。――それとも、たんなる社交辞令に過ぎないのか。世話になった家の息子をそうそう無碍にはできず、仕方なくああして応じてくれた、それだけのことなのだろうか。

別れ際、口づけはおろか抱擁すら交わせず、ただ互いの手を握り合った。小さな温かい手のひらから、確かに未明の真摯な想いが伝わってきたと、ジードは感じていた。だが――。

人の気配に、そこで彼の思考は途切れた。顔を上げると、車輛の反対側の座席に着いていたはずのヴァリーが、決まり悪そうな表情を浮かべて立っている。ジードは黙ったまま彼を見つめた。

ようやく口を開いたのは、ヴァリーの方だった。

「……さっきは、ええと……言い過ぎた。頭に血が上っちまってさ。死んだ親父にもよく言われてたんだ、餓鬼の頃から、そこが俺のいちばん危なっかしいところだって」

そう言って目を逸らすヴァリーに、ジードも短く答える。

「いや。――私にも過誤はあった。気にしないでいい」

素っ気ないせりふではあったものの、ヴァリーには意外な反応だ

ったらしく、なにか言いたげにふたたびジードを凝視する。ややあって、立ったまま彼はこう訊ねた。

「あのさ……ミハルは――あいつは、元気にしてるのか？　あんたの家にいるんだろう」

「……ああ」

それ以上なにも言おうとしないジードに、ヴァリーはかまわず続ける。

「そうか。それならいいんだ。けど、ひとつだけ確認させてくれ。……あんた、あいつのこと、どういうつもりでそばに置いてるんだ？　毛色の変わった女を賑やかしに引き取ったとか、まさかそういうわけじゃあねぇとは思うが」

ジードはゆっくりと頭をもたげ、この、恋敵の一人でもある異国の青年を正面から見据えた。

「生涯を捧げる相手だ。彼女さえいてくれれば、私はほかにはなにも要らない」

揺るぎない宣言に、ヴァリーは思わず目を瞬かせた。彼はさらに言った。

「じゃあ……あいつを、ちゃんと、その……あんたの妻として迎えたってことなんだな？　そう信じていいんだな」

ジードははっきりと肯いた。「むろんだ。私の妻は、ミハルただ一人だ。彼女以外の女性と添い遂げる気など、私にはない」

たとえ未明の側に、自分への恋心などなかったとしても。それでも、彼女を手放すことなど終生、不可能だろう――ジードの眉が、わずかに歪んだ。

そこまで聞き出したことで満足したのか、ヴァリーの肩から力が抜ける。彼は、通路を挟んだ反対側の座席に腰を下ろすと、ぽつぽつと語り出した。

「……そんならいい。そんならいいんだ。連邦の大貴族なんて性悪ぞろいだと思ってたが、あんたはどうやら、そういうやつらとは違うみたいだな」

「お前……そういえばウィドラーと呼ばれていたな。確か、ウェス・ゴート家の縁戚に、そんな名の小領主がいたと思ったが……」

ジードの言葉に、ヴァリーは苦い笑いを浮かべてみせた。

「ああ。俺のお袋の実家だ。若い頃、商売で――ああ、もちろん否認可だけどな、この国を訪れた親父と、どうかして知り合ったらしい。いわゆる没落貴族ってやつさ。しがみつくほどの財産があるような家でもなかったろうに、それでもお袋は親父と結ばれることを赦してはもらえなかった。で、お決まりの駆け落ちだ。エンザンテで俺が生まれて、金なんかなかったけど、幸せだったよ。ちっぽけな小屋で、肩を寄せ合うようにして……それも数年で終わったけどな」

流行り病に冒され、死の床に就いた母のために、父は奔走した。思い余って出かけていった妻の実家では、冷たく門前払いされた。結局、ひと月後に彼女は死んだ。

「お袋の実家が手を差し伸べてくれてりゃ、もしかして死ななくて済んだかもしれねぇんだ。いや、そもそも、門前払いされた真の理由は、ウェス・ゴート家の顔色を窺ったせいだとか聞いてる。縁戚たって、実際には手繰り寄せるのに気の遠くなるようなつながりでしかないんだぞ？　それなのに、外聞を憚るなんてばかげた理由のために、お袋はむざむざ命を落とさなきゃならなかった。……確かに、国を棄てた時点で、縁を切ったのはこっちの方だけどよ。そうでもしなけりゃ一緒になれなかったんだ、だからお袋は……」

ヴァリーの語調が荒くなる。ジードは口を挟もうとはせず、ただ黙っていた。

やがて訪れた沈黙を破ったのは、今度はジードの方だ。

「ゼーレンディアに来た理由は？　ミハルに対する私の気持ちを確かめるためだけに、わざわざやってきたのか」

そうではないことは、うすうす見当がついていた。なぜなら、彼はあの場所に――ロマドのウェス・ハーシュ邸を訪ねるでもなく、未明とは関係のないはずの、要塞島へと向かうポートにいたのだか

ら。

ヴァリーの表情が、一転して引き締まった。

「……あんたも知ってるとおり、俺は――俺たちは賊の集団だ。まぁ、政府にしてみりゃ、って意味だがな。けど、そんな集団を率いる頭領である俺に、よりによってこいつが発行されたんだ。おかしいと思わないほうがどうかしてるだろ」

マージュオン港での一件から、インヴォルタンの面子はほぼ割れたわけである。それなのに、いまだに母国では裁判にかけられるでもなく、あろうことか、世界最高の名誉とも言われる恒久手形を授けようというのだ。

「つまり、お前の元にもゼーレンディアからの使者が来たんだな。発行理由をその場で問い質しはしなかったのか」

「もちろん訊いたさ。けど、とても納得のいくような理由じゃなかったな。審議院の判断は絶対だ、とかなんとか繰り返すばっかで……これほど胡散臭い話もそうそうねぇだろう？　仲間はこぞって喜んでたけど、俺は――なんだか厭な予感がしたんだ。とてつもなくな」

それは、あながち彼の直感だけに頼ったものでもなかった。インヴォルタンの仲間の中に、かつて要塞島絡みの仕事とやらをしていた元船員という男が偶然いたのである。彼によると、定期的に島を訪れる交易船の積荷には怪しげなものも多く含まれており、とても大国の最高執務機関が必要とするような内容とは思えなかったというのだ。

だが、その話を、ヴァリーはジードには結局、伝えなかった。この時点ではまだそこまでジードを信用できない。それに、彼の方にも、ジードにはほかにも訊きたいことがあった。

「で、あんたは？　あんたも連中に用があって要塞島に向かうんだろ」

トパーズ色の大きな瞳がきらりと光った。ジードを試しているようにすら見える、抜け目のない視線だ。ジードはその眼差しを、流

すでもなく打ち返すでもなく、ただ静かに捕らえた。

……いずれ、この男も、自分の負わされた運命を知ることになる。未明に出逢ったのも彼女に恋をしたのも、すべては神の思惑どおりだったのだという真実を。

それを知った時、果たしてヴァリーは――ヴァリーの抱く未明への想いは、消え去るのだろうか。

或いは、自分のように、不毛だと知りながらもあきらめることのできない泥沼の恋路へと、突き進むことになるのだろうか。

# 第四十三話　罠

イシオス神殿を発ったジードが、要塞島への直通便に乗るべく、オサイオンの専用港（ポート）を目指していたちょうどその頃。

彼の異母弟、アドリオもまた、自らの決意を実現するため、ロマドの聖山（オルド・カルマ）に向かっていた。心にあるのは、この進退きわまった状況を打破したいという、焦燥にも似たひとつの想いだけだった。馬を駆るアドリオの整った眉が、苦しげに歪んだ。

いまのままでは、おそらく、自分には勝ち目はない。そう――兄であるジードが審議院から戻ってきてしまったら、きっと、未明は彼を選ぶに違いない。それは確信と言ってもよかった。心底彼女を好いている自分だからこそ、皮肉にもそのことは見ていればわかった。

――仮に、仮にミハルが兄上を好きだとしても、元いた国に帰るための別の方法が見つかったとしたら、どうだろう。兄上を利用するんじゃない、別のやり方があったとしたら。……迷いはするかもしれないが、兄上より故郷を選ぶ可能性は十分にある。家族のことだって、忘れてしまったわけじゃあないだろうし。

だとすれば、俺にもまだ勝機はある。兄上には棄てられない荷物が、俺には最初からないんだからな。

ジードが背負う、一族の長としての重責。幼い頃から、自分と彼とは立場が違うのだと、アドリオはなんとなく感じ取っていた。ジードは良き兄だったが、二人の間には越えられない壁がいつでも存在していた。冷遇されたわけではなかったものの、アドリオは常にかすかな――だがはっきりとした疎外感を、あの屋敷の中で覚えて

いたのである。

淋しがっている自覚などはなかった。ただ、醒めていた。いつかこの家を出て、誰も知らないところで暮らしたい。そんな風に思うようになった。

そこへやってきたのがあの異郷の娘、未明だ。凪いだ湖面に落とされた一個の小石のように、彼女はアドリオの胸を、他人には決して見せることのなかった意識の底を震わせた。その細波は止むことなく、いまも続いている。はじめての恋だった。未明が欲しい。振り向いて、微笑んで、そして好きだと言ってほしい。ジードよりも自分を、自分のことだけを好きだと。

そのために、ただその一言を欲するためだけに、アドリオは一路、聖山を——その山腹に庵を構えるあの隠者のもとを目指し、ひたすら走り続けた。

——依坐の娘に惚れている男の一人が、ここに向かっているな。

手製のロッキングチェアに掛け、物憂げに目を閉じたまま、テオルーグは胸中でそうつぶやいた。……この気は……そう、あの時娘を連れてこの小屋を訪れた黒髪の若者だ。「見送りの儀」を行うことで、自分も娘とともに彼女の世界へ行きたいと願った、まだ少年のようにも見える男。

だが、感じられる気は彼一人のものだ。そばには娘もいなければ、条件を備えた別の男も伴ってはいないらしい。或いは彼らの側で、なにか予期せぬ動きがあったのか。

テオルーグの耳がぴくりと動いた。彼はゆっくりと腰を上げ、奥まった別室に音もなく向かい、おもむろに戸を開けた。

そこにいたのは、予想どおりの人物——招かれざる客ではあるも、一応の居候を赦してやっている相手、ラルモ・オルヌだった。

「おう、これは……どうなされたのです。そんな険しい顔をして」
とぼけて言い繕うも、その手の中にある古ぼけた濃緑の書物は隠しようがなく、彼はいつになく慌てたように姿勢を変え、庵主に背を向けた。だが、テオルーグの反応は、オルヌの思ったものとはまるで違っていた。
「そいつが欲しいのならやる。遠慮せず、持っていくがいい」
無表情に言い捨て、踵を返そうとするテオルーグに、オルヌは一瞬、ぽかんと口を開いた。すぐに我に返ると、彼は思わず追いすがるようにして問うていた。
「し、しかし、テオルーグ殿……これは、この『暁の経典（エリグザード）』は、真の聖典なのではありませぬか。贋物（まがいもの）とは、『黒の経典（ザモド）』などとは違う、イグノディアスの真言が書かれているという――」
テオルーグは足を止め、振り向いた。その両目には、オルヌでさえ震え上がるほどの冷たい光が宿っていた。
「……イグノディアスの真言など、できるなら私のこの脳裏から、すべて洗い流してしまいたいほどだ。あの神が私にいったい、なにをしてくれた？　望んでもいない宿命を押しつけ、ただ翻弄するだけ翻弄し……審議院の連中もだ。すべて私の敵でしかない。なのに……だというのに、あの経典は……」
どこに棄て去ろうが必ずテオルーグの手元に戻ってくる『暁の経典』。その上、開いたが最後、書かれている神代語の文字はすべて、彼の脳に深々と刻み込まれた。読み止めることすら不可能だった――それからいまに至るまで、一言一句、テオルーグは忘れることができないでいる。
激昂し、一気に言葉を吐き出したあと、彼は心底忌々しげに目元を歪めた。その様子にオルヌは言った。
「なにやら、興味をそそるお話でしたな。望んでもいない宿命？　あなたは神殿の連中に、贄としてさらわれたのだと聞き及んでおりましたが……もしや、それだけではなかったのですかな」
じっとりとした半眼が、テオルーグの顔をしげしげと舐め回す。

オルヌはさらに続けた。
「どうでしょうな、テオルーグ殿。よもや、志を同じくする者として、私にまで隠しごとをなされているとは思いたくもありませぬが……大事の前ですぞ。腹を割っていただかなくては、こちらとしても……」
「お前が知りたいことはすべて、その経典に書かれているはずだ。読んでみるがいい。神代語程度、神官だったお前なら、読めないはずもなかろう」
テオルーグの声から表情がふたたび消えた。オルヌはわざとらしげに肩をすくめ、こう返した。
「読めたり読めなかったり、いやさすがに真の経典、手ごわいこと手ごわいこと。ところどころ文字も薄れておりましてな。時間をかけさえすれば解読も或いは可能でしょうが。――それでテオルーグ殿、いまのは私の問いに対する答えだと思ってもよろしいのでしょうかな」
二人の視線が真っ向からぶつかり合った。だがテオルーグの口からはなにも出て来はしない。焦れたオルヌが一歩、前に出ようとした、まさにその時だった。
表の戸を叩くノックの音が、部屋中に響き渡った。

戸口に現れた庵主は、この前と同じように、無愛想ながらもアドリオを拒みはしなかった。彼は「入れ」とだけつぶやくと、居間として使っているらしい暖炉のある部屋に客人を招き入れた。アドリオもまた、無言で彼に続いた。
「それで？　お前一人だけでここにやってきた理由はなんだ。私の提示した条件を、忘れたわけではあるまいな」
暖炉のほかにはほとんどなにも設えのない、ひどく殺風景な部屋だ。アドリオは所在なげに立ったまま、ロッキングチェアに揺られ

る隠者、テオルーグを見つめた。白く長い髪も、やや浅黒いなめらかな肌も、髪と同じ色の道士めいたローブすら、あの時とまるで変わらない。

「……ああ。忘れたわけじゃない。ただ、事情がちょっと変わったんだ」

テオルーグの閉じられた瞼が、ぴくりと動いた。

「ずばり訊くけど、ほかの方法っていうのはないのか？　つまり――ミハルが元いた国に帰るための、『見送りの儀』以外の方法ってことだが」

「どういうことだ」

「――『見送りの儀』っていうのは、ミハルを好きな男を利用するやり方なんだろ。それをあいつはきらって、戻るのをあきらめるとまで言い出したんだ。でも、それはきっと本心じゃないはずだ。ほかに方法があるんなら、帰れなくてもいいなんて言いはしないだろう。だから、そいつを俺は訊ねに来たんだ」

沈黙が流れた。テオルーグは相変わらず目を瞑ったままだ。アドリオは辛抱強く答えを待った。

「どうなんだ。俺と彼女が一緒に戻る方法が、ほかにあるのか。……頼むから、教えてくれ」

「……その前に、ひとつ訊ねるが」

テオルーグの気だるげな口調に、だがアドリオは逆らうでもなく、その先を促した。

「ああ」

「『見送りの儀』を行うために必要となる条件を備えた男は、お前の……いや、あの娘の周辺にはいなかったのか」

アドリオは唇を軽く噛んだものの、率直に返した。

「いたさ。いくらでもな。――あいつを好きな男なら、現時点でも俺のほかに二人はいる」

「それならそいつらのどちらかを連れてこい。なぜ躊躇する？　簡単な話だろう」

「だから、事情が変わったと言ったはずだ。さっきも説明したとおり、ミハル自身がその方法を拒んでるんだ、俺だって本当は――」

苛々と繰り返すアドリオを、テオルーグは強引に遮った。

「説得しろ。どうにでも言い含めて連れてくるのだ。あの娘と、娘を好いている男を。いいか、はっきり言うが、それ以外には元の世界に帰る術などは存在しない」

語調が変わっていた。アドリオはわずかに瞠目し、後ずさりした。眼前の男、テオルーグは、その群青の双眸を見開き、真っ直ぐにこちらへ向けている。――禍々しさにも似た空気が、彼の全身を淡く取り巻いていた。以前には感じなかったはずのものだ。

……こいつ……このテオルーグという男、本当は何者なんだ？

そうだ、だいたい、「見送りの儀」にしたって、信頼できるなんて根拠がどこにある？　この男がそう言っているってだけで、成功するかどうかも怪しいものだ。……いや、そもそも、そんな儀式、本当にあるのか――？

うなじの毛がぴりぴりと逆立つ。本能が告げる「警告」のサインだ。テオルーグから視線を逸らさないようにしつつも、アドリオはあくまで冷静に言った。

「……とにかく、いったん、帰らせてもらう。ミハルにもいまの話を伝えたいしな。それじゃあ俺は、これで――」

「帰れると思ったら大間違いですぞ、お客人」

唐突に、低い、潰れたしゃがれ声がした。弾かれたように肩を揺らし、背後を振り向きかけたアドリオ。だが、その背に、冷たく硬いものが押し当てられる方が一瞬早かった。……そう、ちょうど、心臓の辺りに。

「愚か者であれば、危険も顧みずに暴れるところでもありましょうが……大事な質（しち）だ。あまり身体に傷をつける真似は、こちらも本望ではありませぬのでな。おとなしく、言うとおりにしていただけま

すかな、アドリオ殿」
「貴……様……！」
怒りのあまり、声がかすれた。こいつは知っている。――忘れようもない。

ウェス・ゴート邸に囚われていた未明を救出する際に出会った、イシオス神殿の元副神官、ラルモ・オルヌだ。

国家転覆を企み、ウェス・ゴート卿と組んで禁じられた秘儀を計画し、挙句ヨナやジードを生贄にしようとさえした、自分たちにとっては仇敵と言ってもいい男だ。中央政府によって獄舎に収監され、終身刑を言い渡されたはずの重罪人。
「なんで貴様がここに……」
呻きながらも、うっすら気づいていた。目の前の隠者と、この男はつまり、グルなのだ。どういう利害関係があるのかは知らないが、ともかく手を組んでいるのに間違いない。
「く、く……飛んで火に入る夏の虫とはまさにこのこと。小賢しい羽虫も、娘をおびき寄せるのには一役買ってくれましょうぞ。さあ、アドリオ殿、ついては我らに協力を。……断ればどうなるか、いかに濁った血の一族の末裔とはいえ、あなたにもおわかりでしょうな」
憎しみと嘲りに満ちたその声色に、アドリオの右拳が震えた。だがオルヌは余裕綽々に相手の反駁を封じ込める。
「アドリオ殿。あなたは我らの言うとおりに、一通の書簡をしたためてくだされば良いのです。あの依坐の娘をここに招くための、短い手紙を」
二人のやり取りを黙ったまま見つめていたテオルーグは、そこでやおら立ち上がった。机の上の文箱から紙とペンを取り出すと、あごをしゃくり、アドリオに示してみせる。――書け、という意思表示なのは明白だ。
が、アドリオは動かなかった。オルヌに背後を取られたまま、じ

っとその場に立ち尽くしている。
その口元に浮かんだのは、かすかな笑みだ。テオルーグの眉がぴくりと動いた。
「――この俺が、なんの装備もなく、単独で出歩いたりすると貴様らは思ったのか？　……悪いが、ミハルを陥れるような真似は、死んだってするわけにはいかないんだ」
「な……？　きさ――」
そう吐き棄てるが早いか、アドリオは上着の内側に素早く右手を潜り込ませた。鞘から抜かれた鈍色の短剣が、ランプの灯りを反射してきらりと光った。彼はなんの躊躇もなく、刃をおのれの左胸に向かって突き立てた。瞼の裏に、愛する娘の微笑が浮かんだ。
――しかし、貫通はしなかった。切っ先が胸元にめり込もうとするその瞬間、短剣はなにか強い力によって叩かれでもしたかのように、床の上に払い落とされたのである。
「手を焼かせるな、小僧」
冷酷な声が響いた。と同時に、アドリオの身体からみるみる力が抜けていく。崩折れた彼の襟首を、オルヌは死んだ野良猫でも拾い上げるようなぞんざいさでもって、ぐいと引っ張り上げた。面倒そうに顔をしかめ、ぶつくさつぶやくのは忘れずに。
「やれやれ。――その力があるのなら、あなたも最初からこうしていればいいものを……」
成り行きを見守っていればこのざまだ。そういう気持ちが、あからさまににじみ出ていた。
とはいえ、いまやオルヌも、共謀者であるこの白髪の男が、ただの隠遁者でないことぐらいは承知している。そして、彼に十分な利用価値があるということも。
対するテオルーグの方は、なにも言い返そうとはせず、ふたたび椅子に腰を下ろした。そうして、意識を失い、ぐったりと青ざめた

アドリオを、じっと見つめた。

――この若者を助けるために、あの娘、ミハルはきっとここに来る。……こいつを助けるため？

いや、違う。――私に逢うためにだ。

宿命に踊らされていることなど最初からわかっている。だが、邂逅の時が近づくにつれ、テオルーグはもはや、胸の内に滾るこの想いを、無視することも咽い飛ばすこともできなくなっていた。

# 第四十四話　神様の道具

――ミハル……ごめん。しくじった。頼むから、ここには来ないでくれ。
こいつは敵だ。このテオルーグという男は、ただの隠者なんかじゃない――。

自由を奪われ、薄れていく意識の中で、アドリオは最後にそう叫んだ。誰にも聞こえることのない、声にすらならない声で。
「それで？　これからどうなさるおつもりです、テオルーグ殿」
アドリオの首根っこを持ち上げたまま、オルヌは不敵な表情を浮かべ、共謀者である年若き隠士を見やった。
「……」
群青の瞳に、ふたたび冷たい光が宿る。テオルーグは無言でオルヌを促し、アドリオを椅子に掛けさせた。そしてわずかに口を開け、呪文めいた言葉を二、三つぶやいた。――変化はすぐに起こった。
「ほう……これは」
オルヌの顔色が変わる。気を失っていたはずのアドリオの身体が、不自然な動きを見せ始めたのである。背筋を伸ばし、手元に置かれたペンを握り、書簡用の紙にすらすらと文字をしたためていく。だが、その両目は死んだように暗く濁り、どこも見てはいなかった。
やがてアドリオの手が止まり、椅子の上でぐったりと力を失くす。ペンの転がる弱弱しい音がした。
その様子を見届けるなり、テオルーグはやおら立ち上がると、卓上の紙をつまみ上げた。素早く文面を検める。そこには、先ほど自分が告げたのとほぼ同じ内容が書かれていた。――すなわち、「見送りの儀」以外に元の国に戻る方法は存在しないということ。つい

ては即刻、もう一人（ジード）の見送り人を連れて聖山を再訪するように――テオルーグは微妙に眉をしかめた。

魂を抜いて操るやり方では、書面上に若干の違和感が現れるのは否めない。この手紙を見るのが娘だけならば問題はなかろうが、しかし、そううまくいくかどうか……。

「いやいやさすがは『神への供物』とまで見込まれたお方だ。大した神通力ですな、テオルーグ殿」

皮肉交じりの賛辞を、テオルーグは無表情で受け流した。元より彼の視界にオルヌなどは入っていない。

彼の頭に浮かぶのは、その思考を占めるのは、手紙を送りつける当の相手、あの未明という娘のことだけだった。彼女はきっと来る。来ざるを得ないだろう。たとえ文面から直感的に不穏なものを感じ取ったとしても――いや、だとすればなおさら、すぐにでもここに向かうに違いない。

邂逅の時は、刻一刻と近づいていた。

海上を滑るように走り続ける列車のスピードが落ち始めた。専用港（ポート）を出てから、じきに一刻（二時間）が経とうとしている。青く晴れていた空は灰色に曇り、凪いでいたはずの海面も、ざわめきを帯びて荒々しく揺れている。天候の崩れが、予想よりも早く訪れたようだった。

「俺が要塞島を目指す理由は、さっきも言ったとおり、恒久手形を発行された本当の目的を知るためだ。世界共通のジョーカー……裏さえなけりゃあ、これほど便利なもんもねぇだろうが、いまの段階じゃあとても利用しようって気にはなれねぇからな。

だが、あんたはどうなんだ？　そもそも、なんだってこの列車に

乗ろうと思ったんだ。さっき、お前の元にも使者が来たのかって言ってたな。つまり、あんたも切符を受け取ってるんだろう？　やっぱりこいつ絡みで連中に確かめたいことでもあるからなのか？　それとも……」

思わぬ同行者となった異国の青年、ヴァリーは、その大柄な身体で相手の視界を遮るようにしてジードを見ている。しばしの沈黙を挟み、ジードは静かに答えた。

「……そうだ。どうしても確かめなければならないことがあるんだ。私と……ミハルのために」

ヴァリーは瞠目した。いまも忘れ得ぬ、いとしい少女の名を出されたためだ。

「ミハルが絡んでるってのか？　そいつは聞き捨てならねぇな。切符とあいつと、いったいどういう関係があるっていうんだよ」

険しい態度で迫ってくるヴァリーに、ジードははっきりと言った。

「彼女にも私にも、それにお前にも関係があることだ。――お前がいまでもミハルを好きだというのなら、なおさらな」

撒き餌として呼び寄せられた異界の娘、未明に、ヴァリーもまた、激しい恋心を抱いた。それは神のシナリオに沿った結果に違いないのだろうが、果たしてそのことを教えられた時、彼はどうするのだろうか。自分の意思ではなかったと割り切り、想いを断ち切るのか。或いはアドリオのように、宿命すら受け入れた上で、恋情を貫くのか。

「――ああ。そのとおりだ。俺はあいつが好きだ。忘れたりなんか、できるもんか。エンザンテに戻ってから、ほとんど毎日あいつの夢を見た。たかだか二週間かそこら一緒に暮らしてただけの相手にだぜ？　……どうしようもないんだ、あいつが……ミハルのことが、心底、死ぬほど好きなんだ」

ヴァリーはそう言い切り、睨むようにジードを見つめた。彼はさ

らに続けた。
「あんたのところで幸せに暮らしてるんならあきらめようと、さっきまでは思ってた。けど……本心じゃなかったな。あんたには悪いが、俺はもういちどあいつに逢おうと思う。もういちど気持ちを告げて、一緒にエンザンテに来てくれるよう、頼もうと思ってる」
「ミハルは私のものだ。逢うことなどはこの私が赦さない」
ジードもまた、底冷えのするような光をその両目に湛え、即答すると同時にヴァリーを睨み返した。否応なしに腹の底から殺気が込み上げる。最愛の少女を自分から奪おうとするあらゆる存在に対して発動する、あの青白い闘気（オーラ）が、またしてもゆらゆらと全身を包んでいく。が、ヴァリーは今度ばかりは退こうとはしなかった。
「あんたの赦しなんて要るもんか。要塞島を出たら、俺はミハルに逢いに行く。誰の命令も受ける気はねぇよ」
雷鳴が響き渡った。昼とは思えないほど黒ずんだ空から、大粒の雨が海面に降り注ぐ。
列車はいままさに、要塞島側の専用港（ポート）に到着するべく、スピードを落とし始めたところだった。

アドリオ様は、彼より少し前に審議院へと出発したジード様を追うようにして、あたしの知らないうちに神殿を出て行ったらしい。あとになってそのことを聞かされ、あたしは慌てた。だって、旦那様によると、出かけた先はテオのいる聖山。理由は、あたしが元の世界に帰るための、別の方法を訊ねにいくためだっていうんだから。
話がある、と言われて連れてこられたのは、見覚えのある客室だった。そう、あの時――キレたジード様に荷物みたいにして放り込まれた、因縁の部屋だ。ちくりと痛む胸を無視してあたしは訊いた。
「旦那様、じゃあ、あの……その、あたしが、この国――ていうかこの世界の人間じゃない、って……」

事情を聞かされたなら、知ってるってことになる。案の定、旦那様は、ちょっとだけ決まり悪そうに肯いた。

「ああ。まぁ、実のところ、アドリオから聞いて知ったってわけじゃあねぇんだ。お前さんの出自についちゃあ、いくらかわかったことがあってな」

「えっ……」

息を呑むあたしを見据え、彼は手近な椅子に腰を下ろした。――そうして、およそ信じられないような話を始めたのだった。

この世界を創った神様が、その昔、好きになった異界の女の子。奥さんである女神に二人の関係を知られ、相手の女の子とともに殺されたということ。そして、いまになって、女神は自分が殺した夫の生まれ変わりの人間を捜し出そうとしているということ。六人いるその男の人たちが、どうやら全員見つかったらしいということ。ジード様やアドリオ様も、その内の一人だということ。

……あたしは、その男の人たちを捜し出すための「撒き餌」として、日本からこの世界に呼び寄せられたんだという――とてもじゃないけど信じられない、文字どおり荒唐無稽な話を。

唖然として言葉も出ないあたしを、けれど旦那様はいつになく真面目な顔でじっと見つめている。

「六人の生まれ変わりを捜し出したあと、女神がなにをしようとしてるのかはまだわからん。義父上によれば、この先のことは、審議院の連中に問い質すしかねぇっていうんだな。だからジードは要塞島まで遥々――」

「審議院……」

そういえばジード様もそう言っていた。不審顔のあたしに、旦那様は手短に説明してくれた。

「隣の大陸のな、要塞島ってとこにある、まぁ……国の機関だ。あらゆる特権の集合体みたいな上院でな。そこの議官なら、今回の一

幕についても、カラクリを知ってるかもしれねぇんだ。あっさり吐くかどうかはわからんが」

ぐらり、と身体が傾いだ。顔色を変えた旦那様が素早く立ち上がり、あたしを支えてくれた。なのにあたしはお礼を言うことすらできず、混乱にぐるぐる回る頭で考え続けた。

だって、いまの話が万一全部本当のことだったとして、なんで……なんであたしなの？　すごい美人でもなんでもない、どこにでもいるような、平凡丸出しのあたしがなんでそんな役目を負わされなきゃいけないの？

……それに……神様の道具として呼ばれただけなんだとしたら、ジード様は？　だから態度があんな風に変わったんだろうか。真実を知らされて、そしてもう「用済み」になったあたしには興味を抱く理由がないから、だから……。

知りたくもなかった事実。でも、知らないわけにはいかない事実。あからさまにショックを受けているあたしを見て、旦那様はそれ以上話を続けようとはしなかった。もっとも、もしかしたら、現段階でわかっていることは、それでほぼすべてだったのかもしれないけれど。

聖山に向かったアドリオ様からの手紙が神殿に届いたのは、この数日後のことだった。

# 第四十五話　暗雲

要塞島――。

バルネディア大陸から離れることおよそ八十ノール（約二百キロ）の海上に位置する、連邦直轄のこの島は、四方を断崖絶壁に取り囲まれた、文字どおりの天然要塞として知られている。

よく見るとあちこちにくり貫かれたような跡があるのは、潮による侵食のためとも、神代（じんだい）の終わりに勃発した神々の戦いの影響とも言われる。奇景という言葉がいかにも似つかわしい、異様な光景である。

「さっきからうるせぇと思ったら……なんなんだよ、こいつら。こんな天気に普通、飛ぶか？」

列車を降り、大きく伸びをして凝りをほぐしたあと、ヴァリーは鬱陶しそうに空を見上げた。彼の言うとおり、そこには特有の声を発しながら高く低く舞う、無数の海鳥の姿があった。雨はさらに激しさを増し、いまや嵐のようですらある。

「要塞島の周辺にしか棲んでいない固有種らしい。近海にいくつもの岩礁があったのを見なかったか？　あれが連中の――シマカモメの棲みかになっているとか聞いたな」

専用港（ポート）出口に用意されていた送迎馬車に乗り込みながら、ジードが答える。ヴァリーの脳裏に、いつだったかインヴォルタンの仲間の一人が語っていた、ある話が閃いた。

――やたら臆病で神経質なカモメなんだよ。自分らの棲みかの近くを船が通ろうもんなら、威嚇のつもりか知らねぇが、鳥柱を作るんだな。空の天辺まで届こうってくらいの――ありゃあなんていうか、不気味な景色には違いねぇぜ。

座席にどっかりと腰を落ち着けてから、ヴァリーは腕を組んで黙考を始めた。……どうにもきな臭い。この島全体を取り巻いている得体の知れない空気の正体はいったい、なんなのか。

彼は顔を上げ、ちらりと前方に座る貴公子の様子を窺った。オルグ・ジード・レア・ウェス・ハーシュ卿――手ごわい恋敵でもある連邦有数の大貴族。この男を信用し、腹を割って本音を話してしまってもいいものだろうか。自分の感じている、ただならぬ胸騒ぎが、果たして気のせいなのかどうか、そのことを。

だが、口を利こうとしたまさにその時、馬車はスピードをゆるめ始め、じきに停止した。どうやら目的地に着いたらしい。無言で席を立つジードに、ヴァリーも仕方なく従った。

大門をくぐった二人を迎えたのは、制服姿の勅警――だけではなかった。

「ようこそお越しくださいました、オルグ・ジード卿、それにウィドラー殿。どうぞこちらへ」

「ああ、いきなり訪れたりしてすまない。――重要な用件で、すぐにでも審議院の方々に謁見を願いたいのだが」

ジードの口上に、心得ているのか相手は特段表情も変えず、しかしこう返した。

「承知しております。ですが、生憎、謁見の準備がまだ整っておりません。大変申し訳ございませんが、仕度ができますまで、客間にて待機いただけますでしょうか」

一瞬黙ったものの、こちらも顔色を変えずにジードは肯いた。勅警は恭しく頭を下げるなり、二人を先導して廊下を歩き出した。

石造りの廊下はそれほど幅広くもなく、天井も低めになっていて、ある種の圧迫感をも生み出している。幾重にも枝分かれしては続い

ていくこの人工道を、勅警は迷いない足取りですたすたと進む。
「しかし、なんだ、迷路みたいなとこだな。ここは一階……いや、地階なのか？　窓がないから地理感覚がよけいに狂わされちまう。あんた、毎日こんなとこにいて、よくまっとうでいられるもんだな」
　きょろきょろとものめずらしげに辺りを見回しながら、ヴァリーは絶えず喋り続ける。
「それにあんたらもさ。つうか――その鎧、重くないのか？　冬でも夏でもおんなじ恰好してんのかい、だったらご苦労なことだなぁ」
　彼は振り返り、自分たちの後ろから足音も騒々しくついてくる二人の「警備兵」に向かって、皮肉っぽい笑顔を向けた。真鍮の鎧に身を包んだ、同じくらいの背格好の兵士たち。顔はおろか目元すら見えず、これでは若いのか老いているのかすらも判然としない。なにしろ迎えに現れてからこっち、彼らは一言たりと発してもいないのである。ヴァリーはそれ以上話しかけるのをやめ、肩をすくめてみせた。
　やがて、ひときわ奥まった場所にある客室の前で、勅警は足を止めた。手にした鍵束から躊躇なく一本の鍵を抜き取り、手早く開錠すると、彼は一歩下がり、慇懃に告げた。
「――こちらのお部屋でございます。荒天の具合もいちだんとひどくなってきたようですし、どうぞ今夜はお泊りを。お食事など、必要なものは、不足なきよう用意させていただきますので。それでは」
「えっ――おい、泊まりって……聞いてねぇぞ、そんな話！　ちょっと待てって、おい！」
　慌てて追いすがろうとするヴァリーを、例の警備兵らが素早く制する。左右から眼前に立ちふさがられては、動こうにも動きようがない。彼は苦虫を噛み潰したような顔で、相手を睨みつけた。
　アドリオ様がイシオス神殿を発って数日後。あたし宛に届いた手

紙には、こんなことが書かれていた。

――お前が元いた世界に戻るための方法は、やっぱり「見送りの議」以外にない。だから、誰でもいい。とにかくもう一人の男を、お前を好いている「見送り人」を連れて、聖山に来てほしい。

テオルーグが言うには、儀式を行うにも相応しい時期があるらしい。いまなら成功する確率がより高いそうだ。だからミハル、一刻も早く、こちらに来てくれ。俺を信じて。

ペーパーナイフを机上に戻すのすら忘れ、あたしは手紙をじっと凝視した。……いまなら、「見送り人」を一緒に連れていきさえすれば、あたしは――あたしは、元の世界に……日本に戻れる。お母さんに、榛名（はるな）にもう一度逢える。でも……。

「アドリオから手紙が来たんですって？　あなた宛に？　彼、単独（ひとり）でロマドに戻ってたんですのね、ちっとも気づきませんでしたわ」

大広間に入ってきたレノラさんは、大して興味もない風にそんなことを言いながら、あたしの隣に腰掛けた。ホルツェンさんが大学府に戻ってしまったせいだろうか。人淋しいのか、彼女はいままで以上にあたしのそばにくっついていることが多くなった。

「わたくしも近いうち、ロマドに行こうかしら。キニッサは田舎過ぎて、退屈で毎日死にそうなんですもの。だいたい、五大陸でもっとも権威あるイシオス神殿がこんな辺鄙な場所に建っているっていうのがそもそもの間違いなんですわ！　……それで、ミハル、どういう用件でしたの？　……ミハル？」

ティーカップを手にしたレノラさんが、怪訝そうにあたしの横顔を覗き込んでいる。あたしはしどろもどろに答えた。

「えっ……あ、あの……い、一度、戻って来いって……」

「自分で勝手に帰っておいて、あなたにも来いですって？　まあ！　戻ることなんてありませんわよ。……いえ、それなら、わたくしもご一緒しますわ！　買い物に行きたいと思っていたところですの、

ミハル、あなたも――」
「アドリオの手紙ってのはそいつか？　ミハル」
大広間の扉が荒々しい仕草で開いたかと思うと、旦那様が姿を現した。あたしはびっくりし、操られたようにこくこくと肯いていた。
「あ、は、はい」
「あいつが手紙なんて、生まれてこの方聞いたこともねぇぞ。なにか起きたっつうなら、まず電話を使うだろうしな。――見せてみろ」
言うより先に、旦那様はあたしの手から薄い紙片を掏り取った。一瞥するなり、その表情がますます険しくなった。
そして、こんなことをつぶやいたのである。
「……これはあいつが書いたんじゃねぇな。贋物（ニセモノ）だ」
「え……ええっ？　だ、だって、この字は……」
右肩上がりの、ほんの少しだけ神経質そうな字には（どういうわけだか）見覚えがあった。慌てふためくあたしに、旦那様はこう続けた。
「筆跡は確かにあいつのものだが、筆圧がところどころおかしい。考えながら書いたものにしちゃ、一定過ぎるんだ――あいつのことだ。お前さんを想って手紙をつづるのに、気持ちがまるで乱れないなんてことは考えにくい。それに、内容もだ。よく見てみろ、『誰でもいい』だと？　この神殿にいる有資格者はカシアンぐらいだが、あんなことがあったあとだぞ。やっこさんを連れて来いなんてせりふが、アドリオの口から出てくると思うか？」
「……」
ぐうの音も出ず、あたしはあらためて問題の手紙の全文を見回した。確かに……そのとおりかもしれない。少なくとも、行きの馬車にカシアンが同乗するのにあれだけ抵抗を示した彼が、「誰でもいい」なんていまになって言い出すのは、言われてみればあきらかに不自然だ。
「このテオルーグって男、どうも臭いな。『見送りの儀』を餌に、なにか企んでやがるのかもしれん」

旦那様の言葉に、あたしの心臓は大きな音を立てた。……テオが？　あたしに嘘を？

――気をつけて戻れ。儀式を行う前に怪我でもしたら、元も子もないからな。

あの時、朝ぼらけの中で聖山を降りようとしていたあたしに、彼はひどくやさしい声でそんなことを言ってくれた。あたしのことを心底気遣ってくれてるとしか思えなかったあのせりふさえ、罠をしかけるための嘘……だったんだろうか。

あたしは知らず、首を横に振っていた。

「テオは……彼は、そんな人じゃない……と思います。一度しか逢ってないけど、でも、悪い人なんかじゃ」

「ああ、俺もそう願いたいね。だがここでウダウダ言ってても始まらん。ともかくアドリオがそいつ絡みで好からぬ目に遭ってるってことだけは、間違いなさそうだしな」

そう言い棄てるなり、旦那様は踵を返した。そのあとを、あたしも弾かれたようにして追っていた。

テオが絡んで、アドリオ様の身になにかが起きてる。……だとしたら、行かなきゃ。聖山に――アドリオ様のもとに。どっちにしても、この事態を招いてしまったのは、結局あたしが原因なんだから。

呆気に取られたのか、レノラさんが甲高い声でなにか言っているのが、ぼんやり背後から聞こえた。

賓客用のベッドルームを出ると、ヨナは自ら厨房へと足を運んだ。果実のジュレをスープ仕立てにした、リュクネルと呼ばれる病人食を作るためだ。

食べさせる相手は――むろん、彼女の主君、カシアンである。

昨夜遅く目を覚ました彼は、ヨナの予想に反し、自分の手を握っているのが幼い侍女だとわかっても、眉ひとつ動かそうとはしなかった。文字どおりの無表情で虚空を見つめる痛々しい姿。その態度に、ヨナは言葉を失くした。

どれだけ話しかけようと口を開きすらしないカシアンに、とにかくどうにかして食事を摂らせなければ。さんざん考えあぐねた末に思いついたのは、果実を使った伝統的な流動食だった。消化もいいし、これなら食欲がなくてもなんとか咽喉を通るだろう。

そしてなによりこの料理は、ヨナ自身が小さい時分、存命だった母がよく作ってくれた想い出の味でもあった。緋色の絨毯が敷き詰められた廊下をずんずんと歩きながら、ヨナは唇をきゅっと噛んだ。

カシアンは間違いなく、家庭の愛情に飢(かつ)えている。

本来ならば有り余るほど受けられるはずだった母親の愛を――どういう経緯があったのかは知らないが――彼はおそらく実父の手によって奪われている。未明に向ける、ほとんど常軌を逸した執着がすべてその代替行為であるとは言わないが、根底には少なからず重なる部分が潜んでいるのだろう。

その穴を、自分が埋めてやれるなどと思ったわけではない。ただ、放っておけない。鬱陶しがられても、逆鱗に触れたとしても、あんな惨い姿をこれ以上見続けるよりはよほどましだ。その気持ちが、いまのヨナを動かしていた。

「――フォルス嬢、こんな御半下(おはした)の場にあなたがわざわざ来られることは……」

厨房には、神官長補佐を勤めるもの静かな青年、シグルがいた。ウェス・ゴート家次期当主の侍女といえば、身分は決して低くない。そんな立場の客人が、よりによって台所仕事をしたいと申し出たのである。シグルの当惑も、言ってみればごく自然な反応だった。

「食事の用意なら、私どもがすぐにでも。リュクネルでしたら、作

り方は存じております。ですから、どうぞ、客室に戻られて――」

丁重な言葉を、ヨナは笑顔で遮った。

「ありがとうございます。……でも、あたし、自分で作りたいんです。料理はあんまり上手じゃないけど、これだけはおか――母がよく食べさせてくれたんで、少しは自信があるし。だから、すみません、ちょっとだけ、ここお借りできますか」

目を瞠ったものの、シグルの顔にはやがて微苦笑が浮かんだ。彼は肯き、こう言った。

「……カシアン殿は幸せな方ですね。承知いたしました。どうぞ、ご自由にお使いください。果物は朝摘みのレルメ（※ネクターの一種。酸味が少なく食べやすいことで知られる）がよろしいのでは？　スパイス類はそちらの棚にそろっておりますので」

四半刻（約三十分）もする頃、厨房いっぱいに甘い香りが漂い、リュクネルが完成した。盆の上に皿を置き、丸い蓋をかぶせると、ヨナはカシアンのもとに向かった。一口だけでもいい。いざとなったら、無理やりにでも口に押し込んでやろう。そう思いつつ、客間の前で立ち止まり、深呼吸する。なぜだかひどく緊張していた。

「若君、ご気分はいかがです？　そろそろお腹空きません？　あたし、これなら食べられるんじゃないかと思って――」

ドアを開けた彼女の大きな目が、点になった。

ベッドの上には、あるはずの人影がなかった。

「わ……若君？　若君……若君！」

慌てふためき、部屋中を駆け回る。もとよりそれほど広いわけでもない室内の「捜索」は、あっという間に終わった。――ヨナの手から、スープ皿が盆ごと滑り落ち、床の上にその中身をぶちまける。せっかくのリュクネルが台無しになったことにすら、彼女はまったく気づかなかった。

いつの間に出て行ったのか――カシアンの姿が、客室から、いや

イシオス神殿から消えた。

# 第四十六話　聖山へ

キニッサの町にうっすらと夕闇が忍び寄る、六刻半（午後五時）。繁華街の外れで客待ちをしていた一台の辻馬車の前に、なんとも奇妙な風体の男が現れた。

長身痩躯に目を惹くほど見事なプラチナブロンド、だが本来整っているだろうその顔面には、ところどころ血に変色したガーゼが貼り付いている。ベージュのガウンに同色の室内履き、と、どう見ても着の身着のまま家を転がり出たとしか思われない恰好だ。呆気に取られ、御者は台座の上からまじまじと男を見下ろした。

「――ロマドまで行きたいだって？　ヴィネック街区の、聖山にかい？　いや……そりゃあ、出せなくはないけども……お客さん、あんた――」

足代は持っているのか。言いにくそうに目を眇めた御者の背筋が、次の瞬間、凍りついた。

「……行くのか行かないのか、どっちだ。私には時間がないんだ、一秒でも早く跡を追わねば……！」

地底からの呼び声もかくやと思わせる男のせりふに、御者は操り人形のごとく肯いた。男は――名門ウェス・ゴート家次期当主ことカシアンは、素早く扉を開けると、座席に浅く腰をかけた。

傷はまるで癒えていない。なにより、神殿の誰にも――そう、ヨナにすら、外出することなど告げてはいない。可哀相にいま頃きっと、あの健気な侍女は心当たりを捜して奔走しているところだろう。

それでも、彼は自分を止めることなどできなかった。

――名前……教えて。

――カシアン、大学府に友達はいるの？

――友達にならなれるよ。話し相手にならきっとなれる。

胸が苦しい。ジードに殴られた傷の痛みなどものの数ではない。未明の声を思い浮かべるたび、食道が詰まりでもしたみたいな圧迫感が、どこからともなくじわじわと込み上げる。意識を失い、眠っている間にも、夢の中ではずっと彼女に逢っていた。いつかのように彼女はやさしく自分を受け止めてくれた。だが、幸せな夢は、唐突に途切れた。目を醒ました彼のそばには、未明はいなかった。

しばらくして、ふたたび眠りから醒めた時だった。

未明の、最愛の娘の気配が感じられない――神殿のどこにも。

「ミハル……」

嗚咽とともに、いとしいその名がするりとこぼれ落ちる。いま追いかけなければ、未明は永遠に自分の手の届かないところへ行ってしまう。天啓にも似たその想いに突き動かされ、カシアンは寝室を飛び出し、ハーマッド島を出、馬車を拾うためにキニッサの繁華街へと向かっていた。

十数回目の寝返りのあとで、ヴァリーはおもむろに両目を開けた。窓のないこの部屋には、一筋の外光すら差し込むことはない。彼はやおら起き上がり、苛々と頭を掻き毟った。

――なんだって俺は、こんなとこで足止めを喰らわなきゃならないんだ？　それも、よりによって、こいつと同室でなんて……なんの冗談だよ、まったく。

胸の内でぼやきつつ、反対の壁際に置かれた寝台をちらりと見や

る。耳を澄ますと、ごくかすかな息遣いが聞こえてきた。その態度から察するに、どうやらこの同行者の方は、ヴァリーとは違っていまの状況をいぶかしんだりもしていないらしい。

まぁ、俺はしょせん他所者だからな。そうつぶやくとともにヴァリーは寝台を降りた。足音を殺しながら――もっとも、上等の絨毯が敷き詰められたこの客室では、無駄な気遣いとも言えたが――暗闇の中を手探りでドアへと進む。数分後、客間の外に忍び出たヴァリーは、大きく息をついてから、カンに任せて廊下を歩き始めた。ところどころに頼りなげな常夜灯が設えられてはいるのだが、なにしろ迷路のような造りである。そもそも、どこからどう来たのかすらうろ憶えなのだ。それでもヴァリーは足を止めようとはしなかった。

――この「議会所」とやらにはなにかがある。おそらくはゼーレンディアの国民すら誰も知らないような秘密が。この国の為政がどうだろうが、いまさら俺には興味もねぇことだが……。

天上の切符――あれを俺に発行した理由が、俺だけじゃなく、ミハルにも関係する内容なんて聞かされちまったら、黙っていられるわけもねぇじゃねぇか。

同行者、オルグ・ジードがふと漏らしたあの一言が、ずっと引っかかっていた。それが事実だとすれば、おちおち眠ってなどいられない。そんなわけで、ヴァリーは真夜中を狙い、単独行動（スタンドプレー）に出ることにしたのである。

が、壁際に沿って五ノール（約十二メートル）ほど進んだところで、ヴァリーの動きが急に止まった。

「あいつら……いねぇと思ったら、少し離れたとこに待機してやがったのかよ。抜け目ねぇな」

ごく小声で独りごちる。その言葉どおり、前方二十ノール（約五十メートル）辺りの廊下の曲がり角には、あの「警備兵」の姿があ

った。それも一人。ということは――ヴァリーは首だけで背後を振り返る。思ったとおり、反対側の廊下のはじにも、同じように甲冑の兵士が控えているのが見えた。舌打ちし、咄嗟に考えをめぐらせる。護衛なのか見張りなのか、ともかく見つかってしまったが最後、おそらくは力ずくで部屋に戻されるに違いない。彼は思わず貼りつくようにして壁にもたれかかった。

その時、右肩が、わずかな違和感を捉えた。

「ん……？」

体重をかけた際、ほんのかすかにだが段差を感じた。右手を這わせ、その辺りの壁を素早く弄る。――指先が「切れ目」を探り出すのには、さして時間はかからなかった。ヴァリーの口元に、にやりと不敵な笑みが浮かんだ。

彼の身体は、壁に呑み込まれ、一瞬で廊下から消えた。

旦那様は、あのあと――つまり、アドリオ様からの手紙を贋物（ニセモノ）だと言い放ったまさにその直後、往路に使った馬車に乗り込むため、神殿を慌しく出て行った。そして、あたしも彼に続いた。客室の扉に取りすがるようにして同行を申し出たあたしに、旦那様は目を瞠った。

「ミハル、お前はここにいろ。そのテオルーグって占い師がどういう素性の男かわからん以上、危険がないとも言い切れん。お前になにかあったら、ジードのやつがどれほど心配するか、想像はつくだろう」

ジード様の名前を出され、あたしの心は一瞬、ぐらついた。彼と交わした約束が脳裏を過ぎったからだ。でも――。

「元はあたしの問題なんです。あたしのせいでアドリオ様がもしも危ない目に遭ってるんだとしたら、ここで……一人だけ安全な場所で待ってることなんてできません。連れてってください、旦那様、

お願いです」
　あたしは噛みつかんばかりにそう言い、旦那様が首を縦に振るより早く、強引に中へ潜り込んだ。呆気に取られたみたいに絶句する旦那様。ところが、次の瞬間、彼はさもおかしそうに含み笑いを漏らし、あたしの頭をくしゃっと撫でた。
「……同じ（おんな）ような宿命を負わされたっつうのに、ずいぶん性格が違うもんなんだな。イグノディアスの……いや、ウルディノシスの好みってのはどうなってんだよ、たいがい？　いっぺん訊いてみたいもんだぜ」
　旦那様がなにをおもしろがってるのか、さっぱりわからなかったけれど、とにかくあたしは馬車から降ろされなくて済んだらしかった。アドリオ様の無事をひたすら祈りつつ、でも、いまの自分にはなにもできない。その一方で、彼――テオルーグの手のひらの感触を、あの温かさを、どういうわけか疑いたくないと思っている自分がいた。ぐちゃぐちゃな考えをまとめることもできないまま、かなりの速さで流れていく夕暮れの風景を、あたしは車窓越しにぼんやり眺めていた。
　オルヌ言うところの神通力を操り、ニセの手紙を書かせたあと、アドリオはふたたびぐったりと力を失くし、別室で死んだように眠り続けている。毀れた玩具人形さながらである。その姿に、オルヌは折に触れ、底意地の悪い蔑笑を浮かべていた。嗜虐的な満足感を刺激されるのか、それとも、また別の感情からなのか。そんな彼の態度を、テオルーグは座上からじっと眺めていた。
「そろそろ、例の――依坐の娘らがここへやって来る頃でしょうかな。我らの宿願が成就される時も、いよいよ近づいているというわけだ」
　簡素な椅子に掛け、『暁の経典（エリグザード）』を繰りながらつぶやくオルヌに、

テオルーグは訊ねた。
「お前……あの一族に私怨でも抱いているのか」
オルヌの手がぴたりと止まる。やがて、かすれたような、それでいてどこか高揚したような耳障りな声がその口から漏らされた。
「……私怨などと、人聞きの悪い。私はただ、我慢がならないだけです。もっとも神に近い存在である私の存在を軽んじ続ける者どもすべてが。あの神殿にしても例外ではない……この私になど比べるべくもない、塵芥のような価値しか持たない人間が、私よりも重用されるこのくだらない風潮を、これ以上のさばらせたくないというだけですよ、テオルーグ殿」
濃緑の表紙を閉じ、視線を落としたままオルヌは答えた。そのせりふには、狂信じみた不吉な響きがあった。彼はゆっくりと顔を上げた。
「この世には、ふさわしい在り様というものがある。しかしながら、外れた軌道を正すことのできる者はごくわずか……私や、あなたのような『力』を与えられた人間にしか、世界を変えることは赦されないのです。我らは言ってみれば真(まこと)の神の使いなのですな。であればこそ、『色付けの儀』もこうして挙行の機をふたたび与えられたわけですから」
オルヌの長広舌を、テオルーグは反駁もせずに聞き流していた。その反応に焦れたのか、オルヌはやや頬を紅潮させ、続きを語ろうとして身を乗り出した。その時だった。
「――来たな」
ロッキングチェアに揺られながら、テオルーグは抑揚なく言い捨てた。

# 第四十七話　対峙

いったい、これでいくつの曲がり角を過ぎてきたのだろう。壁際に沿って用心深く進みながら、ヴァリーはひたすら前方を睨み続けた。それでいて、時折、その視線は抜け目なく別の場所へと――一定区間を挟んで現れる宗教画や、神話をモチーフに作られているらしい青銅のオブジェへと注がれる。帰り道を憶えておくためだ。

あてがわれた客間を抜け出し、審議院の内部を探ろうとするうち、偶然見つけた隠し廊下。それは一見、壁と同化しているため見分けるのは難しい。初めてここを訪れる人間には、まず発見することすらできないだろう。

だが、ヴァリーの直感は、この廊下がおそらくは恒常的に――日常の通行路として――使用されているに違いないことを、彼に告げていた。その根拠はいくつもあった。

――なにより驚いたのは、ここに足を踏み入れた途端、それがわかったみたいに灯りが点きやがったことだ。見たとこランプの類なんて置かれてもいねぇってのに。その上、さぞ冷え冷えとしてるかと思いきや、暖かくも寒くもない。どう考えても、ここを通る人間のために、灯りから温度に至るまで、誰かが徹底管理してるって感じなんだよな。

それに……あの絵やら置物やらもだ。置かれてる位置にも種類にも、どうやら規則性があるらしい――つまり、目印のために。そうだ、この隠し廊下を使う連中、要は審議院の奴らのために。

そういった通路が備えられていること自体は特にめずらしい話ではない。外部からの敵に備え、内部の人間だけが要領よく活用でき

るように工夫を施し、入り口は巧妙に隠しておく。違法行為にも手を染めたことのあるインヴォルタンのリーダーとしては、すぐにぴんと来た。要塞島というこの島の通称が、伊達や酔狂で名づけられたものではないらしいということに。

そうして黙々と歩き続けること、四半刻（三十分）。通路は相変わらず小道に枝分かれし、支流のように延々と続いていく。さすがのヴァリーも厭気が差してきた。往路はかろうじて憶えているものの、そもそも、どこに通じているのかもわからない廊下だ。どこかに辿り着いたとして、そこにどの程度、重要な機密が隠されているのか。他国民である彼に、一見して判別がつくものかどうかも定かではない。いっそ引き返してしまおうか、そう思い始めた時だった。

唐突な人の気配に、ヴァリーの総身が逆立った。それまでは暗く閉ざされていたはずの方角の空間が、ぼんやり明るく辺りに浮かび上がるのがわかった。

「……で……が……」

「……それは……」

衣擦れの音とともに、嗄れ声が近づいてくる。数は二人。――この通路を使う老人？　そりゃあつまり、審議院のメンバーの誰かってことか？　ヴァリーの顔が緊張に引き締まる。彼は壁に張りつき、でき得る限り息をひそめた。じきに、白い装束をまとい、奇妙な仮面をかぶった二つの人影が現れた。彼らはヴァリーに気づくこともなく、低い声色で会話を交わしながらゆっくりと通り過ぎていく。

「そう……思いのほか、あれは難しい。なんといっても神器ですからな。それになにより、前例がないのだから」

「ないとも言えないのでは？　前代の……」

「あれは使いものにならなかった。だからこそ、この機を逃すわけには……審議長とて、よくわかっておられるはず」

謎めいた言葉の羅列に、ヴァリーは思わず眉をしかめた。――神器？　前代？　審議長ってのは、文字どおり、審議院のトップってことだよな。そいつがなにかを企んでやがるのか？

「……ともかくも、『調律』を急がねば。あれを済まさないことには、儀式は決して――」

調律？　なんのことだ、いったいなんの調律なんだ。それに、儀式だと？　ヴァリーがいっそう耳をそばだてようとした、その時だった。

「おや」

訝しげな声とともに、彼らのうちの一人がぴたりと立ち止まった。視線がこちらへ向けられる気配があった。ヴァリーの心臓が大きく跳ねる。彼は咄嗟に口元を押さえた。

「……あちらの廊下に灯りが……院のどなたかが通られたのですかな」

「妙ですな。いま時分、あの通路を使われる方など……」

ヴァリーは反射的に身を翻した。このままでは見つかってしまう。この場にいるのを咎められるだけで済めばいいが、しかし、もしもいま漏れ聞いた会話の中に重要機密事項が含まれているとしたら――。

「――誰もいないようですぞ。誤作動では？」

「ふむ……ここも一度、点検する必要があるかもしれませんな」

廊下を覗き込み、一渡り眺め回したあと、二人は首をひねりつつもその場を離れていった。彼らの気配が完全に消える頃、押し殺したため息とともに、大柄な青年の姿がふたたび現れた。比較的大きな神像の隣に、張りつくようにして隠れていたのだ。

「……あっぶねぇ。じいさんだからよく見えなかったんだな、でなきゃ見つかってたぜ。間違いなく」

額ににじみ出た汗をぬぐいながら、ヴァリーは独りごちた。もっとも、「見つかっ」たらどうなっていたのかは、実のところ彼にもわからない。なんとなれば「天上の切符」を持っているからこその賓客扱いである。まさか即投獄されるなどとも思われないが……。

ヴァリーは肩をすくめた。これを汐に、部屋へ戻ろう。大した収穫があったわけでもない。なんだか無性に疲労していた。そして、

どういうわけか未明の顔がしきりと脳裏に浮かんだ。

「来たな」

一言つぶやくなり、テオルーグは入り口である粗末なドアを見やった。常と同じく、鍵などは掛かっていない。やがて、ノックの音すらなく、いささか乱暴にドアが開いた。現れた人物を認めた彼の表情が、わずかに変化した。

「――邪魔するぜ。あんたが庵主か」

無造作にくくられた灰色の長髪。とがったあごに、精悍な眉。そして、忘れもしない、あの独特な輝きを放つ緑碧（りょくへき）の瞳。二十年近い年月が経っているにも関わらず、ほとんど老いてもいないようにすら見える、異様なほど若々しく整った顔立ち。

テオルーグは無言のまま、この突然の訪問者をじろりとねめつけた。とはいえ、ニセの手紙を餌に、彼らをおびき寄せたのは自分の方である。そう――男の後ろには、あの小柄な娘の姿があった。

未明。忌まわしき女神（イグノディアス）によって異界から取り込まれた、次代の依坐。

真の「色付けの儀」を成功させるためには、どうしても彼女が必要なのだ。彼女と、そして、彼女に呼応する、六人の男のうちの二人が。

「……ウェス・ハーシュ家総帥か。ふん……確かに、お前でも条件を満たしてはいるな」

身分を看破されたことに、男は――ヴィネックは瞠目した。だが、彼が口を開こうとするより早く、思いもかけない声がその場に飛んだ。

「条件を満たしているですと？　贄となるべきは、この小娘に心を奪われている男でなければならないはずではなかったのですか、テオルーグ殿」

胡乱なせりふとともに姿を見せたのは、ヴィネックにも見覚えのある、かつての副神官、ラルモ・オルヌだ。多少、肉が削げたようではあるものの、野心に爛々と光る眼（まなこ）は、以前とまるで変わっていない。いや、より正確に言うなら、さらに迫力が増したようですらある。

「中央獄舎から逃げ出したってのは聞いちゃあいたが、まさかこんなとこで再会するとはな。ってことはつまり、グルなのか？　お前さんと、この占い師とやらは」

冷え冷えとした声色で詰め寄られても、オルヌは平然と肯くのみだ。

「いかにも。しかし――この山師でも用が足りるとは、どういうことなのです？　テオルーグ殿。あなたがおっしゃったのですぞ、儀式に必要なのは、単独の贄ではなく……」

「贄って……贄ってなんのことなの、テオ」

テオルーグの眉がぴくりと揺れた。オルグ・ヴィネックの背後から現れた黒髪の娘、未明が、すがるような必死の眼差しを自分に向けている。思わず伸ばしかけた指先を、寸前でどうにかこらえた。

「テオ、お願い、本当のことを教えて。あたしのことを好きだって言ってくれる人を二人連れてくれれば、日本に帰るための儀式を……『見送りの儀』をやることができるって、あれは……あれは本当なの？　それにアドリオ様は……アドリオ様はどこにいるの、この手紙はアドリオ様が書いたんじゃないって本当のことなの？」

不安に慄（おのの）く彼女の表情に、テオルーグの心が揺れる。いますぐ立ち上がり、その細い身体を抱きしめたい。なんとか衝動を押し殺し、答えようとした時だった。

術を施し、隣室に寝かせておいたはずのアドリオが、ふらりとこの場に現れた。

カルマ駅に到着するなり馬車を飛び降りたあたしたち、あたしと旦那様は、休憩もろくに取らず、その足で聖山に登った。二人とも、疲れなんて感じていなかった。頭にあるのは、アドリオ様のことだけ。彼が窮地に追い込まれてるんじゃないか、そう思うと、休む気になんてとてもなれなかった。もっとも、旦那様はしきりにあたしを気遣い、最後まで駅舎に残って待っているよう勧めてくれたんだけれど。

あの晩、アドリオ様と一緒に辿った道筋を必死で思い出し、迷いながらも進むうち、まるで――そう、誰かに導かれるみたいな感じで、唐突に開けた場所に出た。どれだけの時間が経っていたのかもわからない。昼なのか夜なのかすら。薄暗い空間の中、白い靄がけぶるように漂い、じきに一軒の庵（ログハウス）が姿を現した。それもあの時とおんなじだ。

旦那様はあたしの方を見ようともせず、確信的な足取りで庵に向かうと、躊躇なくドアを開けた。あたしもすぐにそのあとに続いた。

――部屋の中には、テオがいた。ロッキングチェアに揺られながら、じっとあたしたちを見つめている。深海を思わせる、きれいな群青の瞳。あたしの背筋に、なぜだか悪寒が走った。

口ぶりからすると、彼は旦那様を知っているらしかった。そのことが意外だったのか、旦那様は彼に近寄ろうとして身を乗り出した。その時、別の人物が現れた――アドリオ様じゃない、全然別の、知らない男の人だ。黒の僧衣みたいな服をまとい、髪もひげもぼうぼうに伸ばし放題で、頬や目の下がこけている。なのにその眼差しにはひどく強い光が――感情が宿っていた。それも、間違いなく負（マイナス）の。旦那様の左腕が、あたしを庇おうとしてか、後ろ手に伸ばされた。それから、彼は言った。

――グルなのか？　お前さんと、この占い師とやらは。

あたしは唾を飲み込んだ。グルって……それって、テオが、この

男の人と組んで、あたしたちを騙そうとしてたってこと？　問われるまま、彼は抗いもせずに肯いている。さらにはこんなことまで言い出したのだ。

「この山師でも用が足りるとは、いったいどういうことなのです、テオルーグ殿。あなたがおっしゃったのですぞ、儀式に必要なのは、単独の贄ではなく……」

贄。

あまりに不吉なその言葉が、あたしの脳髄に突き刺さった。あたしは、無意識のうちに、口を開いていた。

「テオ、どういうこと？　贄って、贄ってなんのことなの」

テオは黙ったままあたしを見た。答えてくれそうな雰囲気じゃない。それでもあたしは追いすがった。

「テオ、お願い、本当のことを教えて。『見送りの儀』のことも、それに――それにアドリオ様は……アドリオ様はどこにいるの、この手紙はアドリオ様が書いたんじゃないって本当のことなの？」

テオの表情は変わらない。でも、その口元が、かすかに動くのがわかった。あたしは辛抱強く、その動きを見守った。……その時だった。

「――アドリオ！」

旦那様が叫んだ。同時に、あたしたち全員の視線が、一点へと集中した。

音もなく開いた、反対側のドア。そこにはアドリオ様が立っていた。神殿を発った時と同じ、マントすら外していない、旅装のままだ。でも――なんだか、様子がおかしい。反応がない。あたしたちの方を向いているのに、アドリオ様は一言も口を利こうとしないのである。顔つきもどこかヘンだ。黒褐色の両目にはなにも映っていないんじゃないかと思えるほどの無表情で、彼はそこに佇んでいた。

それでも旦那様とあたしは、彼に向かって駆け寄ろうとしていた。

アドリオ様の名前を呼びながら。
「おっと。……それ以上は動かないでいただきましょうか、ウェス・ハーシュ卿」
あたしは短い悲鳴を上げた。意地の悪い、低くしわがれた声とともに、さっきの男の人がぐいっとアドリオ様の身体を引っ張り、あろうことか彼の首筋にナイフを当てたのである。旦那様ですら、こうされてはうかつに手出しもできない。彼は拳を固めて吐き棄てた。
「……なにが望みだ、ええ？　アドリオを質に取ってまで、俺たちになにをさせたいってんだ、てめぇは」
激昂する旦那様とは対照的に、相手の男の人は、気味の悪い薄ら笑いを浮かべてこう言った。
「いい眺めだ。まったく心地好い眺めだ、あの穢れた一族の当主をこうして追いつめられる日が来ようとは。……神は、イグノディアスはやはり、私をお認めなのだ。真（まこと）の使者として……この世の穢れを祓うに相応しい人間として」
「穢れた一族だと？　……イシオス神殿で副神官止まりだったことをいまだに根に持ってやがるのか、オルヌ、てめぇ」
旦那様は、侮蔑も露わに言い捨てた。その途端、（図星だったのか）黒衣の男の人の顔色がさっと変わった。
「黙れ、この山師めが！　能力の問題などではない、ただ頭打ちだったというだけだ！　七人もの無駄な神官どもを抱えておったために……私の方が、この私の方が、よほど神官長の地位にも相応しい存在だったのだ、それなのに……あの神殿は……！」
彼の額には太い血管が浮かび上がり、肌にいたっては、怒りのせいなのか赤黒く変色すらしている。ナイフを持った手がぶるぶる震えるのが見え、あたしは気が気じゃなかった。なのに旦那様の口撃は止まらない。
「笑わせんな。てめぇのどこがイシオスの長に相応しいんだよ、ああ？　奉献の儀（※）すら一度だってまともに完遂できたこともねぇくせによ。お情けで置いてもらってた分際で、よくまぁそこまで

逆恨みできるもんだ。実際、その神経のぶっとさだけは、賞賛ものだけどな」

こうなるともう、旦那様の独壇場だ。彼は余裕すら感じさせる素振りで、ゆっくりと足を踏み出した。さっきとはまるで立場が逆転してしまった感じだった。

「オルヌ。てめぇの不遇をなんのせいにしようと勝手だがな、義父上を……神官長を侮辱するのだけは、この俺が赦さねぇ。――さっさとナイフを棄ててアドリオから離れろ。これ以上は、俺も容赦しねぇぞ」

「き……きさ、貴様……！　よくも……濁った血族の塵芥（ゴミ）風情が、よくもこの私を……！」

地鳴りにも似たうなり声を上げたかと思うと、彼は、アドリオ様の首筋にあてがったナイフをいきおいよく振り上げた。弾かれたように駆け出す旦那様。あたしは――悲鳴すらしぼり出せず、ただ口元に手を当て、その光景を呆然と見守っていた。

ところが、次の瞬間だった。

黒衣の男の人の手のひらから、意志を持つ生きものみたいに、ナイフがふわりと浮き上がったのだ。誰も予想もしていない出来事だった。悲鳴のような、慌てふためく声が聞こえた。

「なっ……な、なにをする！　テオルーグ、お前……邪魔をするのか、この期に及んで！」

空中に浮かんだナイフは、間髪を入れず、粉々に砕け散って床に落ちた。それがテオの仕業によるものだと、あたしは瞬時に理解した。

「早まるな。贄は二人以上必要だと言ったはずだぞ。ウェス・ハーシュ卿一人残ったところで、前回と同じ失敗を繰り返すだけだ」

あたしはゆっくりとテオを見た。――前回と同じ失敗？　『見送りの儀』……ううん、違う。彼が言っているのは、彼が行おうとしているのは……あたしを日本に帰すための儀式なんかじゃない。そうだ。もっと別の、まったく違う目的の……そして、間違いなく、

誰かを犠牲にしなきゃならない儀式なんだ。
テオは、その儀式を成功させるために、ニセの手紙を書いてまで、あたしたちをおびき寄せたんだ。
――けれど、この日、あたしが知ることになる真実は、これだけに留まらなかったのである。

（※……イシオス神殿で行われる定例神事。長時間、暗闇に籠らなければならないため、かなりの精神力を必要とする）

# 第四十八話　二つの儀式

硬直した空気の中、あたしは瞬きもできず、じっとテオを見つめた。あたしだけじゃない。アドリオ様に駆け寄ろうとした旦那様や、それにこの、どこか怪僧じみた不気味な男の人までが、血走った目で彼を凝視している。

「なぜ邪魔をするのだ、テオルーグ！　よもやこの土壇場に来て、お前までが私を裏切るつもりではあるまいな、ええ！？」

男の人は裏返ったような声でわめいた。けれどテオの顔色はぴくりとも変わらない。掛けていた椅子から立ち上がることすらせず、泰然とかまえたまま、彼は言った。

「儀式のために必要となる贄は、少なくとも二人は必要だと話しただろう。この若造を殺してしまったら元も子もなくなるのだ。同じことをなんども言わせるな」

儀式。

……テオが口にしたその言葉は、あまりにも不吉な響きを帯びていた。あたしは確信した。ここに来る前、旦那様の言っていたとおりだ。

テオは、あたしを日本に帰すつもりなんか、これっぽっちもないんだ。

「――儀式だと？　いったいそりゃなんのことだ」

砕けたナイフの破片を踏む、じゃり、という音が聞こえた。アドリオ様に素早く近づき、抱き寄せようとした旦那様の動きが、はっとしたように止まった。あたしも同時に息を呑んだ。

アドリオ様の周囲の空気が、うっすらとぼやけているのだ。まる

で陽炎みたいに――旦那様の伸ばした手は、その「壁」に阻まれ、アドリオ様には触れることもできないようだった。旦那様は、アドリオ様から目線を外し、ゆっくりとテオを見た。

「てめぇの仕業か。ふん……どう細工したんだか知らねぇが、ニセの手紙なんて手の込んだもんまで用意しやがってよ。――とんだ占い師だな、まったく」

飄々とした口調とは裏腹に、顔はまったく笑ってはいなかった。両腰に手を当て、息をひとつ吐くと、彼はさらに続けた。

「……なにが望みだ。金か？　回りくどい話は好きじゃないんでな。さっさと要求を言ってくれ」

ところが、その問いに答えたのはテオじゃなかった。

「貴様の死だ！　いや、貴様に連なる、ウェス・ハーシュ一族の系譜を根絶やしにすること……あの穢れた血族を、歴史から消し去らねば、この世は浄化されぬのだ！」

ひび割れた大音声が庵中に響き渡る。さっきアドリオ様を殺そうとした、あの男の人だった。一方の旦那様は、そんな彼とは対照的といおうか、いかにも面倒そうに頭を掻いている。

「ばかのひとつ覚えみてぇに繰り返してんじゃねぇよ。どうせてめぇが言いたいのは、あれだろ？　うちの家系が――」

「呪われた血族婚の末裔が！　貴様らの身体は、骨の髄まで濁りきっているのだ。それも然り、イグノディアスの名の下に、幾代もの間、連綿と血で血を塗り重ねているのだからな！」

思いもかけない話に、あたしは目を瞠っていた。呪われた血族婚の末裔？　旦那様が……ううん、つまり、ジード様が？

でも、確かにそう言われてみれば、ジード様が結婚するはずだったレノラ姫って、彼の従妹だったような……。ということはウェス・ハーシュ家の女主人、アウラ様ももとはええと、ノルド家だっけ？　そこの一族からお嫁に来て、さらにその息子である旦那様が、またまたノルド家からお嫁さんをもらって……あたしの頭は、どんどんこんがらがっていった。日本でも従兄妹間の婚姻は禁じられて

はいないけれど、それにしても代々に渡ってというのは、さすがに聞いたことがない。

「そうだ、貴様らの血は、腐敗しきっているのだ。いまの世と同じくな！　それを清めあらためるために天より遣わされたのがこの私なのだ。だからこそ儀式を、『色付けの儀』を、一刻も早く執り行わなければ！」

「『色付けの儀』？　そいつが、さっきてめぇが口にした儀式ってやつなのか」

旦那様は、わめき続ける男の人を無視し、テオに直接訊ねた。――あたしの背中を、緊張が走り抜ける。

果たしてテオは肯いた。あの海の底みたいな群青の瞳を、ほんの少しだけ眇めながら。

テオはあの日、あたしとアドリオ様にこう言った。

日本に帰るためには「見送りの儀」を行わなければならない。それには、あたしを心から愛する男の人が二人必要だって。その場にいたアドリオ様が、一人は自分が務めると申し出てくれた。そして――。

……そして、もう一人の「見送り人（びと）」を、ジード様に頼むつもりだったんだ。ついこの間までは。

「てめぇ……テオルーグとか言ったか。このミハルに、もといた世界（く に）に帰る方法を教えただとか聞いたが――それも嘘っぱちってわけか。つまり、その『色付けの儀』とやらに必要な条件をそろえるのに、こいつらを利用したってわけだな」

旦那様のせりふに、あたしは軽く打ちのめされた。うすうす気づいてはいたし、さっきだって思い知らされたはずだった。……それでも、この文字どおりの瀬戸際に至るまで、信じたいと思っていたんだ。聖山を降りようとしたあたしたちの身を気遣ってくれた、あ

の時のテオのやさしさを。
あたしはあらためてテオを見つめた。けれど、もう、彼はあたしには一瞥もくれようとはしなかった。
「呪われた血族婚も、忌まわしき女神の加護あればこそか。六人の男の一人……なるほど、歳月すら、お前を避けて通り過ぎていくとは、驚くべき験力（げんりき）だ」
テオは独り言みたいにつぶやいた。冷え冷えとしたその声には、かすかに皮肉めいた響きがあった。旦那様の表情が、微妙に変わった。
「お前……そういやどっかで見たような顔だな。その肌といい真っ白な髪といい……餓鬼にしちゃあ妙に眼光の鋭過ぎる――」
旦那様はあっと声を上げた。なにかを思い出したみたいだった。
一方、テオは眉ひとつ動かさず、おごそかな調子でふたたび口を開いた。
「ロドアの君主、ウェス・ハーシュ家の頭領ならば、確かにイグノディアスへの供物としては相応しかろう。――オルヌ、儀式を始めるぞ。女神を手なずけるための、『色付けの儀』を」

ぼんやりとした暗がりの中で、ジードはゆっくりと両目を開いた。通された客間には窓の設えはない。にもかかわらず、室内は頼りなくもうっすらと白んでいる。ということは、どこかに明り取りでもあるのだろうか。身をもたげた彼の耳に、いささか耳障りな音が飛び込んできた。同室に泊まったヴァリーの、豪快な鼾だった。深く眠り込んでいるのか、起きる気配はまるでない。
――無理もないな。戻ってきたのはほんの半刻（一時間）前のことだ。なにを探ってきたのかは知らないが、おそらくは緊張の糸が切れたんだろう。こういう状況でなければ、このまま寝かせておい

てやりたいところだが……。

夜半をいくらか回った頃、ヴァリーがそっと客室を抜け出したことに、ジードは気づいていた。この同行者は、単純磊落なだけの男ではない。そうであったなら、たとえ義賊に近いとはいえ、反政府組織（インヴォルタン）のリーダーを任されはしなかっただろう。行動力、機動力は並以上。こう見えて状況判断能力にも長けているに違いない。ジードは寝台を降り、ヴァリーへと近づいた。

「……ル……ミハル、ああ、俺の……俺のミハル……」

ジードの足が、ぴたりと止まった。

いつの間にか鼾が消えていた。ヴァリーは掛け布団を跳ね除け、枕を掻き抱きながら、怪しげな寝言を漏らし続けている。切なそうに歪んだ眉――夢の中で誰に逢っているのかは明白だった。ジードの眉が、ヴァリーとは対照的な角度に逆立った。

――たとえ夢の中だろうが、ミハルに逢うなど……その上抱擁するなど、この私が断じて赦さん……！

ところが、ジードがその右拳を固め、振り上げた時だった。客室のドアをノックする音に続き、慇懃な声が聞こえてきたのである。

「オルグ・ジード卿、それにウィドラー殿。お目覚めくださいませ。朝食の用意ができております。こちらにお運びしてもようございますか」

ジードは我に返り、息を整えた。「ああ、起きてる。そうしてくれ」返事をするのと、ヴァリーが目を覚ますのとは、ほぼ同時だった。

「あ……ああ、そうか、ここは……議会所とかいう審議院の本拠地だったな。どうにも寝つけなくてまいったぜ、まったく」

頭を振りながらぼやくヴァリーに、ジードは氷のような視線を向けた。

「寝不足になるぐらいなら、無謀な行動はやめておくことだな。勇んで出ていったはいいが、迷子にでもなったかと思っていたぞ」

ヴァリーはあんぐりと口を開けた。忌々しそうに歪んだ表情が、一瞬のち、苦笑に変わる。

「……気づかれてたのかよ。さすがに抜け目ねぇな、ただのお坊ちゃんじゃねぇとは思ってたが」

後頭部を掻き毟り、開き直ったのかベッドの上に胡坐をかくと、ヴァリーは手短に切り出した。ジードは長椅子に浅く腰掛け、言葉も挟まず彼の話に聞き入った。

「なるほど。……隠し通路か。そういうものがあるとは、父上からも聞いたことはないな。それに……」

二人の視線がかち合った。ヴァリーは軽く肯いてみせた。

「儀式のために調律を急がなければならない、か。まるで謎掛けだな。なにを指しているのかはそれだけではわからないが……」

思案げにあごを撫でるジード。それはヴァリーとて同様だった。

「俺もさっぱりだけどよ、どうにも厭な予感がしやがるんだよな。――なぁ、あんた、えーと……オルグ・ジード卿」

「ジードでかまわない。なんだ」

「本当に、心当たりはないのか？　儀式っていうくらいだ。大方、審議院の連中がやる、神事かなんかなんだろ。ゼーレンディア（エンザンテ）は俺の国とは違ってやたらと神がかった国家だからな。……けど、たぶん、ただの神事じゃない。俺の直感だけど、もしかしたら、あいつが……ミハルが絡んでるんじゃないかって――」

ジードの両眼が、きらりと光った。だが、廊下を近づいてくる給仕（ワゴン）車の音を耳ざとく察知し、二人は同時に口を噤んでいた。

ホネガイ、という貝がいる。

その名のとおり、魚の骨にもヒトの肋骨にも似た形状を持つ貝の

一種で、先端に向かって伸びた細長い突起に、櫛の歯のようなトゲがいくつも生えている。

議会所の構造は、どこかこのホネガイを思わせる、独特なものだった。

外部から見ると巨大な巻貝のような――いや、いっそ、化石化した貝の死骸とでもいうべきか。六陵郭の中心には尖塔がそびえ立ち、螺旋状に渦巻きながら天を突いている。高さはおよそ二十ノール（約五十メートル）ほどで、その根元部分の部屋が、いわば常設の議場となっていた。

とはいえ、重要な議題でもなければ、通常、ここには院の人間は集まらない。それぞれが、「御所」と呼ばれる十二の持ち場を護っているからだ。

つまり、十一名もの審議院のメンバーが、一人の例外を除いて皆この部屋にそろうのは、それなりにめずらしいことと言えるのである。

謁見の用意が整ったと言われ、ここへ連れてこられたのは、客間での朝食後すぐのことだ。ヴァリーはぴりぴりと神経を尖らせ、ねめつけるようにして部屋中を見回した。それほどの広さもなければ、さして豪奢でもない造りの室内には、縦に細長いテーブル、椅子、そして、楕円の鏡を胸に抱いた、青銅製らしきイグノディアスの像が置かれている。どこから見ても国家的な機密など隠されていそうにない、ただの会議場だ。

背後で扉が閉められる。一呼吸置いて口を開いたのはジードの方だった。

「お初にお目にかかります、議官長殿。オルグ・ジード・レア・ウエス・ハーシュと申します。こちらは……友人の、ヴァリー・ウィドラーです」

口上に答えたのは、長大なテーブルの先端に座する、審議院の長だ。三点をくり貫かれた奇妙な白い面の下から、ややくぐもったような低い声が聞こえてくる。

「ウェス・ハーシュ家の次期当主か。ワンジオの言うとおり、立派になったものだの。ああ、そう硬くならずともよい。どのみちお前たちには話をせねばならなかったからの」

テーブルの周囲を取り囲むほかのメンバーたちが、いっせいに二人を注視した。らしくもなく、ヴァリーは思わず背筋を震わせた。

――そうだ、こいつらの中に、昨夜俺が隠し廊下で遭遇したやつらが混じってるんだ。もっとも、あんな面をつけられちゃあ、判別しようったって無理な話だけどな。

議官長は深々と息をついた。どこか彼方へと視線を漂わせているようにも、その様子は見えた。

「そう……お前たちには、なによりもまず、この世の理を知ってもらわねばならない。

でなければ、ウルディノシス神を復活させるため、その身を捧げることなどできようはずもないからの」

# 第四十九話　暴露

議官長が告げたその一言に、議場の空気ははっきりと変質した。緊張と昂揚が、素っ気ない造りの室内を、湯気のようにじわじわと包み込んでいく。そんな中、ヴァリーは思わず椅子から腰を浮かせていた。

「おい、いまのはいったいどういう意味だ？　ウル……なんとかのために身を捧げるだと？　まさかそりゃあ、俺らのことを――」

「不敬な！　尊き魅了の神の名を、そのようにぞんざいに呼び捨てるとは！」

「まったくもって信じられぬ。出自とて大してすぐれているわけでもない、このような者が、なぜ……」

居並ぶ十人の議官たちの間から、口々に非難と嘆きの声が上がった。だがそれを制したのは、当のヴァリーでもなければ彼の隣に掛けるジードでもなかった。

「静まらぬか。――そなたもだ、ヴァルシリー・イェセニック・ウィドラーよ。まずは落ち着いて話を聞いてくれぬかの」

本名を出され、ヴァリーは瞠目した。威厳に圧されたのか、彼らしくもなく無言で椅子に座り直し、神妙な面持ちで中央の老人をねめつける。

沈黙の中、やがて議官長はふたたび口を開いた。

「創世の真実については、オルグ・ジード、そなたはすでに知っておろう？　あれの……イシュレーのもとで、直接ウルディノシス神と交信しておるはず。そう――そなたらが、かの神の魂を受け継ぐ、六名の男の生まれ変わりであることも、聞き及んでいるはずじゃな」

議場がわずかにざわついた。神殿間では最大の禁忌とされる「神降ろしの儀」を行ったのか、そんな意味の嘆声も漏れ聞こえた。

ジードは肯いたものの、わけがわからないのはヴァリーだ。「はぁ？　生まれ変わり？　六人……なんだそりゃあ、いったいなんの話なんだよ。ゼーレンディアに伝わるお伽話かなんかかよ」

議官長の言葉が、あくまで厳粛に続いた。

「青年よ、これはお伽話などではない。……よいか、心して聞くのだ。そなたがなぜあの切符を――『天上の切符（イグノード）』を受け取るにいたったか、その理由も含め、これから私が話すことは、すべて一片のまがいなき真実なのだ」

「色付けの儀」。それはあたしには、まるで聞き覚えのない言葉だった。けれど、あたしを庇うようにしてその左脇に抱き寄せる旦那様にとっては、そうでもなかったらしい。

「なるほどな。だいたい読めてきたぜ。要するにあれか、ウェス・ゴート家の醜聞の一件。あの時の儀式をもういちどやろうってわけか。――で？　前回は見事に失敗してたが、今回は成功する見込みでもあるってのか、ええ？」

ばかにし切ったような皮肉っぽい口調にも、テオの顔色はぴくりとも変わらない。旦那様はさらに続けた。

「まぁ、その失敗を踏まえて、今度はてめぇが力を貸してやったってとこなんだろうが。言っとくがな、こんなやつに加担したところで、いいことなんかないぜ。てめぇの目がいい加減節穴だったとしても、こいつの性根が腐り切ってることくらいはわかるだろ」

ここでテオはようやく口を開いた。感情のにじまない、それはものすごく冷たい声だった。

「性根が腐り切っているのは神殿とて同じことだ。私の人生は連中によって踏みにじられ、滅茶苦茶にされた。その屈辱がどれほどのものか、蹂躙する側の人間である貴様にはとうていわかるまい」

旦那様は、そんなテオを真っ直ぐに見つめた。

「お前……二十年前、『春の街（ウェイ・モルド）』をうろついてた餓鬼だな。髪の色にしても、その海の底みてぇに真っ青な瞳にしても……よく憶えてる。街角であいつに……ミサキのやつとぶつかって、言葉を交わしてただろう。こんな華やかな祭りの日なのに、あの子はひどくつらそうな顔をしてたって、ずっとあとになってミサキが言ってたよ」

テオの顔色が、はっきりと変わった。動揺しているのは明らかだった。

「確かに俺は為政の立場にいる人間だ。だから、憎しみを向けるのなら、俺に向けてくれ。アドリオもミハルも無関係のはずだ、そうだろ。それに――神殿ったってピンキリだぞ。俺が言っていいこっちゃねぇけど、神官だって人の子だからな。中にはどうしようもねぇやつだっているかもしれんが、けどな、義父上は……ノルド神官長だけは別だ。彼を蔑むのだけは――」

「あの老いぼれのなにが別格だというのだ？　貴様に連なる穢れた一門の当主など、『色付けの儀』による粛清を受けて当然なのだ！」

テオルーグよ、そんな男の妄言に惑わされてはならんぞ。二体の贄も依坐（ヨリマシ）も手に入ったのだ、さあ、とっとと儀式を始めようではないか」

嗄れ声が響いた。白いローブに覆われたテオの肩が、かすかに跳ねた。

「半年前の失敗は、資格を有した贄がそろうことによって補えるのだろう。この小娘に――依坐の娘に魂を奪われているという男であるなら誰でもかまわぬと、そう言っていたからな。そう……あの時も実に惜しかったのだ。ウェス・ハーシュ家の小僧が二人もそろっていながら、死んだのは嫡男の方だけ。そこの若造を屠ってさえいれば、こんな二度手間をかけることもなかったというのに」

あまりな言い草に、あたしはぱくぱくと口を開けた。なのに反論しようにも、言葉が出てこない。そんなあたしの肩を、旦那様はぎゅっと力強く抱いた。

「たいそうな執念だな。ええ？　オルヌ。てめぇのつまらねぇ野望

のために、あんな生真面目な男の家庭をゴミ屑同然に引っ掻き回してよ。事件のあとはさぞ寝覚めがよかっただろうな」

旦那様の視線が、今度はテオじゃなく、もう一人の――あの蓬髪の男の人に向けられた。あたしはつられたように身を硬くしていた。だって、ウェス・ゴート家の醜聞って言ったら、確かあたしの失くなった記憶にも関わっているはずの出来事だ。そう――そこであたしは例のあの彼、カシアンと知り合っているはずなのだ。

憎々しげに責められても、相手の男の人はむしろ楽しそうですらあった。彼は、人質として自由を奪ったままのアドリオ様のあごに、ゆっくりと手のひらを這わせながらこう返した。

「ふ、ふ。これはまた異なことを……学友同士とはいえ、犬猿の仲でもあるのだろう？　貴様とあの役立たずの大貴族とやらは。それを、いまさら義憤に駆られたとでも？」

嘲りに満ちた声色だった。そう言いつつも、彼はわざとらしく首を左右に振っている。

「いまにして思えば、確かに我ながら早計に過ぎたものよ。名にし負うウェス・ゴートの頭領が、あれほど使えぬぼんくらだとはな。腰は据わらぬ、頭は働かぬ。あんな男を後ろ盾になど、そもそも無意味の極致だったのだ。ふん……よほど奥方の方が篭絡のし甲斐があったというものだな。美しく、賢く……いや、少々賢すぎたのが玉に瑕だったが。なんにせよ、あれほどの女が、なぜあんな凡庸な男に貞節を誓うのか、いやいや女心はまったくわからぬ」

男の人の頬に、下劣な笑みが浮かんだ。事情を知らないあたしでさえ、嫌悪に鳥肌が立つほどの。――けれど、旦那様の怒りは、あたしなんかの比じゃないみたいだった。

「てめぇ、オルヌ……それ以上ぬかしやがったら命の保証はねぇぞ。自分がどれほどの罪を犯したのかわかってんのか？　てめぇのせいでクリスティアは自分を責め続けて、挙句――」

「死にはしなかったろうが。罪だと？　そもそもあの女が私の言うことを聞き入れて、あの屋敷から早々に立ち去ってさえいれば、あ

あいう事態には至らなかったのだ。それにウェス・ゴート卿もだ。最終的にあの女を追い詰めたのは、私ではなく、夫たる卿ではないか。違うか？」

悪びれもせずに言い放たれたせりふの前に、旦那様の堪忍袋の緒がとうとう切れたらしい。彼の腕が、あたしの肩から無造作に離れた。どうするつもりなのかは明白だ。でも、アドリオ様が――人質として拘束されたままのアドリオ様が、まだ向こう側に――。

ところが、その次の瞬間だった。

入口の扉が、ものすごい衝撃音とともに破られたのである。

馬車に揺られている間も、聖山（オルド・カルマ）に登っている間も、頭にあるのは彼女、未明のことだけだった。なぜここを目指したのか、それも単純な理由だ。傷も癒えぬ身体でベッドから這い出し、廊下をふらふらと彷徨っていた時、神殿の小姓たちがこんな風に話しているのをたまたま耳にしたからだ。

――ウェス・ハーシュ卿と、彼が連れてきた風変わりな黒髪の娘さんが、先ほど慌しく出て行かれたようですね。行き先？　それがどうも自邸ではないらしくて。なんでも聖山に知り合いがいて、その相手を訪ねに行くのだとか。ずいぶんまた急な話ですが。

彼は、カシアンは、その言葉を聞くなり神殿を飛び出した。文字どおり着の身着のまま、足代すらも持たずにだ。キニッサの繁華街でどうにか遠距離馬車を拾い、ロマドのヴィネック街区を目指してひたすら北上する。思えば意識を失ってからというもの、水すらまともに口にしていない。だが空腹などはまるで感じなかった。ただ、無性に渇きを覚えた。それがなんのために湧き起こる欲求なのかは、本能的に知っていた。

麓に辿り着くと、なんの装備も持たぬまま、彼は山を登り始めた。無謀と言われようが、思い止まることなどできなかった。そうして昼の山中をやみくもに歩き回り、やがて宵闇が訪れる頃だったろうか。

周辺の空間をぼんやり霞ませる白い靄が、遥か前方に見えた。それが標（しるべ）だと、わかっていたわけではない。だがカシアンは駆け出した。靄の中に未明の微笑が隠れているような――あのやさしい、華奢な手が、自分に向かって伸ばされているような、そんな気がした。未明に逢えれば、逢うことさえできれば、この狂おしいほどの渇望もきっと薄らぐに違いない。――そう信じていた。この瞬間までは。

「てめぇのせいでクリスティアは自分を責め続けて、挙句――」

「死にはしなかったろうが。最終的にあの女を追い詰めたのは私ではなく、夫たる卿だ、違うか」

木々の間にぽつんと建つ、粗末な庵の扉を押し開けようとしたその時、カシアンの耳に飛び込んできたのは、聞き憶えのある男たちの争う声だった。一人はそう、もはや違えようもないあの男――現ウェス・ハーシュ卿ことオルグ・ヴィネックだ。そして、彼の糾弾の矛先が向けられているその相手は――。

「……ラルモ……オルヌ……！」

忘れ得ぬ、因縁の元副神官。父をいいように丸め込み、手なずけ、陰謀の片棒を担がせた憎むべき怪僧。いや、この際、その事実すらどうでもいい。カシアンはドアを蹴破り、室内へとなだれ込んだ。果たして、そこにいたのは、想像したとおりの人物だった。

「か……カシアン？　お前、なんでここに……」

「いまのはどういう意味だ。オルヌ……貴様、死にはしなかったとはどういう意味なんだ、ええ！？」

髪を振り乱しながら、血走った眼でカシアンは怒鳴った。ヴィネ

ックも、そのそばに佇む未明の姿さえ、視界から消えていた。激しい動悸が全身を震わせる。対するオルヌは、だが一欠けらの動揺すら窺わせることはない。

「ふ……誰かと思えば、あの役立たずの倅か。ちょうどいいところに来てくれたものだ、なぁテオルーグよ。ウェス・ハーシュ卿でも用が足りるとは言っていたが、先代ならばともかく、この男がそこの小娘に惹かれているとはどうも思えぬ。そうであるならより確実な、そう……依坐の娘恋しさのあまり正気を失ったこの哀れな小蟲の方が、よほど勝率も上がろうというもの」

彼は楽しげな哂い声を漏らした。一方のテオルーグは沈黙を守ったままだ。カシアンがふたたび吼えた。

「私の質問に答えろ！　貴様、母についてなにを知っているのだ……まさか、まさか貴様が母を……」

「死んではいない。――だがそいつが彼女を嵌めたってのは、どうやら事実らしいな」

カシアンは弾かれたように声の主を見た。オルグ・ヴィネックだった。冷ややかな中に怒りと蔑みの込められた、それはこれまでの彼の飄々とした言動からは想像もつかないせりふだった。

# 第五十話　クリスティアの悲劇

ウェス・ゴート卿の若き奥方は、その美貌をいいことに、邸内で不貞をはたらいている。

夫であるゾデュー・エリアック・ウェス・ゴートは、無実を訴える最愛の妻を最終的には自らの手で断罪した。

「そうだ。屋敷の地下で……礼拝室で、父自らが首を刎ねた。私は直後にそう聞かされた。それが……嘘だったというのか」

カシアンの頬が紅潮する。「罪人（とがびと）だからと、肖像画ひとつ残すことも赦されず……代々の墓に埋葬されることさえ……だから母の遺骸がどうなったのかも私は――」

「クリスティアは死んじゃあいないんだ。確かにゾデューのやつは最後まで彼女の潔白を受け入れようとはしなかったらしいが、それでも、殺すことはできなかったんだ。あのわからずやの父親にいくら諭されてもな。――そういうことだろ、ええ？　オルヌ」

カシアンを遮るようにして鋭く言い放つヴィネック。アドリオを拘束したまま、オルヌは鷹揚と肯いた。

「いまとなっては隠す意味もあるまいな。――いかにもそのとおりだ。知りたいのならすべて教えてやろう、ご子息よ。冥土の土産として聞いておくがいい」

大陸中にその英名を轟かせるイシオス神殿には、当時、七人の神官のほかに、補佐役の副神官が籍を置いていた。

ラルモ・オルヌと名乗ったその男は、博学な上に並々ならぬ向上心の持ち主でもあった。もの静かで下働きもよくこなし、諍いがあれば率先していなす。そうした素行を評価される一方、周囲の神官

たちからの評判はいまいちぱっとしなかった。

「あれは不気味な男だ。出自もはっきりしないし、普段から、なにを考えているのかどうもつかめぬ」

「不遇な生い立ちを憐れまれてここに拾われたらしいが、神官長殿も酔狂な」

事実、オルヌには野心があった。野心の塊だったと言ってもいい。彼は、イグノディアスという神性ではなく、その力にのみ畏敬心を抱き、自分のものにしたいと常々願っていた。神職に就いたのも、神の力を手っ取り早くおのれのものにするのに近道なれと思ってのことである。そのためにここ、イシオスという大神殿にやってきたのだが――。

現実はそううまい具合にはいかなかった。与えられた身分は副神官。上には七人の神官が控え、実質頭打ち状態だ。業を煮やした末、オルヌは別の手段を講じることにした。

神官という身分を利用し、大貴族とのコネクションを作り、その屋敷で重用されるようになれば、この先なにかと動きやすくなる。

そう考え、実行に移した。近づいた相手はオサイオンという大都市を牛耳るウェス・ゴート一族の頭領。ウェス・ハーシュ家にもひけを取らないこの一族なら、自分にとっての後ろ盾には申し分ないだろう。

代替わりして間もないウェス・ゴート家当主は、オルヌにしてみれば都合のいいことに、現ウェス・ハーシュ卿を目の敵とばかり忌みきらっていた。容姿にしろ才にしろ、大学府時代からの犬猿の仲だというかの政敵には遠く及ばない。そうしたコンプレックスをオルヌは一目で見抜き、言葉巧みに相手の懐に潜り込んでいった。そうやって出入りするうち、オルヌにとってはひとつの計算外とも言える事態が発生したのである。

二年前に屋敷に迎えたばかりだというウェス・ゴート家の新妻は、生来病弱なたちで、息子を産んでからはほとんど自室に篭りきりの日々を送っていた。ウェス・ゴート卿によって引き合わされること

もなく、もともと余所者のオルヌには、接点の生じようのない相手のはずだった――その日までは。

――ごめんなさい、日傘を……拾っていただけますか。

紫のユニスが一面に咲き誇る庭園に、彼女は立っていた。どれほどの詩人であってもその美しさをすべて言い表すことはできないだろう、芸術に疎いオルヌでさえそう思うほど可憐な女。それが、「オサイオンの聖なる乙女」、クリスティアだった。

鈴を転がすような声に、彼ははっと我に返った。慌てて下を見やると、すぐ近くに薄紅色の日傘が転がっている。手渡そうとした時、指先が触れた。――全身に、なにか得たいの知れない衝撃が走った。

クリスティアは恥ずかしそうに微笑んだ。そそっかしいんです、忘れものや失くしものも多くて。こんな大きなお屋敷でしょう、いまだに自分のお部屋もどこにあるのか、よく憶えていないんです。その親しみやすい物言いは良家の奥方というよりむしろ庶民の娘を思わせた。

彼女の腕には、生まれて半年ほどになる愛息、カシアンが抱かれていた。櫛で梳いたみたいに長い睫毛も、形のよい目鼻立ちも、母親にそっくりだ。そう告げると、クリスティアは本当に嬉しそうに破顔した。

為政に忙しい日々を送るウェス・ゴート卿は家を空けることが多い。オルヌは彼女が独りでいるところを見計らい、接近するようになった。中央での覇権も、イグノディアスの力も、どうでもよくなっていた。ただクリスティアが欲しい。彼女を自分のものにしたい。邪まな気持ちが高じるあまり、彼はある時ついに暴走した。

――私のものになれ。あんな凡庸な男などより、私の方がよほどあなたを幸せにできる。私のような人間にこそ、あなたはふさわしい。

美しく刈り込まれたトピアリーの木陰で、オルヌはクリスティアを押し倒し、愛を告げ、無理やり想いを遂げようとした。だがクリスティアは頑なに抵抗し続け、最後まで彼を受け入れることはなかった。彼女は言った。

――あなたは、いったいなにを狙っているんです？　本当は私が欲しいのじゃないんでしょう。お願いだから、ゾデュー様にこれ以上近づかないで。

そして、この日を境に、二度とオルヌに笑顔を向けようとはしなくなったのである。

オルヌの中に焦燥が湧き起こった。聖母のようだったクリスティアまでが自分を拒むのか。凡人ばかりが甘み（うま）を吸う、この世界の構造そのままに。

歪んだ愛情が、憎しみへと変換され、その感情に支配される。圧倒的なスピードで。

その一方で、計算も働いていた。クリスティアは低位とはいえ神官一族の出だ。神職としてウェス・ゴート卿に取り入りたいオルヌにしてみれば、邪魔な存在であることに違いはない。

そこで、彼は姦計をめぐらせたのである。

数人の下男を引き込み、礼拝室の冷たい床の上で、オルヌは目隠しをしたクリスティアに「報復」した。自分を認めてくれない世界の代表、男を惑わす罰すべき悪女。行為は明け方近くまで続き、ようやく終わる頃には、彼女は意識を失っていた。

オルヌは抜け目なく次の手に打って出た。計画に加担した下男たちに金をやって屋敷から追い払ったあと、邸内に女主人の不貞の噂を流し、やがて外交から帰ってきたゾデューに自ら耳打ちしたのだ。はじめはまるで信じようとしなかったゾデューも、あきらかに様子のおかしいクリスティアの姿に、だんだんと疑心暗鬼に取りつかれ

るようになっていった。クリスティアを問いただしても、納得のいく答えは返ってこない。二人の関係には修復しようのないヒビが入り、カシアンが五つになる頃、結局ゾデューは妻を離縁したのだった。

想像もしていなかった内容に、カシアンは言葉を失い、ただ唇を震わせてその場に立ち尽くすばかりだった。そんな彼の姿がよほどおかしいのか、オルヌはひどく楽しげにくぐもった笑い声を上げている。

「――そんなとこだろうとは思っちゃいたが、てめぇの外道ぶりは予想外のレベルだったな。横恋慕の挙句に逆恨みかよ。そりゃあてめぇに比べりゃ、どんなカスでもマシに見えるだろうよ。クリスティアもまったく、とんでもない屑（クズ）に惚れられたもんだぜ」

ヴィネックの痛罵にも、オルヌは一向に堪えた様子がない。

「これはまた手厳しいことを。しかしそれにしても解せぬことだ、なぜ貴様がそこまであのぼんくら当主に肩入れする？　あの男、ことあるごとにこう言っていたぞ。あの山師めが！　とな」

「肩入れしてるわけじゃあねぇけどな。俺はてめぇみてぇな人間が誰よりきらいなんだよ。義父上が、あの徳高い方が、てめぇの本音に気づいてないとでも思ってたか？　そんなわけねぇだろ。わかった上で置いてくれてたんだ、なのに――」

二人のやり取りを、突如、獣じみた咆哮が遮った。

発したのはカシアンだった。

叫ぶと同時に、彼は一瞬でその場から消えた――ように見えた。あまりに動きが速すぎて、誰にも目で追うことすらできなかったのだ。次の瞬間、カシアンはオルヌの眼前に迫っていた。全身からは

仄白い光が立ち上り、緑灰色の瞳は限界まで見開かれ、爛々と輝いている。彼はアドリオを軽々と突き飛ばし、オルヌの胸座をぐいとつかんだ。そして、言った。

「……離縁したというのは本当か。母上は……生きているのだな」

「ひ……あ、うぁ……」

さすがのオルヌも胆を潰したのか、その口元からはひしゃげた呻き声しか出てこない。カシアンはふたたび吼えた。

「生きているのだな!?　答えろ、答えねば殺――」

「カシアン!」

怒鳴ったのはヴィネックだ。彼は未明を抱きしめたまま、冷徹な声で続けた。

「落ち着け、大丈夫だ。お前のお袋は、クリスティアは生きてる。離縁されてすぐに実家に帰されたんだ。斬首したってことになったのは、大方、あの口うるさい親父の入れ知恵か、外聞を慮ったせいなんだろ。ウェス・ゴートともあろう家の頭領が、女房に浮気されてみすみすそれを赦したんじゃ恰好がつかねぇってな」

「……」

カシアンはゆっくりと振り向いた。その髪はまだゆらゆらと天を突いて逆立ったままだ。ヴィネックは息を呑んだものの、すぐにこう言った。

「――カシアン、聞け、いいか。そいつは確かにどうしようもねぇ屑だ。そうだ、お前が手にかけるほどの価値もない、紙切れ以下の屑だ。クリスティアに逢いに行きたいのなら、俺が居場所を教えてやる。誰に遠慮することもねぇ。彼女だってお前に逢いたがってるはずだ。

そんなやつと同じところに堕ちるな。いくらだって、お前は変われるんだ、これから」

そこまで言い終えると、ヴィネックは黙った。真っ直ぐにカシアンを、カシアンだけを見つめ、彼の挙動を見守っている。いや、それはヴィネックに限ったことではない。

誰もが身動ぎひとつせず――庵主であるテオルーグも、ヴィネックの腕に護られた未明も――その場に佇んでいた。そんな中、カシアンは、独り静かに目を閉じた。そして――

「母の受けた恥辱を晴らせるのなら、地獄の底に堕ちたとしても本望だ！」

鋭く叫んだかと思うと、彼の白い両手はオルヌの猪首（いくび）に躊躇なくかけられた。「ぐぅっ」声にもならない悲鳴が漏れ、色みの薄い唇から細かな泡が吹き出した、その時。

一筋の閃光が、空間を貫いた。

# 第五十一話　召喚の儀

室内を貫く閃光に、居合わせた誰もが――カシアンに首を絞め上げられているオルヌを除き――目を瞑った。狭い庵の、部屋という部屋が、白く輝く光に包まれる。空間からは音が消え、温度が消え、そして――

最後には五人の姿が消えた。

唐突に拘束を解かれたオルヌの身体が、煽りを喰って床の上に転げ込む。だが彼がようやく目を開いた時には、すでに、誰一人としてそこにはいなかった。

オルヌを除く五人を攫った光の正体とはなんだったのか。

話はジードとヴァリーの向かった要塞島、それも半刻（一時間）ほど前の出来事にまでさかのぼる。

かつて、この世界は、ひとつに均された「完全体」だった。

審議院の長たる仮面の老人は、ジードとヴァリーを正面に見据え、重々しく語り出した。

「創世の神話に描かれるとおりの、ウルディノシス神によって統治された、完全なる世界。そう――神代の頃、世の中には争いというものが存在しなかった。なにしろ、かの神は魅了の神。誰もがその足下にひれ伏し、下僕でありたいとみずから願った。そんな世界では、そもそも他人と考えを違えるという事態が起こり得るはずもな

いからの」

仮面の奥に隠された瞳が細まったようにジードは感じた。それにしても、この老人は、天上の切符の発行対象である自分たち二人を前に、いったいなんの話を始めようというのか。

「だがそんな世も、イグノディアス神が夫たる神を屠りたもうたことで、終わりを告げた。神代の終わりじゃな。それから、世界は分裂した――単一だったはずの世界に、無数の亀裂が入ったのじゃ。

残された神々と、新たに台頭を始めた人間との間で、この世の覇権をめぐっての大戦が勃発しかけた。もっとも、戦そのものは回避されたのだがの。これが世に言う七日間会議の由来じゃな」

「おい、じいさん、俺は、連邦の歴史をお勉強しにわざわざ国から出てきたんじゃねぇんだぞ。俺があんたらに訊きてぇのは、こいつのことなんだよ！」

あからさまな苛立ちとともにヴァリーは腰を浮かせた。ズボンのポケットから無造作につかみ出した浅葱色の切符を、居並ぶ十一人の老人たちにまざまざと見せつける。――だが、彼らの示した反応は、ヴァリーの予想を若干外れていた。

「やはり……わかってはいたことだが、それにしてもなぜこの男が……」

「これほど粗野で、野卑で、無教養な男が、魂の依り子たる六名の一人とは。これでは大学府を厳しく律する意味すら怪しいというものではないか」

落胆を隠そうともせずに肯き合う議官たち。ヴァリーは面喰らいつつも怒鳴り返した。ばかにされたことくらいはわかるのだ。

「肯き合ってんじゃねぇ！　つうか人の質問に答えやがれ、この切符の正体はなんなんだって訊いてんだよ！　俺とこいつ――ジードに発行した理由もだ。いや、それだけじゃねぇ……聞いたところによるとミハルにも関係するっていうじゃねぇか。俺のミハルとこの切符と、いったいどういう関係があるんだよ？　わかるように説明しやがれ！」

激昂するヴァリーを、ジードは鋭く制した。
「ヴァリー！　そこまでにしておけ」
短いが威圧感のある言葉だった。ヴァリーは不満もあらわにジードを睨みつける。
「ジード、けどよ、そもそもあんたが言ってたことだろ、ミハルが関わってるかもしれねぇってのは。ほかのことはともかく、俺はそれだけは……」
「いいから少し落ち着くんだ。――議官長殿、いま彼が申しましたことは、私自身の疑問でもあります。切符の発行対象については、一応の説明を祖父より聞かされました。イグノディアス神の亡き夫、ウルディノシス神の生まれ変わりであるという証明書のようなものだと。六名いるはずだというその男たちの存在がすべて判明したからこそ、院は発行に踏み切ったのだろう、そう祖父は申しておりました。
ですが――それだけなのでしょうか。六人の生まれ変わりを捜し出したあと、神はいったい我らになにをさせようとお思いなのでしょう？　それに……それに、ミハルは――『撒き餌』として異界から呼び込まれたあの娘は、今後どうなるのです？　このままこちらに留まるのか、それとも元いた国に帰されてしまうのか。院の方々は、きっと詳しい事情をご存知のはず。――それならばどうか、私に、私と同じ運命を負わされた友人に、真実をお与えください」
一息に言い切ると、ジードはじっと前方を見つめた。対する老人もまた、身動ぎもせず静かに相手を見据えている。張り詰めた空気が、ふたたび議場を覆っていく。
ようやく口を開いたのは、議官長の方だった。
「ノルド神官長……イシュレーには損な役回りを押しつけてしまったものだの。思えば前代の依坐、あれと心惹かれあったのもウェス・ハーシュ家の男。そして此度はそなただ、オルグ・ジード。その徴候あればこそ、我らはイシュレーにだけは真実を秘匿せざるを得なかったのだ。そなたら魂の依り子に負わされた宿命を知れば、彼は

おのれの立場すら捨て、我らを阻もうとするに違いないからの」

ジードは眉を寄せた。言われてみれば、この場には祖父の姿はない。のみならず、審議院の十二人目のメンバーであるにも関わらず、彼は折に触れ、院のやり方に対する猜疑心のようなものを覗き見せていた。それは確かだ。

「それはどういう意味なのです、議官長殿？　祖父が知ったらあなた方を阻むに違いない真実とは――」

不吉な響きに、ジードは思わず身を乗り出しかけた。

が、彼が次の言葉を口にするより早く、議場内に「異変」が起こった。

「議官長殿、あれを！　鏡が……『心鏡（しんきょう）』が！」

ひときわ小柄な議官が、血相を変えて怒鳴った。枯れ枝にも似た指先を、真っ直ぐに神像へと――青銅でできたイグノディアス像へと向けている。興奮のあまりか、その指は激しく震えていた。

「おお！　ついに……ついに『心鏡』が共鳴を！」

「この時が来た……ようやくこの時が来たのだ！」

ぱしん！　と乾いた音が響き渡る。細い革紐で壁を打ちつけているかのような、軽く、かつ鋭い音だ。議官たちは感極まった様子で立ち上がり、全員が神像を、いや、正確には神像の胸に抱かれた丸い鏡を注視している。そして、それは来訪者であるジードとヴァリーも同様だった。

「あの鏡……小刻みに震えているぞ。しかも、なにも映していない」

「映してないどころじゃねぇ。――真っ黒だ、まるで墨でもぶちまけたみたいに……そうだ、まるで――」

地獄の底につながってるみたいだ。

ヴァリーの背を、冷たい汗が流れ落ちた。豪胆で知られる彼らしくもなく、肌がざわりと粟立つ。反射的にジードを見ると、予期せず目が合った。ヴァリーは渇いた唇をなんとか動かそうとした。逃

げた方がいいんじゃないのか、そう問い掛けようとした時だ。
「時は満ちた！　召喚の儀を、これより始めようぞ！」
議官長の一声が、その場に響き渡った。

――全界統べたもう唯一神よ、全能なる神、イグノディアスよ。
尊き御力（たっとおんちから）を、いまこそどうか我らに示したまえ――

古代の言葉で綴られた祝詞を、議官長は一心不乱に読み上げ続ける。大学府で神学を修めているジードにさえ聴き取れないほどのスピードだ。一方で、あの奇妙な破裂音は、いまや割れ鐘を思わせるほどの大音声に膨れ上がり、耳を圧迫する。後方からはヴァリーの怒鳴り声がした。
「畜生！　なんなんだ、この扉！　押しても引いてもビクともしやしねぇ。おい、ジード、聞いてんのかよ！」
「――椅子で破るしかないな。そこを退いていろ、ヴァリー」
ジードは冷静に言い放った。一瞬息を呑んだものの、ヴァリーはすぐに引き下がった。この大貴族の青年が見た目どおりのお上品な輩ではないことは、すでに厭というほど思い知っている。
ジードは躊躇いなく椅子の背をつかむと、軽々とそれを振り上げた。
だが――

……ジード……さま……

椅子を手にしたジードの全身が硬直した。か細い、頼りない声だが、確かに聞こえた。彼は椅子を放り出し、天井に向かって叫んでいた。
「ミハル……ミハル！　お前なのか、ミハル！」

ほぼ同時に、ひときわ高い破裂音が鳴り渡る。思わず背を丸め、耳を塞ぐヴァリー。そうして、その直後。

神像が抱く鏡の中心から、黒い靄のようなものがあふれ出した。ぶわぶわと膨れ上がる、意思を持った、禍々しき濁流。それは室内のあらゆる空間に力強く触手を伸ばし、この場に居合わせたすべての人間を飲み込もうとするかのような動きを見せた。議官たちでさえそのいきおいに恐れをなしたのか、及び腰になって目を閉じている者もいる。

だがジードは違った。彼は一歩たりとも後退せず、両眼を見開き、靄に向かって腕を伸ばした。そしてふたたび叫んだ。

「ミハル！　ミハル、私だ！　来てくれ、ここへ、私のもとへ！」

次の瞬間、それは起こった。

徐々に、霧が晴れるようにして薄らいでいく靄の中から、数人の人影が現れたのである。予想もしていない出来事に、ヴァリーは目を剥き、口元を押さえた。よくよく見ると、人影は五人。そのうち四人はどうやら男のようだ。残りの一人は――ヴァリーはあっと声を上げた。

けれども、彼が駆け出すよりもジードの方が一瞬速かった。ジードは、その小柄な人影に向かって走り寄り、遮二無二手を伸ばし、なんども名前を呼んだ。そうするうち、次第に靄が消え、やがて彼女の姿が空間にはっきりと浮かび上がった。ジードはかすれ声で囁いていた。

「……ミハル……」

ふわふわと、重みのない花びらのように、彼女は――未明はそこに浮いていた。中空に横たわり、目を閉じたまま、ゆっくりとジードの広げた腕の中に落ちてきた未明。その様子はあまりに神々しく、あまりに人間離れしていた。そのためか、彼ら二人を遠巻きに見つめる議官たちの誰もが、近寄ることすらできないでいる。

「ミハル……！」

ジードはつぶやき、それきり絶句した。なぜここに、こんな形で彼女が現れたのかはわからない。だが、彼はあらためて自覚した。未明の声を聞いた瞬間に震えた心、その姿を認めると同時に込み上げた熱い想い。触れただけで指先にまで満ちていく温かな気持ち。

――好きだ。

ミハルが、心の底から、好きだ。

心のどこかでわだかまっていた葛藤が解けていくようだった。少なくともいまはなにも考えられなかった。未明を好きだというその気持ちだけが全身を支配する。ジードは、腕の中の最愛の少女をじっと見つめた。意識を失っているのか、それともたんに眠っているだけなのか。と、その薄い瞼がぴくりと揺れた。ジードは思わず息を呑んだ。

「ミハル……ミハル？」

「……ド……様……？」

唇がかすかに震え、ゆっくりと目が開く。そこには、あの宇宙が――ジードが焦がれてやまない、あの不思議な黒い瞳があった。見る者をとらえて離さない、濡れたように輝く漆黒の夜空。

未明は驚いているようだった。自分がどこにいるのかもつかめていないに違いない。ジードとて彼女に訊ねたいことは山ほどある。しかし、いまの彼には、すべてが瑣末事だった。

ジードは微笑んだ。やわらかで穏やかな表情だった。

彼は、未明を抱きかかえたまま、その口もとにそっと唇を寄せた。

ものすごい光に部屋中が包まれて、目を瞑ったところまでは憶えてる。

いきなり庵に現れたカシアンと、彼の知り合いらしいあのお坊さ

んみたいな男の人が激しい言い争いを始めて、あたしたちはなすすべもなくその様子を見守っていたんだ。そのうち、旦那様の制止の声も聞かず、カシアンは相手の男の人を殺そうとして首を絞めにかかった。

そのままだったら、きっとあの男の人、死んでいたに違いないと思う。

でも、そうはならなかった。

一筋の光が空間を切り裂いたかと思うと、あたしはその光に覆われるみたいにして意識を失った。最後に考えたのは、どういうわけなのか、その場にいる誰のことでも、日本にいる家族のことですらなく――そう。ジード様のことだった。

神殿で彼を待つって、あの時約束したのに。いつもいつもあたし、約束を破ってばかりだ。

二度と逢えないかもって思うたび、あたしは後悔ばっかりしてる。そんな風に思って、それから記憶が途切れた。

なのに……どうしてなんだろう。

「ジード様……？」

あたしの目の前には、いま、そのジード様がいる。

それだけじゃない。あたしはどうやら、彼の腕に抱かれてるらしかった。わけがわからなくて、あたしは慌てた。状況はまるで不明だけれど、もしこれが夢じゃなくて現実だというなら、きっとまた面倒をかけてしまったんだ。

だけど、ジード様の反応は思いがけないものだった。

「ミハル」

彼は笑ってくれた。本当に久しぶりに見る、やさしくて穏やかな微笑。

あたしの名前を呼んで、微笑んで、その上……キスしてくれた。

唇が触れ合わさった瞬間、ものすごく温かいものが流れ込んでくるのがわかった。

ジード様の顔が、じわりとぼやける。

このまま時が止まればいい。あたしは心底、そう願った。

「ジード？　お前、なんでここに……いや、ここは――」

聞き慣れた声に、ジードは顔を上げた。そこにいたのはほかでもない、父、オルグ・ヴィネック。いや、彼だけではない。

「なんだ……なんだここは！　オルヌ！　オルヌはどこへ逃げたのだ、あの下郎！」

「生きてる……どうして、なぜだ？　俺はあの時、自決するつもりで短剣を取り出して……」

最大の恋敵であるカシアン、それに異母弟アドリオ。二人はともに状況を理解できていない様子で、困惑と苛立ちもあらわに周囲を見回している。さらには、見たこともない、真っ白な長髪の男まで。

ジードの存在にいち早く気づいたヴィネックが、彼のもとへと駆け寄ってきた。

「お前がいるってことは……もしかしなくても、ここは要塞島か。らしい面子もそろってるみてぇだしな」

十一人の仮面の老人。彼らの装束がなにを示しているのかぐらいは、ヴィネックにもすぐ察しがついた。ジードは肯いた。

「ええ、父上。しかし――これはいったい、どういうことなのです。なぜ父上が……いや、ミハルがあなた方と一緒にここに……」

当然の問いではあったが、それを訊ねたいのはむしろヴィネックの方である。彼は頭を乱暴に掻き毟った。

「そいつを訊きてぇのは俺の方だ。ミハルが俺らと一緒にいる理由は、話すと長くなるんだが――ってアドリオ！　お前、術は解けたのか、その様子だと」

「術？　なんのことだよ、俺は自分で自分の胸を突こうとして……え？　父上がなんで庵（ここ）に……ミハル、ミハルじゃないか、どうして

お前がこんなとこに！」

頭（かぶり）を振ったあと、アドリオは血相を変えて叫んだ。そもそもすべては未明のために起こした行動だった。聖山の隠者に単独で会いに行った挙句、罠に嵌まったのも、ひとえに未明を故郷に帰すため。だというのに、肝心の未明は、自分ではなくジードの腕に抱かれている。――またしても、とアドリオは唇を噛んでいた。

だが、筋違いとも言える恨み言をアドリオが口にする前に、咆哮にも似た怒鳴り声がふたたび響き渡った。

「オルヌ！　どこへ消えた、出てこないか！　この私が息の根を止めてくれる！」

カシアンだった。彼は、鎖を解かれた猛獣さながらの唸り声を上げながら、そう広いとも言えない議場の中をやみくもに歩き回った。その姿に、数人の議官たちの間から、怯えたような悲鳴が漏れる。

彼を止めたのは、老人たちの長が放つ、この一声だった。

「魂の寄り子よ。依坐の娘を含めお前たち七人以外の存在など、この場にいることは赦されぬ。誰を捜しているのかは知らぬが、無駄な試みじゃな」

静かだが威圧感のある言葉に、さしものカシアンですら言い返すこともできず、その緑灰色の両目を見開いた。

全員の視線が集中する中、議官長はゆっくりと一人の人物を――白のローブをまとった長身の男を見た。

「……久しぶりじゃのう、シス・イグニオス（神への供物）よ。フェロキオンからそなたが消えて、もう十年以上が経つ。ようやく、ようやくこの時を迎えられたのじゃ。『暁の経典（エリグザード）』に書かれているとおりじゃろうて。そう――さだめには逆らうことはできぬ、そなたもこれでわかったであろう」

壁際にもたれ掛かるようにして立っていたその男、テオルーグの瞳が、ほんの一瞬、殺意を帯びたようだった。

「その名で私を呼ぶな。貴様らとも、あの邪神とも、私は無関係だ。さだめなど……貴様らの勝手に決めた運命など、知ったことか」

召喚の儀によって集められた七人の背負う「さだめ」。
その真の意味が、いままさに暴かれようとしていた――。

## 第五十一話　召喚の儀（後書き）

ここで第三部終了。次話からは最終章に突入します。

# 第一話　終焉の始まり

ジードが、カシアンが、アドリオが、ヴァリーが、ヴィネックが、そしてテオルーグが。ジードの腕に抱かれたままの未明が。

彼ら全員が注視する中、審議院を統べるこの仮面の老人は、ふたたびおごそかに語り始めた。

「そも、我ら審議院とは、世のありようを正しく導くために創られた機関なのじゃ。おかしなことに、『いつ』『誰が』組織として立ち上げたのか、正確に知る者はおらぬがの」

数百年前まで、全世界を統治していたのは、魅了の力を持つ全能神ウルディノシス。彼はその妻イグノディアスとともに、世界中の人間をその足下にひれ伏させ、また同時に心からの信仰を浴びていた。

「かの神はあらゆる者に愛されるお方。先ほども申したが、そうした状況では諍いなど起きるはずもない。世界は平和そのものだった……なにしろ、考えを他人と異にするという事態が、そもそもあり得ぬのだから」

ヴィネックの眉がぴくりと動いた。恍惚とした表情をすら浮かべて語り続ける審議長の口調に、どこか不穏なものを感じ取ったからである。

「しかしながら、そんな世もある時唐突に終わりを告げることになる。ウルディノシス神は妻たる神によって屠られ、亡神として歴史から姿を消してしまわれた。――争いの種が世界中に蒔かれたのは、それからじゃ」

単一だったはずの国家には無数の亀裂が入り、また同時にさまざまな人種が生まれ、世界中に散っていった。比較的大きな国から小規模の離島国家まで、その数を正確に把握している者はまずいまい。

「辺境には、かつて全人類の間で使われていた言語すら――大陸共（イーザ）通語（リア）

通語すら通じぬ蛮国さえもあると聞く。異なる言葉は、容易に諍いを引き起こす……そうしてこの世は迷い乱れていったのじゃ」

嘆かわしい、と言わんばかりに首を振る審議長。そこに、別の老人が口を挟んだ。

「かろうじて言語は通じるものの、神の棲まわぬ気枯(けが)れた地も中にはあるそうですな。そう――このゼーレンディアのすぐ近辺にも」

その視線は、仮面越しにでもわかるほど、あからさまにヴァリーへと向けられていた。

「なんだ、そりゃあ俺の……エンザンテのことかよ、じいさん」

憤りに満ちたヴァリーのせりふを、対する老人は鼻で哂って受け流す。

「いかにも。我がゼーレンディアは古よりイグノディアス神に愛された地。引き換えそなたの国、あの田舎国家は、神代(かみよ)の頃にすら守護となる存在が寄りつきもせぬ、不毛な気枯れ地じゃ。だからこそ内乱も絶えず、怪しげな輩の跋扈を赦しておるのだろう」

複雑な想いはあるにせよ、エンザンテで生まれ育ったヴァリーとしては捨て置けない言い草だった。頭に血が上り、思わず駆け出そうとした時だった。

「内政不安の理由を神の不在に求めるのはどうかと思うがね。あなた方にしてみりゃ、エンザンテは神の徳を触れ回るのに都合のいいサンプルなのかもしれないが。――で？　いい加減、本題に入ってくれないか。胡散臭い術まで使って俺たちをこんなとこにかき集めたその真意は、いったいなんなんだよ」

静かだが迫力ある一声――オルグ・ヴィネックのその言葉に、審議長を除く十人の老人たちは例外なく押し黙った。応じたのはやはり、審議長だ。

「そなたらをこの場に呼び寄せたのは、すべて神のお導きによるもの。魂の依り子と依坐の娘、さだめを負った七名の人の子よ。

そなたらには、ウルディノシス神を復活させるため、ひいてはこの世を絶えることなき栄耀に導くために、死んでもらわねばならぬ」

かつて全世界を統治していた神、ウルディノシスを復活させるために、死んでもらう。

白い仮面を身につけたおじいさんらしきその人は、あたしたちを前にあっさりとそんなことを言い放った。

あたしたちは一様にぽかんとして、言葉を失った。相手がなにを言っているのか、まるで理解できない。だって、そりゃそうだ――死んでもらうって、つまり、あれなの？　よく古いアクション映画なんかである、生け贄になれってやつ？　……あたしたちに？

「ある程度予測はしてたつもりだが……まさかそこまでぶっ飛んだことを言われるとはな。つうか、いくら偉ぇ神様のためっつっても、七人は多すぎじゃねぇ？」

旦那様の呆れたような声が聞こえてきた。いや、ていうか、そこじゃないでしょ。

旦那様は、手近にあった椅子を乱暴に引くと、一人だけどっかりと腰を下ろした。それからこう続けた。

「まぁ、ただの贄ってわけじゃあなさそうだけどな。これだけまだるっこしいことをやってまで俺たち七人をそろえなけりゃならなかった理由が、あんたらにはあるんだろ。たとえばこいつも――」

そう言いながら、旦那様は上着の内側に手を入れ、くしゃくしゃになった浅葱色の紙切れを取り出した。あたしは目を丸くした。あれは、確か、ヴァリーの家で……というよりもマージュオン港でのトラブルの元凶になった――。

「そのための布石……文字どおりの『切符』だったってわけか。は、ありがたくもねぇな」

旦那様の指先から、その紙切れはひらひらと床に舞い落ちた。次の瞬間。

「きゃ……っ」

思わず悲鳴を上げていた。同時に、あたしを抱くジード様の腕が、ぎくりと硬直するのがわかった。

ジード様の着ている薄い緑色の上着、その左胸部分が、ぼうっと青白く光り出したのである。しかもそれは彼に限ったことじゃなく、その場にいる全員――アドリオ様も、カシアンも、そしてヴァリーも同じ現象に見舞われていた。アドリオ様のまとっているマントが跳ね上がり、左胸の辺りが着火したみたいに妖しく輝いている。カシアンも同様で、ベージュのガウンがぽっと光に包まれたかと思うと、じきにそれはゆらゆらと身体から離れ、空中に昇っていった。あたしたちみんなが固唾を呑んで見守る中、ついさっき旦那様が床に投げ捨てたものも含め、五人分のその光は火の玉となって燃え上がり、やがて「消滅」した。

呆然とするあたしの耳に、こんな嗄(しゃが)れ声がぼんやり響いた。

「おお……『天上の切符』がその役目を全うする瞬間に立ち会えるとは。なんという僥倖！」

「『心鏡』のお導きはやはり正しかったのだ。これで……これでかの神は戻ってこられる！　我らの前に、ふたたび！」

あたしたちをそっちのけで騒ぎ出す仮面の老人たち。言葉すら出てこないあたしを、ジード様は落ち着かせようとしてくれたのか、その腕にぎゅっと力がこもったみたいだった。

「つまり、ウルディノシス神の生まれ変わりたる私たちを、同時にこの場に呼び寄せるための呪具。……それが、一般には免罪符として信じられてきたあの切符の正体だったというわけか」

ジード様の冷ややかな言葉に返ってきたのは、なぜか満足そうなこんなせりふだった。

「いかにもそのとおりじゃ、オルグ・ジードよ。この切符の持つ真(まこと)の性質については、そなたらには隠しておくしかなかった……尊(たっと)き神の御ためとはいえ、若き身空で命を終えねばならぬこともまた真実。むごいことだと、我らとて思わぬわけではない。その事実を知れば、どうにかしてさだめから逃れようと、無為な画策を巡す者も

あるいは出てこよう。だからこそ我らは、大学府を監督するワンジオにさえ、はっきりとは知らしめておらなんだ」

その名前を聞いて、ジード様の顔色がさっと変わった。

「ことにあれはそなたを可愛がっておるからの。情にほだされ、よけいな入れ知恵をせぬとも限らぬ、そう危惧しておったが……」

「――だからあの時、大学府長はああいう回答をなさったのか。うすうす真実に感づいてはおられたのかもしれないが、院の方々と懇意である上にその立場上、あれ以上のことを教えるわけにはいかないと。しかし、祖父上ならと……それで私に……」

ジード様の眉間に、深いしわが寄った。会話の内容は全然わからなかったけれど、ジード様がひどく複雑な想いに苦しんでるような気がして、胸が痛くなった。感謝しているような、逆に恨んでいるような、一言ではとても言い尽くせない、そんな表情だったから。

「ちょっと待てよ。ってことは、大学府ってのは、切符発行の対象者をあらかじめ絞り込んで入府させてるってことなのか？」

旦那様の問いかけに答えたのは、また別のおじいさんだった（多分、この場にそろってる十一人って、みんな老人なんだろう。確証はないけれど）。

「そういうわけではない。ただ、過去にも寡聞ではあるが、依り子らしき男が出現したという記録は残っているのだ。それらはみな、どういうわけか、比較的すぐれた血筋の者であることが多くてな。またイグノディアス神はその……男女の情交については潔癖なお方だからして、無用な穢れを避けるためにも、大学府というものを設立したのだ。規律を厳しく設けておけば、若年の集う場所であっても間違いも起きにくかろうて」

旦那様の腰が、椅子から浮き上がっている。彼はあんぐり口を開け、呆れ返ったようにこう言い捨てた。

「な……なんだと？　そんじゃなにか、俺らがひたすら禁欲生活を強いられたのも、ぜんっぶウルディノシスの生まれ変わりが混じってるかもしれねぇって疑いのせいなのかよ！　あり得ねぇだろ、二

十三までだぞ！？　そんなバカげた理由のために――」

「不敬な！　神聖なる全能神に対し、なんという口の利きようだ！」

「魂の依り子とはいえ、あまりに分をわきまえぬ……これが我が国きっての名門の当主とは、まったく実に嘆かわしい」

たちまち巻き起こる怒声にも、旦那様はまるで怯まない。ものすごいしかめっ面で頭を掻き毟りながら、なおも「冗談じゃねぇっつうの。四年の間、俺がどんな思いで耐えたと思ってんだ、入府前にも……いや、卒府寸前のあん時だって……」とか、ぶつぶつ言い続けている。

にわかに騒がしくなった空気を、氷点下を思わせるほど冷徹な一声が切り裂いたのは、そんな時だった。

「くだらぬ茶番もたいがいにしておけ。――ほかの連中の処遇などはどうでもいい。だが私は、断じて貴様らの思惑どおりにはならん。贄になど、誰がなってやるものか」

壁際にもたれるようにしてじっと様子を覗(うかが)っていたらしい、テオだ。その途端、十一人の老人たちの射抜くような視線が、ざっと彼に集中するのがわかった。

でも、当のテオの方は、群青の瞳に燃え盛る炎を点して、相手を――老人たちを睨みつけている。

「自らのさだめを受け入れるがいい、シス・イグニオスよ。『暁の経典』にはすべてが記されていたはずじゃ。あれはただの経本ではない、そなたにしか読めぬ、そなたしか導かぬ書物。さればこそ、切符を持たぬそなたさえ、心鏡はこうして我らの元にそなたを呼び寄せたのじゃからの」

テオに対峙する、多分いちばん偉いんだろうおじいさんの言葉に、テオはどこか皮肉な笑みを浮かべた。

「私のさだめは私自身が決める。貴様らにこれ以上、いいように弄ばれてたまるものか」

そう言うなり、彼は両の手のひらを胸の前で複雑な形に組み合わせた。そして、かすかに唇を動かす。ほぼ間を置かず、その足下に、

小さなつむじ風のようなものが巻き起こった。――ここから逃げようとしているんだ。あたしだけじゃなく全員がそのことに気づいたみたいで、老人たちが慌てたように動き出す気配があった。

けれど、そうはいかなかった。

「やむを得ぬな。神器を、『空踊琴（くうようきん）』をこれへ！」

鋭い一声とともに、木が軋むみたいな大きな音が、どこかで鳴った。

続いて、白く眩（まばゆ）い光が、あたしたちの頭上に現れる。靄のような輪郭の中から、やがて、くすんだ色の木の箱（にしか見えない）がぼんやりと姿を見せた。B五版のノートパソコンぐらいの大きさで、凹凸もほとんどない、ひどく殺風景な出で立ちだ。

ふわふわ宙に浮かぶそれは、あたしたちを――ううん、あたしを真っ直ぐに見下ろしていた。まるで、命を持つ生きものかなにかのように。そう思った瞬間、あたしの背筋を、ものすごい悪寒が走り抜けた。逃げなきゃ。一刻も早く、ここから、みんなで。でないと、そうしないと、きっと大変なことになってしまう。

そして、その直感は、決して外れることはなかったのである。

## 第一話　終焉の始まり（後書き）

ごごごご誤字じゃない誤ルビがっ！！
こっそり訂正しておきましたが……恥ずかしい……（死

# 第二話　女神降臨

天井近く、中空にゆらゆらと浮かぶ、くすんだ色の平たい木箱。よく見ると、両端には銀色の、細いアンテナのようなものが一本ずつついている。――とてつもないほどの厭な予感に襲われ、あたしの全身が総毛立った。

「『空踊琴（くうようきん）』が議長殿の声に応じるとは……ウルディノシス神復活の時はすぐそこまで迫っておる！」

「その娘、依坐の娘をこちらへ、早う！　早う！」

狂気じみた声と同時に、仮面をつけたおじいさんの何人かがあたしの方へと手を伸ばしてきた。「ひっ」あまりのおぞましさにあたしは短い悲鳴を上げ、ジード様に必死でしがみついていた。

「ミハルに近づくな！　――父上、ここを出ましょう。院の方たちはもう……」

狂っている。ジード様は無言で、けれどそう続けたに違いなかった。彼はあたしを抱く腕に痛いくらいの力を込め、じりじりと退がり始めた。

「ああ、むろん、こんなとこにこれ以上の長居は無用だ。おい、アドリオ、カシアン！　ぼうっとしてねぇで、ちゃんとついてこいよ！」

旦那様が怒鳴るのを合図に、アドリオ様やカシアンははっと我に返ったらしかった。立て続けに起こるめちゃくちゃな出来事に、誰も彼もが肝を潰されている。ただ一人だけなぜだか冷静だった、テオを除いて。

「急げ！　娘をとらえるのだ、シス・イグニオスが逃げてしまうぞ！」

「召喚の機はいちどしか与えられぬ。『暁の経典』をもってしてもやつを喚び寄せることはこれ以後できぬのだ、早う娘をここへ！」

テオの足下に生まれた小さな竜巻が、ゆっくりと彼の姿をけぶらせていく。いよいよ血相を変えた老人たちが、雪崩をうってあたしにつかみかかる。思わず閉じかけた視界の端に、駆けてくるアドリオ様やカシアン、それにヴァリーが映った。

その時だった。あたしの頭の天辺らへんで、誰かがこう言ったのは。

――やれやれ、騒々しい。人界というのはよくよく落ち着かぬ場所であることよ。

嘆息混じりの、けれどあくまで凛とした、どことなく中性的と言ってもいいような声に、あたしは言葉を失くした。

だって、間違いなく聞き覚えのある声だったからだ。

そう、確か、あの時もジード様の腕に抱かれていて――ううん、違う。はじめてこの声を聞いたのは、確か、確か――

――理に背く以上、お前は贖い(あがな)をせねばならぬ。だからこそ恋しい相手すら思い出せぬよう記憶を預かり、異界からの道をふたたび渡らせた。

そしてなによりも、さだめを受け入れることを承知したはずだ。

それがお前と交わした契約だったな。

さだめ。失わなければならないもの。耐えなければいけないこと。

……さだめ。

――ジード様を生き返らせるかわりに、あたしがしなければならないこと――

その瞬間、すべてがあたしの中で蘇った。

仮面の老人たちの、枯れ枝にも似た指先が未明に触れるまさに寸前だった。ジードの腕が、一瞬にして軽くなったのである。

「ミ……ミハル！」

彼の両腕はすでに空っぽだった。掻き抱いていたはずの少女の姿は、どこにもない。ジードは狼狽もあらわに叫んでいた。なにしろ、こうした事態は初めてではないからだ。

「ミハル！　ミハル、どこに……」

焦るジードの耳に、異母弟アドリオの驚愕に満ちた一声が飛び込んだ。

「ミハル！」

弾かれたように顔を上げたジードは、その美しい緑碧の双眸を限界まで見開いた。

未明はそこにいた。部屋の前方中央に設えられた丸い祭壇の上、鈍い輝きを放つイグノディアス神像を後ろに従えるようにして。先ほどどこからともなく現れたあの怪しげな箱を前に、薄い金色の羽のような光をまとい、この場に集う人々を静かに見下ろしている。その視線は妙に平らかで、誰をも等しくとらえているように見えた。

「ミハル、ミハル！」

必死で呼ぶも、彼女には届かないようだった。未明は、ジードがこれまで見たこともないようなたおやかな微笑みを口元に浮かべていた。そう――その様子はまさしく女神そのものだった。

――見たこともない？　いや……あの表情には見覚えがある。そうだ、ウェス・ゴート邸に囚われていたミハルを助けに行った時だ。あの時も彼女はあんな風に微笑んで私を見て……それからどこへともなく消えてしまったんだ。

ぐらりと傾いだ身体をとっさに支えたのは彼の父、ヴィネックだ。だがヴィネックもまた、襲い来る不吉な予感に言葉すら発せずにいた。踏んできた場数の多さから、直感の告げる警告（シグナル）の正確さには自負がある。

「ミハル！」

そんな彼の脇をすり抜けるようにして駆け出したのはカシアンだ。そして、カシアンに一歩遅れてアドリオが続く。彼らのあとを追おうとしたジードの肩を、強い力が押さえつけた。ヴィネックだった。

「父上、離してください、ミハルが――」

「黙ってろ。あれはミハルじゃねぇ、わからねぇのか？」

「な……」

言い返そうとした時、カシアンの悲鳴が部屋中に響き渡った。彼の行く手を阻もうとする老人たちを突き飛ばし、未明の腕に触れようとした途端、雷（いかづち）にも似た衝撃が発生し、彼を文字どおり打ちのめしたのである。

「アァァァッ！」

仰向けに倒れたカシアンを、未明は置物でも眺めるみたいな目つきで一瞥した。そのさまに、一呼吸遅れて駆け寄ってきたアドリオの背筋が凍りつく。こんな彼女は知らない。ウェス・ハーシュ邸で出会ってから今日まで、こんなになんの表情もない未明など、見たことはない。

静まり返った空気の中、口を開いたのは、誰あろうその未明本人だった。

「依り子とはいえ、我には興味もない人界の男。身の程をわきまえるがいい」

冷え冷えとした声は、だがまぎれもなく未明のものだ。一部始終を目の当たりにしていたジードの額を、一筋の汗が流れ落ちていく。

「ミハル……」

ジードは呆然とつぶやいた。父、ヴィネックの言うとおり、あれ

は確かに彼の知っている未明ではない。あの、潤みがちな黒い瞳にはにかみの見え隠れする、彼の愛してやまない少女ではない。

「イグノディア神が降臨なされたのか！　では、『空踊琴』の調律は、うまくいったのだな！」

「七人がそろうという前例なき事態に加え、なにしろ伝説の神器だからの。だが安堵するには早いぞ、まだ我らの本懐には至っておらぬ」

ヴィネックの隣に佇み、事態を見守っていたヴァリーの耳が、聞き覚えのあるせりふに反応し、ぴくりと動いた。――「神器」？　調律だと？　彼は恐ろしいいきおいで壁際に突進すると、そのせりふを発したと思われる老人の胸座を締め上げた。そして、か細い悲鳴には一切かまわずに問い詰める。

「おい、ジジィ！　神器だの調律だのって、そりゃなんのことだ。てめぇらミハルになにをさせようと企んでやがる？　あいつはいったい、どうなっちまったんだよ。あんなのは俺のミハルじゃねぇぞ！」

「ひ、ひぃ……」

「これからなにが――いったいなにが起きようとしてんだ！　答えろ、ジジィ！」

老人の足が宙に浮きかける。泡を喰ったのか、そばにいたもう一人の方が、慌ててこう言った。

「おち、落ち着かぬか！　そなたも見ればわかるだろうて、あの娘、イグノディア神を身内に宿したのだ。女神の『気』と同調してはじめて、神器は……『空踊琴』はその音を奏でることができるのだからな。ほれ、そう言っている間にも――」

指された指先を、ヴァリーはつられて追った。そして、絶句した。

「ミ……」

つやのあるこげ茶混じりの黒髪が。宇宙を孕んだ漆黒の瞳が。シミひとつない、健康的な白い肌が。

ゆっくりと、変化を始めていた。

浅葱色の髪に、ぽっかりと黒い、闇そのものの双眸。肌は白を通り越し、ほとんど半透明にすら見える。神話教育を受けていないヴァリーにはぴんと来なかったが、その姿が誰を表しているかは明白だ。

「イグノディアス神……神聖なる女神よ……！」

十一人の老人たちが、次々にひれ伏していく。そんな彼らを前にしても、未明の顔つきは平常そのものだ。

やがて細い両腕が天に向かって伸ばされ、なにか指揮棒でも振るような不規則な動きを繰り返すうち、どこからともなく不思議な音楽が聴こえてきた。

朗詠のような、弦楽のような、あるいは地鳴りのような――旋律すらない、それはひどく変わった音色だった。ずっと聴いていたい、そう思う一方で、いますぐにでも耳を塞ぎたくなる。心をかき乱す、耳障りでそれでいて心地のよい、気が触れてしまいそうな――

「天上の音楽じゃ……これこそ、ウルディノシス神にふさわしい、至上の神曲じゃ」

「だめだ、みんな、聴くな！　聴くんじゃねぇ、この音は――」

審議長が恍惚とつぶやくのと、ヴィネックが苦しげに叫ぶのとはほぼ同時だった。ひどい眩暈を感じて膝を折るヴィネック。音に細工でもしてあるのか、聴いているだけで身体中の力が抜けていく。そして、それはヴィネックに限ったことではなかった。

ジードをはじめ、アドリオも、床の上に打ち倒されてなお起き上がったばかりのカシアンも、ヴァリーも。そして逃走の態勢に入っていたテオルーグさえも、この場に召喚された六人の男たち全員が、ふらつき、順々に崩折れていった。奇妙な「唄」以外はなにも響かぬ室内に、死屍累々と転がる六つの肉体。それを見た未明の口元に、満足げな笑みが浮かんだ。ここに至って彼女は手の動きを止め、凛然と言い放った。

「我が夫（つま）、ウルディノシスよ！　六つなる依り子の身魂（しんこん）、そなたに

捧げようぞ！
復活を……いまいちど、我の許に現れ出でよ！」

ジード、ヴィネック、アドリオ、カシアン、ヴァリー、そしてテオルーグ。
六人は、この日、死を迎えた。
彼らの負う宿命の示すままに――。

# 第三話　復活劇

ちょうどあたしの胸元辺りの位置に浮かぶその箱を、あたしは静かに見つめていた。それがなにを為すためのものなのか、もう、誰に説明されなくてもわかっていた。

この世でもっとも麗しい神様を復活させるのに必要な「装置」。それを弾きこなせるのは、すなわち、あたしだけ。

頭の中で、「声」があたしを促している。あたしは肯き、すっと腕を上げた。突き出した二本のアンテナが、その突端がわずかに光っている。空気をかき混ぜるみたいにして不規則に動かすうち、やがて、「音」が聴こえ始めた。男声とも女声ともつかない唸り声じみた不気味な音――もうずいぶん以前にテレビの音楽番組で観た、テルミンの音色にそれはどこか似ていた。

――「空踊琴」は神界と人界をつなぐ神器。これの奏でる音のみが、依り子の肉体から魂を抜き去り、集成させることができるのだ。むろん、誰もが操れるわけではない。異界から喚び込んだ依坐の娘が、さだめを受け入れてはじめて可能になる業。先代の娘は期待はずれだったが、どうやらお前は役目を果たせそうだな。

「声」が――女神が満足げに囁いている。その一方で、どこからともなく流れてきた記憶の洪水が、あたしの全身を襲い、容赦なく飲み込んでいく。なにもかも、いまならはっきりと思い出せる。

半年と少し前の夏、帰省しようとして乗ったごく普通の電車。四人掛けのボックス席の片隅で居眠りをして、目が覚めた時にはすでに、このおかしな世界に迷い込んでいた。パニックになるあたしを引き取りに現れたのがあの人だった。灰色の髪に翡翠めいた瞳の、まるで王子様みたいな男の人。言葉もろくに通じないのに、あたし

はいつの間にか、彼に惹かれていった。恋愛経験が少ないせいで、ちゃんと自覚することさえできなかったけれど。

そうしてあの日、トラブルに巻き込まれて軟禁されたあたしを助けにきてくれた彼は、あたしのせいで死――死んでしまって――

「ジード……様……！」

とてつもなく硬いもので、頭を殴られた気がした。叫んだはずの言葉は、なぜだか声にさえなっていなかった。

手の動きを止めたあたしの目の前に、思い出したばかりの大切な人が倒れている。彼だけじゃない――こっちの世界に来て知り合った、あたしの恩人や友達が、壊れたマネキンみたいに力なく横たわっていた。アドリオ様も、カシアンも、ヴァリーも、旦那様も、それに逃げようとしていたはずのテオまでが。みんなの顔色は真っ白で、閉じられた瞼には血の気がまるでない。息を……息をしていないってことが、一目でわかるほどに。

彼らは、全員、死んでしまったんだ。

彼らの命を奪ったのは――あたしだ。

依坐として装置を操り、みんなの肉体を死に追いやった。神様の復活のために、六つの魂が必要だから、そんなつまらない、ちっぽけな理由で。

あたしが、みんなを、殺した。

命を失い、物体と化した六つの死体を前に、十一人の議官たちは感極まった様子でひれ伏した。ややあって顔を上げたのは、組織を束ねる存在、いちばんの古参でもある審議長だった。

「悲願達成の時を、おのが代に迎えられるとは……『心鏡』のお告げはやはりすべて正しかった。依坐の娘がこの世に出現してからの

動きは、口伝にて伝え聞いたとおりじゃ」

ウルディノシス神の生まれ変わりとしてその魂を分かつ、六人の人間の男。彼らについての情報をもたらしてくれたのも、「空踊琴」と並ぶもうひとつの神器である「心鏡」だ。異界の娘との物理的な接触が果たされた時、依り子のさだめを負った者なら、魂が覚醒する。そうして必ず、娘に恋をするのだと。

「先代の娘は、その点で役目を果たせなんだ。接触したのはシス・イグニオスを含めたったの二人、その上おのれの宿命を察知したのか、こちらの世で生きることを最終的に放棄したのじゃな。いずれ自分の生んだ息子すら、依り子として手にかけねばならない、あの時点でそこまで気づいていたのかどうかはいまとなってはわからぬが」

魂の依り子は、長ずれば必ず依坐に惚れてしまう。それが実の母であってもだ。

「さだめは蹴ることも可能なのだ。我がこの娘に問うたようにな。――だがこの娘は、みずからの意思でさだめを受け入れている。恋しい男を生き返らせるため、自分にできることならなんでもすると、我に誓ったのだから」

未明の声ではない、中性的で冷ややかな女の声が返ってきた。思わぬ事態に、驚き慌てる老人たち。まさか、この土壇場に来て、イグノディアス神と依坐とは解離してしまったのか？

が、それはどうやら杞憂だったらしい。

「騒ぐな。……この娘、あまりに不安定で、さすがの我も同化し切れぬ。先代とは手合いが違っているようなのでな。だがすでに、我が夫（つま）、ウルディノシスは蘇りつつあるぞ。――見よ」

老人たちの間からどよめきの声が上がる。そして、彼ら全員が見守る前で、次なる奇蹟が起きようとしていた。

冷たい床の上に転がっていた六つの肉体――その一体一体から、燐火（りんか）にも似た輝きを放つ青白い光がぼうっとにじみ出したのである。いや、それはまさしく人魂と呼んでいいのだろう。ゆらゆらと、かい

すかな空気の流れに煽られるようにして、それら六つの光は、真っ直ぐ中空に昇っていった。誰もが固唾を呑んで、その様子に魅入っている。やがて、光は互いに溶け合い、ひとつの大きな塊に変化した。

「あ……ああ……っ！」

あまりの眩さに目も開けていられない。老人たちは顔を覆い、みな一様に苦しげに呻いた。

そんな彼らの頭上から、唐突に、こんな言葉が降ってきた。

「……やっとこの世に戻ってこれたかと思えば、迎えてくれるのがあなたたちみたいな枯れた年寄りなんてね。もう少し、気を利かせてほしいところだなぁ」

世界最初の生命にして魅了と統治の神、ウルディノシスが、そこに立っていた。

人間でいうなら二十代後半――背中まで垂らされた銀糸のような髪に、深い森を思わせる、青味がかった濃緑の瞳。細面の顔は華奢なようでいてどこか男性的で、上がった口角には、慈悲ともつかぬ得たいの知れない微笑が浮かんでいる。薄絹の衣に、蔦を編んでこしらえた腰紐という出で立ちは、どこからどう見ても神話に描かれる万能神そのものだ。

「う……ウルディノシス神……！」

閉じていた目をようやく開けた十一人の老人たちは、そう口々に呻いたきり、例外なく絶句した。眼前に神が、最高神が佇んでいるという事実を、いまさらながらどう受け止めるのがふさわしいのか苦慮しているようでもあった。

しかし、当のウルディノシスの方はといえば、そうした「民」の

困惑など意にも介さぬ様子である。彼はけだるげに肩を鳴らし、神とも思えぬ砕けた口調で独りごちた。

「久々の実体だから、身体中が凝って仕方がないよ。ああ――それにしても長かったなぁ。退屈で退屈で死ぬかと思った」

そうやって一渡り身体をほぐしたあと、ふと気づいたようにつぶやく。

「……イギー？　そこにいるんだね。ぼくはもう怒っていないから、出ておいでよ」

妙に醒めた、それでいて苦笑をこらえてでもいるような、つかみどころのない声色だ。呼びかけられた本人、イグノディアスの姿が、未明から剥がれるようにして現れる。高圧的な女神らしくもなく、その真っ黒な両目はかすかに潤んでいるようだった。

「我が夫ウルディノシス……待ちわびたぞ。どれほど我がそなたの復活を願ったか、そなたにはわかるまいな」

「女心っていうのは理解不能だ。ぼくを殺したのはイギー、君だろう？　ぼくはぼくなりに君を可愛がっていたっていうのに」

美しい顔に、皮肉っぽい冷笑がちらりと浮かぶ。イグノディアスが口を開けるより先に、彼は続けた。

「――でも、感謝してるよ。君がいなければぼくはずっと眠ったままだった。それに……」

ウルディノシスの視線が、女神の真隣に無表情のまま立ち尽くす、彼にとっては見知らぬ娘の上で止まる。異界からの迷い子だと、すぐにわかった。長い黒髪も、神々さえも持ち得ぬ夜闇のような瞳も、この世界では異質のもの。ずっとずっと昔、ウルディノシスが一目で恋に落ちた、あの人間の娘に彼女はよく似ている。

「その子が、ぼくの魂を集めてくれたのか。――名前は？」

「名など知らぬ。この娘の役割はすでに終わったのだ。ウルディノシス、さあ――」

苛立ちとともに伸ばされた手を、ウルディノシスはすげなく払った。イグノディアスの表情が、瞬時に強張る。けれど、「夫」の眼

中には、どうやら彼女の存在など欠片もないらしい。
ウルディノシスの白い手が、娘の頬にそっと触れた。彼は目を細め、やさしく囁いた。
「名前を言ってごらん。ぼくはウルディノシス、君の……恋人だ」
娘の反応はない。彼女はただじっとどこか一点を見つめている。それでもウルディノシスはあきらめない。彼は腰を屈め、娘の口元におのれの唇をゆっくりと近づけた。
しかし、重なり合う寸前だった。

――ミハルに触れるな！

ウルディノシスの脳裏で、怒声が弾け、響き渡った。神である彼でさえ怯むほどの、それは聞いたこともない、恐ろしい声だった。
彼は思わず娘から手を離し、まじまじと相手を見つめていた。
「……ミハル？　それがこの子の名前なのか。そしていまのは……」
ぼくの中にいる、依り子の一人ってわけか。胸中で独りごちながら、ウルディノシスはおかしそうに背を丸め、やがて大声で笑い出した。それから、彼はおもむろに背後を振り返った。そこに転がる六つの死体を――いや、灰色の髪の美しい青年を、揶揄のこもった眼差しで眺め、こう言い捨てた。
「死んだっていうのに、なんてしぶとさだ。よほど未練が残ってるんだなぁ、この子に！
でも、その気持ちはわからないでもないよ。――ぼくも気に入ったんだ、ミハルをね」

# 第四話　独壇場

ウルディノシスは、新しい依坐（ヨリマシ）であるこの異界の娘を、あらためてじっくりと眺め回した。

ところどころに焦げ茶の混じる長い黒髪。夜空のように澄んだ、黒く美しい瞳。白いワンピースドレスをまとった華奢な身体全体には、幼いようなそうでもないような、どこか危うい雰囲気が漂っている。それは、彼がかつて愛した人界の少女とも重なる特徴だ。――ウルディノシスの口元に、かすかな笑みが浮かんだ。

「ミハル。……ミハル、ぼくを見て。これから君は、ぼくと二人で暮らすんだ。いつまでも、ずっと一緒に」

「ウルディノシス……うれしい……」

熱っぽい囁きが聞こえ、ウルディノシスははっとした。おそらく、娘の身内に、イグノディアスがふたたび宿っているのだろう。そして同時に、元妻たる女神の思惑もまた彼には読めた。

世界樹の精霊として生命を操る力を持つイグノディアス。みずからの姿を実体化することも、不可能なわけではない。だが彼女がそうしようとしない理由は、ひとえに、先ほどのウルディノシス（ウルディノシス）のつれない仕打ちにあるのだろう。いまの段階では、夫は自分にさほど興味を示してはくれまい――ずっとずっと昔、人間の女にうつつを抜かしていた時のように。

だからこそ、無理に夫の関心を惹こうとはせず、異界から喚び込んだこの娘の精神に取りつき、同化することで相手に愛されようとしているのだ。その必死さにウルディノシスは苦笑した。

――イギー、君、そんなにぼくが好きなの？　なら勝手にすればいい。ミハルの中から、ぼくがミハルを可愛がる様子を、存分に見ているといいよ。

ウルディノシスはゆっくりと両腕を伸ばし、眼前に佇む頼りなげな娘を抱き寄せた。白地に紅の花を散らしたドレスの裾が、空気を含んでふわりと揺れる。その可憐なさまに、ウルディノシスは思わず目を細めた。

未明もまた、抱きしめられるまま、その細い腕をウルディノシスの背に回している。そうして頬を押しつけ、うっとりと瞳を閉じる。いとおしさに似た感情が、ウルディノシスの心を満たしていく。

「ミハル……ぼくのミハル……」

やさしく名前を呼び、娘の頬に手を添えると、彼は今度こそ口づけをしようとして顔を近づけた。依り子がどれほど反発しようとかまわない。元々、自分を復活させるために喚ばれた娘なのだから。

だが、その時だった。

「――厭……厭……！」

ウルディノシスの動きが止まる。聞こえてきた小さな声はまぎれもなくこの娘のものだ。そう――彼女は、微笑みながら、泣いていたのである。

あたしが殺した。

この世界に来て知り合った大事な人たちの命を、あたしが奪った。

そう思った瞬間、目の前から光が消えていった。どんどん暗くなっていく視界。どこか地の底にでも引きずり込まれるような感覚に襲われ、同時に、両脚から力が抜けていく。そのまま死んでしまえればどんなによかっただろう。

なのに、あたしは生きている。

あたしの目の前には、見たこともない、きれいな顔の男の人が立っていた。すらりと細身で、とても背が高くて、薄いクリーム色のチュニックみたいなものを着ていて……格好もだけど、銀色の長い

髪といい、透けて見えそうなほど白い肌といい、まるで神話に出てくる神様そのものだ。

その、誰だかわからない男の人は、なぜかあたしの名前を知っていた。「ミハル」と呼びかけられ、抱き寄せられ、そして――キスされそうになった時。

瞼の裏に、ジード様の微笑が浮かんだ。

悲しみが洪水になって押し寄せてきた。あたしが殺してしまった、あたしの大切な人。こんなことになるほんの少し前に見た、ジード様のやさしい笑顔を思い出した瞬間、あたしは叫んでいた。

「厭……厭、厭……っ！」

――だから、ミハル。待っていてくれないか。ここで、私を。

あの時、神殿を発つジード様にそう言われて、あたしは肯いたのに。待っていてほしいって言葉がどれほど嬉しかったか、伝えることもできなかったけれど、それでもあたしは「ずっと待ってる」って答えたのに。

約束を守ってさえいれば、こんな結末を迎えずにすんだのかもしれない。悲しくて、やりきれなくて、涙が込み上げた。

あたしの様子に戸惑っているのか、頬に触れた手がぴくりと揺れた。あたしはかまわず叫び続けた。泣きながら。

二度と会えないのだとしても、彼以外の人になんて触れられたくない。せめて心だけでも、あたしはずうっとジード様のものでいたい。そう強く思ったんだ。

あたしは――ジード様が、好きだから。

幾筋もの涙が娘の瞳を濡らし、頬を伝い落ちていく。ウルディノシスは言葉を失った。

そこに、娘の内にあるのは、たったひとつの感情。――拒絶だ。

「……」

沈黙したまま、彼はゆっくりと娘から離れた。二人のやり取りを見守っていた老人たちの間から、にわかにざわめきが湧き起こる。が、ウルディノシスの耳には、そんなものは入らない。

「そうか。異界の娘には、魅了の術（すべ）は効かない……」

独りごちるなり、彼は肯いた。それからこう言った。

「イギー。イギー、いるんだろう。君に頼みたいことがあるんだ。もういちど、出てきておくれ」

微笑しながら泣き続ける娘の身体から、ふたたび半透明の影が浮かび上がった。影は疲れきったような表情を見せ、いかにも大儀そうだ。復活の儀に加え、依坐を操るためもあったのだろう。どうやら相当の労力を使ったらしい。

「頼みたいこと？　万能神であるそなたが、我にか。いったいなにを望むというのだ」

冴えない顔つきの相手を前に、ウルディノシスは謎めいた微笑みを浮かべてみせた。

「単刀直入に言うよ。――死んだ六人の依り子たちを、生き返らせてくれないかな。いま、ここで」

およそ予想もしていなかった神（ウルディノシス）の言葉に、周囲からはいっそう大きなどよめきが起こった。発言の真意も推し量れぬまま、床の上に横たわる六体の遺骸を示し合わせたように見やる老人たち。

「依り子の甦生など、そんな話はまるで聞いたこともない。第一、ウルディノシス神の存在は、それではどうなるのだ。彼らの生を奪うことだけが、復活の手段だったのではないのか」

なにより、いかにイグノディアス神とはいえ、そんなことが果たして可能なのか？　議官たちの眼差しが、今度は女神の姿に集中し

た。

当のイグノディアスは、黙したまま答えを返そうとしない。ウルディノシスの片眉が、ほんのわずかに歪んだようだ。

「イギー。聞こえなかったのか。この、六人の依り子たちに、命を返してやっておくれ。生命の母たる君にならできるはずだ」

「……酔狂にもほどがある。たかだか分身にそこまでの情けをかけるなど、そなたらしくもない」

そう冷酷に言い捨てる彼女だったが、ウルディノシスはなぜかおかしそうに吹き出した。

「情け？　ぼくが、この連中に同情しているとでも？　冗談はよしてくれ」

「それでは、なぜ……」

成り行きを見守っていた審議長とイグノディアスの声が、奇しくも重なった。ウルディノシスはどこか面倒そうにこう返した。

「わからないかなぁ。ミハルのためだよ。この子、ぼくのことを、まったく見ようともしてくれないんだ。依り子たちときっと仲良しだったんだろうな。死んでしまったのがよっぽどショックなのか――ともかく、このままじゃ、ミハルが可哀そうだからさ。それに……」

ウルディノシスはそこで言葉を切り、不敵に微笑んだ。そうして、一転して荘厳な顔つきになると、イグノディアスに向かってはっきりと言い渡した。

「真（まこと）の統治の神、ウルディノシスの名において、生命の神、イグノディアスに命ずる。

我が分身たる魂の依り子を、六人すべて現世（うつしよ）に呼び戻せ」

「夫」の厳命に、イグノディアスはそれ以上逆らおうとはせず、ゆっくりと右腕を上げた。冴え冴えとした空気が、薄い像となった彼

女の全身を取り巻き始める。その顔に表情らしきものは一片たりとない。彼女は、足下に一瞥を投げてから、おもむろに口を開いた。続いて、言葉とも取れぬ不思議な響きの一声が、部屋中に鋭く響き渡った。

変化は、すぐに現れた。

もの言わぬ骸（むくろ）と化していた六人の身体が――ジード、アドリオ、カシアン、ヴィネック、ヴァリー、それにテオルーグの身体が、雷（いかづち）に打たれでもしたみたいにぴくりと震えた。頭を振り、首をもたげ、やがて全員がその場に起き上がる。

「お……おおお……」

畏怖と困惑に打ち震え、ひたすら嘆声を漏らす老人たち。ウルディノシスはそんな彼らを満足げに眺めた。自らの思惑どおりだと言わんばかりに。

「蘇った……蘇りおった……」

呻くような声が、そこここから上がる。この日なんど目になるかもわからない奇蹟がまたしても起きたのだ。ジードをはじめとする六人の頬には完全に血の気が戻っており、どこから見ても生身の人間そのものである。――いや、事実、彼らは生き返ったのだ。女神の持つ超然たる力のもとに。

けれどもすぐに状況を理解することはさすがにできず、皆が皆、額を押さえ、幾度も目を瞬かせてはどうにか周囲を見回そうと試みている。そんな中にあって、いち早く立ち上がったのはジードだ。

「ミハル……ミハル！」

ふらつきながらも彼は怒鳴り、愛する少女に向かって駆け出そうとした。そして、未明もまた、彼の呼び声に呼応するかのように叫んでいた――女神の影響のもとに消されかけていた自我が、嘘のように瞬時に蘇ったのである。

「ジード様……っ！」

かすれ声を絞り出し、ジード目がけて一心に走り出そうとした彼女を、だがしっかりととらえた腕があった。この一連の復活劇のまさに主役である、ウルディノシスだ。

「よかった、元気になったんだね。嬉しいよ、ミハル」

気遣わしげなせりふとは裏腹に、その両腕はまるで鋼のような頑強さでもって未明を抱きしめ、決して逃がそうとしない。深い森にも似た双眸には微笑が、そして上がった唇の端にはかすかな嘲笑が浮かんでいる。

「放して、放してぇっ」

未明は涙声で叫んだ。けれどどれほど力を込めて抗おうと、華奢にすら見える白い腕を跳ね除けることができない。ウルディノシスはそんな彼女を、幼子に対するような眼差しでやさしく見つめている。

が、そんな振る舞いを、生き返った六人がむざむざ見逃すはずもなかった。

「貴様……貴様！　私のミハルから離れろ！」

異口同音に吼えたのはジードと、そしてカシアンだった。むろん、アドリオやヴァリーもまた、込み上がる憤怒のままに駆け出した。

しかし、「標的」へと辿り着けた者は、誰一人としていなかった。

議官たちに取り押さえられたわけではない。目に見えない「壁」のようななにかが、ジードやカシアンの伸ばした拳を厳然と阻んだのである。相当の衝撃だったらしく、空間一体に火花が散った。同時に、おかしそうな笑い声が湧き起こる。

「あはは！　たかだか容器（イレモノ）の分際で、ぼくに触れようなんておこがましいにもほどがある。まぁ、そこまで元気になったのなら、ミハルも安心だろう。彼女のことはぼくに任せて、君らは自分の心配でもするんだね」

「なに……おい、お前ら！　退くんだ、そいつから離れろ！」

鋭い一声を放ったのはヴィネックだ。甦生して間もなく、わけがわからないながらも、目の前にいるこの銀髪の美青年が「敵」であ

ることはすぐに察しがついた。そして、この男が只者ではないことも。

ヴィネックが怒鳴ると同時に、ウルディノシスの身体が白光に包まれた。乾いた爆音がし、その眼前に迫っていたジードたちが軽く吹き飛ばされる。ヴィネックとテオルーグを除く四人の肉体が、壁際に叩きつけられ、もんどりうって床へと転げ落ちた。未明の口から、狂ったような悲鳴が迸る。だがウルディノシスの顔色はまるで変わらない。彼は未明を抱え上げると、そのまま踵を返した。

「待て……ミハルを、ミハルを放せ……！」

ウルディノシスの背中が、ぴくりと揺れる。振り向いた彼の目に映ったのは、危ういながらもなんとか立ち上がり、燃えるような瞳で自分を睨みつけるジードの姿だった。肉体にどれほど危害を加えられようと、彼がこの依坐の娘をあきらめることはないのだろう――そんな考えに至り、ウルディノシスはなかば呆れたようにため息をついた。その時だった。

びくともしなかったはずの部屋の扉が開き、騒々しい足音とともに人影がなだれ込んできた。真鍮の鎧に身を包んだ、審議院直属の警備兵たちだ。その姿を認めたヴィネックは、反射的に舌打ちをしていた。

「おお！　我が精鋭、神の守護たる真鍮兵よ、さあ、六人を捕らえるのだ！　依り子とはいえ、神に仇なす不逞の輩を、このまま帰すわけにはいかぬ！」

感極まったのか、審議長が喉も裂けよとばかりに絶叫する。現れた警備兵たちは、みな無言のままジードらに迫った。その数、およそ三十――いくら腕に覚えがあろうと、これでは多勢に無勢である。しかし、だからといって抵抗もせずに捕まるなど論外だ。ヴィネックの声が飛んだ。

「みんな、こっちへ来い！　死角を見せねぇように円形に固まるんだ、やつらに背後を取られるな！」

「おい！　なにしてんだお前、おっさんの言うとおりに――」

焦ったように怒鳴ったのはヴァリーだ。その視線の先には、プラチナブロンドを振り乱して突進するカシアンの姿があった。「あのばか！」苛立ちもあらわに言い捨てるヴィネック。

「イヤァァァァッ」

カシアンは、奇声を発しながら兵らに体当たりした。もとより彼が見ているのは、この甲冑の警備兵などではない。その背後に冷然と構える、ウルディノシスの姿なのだ。ウルディノシスを殺し、囚われの身である未明を奪還すること、その想いだけに突き動かされての行為だった。

がしゃん！　タックルをまともに喰らった兵の一人が、後方へと仰け反り、派手な音を立ててひっくり返る。はずみで、かぶっていた面が外れ、首から上が現れた。――思いもかけぬその正体に、カシアンは息を呑んだ。

「……空洞、だと……？」

そこには、あるはずの首がなかった。鎧の中身は空っぽだったのだ。中央政府とはつながりの深いヴィネックでさえ知らなかったカラクリだ。

その上、カラクリはそれだけに止まらなかった。

鎧を外され、打ち倒されたはずの警備兵が、なにごともなかったかのように易々と起き上がったのである。幽鬼を思わせる行動に、さしものヴィネックも言う言葉を失った。

しかし、呆然としているひまなどはなかった。気づいた時にはすでに遅く、頭部のない兵の両の手のひらが、カシアンの首をがっちりと挟み込み、締め上げていた。あまりの苦しさに、カシアンの意識がゆっくりと遠のいていく。――ついに、彼の四肢がだらりと力なく垂れ下がる。どうやら気絶してしまったようだった。

「カシアン！」

ヴィネックの絶叫が汐となった。六人は、全員が、警備兵らによって取り押さえられ、後ろ手を縛り上げられた。

「魂の依り子に対しこのような手荒い行いは、我らとて本望ではな

い。どうか、こらえてはくれまいか。与えられた命を、むざむざ打ち捨てることもなかろう」

首を振りながら近づいてきた審議長に、ヴィネックはありったけの侮蔑を投げつけた。

「義父上が見限るのも道理だな。ここを出たら、俺の一存で、こんな機関はきれいさっぱり取り潰してやる」

返事はなかった。「この連中を、三組（みくみ）に分けて牢につないでおけ」兵に向かって短く命ずると、老人たちはそれきり黙り、役目は終えたとばかり後退（あとずさ）った。

「ジード様、ジード様！」

涙に濡れた声に、ジードの眉が歪む。最愛の少女がすぐそこにいるというのに、触れることすらできないのだ。だが自由を奪われながらも、彼は懸命に未明の名を呼んだ。

「ミハル、ミハル……大丈夫だ、すぐに助けに行く。私を信じて、待っていてくれ、ミハル」

「ジード様――」

「愛してる。……お前を愛してる。ミハル」

微笑みとともに、ジードはそう告げた。嘘偽りのない、本心からの言葉だった。こんな状況だというのに、こうして未明への想いを口にするだけで、不思議なほど心が安らいだ。未明の顔がくしゃくしゃになる。可愛くて、いとおしくて、彼自身、瞳が潤むのがわかった。

その温かな気持ちが、しかし次の瞬間、凍りついた。

ジードの――六人の目の前で、ウルディノシスは未明の小さなあごをつかむと、有無を言わせず唇を奪ったのである。

「ん……っ！」

不意打ちの行為に、未明は抵抗も虚しくされるままになった。押し当てるだけの口づけだったが、それはジードにとってはとうてい赦し難い振る舞いだった。

「貴様……！」

唸り声を上げ、ウルディノシスを睨みつけるジード。自由を奪われてさえいなければ、誰に止められようと間違いなくこの場で相手を葬り去っていたに違いない。そんな彼の心中をよくわかっているのか、当のウルディノシスはいやに楽しげだ。

「勘違いしないでほしいなぁ。君らを生き返らせてやったのは、ミハルのためだ。このままじゃあ、ショックのあまり彼女までどうにかなってしまうかもしれないと思ったから、仕方なく呼び戻してやったまで。――いいかい？　君たち全員、ぼくがその気になれば一瞬で冥府行きってことを、よぅく憶えておくんだね。それから……」

ウルディノシスの視線が、真っ直ぐジードを射抜いた。

「灰色の髪の依り子か。……以前にも一度会ったような気がするな。ふぅん……なるほどね」

腕の中でもがき続ける未明の髪に、彼はわざとらしく唇を寄せた。激昂し、獣のようないきおいでわめき散らすアドリオやヴァリーを、心底愉快そうに眺めながら。

# 第五話　顕現

真鍮の鎧に身を包んだ警備兵、通称真鍮兵たちによって、ジードら六人は抵抗虚しく縄につながれた。人外の力を操るはずのテオルーグでさえ、本物の神の前には為すすべもない。

「ひとまず、この連中を地下牢に入れておけ。組み分けなどはどうでもよい」

審議長は厳粛な調子で言い放った。房は当然だが狭く、大人の男ならせいぜい二人ずつしか入れない広さになっている。そう長い期間の拘留には、もとより向いていない部屋だった。そのことは、むろん踏まえた上での指示である。

「ミハル！　貴様、ミハルを……ミハルを放せ！」

叫んだのはジードだけではない。アドリオやヴァリーも同様に声を上げ、銀髪の青年を――未明をその腕に捕らえたまま悠然と佇む神、ウルディノシス（ウルディノシス）を睨みつけている。当の本人はと言えば、なにがおかしいのか、不意に大声で笑い出した。美しい顔いっぱいに浮かぶのは、はっきりとした蔑みだ。

やがて笑いやめた彼は、瞳を輝かせ、こんなことを口にしたのである。

「牢につなぐのはもう少しあとでもいいだろう。いいことを思いついたよ。――ミハル、君に、素晴らしい景色を見せてあげる。ぼくが生み出す新しい世界だ。この世界は、まっさらに生まれ変わるんだ」

謎めいたせりふに続けて、ウルディノシスは目を瞑った。微動だにせず、一言すら発せず、ただその場に立ち尽くしている。いったいなにをしようとしているのか――だが、次の瞬間だった。

轟音とともに、天井が吹き飛んだ。

一瞬にして頭上に現れた蒼穹に、誰もが言葉を失った。眩しいほどの光が、議場の隅々にまで差し込んでゆく。ヴィネックは思わず目を眇めていた。眩さだけでなく、その事態のあまりの異様さにだ。

頭の上に空いているのは、中心だけを残して広がった円周（リング）のような穴だ。つまり、中央の円として残った天井部分は、支えを失った状態でそのまま宙に浮いていることになる。

「この上には、確か、尖塔が続いてるはずだが……」

なぜ落下もせずに滞空していられるのか。それもウルディノシスという神の力が可能にする業（わざ）なのか。ヴィネックの思考を、この直後、次なる異変が遮った。荒れ狂う風が、鋭い音とともに室内を駆け抜けたのである。風圧によって生じたカマイタチが、ヴィネック含めジードたちの頬を素早く切りつけた。

「ははっ！　相変わらず腕白だな、メル！　ふたたび会えて嬉しいよ」

やんちゃな子どもみたいな声で、ウルディノシスは空（くう）に向かって呼びかける。

「メルメリウス……聖典に描かれる風の神か」

つぶやいたのはテオルーグだ。ほかの誰にも認められない神の姿が、彼には見えていた。十代の少年のようなあどけない顔をした、だがまぎれもなく神族の一人として風を操る神、メルメリウス。おそらくは、復活した王の気配（ウルディノシス）に呼応し、馳せ参じたのだろう。相手が神であろうと人であろうと、例外なく発動される魅了の術――それが、神々の王たるウルディノシスだけが持ち得る、絶対の力である。

そして、ぽっかりと空いた空間（あな）に、またしても不可思議なモノが現れた。四角く切り取られた、大小様々なキャンバス――いわば空に浮かぶ巨大な「額縁」である。そこに映っている光景に、ヴィネックは瞠目した。いや、彼だけではない。

「ワンジオ翁！　それに……ホルツェン！　レミット！」

「ありゃあゼノンじゃねぇか！　あっちにはヘルも、それにシドンまで映ってやがる、なんなんだこいつは！」

頭上を見上げていたジードやヴァリーの口から、次々にそんなせりふが飛び出した。無数に出現した奇怪な額縁に映し出されているのは、数え切れないほどの人間の姿だった。若い者、老いた者、男も女も小さな子どもも、皆一様に戸惑ったような表情を浮かべ、こちらを凝視している。大学府の関係者や身内など、その中には見知った顔も混じっていた。

「パドマ、レンドルス！　ローニャのやつもいるのか。ってことは……」

「そのとおり、これは世界中のあらゆる人々を映し出す『窓』じゃ。むろんそなたらの知り合いもおろうな。――ウルディノシス神のもと、この世がふたたび統一される瞬間を、彼らはこれから目の当たりにするのじゃ」

ヴィネックの独白を引き取るようにして宣言したのは、いつの間にか前方中央の演台へと進み出ていた審議長だった。彼は厳かな面持ちで両手を挙げ、次いで仮面をつけたまま、おもむろに口を開けた。老人とは思えぬほどの迫力ある声が、辺り一帯に、そして天空に向けて響き渡る。

「千万（ちよろず）の民よ！　世にあまねく散らばる我が同胞（はらから）よ！　よく聴くがいい、そして見るがいい！　生命の母たるイグノディアス神の夫にして、真（まこと）の統治と魅了の神、ウルディノシス神はここに復活なされた！　我らはついにこの時を迎えたのだ……大いなる創世主、ウルディノシス神の名のもとに、互いを隔てるつまらぬ壁を捨て、唯一無二の意識体となる時が来たのだ！　ウルディノシス神の下僕として、古き時代の完全なる民族へと還る時がようやくやってきたのだ！

これからの世、もはや諍いは起こらぬ。他者はすなわちおのれと同義。不満も憂いも存在し得ぬ、至上の楽園がついに実現するのだ。この好き日、めでたき日を、ともに祝おうぞ！」

審議長はそこで言葉を切ると、深く息をついた。それからかっと両眼を見開き、いっそう高らかに言い放った。

「さあ、神よ、我らが創世主よ、その御力（おんちから）を皆に……民の前に示し給え！」

声は風に乗り、何倍にも膨らんでどこまでも流れていく。「窓」に映し出されている人々の耳にも、確かにその演説は届いているようだ。あまりに唐突な出来事に理解が追いつかないらしく、ざわめいている様子が見て取れる。

そうした不穏な空気の渦巻く中、ウルディノシスは白光を放ちつつ、天に向かってゆっくりと飛翔する。その腕には依然として未明を抱いたままだ。「ミハル！」ジードの叫びが、虚しく空に吸い込まれていく。

やがて中空に停止したウルディノシスは眼下に向けて、憐れむような、またどこか蔑むような眼差しを抛った。つややかではあるが赤味の薄い、彫像を思わせる唇が、ゆっくりと動く。

「こうして地上を眺めるのもずいぶん久しぶりだ。はは、あっちにもこっちにも、まるで虫みたいに蠢いてる。呆れるほどだ、ウンザリするよ！　なんてたくさんの人間たちがいるんだろうなぁ！

ぼくの姿が見えるかい。ぼくの声が聴こえるかい。ぼくの名はウルディノシス――みんなを幸せにしてあげるために、もう一度この世界にやってきたんだ。ぼくを見て、ぼくの言葉を聴いて……そう、難しいことなんてなにもない。ぼくを信じさえすればいい。そうすれば楽になれる、約束してあげるよ。隣人など気にしなくていい。君たちはすでにたったひとつの存在なのだから。

永劫の幸福をその手にしたければ、ぼくのために祈りを捧げることだ。このぼく、世界を統べる全能神、ウルディノシスのために！

――さあ、幸せを欲する者よ！　新しきこの世界に、祝福の祈りを！」

ウルディノシスの「福音」は大きく反響し、文字どおり、世界中の人々の鼓膜を――いや、精神の奥底を震わせた。それまで無音だ

った「窓」から、地響きにも似た歓声が巻き起こり、互いに共鳴し合って空一帯に轟いた。ウルディノシスという存在など、いまのいままで知らなかったはずの彼らが、である。人の心を否応なしに我が物にしてしまう魅了の術――その圧倒的な力を目の当たりにし、ヴィネックは思わず唾を飲み込んでいた。

「おい、おっさん。あんた連邦の要人かなんかなんだろ。いったいどういうことなんだよ、こいつは」

異国の青年に鋭い声で耳打ちされたヴィネックは、口だけ動かして応じた。

「知らん。……と言いたいところだけどな、だいたいは読めてきたぜ。老い先短い審議院の連中の、最後の徒花なんだろ」

「はぁ？」謎めいたせりふにヴァリーは思いきり眉をしかめた。そんな彼に、ヴィネックはこう続けた。

「兄ちゃん。お前さん、『インヴォルタン』の頭領――だったよな、確か」

ヴァリーの表情が瞬時に引き締まる。だが、話はそこまでだった。手首をつなぐ縄に引っ張られるまま、六人は真鍮兵によって議場から連れ出され、地下牢に押し込められたのであった。

大学府の教義棟の、窓という窓に、学生たちは駆け寄った。講義などそっちのけだ。

「ウルディノシス神！　あれこそ本物の、本当の統治者なんだ！」

「おお……神よ、我ら小さき存在に憐れみを与え給え！　我らはひとつ、互いを隔てる『個』の壁などもはや不要なり……」

恍惚とした表情を浮かべて空を見上げる教授たちや、頬を紅潮させて興奮のままに叫ぶ同級生の姿に、ホルツェンは柄にもなく身震いした。突如として響き渡った厳粛な声に続いて現れたのは、蜃気楼のように空（くう）に浮かぶ、美しい青年。白い燐光のようなものを全身

にまとったその男は、自分を「神」だと宣言した。だが、ホルツェンの目には、そうは映らなかったのだ。

「どういうことなんだ？　俺がおかしいのか？　だってあいつ……あいつは……」

「ジード！　なんで、いったいどうしてジードがあんなとこにいるんだよ、ねぇホルツェン！　ジードのやつは、家の都合とかで臨時の休暇届け出して、でももうじき戻ってくるはずだったじゃないか。それにみんな、どうして気づかないんだよ？　あれはジードだ、神様なんかじゃないだろ！」

彼の背にすがるようにしてヒステリックにわめくレミット。ホルツェンは、無意識のうちに渇いた唇を舐めていた。レミットの言うとおりなのだ。

青年の顔が、彼らのよく知る親友、ジードのそれと重なっていた。凝視すればするほど、「神」はジードの姿にすり変わる。だというのに周囲の誰一人として、そのことには気づかないらしい。どころか、皆、熱狂に我を忘れ、窓から身を乗り出さんばかりにして「神」を讃えている。ここに至ってホルツェンははっとした。

「『天上の切符』……もしかして、あれが関係してるのか？」

若輩であるはずのジードやその異母弟、果てはカシアンにまで発行されたというあの免罪符（ジョーカー）が。彼はレミットを振り切り、教室を飛び出していた。そう――おそらく、あの老人なら知っているはずだ。審議院とも懇意である大学府の最高責任者、ワンジオ翁なら、なにが起こっているのか、この異常事態の真実を。

# 第六話　魂の火影（ほかげ）

講堂最上階までの階段を、ホルツェンは息も接がずに駆け上がった。学府長室と廊下を隔てる、フォモック材の重厚な扉を、彼はノックもせずに開け放った。そのいきおいは、殴り込みそのものだ。

やや乱れた呼吸を整えながらも、ホルツェンは躊躇なく口火を切った。窓際に立つ、侏儒（ひきひと）と言っても差し支えのない、ひときわ小柄な老人の背中に向かって。

「無礼は承知です。――ワンジオ翁、いえ、学府長。あなたならご存知なんでしょう。あれは……あの現象は、いったいどういうことなんです。ここでいったい、なにが起きてるんですか」

静かな声が返ってきた。「その様子では、君にも見えたのだね。彼の顔が」

ホルツェンははっきりと肯く。気配が伝わったのか、それとも窓に彼の姿が映り込んだのか、ワンジオはかすかに微笑を浮かべながら振り向いた。

「君は、確か……」

「ホルツェンです。ホルツェン・オルレアド・シモン・ライゾック。第四学年所属の」

老人の表情が、さらに柔和になった。

「そうか。オルグ・ジードのいちばんの友人……君になら、かの尊顔が彼のものに見えてもおかしくはない。――こちらに来たまえ、シモン・ライゾック」

言われるまま、ホルツェンは相手のそばへ、窓際へと大股に近寄った。そうしてあらためて外の様子を眺める。神話の登場人物を思わせる、なんとも時代錯誤な扮装をした青年が、中空に浮かんだまま皆を見下ろしている――ただ一点を除き、状況はさっきとまるで一緒だった。ホルツェンは思わず声を荒げた。

「あいつ――あいつ、ジードじゃない！　全然知らないやつだ、どうして……俺は確かに、いや、俺だけじゃない！　レミットだって――」

なんど瞼をこすっても同じことだ。ホルツェンの目に映るのは、見慣れた親友、ジードの顔ではなかった。長い銀髪も、中性的な美貌も、ジードの持つ特徴とはなにひとつ重ならない。それなのに、なぜ自分はあの男をジードだと思ってしまったのか。うろたえるホルツェンにワンジオは言った。

「それで正しいのだよ。あそこにおわすのはオルグ・ジードではない。――審議院によって歴史から消された神なのだからね」

衝撃的な言葉にホルツェンは一瞬、絶句した。そんな彼を横目に、老人は淡々と続ける。

「一般の人々には長い間伏せられてきたことだが、世界を統べる女神、イグノディアス神にはかつて、彼女さえも魅了してやまない尊き夫君がいた。それがいま、君が目にしているあのお方だ」

ホルツェンの脳裏に、ふと閃いた記憶があった。女神イグノディアスが人知れず葬り去った、真の魅了と統治の神、ウルディノシス。そう、それは、つい先日訪れたイシオス神殿で明らかにされた、いわゆる黒い歴史だ。

「とある事情の下、お隠れになってしまわれたかの神を復活させるために――正確にはその生まれ変わりとされる人間を捜し出すために、審議院はさまざまな策を練ってきた。大学府設立もそのひとつだ。生まれ変わりは血統のよい家に現れる確率が高い、そういう説が院の間で一時期流布したらしくてね。

だが、いくら神の生まれ変わりとして崇められようと、それが判明してしまった者は、神を復活させる代償として命を失わなければならない。そうなれば、中には、必死でその存在を隠し護ろうとする者も出てくるだろう。真実を故意に曲げて布令（ふれ）を出したところで、勘の鋭い人間はいくらでもいるものだ。名誉欲も、命あってのモノダネ――だからこそ、審議院はあえて国民に向けてことの真相を知

らしめてはいないのだよ。シモン・ライゾック、君も、大学府に君を入府させた君の家族も、一連の事実を知らなかったようにね」

ワンジオの話はそこでいったん途切れた。とてつもないほどの厭な予感に、ホルツェンは青ざめた。

「ちょっと待ってください。いまなんて……神の生まれ変わりであることが判明した者は、い――命を失わなければならないですって？　じゃあ、じゃあ……ジードは、もう……」

老人は――無情にも――はっきりと肯いた。

「君には見えたのだろう。ああして空におわす神の尊顔が、君の友人のそれに。『より近しき者にのみ、魂はその火影を示さん』――部外者である私にとっては偶然耳にした口伝に過ぎないが、確かに事実だったようだね。かの神だけが持つ魅了の力は、その者たちには及ばない……私にも見えたよ。オルグ・ジードの顔がね」

他人事のような言い草に、ホルツェンは気色ばんだ。「ワンジオ翁、あなたはそれを知っていて……知っていてジードには黙っていたんですか。あいつが死ぬってわかっていて、そ知らぬフリを続けていたんですか、あなたはずっと！」

先ほどの話がすべて真実なら、彼の親友は、ジードはすでに死んでいるということになる。「神を復活させる代償として命を落とす」、ワンジオはそう明言したのだから。

「なぜ助けてやろうとしなかったんです。なぜあいつに真実をすべてぶちまけて、助言を与えてやらなかったんですか。機会ならいくらだってあったはずだ、あの時だって……そうだ、あの切符！　『天上の切符』、あれは、じゃあ……」

「オルグ・ジードをはじめ、彼の二人の身内。それにウェス・ゴート家の跡取り、カシアン。――私もそこまでは知らなかったのだよ。切符を授けられた者全員が神の生まれ変わりなどとは。だから、望みはあると思ったのだ。誤算だったがね」

平静そのものだった声が、ほんのわずかに軋んだようだった。ホルツェンははっと息を呑んだ。

「……私にとっても彼は、オルグ・ジードは、子どものようなものだ。できるのなら院には渡さず、過酷な宿命から逃れさせてやりたいとも考えた。だがね、シモン・ライゾック。私ごときに、この大いなる運命という河の流れを枉げることなど、果たして可能だろうか。どう抗おうと、運命は必ず訪れるのだ。どんなにその姿を変えようともね」

ワンジオは眼下の光景をじっと見つめた。教義棟から走り出た学生たちが、空に向かって懸命に手を伸ばしている。彼らの目にはジードの顔は映らなかったのだろう。

「大学府の営みはこれからも続いていく。神の復活を見届けるまでは、永遠に存続するだろう。――私も、終止符を打ちたいのだよ。そして、変えていきたいのだ。生まれ変わりを捜し集めるための機関などではなく、健全な学び舎として社会に寄与できるようにね」

黒い洞穴のような両眼が、教育者の眼差しとなってホルツェンをとらえた。だが、それでも、ホルツェンは退けない。

「ワンジオ翁、俺は、あなたの理想も大学府の未来もどうだっていい。俺が赦せないのはジードを見殺しにしたってことだ。ああして神とやらが復活したってことは、ジードは……ジードだけじゃない、あいつの親父も弟も、カシアンだって死んじまってるってことなんだろう？　良心が痛まないのか？　子どもみたいに思ってた教え子をのうのうと破滅させるなんて！」

不遜な態度を咎めることもなく、老人はただ黙ってこの大柄な青年を見つめている。そこでホルツェンは言葉を切り、そして冷たく言い捨てた。

「自主退学します。今日限りでね。これ以上こんなとこにいたって、学べるもんなんてなさそうですから。もともと、俺の柄じゃなかったんだ。――それじゃあ学府長、もう二度と会うこともないでしょうが、お元気で」

踵を返し、足音も荒々しく部屋を出て行くホルツェンを、ワンジオは止めようとはしなかった。――はっきりと彼に告げられるだけ

の「根拠」がなかったからだ。自身が感じ取った、違和感とでもいうべき気配がなにから生じているのか、その根拠が。ワンジオは深々と息をつき、胸の中でこう独りごちた。

――奇妙なことだ。わずかに伝え聞いていた話では、神の復活後、生まれ変わりの持つ「気」はすべからく消滅するはず……魂の顔が透けて見えるというだけではない。この現世に、確かに、オルグ・ジードの気配を感じるというのは、いったいどういうことなのだ？

「レノラ様、あれ！」

大広間のバルコニーに駆け寄り、ガラス扉を全開にしたヨナが叫んだ。指差す先に浮かぶのは、どこか仮装めいた格好をした一人の青年だ。だが、ヨナの目には、そしてレノラの目には、彼女たちのよく知る、それぞれ別の人物の顔が映っていた。

「若君が、あそこに！」

「ジード！　なぜあの人が、あんなところに……それにあれはミハルですわ、いったいどういうことなんですの！？」

レノラの長い睫毛が、いきおいよく上下する。彼女はヨナと寄り添い、無意識のうちに手を握り合っていた。

神殿中の人間が空を見上げ、同じように瞬きを繰り返している。もっとも、その反応は人によって若干異なってもいた。とくにジードらと懇意というわけではない神官や小姓たちは、熱狂に頬を染め、たったいま耳にしたばかりの神の名を恍惚とつぶやき続けている。

「ウル……ウルディノシス？　なにを言っているんですの、あなたたち！　あれはミハルとジード――え？」

ひどい混乱にレノラは口元を押さえた。ジードの顔が、ジードだったはずの青年が、見知らぬ銀髪の男にすり替わっていたのである。自分の目がおかしくなったのかと、レノラはうろたえて後ずさった。

それはヨナも同様で、見えていたはずのカシアンの顔が消えたことに、彼女は激しく狼狽した。

「若君……」

イシオス神殿から彼の姿が消えて数日が経っていた。キニッサの街中で得た情報によれば、どうやら彼はヴィネックと未明を追って聖山に向かったらしい。そうであるなら――少なくともヴィネックと合流さえできれば安心だ、そう周囲に説かれ、ヨナはオサイオンのウェス・ゴート邸には向かわず、イシオス神殿に留まって主君を待つことに決めたのだった。ジードの帰還に合わせ、未明もまた、用事が済めば神殿に戻ってくるはずである。おそらくカシアンも「自動的に」彼女にくっついてくる公算が高いだろう。いまのいままで、ヨナ自身、そう思っていた。

けれどこの時はじめてヨナは、圧倒的な不安の前に身体が震えるのを感じた。

「若君、若君……お願い、お母さん、どうか若君を……若君を護って……！」

幼い頃、病の末に母を亡くして以来、神に祈ったことはない。胸の内に去来する巨大な黒雲をどうにかして払い除けようと、ヨナは亡母の面影にすがり、一心不乱に語りかけた。

馬たちにそれぞれ飼い葉を与えたあと、ロモッカは厩舎の一隅に腰を下ろし、やれやれと伸びをした。葉巻を取り出したいところだが、煙は馬がいやがる。お楽しみは仕事のあとに取っておこう、そう思って欠伸を漏らした時だった。

聴いたこともない声が、突如、頭上から降ってきたのである。

泡を喰って立ち上がり、厩舎を飛び出したロモッカは、空に浮かぶ妖しげな人影に胆を潰した。なにしろ彼のやや下がり気味な眼（まなこ）に映ったのは、屋敷の誰もがよく知る青年の姿――そう、次期当主、

オルグ・ジードの顔に他ならなかったからである。
「あ、ありゃあミハルじゃないか！　な、なんだっていったいあんなとこに……いや、じ、ジード様じゃない、ありゃうちの坊ちゃんじゃないぞ！　どうなってんだこりゃあ、俺(おい)らの目ん玉がおかしくなっちまったのか！？」
　泥に汚れた手で、ロモッカは必死に瞼をこすった。だが幾度そうしようと状況は変わらない。神話にでも出てきそうな薄絹をまとい、片方の腕に未明を抱いて謎めいた微笑を浮かべる青年に見覚えなどない。しかし、先ほどは確かに――。
　ロモッカは駆け出した。使用人のために設けられた通用口から邸内に入ると、中は騒然としていた。どうやら異様な体験をしたのは自分だけではないらしい――慌てふためきながらも執事長のレンドルスをつかまえると、彼はロモッカ以上に混乱しているようだった。銀縁の眼鏡は汗で滑ってしまったのか、顔から外れかけている。
「なんなんだ！　なんなんだ、あれは！　当家の若君が、オルグ・ジード様が、あんな……あんな得たいの知れぬ男に見えてしまうとは、いったいこれはどういうことなんだ、ロモッカ！」
　逆に問い詰められ、ロモッカは焦った。答えなど返せる道理もない。そこへ、頬を真っ赤に染めたピアが駆け込んできた。
「レンドルス様、あたし、いま、お屋敷の外をぐるっと回ってきたんですけど、様子がおかしいんです！　みんな……会う人みんな、空を見上げて、なんとか様ってつぶやくばっかりで……ねぇ、あれ、ジード様なの？　それとも全然違う人なの？　それに、それにミハルまでどうしてあんなとこにいるの！　みんなヘンだよ、なのにどうしてヘンだって気づかないの！？」
　不安と興奮に耐えかねたのか、ピアは泣き出した。叫び出したいのはロモッカも同様である。が、彼が口を開けようとしたその瞬間、屹然とした女性の声がその場に――使用人専用の食堂に響き渡った。
「お静かになさい！　……ピア、ご苦労だったわね。あなたはなにも心配することなんてないわ。少しお部屋で休むといいわ、あとで

お茶を持っていってあげるから」

「パドマ様……」

女官長であり、ジードやアドリオの教育係でもある最古参のメイド、パドマは、慈愛に満ちた眼差しをピアに向けた。彼女は部屋中を見渡してから、力強く続けた。

「なにが起きているのか、そんなことは私たちには知る由もないけれど、でも、旦那様もジード坊ちゃまもおられない以上、このウェス・ハーシュ家は私たちがお守りしなければなりません。皆様はきっとすぐに戻られます。それまでの間、私たちはこの栄誉あるお屋敷に仕える者として、普段どおりにお勤めを果たさなければね。――さ！　持ち場に戻って、まずはお夕食の支度を！」

二度手を打ち鳴らすと、パドマはきびきびと指示を出し、その宣言どおり普段と変わらぬ様子で場を取り仕切り始めた。そうして、なかば自失した体の執事長に近づくと、そっと耳打ちした。

「――大丈夫ですわ。たとえなにがあったって、坊ちゃまや旦那様がおられるんですもの。恐れるに足らず、そうじゃございませんか」

レンドルスははっとした。気丈に見えたパドマだったが、その語尾はわずかに震えていたのである。彼は咳払いをし、いつもの癖で眼鏡を押し上げ、肯いてみせた。

「君の言うとおりだ、パドマ。私も信じよう。皆様は近いうちに必ず戻られるだろう。

厨房長、今晩のワインはとびきりいいものを！　出し惜しみなど不要だ、いますぐここへ持ってきたまえ！」

# 第七話　共闘

エンザンテ東岸のありふれた漁師町、カジュヌの町の海岸にはこの日、人だかりができていた。といって、奇妙な漂着物が揚がったというわけでも、事故があったわけでもない。

町民たちが見ているのは、空だった。

「神だ！　神なき国、このエンザンテの混沌を救うために現れた神だ！　あのお方が、俺たちを救ってくださるんだ！」

「ウルディノシス神、万歳！　すべての人間はみなひとつになるんだ。もう貧しさに悩まされることもなくなるんだ、永遠に！」

熱狂し、かぶっていた帽子を宙に投げる者、感極まって踊り出す者。空に佇む「神」の姿に、その言葉に、住民たちは一瞬にして魅了された。――わずかな例外を除いて。

「みんな、なに言ってるのさ？　あれが神様だって？　そんなわけあるもんか、シドンだってそう思うだろ！」

埠頭の外れに建つ古ぼけた倉庫に集まったのは、この地を根城とする地下組織インヴォルタンのメンバーである。その中に交じる、ひときわ小柄なりの少年が、興奮気味に椅子から飛び降り、顔を真っ赤にしてわめいた。

「ああ、落ち着け、ゼノン。お前の言うとおりだ、ありゃあ神でもなんでもねぇ。そもそも、あんな胡散臭ぇ神様なんているもんかよ。ああして空に浮いてやがるのも、大方なんかの手品だろうぜ」

応じる老漁師は、そう言うと窓の外をちらりと見やった。突如出現したあの自称「神様」は、いったいどういう奇術を駆使しているのか、もう四半刻（三十分）もの間空に浮かんだままだ。

「だがよ。――みんなも見ただろ？　あの野郎の顔……」

押し殺した声の主に、全員の視線が集中する。酒瓶を抱えた古参の博打打ち、ヘルだ。

「ああ。見間違いなんかじゃねぇな。――あれは、頭領（ヘッド）の顔だった。もっとも、すぐに消えちまったけどな」

壁際にもたれるようにして立つ黒髪の若者、ローリーが、声色も重々しくつぶやいた。首領であるヴァリーとは年齢が近いせいもあり、なにかとつるんで夜の街に繰り出すことも多い。漁師にしては線が細く、優男にも見えるその外見は、ともすればヴァリーよりも女受けがよいほどだ。

そのローリーのせりふに、男たちは例外なく肯いた。

長い銀髪に、白い薄絹の衣。自らを神と宣言するあの見知らぬ青年の顔が、彼らインヴォルタンのメンバーにはなぜかヴァリーと重なって見えたのである。奇妙なのはそれだけではない。

「それによ、あいつ、あの娘っ子を……アーマンドラを抱いてやがったぞ。遠目だったがよ、間違いねぇ。ありゃあ確かにアーマンドラだ。俺ら漁師の前にだけ現れる、海と戦の女神――けど、なんであの野郎が……」

思案げに首をひねりながら、シドンはさらに続けた。

「だいたい、アーマンドラはいま、ゼーレンディアにいるはずなんだろ？　頭領は恒久手形の発行理由を訊き質しに行くって出てったけどよ、半分はあの娘っ子を取り返しに行くための口実みたいなもんなんだろ。なのに当の本人があそこにいるってのは、いったいどういうことなんだ、ええ？」

返せるはずもない疑問を呈され、場は静まり返った。

ややあって口を開いたのは、彼とはもっとも付き合いの長いヘルだ。

「――出立前に、頭領が言ってたな。『期日』を忘れるな、って」

その言葉に、メンバー全員がはっと息を呑んだ。そうして誰もが、示し合わせたように外を――倉庫から少し離れたところにある岩場を見つめた。

インヴォルタンの命綱、帆船「ヘレーデ号」を密かに停泊させている場所だった。

空に出現した無数の「窓」が掻き消え、それと同時に、浮かんでいたはずのウルディノシスもまた、ふたたび議場の中央に現れる。
もちろんその腕には未明をしっかりと抱いたままだ。
「放して、放してよ、触んないでったら！」
真っ赤な顔で暴れる未明を、ウルディノシスは興味深そうに眺め回す。
「本当に君は異界の娘なんだなぁ。これだけそばにいるのに、ぼくの『力』が通じないなんて。……まぁ、その方が、これからのお楽しみも増すってものだけど」
不穏なせりふに、ジードをはじめ、アドリオやヴァリーはいっそういきり立った。「貴様！　ミハルから離れろ、ただでは済まさんぞ！」だがウルディノシスは堪えた様子もなく、いとおしげに未明の髪を撫でては口づけを繰り返している。
一通りそうしたあとで、彼はジードたちの反応など意に介しもせず、こんなことを言い出した。
「さてと。――ぼくとミハルは上に行くとしよう。ぼくと、ぼくの花嫁のための場所にね」
未明の顔が蒼白になる。ウルディノシスは一向かまわず、祭壇の周囲に控える仮面の老人に向かってこう告げた。
「彼らの処遇は君たちに任せるよ。あまり聞き分けがないようだと、お仕置きを考えなけりゃならないけど。……痛い目を見たくないなら、せいぜいおとなしくしておくことだね。
いいかい？　あらためて言っておくけど、君たちは、ぼくを復活させるために集められた駒に過ぎないんだ。ぼくを怒らせない方がいい、ミハルのためにもね。――もういっぺん君らが死んだりしたら、彼女、また泣いてしまうだろうからねぇ」
「貴……様……！」

ジードの全身が、青白い炎に包まれる。彼を取り巻く空気そのものが激しく歪んで見えるほど、そのいきおいは凄まじかった。ウルディノシスはわずかに瞠目したものの、未明を解放しようとはしなかった。やがて彼の姿は――ウルディノシスと未明は、空間に融け込むようにして完全に消え失せた。

「消えた……消えただと？　畜生、どこに行きやがったあの野郎！　出てきやがれ！」

部屋中を見回して吼えるヴァリーを、仮面の老人が鋭く一喝する。

「静まらぬか！　ウルディノシス神は、娘とともに『神の館』へ向かわれたのじゃ。そなたらはかの神によって温情を与えられ、いまいちどの生を赦された。だが、神に仇なすやもしれぬ存在を、みすみす自由にしておくことはできぬ。――真鍮兵！　先刻の指示どおり、この者どもを、地下の房につないでおけ！」

議会所の地下には、重要犯罪人を一時的に捕らえておくための場所として、勾留室と呼ばれる監房が数部屋存在する。

室内は狭く、設備といえば二つのベッドと、板で仕切られた簡易トイレがあるのみだ。当然だが長居に向いた部屋ではない。

「う……く……」

渇いた呻き声に、ジードはゆっくりと顔を上げた。反対側のベッドに横たわるカシアンだ。真鍮兵によってジードとともにこの部屋に放り込まれてから、そろそろ半刻が経とうとしている。ようやく意識が戻ったのだろう。

「ミハル……ミハル！　いま助けてやる、私のミハル――」

バネ仕掛けの人形のようないきおいで飛び起きたカシアンは、自分の置かれている状況がすぐには理解できなかったのか、唖然とした様子で室内を見渡している。そんな彼に対し、ジードは静かに告げた。

「ミハルはここにはいない。やつによって別の場所に連れ去られてしまったんだ。――お前が寝ている間にな」

思いもかけない同室者（ルームメイト）の姿に、カシアンの顔色が変わる。彼はベッドから飛び降りるなりジードにつかみかかった。

「貴様、それを見ていながら……目の前で、みすみすミハルを奪われたというのか！　なんという腑抜けだ、なんという不甲斐なさだ！　貴様といい貴様の父親といい、ウェス・ハーシュ家の腰抜けどものせいで、私は……私は……！」

ジードはカシアンの右拳を手のひらで受けた。そうして、冷ややかな目で相手を睨みつける。

「あのガラクタに一撃でのされた挙句、いまのいままで眠り込んでいた貴様に誹（そし）りを受ける謂れなどない。私も父上もだ」

その台詞は、カシアンをさらに激昂させたようだった。彼は両の目を血走らせ、今度は左手でジードの胸座をつかむと、唾を飛ばさんばかりに怒鳴った。

「貴様の父親が邪魔をしなければ！　あの時、やつを……オルヌをあと少しで葬り去れるという時に、貴様の父親が邪魔さえしなければ、私は本懐を遂げられたのだ！　母の無念をこの手で、この手で晴らすことができたのだ、それを……」

「オルヌだと？　――ラルモ・オルヌのことか？　やつは終身刑を宣告され、中央獄舎に収監されていたんじゃなかったのか」

意外な話に、ジードは目を見開いた。彼とて忘れたわけではない人物だ。カシアンは憎憎しげにこう続けた。

「脱獄を果たし、聖山に潜伏していたのだ。山中の庵にな。そこにやつが……そうだ、なぜか、やつと、貴様の父親がいた。貴様の弟もだ。それに――」

カシアンの台詞が一瞬途切れた。ジードは直感した。

「ミハルがいたんだな。そこに」

イシオス神殿で待っている。そう約束してくれた彼女がなぜ、キニッサ地方から程遠い聖山に移動していたのだろう。かすかに胸が

軋んだものの、いまは、そんなことを気にかけていられる状況ではない。

ここから脱出し、未明を奪還する。すべてはそれからだ。

「……あの男……あの腐りきったけだものは、私の母を貶め、死にもひとしいほどの辱しめを与えたのだ。貴様にわかるか？　なんの落ち度もない母を穢され、幼くして引き離される哀しみが！　私には母を思い出すことすら赦されなかった……なにもかも、あの男のせいで！」

カシアンの拳が小刻みに震え出す。ジードは抵抗もせず、ただじっと相手を見つめていた。

――名は、アドリオ。賢そうな、いい子だな。良くしてやってくれるか、兄として。

どこか淋しげな声――あれは彼の実母、イレイラだ。彼女の哀切に満ちた表情がなにに向けられていたのか、いまなら理解できる。父を恨んでいたのかどうか、そこまではわからないが。

けれど、ジード自身、傷ついたのだ。傷つけられた母を見て、彼もまた、傷を負った。苦しみに苛まれるカシアンの感情が、皮肉なことにいまのジードには、おそらく誰よりも身近に感じられた。

「あんなところで再会するなど――母の死の真相を聞かされるなど、もとより想定していたわけではない。だが、千載一遇のチャンスだったのだ、まぎれもなく！　ずる賢いあのけだもののことだ、とっくに聖山から逃げ出し、雲隠れしてしまっているだろう。母の仇を永遠に葬り去れる絶好の機を……それを、貴様の父親が邪魔をしたせいで！」

ジードの胸座を締め上げる左手にいっそうの力が込められ、太い血管が浮かび上がる。

が、ジードはその手を払い除けようともせず、こう言った。

「ミハルがそこにいたというのなら」

彼は続けた。「父でなくとも同じだ。彼女でも止めただろう。お前を」

「――」

カシアンの動きが止まった。

――友達にならなれるよ。お願い、わかって。こんなやり方じゃ、あなたはきっと満たされない。

未明の悲しそうな、それでいて温かい声が耳の奥によみがえる。求めても求めても得られない彼女は、いつでも心配そうにそんなことを言っていた。ウェス・ゴート邸でも、イシオス神殿でも。そんなカシアンに対し、ジードは畳み掛けるようにして続けた。

「お前の気持ちは、少しは私にもわかる。――だが、ミハルを目の前にして、それでも人を殺せたか？　彼女が止めたとしても、それでもオルヌを躊躇なく殺せたとお前には言い切れるのか？」

「貴様にわかるだと？　私の気持ちが？　笑わせるな！」

カシアンは怒鳴った。ジードの身体を壁際に押しつけ、さらに絶叫する。

「ずっとミハルを見ていた私が、神殿での彼女の様子に気づいていないとでも思ったか？　それに貴様もだ、オルグ・ジード！　ミハルになにを言ったのかは知らんが、彼女の態度がおかしかったのはどうせ貴様のせいなんだろう。しょせん貴様の彼女に対する気持ちなどはその程度だ！　――いいか。私ならなにがあろうと決してミハルを傷つけたりはしない。どんなことがあろうと、絶対にミハルを悲しませたりなどするものか！」

そこまで言い放つと、カシアンは肩で息をしながらあらためてジードを睨みつけた。しかし、相手の反応は、思いもかけないものだった。

「貴様……なにがおかしい。私を愚弄するのか、ええ！？」

怒りにカシアンの両眼が歪む。その言葉どおり、胸座をつかまれ

たままのジードが浮かべているのは、かすかな微笑――それは不敵とも言える表情だった。

「以前にも似たようなことを誰かに言われたなと思ったんだ。まさかお前にまで責められるとはな」

「なんだと、貴様……」

ジードはカシアンの左手をゆっくりと払った。そうして、言った。

「お前も私も、目的は同じはずだ。ウルディノシス神のもとからミハルを救い出す。そのためにはまず、ここから脱出しなければならない、そうだろう」

「……」

それまでのいきおいを殺がれ、黙り込むカシアン。ジードの言うことは正論でもある。ジードは一呼吸置くと、さらに続けた。真っ直ぐにカシアンの目を見据えて。

「互いに囚われの身であるこの状況では、いがみ合っていても仕方がない。――一時休戦というのはどうだ。戦況打開までは相手を邪魔せず、いや、むしろ協力する――その方が目的を果たすのに、もっとも近道だと思わないか」

それはあまりに思いがけない提案だった。カシアンはその場から飛びすさり、異様なものでも眺めるような眼差しで、ジードをまじまじと見下ろした。

たっぷり数分が経過する頃、カシアンはようやく口を開いた。

「協力だと？　……貴様の助けを借りるなど、我がウェス・ゴート家の誇りにかけても有り得ん。そんな腑抜けた提案にこの私が乗るとでも――」

「助けではなく、私を利用すればいい。私も休戦している間は、せいぜいお前を利用させてもらう。その程度の関係も築けないのか？　英名を誇るウェス・ゴート家の次期頭領ともあろう者が」

今度こそ、カシアンは言葉を失った。確かにこのままでは、この地下牢に囚われたままではどうにもならない。せめてここから抜け出し、あの神とやらを倒して、未明をこの手で救い出すまでは、私

情を殺して行動した方が得策であることに違いはなさそうだ。そんな結論に至り、彼は決意した。

「……よかろう。すべてはミハルのためだ。彼女のためなら、私はどんなことでも耐えてみせる」

ジードは肯き、カシアンに右手を差し出した。

若干の間が空いたものの、カシアンもまた彼を拒まず、二人はこの時生涯はじめてとなる握手を交わしたのである。

# 第八話　獄中の会話

ジードとカシアンが、一時的な共闘関係を結ぶことで合意した、ちょうどその頃。

父、ヴィネックとともに、ジードらの隣房に押し込められたアドリオは、硬いベッドの上に腰掛け、深くうな垂れていた。顔を上げる気力すらなかった。

単身聖山に乗り込んだはいいが、まんまと罠に嵌まり、最愛の相手を危険に晒してしまうという失態。それだけではない。意識を取り戻した時、目の当たりにしたのは、異母兄であり恋敵でもあるジードの腕に抱かれた未明の姿だった――頬を紅潮させ、潤んだ瞳でジードを見つめる未明を、アドリオは直視すらできなかった。どうにかして彼女に振り向いてもらいたくて起こした行動が、すべて裏目に出てしまっている。

そしてなにより堪えたのは、こんな事態になってもまだ未明への想いが消えないという、もはや呪わしいばかりのおのれの愚かさだった。負わされた宿命もなにもかも忘れ、この恋心を断ち切ってしまえたらどんなに楽になれるだろう。アドリオはふと自嘲していた。いつか、ジードの不誠実な態度を大上段からなじった自分が、同じような苦悩に陥るとは。

「房ん中にトイレがあるってのは考えもんだな。俺みてぇに神経質だと、こういうもんはどうも気になっちまう」

ぶつくさつぶやくヴィネックの声がした。粗末な板一枚で仕切られた簡易トイレを覗き込んだ彼は、微妙に顔をしかめて戻ってくると、空いている方のベッドに威勢よく転がった。

「カビ臭ぇ！　『客』を通す前にシーツぐらい取り替えろっつうんだ、なぁアドリオ」

打ちひしがれたまま答えようとしない息子に、ヴィネックはかま

わず語りかける。
「神経質っていやミサキのやつもそうだったな。あいつはこう、俺からすりゃどうでもいいようなとこに妙にうるさいっつうか、几帳面なとこがあってよ。お前の産着も、ほんのちょっとでもボタンが取れかけてたりすると、大慌てで繕うんだよ。別の服を着せりゃいいじゃねぇかって言っても聞かねぇんだ、一度着せた服は脱がせたくないとか言ってな」
呆れたように、だがいとおしそうに彼は言った。
「メイドはいるにはいたが、掃除を手伝わせるくらいで、ほかの仕事はほとんどミサキがこなしてたな。お前を風呂に入れるのも、食事を作って与えるのも。あんな子どもみたいな見かけして、意外に強情でな。なんでも自分で片付けたがるんだ。動いてる方が性に合うんだって、休ませようとするたびに言われちまってさ。――故郷(くに)じゃ苦労したんだな。俺にはそういう話はしてくれなかったけどな」
アドリオはようやく顔を上げ、父を見た。ヴィネックはベッドの上で大の字になり、どこか遠い目で微笑していた。
「……いつか、もういちど逢えるんじゃないかって、いまでも時々思っちまう。ジードのやつには悪いがな。どうしようもねぇ父親だな、俺は」
アドリオの唇が動いた。自分でも無意識だった。
「――『清浄の儀』だ。思い出した」
唐突なせりふに、今度はヴィネックが上体を起こす。「あ？　なんだって。清浄の儀？」
アドリオは軽く肯いてみせ、それからこう続けた。
「五つの時だ。清浄の儀に出席するために、俺と兄上はキニッサに連れていかれた。式典の前だかあとだかは忘れたけど、イシオス神殿に立ち寄ったんだ。で、子どもだけ一部屋に集められて、なんとなくゲームを始めて――キューズァロだった。俺は普段から兄上に相手をしてもらってたから、いちばん年下だったけど、それでもレノラには負けなかった。でも、あの女はああいう性格だから、チビ

の俺に負けるなんてプライドが許さなかったんだな。三回戦めにあいつの連敗が確定した時、言われたんだ。――よその子なのにどうしてここに雑じってるんだって。小姓と遊べばいいのにって」

アドリオの口元に、皮肉っぽい笑みが浮かんだ。

「それまで知らなかったんだ、自分が――兄上の母と、義母上と血のつながりがないってことを。義母上の態度は、兄上にも俺に対してもつねに公平だったからな。……兄上は、そう言い放ったレノラを責めてくれたよ。見たことないくらいの剣幕で、二度と言うなって。でもあれが最初だった。この場所にいてもいいのかって、それからずっと俺は感じるようになった」

「……」

ヴィネックは黙っていた。黙ったまま、じっと、彼の息子を見つめている。

「ミハルといると、そういう気持ちが和らぐんだ。あいつは、俺のことも、兄上も、屋敷の連中も、みんな同じ目線で見てくれた。あいつはそういうやつだし、もしかしたら、そういう世界で育ったせいなのかもしれない。だから俺は……」

アドリオはそこで言葉を切り、真っ直ぐに父を見た。

「ミハルと一緒に、ミハルがいたっていう世界と、母上を捜しに行きたいんだ」

いまの自分にとって、もっとも価値あるものを捜しに。

それは、未明という不思議な娘に心惹かれるようになってからずっと追い求めていた、たったひとつのささやかな願いだ。

思いがけず、ヴィネックはあっさりと肯いた。

「ああ。いいんじゃねぇか？　それも」

アドリオは拍子抜けし、まじまじと父の顔を眺めた。ヴィネックは後頭部を二、三度掻くと、苦笑しつつ言った。

「お前の決める道だ。だいたい、放蕩領主の俺が説教できる義理じ

ゃねぇしな。いまとなっちゃ大学府って選択肢も完全に消え失せたわけだし――そうでなくてもお薦めはしねぇけどよ、なんせ男としての愉しみの八割を奪い取られるんだからな、あそこは」

実感のこもったせりふにアドリオは吹き出した。「いくら鉄の規律とはいえ、よく辛抱できたよな。父上みたいなのが」

「まったくだぜ」

したり顔でなんども首肯するヴィネック。二人はいつしか声を上げて笑っていた。

「ま、それもこれも、まずはこの面倒臭ぇ事態をどうにかしてからだ」

ヴィネックの顔つきががらりと変わる。アドリオもまた姿勢を正し、父を見据えて肯いた。

「お前は器用だ。いちばん困ったところが俺に似た。神を相手に一泡吹かせるには、お前の知恵が必要になる」

アドリオの、黒褐色の瞳に光が戻った。そんな息子を前に、ヴィネックは片目を瞑り、こう付け足した。

「アドリオ。もし、ミサキに逢えたら――その時は、俺からの伝言も頼むぜ」

囚われの身となってから七日目の夜。ベッドの端に浅く腰掛けたまま、テオルーグはずっと考えていた。

九つのあの日、ロマドの街角で、あの黒髪の女に出逢いさえしなければ。転んだ自分を助け起こそうとして差し出された右手を取らなければ。

――身体的接触が果たされなければ「魂の依り子」として覚醒はしなかったはずだ。

なぜ、自分が選ばれたのだろう。孤児の上、折に触れて見せる不思議な力を気味悪がられ、どこに行っても厄介者扱いだった。幸福

という語のつづりすら覚えられないような、貧民窟での最下層の生活。不条理なカードはなおも容赦なく続いた。依り子として覚醒したことを察知され、審議院の差し向けた人間たちによって拉致された挙句、フェロキオンの地下空間にて七年間も幽閉されたのだ。――どちらの運命においても、なぜ、自分が選ばれなければならなかったのだろう。

懐に、違和感を覚えた。手を差し入れると、思ったとおり、そこにはあの書物があった。

『暁の経典』。

テオルーグの眉が激しく歪む。審議院の裏をかく、ただそれだけのために附帯していただけの代物に、見事に裏切られた気分だった。いや、そもそも、これがイグノディアスの真言を記した聖典だというなら、贄にすぎない自分を救ってなどくれるはずもなかったのかもしれない。

テオルーグは、渇き切った唇を噛んだ。いっそのこと、いま、ここで自決するべきか。

そんな彼の耳に、扉を蹴り飛ばす、いささか騒々しい物音が響いた。

「ちっくしょう！　腕がしびれてきちまった、どうやってもビクともしやしねぇ。見たとこそんな頑丈な造りでもねぇくせによ。くそ、こんなことならもうちょい気の利いた爆薬でも持ってくるんだったぜ」

同じく魂の依り子である異国の青年、ヴァリーだ。彼は威勢よく悪態をつきながらもあきらめる様子を見せない。一方、テオルーグはゆっくりと頭をもたげ、低い声でつぶやいた。

「無駄だ。この房は、人の手では破れない。術の類も封じられている。――万策尽きたな」

その言葉に、ヴァリーは振り返った。彼はテオルーグを――この見慣れぬ同室者を一瞥すると、こう言い返した。

「てめぇが人生投げるのは勝手だがよ。俺はなにがあったって絶対

にあきらめたりはしねぇ、生きてるうちはな！」
　そうして、ふたたび扉に取り付き、鉄格子部分から覗く廊下を睨みつける。
「牢獄の中にいようと、地上にいようと、生きる気がなきゃおんなじだ。死ぬってことはあきらめることなんだ、俺は親父にそう聞かされた。いいか？　俺は絶対にここから抜け出して、ミハルを救い出してみせる。それでもういっぺん、彼女に俺の気持ちを伝えるんだ。それまではなにがあったって絶対にあきらめたりするもんか！」
　テオルーグは瞠目した。空元気ではない。この男は本気でそう信じているのだ。あきらめない限り、道は断たれないと。この鉄壁の檻から抜け出すことも可能だと、本気で。
「お前……ゼーレンディアの人間ではないな。その格好は――」
　連邦ではあまり見られない、飾り紐を多用したラフなその服装に、テオルーグは思わず訊ねていた。ヴァリーは手を休めず、内ポケットから小型ナイフを取り出し、その刃をすかさず鉄格子に当てながら答えた。
「ああ、俺の出身はエンザンテだ。言っとくがな、あそこだってろくな国じゃねぇぞ。胸張って故郷なんて言えるようなとこじゃねぇ。貧富の差にしろ役人の腐敗っぷりにしろ、住んでる俺が言うのもなんだが反吐が出るくらいだ。――けどな、庶民ってのはお上が考えるよりも案外タフなもんなんだぜ」
　きん、と耳障りな音がし、ヴァリーの手元で火花が散った。彼は顔をしかめ、苛立ったようにナイフを放り棄てた。
「休憩だ。手の感覚がなくなっちまった。なぁ、おい、今日って何日だ」
　唐突に問われ、テオルーグは戸惑いつつも返した。「二十一日だが」
「ふん……ならそろそろだな」
　なにやら思案げに肯くヴァリー。わけがわからず、テオルーグはふたたび訊いた。

「なんのことだ。脱出の算段があるとでもいうのか」
床の上に直接座り込んだヴァリーは、にやりと笑って相手を見た。
「さっきも言っただろ？　庶民ってのは、お上に対抗するために、いろいろ策を練るもんなんだ。たとえば、そう――自衛組織を作るとかな。
俺はエンザンテを発つ際、地元の仲間（インヴォルタン）にあらかじめ言っておいたんだよ。一定期間が過ぎたら、俺の身に危険が及んだものと考えて、ここに、この要塞島に潜入するようにってな。その『期日』が、逆算すると今日……ってわけだ」

仲間は必ず来る。自分の窮地を救いに。

世捨て人として孤独に生きてきたテオルーグには、いざという時に頼れるよすがなど存在しない。彼は群青の瞳を細め、蛮人のようにも見えるこのヴァリーという男を無言で見つめた。その時だった。
「……リー！　ヴァリー、いるの？　いたら返事して……」
どこかこまっしゃくれた、それでいて可愛らしい少年の囁き声が聞こえてきた。

# 第九話　反撃の狼煙

獄中に忍び込んできた、場違いとも言えるような可愛らしい声に、ヴァリーの両目が鋭く光った。彼は素早く立ち上がると、鉄格子の隙間から覗く通路をじろりとねめ回した。それから、自分も声を殺して「相手」を呼んだ。

「ゼノン……ゼノンだな？　こっちだ、俺はここだ」

その言葉どおり、小さな足音とともに駆け寄ってきたのは、ヴァリーの弟分である九歳の少年、ゼノンだった。いや、彼だけではない。

「ローリー、ヴァルがいたよ、やっぱりぼくが言ったとおりだろ？　あの時空に浮かんでた、あれはヴァルじゃない。それに神様なんてのも真っ赤な嘘だよ」

「シッ。――声を落とせ、ゼノン。見回りのやつらがここいらにも隠れてないとも限らないんだぞ」

ゼノンの口元を手のひらで覆いながら現れた黒髪の若者に、ヴァリーはなぜか吹き出した。

「お前らが切り込み隊長か。ほかの連中はどうした」

ローリーは、抜け目なく周囲を見やりながら、小声で答えた。

「鎧の番兵を撒いてもらってる。ここに来るまでにも相当な数がいやがったからな」

だろうな、とヴァリーは肯いた。そんな彼に、ローリーは皮肉っぽく瞳を眇め、こう続ける。

「例の免罪符を発行されたはずのお前がこうしてとっ捕まってるってことは、やっぱりこの島は……というよりこの国は後ろ暗い生業をしてやがったってことか。以前にマジオのやつが言ってたとおりだぜ。ま、あいつの情報がなけりゃ、俺たちには潜入どころか上陸すらできなかっただろうけど」

「そこんとこ詳しく教えてくれ、兄ちゃん」
ローリーの肩が跳ねた。声のした方を見ると、右隣の房に填められた鉄格子から、くの字に曲げられた人差し指が覗いている。呆気に取られているローリーに代わり、苦笑気味に応じたのはヴァリーだ。
「地獄耳だな、おっさん。まぁ、いまや俺たちは運命共同体ってやつだからな。こうなった以上、情報を出し惜しみしてても仕方ねぇ」
「そういうことだ。――そんじゃああらためて、作戦会議といくか。全員そろってここから脱出するために」
隣房の囚人、オルグ・ヴィネックは、どこか楽しんでさえいるような口ぶりでそう言った。

海上を渡る鉄道を除けば、四方を海に囲まれた天然の要塞であるこの島には、同国民であろうと容易には近寄れない。海岸線はすべてが断崖絶壁であり、また周辺には無数の暗礁が潜む。それだけではない。
「カモメだと？　近海の岩礁に巣を作る、あのシマカモメか？」
鉄壁の守りをさらに完璧たらしめているという意外な存在に、ジードは目を見張った。そういえば、行きの車中でヴァリーと交わした会話の中にも出てきたような単語だ。
「ああ。俺の仲間に、昔、この国絡みの仕事をしてたって船員上がりの男がいてな。鼻の利くやつで、早々にその仕事からは足を洗ったらしい。いま思えば英断だったには違ぇねぇよ。なにしろ当時の船乗り仲間は全員音信不通になっちまったってんだからな」
房を隔てる壁は存外薄く、耳をそばだてれば、ヴァリーの話は小声でもなんとか聞き取れる。ジードやヴィネックをはじめとする五人が意識を傾ける中、彼は続けた。
「あんたも見ただろ、ジード。嵐の中、カモメが群れを成して鳥柱

を作るのを。――臆病な習性を利用して、監視の役に立ててるんだ。島の近辺に船が近づけば、鳥が教えてくれるってわけさ」

天に伸びる鳥柱は、警戒のサイン。その不気味な光景に、アドリオはしかし眉を寄せた。

「けど、カモメだって夜には眠るだろう。侵入者に備えなきゃならないのはむしろ夜間じゃないのか」

アドリオのせりふを受け、つぶやいたのはヴィネックだ。「島内には灯台がある。島の四隅を囲うようにして、四本――そいつが、夜間も含め全方向の監視をしてるんだろうが……」

「そうだ。マジオが、その元船乗りが言うには、四隅に設置されてんのは灯台だけじゃねぇ。四方を睨むようにして、四門の大砲が配置されてるって話だ。不審船は発見され次第、即沈められるって仕組みさ、昼夜関係なくな」

「しかし、お前の仲間は現にこうして上陸を果たしてる。ということは――」

ジードの疑問に、それまで黙っていたローリーが、素っ気ない口調で答えた。

「味方の乗ってる船にだけ仕掛けをしてあるんだ。帆の部分に、光を反射する特殊な塗料でマークを描いてて、そいつを目印にしてるんだ。この島の灯台からは、夜でも日光みてぇなおかしな光が出るらしい。だから、その光に反射さえすりゃ、砲撃されずに接岸できるのさ」

その当時知り得た情報を活用し、同じ塗料を手に入れたのか、もしくは似たような配合の塗料をこしらえたのか。インヴォルタンの抜け目のなさ、応用力の高さに、ジードは素直に感嘆していた。

「マジオは夜の夜中に荷役をやらされたこともあるって言ってたしな。多分、ルートそのものが安全ってせいもあるんだろう。ま、そうやっていろんな辺境の島を回ってよ、なにを集めてるかって言えば、鉱物やら食材やら動植物やら、これがまたよくわからねぇ代物ばっからしいぜ。その辺の胡散臭さも、あいつがとっとと身を引い

た理由だったんだろうな、きっと」
　そこまで語り終えると、ヴァリーは一息つき、肩をすくめた。代わって口を開いたのはゼノンだ。
「ねぇ、ヴァル、この牢屋なんとかして破れないの？　早くしないとあの鎧のやつらが来ちゃうかもしれないよ」
　不安げに見上げられ、ヴァリーは詰まった。ゼノンの言うとおり、陽動作戦にも限界がある。見張りが戻ってくるのは時間の問題だろう。
「いつものばか力でさ。ヴァルの取り得ってそれくらいじゃん、ねぇ、早く――」
「無駄だ。この檻は人力では太刀打ちできない。といって、呪力の類も封じられている。現時点では脱出の手段はおよそ考えつかぬ」
　少年の放言に言い返そうとしたヴァリーだったが、思わぬ人物に先を越され、鼻白んだように黙り込む。テオルーグはベッドに浅く腰掛け、腕を組んだまま、さらに続けた。
「あの鎧人形どもと同じだ。審議院によってなんらかの術を施されているらしいが、おそらく、この議会所のどこかで操っているのだろうな」
　テオルーグの言葉には信憑性があった。なにしろ、カシアンの首を締め上げ、気絶させた真鍮兵の中身が空っぽだったことは、囚われの身となった六人全員が知る事実だからだ。
「人形？　だって、自分で歩いてたんだよ、それにあんなにたくさんいたのに」
　その経緯を知らないゼノンは、信じられないとばかりに頬を膨らませる。そのそばに立つローリーもほぼ同様の反応を示した。
「そうだ、それに、俺が見る限り、あの番兵たちはそれぞれ持ち場を持ってるようだったぞ。多分ここにもじきに戻ってくるだろう。そんな動きまで操れるっていうのか」
　彼ら二人の反論を、だがテオルーグはあっさり封じ込める。
「何体いようが、数が問題なのではない。――私の考えでは、あの

真鍮兵とやらは、おそらくはどこか中枢となる部屋に交代で戻り、また各々の持ち場へ出ていくのではないかと思う。そして、その動力源にも、呪術の源ともなるなにかが――そう、とてつもなく強力な呪物が存在しているはずだ」

「呪物？」

聞き慣れない語に、ジードは思わず問い返した。

「そうだ。そうとしか考えられない。人間の魔力では、あれほどの数の人形を常時操作するなど不可能だ」

テオルーグがそう断言した時だった。どこからともなく耳障りな金属音が聞こえてきたのである。

全員の表情に緊張が走る。ゼノンの危惧どおり、陽動作戦によってつかの間遠ざけておいた真鍮兵たちが、ふたたび自分の持ち場へと戻ってきたのだろう。だが、まだそう近くまでは来ていない。ヴァリーは声を押し殺し、慌しく告げた。

「ゼノン、ローリー、いったんここを離れろ。いいか、絶対に捕まるなよ、ほかのみんなもだ」

「ヴァル――」

少年の顔が、くしゃりと歪む。ヴァリーは唇を噛み、それでもいつもどおりの笑顔を浮かべてみせた。彼は鉄格子の隙間から指を突き出すと、扉に張りつくようにして必死で背伸びをするゼノンの頭をやさしく小突いた。

ジード様たちの姿が、あたしの目の前から一瞬で掻き消えた――というよりも多分、あたしたちの姿が消えたって表現の方が正しいんだろう。

だって、あたしは次の瞬間、つまりたったいま、全然知らない場所に来ていたからだ。

広い広い部屋だ。いや、そもそも、壁らしきものが見当たらない。

見上げた天井はぼんやり白く霞んでいて、曇りの日の空みたいにも見える。足下には萌黄色の絨毯――なのか芝生なのかわからないけれど、時折吹く風に毛足がそよそよなびき、遠くからは鳥の声までが聞こえてくる。ひょっとして屋外なのか、と思っていたあたしの目に、とんでもないものが飛び込んできた。

広大なこの部屋（室内だとしたら、だけど）に比べてひどく現実的なサイズの、ダブルベッド。

あたしは光速で我に返り、同時に自分の状況を思い出した。背中と膝の裏に回された腕。弾かれたように見上げた先に、深緑色の二つの瞳。

近づいてくる、顔。

「――厭ァァァァ！」

他人に聞かれたら、気が触れたんじゃないかと思われそうな音量で、あたしは怒鳴った。それから手足をめちゃくちゃに動かし、相手の拘束からどうにかして逃れようと試みた。転がり落ちて腰を打ったって別にかまうもんか。

この人にさえ触れられなくてすむのなら、怪我するくらいの代償、たやすく受け入れられる。

「ミハル……」

耳元で囁かれ、瞬時に、全身が粟立った。彼には、さっきまでと同様、あたしの抵抗なんてこれっぽっちも通用しなかった。というより――身体が動かないのだ。なにかおかしな薬でも飲まされたみたいに、腕や足の感覚が遠くなる。その一方、頭の内側で、あの「女神様」の声が執拗に響き始める。

――抗うのはやめることだ。お前は我との契約を呑んだはずだぞ。我と、我の夫、ウルディノシスにその身を捧げると。それがあの男を生き返らせる条件だったろう。

あたしはやけくそ気味に怒鳴り返した。

――そ、そりゃ確かにそうだけど、でも、ジード様が死んじゃってたら、あなただって困ったはずじゃない！　ジード様は……ジード様は、そのなんとかって神様を復活させるために必要な存在だったんでしょ！？　あたしが頼み込まなくたって助けるつもりだったんじゃないの、違う！？

女神は、憎たらしいほど冷ややかに言い放った。

――我はお前の覚悟を聞き出したかったのだ。相手の男が誰であろうと関係はない。抗うのはやめろ。でなくば、ふたたび贖いをしてもらうことになるぞ。

女神のその一言に、あたしの心臓が凍りつく。

そうだ。彼女だけじゃない。この、ウルディノシスとかいう「神様」も、ジード様たちにおんなじことを突きつけていた。自分に逆らうとどうなるか……って。

「ミハル……？　ぼくを受け入れてくれる気になったのかい？」

少しだけ戸惑ったような、それでいて嬉しそうな声がした。情けなさと悔しさで、唇が震えた。ジード様以外の人になんて、絶対に厭だ。たとえ、いまとなってはこの気持ちがあたしの片想いに過ぎないのだとしても、それでも厭だ。

でも、その誰よりも大切な人を護る方法が、たったひとつだけあるとしたら――。

「神様」、ウルディノシスは、抱きかかえていたあたしの身体を、ゆっくりとベッドの上に横たえた。

# 第十話　深夜の訪問者

ベッドの上で、あたしは無力にも目を閉じた。せめてこうすることで、視覚だけはなにも感じなくてすむように。

これから自分の身に起きるだろうすべてを、一秒でも早く忘れられるように。

瞼の裏に、ジード様の顔が浮かんだ。――ごめんなさい、って謝るのもおかしな話だけれど（だってあたしは彼の恋人でもなんでもないんだから）、ジード様を護るためなら、なんだってやってやる。

……だから、無事でいて。

体重を感じた。見た目は細身のくせに、意外にずっしりと重い。普通の男の人と変わんないんじゃない。ずる賢いし卑怯者だし、いったいどこが「神様」なのよ。

心の中で、あたしははっきりと、あたしの本心を相手に告げた。

――あたし、あなたが大っきらいです。

組み敷いていた娘の身体から、ウルディノシスはゆっくりとその身を離した。唇さえも触れさせることなく。

娘の表情が変わった。その険を含んだような冷たい眼差しは、未明のものではない。意識化に潜んでいた女神、イグノディアスが表出したのだ。

「なにを躊躇している。この娘、そなたを受け入れようと、ようやく覚悟を決めたのだぞ」

美しくも中性的な声。「妻」の謗りに、ウルディノシスは立ち上がり、肩をすくめてみせた。

「受け入れたフリをしているだけさ。――上っ面だけの気持ちなんて、そんなもの、ぼくが欲しているとでも？」

未明の――いや、イグノディアスの両目が、ぐっと見開かれる。

「待つよ。彼女が本心からぼくを望んでくれる日が来るまで。それまでは、無理強いはしない」

「……」

「夫」の言葉に、イグノディアスは驚きつつもどこかで納得していた。

万物に愛される存在であるウルディノシスは、それゆえ、自分に魅了されない存在に対し、強く惹きつけられるという一面を持つ。異界の娘はもちろん、魂の依り子たる六人の人間の男も同様だ。だからこそ彼らを生き返らせたのである。魅了の術の及ばぬ者が自分に対しどう出るか、それを見届けたいがために。

表出したまま、イグノディアスはベッドから腰を上げた。萌黄の絨毯の上を、空でも漂っているみたいな軽やかさで歩き、ふと立ち止まる。ここは「神の部屋」――神々を含め、選ばれた存在だけが入ることのできる異空間だ。議会所という人界から、尖塔を接いだ先に続くこの場所には、時という概念がない。この部屋にいる限り、時間は流れないのである。永遠に。

イグノディアスは視線を落とし、足下を見やった。ここでは、意識すればどこからでも下界を望むことができる。見晴るかした先には、ちっぽけな人間たちの暮らす、粗末な町並みが広がっている。

自分が同化しようとしているこの娘もまた、ただの人間に過ぎないはずだった。器量の良さも、群を抜いてというほどではない。細く頼りない手足と同じように、滑稽にも映る、ぐらぐらと不安定な心。そう――女神は無意識のうちにも、わずかに唇を噛んでいた。

――こんな小娘の自我など、すぐに我と同化し、消滅するはずだ

ったのだ。それが、どういうわけか、抵抗を抑え込むことができぬ。我の力をもってしてもだ。だが……

頑なにウルディノシスのものになるのを拒み続ける未明という娘を、当のウルディノシス自身がむしろ歓迎している。それはイグノディアスにしてみれば複雑きわまる事態といえた。眼下の世界を眺めながら、彼女はつぶやくようにして訊ねていた。

「我が夫よ。――もし、あの六人の依り子がこの部屋まで来たとしたら、そなたはどうするつもりだ」

背後から、楽しそうな声が即座に返ってくる。

「決まっているだろう。決闘だよ。

そうなったら嬉しいな、なにしろ恋敵なんてぼくには初めてだからね」

どこからともなく吹いた、やや強い風が、二人の足下を順にかすめていった。

暗がりの中、ジードははっと目を見開いた。いまの時刻は、おそらく深夜十一刻（午前二時）を回ったあたりだろう。反対側の寝台では、彼同様、カシアンが慌しく身を起こす気配があった。ジードは言った。

「お前も感づいたか」

「当然だ。……誰だ？　あの『神』とやらが降りてきたのか」

カシアンの言葉に、ジードの顔つきがいっそう引き締まる。彼の言うとおり、この地下牢に続く階段を誰かがやってくる足音が聞こえたのである。ここを訪れる者など、というよりそれが許されている者などそうはいないはずだ。なにしろいまの彼らの身分は、復活したウルディノシス神に仇なす危険分子。いつまた命を奪われてもおかしくはない状況だからだ。

かつん、かつん、と、小さな靴音が規則的に響く。ヴィネックらほかの房の「囚人」も、とっくに気づいているだろう。ジードは音もなくベッドから降り、扉から死角になる位置へと素早く移動した。足音はどんどん近づいて来、ついに、二人の潜む房の真ん前で止まった。

「ジード様……」

聞こえてきた声に、ジードの息が止まる。彼は反射的にカシアンと視線を交わしていた。そして、駆け出した。扉に取りつくようにして忙しく外を覗き込む。

「ジード様」

鉄格子の向こうに現れたのは、確かに彼女だった。闇に浮かび上がる白い顔、黒く潤んだ愛らしい瞳。華奢でありながらしなやかな手足。――だが、ジードの表情は、一転して冷ややかなものに変わった。

「よかった、無事だったのね。あなたに会いに来たの、ジード様、あたし……」

「お前は誰だ」

彼女の――未明の呼びかけを遮り、ジードは言い捨てた。相手は一瞬怯んだようで、間を置いたのち、ぎこちなくこう答える。

「なにを言ってるの。あたし、ミハルよ。あなたのことが心配で、『神の部屋』から隙をついて逃げてきたの」

「二度同じことを言わせるな。お前は誰だ？　ミハルの身体からさっさと出て行け。これ以上ふざけた真似をすると――」

ジードの両眼に炎が宿る。その様子に、相手もどうやら観念したらしかった。

「ふん。ただの人間風情が我にたてつくとは生意気な。お前のような平凡な男のいったいどこがいいのだか、この娘の気が知れんな」

蔑笑とともに、未明であったはずの少女の口調ががらりと変わる。そこにいるのは、姿こそ同じものの、確かに未明ではない、ほかの誰かだ。おそらくは彼女の意識を一時的に乗っ取っているのに違い

ない。必死の努力で怒りを抑えるジードの横から、カシアンが吼える。
「貴様！　よくも私のミハルに……いますぐ彼女の身体から出て行け！　さもなくば容赦はせんぞ！」
ところが、そう言い終えるより先に、カシアンの足が床から浮いた。彼は奇声を上げ、背後へ吹っ飛んだ。堅い石壁に頭を打ちつけ、苦しそうに呻くカシアン。ジードは息を呑み、未明の姿をした誰かに向かって言い放った。
「お前は――イグノディアス神か」
おかしそうに哂っていた相手は、そう聞くなり真顔になった。
「……多少の知恵はあるようだな。そっちの単細胞よりはまだお前の方がマシか」
「なにをしに来た。いや、ミハルを……ミハルの身体から離れろ。彼女をここに出せ。いますぐにだ」
「わざわざ居心地を訊きにきてやったというのに、味気ない態度だな。『彼女』ならいるではないか、お前の目の前に。ほら」
正体を看破され、開き直ったのか、未明の姿をしたイグノディアスは挑発的な微笑を浮かべている。ジードの全身から、青白い鬼火がゆらゆらと立ち昇り始めた。
「聞こえなかったのか。ミハルを出せ。いますぐに」
さすがのイグノディアスもこれには黙り込んだ。少しの間が空き、やがて、その表情が微妙に変化する。ジードと目が合った瞬間、彼女は頬を紅潮させ、泣き出さんばかりのいきおいで鉄格子にかじりついた。
「ジード様、ジード様！　大丈夫ですか、怪我は！？」
ジードの目が潤む。イグノディアスが意識を明け渡したのだろう、代わって現れたのは確かに本物の未明だ。肉体は同じでも騙されようがない。自分の心は、つまるところ、彼女の魂にしか呼応しないのだから。
「ミハル……お前こそ無事なのか？　ひどいことをされたりしなか

ったか？」
　鉄格子越しに、二人は手のひらを絡めていた。まるで、つかの間の別れを前に握手を交わした、あの時のように。
「あたしは……」
　未明が答えるより一瞬早く、ジードの身体に衝撃が走る。いつの間にか「復活」したらしいカシアンが、脇から体当たりしてきたのだ。思わぬ展開に面喰らったのか、未明はわずかに後ずさった。が、当のカシアンは、そんな相手の反応などもとより意にも介した様子はない。彼は恐るべきスピードで両手を伸ばし、引っ込められかけた未明の手をぐいとつかんだ。
「ミハル！　私の妖精、私の天使！　ああ――ああ！　私に……私に会いに来てくれたのだな、嬉しいぞ、ミハル！」
「あ、あの……カシアン、ええと、あなたも元気そうでよかった」
　やや怯えたように口ごもりつつも、未明は偽りのない笑顔を浮かべている。カシアンの目の縁に、うっすら涙が浮かんだ。牽制するようにしてジードに一瞥をくれてから、彼は打って変わって静かな口調で言った。
「ミハル。お前に話したいことがある。このまま、ここで、聞いてくれないか」
　その、これまでのカシアンが見せたことのないほど真摯な表情に、未明は言葉を失い、ただ黙って肯くしかなかったのである。

# 第十一話　告白

カシアンに掴まれた手を、あたしは振りほどけずにいた。ひんやりとした指先から、ひどく熱っぽいなにかが伝わってくる。見上げた先にあったのは、思わず息を呑むほど真剣な二つの瞳。

――こんな彼を見るのは、はじめてだった。

「お前にいつか、話したことがあったな。私の母のことを」

カシアンは唐突にそう切り出した。彼のお母さんの話――それって、あの、イシオス神殿で写真を見せてくれた時のこと？

「そうではない。……私の部屋で、お前を腕に抱きながら聞かせた話だ。

私がまだほんの子どもだった頃、母は不貞の嫌疑をかけられ、その疑いを晴らす前に父の手で斬首された。私は屋敷の者にそう教え込まれて育ち、それを真実だと信じてきた。――ついこの間までは」

はっとした。そうだ、アドリオ様を助けに行こうとして聖山に向かって……そこになぜか突然現れたカシアンは、あのお坊さんみたいな男の人と言い争いになった挙句、彼を殺そうとしたんだった。

その原因になったのが、おそらく、カシアンのお母さん。

カシアンは、あたしを真っ直ぐに見つめながら続ける。

「だが……真相はそうではなかった。母はあの下劣なけだものによって貶められ、死にもひとしい辱しめを与えられはしたが、処刑されたわけではないと――生きているのだと、私はあの時知った。存命であるのなら、いまもどこかで暮らしているというのなら、私は彼女に会いに行きたいと思っている。父との復縁を望んでいるわけではない。ただ、一言でも言葉を交わせればそれでいい」

穏やかなその口調に、あたしも肯いていた。そんなあたしに、カシアンは言った。

「ミハル。要塞島（ここ）を出たら、私は真っ先に母を訪ねるつもりだ。

――一緒に来てくれないか。お前を、母の許に連れて行きたいのだ」

お母さんに会ってほしい。

そう告げたっきり、カシアンは黙った。黙ったまま、じっと、穴でも空きそうなくらいじっと、あたしを見つめている。

あたしもまた、彼の視線を真正面から受けた。頭の中に、だんだんと、「あの時」の光景が蘇ってくる。

――「女主人の部屋」は、いつからか空っぽになっていた。母は不義を働いていて、いつの間にか邸内から姿を消していた。淋しい？　そんな感情は知らん。高位の一族とはそういうものだ。

そんな風に冷たく言い捨てていたはずのカシアンは、けれどその直後、同じ人とは思えないほど悲痛な表情を見せてあたしにすがった。その姿があんまり痛々しくて、それであたしはつい、この人に同情してしまったのを憶えてる。やることなすこと滅茶苦茶で、あたしの言うことなんて全然聞いてくれなくて、それでもどこか憎めない、子どもみたいなこの人に。

あたしはこの時、ほんの少しだけ残っていた躊躇いを棄てた。

「カシアン、あなたのお母さんが生きているってわかって、あたしもすごく嬉しい。あたしもね、家族を一人亡くしてるの。事故で死んじゃったの。もし、どこかへ行けば会えるんだとしたら、それがどんな場所でも絶対に会いに行くと思う。だから、あなたの気持ちはすごくよくわかる。

でも、ごめんなさい。……あたし、あなたと一緒には、行けない」

言いよどむことも、カシアンから目を逸らすこともなく、あたしははっきりとそう告げた。

そして、カシアンの背後に立つジード様に向けて、こう言った――ようやく、言えた。

「あたし――あたし、ジード様が……ジード様が好きなの」

未明の言葉に、ジードはその場で硬直した。

思わず耳を疑っていた。

もうずっと長い間、夢に見るまで焦がれ続けた彼女の愛の言葉。

確かにはっきりと聞いたにも関わらず、どういうわけか、幻のようにさえ感じてしまう。

鉄格子の向こうに佇む未明を、ジードは凝視した。なかば喘ぐようにして。

「ジード様が好きなの。だから、あなたと一緒には行けません。……ごめんなさい、カシアン」

未明はそう繰り返し、握られた手をそっと外した。衝撃のあまりか、カシアンは動くことすらできないでいる。そんな彼の背後から、ジードは音もなく歩み出た。だが、なにも言うことができない。未明を目の前にしても、相応しい言葉が出てこないのだ。

先に口を開いたのは、未明の方だった。

「あたし、鈍くて……本当にこういうのってダメで。自分で自分の気持ち、ずっと気づかなかったんです。……ううん、気づいてたのに、傷つくのが厭で、知らないフリしてやり過ごそうとしてた。あのお屋敷に、ジード様たちがあたしを助けに来てくれた時だって……」

ジードは瞠目した。彼女が言っているのはウェス・ゴート邸での例の一件に違いない。――ということは、あの時のことを、つまりカルマ駅で出会ってからこれまでの記憶を、すべて取り戻したのだろうか。

「ミハル……思い出してくれたのか？　私のことを……」

未明は微笑み、しっかりと肯いた。

「駅舎で途方に暮れてたあたしを、引き取りに来てくれましたよね。それからメイドとして雇ってくれて、言葉やいろんなしきたりも教えてくれて。それに、ただの使用人に過ぎないあたしのことを、捜し出して助けにまで来てくれて……なのにあたし――」

未明の表情が一瞬、哀しげに曇った。彼女は目を伏せ、思い直したように顔を上げた。その黒い瞳には、涙が光っていた。

「いまさらこんなこと言われても、ですよね。ごめんなさい、でも――」

彼女はそこで言葉を切り、もう一度微笑を浮かべた。

「……どうしても、言っておかなきゃって……思ったんです」

無意識のうちに、ジードの手が、その指先が、鉄格子の隙間から伸ばされた。未明に向かって、空間をさ迷うようにして。未明の両目から涙が落ちる。そしてそれは、ジードも同様だった。

だが、二人の手のひらが触れ合う、まさにその寸前だった。未明の表情が一変したのである。

「は！　なんという茶番だ。愚かだとは思っていたが、お前もこの娘も、やはり人間なのだな。どれだけ時が経とうと変わらぬ、弱くて脆い、取るに足らぬ存在であることよ！」

禍々しさすら感じさせる声色に、ジードは、それがふたたび表出したイグノディアスのものだと悟った。

「よくよく考えるがいい。この娘はいまや、我が夫、ウルディノシスの虜。全界を統べる神の手から、ただの人の子に過ぎぬお前が、どうやってこの娘を取り戻そうというのだ。いかに魂の依り子というさだめを負っていようと、お前たちには人智を超えるなんの力も備わってはいないのだぞ。

それに、この娘もだ。数日と経たぬうちに、この小娘の自我は我がものとして飲み込まれ、消滅してしまうだろう。――神に楯突く行いのなんと虚しいことか。のみならず、そういうおのれの愚かさにすら気づかぬとは！」

猛々しく言い放ったあと、イグノディアスは喉の奥を震わせ、哄笑する。その声は牢に止まらず、通路の隅々にまで響き渡ったに違いない。

しかし、怒りのままに反論しようとしたジードの機先を、鋭く制した者がいた。隣の房から、イグノディアスをも凌ぐ、ひときわ大きな笑い声が聞こえてきたのである。

思わぬ反応に、イグノディアスはそちらを――すなわち、壁にもたれておかしそうに笑い続けるオルグ・ヴィネックを、鉄格子越しに恐ろしい眼差しで睨みつけた。だが当のヴィネックは、女神の視線など意に介した様子もなくこう言ってのける。

「いやこりゃあ失敬。生命の母たる女神様にしちゃ、意外なことをおっしゃるもんだなと思ったもんでね。つい」

ようやく笑いやめたヴィネックは、両腕を胸の前で組み、余裕たっぷりにイグノディアスを一瞥した。

「意外なことだと？　ほう。ただの人間風情が、地を這う虫けらの一匹ごときが、我に意見しようというのか」

「意見なんて大そうなもんじゃあないがね。全能の女神様にこんなことを言うのもおこがましいが、あんたの考えはなんていうか、まるで、生娘みたいなんでな」

虚を突かれたのか、イグノディアスは絶句した。そこへ畳み掛けるようにしてヴィネックの舌鋒が飛ぶ。

「人間ってのは、あんたの言うとおり、至極不安定で頼りない生きものだ。風に吹かれただけでその形を変える水溜りみてぇに、常に変わり続ける。けどそれは、別の言い方をするなら、成長するってことなんだよ。

人は人と関わることで変わる。どういう風に関わるかでも違ってくるけどな。そして、もっとも人を成長させるのが、恋ってやつなんだぜ」

ヴィネックの言葉には、女神さえをも黙らせる、不思議な重みがあった。いや、いまや、相対している女神のみならず、この場にそ

ろったすべての人々の耳に、意識に、彼のせりふは沁み込んでいった。殺意に近い感情を女神に向けていたジードも。呆けたように立ち尽くしたままのカシアンも。同じ房にてヴィネックを見守る彼の息子、アドリオも。未明を気にしつつ、その一方で仲間の身をひたすら案じるヴァリーも。そして、おのれの運命を呪うあまり、絶望以外に道を見出せずにいたテオルーグも。

誰もが一言すら発することなく、ヴィネックとイグノディアスのやり取りを――人と神との対峙を見守っている。

ヴィネックは、壁から身を起こすと、扉に片肘をつき、悪戯っぽく微笑しながらこう締めくくった。

「なぁ女神様。あんた、本物の恋をしたことがあるのか？　どうも俺の目には、恋に恋してるだけのようにしか見えねぇんだけどな」

イグノディアスを取り巻く空気の層が、一瞬、揺れたようだった。

彼女はなにも言わずに踵を返すと、そのまま元来た通路を戻っていった。

それから夜明けまでのわずかな間、ヴィネックを除く五人は皆、それぞれの寝台の上で思いを巡らせていた。自分に与えられたさだめの意味とはなんなのか。それを模索せずにはいられない心境だったのである。

その中の一人、依り子としてはもっとも過酷な運命を負わされた男、テオルーグは、闇の中でふと起き上がった。そうして寝台の足下に放り棄てたままの『暁の経典（エリグザード）』を拾い上げた。

どこに打ち棄てようと必ず手元に戻ってくる怪書。自分に運命からの抜け道を示してくれるはずだった、懐刀ともいうべき書物。

「色付けの儀」の意味も、その方法も、この本のおかげで彼には

わかっていた。女神を手なずけ、意のままに操るために必要となる供儀は、複数の依り子。だから一度目は失敗したのだ。ただ、全員がそろってしまっては、ウルディノシスを復活させてしまいかねない。そのために、あの未明という娘には、彼女に心底惚れている男を二人連れてくるよう言い含めたのである。

いずれ審議院の連中が、依り子である自分の命を奪うだろうことも見当がついていた。その前にできる最大の意趣返しが、「色付けの儀」の成功だったのだ。

だが結果的に、彼は審議院の言うところのさだめから逃れられず、こうして囚われの身となっている。

――死ぬってのはあきらめるってことなんだ。地上にいようが牢獄にいようが、生きる気がなきゃおんなじなんだよ。

テオルーグは隣の寝台を見やった。同室者、ヴァリーは、こちらに背を向けた格好で静かに横になっている。眠ってなどいないに違いない。彼もまた、自分に課せられたこの運命をどうやって切り開くべきか、彼なりに思案しているのだろう。

手にした書を、テオルーグはぱらぱらと繰った。暗がりであってもものを見ることのできる眼力が、彼には備わっている。もっとも、書かれている文字は一言一句違わず脳裏に焼きつけられており、読み直したところでどうなるわけでもない。そんな風に思っていた彼の目が、とあるページではたと止まった。

「これは……！」

群青の双眸がきらりと光る。テオルーグは寝台から飛び降り、なにごとかと上体を起こしかけたヴァリーに『暁の経典』を突きつけた。

# 第十二話　脱獄

風の神メルメリウスによって風穴の開けられた議場の天井。その上には、細長い円錐状の尖塔が、支えもないままに中空に浮かんでいる。外側には頼りなげながら梯子らしき手がかりが設けられてはいるものの、実用されたことはこれまで一度としてない。人間ならともかく、神族にはなおさら無用の長物である。

「神の館」に戻った女神イグノディアスを出迎えたのは、彼女の元夫、ウルディノシスだった。彼は頬を紅潮させ、抱きつかんばかりのいきおいで駆け寄ってきた。

「ミハル！　どこへ行ったのかと思っていたよ。心配するじゃないか、黙っていなくなったりしたら」

まじまじと相手の顔を覗き込んだウルディノシスは、ふと眉を寄せた。

「ミハル？　どうしたんだい。機嫌が悪いの？」

戸惑ったように訊ねる夫を、イグノディアスは冷たく見つめる。

「……そなたにはわからぬのだな」

その声色は、ウルディノシスが執心している娘のものとは明らかに違う。彼はばつが悪そうに苦笑した。

「なんだ、君か。驚いたな、まるでわからなかったよ。それにしても、君もタチが悪いな。そうやって異界の娘のフリをするのはお止めよ。厭なことを思い出してしまう」

「いささか疲れた。独りになりたい。しばらく放っておいてくれるとありがたいのだが」

相手の言葉を、イグノディアスは冷ややかに遮った。ウルディノシスは肩をすくめると、そのままゆっくりと姿を消した。残された空間に、目には見えないが、揺りかごにも似た柔らかな褥（しとね）が出現する。イグノディアスはそれに向かって手を伸ばし、そっとその身体

を横たえた。
そして、反芻していた。
――ウルディノシス、そなたにはわからぬのだな。あの依り子どもには、我がこの娘ではないと一目で見抜かれたというのに。
厭なことを思い出す、それはイグノディアス自身も同様だった。閉じた瞼の裏側に、「あの時」の出来事が、鮮やかな映像となって蘇る。そう、夫とその浮気相手との密会現場を密かに押さえ、その後激情に任せて二人を屠った日のことが。

＊　＊　＊

夫である神、ウルディノシスは、このところずっと、異界から迷い込んできた人間の女に夢中になっている。
気づいた頃には、不貞が始まってすでに半年が過ぎていた。しかもこのことは神界では公然の秘密扱いで、顔を合わせるどの神も、自分たち夫婦の不仲を知っていたのである。
嫉妬と怒り、そしてそれらを上回る、耐え難いほどの屈辱。イグノディアスは散々苦しんだ挙句、ついに「結論」を出した。
人界に降り、元凶である黒髪の娘を葬り去り、その皮と髪でおのれの気配を消した。娘になりすまして誘き出した夫は、はじめのうちこそ騙されたものの、すぐに真実を悟り、妻を非難した。荒ぶる感情のままに、イグノディアスは彼を殺した。六年もの間燃え続けるという業火を使い、二人の屍体を焼き尽くしたのである。

＊　＊　＊

回想が途切れ、次に思い浮かんだのは、あの生意気な依り子の言葉だ。六人の中では最年長なのだろう、どこか落ち着いた、それでいて飄々とした空気の漂う、人を喰ったような風体の男。牢に囚われ、風前のともし火にひとしい身分でありながら、そんなことをまるで感じさせない奇妙な余裕。

――もっとも人を成長させるのが恋ってやつなんだよ。女神様、あんた、本物の恋をしたことがあるのか？　俺の目には、恋に恋してるようにしか見えねぇんだけどな。

ばかばかしい、とイグノディアスは皮肉な笑みを浮かべた。おのが身危うさのあまり、相手を翻弄しようと適当な口上を並べているだけではないか。取るにも足らぬ、あんな人間の言葉を気にするなど、どうかしている。褥の中で、彼女は自分にそう言い聞かせた。

そう、どうかしている。こんな風に考えてしまうのは、そもそも、この依坐の娘との共存が長すぎたからなのだ。

かつての夫を復活させるべく、苦渋の選択として未明という異界の娘を呼び寄せてからというもの、イグノディアスはずっと彼女の意識下に潜伏していた。喜びや悲しみ、時に襲い来る危機。そうした体験すべてを、イグノディアスもまた未明とともに味わってきたのである。

そうやって過ごすうちに、女神であるはずの彼女自身の意識にすら、時折未明のそれが混ざり込むようになったのだろう。だからあんなつまらぬ人間の戯言にまで心を揺らしてしまう――そこまで考

えたところで、イグノディアスははっとした。
ウルディノシスが惹かれるのは、魅了の術の通じない存在だ。これまでは、神格としてはトップに位置するイグノディアスですら、彼の魅了の虜となっていた。だが、いまは？

――この小娘の意識が混ざり込んだことで、我もまた、さながら異界の娘のごとく、魅了されにくい存在となったに違いない。だとすれば、ウルディノシスの我に対する態度も当然変わるだろう。いずれ娘の自我と完全に同化してしまえば、そこに疑いの余地はない。

ところが、イグノディアスがこの時抱いたのは、喜びではなかった。
いくら振り払おうとしても、あの人間の男に突きつけられた一言が、頭から離れないのだ。彼女はふと思った。

――我は、夫から……ウルディノシスから愛情を示されたことはあっただろうか。この依坐の娘に、さだめに操られていると知ってなお想いを寄せ続けるあの依り子たちのように。
この娘と同化するということは、いずれ魅了の術が解けるということだ。しかし……
その時、我はウルディノシスをどう思うのだろう。

透明な褥が、風に吹かれたかのように小さく揺れる。その心地好さに、イグノディアスは間もなくして眠りに落ちた。

『暁の書』に、新たな一文が書き加えられている。
そのことに気づいたテオルーグは、ヴァリーをはじめ、いまや運命共同体となったほかの依り子たちを小声で呼び、この事実を告げ

た。

「新たな文章が加筆されてるだって？　持ち主であるお前さえ知らない間に？」

疑わしそうに言ったのはアドリオだ。聖山で人質に取られた彼にしてみれば、相手は仇ともいえる存在である。だがテオルーグは気にした様子も見せず、淡々と続けた。

「そこいらに売っているような本ではないからな。どういうカラクリかは知らんが、とにかく、私がいままでに目にしたこともない呪文が、このページには浮き出ている」

「呪文？」

複数の声が重なった。テオルーグは肯くと、それには答えず、重々しい調子でなにごとかをつぶやいた。彼を除く五人には聴き取ることもできない、古代の祝詞ですらない不思議な言葉だ。唱え終わると、テオルーグは黙って寝台から腰を上げた。

そうして鉄格子に近づいた彼は、すぐ外側の通路に立つ真鍮兵に向かってこう言い放ったのである。

「ここを開けろ」

はっきりと聞こえたその声に、五人は唖然とした。いや、本当に驚くのはこのあとだった。

監視役の真鍮兵の腕が、ゆっくりと動いたのだ。その、鎧で覆われた指先が、腰に下げた鍵束の中の一本をするりと抜き出す。迅速ではないが確実な動き――もっとも間近で見守るヴァリーの喉が、大きな音を立てて上下する。

真鍮兵はなんら惑うことも、躊躇することもなく、ただ命ぜられるままに牢獄の錠を外していった。テオルーグの口元に、かすかな笑みが浮かぶ。

「あれは、真鍮兵を操る呪文なのだ。一体に限られるが、審議院の連中から離反させ、こちら側の命令に従わせることができる。なぜそんな文字が浮き上がったのかは皆目謎だがな」

呪文の中には、檻にかけられた呪力封じに対する一時的な解術も

含まれていた。だから効力を発揮することができたのだ、と彼は付け足した。固唾を呑んで一部始終を見守っていた若者たちの顔に、生気が漲り始める。

「よし。なにはともあれ、まずは関門突破だな。みんな、用意はいいか？　――出るぞ。ここを」

ヴィネックの言葉が、「開戦」の合図となった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6506j/

センロノハテニ

2011年10月9日03時30分発行